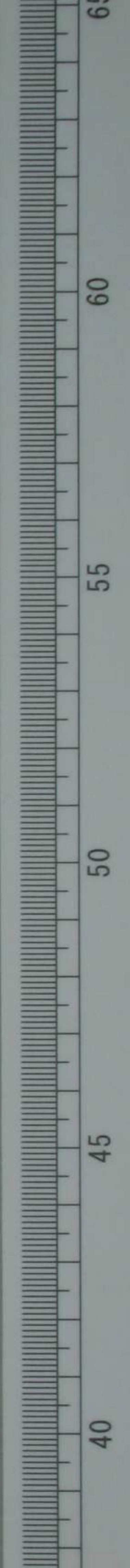


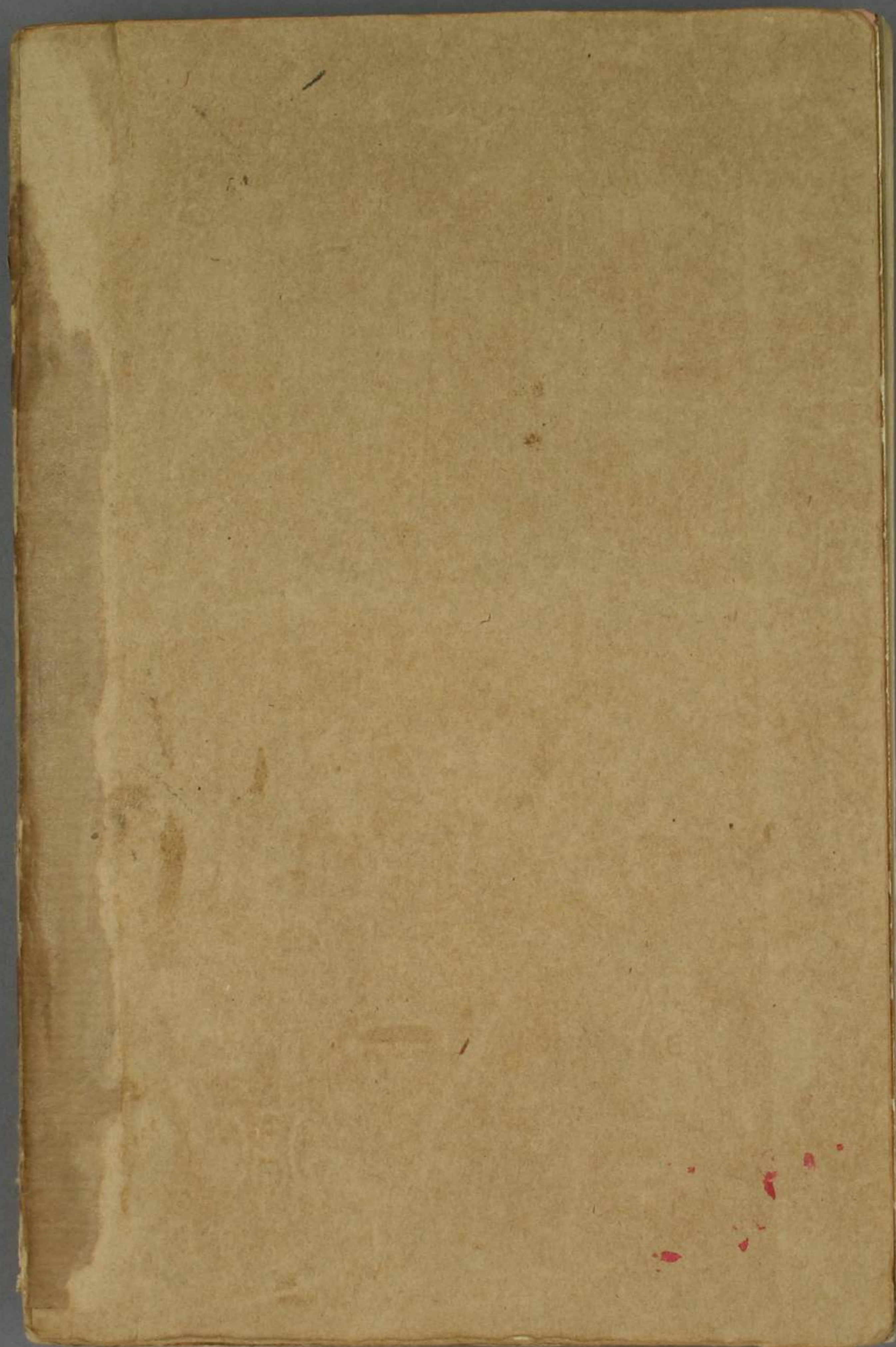
列傳小説文

坂中道選  
張谷不測  
妓薺



列傳體小說史

水谷不測著



市場文庫

緒言

『早稲田文學』多年つとめて徳川文學の研究を奨勵し、近世小説家の傳を掲げたる、少からず、曉霞子は曲亭馬琴が生涯を叙し、福笑門子は上田秋成の性行を論じ、野崎左文子は假名垣魯文の傳をもつし、予も亦一九、三馬、京傳等を紹介して、同紙上は江戸有數作家の頭揃ひとなれり。同好の人志は、右の諸傳を輯め一本となし、徳川時代小説家の傳系を觀るを便にし、文學史の缺を補はんことを勸む。然るに同紙上に掲げたるのみにては、享保以前京坂に榮えし作家の傳を缺くが故に、近頃予が調べたる寛文、元祿の作者傳をこれに合し、上は寛永より下は慶應に至る迄、凡二百五十年間に亘れる主なる小説家の傳をほゞ網羅して、こゝに近世列傳、小説史一編を撰し、坪内逍遙先生の閱を請ひ、世に公にすることゝはなりぬ。もとより

緒

言

多くの人の手に成り、且はじめより歴史軀に編したるものならねば、小説史とはいへども、實は其の名に背く所少からず。然れども本邦小説家傳紀の未だ完備せざる今日に在りては、此の書の不具なるもまた世に小補なからずや。大方の諸君子、實の名にそはざるを深く咎むることなくば幸なり。

明治廿九年七月

不倒生識す

凡例

一本書は分ちて上下二巻とす、上巻には京都、大坂に榮えたる寛文の假名草子、元禄、享保の浮世草子の作者を收め、下巻には文化、文政以降江戸に行はれたる稗史、草双紙の主なる作者を收む。然れども傳論すべて淨瑠璃作者に及ばず、はた赤本、黄表紙の作者に詳ならず、蓋し是等の遺漏は他日の業に譲り、今は數人の篤志家が、他年研究の結果をこゝに集めて世に公にするに外ならず。

一本邦小説家の傳記には、曲亭馬琴が『物の本江戸作者部類』、活東子が『稗史六家仙』、その他『戯作者撰集』等ありて、ほゞ江戸作者の事蹟を記載せり、本書は是等の書に負ふところ少なからず。然れども京坂の作者に至りては、別に傳記なく僅に散在せる諸書に其の材を求めてこれを綴れるが多し、かるが故に時として憶説推斷に流れたる恐れなき能はず。元來考證の業たるや、勞多くして功甚だ少し、たとへば一人の傳を叙するに當り、或事蹟の既に秘書には見えながら、世間には知られざるが爲めに、撰者は八方より立證して漸く其の事蹟を確めたりとせんに、其の事實のほゞ秘書の大幹を得たるは幸なれども、間々其説全く誤りて取るに足らざることあり、本書中これに類する徒勞なきを保せず、これらは博識の教を待ちて謹んで後に正さんとす。

毎に改まれるものにして、今や殆ど原版の書散逸して數本合せ見るの便なき時にありては、再版の年月を初版の時と誤り記載したるもあるべし。

一本書中の作者傳は、戯作者として有力なるも、其の傳は簡に失したるあれば、然らざる人にても詳しきありて繁簡宜しきを得ず、これらは事蹟の後世に傳はれる多少に依りて一様ならず。一本編はもと數人の手になり、また一人の手になりしものといへども、時を隔て、稿を起し、等の事情あり、文辭一様ならず、評論に重きを措きたるものあれば、叙事に力を盡したるもあり、著作の紹介に勉めたるものと、性行生涯を叙するに精きものとの別ありて、みな人々のこころくくに従ひ、時々之意に任せて、今敢てこれを一様にせず、但し事實の誤りなるは及ぶべきだけば刪したり。

一著者を異にするにより、目次の下に必ず著者の氏名を示す、然れども編中にはこれを贅せず、もし一題に就き撰者の誰なるかを知らんと欲せば、宜しく目次に就て一覽すべし。

一江戸作者にして肖像の世に傳はれるは、これを模寫して成るべく本傳のはじめに附せり、又元祿以前の草子には文例を示し、かねて所々に挿繪を加へたるは後の參考に資したるのみ、然れども元祿以後にはこれなし、蓋し近來翻刻もの盛に行はれて、元祿、享保の珍書はほと世人の知るところとなりたれば、繁をいとひて省きたり。

近世列傳小説史 卷上

目次

第一章 徳川文學の起源……………水谷不倒一

其一 歴史文學

其二 古文學の註釋

其三 佛教文學

其四 支那文學の翻譯

其四 淺井了意の『伽婢子』

其五 外國文學の輸入

其五 イソップの翻譯

第二章 假名草子

自寛永  
至延寶 凡五十年間

假名草子の名稱

作者傳

如傀子

水谷不倒十三

鈴木正三

同 人二十

山岡元隣

同 人二十六

淺井了意

同 人三十七

第三章 浮世草子

自天和  
至安永 凡八十年間

浮世草子の名稱

作者傳

井原西鶴

水谷不倒十六

西澤一風

同 人八十七

都の飾

同 人九十八

錦文流

同 人百四

八文字屋もの、作者

江島屋其磧

水谷不倒百八

八文字屋自笑

同 人百九

多田南嶺

同 人百三十九

教訓もの、怪談もの、作者

林文會堂

水谷不倒百五十一

青木鷺水

同 人百五十一

北條團水

同 人百四十三

月尋堂	同	八	人百四十五
上田秋成	福	笑	門百五十五
上田秋成	饗	庭	村百九十

世近列傳鉢小説史下卷

目 次

第一章 浮世草子の衰運 江戸小説の發生期	水	谷	不倒	五
第二章 江戸作者	水	霞	處	士七十八
山東京傳	水	谷	不倒	言三
曲亭馬琴	水	谷	不倒	言三
式亭三馬	水	谷	不倒	言三
十返舎一九	水	谷	不倒	言三
柳亭種彦	水	谷	不倒	言三
種彦が作の蘭譯につきて	水	庭	村	言三
漢譯『浮世六枚屏風』	水	庭	村	言三
爲永春水	水	庭	村	言三



假名垣魯文

野崎左文

近世列傳小説史上卷

水谷不倒撰  
坪内逍遙閱

第一章 徳川文學の起原

(寛永より延寶に至る凡六十年間)

徳川氏治世のはじめより、寛文を中心として、凡六十年間は、これ近世文學復興の時期なり、其の發達の順序、頗る複雑にして且趣味多しといふべし。そもく我が邦、王朝このかた、文學の素養あると一日にあらざ、中頃盛衰きはまりなく、和歌のみ堂上のもてあそびとなり。武家にては、亂世の間、連歌、狂歌などの變態にて弄ばれ、足利氏の末より、織豊二氏の世を経て、徳川氏の初世に至りて衰へず、次に俳諧となり、かくて歌俳の道は、中世より近世に連綿として推移し、徳川文學の一要素とはなりぬ。

其一 歴史文學

徳川氏のはじめに、先づ第一に發生せしは歴史文學なりき。これは全く時勢の必要と作者の關係とによれり。歌俳の亂世にも續いて傳はりしは、全く作り易きが爲めなれど、文學の他の各科目

は、歌俳の如く容易く作られざる事情より、暫く中絶してたゞ僅に公家の間に存せしのみ。されど應仁以降、元龜、天正の亂も、彼の大阪夏の陣にて落着を告げ、得意の士も、失意の士も、一般に餘暇を生じ、或は散開の爲めに、或は慰鬱の爲めに、學問を爲し、文學を翫び、一たび筆を着けんとするや、百十數年來放棄したる史材は堆積して拾ふに易し、彼等が先づ第一に着手せしはこれなり、或は報恩の爲めに主君の事蹟を綴るもあれば、或は亡國の跡を追惜して感慨禁ずる能はず、こゝに筆を下すもあり。然るに一方を見れば、大阪落着後凡そ三四十間の間のことにて、當時盛に世に立ちし人々は、其の身戰場に働き最後の武功を建てたるもあるべく、たゞ戦はざるも其の實況を目撃したるもあるべければ、云ひ傳へ聞き傳へに、彼等の子孫が耳を肥やしよは、乃父が手柄ばなし、さては昔しの軍ものがたり、一般の好尚は實に史談の外に出でざりき。これ徳川文學の率先に、俗に軍書と稱する歴史文學の發生せし所以なり。

今日寫本に傳はる家々の記録、または諸老の覺書などは、概ね當代の筆作なれども、徳川氏に関する記事は、みな家々に秘して板行せられざりしかば、世間一般に知られしは更に後のことなりとす。

然れども板行せられしは、多く當代の事蹟に關せざるもの、すなはち過去の事實に屬せり。今一例を擧ぐれば、織田信長の祐筆たりきといふ、太田和泉守一牛が『信長記』もとは三卷、元和八年の梓行なるを、後小瀬甫庵これを重撰して寛永年中再版となれり。小瀬甫庵道喜が『太閤記』(二十二卷)、三浦淨心が『北條五代記』(十卷)等は其の一例なれども、其の他隨筆めける軍書、

い、く、さ、も、の、が、た、り、た、と、へ、ば『大阪物語』の類、當時板行せられしもの擧げて數ふべからず。これらは眞字片假名おくり文、すなはち眞片假名文、と平假名おくりの文、すなはちかな文との二様あり、中には著者の實歴に基き、事實の確かなるものあれど、多くは『平家物語』、『太平記』などに倣ひ、事實の幾分を曲ぐるも、なほ趣味の多からんことを勉め、文勢を飾りたるが通例なり。

### 其二 古文學の註釋

さて醸て當時書物出版の状況を見るに、此の業徳川氏治世のはじめより行はれ、万治寛文に至りて最も盛なり、經書はいふも更なり、支那の文學書類も多く訓點又は傍訓さへ施されて、和版に刻し、一般の需に應じ、また本邦古文學の或は古版として存し或は寫本に傳はりしを、此の際秘佛の御戸帳を開き、おほかたは版行に附して公にまたりき。また一方には、此の出版の便利により、古文學の註釋續出せり、こは慶長の頃壽命院(中院通勝)の着手せられし事業を、こゝに續ぎしにて、『源氏物語』、『大和物語』、『伊勢物語』、『徒然草』、歌集等の註釋出で來り、大に文學思想を養ふに力ありき。就中兼好法師が『徒然草』は、當時程朱學の盛を極めたる時代とて、性理の説の老佛に歸着するや、はしなくも儒釋道三學を合せたる其の旨に適ひ、廣く渴仰せらるゝ書となりぬ、また卷數の多からぬと割合に意義の深遠なるとは、頗る註釋の志ばえある理由となり、第一に着手せられ、註釋書の多きこと第一位に在る。貞享五年版の『徒然草諸抄大成』に網羅したるおもなる註釋書實に十三部に至りぬ。

『壽命院抄』	二卷	也足野與書(慶長頃)
『野槌抄』	十四卷	林道春作(元和七年)
『貞徳抄』	二卷	長頭丸作
『同慰草』	八卷	同 作 (慶安五年)
『古今抄』	八卷	大和田氣求作
『盤齋抄』	十三卷	踏雪作(寛文元年)
『句 解』	七卷	高階楊順作(同年)
『諸家聞書』	三卷	北村季吟作(寛文七年)
『文段抄』	七卷	南部宗壽作
『診 解』	五卷	山岡元隣作(寛文九年)
『増補鐵槌』	六卷	高田宗覽作
『大 全』	十三卷	惠空和尚作
『参考抄』	八卷	

これはたゞ一例に過ぎざれども、古文註釋の業のいかに盛なりしかを知るに足るべし。寛永の末に戯作の母として如曇子の『可笑記』いでたりしが、『可笑記』は『徒然草』、『伊勢物語』の文牀を摸し其の後同牀の隨筆めける戯作起りぬ。蓋し註釋にて兎も角も一部の讀者に、古文の解せられし結果といはざるべからず。

其三 佛教文學

こゝにまた教義の爲めに發生したる一種の戯作あり。たとへば『七人比丘尼』(一名『懺悔物語』)の如し。これは足利時代に『三人僧物語』といふがありて、其れに胚胎すといふ。身の罪障を懺悔消滅するの趣向、弘法の一助としてこれらの戯作はものせられたるに似たり。此の作は寛永十二年版との説(但し足利の末の作か)。北朝の貞和年中、信濃國善光寺街道の宿屋の主人が物がたりにして、其の大意は、

せきがはさいふ所に、こゝろざしの殊勝なる尼ありて、人々に湯施興ゆせつたかをばしめけるが、年のほど三十ばかりの尼、善光寺詣での下向の折ふし、此の湯に入てあるトの尼の慈悲のほごを感じ、こゝに自らもこゝまり、薪を櫛り水をむすび、こもく湯をわかして人に施しけるが、あるトはこゝみだぶ、後に來りしはこんあみだぶさいひける、然るになが月廿日あまりに、爰へ同トく比丘尼四五人集ひ、みなこもくゆぜつたいの手傳ひをなし、おのゝ罪障懺悔の爲めに身の上を語る

- 一 ちらぎくの事
- 一 さきやうの御代の事
- 一 はなかづらの事
- 一 びやうぶの御かたの事
- 一 きく井殿みだい
- 一 みいけ殿の事

一 くわさんのわんひめぎみの事

等七條のざんげばなしなり。此の草子は作者を詳にせざれども、文章のみやびやかなる點より推せば、或は公家の佛門に入りし人ともなるべし。かくて寛文に至り、佛菩薩の靈徳、寺の縁起、さては因果應報の理を世事に附會して、凡俗を佛法に誘導せんと勉めたる弘法の文學起りぬ。たとへば鈴木正三が『二人比丘尼』は、一休和尚の作と稱せらる、『水鏡、二人比丘尼』、『一休骸骨』に胚胎し、又同人作『因果物語』『念佛双子』などあり、佛教文學は此の人によりて大に發揮せられ、曾我休自が『爲愚痴物語』(寛文二年板) 正三門人なる惠中が『海上物語』(寛文六年板) 淺井了意が『三井寺物語』等、其の脈絡四方にはびこりぬ。然れども其の目的元來弘法にあれば、概ね荒唐無稽の事件にて、多少奇趣を喚起するの外、趣向拙く、文章もまた見るに足らず。是等の草子に列しながら、弘法の外に一機軸を出し、後來怪談小説の濫觴となりしは、『剪燈新話』の翻譯なり。

#### 其四 支那文學の翻譯

一方に古文學の註釋盛行はれしが、一方には支那文學を假名草子に翻譯することまた當時學者の業なりき。たとへば『裳陰比事物語』(慶安四年版)の如き、『釋迦八相物語』(寛文六年版)の如きこれなり。これと同年に松雲子(淺井了意)の『伽婢子』も世に出でたり。『伽婢子』は支那小説

『剪燈新話』の翻譯にして、主意は勸善懲惡なれども、大躰に於て前の『爲愚痴物語』『因果物語』等と異ならず。されど流石に趣向の巧みなるは、譯文の平易にして流暢なるは、前後此の種の草子中に比類なき名作といふべし。此の書一たび出で、戯作の過半は百ものがたり、あとぎばなしに傾向せり。いまこれが系統を承けたるおもなる草子の目を擧ぐれば、

- 『新お伽婢子』 (天和二年、作者未詳)
- 『古今百物語評判』 (貞享三年、元隣作)
- 『犬 張 子』 (元祿四年、了意作)
- 『諸國新百物語』 (同 五年、俳林子作)
- 『玉 帯 子』 (同 九年、文會堂作)
- 『拾遺御伽婢子』 (同 十三年、柳絲堂作)
- 『御伽百物語』 (同 十四年、都の錦作)
- 『近代お伽百物語』 (寶永三年、鷺水作)

等みな了意が『伽婢子』の影響にして、江戸時代に至りては、京傳馬琴等が稗史の一要素となり、別に怪談小説の一躰を起せり。彼の有名なる『牡丹燈籠』と稱する講談ものは、實に了意が本書の翻譯にて紹介せられしなり。此の他支那文學をかな草子に翻して、一般の讀者に推薦したるもの、淺井了意が著作の過半を占む。

其五

外國文學の輸入  
イソップの翻譯

こゝに又寛文時代に一異彩を發ちたるは、外國文學の輸入なり、もとより多くは其の類を認めざれども、西歐文學『イソップ』の翻譯は其一なり。譯書は『伊曾保物語』と題す、上中下三冊、繪入のかな草子にして、万治二年（今を去ること二百三十四年）の板行にかゝる。譯者を詳にせず、按ずるに肥前島原に耶穌教徒の變亂ありし數年の後なれば、此の宗教と紛れ込みたるものなるべし。然るに『いそほ物語』は、なほ早く本邦には繪巻物として傳はり、現に其の寫しを所藏する人もありと聞けり。此の繪巻物は足利時代大内氏が、私に外國と交通せし頃渡來せしものにて、慶長年來の出來なるべしといふ。されば本書は其の繪巻物を寫したるものにあらずして、全く原書より其の頃翻譯せられたることは疑ふべからず。蓋し繪巻物は通例眼に翹ふる美術なれば、よし多少の文を加へたればとて、其は小書たるに過ぎざれども、本書の如きは人物國名までを、覺束なくも原音に依りたるなど、純然たる翻譯の體裁を具へたればなり。こゝに其の文の一二を抄出せんに、

第一 本國の事

さる程にえうらうはのうら、ひりしやの國さるやといふ所に、おもにやま云里有、其里に伊曾保と云人ありけり、其ちたびえうらうはの國中に、か程見にくき人なし、其ゆへは、かうべはつれのかうべにニツがさ有、まなこの玉つばぐみ出て、其

さまたいらか、かほかたち色くく、兩のほうなだれ、くびゆがみ、せいひきく、あしながくしてふさし、せなかにまり腹ふくれ出てまがれり、物云事おもしろき、其時代此いそほ、人にすぐれてみぐるしくきたなき人也、されども才覺又ならぶ人なし、されば其里にたしかひおこりて、他國の軍勢みだれ入、いそほをからめ取て、はるかかよへ聞えける、あてゑるす云國の、ありしてす云人にうれり、彼者のすがたのみぐるしきを見て、なすべきわざなければとて、わが領知につかはし、百姓等にひさしく、牛馬を飼まむるわざをなんおこなふ、かくて年経ぬれど、さるべき人ともふらずなん侍りける、折節ある商人にうりわたさる、猶別の人二人買そへ、以上三人めしぐして、さん云所になんなく行けり、其里におおて、まやんといへるやんこなき知者の行達、彼商人に尋て云、御邊の召ぐしける者共は、何事をかはま侍るぞと宣は、商人こたへていはく、一人は琵琶をひくげに候と申ければ、かのまやんこ、すぐに二人の者にさひ給ふは、面々は何事をかま侍るぞと仰ければ、二人諸もに答云、あらゆる程の事をば、かたのごこく知侍るぞ申其後又いそほに、汝はいかなる者ぞとさひ給へば、いそほ答云、我は是骨肉なりと申ければ、我汝に骨肉をばさはず、汝いづくにて生れけるぞと仰ければ、いそほ答云、我はこれ母の胎内より生れ候と申、汝に母の胎内をばさはず、汝が生まれたる所は、いづくの國ぞと仰ければ、いそほ答云、我は是母のうみたる所にて、そだり候と申、其時まやんこ、かれが返答はたゞ、魚の島をめぐらごこし、さて汝は何事をか知侍るぞ、とばせ給へば、いそほ答云何事も、知侍らぬ者にて候と申、其まやんこ、重而仰けるは、入さしてものゝわざなき事あたはず、汝何の故にか、まわざなきやと仰ければ、いそほ答云、我何をかなすぞと申べき、其ゆへは、くだんの兩人、あらゆる程の事をばさるさいへり、是にもれて、我何をかまり候べきやと申、其時まやんこ、いそほにさひたまはく、我汝をかいさるべし、汝におおていかんとおほせければ、いそほ答云、たゞ其事はのぞみの心に有べし、いかでそれがしに尋給ふぞと申、まやんこ重てのたまふは、我汝をかいさるべし、彼時にけさるべきやと仰ければ、いそほ答云、我此所を逃さらん時、御邊のいけんを請べからずと申、かやうに櫛々けうがるこたへ共なま侍りければ、心よげにおもひて、いさゝかの間にかい取、彼商人さゆき給ふに、あるせきのまへにて、いそほが姿を見て、あやしの者やとさかめおき

て、是はたれの召くし給ふ者ぞ尋ければ、まやんも商人も、あまりにいそほが見にくきことをほぢて、まらずに答ふ、いそほよしを承り、あなうれしの事や、われにぬしなしいひて、いさみあへる、其の時まやんも商人も、是は我まよふうにて候ま宣、それよりまやんも、いそほをめしつれ、我本國へかへりたまひけり、

これをはじめとして、伊曾保はまやんと又は諸邦の君に仕へ、どころくにて機智を示し、頓才をあらはし、終にけれしやの國に至り、てるほすと云島に渡りしが、島人心あしき者共にて、伊曾保が教ふる道を用ひず、天下無双の才人も終に峩々たる山の巖より、取て下におし落され、鼠蛙の譬を引いて伊曾保は相果てたり。此の物語は最初に、先づ伊曾保が経歴を叙し、次に種々の比喩譚を附したり。

たつと人との事 (下の巻第四)

河の邊を、馬に乗て通る人有けり、其傍にたつと云物、水に離て迷惑する事有けり、此龍今の人をみて申けるは、我今水にはなれてせんかたなし、哀みをたれ給ひ、其馬に乗せて水有所へ付させ給は、其返報として金錢を奉らんといふ、彼人は誠さ心得て、馬に乗て水上へをくる、そこにやくそくの金錢を、くれよといへば、龍いかつて云、何の金錢をか参らすべき、我を馬にくり付て、いため給ふだに有に、金錢とは何事ぞあらそふ處に、狐はせ来て、扱もたつ殿は何ごきを静ぞと云に、龍右の赴なん云ければ、狐申けるは、我此公事を決すべし、先にくり付たる様は、何さかしつるそと云に、たつ申けるは、かくのごとしめて又馬に乗程に、狐人に申けるは、いかほごまめ付らるぞと云程に、是程とてまめければ、たつの云、いまだ其位なし、また、かまめられけるといへば、これ程かまめ付て、人に申けるは、かゝる無理無法の徒者をば、本の所へかへれきて追立たり、人實も喜びて、本のはたにおるせり、其時たついくたび、悔め共かひなく

万治二年板「伊曾保物語」挿繪



して失にけり、其こゝく人の思をかうふりて、それを報せぬのみ、かへつてあたをなせば、天爵たちまちあたる物なり、これを覺れ

右『伊曾保物語』が當時他に及ぼしたる著き影響を認めざれども、そもく此の頃の教訓ものといふは、諷誡の意を寓したるが多ければ、また頗る時向に適ひたる作と思はる。但し淺井了意が『浮世物語』は、其の趣向、伊曾保が諸國修行に胚胎せるに似たり。また山岡元隣の『小さかづき』も、一編寓言の小話よりなりて事柄は和漢に其の材をとり、『伊曾保物語』に似たる點なけれども、着想は二者ともやや同じき所あり。兎に角當時の作家にかゝる洋學者ありて、珍らしき西歐文學を此の時代に本邦に輸入したるは希有の事といはざるべからず。

これを要するに、寛文文學のおもなる仕事は、散逸したる史材を集輯し、經書、支那文學書の翻譯、本邦古文學の版行を遂げて一般に讀書の便宜を與へ、或は註釋を施し、或は翻譯をなし、あらゆる文學の材料を供へて、次に興るべき大成の時期を待つもの、如し、すなはち寛文は準備の時代なりき。當時の學者は最も博くゆきわたるを以て長所となす、されば博學は一般の風をなし、僧なれば八宗兼學、儒なれば和漢古今に通ずるをもて、學者の能事をはるとなす、其の弊は博覽を街ふにあり、一編のかな草子を繙くも、此の痕跡は全時代に印銘せり、山岡元隣の『小さかづき』の如きは其の一例なり。かるが故に此の時代の作家には、學者は有れども天才の人を認めず、隨て戯作も創意に成れるは稀にして多くは他の真似に過ぎず、文章はたまかり。然るに此の準備

時代を通過して、戯曲には近松門左衛門、浮世草子には井原西鶴、俳諧には松尾芭蕉の如き作家、元祿に至りて現る、天才は實に第二期元祿時代の産物にして、其の時こそ創作の時代なれ。俗文また其の時に發生せり。然れども第一期寛文時代にはこれなし。

### 第二章 假名草子

假名草子の名稱

寛文時代に行はれたる草子類は、學識ある人々が一般の知識を啓發せんとの目的にて、漢書、經文、さては古文等の案を翻し、また其の詞を其の儘、假名の讀み易き文章に更めて紹介したるにあり。これを通例かな草子と呼べり、蓋しいかなる草子も、假名文にて綴られざるはなきに、ひとり此の時代の草子のみ此の名目を附するはやく穩かならざるに似たれど、古文は假名文なれども、ことば雅にして一般に讀ましむる目的にあらず。又元祿以降は、草子類も段々六ヶ敷眞字を交ふることとなり、其れに傍訓を施して、婦女子にも讀み易からしめられたれども、寛文ごろの草子は、日常用ふる最も容易き文字の外は、成べく眞字を避けて假名を使用し、其の目的全く文學の普及にあれば、特に此の時代の草子をかくは名づけしなり。假名草子の作者一二にして足らざるべし、然れども當時の草子名を記せざるもの過半、今知られたる主なる作者を左に列叙す。

### 如 儻 子

其一 傳

如儻子とは、そも何人の號なるかを詳にせず。其の作『可笑記』、『百八町記』の記事によりて察するに、作者の素姓は、もと關東生れの武士なりしに似たり。然るに武運つたなく浪人の身となりて、後ち佛門に歸依したる人の如し。『可笑記』はすなはち俗たりし時の經歷の一部を漏らし、『百八町記』は佛者の境涯をほめかす。『可笑記』にいふ、

むかしそれがしためしよろひをおとし候はんて註文を任り親にみせ候へば親の申され候はためしよろひはおもき物にて汝がやうなる小男の用には立がたし侍の諸道具は其身に相應して取まはし自由なるがよしとて其ついでにたられけるは汝が母かたの舅東禪寺右馬頭つれに申されけるは運は天にあり體はむねに有とて幾度の合戦にもあつむぎの羽織のみうちきて何時も人の眞先をかけまんがりをまられければ共一代かすてもおはす一とせ出羽國庄内千安合戦の時上杉景勝の軍大將本庄重長はせあはせ勝負をけつする。割敵大勢なるゆへに四十三歳にして打死せられぬ其時本庄重長も星甲のかたびん二寸ばかり切おさされわたがみへ打こまれあやうき命いきられぬさうけ給はりしなりきたるも道理かな相州正宗がきたいたる二尺七寸大は物ぬけば玉ちるばかりなる刀也此かたな重長が手にわたり景勝公へまいりそれより羽柴太閤公へまいり其後當御家へまいり只今は二尺三寸とやらんにすり上られ紀州大納言公に御座あるよしをうけ給はり及申此右馬頭最期のはたらき出羽越後兩國において古き侍は多分見き、およびまりたる事なれば子細に書付侍らす

右東禪寺右馬頭は酒田の城主にして、事は天正十六年にあり。之を母方の舅(?)といひ、又同書に



一、させ上杉景勝公の御内直江山城守さ出羽の國最上の御主義光公と合戦の時になをえ方の下次右衛門云一手の大将もかみ谷地の城をせめ取てすなはち其城にこもり候刻(中畧)それがおち大井右近も折ふしこの城にこもり云々

如備子のをぢの一人は、大井右近とてまた上杉氏の旗下にあり、前の東禪寺といひ、みな歴々の武士ををぢに持てば、如備子の家は、東北に由緒ある武士なりしこと知るべし。或は大井右近と同じく上杉氏に屬したる士なるやもまれず、さすれば上杉氏勢を失し、主家とともに零落したるもの歟。

同書に、其の傳ともいふべき一節あり、

むかしさる時親子ともに牢入いたし越路のかたはらに徘徊仕候時あまりの事に父にをくれ老たる母にやしなはれて雪苦霜辛をまのぎおくりけるが身のいさなみにかゝつらへ武州江城の波にひかれやう／＼うかび出候へごも大すりきりなればながく身上がせくへきてたてもなく生國あづま者なれば口才利發にもあらず心かたくなれば世間せばくしてつてをももたず生れつき愚なれば藝能をもまらず結句の花ゆりにぶ男さたのかきりにしていかにすべきと思ひわづらへる處にさるトひ人來て云るは汝少れトリ書をもするなれば當座の命つなきに右筆せよにあはしき所あるべしと申さる云々

されば如備子は手蹟もよかりしかば一時祐筆を勤めしこともありと見ゆ。『可笑記』の奥に、

于時寛永十三

孟陽中泮江城之旅泊身筆作之

とありて、寛永頃は江戸にありしが如し。作者の年輩を推すに、同書に

ちかき此の軍は攝州大阪之陣もはや三十年になれり、たゞへは大坂陣へ十七八にても罷立つ人もはや五十歳におよぶべしとこれ必しも自分のことならぬと、其の書きごまにかにも年輩の人の如く、『可笑記』の文勢より推すも、作者は頗る世故に通じ、人情に精しき人にして、若輩の人の筆とは思はれず。

如備子の傳を推測もて、かく綴りし後、一日饗庭篁村翁所藏の『可笑記』を一覽せしに、左の如き書入れあり、

予(書入せし人)瑞龍軒怨翁が選せし關ヶ原軍記大全を讀みしに怨翁が親族湯村式部が著すころの可笑記に本庄越前守繁長が東禪寺右馬守を討て正宗の刀を得し事を引たり因て此書の撰者の名を知し故こゝに記し置く讀者是を察すべし

と、これにて如備子は湯村式部の戯號なることをきりぬ。併しながら本書印刷の期迫り。其傳を調ぶるに違あらず、たゞ其の事をこゝに附記して如備子は湯村式部なることを一言するのみ。近來成りし一二の書に、如備子を淺井了意が別號とすれど、了意と如備子とは全く別人にて、これを混同したるは何時なるか詳ならざれども、蓋し寛永頃に戯作あるは了意一人と思へりし後人の誤解なるべし。元禄五年板の『廣益書籍目錄大全』には、

百八町記 如備子作 了意加筆

と註して、二人を混同せず。又都の錦が詞にも「如備子はじめて可笑記を作り、昭儀坊(了意)亦御伽婢子を作る」と見えたり。當時の人は皆兩人を區別せり、更に別人の證は、如備子の作『可

笑記』に、同じ作者が、評判を加筆して、もとは五卷なるを、十卷に敷衍すべき理由なければなり。これらの區別は『可笑記』及び『同評判』（了意作）の文を合せ見るも判然たり。

其二 著作

『可笑記』五冊

大本の繪なきは、寛永十九年版、小本繪入は板行年月を詳にせざれど、畫風より推すに明曆、万治頃のものと思はるれば、更に後の板行なるべし。

『可笑記』は、毎章に「むかしさる人の云るは」と『伊勢物語』の文の起首に摸して書きはじめ、筆まかせに、古今雑多の事柄を綴りたる隨筆なり。『枕の草子』、むしろ一層新らしき『徒然草』の躰を學べり。着眼はもとより似るべうもあらねど、文章のところくは、全く其の響みに習ひたり。そもく作者の境遇、一たびは武士の家に生れ、ある理由にてあぢきなく世を遁れし人とするれば、一方には兼好が身の上に同情を表し、其の爲人を慕ひ、一方には『徒然草』は當時の流行ものなるに感化せられて、此の作は出來しなるべし。然れども『徒然草』は、儒釋道の深奥を極めたる得道の隱者がものせしこととて、世の中を觀るにもおのづから脱俗の趣あれど、『可笑記』は作者が世に満たざるの心ありて、感慨所思を抒ぶるに、事託寓言を用ひしなれば、當世を諷する文となれり。すなはち此の書は、世の君たる人が、濫りに讒者の言葉を信じ、名臣を黜け、良士の擧ぐべきを登用せず、または武士たるものの不覺悟、奢侈放縱の行爲などを懇ろに諫めたる

にあり。たどへば、

(一) むかしさる人の云るは、永祿つちのこの巳年、東のそらにけふりのもみいづる星あらはれたりみなあやしきおそれみぬき云事なしそのころ名譽の博士勘文をもつてかたられるは我朝文武の正道めつきやくすべきまゝの星とされば王法は絶て久しき事自今以後古へよりつたへ來る侍の家々次第におそろへはて、累代の家法を取らしなむ仁義禮をわきまへすあまつさへ無藝無能にして利發利口にながぶりよくにうつり利にまよひ馬子なる事をこのみもてあそび眞なる事をばあらいやの孔子風やれ氣つまりの延喜式やまきらひあざけり色にめで愛におぼれて賤き下子共を取たて家老出頭さもちいあがめ過分のおんまやうにあづかりありがたき情をかけ給ふゆへに國々所々に發向して惡逆不道のわかまゝを嫌ふるまひごうよくまんのをもつはらさし神道をやぶりあかめず佛法をいやしみたつこまます萬不慈悲不儀理の不知惡なればかゝる時節をうかひひ新まじりややく作邪惡の宗旨さんげんへうりのごうよく人のみげんぢやうすへしと云る事を夢うつゝのとくつたへうけ給はりわれおるかなまじりややくがらもふかくまうたんしおもく疼痛して文字のあやまりかなちがひをはちす此愚書を綴て余が世倅にあたへふみならはすまここに遠東の家ならしもし他見の人文字の御用あらば佛學儒者のかたかなの御用あらば公家運歌師のもさへ御たづねあるべしそれがしはまつたくまり候はすたどうらむらくは文言つゝかす短筆よめかぬへき事をまながら内外の書にも章段のかけたる所さつかんなどもありまきくまからば何の遺恨かあらん但不慮のほまれ口々のそしりをあふき求るに似たる歟

右は、『可笑記』一篇の大意の存する所なり。また其の短き章にては、世上のことを何くれとなく筆にまかせ諷刺してさふ、

(二) むかしさる人のいへるは世間にくきはあまりある物く、鼠、ひるれおそろかす蠅、鼻低わるさするせがれ、出家の女房をみるまなぐり、わか衆の大食、蚊のほそこゑのまくらよぐる、ミウよく邪道の老、出來出頭のおため者、此外さまよくあるべし

(三) むかし日蓮宗のお上人、だんなのつまにうちほれて、さやせん、かくやせましと思ひ、あかしの浦浪の、立ぬくるしき海女うみづめ乙女、かほくまもなき衣手の、きつくなれにし、つましあればさ、かきくごき、南無妙法蓮花の上に、さしぬれば、まゆつりも、まゆだも、かはらざりけり

南無妙法蓮花の道に成ぬれば出家も俗もかはらざりけり

(四) むかし吉田の兼好の詞に物によりおほくありてあしき物あり、硯筆のおほくある持佛堂に本尊のおほくある世になし貧家に子ごものおほくあるさかけり又それがしの申さんならばお大名のぶんに金銀のたくさんにあるさ

などの如し。文章は洒脱、名の如く可笑みあり。併し關東武士の筆になりしものとて、どこやら文に抜くべからざる氣概あり。當時はいまだ戯作とて、一般の娛樂に供すべき書物の乏しき時なれば、此の士氣のある文章もて當世に風詆したる言の葉のいかに時尙に適ひしか。これより以前意林庵の『清水物語』これに應へたる『祇園物語』等あれども、作者の着眼の一局部に偏し、或は文の癖餘りに古き時代を摸して、戦後の人の好尙には、注意を喚起すべき價値なかりしかば、ひとり『可笑記』に團扇は擧がりて、大に流行文學とはなりぬ。これ『可笑記』の數板あるに徴してのみにあらず、元祿ごろの評にもいへり、

めやすき草紙には、大和物語、宇治拾遺、清輔が雜談、今は昔の物語、よしの拾遺、雜々拾遺、著聞集、十訓抄、塵筆記などございへども、此等にいへる言の葉は、久しく目馴聞ふれて、めづらしからればさて、如曇子は、つめて可笑記を作り、昭儀坊(淺井了意)亦御伽婢子をあらはし云々、

右は都の錦が『も伽百物語』の總論のうちにありて、近世戯作の起原は、この『可笑記』にはじ

まる由を、つらねし言葉なり。げにや『可笑記』は、將に興らんと待ち構へたる若手の文才を奮起せしむるに與りて力ありしに似たり。蓋し名著といへども板行に上らざる以上は、一般の讀者を動かすに足らず、よし板行せらるればとて、大に行はれざれば當代の思想を左右する効力少ければなり。たとへ『可笑記』以前に、戯作ありきとするも、みな等閑に附せられ、ひとり『可笑記』を歓迎するの聲は、戯作の導火線に着火せしものに異ならず。これに雷同響應してあらはれたるもの、山岡元隣が『誰が身の上』、淺井了意が『可笑記評判』なり。まかも此の二作は、ともに元隣、了意がはじめの作に屬するを見れば、『可笑記』の及ぼしたる影響といふも過言にはあらじ。

『百八町記』 五冊 (寛文四年板)

こは戯作にあらず、儒釋道三教一致を唱へ、各々其の末流が互に非難攻撃するを破したる書なれども、もとより佛教の爲めに儒者の説を駁したるは明なり。此の書にて如曇子が佛門の人たるを知るべし。每章に一字下げて私見を加へたり。こは了意の加筆と前にあるが如し。當時儒者の攻撃を受けて、佛門の徒がいかに防戦せしかを窺ひ、また論壇の狀勢を察するには、参考に資すべき書なり。

如曇子の作と稱するもの、先づは右の二部なるが如し。

鈴木正三

其一 傳

鈴木正三は通稱を九大夫、石平道人、また玄々軒と號す。三河の人にして天正七年に生る。若き時より徳川家康に従ひ、處々の戦に臨み、殊に關ヶ原の役、大坂冬夏兩陣には戦功少からず、元和のはじめには大番士なりきとぞ。

正三夙に佛門に歸依し、遁世の志やみがたく、元和六年（一説には九年といふ）遂に意を決し、病と稱して致仕し、薙髮して名を正三と改む。これより諸國を遍歴すること十餘年、また三河國に還り、同國石平山恩眞寺に住し、修業を積むこと年あり。慶安元年戊子の夏、江戸に下りて、居を淺草天徳院の側に卜し、了心庵と號しこれに住へりきといふ。正三が著作は、多く此の草庵の手ずさびなるべし。明暦元年六月二十五日歿す、年七十七。（一説に七十）淺草八軒寺町福法院に葬る。（『雜書開題』、『馳鞍橋』、『墓所一覽』等）

其二 著作

正三著作のうちに、七部の書と稱して世に傳はるは次の如し。

- 『盲安杖』 一册 (承應四年板)
- 『龍草分』 二册 (明暦二年板)

また此の外には、

- 『因果物語』 三册 (寛文元年板)
- 『破吉利支丹』 一册 (同 二年板)
- 『二人比丘尼』 二册 (同 四年板)
- 『念佛草紙』 二册 (未詳)
- 『万民徳用』 一册 (未詳)
- 『三寶論』 一册 (承應四年前)
- 『鹽鞍橋』 六册 (万治三年板)
- 『草庵雜誌』 三册 (寛文九年板)
- 『でうす問答』 一册 (未詳)
- 『自己安心』 一册 (未詳)

等あり。但し戯作の躰を具へたるは、僅かに『因果物語』と『二人比丘尼』とあるのみ。されど正三が著書に、一貫せる主旨は、六賊煩惱を斷ちて、三界出離の目的に外ならず、現世を穢土と卑み、有相を不淨と見做し、貪嗔痴の三毒を除き、人たるもの一日も早く成佛を遂げんと志すにあり。當時隆々たる徳川氏の麾下にありながら、得らるべき榮華を放棄して顧みず、正三は能くみづから此の念願を貫きしものといふべし。然れどもこれ正三みづからのみ行ふべく、他にはほとんどく施すべからず、されば正三は、一方にはまた差別の眼を以て、武士は武士、農商は農商

の分際に従ひ、其の盡すべき業を奨励し、佛法はたゞに死後の便のみならずして、現世國家に利益あることの廣大無量なる由を説き、

佛法不異世間法世間法不異佛法

どの經文を基礎にたて、佛法僧の三寶を、世の中の万事に適應せんと勉めたり。其の現世利益の説は、『万民徳用』『三寶論』等に見ゆ。此の點は正三、飽くまでも三河武士の氣風を失はざる所なり。

されど現世利益は、所謂人を見て法を説くの方便門にして、自家本來の面目は、寂滅爲樂、捨身して往生を遂ぐるにあり。

『二人比丘尼』は此の觀念を發揮したるものにして、前にもいへるが如く、一休が『水鏡、二人比丘尼』、むしろ『一休骸骨』の

いづれのみかゆめのうちにあらざる、いづれの人かがいについたらざる、それを五しきのかはにつみてもあつたふはどこそ男女のいろもあれ、いきたえ身のかはやふれぬればその色もなし

といへる主旨を、彼れは抽象的にいひあらはし、これは具體的に描出したたり。

『二人比丘尼』の大意

下野の住人須田彌兵衛といふ者あり、二十五歳にして戦死しけるを、妻女年なほ十七歳、愛別離苦の悲みに堪えず、一周忌の後せめて我がなきつまの跡を弔らば、と夜半に紛れてまのび出

で、とある小家に立よりけるが、あるじの女房、やさしき女性のいかにしてかこゝに來給ひしと問ふ、女性つゝむによしなく、有りしこといも語れば、女房もあはれに思ひ、ともに涙にくれやゝありて申やう、

會者定離のならひなれば、たれか別れのなかるべき、我も人もさうまるべきに非ず、誠や古歌にも

さきだつと志ばしのころもおなしみちつれぬばかりやわかれなるらん

と、よみおくこのはを、おぼしめしやらせ給はぬや、御身まてものがれ給ふべきに非ず、何しにいたふなげかせ給ふぞこいさめ申せば、女性問給ひ、心ありける女房のいさめかな、げに理りさは思へ共、煩惱の雪厚して、妾執の闇に迷ひ、むれ月晴やらす、流轉三界のきづな、おもくして心のさむる事もなし、たま／＼うけがたき、人身をうけながら、かゝるつたなき女の身成事、前の世の報、これひさへに我科なりと思ひつゞけて、かくなん

わかれちのうらみはさらになかりけりゆるおもひのわがまがなれば

と詠下給ひ打伏背のさむしろに萩の上風音信て虫の鳴れも枯々に、鹿の遠くさ幽にて、思ひを添るなだち成、夢も結ばぬ折からに、いさささびしき鐘のこゑ、心をくたくよもすがら、軒もる月の影だにも、志ばし枕に残らすして、更行空ぞかなしき、志ばなく鳥の數そひて、よもさら／＼と、明渡りければ、主の女房に暇乞、彼野邊さしていでたまふ

さても我がつまの最後の處はこゝにやあらんと見やるに、あまたの墓場あり、よもすがら南無幽靈成等正覺、と回向して曉がたとおぼしき頃、志ばしまどろみけるが、前にここかしてより骸骨集り、一度に手拍子をうちて、

そも／＼我ら申は、地水火風のかりものを、さくに返辨仕、六賊煩惱のたれをたち、十惡の里をいで、もこの古郷に立歸

り、人間の八苦をよそにみるぞうれしき

とぞうたひける。女性はじめてうき世の夢のさめたる心地、感涙とめあへず、やがてあたりの里にいで、とある家を訪ひしに、容貌すくれてうつくしき、二十ばかりの女房、いつかたよりぞとたづぬ。女性つゝむによしなく、亡夫のこといも具さに語れば、女房承り、さては有難き御心ざし、と感じて、またあのが身の上をも語るを聞くに、これはそのかみ陸奥のものにて、幼き時人に賣られんとしけるを、情ある一人の尼に助けられ、その一人子に妻はせられ、樂しきは夢の間、さるほどに尼は身まかり、夫もつぎて亡せ、たつきを失ひ、悲しさをせなく、此の年月を送りぬ、一樹のかげ一河のながれ、思召やらせ給ひて、これにまばらくとどまりおはしませ。と女房が情けにほだされ、そこに其の年も暮れ、明る年の二月、やう／＼にこゝを立出んとしけるに、女房ふと風の心地あしく、

まだい／＼におさるへ、よのつねのかんばせはかり、はなのかたちもやつれ果、哀なりける有様なり、歎くにかなはぬ命なれば、今をかぎりとなり果、ねふれるが如くにして失給ひぬ、うゐてんべんの世のならひ、きのふみし人もけふはなく、なき人はかきなり、朝に紅顔あれども、夕に白骨なる、あだし浮世の理のなるべきにはあられ共、かゝる憂めをみる事、そも何の因果ぞや、時しも比は彌生の末、花も散、春もくれ行空成に、日も入會の鐘なりて、こゝさふ人もあらざれば、いさゝ哀は増りつゝ、天にあふぎ地に伏、なげき給へどかひぞなき、かく有べきにあらざれば、里人をかたらひて、むなしきのべにそ、をくりける

心なき里人共なれば、野邊に置きすて、かへりしが、彼の女性は五七日の香花を取、跡ねんどろ

にとふらひ、七日といふに、野邊に行きて見るに、花の面影跡もなく、古の人どもおもほへず、髪はをどろにみだれ、五臓ははれたれおそろしげなる有様と變りぬ。二七日にはそらふく風に臭氣をおくり、ところ／＼の肉さへきれて、犬の餌食とはなりぬ。三七日には蛆となり、蒼蠅あつまり、醜骸たれかふるきよしみをおもはんや、されど四七日にもなりぬれば、臭氣失せ、肉もかはき、形全く變じていづれの人の果ともみえず、五七日には叢のうちに男女のけぢめもなく、白骨つがひはなれてこゝかしこ草の根にあり、唯月のみてらして、空く朽果なん事のかなし

さよ、かくおもふ我身、又これにかはらんや、扱もあだ成夢の世に、心をさめていたづらに男女の思ひ休時なく、愛念熱心ふかくして後世ほだいをよそにみて、日夜さいかうひまもなく明し暮しける事よ、

何事も夢之、と無常の理を悟り、それより尼となり、さある山奥に尊き老比丘尼を訪れ「かやうにかみをそり、衣を疊に染て候へ共、未一大事の因縁を知らず、びくに成たるかひ更になし、御志ひにまめし終へ」とそれより、老比丘尼を師と仰ぎ、教をうけ、修業の功を積み、終に工夫をゆんぶやくして大往生を遂げぬ。

蓋し正三が佛の本意と觀じたるは、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電」、すなはち夢のうき世といふに歸す。されば見ゆるもの觸るゝものは、こと／＼く偽なり、其のうるはしく、或は戀しく慕はるゝは、みな心の迷ひにして、貪瞋痴三毒の作用なれば、これを滅する爲めに、捨身念佛の心を發せざるべからず、と衆生を濟度する目的を以て、己れが世の中に對する意見を發表したるなり。

此の『二人比丘尼』は方便ながら主人公を設け、一貫せる想を辿りて終局に達す。文章は流暢ま  
ゝ七五調を交へ、ひきかけこぼれを用ひ、處々に歌を挿みて情を抒べたるなど、すべて物語文及  
び謡曲の文體に習へり。

『因果物語』

怨讎妄念の纏綿として解脱すべからざることを、世上の出来事のやうに附會して見せたる小話を  
集む。すなはち佛説の地獄極樂を、目前の苦樂順逆に譬へたるにあり。一々年月と住所姓名を舉  
げたるは、事實と思はしむる手段なるべし。此の書數本あり、眞片假名文のを正三が遺著とせり。  
蓋し門人等堅く秘して世に出さざりしを、竊に寫取り、剩へ恣に他の物語を雜入して板行するも  
のありければ、門人義雲、雲歩等、師の正本を梓に鏤めしものとぞ。平假名文にして繪入の本に  
は、正、三道人聞書とあり、これ恐らく義雲等の所謂偽本なるべし。

山岡元隣

其一 傳

字は德甫、而溫齋と號す。また洛陽散人、抱甕齋ともいふ。もとは勢州山田の人、寛永八年に生  
る。父の世までは貨殖の業をことし、せしが、元隣に至り、はじめて學に志し、聖賢の道に入りぬ。

蓋し元隣、幼にして多病、三年がうちに三たびまで死せんとし、たま／＼生を保ちしかば、かく  
ては身軀繁劇の事に堪へがたしとて、遂に家業を廢し、都に出で痼疾を治するに勉め、閑なる餘  
りに傍ら文學を翫びきとぞ。元隣老莊の玄理に耳を傾け、また頗る頓宗の旨を悦び、得るところ  
少からず。

國學歌俳の道は、有名なる北村季吟の教を受け、俳諧をもて世に知らる、座禪の句に、

無いちもつか、はなも香もなき、犬ざくら

元隣が國學者として、また俳諧師としての生涯は、季吟に負ふところ少からず、其の古文註釋の  
如きは、實に季吟の事業の一部分を負擔すといふも不可なし。

元隣が秀吟を推重したるは、『誰が身の上』に、

(前畧) 又おうなの徳は列女傳にあまたまると侍るを、ここに、此ころ我先生の女もとにやはらげ給へば、たれもとめて  
見るべきなり

と師の作を紹介し、又同じ書に、師の發句に對する世間の嘲りを排して、

ある人俳諧の發句すべき様をたづねられ侍りしに予がいはく發句のいたしやうはいさゝか習も有なりと古人も仰られしが、  
先初心のうちは世上に書たる俳諧の書を能見覺えて其時をみるをもつて一つの習をいたしきふらふ(中畧)問て曰すでに世  
に出たる集を手本とせよと仰らるれ共今の世の集には集一つには非言の書二つも三つもあればいづれを正さしむれを邪と  
せん答曰尤よきふふなりされども其内に山の井などいへる書にはいまだ非言もなくよき書かと覺侍る此書の作者は大和物  
語の抄などもせられたる事人のよくまりて世に用る事なり問曰され共此作者の句に山里やいつも正月門の松さあるを去人難

せしほもし此句を山里や、いづも月の門の松さよみさふらばと連歌たるべしと答曰これこはいはれぬ非言とまづ此發句はいつも正月さいへる世話にてまてたる句なり其上其時に中ずさいへる事ありたさへば柄の字はえさもつひさもよめども長刀にてはえさよみ太刀、刀にてはつひさよむ古來のよみくせ之(中略)此俳諧の書に正月さ有なにかに非言がまたきこむ月さよむさへあるに又の字を入て非言するこそかへすく道の覺障之(下略)

當時は學問一時に勃興せし時とて、學者間には種々の論難攻撃行はれしかば、元隣は事に托して、季吟が回護の位地に立ち、また著書を世間に推薦するの勞をも取りきと見ゆ、師弟の關係の親密なりしこと察すべし、『誰が身の上』を著はし、時は、元隣は二十三歳にして季吟は三十九歳なり。此の後なるべし、ひととせ濃州の大守、洛に上られし事あり、時に侍醫春庵(姓名を詳にせず、但し幕府の醫員啓迪院岡本玄治が高弟なりといふ)大守に従ひ、都に上り、元隣が家に宿しぬ、元隣は初對面なりしも、互に意氣の相投ずる所ありて、さながら舊識の如く語り合ひしが、春庵のいふやう、君の才學にして、醫を學ばざるは遺憾ならずや、他は幾ど諸事に亘るに、未だこれに及ばざるは缺典といふべし、と勧められ、元隣すなはち春庵に隨ひ、濃州に客となり、醫を學び其家傳を受けたりといふ。右は元隣の子息なる元恕の記する所なり。またみづからもいふ、

やつかれそのかみ身にいたづきまげくして已にみまからん事三年に三度なりき、猶此事にこりて啓迪院の高弟に隨て家傳の丸散數十服を受け其教にまかせて方書を考へ醫論に渡りてみづからの病をいやせる餘りを以て、またしき妻子のわれぬ奴がうれへを救へり、これ世人の幸にあらずや云々(寶藏藥箱の讀)

『誰が身の上』には、いまだ醫學を説かず、然るに其の後の作にはまばく刀圭の事をいふ、依て

醫を學びしは晩年の事と思はる。

元隣病身の故にて、一朝家業を廢し、俗塵を避け、病を靜養するの傍ら風流を弄びしかども、家もと貧しからざりしにや、著述概ね經營慘憺の功を積みて、良書に乏しからず、季吟が高足たるに耻ぢず。元隣氣概あり、人に屈することを好まず、市中に隠れて勧誘するものあれども仕へず、元隣みづからもまたこれを抱負し、其の著作にまばく氣焰を發す。『小さかづき』利齋又是に異見の事」の條にさふ、

六條わたりに、一人の書生あり、その名を又是といへり、老莊の玄理をもうかひひ、黃岐の神術をもこころがけ、きよきなにはづのすゑも、ながれわたりにし、たかきあさか山のふもこにもはいあがりて、世間の道理をも、なま／＼わきまふるに似たれども、うちにはまたしきにたすけられず、ほかにはうさきにもちいられずして、年月をむなく、ふるたぬきかうべかふるに齒齧にして、はらつひみをうちてたのしみ、伏櫛葛天氏の民をまたふさいへども、外より見れば、いよやつ／＼敷ふぜいなりけらし、その友利齋さいふ人まめに告て云、先生辯は子貢が明をまたひ、勇は子路が義をならふさいへども、子貢が富の千分一にもあらず、子路が高官のあしもこにもたすまず、ひろく人間世を見るに、先生が才なかなばなるものも或は世にもちひられ、時にあひて名はたかくさかんに富は家を潤せり、おもふに、先生が業のつたなきにあらず、心の辭なるゆへなるべし、先生が心さいつは、我情を情として富貴なるものにかたちをかめ、心をへつらはず、貧賤なるものをいたはり、遊俠のわざにたからなげうち、飲食をおします、自身はやぶれたる細袍をきて、市町をうごつき、綾羅錦繡をきたるむかし友にゆきあひても、先生より不禮をなし、見ぬかほをかさのうちにつむ、是いらざる田子方がおこりにならふて子擊によるこばれざる所(下略)



又是は恐らく作者其の人にて、稜々たる圭角、狷介人に下らざる氣質、さながら目前に見るが如し。みづから而慍齋と號するも『論語』に所謂「人不知而不慍不亦君子乎」の反對の義に取れりとぞ、蓋し自分は君子にあらず、少しばかり蓄へたる才藝も、用ふる所なく、人に知られざれば慍るとなり、これ而慍齋の名の因て起る所といふ。(『百物語評判』)

元隣はみづから隱者を以て居る、髪もたくはへざりしにや、摺子木の讚に、

あるトが身のほかにこそたれ、にくやあたまも丸し

の語あり。また『小さかづき』の挿繪にも、又是または可不可などいへる、作者の代人はみな坊主頭に羽織を着たる隱者の躰に畫けり。元隣頗る才氣あり、惜い哉健康長く保たず、寛文壬子(十二年)六月廿七日といふに、無常の風にさそはれぬ、享年四十二歳なりきといふ。

もしこれにツサに年をもてせば、いっばかりの事か侍らんに残り多く侍らすや

とは『百物語評判』が、元隣の死を哀悼したる詞なり。げにや元隣をして元禄まで存在せしめば、其の作決して『誰が身の上』、『小さかづき』には止まらじ。元隣一子あり、元恕といふ、また季吟の門人にして俳諧師なり。

### 其二 著述

元隣はほゞ儒釋道の玄理を窺ひ、和漢古今の學にも一巨りすといへども、就中和學古文を得意と

す。俳諧は其の本領なるに拘らず、著書の多分は古文の註釋なり。たとへば、

『百人一首新抄』	三册
『徒然草鐵槌増補』	六册
『徒然草別傳』	二册
『方丈記頭書』	一册
『水鏡抄』	二册
『風月往來抄』	一册
『腰越狀抄』	一册
『今川抄』	一册

『四書詳論』●『歷代異考』●『伊勢物語言餘抄』●『大學明德之圖』  
等あり。うち「徒然草鐵槌増補」はもと青木宗胡が、林道春の『野槌』を抜萃して、『鐵槌』四卷を編したるを、元隣更に考察を加へて重撰せしものなり。『徒然草』の註釋としては、『鐵槌増補』は屈指の良書なること世間既に定論あり。

歌俳の著述には、

『隨業集大全』	八册
『寶藏』	五册
『諸國獨吟』	二册
『身樂千句』	二册

『増補食物歌本草』

七册

『吉野ひさりあるき』(?)

等あり。

『たからぐら』

『たからぐら』は、日用の器物を、見るに随ひ、觸るゝに任せ、いろ／＼の懷を述べ、發句、狂詩もて其の品物を讚したるものにて、すべて七十二章あり、例へば

杓子の讚

身を捨てあまれく物をすくふが爲に釋子あまねを字せり、此故にもろこのほさつもこれにまがへり、こゝにえせ者有て取て定規こてとして其難をまうく、ふかし御意に入まいらせそその果報にあづからんには、猶その風情なまめく人の小手招こてまねにこそ月はいも招く手もこは杓子の

御多賀土産勿レ鄙

老若男女長命址

數奇者雖レ不レ誣レ歎

祝言振舞今一ヒ

の如し、蓋し日用の器物調度を實用的にはあらで、文學的に説明したる所謂俳書なり。卷末に元隣がかねて募集中なりし俳句數百首を附録せり。これ元隣が万句興行の計畫ありしに、病身中途にして其の業を廢す。其の言葉がきにいふ、

左に書加ふる發句ごもは、年ころ人々より、我許へ集にもいるべき云をこせしを、多病の身なれば此事いまだ果し侍らざれば其待かれ給はん心をはかりて暫こゝに記しをけり、若われ集つくらずして身まからは、後の集あみ出ん好士、其集にいれ

なんこをたのめるのみ

と、これまことに哀れなる詞ならずや、果して元隣は此の翌年にみまかりぬ。

春の部のはじめに、季吟が句あり、

春

元隣万句興行に

季吟

御代は万句まつ巻頭のこころし哉

此の書は、後ち元文四年に再版して、追加の發句を省き、『幸藏』と改題し、拙き序文をさへ加へたるは、あたらしい業なりかし。元版には、元隣が序文と發句とあり。其の句は、

あめつちやこれ月花のたからぐら

蓋し七十二句、ことごとく月もしくは花をよみこまざるは稀なり。以上は眞面目の著述に屬す。

### 其三 戯作

元隣が戯作は、

『誰が身の上』

六册

(明暦三年板)

『小 尾』

六册

(未詳)

二部に過ぎず、されども、『可笑記』の脈を承けたる名作なり。前にもいへる如く元隣は、老莊の學に心をひそめ、戯作にも其の玄妙を祖述せんと勉めたり。併しながら戯作として元隣の作に取

るべき點は、當時一方には荒唐無稽の神仙談、因果話のみに榮えたりし反側にたちて、おもに世態人情に眼を注ぎ、卑近なる事實、または俚言をとりて、教訓の意を寓し、世を諷刺したるにあり。其の老莊句調を帯べるは、

あなむらびよえ 孔奈幾笛に太平のうたを吹げ耳よりほかに其音遠く指ならざるを以て無何有の月を指ばひかりかげを忘たり山を山といふもそもまたせしむるものはたそ

など『誰が身の上』の序文の如し。一編の主意は、自ら省み、自ら戒むにあり。世に心學ものと稱する教訓草子中の名作なり。『誰が身の上』は、今も人の能く知る所なり。されど此の書は『可笑記』と同じく、いまだ隨筆の躰を脱せず、世間に持囃されしは、教訓の意を寓したるにありて、戯作としては、此の作よりもむしろ、『小さかづき』をまされりとす。

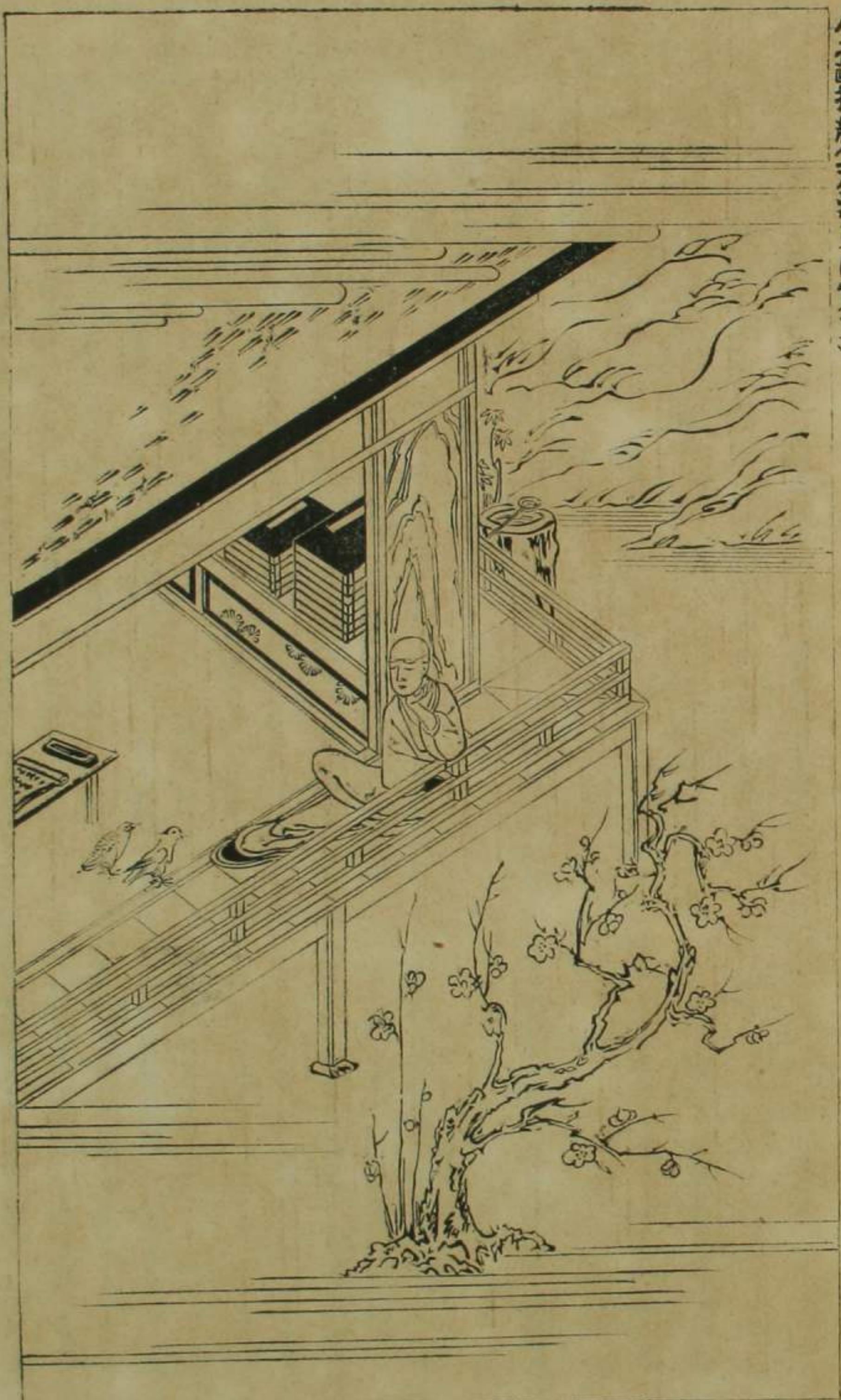
『小さかづき』

『小さかづき』は、板行年月を脱したれども、按ずるに『誰が身の上』(明曆)よりも後、万治または寛文中の板行なるべし。此の作には延寶四年に再版ありて、『あま夜の友』(四冊)と改題せり。然るにいかなる故にや、元本の一、四、五の巻を缺き、二、三の巻のみを四冊にしたり。恐らく板木の焼失にもや。

序

たれ おもしろしおもくろしこの草子、誰人の作爲ぞや、世間人情の上を滑稽に述て、頗日用農工夫を明せり、寃言有、重言有、巨

小孟挿繪(万治又は寛文)



盲有、書林子に名を求む、一部の意につきて、小さかづきと名づく

世の人のなまけくみまる小 厄 下戸も上戸もてあそぶべし

これ『小さかづき』と號けしゆゑよしなり。當時は學問の漸く隆盛を極め、かな草子の如きも概ね學者の片手間なれば、戯作一般に學者風を帶ぶ、就中元隣が作に甚だし、たとへば本編の夢物がたりの條の如き其の一例なり。

夢ものがたりとは、さる人の夢に、鶯と雀と巢をつくらんとして庭前の梅の木を争ひ、鳳凰なる聖鳥に訴へ、理非を分たんとす。

其さき鸚鵡とおぼしき鳥、さび出て申けるは、かたしけなくもあれにまします聖鳥はつれに千仞にかけて徳輝を見てはくだり、細徳の險微なるをみてははるかに羽うつ事をして、此所に濁世をのがれてすみ給へば今もつて賦詠の沙汰聖判あるべきにもあらざれども、二鳥はるく是まで朝せられしうへは、ほいなくかへすべきにもあらざれば、兩鳥ともに其けいつを申あげらるへし、其よろしき方につきて、梅花をまゆれうせさせ、侍るべしといへば、まつ鶯がいへるやう、むかしやまのくに、高天寺にてすなはち此梅花をやごとして初陽毎朝來不相還本栖はつはるのあしたごにはきたれども、あはてぞかへるもこのすみかにさ、いへる名歌を、さへづりてより、古今の序にも、はなになく鶯、水にすむ蛙の歌よめること、のせられしといへば、雀申やう、それがし勤學院のかたはらに、蒙求を勤學せしおりしも、この事も承候、かの貫之のはなになく鶯水にすむ蛙と、出されしはあながち高天寺の詠吟あるゆへにあらす、有情のなくこそ、たゞそのまゝの歌なりといへるこゝろにぞ侍れ、其ゆへに生さしいけるもの、いづれか歌を、よまざりけるさは決し侍り、わが雖こそよにやん事なきものにて、紫の上おさなき御時、北山にまのびて、すみ給ひし折もてうあいせさせ給ふ事、源氏物がたりに見へ侍りさいへば、鶯また

曰、大學の傳にも、詩云、鸞黃鳥止于丘隅、子曰、於止知其所止、可以入而不入、如鳥乎、(下略) これより鸞雀負けず劣らず、相互ひに自家の徳を稱へ、堅白同異の辨役々として止まず。蓋し其の主意は澆季の世、人々私欲に耽りて、些末を争ふを諷刺したるにあり。然れども作者は却て自家の博識を衒はんとして其の犠牲におちたる傾きあり。右に掲げたる如き鸞と雀との辯論の長きこと、實に其の紙數六七葉に亘り、作者の弱點を示す。此の誇學風よりも『小さかづき』に取るべき所は、他の短き寓言にあり。たどへば

足事をまらざる事付蛙願だての事

たる事をまらざる事、人の一生のたから、あたひをもつて、是をいはい堪忍の忍の字が、百貫せば千貫もすべきものなり(中略)むかしうづまさのほりの池の蛙ども、おほくあつまれる中に、大なるかへるのさひ出ていへるやう、われ(中略)さひ軍さひひ、文武二道をけがし仙術にも通ぜる身の、泥龜づれさ同トやうに、四足をもつてはひまはれる事こそやすかられ、されども天性四足さうまれつきぬる身の、自身のちからさしては、かなひがたかるべし、いかにもして此所の薬師如來に、大願をかけまいらせ、二足を以てあるき、二つの手をもつて、用事をかなへ、万蟲の至尊となりて、たさひくちなはなぞがおひきたるも、一あしも引れりぞか手手を以てふせぎ侍るべしといへば、みなくまかるべしと同トけるに、其中に一つの蛙す、み出て申けるは、佛僧その報恩の禮義をまつさしもなければ、若其願かなひ侍らば、なにをかふせにいたすべき、作善なくはいかゞとあれば、是こそまことにはれたりて、あるひは水草のはなを奉らんといひ、あるひはいさごを塔さくみて佛を供養せんといへるもくちんくなりける(中略)みなく此義にかたぶきて一心稱名の大願をおこし一七日さんろうしければ、七日満するあげがたに、おほくの蛙二足を以てたちける、いかばかり自由なるべきさよるこびしに、おもひのほか引かへて、兩眼うしろのかたへなりしかば、ゆくべきかたにはまなこなく、まなこあるかたへは、足す、

ます、これやこのゆくもかへるの進退こにきはまりければ、またいろく祈願しなをし、からんくむかしの身になりけるまかや、世の中を見るに、われ人このかはづのぐわんだて、なきにしもあらず。右は有りふれたる比喩にて、もとより元隣が想ひ着にめづべき點はなけれども、此の一編すべて『伊曾保物語』の物のたどへを引ける條々どほら版着を同うし、また同書譯文の晦澁にしておもくしき筆の運びごまは、よし翻譯の難儀なるにもよるべけれど、元隣が文癖と頗る相肖たるなど、『伊曾保物語』の譯者は或は元隣にあらざや。たどへ譯者は全く別人とするも、二書ともに寓言の小話を集めたる點は殆ど其の種類を同うせり。

淺井了意

其一 傳

淺井了意は、また其の傳の詳ならざる一人にして、近代に至り其の説區々たり。齋藤月岑が『武江年表』元祿四年の條に、

骨董集に元祿六年印本、犬張子(子)を引て了意大徳晩年に及んで筆力ますます老健なり元祿四年寂せられしとあるを(犬張子)に見えたるは、林九成が序文なり、後に出す。淺井了意が事さすまかるに高谷柳亭翁(種彦)の説に此時代了意といふ人二人あり。淺井了意は俗なり今一人の了意は僧なりにも著述の書ありしとなんこにいふは何れの了意にや詳ならずされど大まことあるを見れば必ず僧の方なるべし柳亭翁は筆記なきもありしならんを泉下の人とせられて問ふよしなきこそほぬなけれ

と見えたり。右種彦の説を按ずるに、一人は僧にして佛書などの著述をなし、一人は俗にして名所記、または戯作などの著書ありといふ意なるべし。然るに世に傳ふる了意の作といふを見るにみな僧なる了意一人の手になり、未だ俗なる了意に著述家あるを認めず。蓋し『可笑記評判』の瓢水子は『伽婢子』の瓢水子松雲にして、又『月見の友』に、松雲子了意とあれば、瓢水子と了意とは同人なることを知るべし。また『新語園』『十王經直談』『大原談議』等の、眞片假名文の著書には、洛之本性寺昭儀坊了意と記し、落款には、了意、松雲の二印を捺せば、僧なる了意は、經文などを勿論註釋し、戯作をもものせしこと明なり。但し了意には俗なりし時と、僧なりし時との、生涯には必ず區別あるべし。

了意は松雲子、瓢水等の戯號あり、洛の本性寺昭儀坊に住しきといふ。(洛の本性寺いまだ考へず)都の錦が『御前も伽婢子』の序に、

かの一向の粹僧が、剪燈新話の抜書を恨み

といへるは、了意が『伽婢子』を指せるにて、其の作者なる了意は、當時洒落の沙門と目せられしこと知るべし。彼の『東海道名所記』には樂阿彌となり、『浮世物語』には浮世坊となりて、所々を遍歴し、人情を探り風俗を察し、種々の失策、滑稽を盡して、研磨圓熟したる釋法師が、遊戯文字に託して、世人の感化に力を致し、こと、如才なき眞宗の僧としては、有り得べきことなるべし。

了意が目的は、世人を導く爲めの方便なるべければ、其の著述は概ね世間的に出來たり、詳しくいへば、如伽子、元隣などの著作は、世間の爲めよりも自分の爲めに、述懐し、多少鬱憤を泄したる氣味あれども、了意が作には、殆どこれなし。かるが故に其の著述の中にては、作者の髣髴たる條すらも認めえず、これ了意の素性の釋ねがたき所以なり。たゞ『可笑記評判』の奥に、

あしびきの山鳥の尾のながくしき生人にて陸沈潦倒し偶洛下に寓居する事百餘日のほご旅のれぶたなぐさみに此書に評す

(下畧)

于時寛永十四年南呂上辭

瓢水子筆之

とあるを見て了意もまた浪人の子などにて、寛永の末に、都にさすらひしことを知るのみ。また同書に、

寛永のころほひ閑居のいさま洛下に寓せし時ある人この書をたづさへ來りて余にまめし云々

『可笑記』の作は、寛永十三年にして、板行は同十九年なり。然るに了意は十四年に、これを評すといへり。すなはち板行の前なれば、草稿のうちに一讀せりと覺し。またこれに似たる事は、如伽子が承應四年の述作なる『百八町記』にも了意が加筆ありて、其の板行は寛文四年なり、これも亦草稿中の書入とすれば、同人の著に對し同事實あり、恐らく如伽子は了意に草稿のうちに関讀を許し、了意は亦これに加筆する程の交友ありしなるべし。而して『百八町記』は三教一致を唱ふとはいへど、佛道の爲めに儒者の説を駁したる事なれば、二子ともに、よし未だ一寺の住職

たらざるも、純然たる僧籍にありしこと察せらる、了意は或は黒谷にをりきともいへり、兎に角當時は修業中の身なるべし。

了意は寛永十四年に、他人の書にも評すべき程の學力あれば二十五六三十位の年輩と思はる。了意は如備子に次て早く世に出で、文學の生涯は鈴木正三に相前後し、もとより元隣よりは先輩なれども、最も世を長うし、元祿まで生存して、彼等が着手したる戯作の業を大成し、こゝに寛文の盛事を致したる假名草子作者の殿なれば、此の時期の最後に其の傳を附せり。

了意は著述を殘したる外に、今日まで生涯の事蹟の世間に知れたるは甚だ少し。元祿五年板『狗張子』の序に云、  
洛陽本性寺の了意大徳は、きはめて博識強記にして特に文思の才に富り、生平の著述はなほ多し、晩年に及て筆力ますます老健なり、去年庚午の春、往に編集せる伽婢子の遺せるを拾ひ、漏たるを搜りて、狗張子若干卷を作りその續集に擬せんす、其年の冬に至り、既に七卷を選び輯む、翌年辛未の元旦、意らざるに遽然として寂を示す、都鄙驚歎して深くその才を惜む、願に凡そ人の常情、その徳義を哀慕すといへども幽明途殊にして復みるべからざれば、かならずその生平の文字筆墨を尋ねて面晤に換るのみ、それ此書は了意大徳晚年思ひを究め、精を研きて筆作せる眞跡にして、是實に大徳遺訓の形見なるをや、是故に今その眞跡一字もあらためず、梓にちりばめ世に行ふ云々、

元祿四年辛未十一月

義端謹序

これにて了意は元祿四年正月元日に身まかりしことを知るべし。寛永十四年『可笑記評判』を作りし時を、假りに二十六歳とすれば、元祿四年は八十歳の高齡なり、其の遽然として寂すといふ

にて、餘程の老年に達し、苦痛もなく眠れるが如き、死状を察す。義端は林九兵衛とて、京都の書肆の主人なり、また戯作二三部あれば、後章に畧傳を附す。

其二 著述

了意が佛書の註釋は其の數極めて多く、一々就て見るべき機會を得ざりしが、三四部を見るに、概ね延寶以後の著にして、佛書ならざるも、本性寺釋了意と銘打たる書は此の頃のものに多く、また戯作を見れば、寛文以前のもの多し、されば晩年には一々寺の住職となり、眞面目なる註釋等に心を潜めて、草子類にはむしろ筆を着けざりしに似たり。いま年月の順序には拘らず、了意が著と知られたる書目を擧ぐれば第一に佛書、

『大經鼓吹』	六册	『大子傳備考』	三十册
『恩重經和談抄』	五册	『阿彌陀經鼓吹』	十八册
『法林樵談』	十册	『大原談義句解』	十册
『往生直談』	十五册	『孟蘭盆經直談』	十九册
『勸經鼓吹』	三十册	『愚迷發心集直談』	六册
『勸化往生傳』	六册	『勸修念佛集』	一册
『勸化要文便蒙抄』	十册	『勸化大綱抄』	八册
『十王經直談』	十五册		

第二には軍書、

『太平記首書』	二十五冊	『北條九代記』	十二冊
『將軍記』	十五冊	『鎌倉九代記』	十三冊

第三にば古文註釋、

『源氏雲隱抄』	九冊	『伊勢物語抄』	十冊
『徒然草諸抄大成』	二十冊	『百人一首頭書』	二冊

右『諸抄大成』は淺香氏山井輯とあれば、了意がこなるべしといふ、それは香山を除けば淺井となり、また淺香山井といふ人當時になければなり。

なほ『武家根元』『靈寶藥性能毒』『連歌初心抄』等は、右のいづれへも屬すべからざれど、これらは了意が著述の眞面目の部類を表し、本史の區域外にあれば、精しくははいはず。次には教訓を主としたる假名草子なり。

其三 教訓草子

徳川氏のはじめまでは、教訓書として一般に讀むべき書としては甚だ少かりしが、寛永の末より正保、万治、寛文の頃に至り、漢書より修身の助けになるべき書ども、追々に假名文にて板行せられ、こゝに教訓草子の流行を見るに至りぬ。殊に此の教訓草子の一部は、全く婦女の爲めに作せられき。たとへば中江藤樹の『鑑草』の如き、季吟の『唐の烈女傳』の如き、辻原元甫が『女四書』の如きは其の一例なれども、みな當代の學者が、假名草子に筆を着けて、婦女の教に心を注

『孝行物語』	六冊	(万治三年版)
『堪忍記』	八冊	(同年頃)
『本朝女鑑』	十二冊	(寛文元年版)
『太和二十四孝』	十二冊	
『新語園』	十冊	

ぎしは、女學史に特筆すべき事蹟なりとす。而して了意は、これら教訓草子作家の領袖にして、其の著頗る多く、又文章の平易なるは、當時幼稚なる知識を啓發するに、いかばかり効力ありしかは、今より想像すべからざるも、了意の作の盛に行はれしは、其の一證といふべし。了意が教訓草子は次の目次の如し。

右は聖賢、勇士、烈女の事蹟、忠孝貞淑の行爲等、苟も風教を益する物語、又は女式、女禮すべて女の心得となるべきことながらを、和漢古今の書より拔萃し、材を選び類を分ちて、文を潤飾し、面白く綴りなして、讀書の樂みのうちに教へを授くべき假名草子なり。『堪忍記』の如きは大小二版あり、万治頃出版せしを最初のものとし、寛文四年版は再版なるべく、同八年には又江戸大傳馬町鱗形屋にて、挿繪を師宣風に改め、版を新たに刻して賣出したるは三版なるべし。これらは當時にありては希有の事實にして、了意が書の持囃されしこと知るべし。當時はよし間接には幕府より一般人民の教育を奨励したるにせよ、直接には毫も干渉せず、然る



に是等の先輩が夙に眼を教育に注ぎ、私に修身書を著はし、世道人心を益せしとは教育家の着目すべき事實なり。而して後世にまで記憶せらるゝはひとり貞原益軒とす。益軒が假名文にて教訓書を綴りしをもて、後世益軒を本邦修身書の鼻祖の如く稱ふれども、益軒の事業は、既に其の以前に寛文に了意が成したる事業を、やゝかたくるしく再びせるに外ならず。益軒が同時代の人より不見識と嘲けられしも、其の理由はこゝにあり、蓋し益軒は着眼に異なる點はあれども、其の道中記といひ、又かな文の教訓書といひ、了意より學びし所少からず。了意が繪入にして戯作者ぶりにものしたるを、益軒は學者ぶりに翻したるなり、而して了意が此の先業あることは殆ど知るもの稀なり。

『堪忍記』の文

空也上人忍辱の行の事

むかし空也上人はれんぶつの大道心にてまひふかくおはしけりある時六はらの庵を出て京のかたへおはしけるに五條のはしをわたり給ひしをわき男共あそひて橋の上にあふかりこゝなる法師のなまめんだうさまよてやぶれたる馬のくつにて御かほをまたたかに打奉る又かたはらよりたゞ打たをしてふみに下れなご申けるをさかくにげのびてきて人にかたり給はく我ひごろたもちける忍辱の行をつぬにぞやうとゆせしこもまらざりしをたゞ今五條の橋のうへにて人にさんくうたれ侍りけれ共すこしもはらのたつ事なきにて此行をばぞやうとゆせりさ覺えたりさかたり給へりかゝるたうさま上人の御さかめもおはせぬをせひなく打奉るものは大悪人ならずや四十二章經に悪人の賢者を害するは猶天にあふきてつばきはくかこしつはき天をけかすかへつてをのれが身をけがすさいへり太公がいほく人をやぶるのこまば、かへつてはみづからやぶる血を

同書七去三従の説のうち

榮啓期が三樂の事

ふくみて人にふきかくればまづみづからの口をけがすさいへりたさへは火のこくうをやくがこまはらはされ共をのづからきゆるこれやくへき跡のなきかゆへ之我心を空にしてきかざるかこまみざるかこまくすればたゞいたつらにそしる人のくちひるこまたさのうこくはかりにしてつぬにそしりさじまるものこ

榮啓期が孔子にかたりける三樂の中におなし人間に生るゝ所男女のかはり有女は我身ながら身を人にまかせて我心のまゝならずすてに我は男に生れてよるつ心にまかする是ひさつのためしのみなりと申せしはいにしへも今も女はまこまにうれいのあつまるみなもこにあらずや

孝不孝の評判の事

母のさしわひくてやもめさなりうしろの園に家つくりて子にやしなはれてすみけるを堀をこえてかよふおつさあり子これを聞つけて其ほりに橋をかけてかよひやすからん事を思ひしには、ははつかしくて身をなけて死けり橋をかけし心さしかへつて不孝に我子これをしらは母はつかしからさらんやたゞまらざる跡にて有べしと評せられたり

又『本朝女鑑』は門を分ちて

賢明部 仁智部 節義部  
貞行部 辨通部 女式

の六部となし、上は玉だれのうちより下は柴の戸ぼそにいたるまで、本朝古今世に傳はりし烈女の行蹟を集めて訓誡を施し、婦女子の心をみがく鑑とす。

紅梅の女房 (辨通下の六)

後一でうのぬんの御さきに、ある女房のいゑにこうばいのありけるをきこしめしをよばれ、だいらよりさてほりにつかはし給ひけるに、かのむめにうくひすのすをわけて侍へりしかば、ある上の女房、まつかやうにそうし給へさて

ちよくなればいさもかしこしうぐひすのやまはさきはいかゝこたへん

かく、そうせさせれば、おほきにかんけうせさせ給ひて、ほらせられ侍へらす、女房はいかなるものぞこたつれさせ給ふ、さだかにもなのり申さす、たゞ世にありわぶるまづのめのはてなりと申ける、まこまはむらかみの御宇にあづまにながされし、うたいべんまきすがつまの世をわびてすみけるこ、きこえし

第五には名所記および職作なり、そもく了意が著述は職作をもてはじまりぬ。後世にほゞ其の作として傳はるもの、外に、なほあまたあるべし、ゆゑにまた何年頃より作りはじめしかを詳にせざれども、『棠陰比事物語』の如きを、了意などの假名文に直したりとすれば、慶安二年頃に板行のものあり、此の物語は文勢より推して或は了意の作ならんか、といふ考の外に證とすべき點なし。然れども如儻子が『可笑記』を評判したるは、寛永十四年（慶安の初より凡十年前）にあり、また『百八町記』の加筆は承應四年（慶安の後四五年）にあれば、既に慶安前後に著述あることは明なり。但し最も多く板行せられしは、万治寛文の間にして、これ了意が全盛の時期なり。

『可笑記評判』 十冊 (万治三年板)

これはたゞ『可笑記』の詞を更に敷衍し、或は誤れるを正し、著者の意見を評したるに過ぎざれども、如儻子と了意との別人なることを證する爲めに、前の『可笑記』の例に擧げたる一章の評

『本朝女鑑』挿繪(寛文)



判をこゝに示す。

評曰をよそ書籍を述作するにはみなその感ずるまゝあるによつておこるさいへりされば神農八卦を畫がき給ひしは河圖洛書を得給へるにおこり(中略)韓非は秦にさらはれて難言をつくりし類なり今の可笑記は螢惑星の出しこを聞つたへて書たるよしみえたりこのほしみゆれば文武の兩道めつきやくすべきよし曆書にありされども永祿二年にこのほし出たる事記録に見えずかゝる大事の天變ならば年代記にもかきのすべしすでに年代記にもなし若此星のみえたる事もあるべけれ共他國の天べんなる事もあるべし(中略)さればこそ永祿以來文武二道滅却したり共おほへす中ころより王道をさるへて武家より世をおさむる事又これ永祿以前頼朝の時よりの事なり云々

いやしきよりさりあがりて家老出頭になるもの人なみの人にはあらざる事目のまへにみえたりよき人の子なりさも愚鈍ならばいかせん次にこのへあがりの家老出頭のわざにて神佛二道をやぶりたりさいふ事つぬにいかなる大名の家にはありき聞つたへす隨分まわき大名たりき聞ゆるもその國の宮寺をば修理こんりうはま給ふなり新作邪惡の宗旨はんとやうまはもし吉利支丹の事歟この法御政道はその種をたちたりされば目にもみえぬ事をなに博士とやらんが口にかかせていひけることを聞つたへこれを愁難して可笑記をつくり背渠にあたへてよましむさいへりせがれがためにわらはるべきほどにはつかしからんことをば筆にはいかであらはし遣んもし又後生おそるべしこの故に卑下するまならば後生はさもあれまづ今の世にしゆる書なり今の世に對して名づくべき事也

『東海道名所記』

六册

(年月未詳)

も此の頃の板行なりといふ、こは治く世の知るところなれば費せず、同じ名所記にて

『江戸名所記』

七册

(寛文二年板)

『京 雀』

七册

(同 五年板)

等あり。前者は『東海道名所記』と同じ跡にて、二人の同行が江戸の名所を回るといふ趣向なり。後者はこれよりさき明曆四年板(万治元)の中川喜雲が『京わらべ』に倣ひ、其の泄れたる京都の町々、名所古跡の絶えたるまでを補ひたりといふ。されど喜雲の『京わらべ』の右に一步を出でざれば、これらは了意が間に合せの作るなべし。

『江戸名所記』の文

谷中清水稻荷

谷中通清水のいなりはむかし弘法大師御修行の時此所をまほり給ひしに大に喉かはき給ふ一人の廻あり水桶をいたゞき遠き所より水を汲てはこぶ大師このうばに水をこひ給ふ廻いたはしくおもひ奉りて水をまいらせていはくこの所更に水なしわが年きはまりて遠きころの水をこぶ事いさくるしきよしなかり申しけり又一人の子あり年ころわづらひふせりてうばかやしなひこもしく侍へるを歎きければ大師あはれみ給ひ獨鉢をもつて地をほり給へばたちまちに清水わき出たりしそのあぢはひ甘露のごまぐ夏はひや、かに冬は温也いかなる炎天にもかほくこまなし大師又みづからこの稻荷明神を勧請し給ひけりうばが子此水をもつて身をあらふに病すみやかにへたりそれよりこのかた此水にてあらふものはよくもろくやまひいへすさいふこまなしこの故に清水のいなりま申す又人の家たちつゞきてすなはちこゝを清水町ま名づく神木は杉なり千載集僧部有慶の歌に

いなり山まるしの杉のさしふりてみつのみやしる神さびにけり  
こよみしも時にさりてはおもひあはせらる

あらへたゞけがれにこる人こゝろまみづのいなり神のまにこ  
来てみればいなりのまみづ底澄てやごる月さへくまなかりけり

了意が名所記は、文章には潤色あれども、事實は傳聞を其の儘記したれば、右の一話の如きも寺の縁起などにやあらん、傳聞に架空の事あるは是非もなし、風俗人情は寛文時代を表し、記事も大略は後世の事實として見るべきもの多し。當時交通の開けざる時にあたりて、旅行者を益せしこと少からず。作者もまた自ら世人を助け導く志にて、著はしなれば、後世の名所圖會とは異なりて、教訓の意を含みしことは、處々に挿みたる狂歌にてもまらる、此の類の書にては、もとより『東海道名所記』は名作なり。

伽婢子

十三册

(寛文六年)

『伽婢子』は、支那小説『剪燈新話』中の幾條の譚を基礎として、他よりこれに似たる神仙奇怪の譚を輯む、然れども作者が大跡に於て『剪燈新話』を翻案したること其の序文に明なり。『剪燈新話』より取りたる條も、今嚴格にいふ譯譯にはあらず、國所姓名を我邦に直し、大意を酌みて省略字句に拘泥せず、かるが故に文もまた自在にして、趣味頗る深し。

眞紅の繫帶

『剪燈新話』中金鳳釵の譚なり、越前國敦賀に、濱田長八といふ有徳人ありて、二人の娘をもてり、其の隣家に檜垣平太といふ商人あり、一人の子を平次と名づく、長八が姉娘と許嫁の約あり、其のまるしに眞紅の繫帶ひとつ娘にとらせたり、然るに檜垣平次京都に上り五年が間歸らず、娘は十九の年、待こがれて病の床に臥し、つひにむなしくなりければ、小鹽といふ處の寺に埋み、母

は平次がつかはしける真紅の帯を黄泉までも見よかしとてむなしき娘が腰にむすびておくりける、三十日あまりの後、平次はやがて歸り來りぬ。

濱田夫婦なみだをながしていふやう、姉むすめは、そのころよりその御事を思ひあこがれ病をうけて去ぬる月の初めつた、つひにむなしくなり侍へり、久しくたよりのなかりつる事を、まごそ恨み思ひけむ、これ見給へ硯のふたに書をきたりさて、なく／＼さり出して平次にみせたり、その歌に

せめてやは香をたにほへむめのはなまらぬ山ちのおくにさくとも

平次これをみるに、我身のつらさ今さらと思ひまられてかなしき事かきりなし

かくて姉が執着心は彼の真紅の繫帯に纏はり、これより妹の上に移り、平次は毎夜妹と契りをかはし、が、此の妹と思ひしは姉の妄念にて、妹は此の間病の床に臥してまらず、遂に病人は亡姉が所爲なることを口ばしり、親の許しを蒙りて、平次と夫婦になるといふ筋なり。彼の牡丹灯籠と同じ趣向にて、ともに亡骸と契りを結ぶにあり。其の他龍宮上棟といひ、十津川の仙境といひ、すべて實際に有り得べからざる荒唐無稽の物語を集む。

『曾呂利狂歌話』 五册 (年月未詳)

『百物語』 二册 (万治二年版)

右二書は寛文頃の話し本にて、ともに狂歌に關する面白き逸話あり。後者は別に了意の作といふ證なければども、文勢殆ど前者と同じければこゝに附す。此の外明暦三年江戸大火の慘狀を記したるは

『武藏鑑』 二册 (万治四年版)

にて、又何時の事かを詳にせざれど、地震の記には、

『かなめ石』 三册 (年月未詳)

あり。

『安部晴明記』 七册 (同)

は、晴明が一代記四巻と「人相之巻」「日取之巻」「天文之巻」の三巻にして、占方の大略を記したる書なり。

『浮世物語』 六册 (延寶九年版)

は戯作として了意が作中の面白きものなり。如備子の『可笑記』、元隣の二作同様、材を世話に取り、隨筆の躰を脱して、やゝ小説の躰に近けり。これには主人公浮世房ありて、世の中の事に觸れ、悪しきことを諷諫する仕組にて、『東海道名所記』の樂阿彌、西鶴が『一代男』の世の助の如く、たとへ一編に連繫する方便に使ひたる人物たるにせよ、一進歩といはざるべからず。其の起筆に「浮世といふ事」を解釋していふ、

今はむかし國風の歌に、いな物ぢやこゝろはわれがものなれど、まゝにならぬはさ、たかきもいやしきも、おまこも女も老たるもわかきも、皆うたひ侍へる、思ふ事かなはれはこそ、うき世なれさいふ歌も侍へり、よろづにつけて、こゝろにかなはずまいにならねばこそ、浮世さはいふめれ、香をへだて、眼を掻きかや、痒きこゝろに手のさゝかぬこそ、あたるやうにして、ゆきたらす沈氣なものにて、我ながら身も心もわかまゝにならで、いな物なり、まして世の中の事ひきつも、わか

氣にかなふことなし、さればこそうき世なれといへば、いやその義理ではない、世にすめばなにはにつけて、よしあしを見  
きく事、みなおもしろく、一寸さきは闇なり、なんの絲瓜（ちまき）の皮思ひおきは、腹の痛當座（あたま）にやらして、月雪花紅葉にうち  
むかひ、歌をうたひ酒のみ浮（うき）にういて、なぐさみ手まへのすり切も、苦にならず、まづみいらぬ、こゝろだての水の流るゝ、  
瓢箪のごとくなる、これを浮世と名づくるなりといへるを、それ者は聞て、誠にそれ／＼とかんとり

蓋し「思ふことまゝならぬを憂き世」といへる詞の外に、うき世といふ事を説明したるにて、たと  
へ諧謔の意義たるにせよ、善悪共に明日をも定めがたきを、人々たゞ今日の事とのみ考へ、淫樂に  
耽りてうか／＼と暮らす状を浮世と名づけしに外ならず。これ後に起るべき、西鶴、其積等が寫  
す戯作の世界をいひ盡したるものにて、實に浮世草子の名の因める所といふべし。

浮世房とはうきにういたる瓢金なる法師にて、はじめは瓢太郎といひ、若き時は放蕩を盡し、或は  
博奕の仲間に入り、或は傾城買の樂に耽り、一たびは歩若黨ともなりしを、やがて他人と喧嘩し  
て牢入し、髪を剃りて浮世房と名乗り、侏儒となり、大名に仕へ、滑稽に托して君を諫め、世を諷  
す。其の容貌の醜きが如き、また諸大名を経めぐりて諷諫するが如き、『伊曾保物語』とほい趣向  
を同うせり。されども浮世房は伊曾保のまじめなるよりも、むしろ曾呂利新左衛門のおどけたる  
に似たり。

『あかうそ』

一冊

(元禄十六年版)

『あかうそ』は了意の遺稿にして、『月見の友』の追加に版行したりといふ。『月見の友』は一名を『犬

延寶九年板『浮世物語』挿繪



つれく」と稱して、著者を詳にせず、男女の身だしなみ、または世渡り家事などの心得を教訓したる隨筆なり。「わかうそ」は老莊の意を述べたる寓言二三編を収めたる小冊子なり。以上了意は近代の一大著述家にして、學は八宗を兼ね、和漢古今に通じ、和歌の道にも入り、殊に滑稽の才に長じ、狂歌をよくし、戯作の中に挿入せるもの少からず、然れども了意が特色殆どなく、一も自己娛樂の爲めに文字を弄せず、一意解義説明、教訓諷刺して、汲々として世人を導くに任ず、了意が著述の目的たる全く衆生濟度の意に出でたりとすれば、能く其の本願を遂げたりといはざるべからず。蓋し寛永以降如備子、正三、元隣など出で、一方には一休を祖述して、佛教の無常觀を説き、一方には兼好を學びて、老莊が虛無自然を唱ふ、了意はすべて現代の諸分子を併呑して、自家の立脚地となし、寛文に至りかな草子の大成をなし、其の解し易く面白き文章にて、最も多く讀者を有したればなり。もし彼の三子を川とすれば、了意は海の如し、但し漠然と廣きに亘り、一も自家の創見を認めず、これ又當代の學者を代表し、作者を代表するものといふべき歟。文章は漢文より脱出し、古文よりも『太平記』等の軍書に取り、迂曲を避けて、簡明を旨とす、森嚴莊大の趣致を缺きたりといへども、洒脱流暢にして、容易く得がたき能文家と稱すべし。

第三章 浮世草子

(天和より明和に至る凡八十年間)

前章にも述べたるが、寛文の假名草子一般に文學思想を普及するには力ありたれども、此の間には未だ創意に出でたる戯作なく、或は案を襲へし、或は文章を譯し、また一觀念を遊戯文字にあらはしたるに過ぎず、隨て文章もまた引例に見ゆるが如く、概ね此の頃の草子には、歌を挿み、解り易けれども侍ることばを用ひ、全く古き物語の躰にならひ、然らざれば漢文の語氣を帶び、はた法語問答の躰にならへるなど、當代を表すべき一様の文躰のなしといふも可なり。されど寛文の假名草子には、彼の王朝の物語が作者の地位につれて貴族臭味を帶び、宮中を代表せしが如く、當時の作者はおほむね侍のなれの果、または僧侶にありしかば、おの／＼其の階級を代表して、武家、佛者の好尚に適し、一般の社會をあらはさず。蓋し寛文は武家と僧侶の榮えたる割合に、平民は未だ振はず、かるが故に其を代表すべき文學を有せざりしも、延寶、天和に至りては、平民の勢力漸く加り、芝居流行り、遊里賑ひて其の状おのづから文學にあらはれ、戯作の特質も、文章も、一般の好尚に適するものとなりぬ。これ實に浮世草子にして、此の草子の發生地は、また當時最も町人の榮えたる大阪なりき。

浮世草子の名稱

浮世草子の特質は、古事、または怪異の物語ならぬ、當世の人情風俗を俗文もて綴れる戯作の總稱なり。そも／＼浮世草子の起原は如備子の『可笑記』、元隣が『誰が身の上』、『小さかつき』など兎も角も當世の事態に着眼したる、其の端緒を發きたるものといはざるべからず。了意の『浮世物語』に至りて、浮世の意義を説明し、浮世といふ文字の、狹斜の事情、漂客の痴態、さては今日の風俗を寫せる草子に被らすべき適當の題目とはなりぬ。されどこれ一編の標題に止り、未だ此の種の草子の總稱とはならず。其の何時より一般に唱へられしかは詳ならざれども、其頃の詞に、  
傾城色三味線、又は曲三味線、禁短氣の類のなぐさみの書、各々様の御意にいり八文字屋は是より浮世本、評判本の名取りのやうに罷りなり云々  
西鶴一流の戯作が、此頃既に浮世本にて通用せしことを知るべし。これより後に其鯛が『翁草』に  
八文字屋自笑が浮世双紙の編者に、江島屋其積といへるあり、よく世の情をのぶ、  
とありて、浮世双紙の目や、判然と定まりぬ。  
浮世草子は、既に『可笑記』に端を發きたれども、其の後明曆、万治の頃、女郎の名寄、延寶に至りては畠山箕山が『色道大鑑』等の諸材を集め、天和に至り井原西鶴が『好色一代男』となりて、はじめて元祿に榮ゆるに至れり、そは次なる井原西鶴の條に譲る。



### 井原西鶴

#### 其一 緒言

當代に至り、普くは知られざりし文人の廣く世に知られし、一二のみならず、西鶴の如きまた其の一人なり。然れども徳川時代には戯作者輕視せられしかば傳記の傳はれる甚だ尠し、隨うて西鶴が詳傳あるなく、たま／＼梅蘭堂、曲亭主人等が評論、及び其の他の記事にて、僅に其の一斑を窺ふに過ぎず。そも／＼西鶴はいかなる家に生れしか。彼の西鶴を紹介せし淡島寒月氏の説(？)に西鶴は俗稱を平太夫といへり、平太夫といふ名より推せば、或は浪人のなれの果などにやありけん、又聞にきぬ。果して然らんには思ひ當る節のなきにもあらず、『好色二代男』にいはいく

二本道具の大名も此の身變る事なし、先手はいく／＼と聲かけれども、天下町人の氣儘は足早にも除けず。

と。其の語氣、今は町人になり下りたれども、もとは是れでも武士なりといふに似て、天下町人の氣儘といへるうちには無限の不平、否、負惜しみの見えて素性志のばるるなり。さはいへ馬琴が『燕石雜志』には「年來久しく大阪鎗屋町に住けり」とあれば、永く市井の間に住まひしうち、ちのづから町人の風に染み、いつしか却りて其の社會の加擔人となり、

町人の未々まで脇指さしふ物さしけるによりて、言分喧嘩もなく治りぬ、世に武士の外又物さすことならずば、小兵なる者は大男の力の強きに、何時までも颯然もものなるべき、一腰恐ろしく人に心をおくによりて、いかなる闇の夜も獨り通

#### るぞかし(好色一代女)

など時めける武士の跋扈を憤りては、彼等町人の爲に氣焔を吐き、さて一方には貧弱のものに同情を表して、乞食までを憫み、

相の山の袖乞までも心長く道者の機嫌をさりて飢す寒からず、身に絹布を飾り、連引の三味線に乗せて淺ましや心ひきつゝいふ一節、いつ聞てもかはらず、此一里のうち殊さらに慰にもなれり、世に錢ほごおもしろき物はなし、あまたの講參りはあれども遂に此乞食のたんのうする程錢さらせし人なし、思へばわづかのこゝなるによる、こぼせたきものなり(日本永代藏)

一步違へば武士なればとて用舎はなきぞ、と脇差の柄に手をかけ、又或時は小兒も慣れやすき程の温顔慈容は、此の法師のもちまへ、思ふに彼れが任俠の性は、武士の牛後に列せんよりはむしろ町人の雞口に身をまきて、一世を諷弄せしものか。これ當代下流の人情に適ひし所以なるべし。つら／＼西鶴が生れたる大坂當時の状況を考ふるに、三府の中此の府ほど町人の勢力を得たりしはなし。蓋し江戸は幕府の直管せし所なれば、武士の勢力は天下に冠たり。殊に元祿は武威盛なる頃なれば、此の府の町人は未だ充分に肩身廣からず、さてまた京都は王城、輦轂の下にして、所司代が意を用ひて政を施したる所なれば、こゝにも町人は頭を擡ぐること能はざりき。然るにひとり大坂には特別の事情あり、こゝには上より壓制を逞うする程の大頭なく、殊に豊臣氏の遺民を慰撫すべき手加減もありたるべければ、城代はあれども、彼等は封建時代の國主といはんよ

りはむしろ保護者ともいふべき地位に立てり。さればこれが支配の下にある町人は自然と伸び上り、縦令今日いふ自由は得ざりしも、生活の自由ほどを得たること此の府民に如くものなく、大威張にて豪遊奢侈を競ひ、やゝもすれば武士を凌ぐの氣風ありき。まことに專政時代には稀なる自由郷なりしかば、西鶴が不羈奔放の氣象は、此の空氣に養はれてますます粗豪になり、

世の中に巾着切も腹の中からのそれ者にもあらず、百菊作るによつて花變つて咲出づる、平野の上人に備はれば、里人其まゝ有難し、公家も裝束無しには、膏藥賣の顔の白いものなり、一切の人間其職に移せばうつるものぞかし(『二代男』)

など、上下貴賤の階級を蔑視して、人間を平等に見做したるは、當時の大坂思想を代表したるものなり。もとより何故に此の世の中に階級といふもの存するか、何故に武士ひとり尊く、町人其の他は卑しきか、そこらに深き考ありて然りしにはあらざらめど、唯漠然と其の理由なきを疑ひ、

諸大名にはいかなる種を前生に蒔給へる、こゝにぞ有ける、万事の自由を見しときは、目前の佛さいふてまた外なし、されば

こゝ世に大名の御知行、百貳拾万石を五百石より釋迦如來入滅此のつたいまに永々勘定したて見るに、これを取つくと

いへり、(『永代藏』)

など、武士の祖先が鎗一筋の功名の、いかに永久無限に續くべきかを驚歎したる、やゝ社會主義の傾向あり、これを貴族の特權に對してはじめて鼎の輕重を試みし聲といふべく、幾分か平民主義の發達をも認むべし。然れども因襲の久しき、まかも元祿の樂天主義の眞中に、彼の紳士といふ

ものがアダム、イヴの當時にもありしかと問ふやうな極端論者の生るべき理由なければ、時勢と共に此の主義は泣寝入となりて、彼れ西鶴も此の疑問を解く能はず、已むを得ず自然の人徳に販して、更に前の言葉をつゞけ、「大人小人の違ひ各別世界は廣し」と結びたる、流石に時代の見なから不思議の力あり、賤しけれども町人は町人の境遇に満足するより外なしと、敢て非望を懐かざりしは、これ西鶴の悟道なるべく、堅くいはいへば平等のうち差別を認めたるがゆるなるべし。平等にして差別あり、凡て物の極端に走せざるは西鶴が本來の主義なり。更に西鶴が日常の生活に對する意見を探るに、また此の主義の實行に外ならず。これを正風の頭陀袋主義に比すれば兩者の差著きを見るべし。彼の其角が深川の住居は、僅に八疊敷一間にて、壁に九穴を明けて出山の釋迦を安置し、鍋一つ、炮烙一つの外何もなく、嵐雪も爰に同居したれば、破笠もまた爰に同居して俗世間を離れ唯風流を樂みきと聞けども、西鶴は然らず、「元祿太平記」の傳ふる所によれば、大坂鹽町の住、木戸玄角といふ婦人醫者坊と同じく大盡の巾着に付添ひしこともあつたらし。尤も同書は西鶴を酷評したるものなれば、悉くはアテにならぬども、西鶴が例の高踏超絶流にあらざりて純然たる俗人たりしことほゞ明白、彼れまた自ら風流に居らず、「人の家にありたきは、梅櫻松楓それよりは金銀米錢ぞかし」(『永代藏』)などいへり。これ誰れもいひ破らんとしていふ能はざる所、外見に清貧を粧ひて、内心利己を營むが如きは、西鶴の罪人なり。彼れは公然と花

よりも團子主義を唱へたるものにて、其の理想的生活といふべきを同書に示して、

總べて三人口までを身過さばいはぬなり、五人より世をわたるさはいふことなり、下人一人もつかはぬ人は世帯持さは申さぬなり、旦那さいふものもなく朝夕も通ひ盆なしに手から手にこりて女房もりてくふなごいかに腹ふくるればさて口惜しきことぞかし。

といへり。蓋し正風の重ずる所は精神の樂にあれども、西鶴の眼は肉躰の樂なしに精神の樂あるを許さず、肉躰安樂にしてはじめて精神安しと觀たるなり。これ西鶴が着眼芭蕉の高潔なる觀念に達せざる所にして檀林派の特質、むしろ元祿時代の大坂思想を代表し、天下の事何でも金々、金の自由にならざるものなしといふ實際的觀察の表白なり。とはいへ西鶴は極端嫌ひなり、金銀米錢ばかりにては此の社會の命脈を繋ぎ得べしとは思はぬなり、曰はく、

銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有、それより外はなかりき、是にましたる寶船の有べきや。

と。且五常の道の人間に欠くべからざることを説き、語を續けて、

見ぬ島の鬼の持し隠れ笠かくれ蓑も暴雨の役に立れば、手違されがひを捨て近道にそれんぐの家職を上げむべし、福徳は其身の堅固に有、朝夕油断する事なけれ、殊更世の仁義を本として神佛をまつるべし、是和國の風俗なり。

などといふ。其の語意を強めて、道德の重すべきこと、職業の輕ずべからざることを教へたるは、町人の隱居でもいひさうなる普通の言ながら、然り、西鶴の主義は此の平凡普通の所にあり、物の中心を外れざるにあり、何事も程のよきにあり。夫れ中心を外れず、万事に程のよきは、平等の差別をかねたる形なり、是れ西鶴が理想なり。言葉はやゝ野卑にして戯れたれど、次の數言はよ

く西鶴が此の主義をいひ表はしたるものといふべし。

總べて出過ぎたる事によき物はなし、源助が額も、まんが尻つきも寶物でなければ、同くは人並がよし、大盡も内端なること奥床し(二代男)

其積は西鶴を粹法師といへり。粹なる語にはいかなる意味あるか、嚴格には説きがたきも、万事に程のよきを粹の要訣とするは誰れも異論なかるべし。強きを挫き弱きを憫む、これ粹なり、尊きに媚びず高きに諂はぬ、これもまた粹ならば、賤きに誇らず低きに慢らず、これもまた粹なるべし。能く稼ぎ、能く儲け、能く使ふものも粹、義理を辨へ、人情を知る、いづれか粹の道ならざる。蓋し粹とは人間の最も程のよき極點の總名と釋すべし。

予は粹の教によりて豪傑を作り學者を作るとは信ぜず、然れども封建時代の町人が則るにはこれ頗る恰好の教なり。やゝ其の弊に陥りたる傾向なきにあらぬども、西鶴が半生の説法は、實に此の粹道の奥義を説きたるに外ならず。まことに西鶴は粹教の開山、當時の町人は概ね其の信徒なりき。これ西鶴が最もよく當代の町人を代表し、而して彼等の最も榮えたる元祿の大坂に於て、町人を代表したる文學、即ち浮世草紙をはじめたる所以なり。

其二 傳

西鶴は寛永十九壬午年に生る。幼き時のことは知れず、『元祿太平記』に西鶴が「某幼少より諷を好で和板に普き謠本、五尺手拭をはじめ、兼好塚まで空に覺え候」といへるは假作なるべけれど

も、さもあるべしと思はる。假名草子、俗謠、院本、さては古文雅言の物語類、皆好みて讀みしなるべし。『俳家奇人談』が「國學を以て鳴る」といへるは、もとより間違なれど、『元祿太平記』、『燕石雜志』等が目に一丁字なき無學文盲と罵るも所謂商賈忌敵の傾向ありて正鵠を外れたる言なり。そも「我が邦に是迄學者と稱せられしものは、換言すれば物知りといふことにて、活きた字引、本箱等の綽號は彼等が甘受せし所なりき。されば曲亭馬琴も此の班に列せんとて、詩人の天職を卑んで隨筆に力を用ひたることあり。西鶴は此の目安から割出せば、學者といふ資格なし。彼れはあまたの和漢文を讀みしに疑ひなし、然れども其の大意を得て、己れが豊富なる思想を發表する媒介となしたるに外ならじ。されど彼れが我が古文に通せしとは、其の浮世草紙が概ね古文に胚胎せるによりて知らる（此の事後章にあり）。尤も『元祿太平記』の言の如く、彼れはいのこづらと午膝との同物異名なることを辨へず、曾子の詞を孟子の語に附會し、『枕草子』の文を『源氏物語』の句と思ひ誤りしが如き、定めし多からん。また彼れはてにはを逃れ、假名使を誤り、破格、無法、成程無頓着なりしには相違なきも、神來一過、興浮んで止まざる時は、筆の先に觸れてつかまらぬものもなし。『憂がちなる秋の夕、横堀に流る、塵埃をば西鶴が目には錦と見まがひ、春の朝茶臼山の櫻を見ては雲と望む』、これ西鶴が獨得の技倆なり。彼れを學者といふも誤なれば、彼れを無學といふも誤なり。彼れは學者にもあらず、無學にもあらず、其の天職はちのつから別になり、蓋し西鶴は一詩人なるのみ。

西鶴は梅翁西山宗因の門下にして難波俳林の一人なり、一日住吉の社頭にて、獨吟二万三千句を吐きしにより、二萬堂また二萬翁とも稱する由『俳奇人談』に見えたり。幸田露伴氏の西鶴論（『國民之友』第八十三號）、當時の景況を叙して、

一日に恐ろしき多數の俳句を吐きて世を驚せしに、紀子といふ者あらはれて尙それより多くの句を吐きて西鶴を凌ぎたり、此の時恐らくは西鶴勃然として負下魂を振り起せしを見て再度の興行には句數愈々多く遙に紀子に超ゆ、集めて書きなしたる、其文を見るに毫氣横溢讀むに辟易す。

と云へる、盡くしたり。

松壽軒と號し、鶴永また西鵬ともいへり。

因に記す、西鵬の名はいつの頃にか、將軍家の姫に鶴の名の差合ありて其の間鵬と改めきとぞ。

また一書に初號鶴永、既に西鵬と改むと見えたり、二説とも未だ其の出所を確めず、按ずるに貞享四年板の『武道傳來記』、『武家義理物語』等に鶴永の名あり、其の翌年（元祿元年）板の『新可笑記』同四年板の『俳諧石車』等に西鵬の名あり、依て貞享と元祿の境を鶴永西鵬の時代を分つべき年とするか、また元祿は概ね西鵬改名の時代とするか、然るに『男色大鑑』は貞享四年板、『一目玉鉢』は元祿二年板にて共に西鵬の名を刻せり、されば是等の號は便宜によりて並び稱せしものと見て可ならん、但し世間には西鶴の名あるを知つて他の名を知るは稀なりとぞ。

西鶴が浮世草紙のうち既に湮滅して今日に傳はらざるもあるべけれど、世に知られたる限りにては天和二年板の『好色一代男』を初筆とす。此の時西鶴は既に四十二歳、是れまでは單に俳諧師として世に知られき。延寶七年板の（天和より二年前）『難波鶴』に「俳諧點者鎌屋町井原西鶴」と

あり、俳諧師としての地位は、饗庭篁村翁が「俳諧一斑」(『國民之友』第九十一號)によりて窺はる。祖師妙智方ありといへども更に英邁なる弟子なければ其法弘通せず宗因浪華に一族を立て京江戸の貞徳流を、戦ふうちに左右の翼を頼むべき弟子を得て宗因派つひに大勝利を得たり一を井原西鶴とし一を椎本才麿とす一は富瞻の文才を以てし一は淡泊なれど氣韻あり才麿江戸に下れば西鶴浪華の本城を守り西鶴奥州に入れば才麿代つて同門を率ひます一宗派を弘めける。

西鶴が宗因門下一方の將として勢力ありしこと斯の如し。其の名の噴々たりしはたま／＼敵を作る媒介となりしか、當時は俳壇の紛争烈しき時なりしかば、「俳諧破邪顯正」(延寶七年板)には「阿蘭陀西鶴」と罵られて此の道の異端邪宗と目せられき。蓋し檀林風の俳句は豪放を轉となし、かば一方には悦ばれず、殊に西鶴が縦横の才を弄びて、傍若無人の振舞は彼等反對者の嫉妬を高めしや知るべし。西鶴が「後の大矢敷」(延寶七年板)の跋に「世を擧げて群雀噪々」と書きたりしは思ふに敵が賣言葉に對する買言葉の返報なるべし。當時此の紛争の衝に當りて屈せず、彼れも此の道の勇將なりけり。

斯く俳壇多事の時に當り、此の勇將が俄然旗幟を卷いて檀林を退き、筆鋒を他に轉じて浮世草紙の開山となりたるはいかに。接するに師の宗因が世を辭せしこと主なる原因なるべし。そも／＼宗因は寛永より天和の間、凡そ五十年間、俳壇の權を握りたりし覇者なりしが、天和二年三月廿八日、七十八歳を一期として大坂に身まかりしかば(「俳諧一斑」檀林其の主を失ひて孤城落日、

西鶴が活眼また既に俳壇の權の正風に飯することを知らるものから、師匠存命のうちこそ將に覆らんとする大厦を支へたれ、今や大勢の向ふ所如何ともすべからざるを覺り、師の永眠を機として之れを他に譲り、自らは浮世草紙に筆を染めて、不知不識俗文學の開山となりしなるべし。蓋し浮世草紙の初筆、「一代男」の巻末に「天和二年神無月」の文字あるを見れば、師の翁が今年三月に身まかりし後着筆せしことまるけく、且從來専ら俳道に力を用ひしことも窺はれ、師弟の間の交情深かりしことも窺はる。吉備運月空阿が著「俳諧水滸傳」はもとより事實としては採るべからざるも、西鶴が宗因に事へて檀林の爲に力を盡くし、こと、師翁また西鶴を重任して、檀林を維持せしこと等、能く當時の有様を寫したり、次の一節また其の中にあり。

宗因北に檀林を築きて洒落の變風を世上に布んま欲して數輩の將集るといへども未だ俳風一統の治を得ざる中に其師早古禱に過ぎて且暮も危ふくおもはざるなし西鶴まばらく柄を執るに似たれども彼は其才双紙雜話の文章に長けて梅翁没後の主に堪へず。

西鶴が經歷の前半期は俳諧師として世に立ち、年四十二歳に及びて天和二年なり。予は一進を歩めて是れより浮世草紙の作家たる西鶴を叙すべし。

其三 俗文學の發達

俗文學の發達は其の由來する所多岐なるべしといへども、就中主なる理由と思はるゝは、饗庭篁村翁の説か、曰はくそも／＼俗文學の大坂に發生したる由來は、足利氏の末に當たり、山名細川等兵

を構へて應仁の亂となり、さしも久しく風雅の中心たりし京師も荒廢し、打續ける争鬪に、公家殿上人も詩歌文章を賞翫して風流を樂む餘裕なきに至り、果は一身をだに安んずること難く、おの無事の地を擇びて命を寄せんとせし折柄、當時周防國山口は大内氏の居城にして、其の威武山陽を靡かせ、京師の争亂にひきかへて此の國のみは荒き浪風もなく、おのづからなる安樂の別天地、こゝに便を求めて京師より逃れ來し公家のうちには歌人文客も少からず、かくして山口は漸次學者文人の淵藪となり、譬へば京師を以て風雅の本店とすれば、山口はさながら支店の如く、まかも本店よりは支店の方榮えて、文學藝術ひとり山口に盛なりき。こゝにまた泉州堺の港といふは、京師と山口との中間に位し、商賣繁盛の要區なりしかば、京師より山口に行かんとするもの、是非とも此の港に立寄りざるを得ず、兩地往復の頻繁より自然と堺の町人は山口に親み、こゝを上花主となし、兎角して彼等は其の頃山口に流寓する公家にも昵近し、商業を營む傍ら、學ぶどにはあざざるも、見聞は彼等に文學美術の思想を傳へ、或意味にていへば、堺の町人は往々に物品を齎らして、販るに富と風雅の道との二寶物を天秤に擔<sup>かた</sup>げて販るの觀ありき。蓋し連歌の如き茶道の如き、從來は高貴の人へのみ賞翫せられしものが、此の頃より堺にては、はじめて町人の間に流行せり。これはた山口にて風流思想を養はれたりし結果に外ならず云々。

茶道のことは今こゝに要なければいはず、其の時はじめて民間に流行せし連歌こそは俗文學の種子なりけれ。風雅の道一たび公家の手より町人の手に渡れば、衣冠束帶の様を變へて、前垂掛商

人の風にならざるを得ず、優美の形は洒落の姿と改まり、高尚の躰は平易に改まり、雅は俗と其の好尚の一變するは自然の勢なり、此の頃武家高貴の間に賞翫せられしは連歌のみにあらず、和歌ももとより行はれたり、されど堺の町人は公家より直接に文學趣味を吹込まれながら、比較的優美、高尚、雅趣に富める和歌を探らで、やゝ卑近なる、まかも平易にして可笑味の分子多き連歌を探り、かくて縉紳の裝束を一重脱ぎ次第に俗に近づきたり。

かくて時改まり星移りて豊太閤の天下を一定し、大坂に城を築きしや、堺の町人を移して之れが市民となしぬ、やがて大坂は般富の都會となり、俗文學の種子も堺の町人と共に移し植ゑられ、其の後天下は徳川氏の手に飯せしも、大坂は依然たる大坂にて相も變らず卑近なる文學思想は其の間に養はれ、連歌は再び形を變へて俳諧となりぬ。この變遷の時期に遭遇し、俳諧を興隆せしめんと努めたるは、實に西山宗因なり。さて大坂は俳諧の中心となり、寛永より凡そ五十年天和に至るまで、其の全盛を極めたり、これ檀林時代なり。是に於て貴族的文學は更に一層下移し、平民的文學の地盤と並行せり。蓋し和歌より連歌、連歌より俳諧と種類を替へ、公家より町人、堺より大坂と、斯く人と處とを替へて、天和二年に至り、西山宗因の門下なる俳諧師の手より浮世草紙といふもの生れて、平民主義の俗文學發達しぬ。而して寛文にありては古文註釋の結果として、『徒然草』より『可笑記』を生みしが、『源氏物語』は大部なる爲めに註釋後れ、『湖月抄』の如き漸く延寶に出で其の結果は浮世草紙の初筆『好色一代男』にあらはれたり。蓋し『好色一代

男』は『源氏物語』の翻案なればなり。

#### 其四 浮世草紙

西鶴が浮世草紙を著し、は西山宗因の没年と期を同うしたれども、其の思ひ付は必ずや是れより以前にありしなるべし。蓋し流石に好色本となれば、師の翁存命のうちには遠慮して世に公にせざりしか。兎に角當時の流行は彼れが好事を驅りて筆を著けしめたるならん。當時の品位ある俳諧師は謝義など取らざりきと聞えたれば、如何にかして生計を支ふる必要ありて、西鶴の多才なる其の邊に脱なく、今日には傳はらざる一種の本の流行を機として、好色本を著し、後半年には少くとも著作料にて米糧を賑せしなるべし。『元祿太平記』に西鶴が池野屋二郎右衛門より『好色浮世躍』といふ草紙の前金として、三百兩を借り入れ、此の約束をのびくにして果たさざりし間に、身まかり、池野屋は三百兩の損をなし、やう記せり。此の頃の金にて三百兩の原稿料は高きに似たれど、それは事實を潤色したるものとも見るべし、かゝる例はいくらも有りげなる事柄なれば、無下には虚談として排斥しがたし。これはなほ後年の事なれども彼是思ひ合すべきことなれば、またはじめのうちの著作殊に好色本には西鶴の名を記さず、多く序文も掲げざる、一證にこそ。またはじめのうちの著作殊に好色本には西鶴の名を記さず、多く序文も掲げざる、一證なり。所詮金の爲にはじめは匿名にて是等の書を著したるや疑ふべからず。然れども、彼れが天稟の才は遂に彼れをして囊中の錐たらしめ、覆面も被りおぼせず、西鶴の名は好色本と共に高く、後には之れを濫用して西鶴の名を冠せたる偽書の出づるまでに全盛を極めたり。『元祿太平記』の

いへるが如く「誠に西鶴こそわけの聖なりける」。

#### 『好色一代男』(八冊、天和二年)

西鶴本は寛永以來流行したる假名草子と躰裁を同うす、挿畫は詩繪師源三郎の筆、其の名見えざれど、多くは此の人の畫なりと『浮世繪類考』に見えたり。詩繪師源三郎は元祿の頃盛に行はれ、人倫訓蒙圖彙(元祿三年)などにも此の人の畫きしもの掛からず。

されども西鶴本の中には菱川師宣が畫きしものありと聞きぬ。師宣は土佐の畫風を好み、浮世又兵衛が筆意を學びて一家をなしたる近世浮世繪の妙手、浮世板下畫の始祖なり、天和、貞享の頃を盛時として江戸村松町二丁目に住へりきとぞ(『浮世繪類考』)。此の人の畫きし本あまたあれども煩はしければ省く。『一代男』は西鶴はじめの作にて未だ万事に巧者ならざりきと見え、板下畫の字躰には似ず文字頗る雅致あり、門人などが筆耕せしものなるべしといふ。他の作に比して挿畫は一段の出來榮あり、もし師宣が畫きしものありとすれば是等をやいふならん。馬琴がいへる如く「滑稽を盡すことは西鶴よりはじまれり」、『一代男』の特質は實に可笑的であり。而して此の挿繪本文の特質を表して輕妙洒脫、眞に凡手ならざるを知るべし。

さて『一代男』が『源氏物語』の翻案なることを示さんに、好色の文字は『源氏物語』の好色事、好色心などより來たれると明なり。また其の趣向をいへば、許多の小話を串貫して一編をなすは彼れも此れも相同じく、其の申なる主人公、彼れは源氏の君にして、此れは世の介、共に一編を

繫ぐ大綱なり。

西鶴の文の古文より脱化したる證は、雅致ありて敬語に富むと難解の句多きとにあり。

女めいわくながら、さもかくも云捨て、只何こゝろもなく、みだれし鳥羽玉の夜の髪は、たれかみるべくも、はしたなく、つかみさがして、つれの姿なりしに、かの足音してまのぶ、女是非なく、御こゝろにかなふやうにもてなし、其後小箱をさがし、芥人形おきあがり、雲雀笛を取そるえ、これく大事の物ながら、さまになに惜しかるべし、御なぐさみに、たてまつるこ、是にてたらせども、うれしさうなるけしきもなく(下略)

自笑其積の文を讀みて西鶴の文を合味せば、是等の句調が純然たる俗文にあらざるを知らん。また『源氏』の文を味ひて更に西鶴の文を讀まば野卑なる事柄を寫しながら雅致風趣掬すべきものあるを知らん。西鶴の文の難解を俳諧の調にて當代の俗語を綴りたるに歸するものあり、これも一理由なるべし、然れども予は古文(但し隨筆體にあらざり物語體)の痕跡の未だ充分に拭ひ去られざるに歸せずんばならず。此の難解の所、雅俗半熱の所に西鶴文の妙味は勿論あり。

また『一代男』と『源氏物語』との間に事件の相似たる點を擧ぐれば、其の三の卷「口舌の事ふれ」にて世の介が人の女を戀ひて不義を仕掛けたるは『源氏物語』の「空蟬」の條と符合し、四の卷「因果の關守」以下の二三章は「夕顔」の卷に髣髴たる所あり。前後こそ異なれ、「夢の太刀風」は源氏が何がしの院にて變怪に出逢ふところ、「形見の水櫛」は夕顔が物の怪に覺はれて身まかりし所に似たり。源氏が夕顔の死骸を見やりて、

恐しきけもおほえず、いさらうたげなるさまして、未だ聊かはりたる所なし、手を捕へて我に今一度聲をだに聞かせ給へ、いかなる前世の契にかありけん、普しの程に心を盡して、哀におぼえしを、うち捨てて感はし給ふがみつき事と、聲も惜まず泣給ふこと限なし、(中略)右近は泣惑ひて、煙にたひぐひて慕ひ参りなんといふ。道理なれど、さなん世の中はある、別といふもの、悲しからぬはなし、さあるもかゝるも、同命の限あるものになんある、思ひ慰めて、われをたのめこの給ひ、しらへても、かくいふ身こそ生き留るまどき心地すれ、この給ふものもしげなしや。

『一代男』にては世の介が牢にて契りし女とかけあちの途中、其の女を奪はれ、生死の程も覺束なく、とある墓場を通りかゝりし時、埋めたる棺桶を掘起す人あるに驚き、近づきてみれば死人は正しく

我尋ぬる女、これはさまがみつき、かゝるうきめにあふ事、いかなる因果のまはりけるぞ、其時連れてのかすば、さもなきを、これ皆我なす業と、泪にくれて身もだへする、不思議や此女、雨の眼をみひらき、笑ひ顔して問もなく、又本の如く成ぬ、二十九までの一期、何おもひ殘さずと自害するを、二人の者、いろく押さめぬる。

とあり。其の趣こそ異なれ、二人とも死したる女の生々したる儚を見るが如き、悲哀に堪へかね、共に死なんど取亂したるが如き、作者の着想兩者同一轍なり。紫式部と西鶴とはまた申合せたるが如く寫實派の作家にして共に怪力亂神を語らず、一は平安朝時代一は元祿時代の人情風俗を有の儘に寫したる技倆の相同じきは西鶴をして式部の作を譏案するによく適せしめたり。『源氏物語』は五十四帖の大部『一代男』は僅に五冊なれば、之れを以て完全なる譏案とはいひがたきも、もと譏案の主意は換骨脱胎にあれば、『源氏物語』の趣向の如く、其の筋に變化なく、多くの話を集めた



る作は、一部を採るも全部を採るも同じ道理なり。而して唯『一代男』をのみ『源氏物語』の雛案とすれば、やゝ物足らぬ心地すれど、『二代男』、『三代男』など、西鶴が主なる作は皆同じ趣向の木匠のうちにもせられたるが故に、此の數部を合すれば、『源氏物語』五十四帖の大冊に匹敵すべし。『三代男』の卷末に「六十二帖の物語寫し終れば障子外にうかみし有様自ら消へて一物もなし」と結びたる作者の意もこゝにありしが如し。况や『一代女』もまた趣向は更に新しき事を見ざるをや。もし西鶴の作を小説の形より論ずれば實に『源氏物語』のたゞ摸倣たるに過ぎず。さて源語と西鶴の作との異なる點は、『源氏物語』の優美なる特質は、これにては滑稽となり、高雅は卑近となりておのゝく寫す所の社會の特質に適へり。蓋し『源氏物語』の上品なるは上流社會を寫したるに因り、『一代男』の下品なるは下流社會を寫したるに因り、未だ作者の着眼の異なるにはあらず。西鶴と式部とを同性質の人とはいふべからざるも共に事物の有の儘を寫す才同じければ、もし兩作家地を替へなば、或は西鶴は『源氏物語』を作り、式部『一代男』をものせんか知るべからず。もし又世の介を殿上に生れしめば、光源氏なるべく、光源氏を民間に下らしめば世の介なるべし。世の介が榮花は光源氏の樂と異ならねば、光源氏の好色心は世の介の蕩心と優劣あるなし、美女三千雲の上の遊興も、花の街の戯れも、虚心に見れば同じことなり。畢竟『一代男』は下流社會の『源氏物語』、『源氏物語』は上流の『一代男』なり。斯の如く『源氏物語』は『好色一代男』に雛案せられて、貴族專有の王朝文學は、元祿に至りて西鶴の手によりて、平民の所

有とはなされたり。西鶴が俗文學上の地位は紫式部が有する雅文學上の地位と異なる所なし、共に文學史に特筆すべき功績といふべし。

## 『好色二代男』

(八冊、貞享元年)

『一代男』を天和二年に出だし、より三年目に此の著あり、此頃未だ多くの作なかりしを證すべし。然るに貞享三年にはあまたの草紙の一時に出板せらるゝに至りぬ。今年年板と目せらるゝものを擧ぐれば、

『好色三代男』(五冊)、『好色一代女』(六冊)、『好色五人女』(一名『當世女容氣』五冊)、『本朝二十不孝』(一名『新因果物語』五冊)等四部ありて、ことごとく名作なり、就中『好色一代女』は傑作と稱すべし。是等の名作の一時に出でしは『一代、二代男』が甚しく世間の嗜好に投じ、好色本の大流行を來たし、景況を察すべし。然るに表題の頗る白地あかちよなるより當局者の注意を引き、風俗を亂すの恐れあるものと認められ、是等の書の幾分かはさし止められきといふ。(年月未詳)されど當時の禁令は所謂三日法度とて、一二年も経ち、表題さへ改むればまた舊もとの本を發賣するも差支なかりきと聞けば、『二十不孝』の『新因果物語』、『五人女』の『女容氣』も此の理由によりて改題せられしものなるべし。

『好色一代女』此書は西鶴本の心髓ともいふべき名作なれども、翻刻本の久しく行はれたる(今は禁ぜられたれど)世に筋書を語るも用なし。こゝに聊か作家の此の書に對する注意を述べれば、

こはひとり後世人が西鶴の傑作と見るのみならず、西鶴自らも頗る得意の作として殊に念を入れたるやに思はるゝ節あり。本の躰裁は紺表紙美濃板にて、繪は詩繪師源三郎の筆、且此の本には珍らしくも別に貼付表紙あり（たゞし此の本のみと思へるは見聞の狭き故かも未れず）今は紙も半は磨滅して文字見るべからず、巻の四僅に讀まるゝものを記さんに、

同ト女にうまれながら

人のたはふれ聞耳立るも

よしなき世や

糸による戀

物ぬい女

□□の袖口

明暮むれのもゆるは

ふトさいへる茶の間

ちぎりの中通の女半季に

六十目の金のわかれ

などあり。總じて本の躰裁頗る古雅、物語本の製に倣へるや明なり、此の出版は西鶴の全盛時代、好色本流行の頂上を代表せりとおぼし。

翌貞享四年には『男色大鑑』（一名『本朝若風俗』八冊）、『武道傳來記』（八冊）、『武家義理物語』（六

冊）『懷視』（五冊）同年の出版あり。當年の諸作はおもに武張つたる表題なり。按ずるに好色本のさし止められしは此の前年なれば、「ナニ好色本賣ることが出来ぬとや、女のこと甘たる」といふなら、若衆念友のことかくべし」など、例の負る嫌ひの西鶴『男色大鑑』と題してまた此の道の粹を集めしものか。其の序文を見るに

日本紀愚眼に眺げば、天地は下めてなれる時一の物なれり、形葦芽の如し、是則神さなる、國常立尊さまをす、それより三代は陽の道ひさりなして衆道の根元を顯はせり、天神四代よりして陰陽みだりに交りて男女の神いでき給ひ、なんぞ下髪さげかみのむかし、當流の投鳥田、梅花の油くさき浮世風に撓へる柳の腰、紅の湯具、あたら眼を汚しぬ、是等は美少人のなき國の事欠ことけ、隱居の親仁の詠びのたぐひなるべし、血氣壯の時詞を交はすべきものにもあらず、總て若道の有難き門に入る事おそし。

貞享四年龍集丁卯臘日

四 鶴

予が推測の如くならんには、此の序文は多少當局者を譏刺せるもの、如し。西鶴が浮世草紙の質晩年に至り一變し、教訓を主とせりといふは、好色本の著なかりし故、表面を觀ての臆斷ならん。兎に角好色本の禁止ありしは改題せし事實にて明なるが上に、今年作の上に此の變化を見るます、其の事實を確むるに足れり。以後年々一二部づゝの著述あれども、最早彼れが天才は法の爲に束縛せられて充分驥足を伸す能はず、漸く『日本永代藏』等片々の小話を集めて一編の趣向すら立てず、『永代藏』は同五年の出版にて六冊なり。同年板に『色里三所世帯』と題する好色本あり、西鶴の作と稱す、此の年元祿と改元あり。

『永代藏』と同年の出板なれども元禄元年とあるは『新可笑記』(五冊半紙本)なり。  
 元禄二年には『本朝櫻陰比事』(五冊)『一目玉鉾』(一名『西鶴回國道之記』(四冊)著あり、『櫻陰比事』  
 は『棠陰比事』の翻案、板倉公平裁許を面白く綴りたり他の作に比すれば文章波瀾なくや、見劣り  
 せらるゝにより、或は西鶴の作にあらじと疑ふ、然れども年代を追うて彼の作を讀まば、中頃より  
 次第に著作の不出來を見るべし。殊に此の書翻案なればおのづから筆の延びざる節もあれど、偽書  
 にはあらざるべし。『一目玉鉾』は未だ翻刻にはならざれど、面白き一種の道中記なり。淺井了意が  
 『東海道名所記』とも其の趣に異にし、畫圖を專にして記事は頗る簡なり。美濃板の中段を上下二つ  
 に割し、下には名勝風景の圖を示し、上に註解あり。名勝には所々古人の名歌を載せて興を添ふ。例  
 へば鴨立澤には「心なき身にも哀は志られけり鴨立澤の秋の夕暮」を載せたり。此書の序文による  
 に西鶴自らの旅行記にて東は奥羽の端より西は對馬の遠きに及ぶ、足跡の至るところ頗る廣し。  
 元禄五年には、『世間胸算用』の出板あり。此の頃は著作も多からず、追々冬枯なり。予が見たる  
 限りにては、此の外は生前の年號を載せず。他に尙二三作あれど、そは次章に譲り、爰に逸事一  
 つ二つ。

其五 經歷の補遺

『俳諧水滸傳』に「中頃西鶴も園女がもとに久しくやどり、園女に對句の調を作り」とあり。園女  
 は伊勢松坂の人、女にしては學問もあり、和歌を好み、俳諧は荒木田守武の流を汲み、芭蕉其角

もまば、其の才を稱揚せし女なりとぞ。一時軒帷中の妻なり。夫死して後は江戸に出で、眼科  
 の醫を業とせり、俳道の女秀才なりしかば、西鶴も其の道の友として交り、いつの頃にかありけ  
 ん、西鶴園女の爲に、『俳諧温故集』(による)

對園女辭

西鶴述

伊勢小町は見ぬ世の歌人今の世のいせの國より園といへる女の俳諧をわけて瀟蕩の原遠き浪速の里に志しての我に嬉しく二  
 見箱根の海にそめて筆のうつり行事をけるに思ふままにぞうこきねべし光貞の妻萱原の拾なご花にまほみて紅葉さちる  
 世に詠の絶にしだに名をいふ月の秋に此女この所にまほしの舍りをなし神風の住よしの春もひさしかなきぞこまぶき侍る

瀟蕩や當風こもる女文字

西鶴

また風來が『根なし草』にいふ

今は昔澤村小傳次といへる若女形河内の藤井寺の開帳へ参り小山といふ處に宿しけるが小傳次曰く一日竹輿にゆられて血暈  
 がおこりしさいへるを連にて有りける竹中半三郎小松才三郎尾上源太郎など笑つて曰くいかにか女形なればさて男に血暈さば  
 と腹をかへけるを其座に西鶴も居合せけるが大に感して曰く難きより形も同も女の如くならん日頃になしなみしより假  
 初の頭痛を血暈と覺えしは扱々まほらしき事なりさいへりさなり。

西鶴が經歷の世に傳はれる、僅にかばかりなり、されども尙此の釋法師の爲人を窺ふに足る。此の  
 人の交らぬ人なく、此の人の行かざる所なかりしが、今は鏡の草鞋はきて地獄巡りさへしたりと、  
 善悪なき後人にいひ囃されし迷途の旅だち近きぬ。「人間五十年の窮りそれさへ我にはあまりある  
 に、ましてや、

浮世の月見過しにけり末二年

と辭世の句を止めて、元祿六年癸酉八月十日歿しぬ。時に享年五十二歳。墓は浪華八丁目寺町誓願寺、本堂の西の裏手なる南向三側目の中程にあり。碑面には「仙階西鶴居士」と書し、下山鶴平、北條團水建之と刻せりとぞ。鶴平團水はともに西鶴が門人なり。團水は西鶴歿後京より浪花に來たり、七年の間其の舊庵をまもりきといふ（『燕石稜志』）『置みやげ』に如貞、言水、才磨等が追善の發句あれどもこゝには省きつ。其角が『句兄弟』（元祿七年板）に

兄

鯛は花は見ぬ里もありけふの月

弟

鯛は花は江戸に生れてけふの月

花なき里に心よりて二千里の外のかよひ一句の首尾殊に類なし中七字力をかえて啓榮期が樂に寄たりされば難波江に生れて住よしのくまなき月をめで前の魚のあざらけきを釣せて景寫嘆時のおもひ感今懐今

末二年浮世の月見過きたり

さいひ置けん折にふれては顔なつかし今は故人の心になりぬ

といづれか西鶴が名譽ならざる。

其六 西鶴本といふこと

西鶴の戯作中今に傳はりて、名作と稱せらるゝものは、多く無名にて、序文もあるは稀なり。こ

は前にもいへるが如く、流石の西鶴も好色本に公然名を署するを耻ぢしなるべし。されども彼れが非凡の才は、遂に慝しおほされず、誰れいふとなく西鶴の名は評判と共に揚がりて當時の讀書社會を風靡しければ、後には西鶴といへばいかなる面白からざる書も世間に持囃るゝ株となりしこと、今日の事情に徴しても知らるべし。晩年に至り好色本變じて多少教訓の意も見ゆれば、是等には名をあかしたるもあれど、よき作には不思議にも名を記したるは尠し。但しこれは西鶴生前のことに屬す。彼れ歿せし後は、誰れか無名なるを西鶴の著と認むべき、爰に至りて確實なる保證なかるべからず。これよりして西鶴何々と其の名を書名に冠らすことはじまる『西鶴置みやげ』『西鶴織留』『西鶴名殘之友』等はれなり。

『置みやげ』は元祿六年、『織留』は同七年、『俗つれく』は同八年、『萬の文反古』（元祿九年）『西鶴諸國ばなし』は年號未詳なれども、按ずるに此の頃の出版なるべし。此の五種には作者の自序または門人が書添たる文ありて、前の三種は先師が遺稿なりといへり。果たして然るや否や、『織留』は文章も優れ、着眼また凡ならず、此の書は六冊ものにて前二冊を「町人鑑」と號け、後の四冊を「世の人心」と題す。團水が書添のうちには、

西鶴生涯のうち、述作する所の假名字、棟に充、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代藏、本朝町人鑑、世の人心、これを三部の書と名づく、（中略）永代藏は其功なりて後、町人鑑、世の人心半書遺して過ぎし西の葉月に此世を去ぬ（中略）兩部の書殘されし、半宛をとり合せて一部となし云々。

これにて西鶴が生前の計畫、及び此の本の成りし大略知るに足るべし、殊に此の書には一題の下に數章の斷篇を集めたるが如く見ゆるもありて、げに西鶴が遺稿を取纏めて一部の書となせりといふゆゑ、されども『置みやげ』、『俗つれづれ』、『彼岸櫻』などに至りては眞に遺稿なりや、或は書肆の請によりて門人等がものしたるを先師の餘光（遺稿に通ふも因縁あり）を借りて、其の名を濫用したるにはあらざるか、予先年此の道に精しき地方のさる老人に書を寄せて西鶴本のことにつき一二質し、ことありしが、『文反古』に對する老人の返答は左の如くなりき、

此文反古は三四ヶ條西鶴のものを見留申候へ共其他は贋物と見請申候一の卷と五の卷に眞物三四條有べき、但評註は皆他人の手に出し見えて尤拙し西鶴は元祿六年八月十日没實物の證は序文の年號を其年其月と通れて五卷の末に元祿九年云々あり且仕立もいはり申候紙も違ひ申なりさらす共拙文云ばかりなし心を留て御覽可被成候部ではやるものには贋物多ければ學者にならんと思ふ人は此處に御注意肝要也

老人はもと國學者にて傍ら我が邦の小説戯作にも通じたる人なれば戯作に専門の人の見るとは着眼のづから異なりて文章に重きをおきたるや其の口吻に歴々たり。然れどもむしろ他山の石、評酷に似て却りて其の間に争ふべからざる鑑識あるを見るべし。

予は此の薄弱なる理由にて西鶴が作中珍らしき着想の『文反古』をば贋物とするに忍びざれど、さりとて此の完全したる五冊一部の書が西鶴の死後三年に發見せられたりといふは、前の『織留』より考ふるも多少疑しき事實なり、『萬の文反古』といふ斬新の想ひ着こそ西鶴の遺物なれ、そを増

し加へて一部にしたるは門人等の手に出でしなるべし。此の『文反古』に對する老人の意見は『置みやげ』、『俗つれづれ』に對してますます正しげなり。誰れか『置みやげ』、『俗つれづれ』をことごとく西鶴の筆を思ふものあらん。按ずるに西鶴存命中にも片々の小話を集めたるには此の手段或は行はれたりしか。總じて名を貸して出版する例は、今日名譽とか見識とか八釜敷世にすら、學者の恬として顧みざる所、當時戯作者の地位にありし西鶴に此の事ありきとて咎むるには及ばじ、また好色本ならざる一話一章のみには名を貸すをたゆたふまじきをや。要するに晩年の作、殊に遺物と稱するものには眞物ならざるも多かるべし。

更に一步を進めて見ばまづかいな贋物あり、例へば『浮世榮花一代男』、『小夜嵐物語』の如き是れなり。『浮世榮花一代男』とはそもくいかなる書なるか。其の序文を見るに、

美女はなごの命を断る斧成ま古人の言葉、有時戀の山入して花は連理の枝をきるにつきて、鳥は夜毎の別れを惜まじ、月は更にたはふれ酒の種にも成、花鳥風月の中に遊んで、色にそめたる身は、長生のせんだく仙家にちませの流れをしろぞかし、されば世界は廣しむさし野の戀種の中に住ながら、色しらすの男のありしを陰陽の神の道ひかせ給ひ、俄に浮世の榮花物語、是を見る人虚實のふたつ有、時に移れる心にして見る事、同く夢にも、玉殿の手枕まはしも樂みふかし、元祿六のましの春

松壽軒 西 鶴

ど、立派に記名して、茶表紙四冊物、本の体裁はほゞ西鶴ものに似たれども、『一代女』の書き出しを讀みし人は、此の序文の西鶴の筆なりや否やを判ずるに難からざらん。文章の剽竊なるが上

に拙、まかも此の作の着眼卑しく、猥雜更に甚し。然るに元祿六年の春は西鶴存命の中なれば、斯く年號を刻したるがそも曲者にて、後に本屋が錢儲けの爲に物したる陰謀なるべし。

『小夜嵐物語』(十冊、元祿十一年)の奥付には西鶴と大書せり、此故にや此の書は西鶴の著書中に加へらるれども、辨ずるまでもなく贗物なり。『新小夜嵐』(三冊、正徳五年)『續小夜嵐』(六冊、年號未詳)には西鶴の名はなけれども皆同じ種類の書なり。此の外『西鶴傳授車』(五冊、正徳五年)の如き、『西鶴冥途物語』(五冊、元祿十年)の如き、『新武道傳來記』(作者未詳)の如き、全く別人の作と知れたるものも、凡て西鶴本と稱して世に知らる。されど西鶴本といふことは西鶴の著作といふよりは廣き意味にて、例へば八字屋ものといふうちには自笑、其磧、南嶺、其笑、瑞笑等の諸作を含めるが如し。但し後者は出版者の名を冠せたるものにて、即ち今日いふ博文館物などいふに等し、前者西鶴といふは作家なれば聊か其の趣を異にしたれども、共に戯作の一大シリーズと云ふべし。

### 其七 雪 冤

此の稿を起すに當たり、かねて上野圖書館にはあまたの原版を藏すと聞き、參考の爲に一覽せばやと、一日同所に赴きしに、近頃博文館より出版になりたる西鶴本の發賣を停められたる出來事より、禍は延いてこの圖書にまで及び、好色本は悉く禁閱覽と書して人に見せず、遺憾の至なり。西鶴本は當時に停版せられたるに、一時に止まり、やがて改題して解禁せられし由前に述べた

り。其の後二百有餘年、風俗史の參考として、俗文學の一本山として持囃されたるに、今に至りて此の禍に罹るはそも何事ぞや。蓋し西鶴本は多少猥褻なれども、猥褻はむしろ我が過去の小説類一般の瑕疵にして、ひとり西鶴には限らず、もし嚴格に論ぜば、此の缺點は高潔第一と稱せらるゝ馬琴といへども免るゝ能はず、况や其の他をや、現時の出版に對し相當の取締あるは勿論のことなるが、既に是まで公許したるものを二百年の後に禁ずるとはさて合點行かずと其の理由を求めしに、左の答案を得たり。即ち一は世間の盲評家が古人の僻説に雷同したると、他は氣の弱き醜刻家の杞憂とが、當局者をして未だ美醜の如何を判別せざる前に、今回の禁止を催さしめたるに過ぎじと。

先づ第二に就いていはんに、今より三四年前、はじめ『五人女』の醜刻せられたるが、醜刻者は○○をもて或箇所を文字に替へ、且いへらく「原本卑猥の句多きをもてモウレーがボツカシオを削除せしに倣ひ云々」。然れどもかゝる心配は實に無益のこと、いはざるを得ず、原來英國人の風習として下がつたる事を口にすることを忌む、且モウレーは多少教課書にも充てん心ありしに似たり、さすれば彼の注意はさることなれど、我が邦人の感覺は幸か不幸かはまばらけ措き、未だ英國人ほどにあらざ、且久しく『夢想兵衛』の惡態野語に慣れ、『梅ごよみ』の誘惑痴話に慣れたる耳目は未だ西鶴が滑稽的難解の文字の爲にはさまで感覺を害せらるゝ恐れなし、然るに従來例の無き○○を以て文字に代ふるを見ては、讀者揣摩臆測を逞うして、さてこそ西鶴本は甚しき猥褻なる

ものと想像するに至り、翻刻者の注意は水泡に屬してむしろ定木の當て違ひの爲に禍を延くの縁とぞなりぬ。

また一方を見れば西鶴本非難の聲は喧しく、而して其の出所を糺せば梅蘭堂にはじまり、曲亭馬琴に盛なり、『元祿太平記』は西鶴本を猥褻なりと罵れども同書もまた〇〇を以て埋めざるを得ざるとすれば其の罪は五十歩百歩にして、著者が爲にする所ありて嘲りたるや明なり。『燕石稗志』はいへらく

滑稽を盡す、こは西鶴よりは下まれり、さばれもつはら遊廓のよしなしここのみ綴りて、其書猥褻なりしかば世の譏を得脱れず(中略)但その文は物を賦するのみにして一部の趣向なし、八文字舎自笑、江島屋其噴、西澤一風等に至りて、西鶴が筆意に倣ひ、これを潤色して一部の趣向をたてたるもあれば、ますく浮艶鄙猥にして俗客老圃の頭を解せしかば、これらも其名を喚くせり。

馬琴は我が邦はじめての批評家と稱へらるゝに拘らず、其の批評は往々僻したり、蓋し彼れは胸に狭き勸懲主義を蓄へ、且や自ら我が邦最上位の小説家たらんことを期せし野心家なれば、兎角有力なる作家を貶せんとするの傾向あるは、『作者部類』にて窺ふべし。西鶴に對する右の評もまた此の筆法に出でしにあらざや。たゞ怪しむ、かゝる偏窟なる評論の今日まで或勢力を有すること。『日本文學史』西鶴を論じて

著者もさより深遠なる學識あるにあらず、高雅なる理想を有するにあらず。従うて其作何れも猥褻卑陋にして、後世識者の

譏を免かれず、(中略)其爲す處の題目にして、少しく高尚優美ならしめば、文學上尙一層の高地を占め得べきに、唯眼を極實の一方、殊に花柳の巷等の、俗陋なるものゝみに注ぎしは惜むべきの限りならず、云々

此の文學史は今や有力なる學校の教課書に採用せられ、彼等教師のあまたは此の口吻にて西鶴を講ずる片手間に浮世草紙、好色本の父母ともいふべき『源氏物語』枕草紙を有難さうに説き、西鶴が姉分ともいふべき紫式部、清少納言の才徳を稱揚して措かず、豈世の中は奇妙なものにあらざや。かくいへばとて予は『源氏物語』枕草紙を學校以外に放逐せよといはず、また『一代男』を教課書に採用せよといはず、唯同じ種類の書にして、一は講堂に上り、一は禁錮中に在ることの公平を欠くを難するのみ。然れども此の奇妙なる調子に實際世の中は進みて、かゝる教師の假聲を使ひかゝる説に雷同して、夫れく文壇に立つ輩は正直にも馬琴が唱へたりし奮めかしき非難を其儘繰返して、一口に西鶴は猥褻なりといふ。予はむしろ彼等が猥褻なる箇所にのみ眼を留めて美なる點を等閑視するに驚くものなり、當局者はまた呆氣にとられて例の禁令を下したるに相違なし。此の禍に罹りたる西鶴こそとんだ災難なれ。議者或はいはん、われくが西鶴を難ずるは局所くの文字の猥褻のみにあらず、遊里洞房の事のみ寫出したる小説の世界全軀の猥褻にありと。然れども是等の説は物の進歩發達を無視したる僻事なり。彼の歴史のはじめを見ずやエデンの花園なる裸軀の姿をみたりかはしとすべしや。『古事記』を讀みてその中の或記事を襲なりとすべしや。これは是れ原始の有様としてむしろ天眞の觀こそあれ、誰れか猥褻なりと論ずる

ものあらん。かゝる境遇より今日の燦然たる文明の域に達したる次第を述べたるものは國史なりこれ吾人があらゆる古記を重んずる所以なり。文學もまた國史の發達の如し、和文の戀愛小説に負ふところ多きを思はば、今日讀書社會の大部分を支配する俗文が、西鶴の浮世草紙等より來れることを思はざるべからず。蓋し元祿時代の風俗は肌をぬきたる儘表を歩くも笑ふものなければ、男女入込の湯も異しとするものなし。花街柳巷の遊びも程よくすれば通人、若いうちには一度此の道に入るもまた世故に行渡るの方便と、間違ひにもせよ、上下おしなべて粹を通せし世なれば、今の道徳の標準より非難するは酷なり。人はいふ、今日の新聞に遊女のことを記するは、國の耻辱なりと、然らば何故に之れを公許するか、社會は既に娼妓なるもの、われ／＼同胞に存在するとを認むる上は、社會の耳目たる新聞紙に右様の記事ある異しむに足らず。むしろ内に斯の如きものを蓄へ、表面には之れなきが如き顔する偽善家を笑はずんばならず。或時は遊女をよきものと思ひ、或時はよきものとは思はざるも、己むを得ず公許す、これ皆歴史上の現象なり。今の道徳更に一進せば、廢娼も實行せらるべく、然る時にはいかなる繪入新聞にも洲崎吉原種を斷つに至らん。其の時に至りて明治の出版物は女郎遊廓の記事あるが故に風俗を亂る、宜しく絶版して發賣を禁ずべしと主張するか。予は思へらく、社會は斯くの如く野暮的に進むものにあらずと。元祿文學の粹なる浮世草紙を禁ずるはなほ今より數十年の後明治文學を禁ずると何ぞ擇ばん。蓋し浮世草紙は或意味にていへば今日繪入新聞の艶話つやな話なればなり。西鶴の才超凡、普通の新聞記者

に異なる所はあるべし、然れども現在目前に起こりたる事、または傳聞を其の儘録して之れを公衆に示せることまことに今日の新聞紙と異ならず。浮世草紙は俗文のはじめにして、當代の反映たる風俗の記録なり。些細の瑕疵を以て此の豊富なる寶の山を棄つべからず。思ふに西鶴本の禁止は一時のことなるべし、他日解禁再び世に出づるの時あらん。聊か西鶴本の爲に冤を辯ずること然り。

### 西澤一風

享保の頃、紀海音、竹田出雲、文耕堂、並木千柳(宗助)此の四人を、淨瑠璃作者の四天王と稱し、また錦文流、櫻塚西吟、西澤一風の三人を、たゞ其の趣向筋立は前者に及ばざるも、文者三傑と稱しきとぞ。西澤一風は名ある淨瑠璃作者の一人なり。然れどもこゝには、淨瑠璃作者たる一風は客とし、主に浮世草子の作者としてこれが傳を叙せんとす。

西澤一風とは淨瑠璃作者の號にして、本姓は山本といひ、通稱は正本屋九右衛門(『今昔操年代記』には作者正本屋九左衛門と記す)といふ。大坂心齋橋南四丁目書林板元を業とせり。(住所は移轉せしこともありきと見えて一様ならず)享保頃出版の淨瑠璃本の奥に、

京二條通寺町四へ入町  
大坂高麗橋二丁目出店

山本九兵衛板  
山本九右衛門板



と記したるものあれば、本店は京都にして、大坂の山本は京都の分家なるべし。  
一風は寛文五年に生る。八文字屋自笑は同六年に生れ、江島屋其磧は同七年に生る。一風は年齢に於て、此の三人の長者なるのみならず、また浮世草子の作者としても、西鶴に次ぎて大坂に出で、其磧よりも先輩なり。たとへ其の文才は其磧に及ばずとするも、著作の多きことは、ひとり其磧の多作を除きて、他に一風と比肩するもの少し。而かも一風は、自笑が虚名の作者にはあらず。

其一 與志と一風とは同人なり

元祿より享保の間、浮世草子の作者に、西澤を名乗る者三人あり、すなはち西澤朝義、西澤與志及び西澤一風なり。此の三人同じ人の別名なりや否や詳ならざりしが、寶永五年(?)板の『茶傾ひそり顔』といふ草子に、

誠に陰陽和合の里なれば、此歌のあいがたはしや、さいはい朝與志ふてまめなれば、さつこ一作あそばし、ふし付てわたさるべし云々

右は西澤氏作にして、作者自らいふ言葉なれば、與志は朝義の異稱なること明なり。さて與志と一風との名に就きては、既に古人に別人なる由をいひしものあり。但し『元祿太平記』(同十五年板)には、

新色五卷書、御前義經記、寛潤管我、女大名丹前能の作者西澤九左衛門

とありて、其のうちの『御前義經記』(同十五年板)を見るに、浮太郎冠者實名與志編と記せば、これはた九左衛門なる一風と與志とは、同人なること判然せり。今浮世草子に記したる西澤が名を吟味するに、元祿の末より寶永頃の作には、與志の名多く、享保に至りて僅に數部一風の名を記したるがあり。たとへ一風は、淨瑠璃作者と、浮世草子の作者と、其の生涯を分つといふなどの四角張たる云分もなかるべけれど、一風は淨瑠璃の方に多く用ひ、草子には與志を専ら用ひしなるべし。

『諸譯名女たば粉』(享保廿一年板)作者華亭の序にいふ、

僕御當地に罷有り……書林何某に油を引れて九年頃我も下心は有れど今時此粹なる世の中口を明め先にそれき吞込殊更色道の謔は遠く難波の二萬翁近くは都の錦西澤の與志錦文流八文字をばしめ筆をふるふて世間の目を輝にした跡なればさりこはむつかし

實にやこれらはみな相應に名ありし作者ながら、浮世草子はひとり八文字屋の専有の如く、思はれしかば、今日に至りても、僅に一風の名は淨瑠璃作者として傳はれど、與志とふふ作者名は殆ど知るもの稀となりぬ。

其二 西澤與志の作

前に『元祿太平記』に載せたる書目以外に、元祿年中の作尙あまたあるべし、其の一として見るべきものは、『風流今平家』(六冊、元祿十六年板)なり。此の作は、其の頃奢侈に耽りて、没落し

たるある町人の身の上を、平家の驕奢に擬へて作りしものなり。一名を「町人身の手鑑」といふ。駿河の府中に富める何某、惣領に世をつがせ、己れは一人の愛女を伴ひて、江戸に下り、谷中に住居して、榮耀に暮らしけるが、女心地常ならぬば、大勢の侍女ども氣を揉み、御慰にとて、替女のよしといふを招き、何にても變りし音曲をと所望しけるに、替女が手わざは琴三味線より外を知らず、幸ひ此の程さる屋敷にて、風流今平家といふ本を讀まれしを聞きたれば、昔の平家物語に事よせ御話し申さん、と此の替女、彼の琵琶法師に代りて、當世の諺になぞらへ、琴三味線に今平家を合せて謠ふ、といふ發端、戯翻文なれども頗る面白し、次に

諸行無常の鐘の聲ぢやくめつわらくの響きあり、斐羅雙樹の花の色盛者必衰のことはり、おこる者久しからず人界の有様は夢幻の如し、猛き人も遂には亡ぶさなり、云々

書はじめは、文も全く『平家物語』に似せ、さて其の人物まで、彼れに擬して、

伊丹入道可運を

清盛に

重右衛門を

重盛に

宗右衛門を

宗盛に

友之助を

重衡に

役割したるなど、なか／＼意匠を凝らしたる作にして、際物なれども當世人の奢侈を戒めたる寓意を含めり。文また頗るめでたし。

作者は此の序文に、『平家物語』の作者を詳しく紹介して、さていふやう、

今平家の作者は文盲にして文字さへうまかりしが、竹馬より假名草紙を好み我々書集め、我々梓にちりばめ、我々樂み、世のそしり笑ひ、筆を儘にして又十二卷を畧し、來る春櫻にきさま世のつひへをいさはず

と、作者が自分の經歷をほめかしたるもまたあかし。

寶永に至りては、與志が全盛の時といふべく、草子の作甚だ多し。今其の主なるものを擧ぐれば

- 『傾城武道ざくら』 五冊 (寶永二年板)
- 『達鬘五人男』 五冊 (同年板)

此の作は雁金文七等の事を綴りたるもの也

- 『風流三國志』 五冊 (寶永五年板)
- 『御前二代曾我』 六冊 (寶永六年板)
- 『野傾友三味線』 五冊
- 『傾城伽羅三味線』 五冊
- 『野傾百物語』 五冊
- 『男傾城文枕』 五冊
- 『衆道戀暮櫻』 三冊

以上五部は、板行の年月詳ならざれども、寶永年中の板なることは確實なり。其の一部分は、八文字屋ものの『色三味線』類の遊女の名寄に屬し、其の他『今平家』または『御前二代曾我』などは、其の體を昔しの軍書または淨瑠璃に取りて、當世の人情、殊に狹斜の趣を寫し、或はまた野郎、

傾城の内證事を綴りしものにて、其の系統は純然たる好色もの作者なり。併しながら中には、當時の事實其の儘を殆ど潤色せざるもあり、或は隨筆様の著もあり。されどまた當時代の事實として、採擇すべき點は、與志の作に多し。

『茶傾ひそり顔』(四冊、寶永四五年の板)の如きは、其の一にして、一半は戯作、一半は隨筆なり。

- 一之卷 色里腹立顔
- 二之卷 茶や腹立顔
- 三之卷 茶傾腹立顔

以上三冊は戯作、但し三之卷の『色里大和詞』は、京、大坂の傾城屋、茶屋にて、其の頃さまぐに通用する號馬の詞を集めしものにて、例へば、

わてんさいふをてきちうさいふ

女郎の替名

さいふを中山 るいをたぐひ

客の替名

傳をつたへ、平をひら、六をしろ

又家名の頭字と名の頭字にてよぶもあり河内屋の庄吉をかせう

の如し。もとより通人には耳に馴染の詞なれど、當時初心の粹士が其の門に入るの教科書なりしこと勿論、今日とても淨瑠璃本などに、不審紙を貼る人々には、此上なき小辭典なること疑ひなし。

四之卷は、『音曲色酒盛』と題して、此の卷には、一中ぶし、半太夫ぶし、土佐ぶし、若太夫ぶし、祭文等、其の頃遊里にて口號みし音曲二十四編を集めたるものなり。此の外にも井上播磨が、生涯のふし事數百段あるを、全部三冊に收めて板行ありしに、辰年の火災にて焼失したりといふ。こはなほ後の事なるべけれども、音曲集に因みあればこゝに記す。以上列擧したる淨世草子は、西澤與志、もしくは稀に朝義の名ある作のみにして、凡元祿の末より寶永年中の板行が多し。正徳に入りては、與志の作を此の中に發見せず。思ふに與志の名は寶永頃のみ用ひしなるべし。

### 其三 一風作『後室色縮緬』

享保に入りては、草子の作少し、其の數部には西澤一風の名あり。

『後室色縮緬』(五冊、享保三年板)は、一風が草子中の名作と稱せらる。また一名を『色縮緬百人後家』といふ、其の謂は、東山の片邊りに夫婦の老人あり、一日老女は、五條川にてすゝぎ洗濯をなし、に、美麗なる蒔繪の盃、中には野郎の姿をかゝせたるが、ウカ〜と流れ來りしを、老女拾ひ上げて呆然と眺め居たる所へ、二十ばかりの女、髪を切りて後家わけに結び、こゝへ尋ね來りしかば、老女は盃を彼女に返して、其の身元を聞きしに、これは此の川上に住ひ、世に歡樂を極め玉へるあるやんごどなき後室の侍女にて、こゝに給仕する女どもは、みな後家の風俗して事へ奉るとなり。さて此の盃は後室の秘藏し玉へる器なるを、今日しも納涼の宴を開かせられ、

水上に浮べてはしなくも流失しけるが、老女のお庇にて再び主人の手に入ること、まことに嬉しき限り、何とぞ此の返報致したし、幸ひ加賀の菊酒、越中のこけら鮎、上野の待夜の玉子、山海の珍珠を集め饗應申さん、イヤ玉へと老女を案内して、後室の御前に誘へば、後室はまだ三十前後の美婦、盃の手に戻りしをいたく喜ばせ玉ひ、これより亂れ酒、御前にて御馳走あまた頂き、後室の御所望、何か御慰みにもなるべし、とつれあひの老人を伴ひ來りて、世の中のありとあらゆる後家話しをして、御機嫌を伺はん、と百人後家の發端は斯くの如し。毎卷二編、即ち二條の物語を一冊に收めれば、都合十人の後家の話にして、百人後家の題には僅かに其の一部分を充したるのみ。此の發端は、前の『今平家』の筆法と一様にして、西澤慣用の手段なり。其の序開き頗る面白くこれ西鶴の『一代女』等を學びしものなるべく、其他はまた『五人女』を真似たる書き風なるべし。但し此の作の價値は、『百人後家』といふ標題のすばらしきにありて、もとより西鶴の作と比すべき作とも思はれざれど、一風作の尤なるものなり。

『熊坂今物語』(五冊、享保十四年板)は、熊坂三郎、同四郎とて兄弟の悪漢、長崎丸山の遊女町に遊び、兄弟力量を鼻にかけて、むたいの色情より喧嘩をはじめ、散々の亂暴を働きし事實を三番ついきの狂言に仕組み、片岡仁左衛門(元祖なるべし)存生のうちこれを演じて、大當りを取りし事あり。作者は元來覺のよき自慢の人とて、其の筋の大畧によりて、此の一編の草子に綴りきとぞ。種類は前の『今平家』と同じ昧にて、傳奇ものなり。浮世草子の事はこれにといひ、淨瑠璃作

者の事につきて一言すべし。

### 其四 淨瑠璃の作

一風は豊竹座の作者にして、紀海音と時を同うし、海音が盛に作りし間は、一風はむしろ其の作多からず。初筆は、元禄十六年の『井筒屋源六戀の寒晒』なるべし。これに次ぐは正徳三年の『傾城國姓爺』なり。此の外になほ作りしやも知れざれど、兎に角、享保の中頃までは、淨瑠璃の作至つて少しと見て可なり。此の間は却て草子を専ら綴りきと思はる。然るに享保八年頃より頻りに淨瑠璃の作あり。すなはち

『建仁寺供養』

(享保八年)

『女 蟬 丸』

(同 九年)

『頼政追善扇の芝』

『昔米 萬石通』

『身替弓張月』

(同 十年)

『南北軍問答』

以上はみな田中千柳の手傳なり。斯く一風が一時に作りはじめしは、是より先き豊竹座の立作者なる紀海音、まばらく劇壇を退きしかば、西澤一風奮發してこれに代りきと見えたり、されど『女蟬丸』の如き、定めし面白からんと待設けしに、見物初段を見てせいきをつかし、「拍子のない出がたり出使ひ」に評判よろしからず、作者意外に驚き、續いて翌十年も作うけよからず、豊竹座

大に失敗し、芝居不景氣を來しければ、こは容易ならぬ事と、すなはち並木宗助、安田蛙文などいへる一味の若手を語らひ、彼等元來淨瑠璃の一段づゝも書きえぬ器量にあらざればとて、一風采配を取つて二人を指揮し、大に工夫を凝らし、幸ひまへかた書き集めたる假名草子の『北條時頼記』に思付き、其れに近松が作『最明寺殿』の雪の段を補綴し、淨瑠璃五段を完結して出し、に、作者の骨折徒勞ならず、此の作非常に當り、殆ど二年間打續け、近松が『國姓爺合戦』以來の大入りを得て、豊竹座の不景氣を挽回せしは、實に一風が盡力なりきとぞ。これ有名の『北條時頼記』にして、享保十一年の作なり。

其の後『難波みやげ』は、「近松の作の女鉢木雪の段を切加へて五段の都合、首尾全し、かく古き名作物を取合せ玉ふ所偏に作者の機轉なり」と評しぬ。所詮一風の作は、草子も淨るりも創意に乏しけれども、後世人の如く、毫も其の形跡を曖昧にせずして、明白にこれを公言せしは、昔し人の樸直思ふべし。一風自らいへらく、

近松門左衛門は作者の氏神也、年來作り出せる淨瑠璃百餘番、其内當り當らぬありさいへども、素讀するに何れかあしきはなし、今作者さいへる人々、みな近松のいきかたを手本とし書繼るものなり。此道を學ぶ輩近松の像を繪畫、晝夜これを拜すべし、又あるまじき達人おそるべし

蓋し作者は恐らく其の近松を祭りし氏子の一人なるべし。また當時の作者の有名なる人々を擧げ、平安堂の流をくんで一作なさるゝ人々近年出來

- 一 紀海音 一兩年休足
- 二 竹田出雲 手芝居自作
- 三 松田和吉 是も休足
- 四 並木宗助 當年より作なり
- 五 安田蛙文

西澤一風 今は老人なり心斗り  
あらまし此通り淨瑠璃の作者すくなきもの當り淨瑠璃は稀にしてあたらしめはつれ也

といへり。はじめの宗助、蛙文等を推して、自分はあれども無きが如くす。これ先輩のつとめ、一風が老後の思ひ出なるべき歟。(以上『操年代記』による。)

一風が『今昔操年代記』(二冊)は享保十二年の著なり。もとより精細に調べ、諸書を参考し、あまたの研究を積み著述にはあらざれども、自らもいへる如く、著者は「音曲に身をよせ、播磨風より筑後、豊後の淨瑠璃、替る毎に見物せぬといふ事なく、就中播磨になつむこと深く、此の流義を替古したる事もあり。今は老年に及び、齒も殆ど脱げ落ち、言葉漏れ、舌自由にまはらぬと、富士の牧狩の道行などは最も得意にて、今の太夫の語るを聞きては、もどかしく思ふなり。かく名人と同席につらなりしも不思議の縁にて、此の流義のそもくより今日までの來歴」其の大畧をこゝに述べしものにて、文飾もなく、記憶の儘なれば小冊子なれども、後人の資料とすべき書なり。

一風は享保十五年「本朝擅特山」の淨瑠璃を出し、翌十六年五月歿す、享年六十七、辭世の句に、  
散り行くや風に常盤の木の葉雨  
墓は大坂下寺町大蓮寺にあり。法號常寒貞寂禪定門といふとぞ。

### 都の錦

都の錦は是迄其の氏名さへ詳ならざりしが、近頃饗庭篁村翁『早稲田文學』に『小説家の人物』と題し、此の作者の經歷に就き珍らしき一話を掲げられたれば、それを借りて本傳とすべし。篁村翁の文にいふ、

「元祿以前の作家の人物は、一角ある者が、世の厭石に角をあさへられ、丸く碎けて出たるが多し、鈴木正三が異教退治、淺井了意が佛法弘通、皆な藥を包む爲の飴なるが如し、西鶴も俗名を平太夫と呼しどころよりおもへば、浪人出の野心坊主、今少し早く世に出しならば大坂へ籠るか、天草へ集るか知れざりしならん、謀叛氣即ち作氣のあと其作によりても知らるゝなり、近松門左衛門これはまた云でもの事なるべし、中に尤も奇骨稜々たるは此頃作家四天王の一なる都の錦其人なり、其經歷は次に出す同人の訴狀によりて知るべし、此人京都にて大和莊子、御前御伽婢子、元祿曾我物語其他數部を著したるが、何事をか巧み出しけん、元祿十六年江戸にて召捕られ遠島の申渡しを受け薩州山ヶ野の金山へ徙されけり、江戸より薩摩へ護送さるゝ船中にて源氏物語を

講じて役人を驚かしたりといふ此時年二十九歳（元祿太平記に「惜かな都の錦其功いくばくもあらずして行年廿七をかぎり西海の波の泡と消る云々」とせしは傳聞の誤りなるべし）山ヶ野金山を遁れ去らんとしてまた捕へられ牢屋に入られしが獄中の苦に堪へず、寧ろ早く死せん事を願ひて左の訴狀を出したり。

乍恐奉願口上覺

本國常陸宍戸郷宇都宮八田之流右大將賴朝公同腹兄左衛門尉知家二十一世

生國攝州大坂

宍戸鏡舟

申三十歳

藤氏系圖一卷

田代藤左衛門殿へ預置

洲濱太刀六孫王經基より傳來

大坂御堂前森田正九郎へ預置

父 松平万右衛門康富

家康公より諱字賜

母 廣幡大納言豊忠女

六年以前に死去號心月院

私儀攝州佐用郡の鎮主佐用姫大明神之社領百四十石此外山林河海等池田輝政之寄附也神主職を相務八田上宮内少輔從五位下光風と申候然るに二十一歳の時儒學爲修行致上京御幸町通竹屋町下る處に借宅仕り伊藤源助維禎門下に屬し經書之講義を承り理學辨論の間には北村季吟法印に隨ひ聽歌書の講釋を烏丸亞相資慶郷の御會書に免され於是和漢之書に眼を曝し己に六年也然るに同學の惡敷友立に誘引せられ二十六年の春に與風花月之集興を催し終に艶色に溺れ島原に行通ひ適々學問之爲貯置たる金銀過分に遣捨剩へ祖父廣幡家の所持町屋敷を三條繩手に有之謀計を以て密に賣捌其代並秘藏之書籍を始め衣類等迄無殘賣拂すて申候に付親類縁者の勘氣を請朝夕難續迷惑仕候故翌年二十七歳の春新黒谷門前に引込小庵を結び佛法修行を志し山科大宅寺の月波和尚に參禪し即鎮舟と改名し或口業の爲假名書物を述作いたし書林に與へ其禮物を請渡世候事二年六月其後立身の爲に同學の方より書狀を請け東武の親類にかくれ密かに未四月三日江府へ罷下添書の方を尋候處に彼方此方行通ひ相尋候へとも近き頃類火に逢ひ行方知れず罷成候に付當分滯留すへき住家無之候て町々徘徊候間無宿改布施孫兵衛様に見谷られ則寺社御奉行永井伊賀守様へ御引渡有之同冬十有遠流に處せられ御當地山ヶ野金山へ召放され御養育を請候事難有奉存候野拙儀幼少之時分より日置流の弓術を好み笛掛犬追物まで無殘處習ひ得候に付金山に於て御役人衆中様へ被召寄折々弓術を御尋成被候故朝夕心安く出入仕り右之衆中より御厚請に預

り候に付流人中間の源次郎と申者恨深く自然と某儀を横道を以て無理と宛行申候に付無念至極に存當七月二十二日之夜小屋を忍び出自害可仕覺悟にて深山に引込己に絶命可然と存候處に俄に變心出來いや／＼死は輕して生は重し一旦此境を逃出天運に任せ可申候心躰一途に極め其夜直に柵を越へ申候へ共御國中不案内故小河内に於て天の網難逃其まゝ被召捕同八月四日に御當地へ入牢仕候是元より重罪と云ひ勿論過去の業因による雖後悔愚夫の迷路分別しかたく恐を不顧歎き申候意趣は赤米一合も無汗にて被下候へは追日衰勞仕生ながら餓鬼道の苦を受け二六時中苦痛止事なく來世に於ての罪障又思やられ歎々數存候間あはれ願くは御仁心を以被召出忽ち首を刎られ被下候は、生前の大幸難有奉存候

半髮譏大極 善惡則天明

捨にけり今日の命はあしからでなきからなる恥のかなしさ

私事京都にて都の錦と申候由緒は諸藝太平記と申ものに有之於御當地金山半七など能存し申候

流人

鐵

舟

寶永元載

申霜月十八日

御客屋御奉行様

系圖立と云ひ自ら才學藝術を吹き立つるところ謀叛氣山氣歴然たり、難有奉存候をつけて首を切られん事を願ふ其心根憐にもまた大膽豪氣にあらざや、左れども此の訴狀によりて獄中の苦を免され同國鹿籠の金山に徙されたり、此所にてはやや取扱もゆるやかになりけん寶永五年に播磨杉原三冊を著す（赤穂義士の事なり）其他著作ありしならんがいまだ知らず薩州藩市來辰右衛門といふ入都の錦の詩歌等持傳へたる中に寶永七年と記したるあり、首を刎られん事を願ひてより七年はたしかに生たるなれど其後の事を書留たるもの山ヶ野鹿籠にもあらずといふ惜き事かな、小説家中これほどすさまじき經歷ある人前後になし其著作またおもふべし、都の錦は自身小説中の大立者、また小説史中に異彩を放つものといふべきなり。」

右の『諸藝太平記』とは、『元祿太平記』にはあらずや、との説、もし此の説を然りとすれば、都の錦の霸氣は、ひとり其の實生涯に止まらざりしに似たり、蓋し『元祿太平記』は、西鶴を無學と罵り、

京其方は難波の住人にして、西鶴をひひきの餘りに、ほめ過したるいひやうかな、勿論西鶴が輕口ぬれ文の發明、諸國に聞へて其身譽れをさるに似たれど、譽は誹りの基とや、元より西鶴文官にして書法をえらす、其證據には、好色一代男世の助島渡りの段に、いこのづらな午膝と別に書けり、……斯様に世俗まで辨へたる事さへ考へぬ西鶴なれば、況て其外の事に足らず、或は會子の詞を孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語にゆづりたるもをかし、凡て西鶴が作れる双子には、小大の誤あらずといふ事なく、只管片言を載せずといふ事なし、然るに西鶴は難波の立物にして、ぬれ文の類は獨大坂のみ

勝れたるやうに思はるゝは、茄子を踏で蛙と思ひ、水鳥の羽音を聞て、敵を疑ひ給ふが如し云々、

當時都の錦の眼中には、ひとり死せる西鶴あるのみ、故にこの強敵をさへ打倒さば、生ける仲達取つて代り、戯作の霸權を占むること容易なりと思ひ、かくは一撃を試みしなるべし。而して我が佛を尊んでは、

當春（元祿十四年）より都に、都の錦さいへる物出來たり、和文を發明し西鶴を輔けんと思ふ、本より此男和漢の書に濟りければ、理を説く事委しく、枕詞は春の花の匂ひ多く、……濡文の意氣地をみがき、牡丹餅のやうな柔な中へ、又ウキもちの如く堅い事を交ぜ、或はごつごつ笑ひ、或ははつごつ恐る、誠に文質形々として、面白く可笑くあはれに、殊勝におほへ侍る、西鶴なくなりしとて其道絶しにもあらず、……ひたもの新しき趣向を書つてくる事、是ぞ今此都の錦が智惠袋、口を開けばめつたに秀句をいふのみ

と飽くまで手前味噌をあげて、さて其の著作どもを紹介していふに、

其部の錦が事は、未だ世上に知る人なし、やう／＼當秋、兎の毛の先程古人の糟を嘔り、元祿會我物語、大和莊子、御前御伽婢子、風流神代卷などを作れり、彼が文を伺ひみれば、大概西鶴が詞を盗み、其外時のはやり詞をこり集め、後前揃はぬ文章なり、誠に目くら千人の世の中なれば、都の錦が作りたる草子をもてあそぶものもあるべし、おのれが學問を拾ひ出和文にいらざる聖賢の語を澤山引集め、所々に性理の沙汰、去こはなめ過ぎ侍るなり

と大坂ものゝ詞を借りて、わざと非難させたるやうなれども、なほ學問を誇り、更に大坂ものゝ詞を續けて、

西鶴先生之を聞ば、極樂に於てこそ鼻唄にて候はん、實にや都の錦が冗口より、新式、五卷書、御前義經記、寛潤會我、女大



名丹前能の作者西澤九左衛門が作りし文こそ、遙かに勝れて聞へ侍る  
 と、浮世草子作者にては、さまで取り所のなき西澤一風を引合せに稱揚したるには、聊か理由のあ  
 ることにて、必竟西澤は『元祿太平記』の部にもある如く、都の錦を世に紹介したる先輩なればなる  
 べし。斯の如く百方手段を運らして、一時に名聲を博せんとしたるは、其の腹赤しとはいふべか  
 らざるも、壯年血氣の文士にはありうちの事なるべし。此の筆鋒にて、傍若無人、當代の文士を  
 あげつらひたるは、『御前お伽婢子』の總論なり、彼れ是れ對照すれば、『元祿太平記』の著者が都  
 の錦なることいよ／＼明かなり。また同書が伊藤仁齋を稱へ、

今此時に存へて眞儒といへるは誰々ぞ、お江戸の沙汰は申もおろか、先づ都の名にめでし、博學明辨性行を兼備へたる君子  
 之學、今は唐にもあるまいと朱子を非に見る伊藤源助古今無双の大儒なり

といひ同門生なる林九兵衛が學を稱へ、書林仲間の學者の筆頭にちく、みな謂れあることなるべ  
 し。たゞ惜むべきは此の英物、不幸にして世を早うし、充分に驥足を伸ぶる能はざりしことなり。

錦文流

錦文流は浪花の俳人にして、また錦頃軒と號す、氏名を詳にせざれど、竹本座の淨瑠璃作者にし  
 て、近松と時を同うし二三の作あり、『東海道虎が石』は其の一なり。浮世草子にては、西澤一風、  
 都の錦等の書きぶりに似て、一編を通じたる脚色は、西鶴にこれなきところ、後來續きもの、小説

は、此の人々の作をはじめとするに似たり。元祿の末より寶永に至り數部の戯作あるが中に、

『風流今兼好』

五冊

『榮大門屋敷』

五冊

は寶永二年版、後者は淀屋辰五郎の事蹟を綴りたる戯作なり。また敵討ものには

『熊谷女編笠』

五冊

あり、寶永三年六月七日京下立賣堀河の東へ入る民家にて、賤女二人姉の敵を討ちし事ありしを  
 やがて一編の草子にもし、同年版行に附しき。思ふに當時の出來事を直ちに草子に綴り直すこ  
 と此の頃の流行にして、作者もこれを得意とするが如し。なほ

『好色手柄咄』

五冊

(寶永五年版)

『本朝諸士百家記』

十冊

(同六年版)

等あり。前者は女郎名寄せ風の草子なり、後者は名の如く、諸士百家の俗傳にして、一とせ文流  
 が堀江の河岸に居を占めて、靜に病を養ひし其の砌り、聞きし諸人の話しを綴りたるものなりと  
 いふ、宇治亞相卿が『拾遺物語』にならひたる隨筆なり。此の書は全部二十冊、右十冊は其の前輯  
 なり、序文に「浪華津誹諧僧文流撰之」とあり。

八文字屋もの

上 自元禄十二年  
至寶永八年

元禄享保の間、盛に行はれたる小説の一躰を前に浮世草子といへり。此の浮世草子、今は元禄に榮えしものと、享保に行はれしものとを區別し、前者を西鶴本、後者を八文字屋ものと呼ぶに至りぬれど、其の以前までは、或識者を除きては、一般に浮世草子を總稱して八文字屋ものと呼びき。而して此の八文字屋もの、うちには、前の西鶴本を含み、其の西鶴本がまた西鶴一人の述作ならざりし如く、後の所謂八文字屋ものも、當時八文字屋一手より出でし本のみにはあらず、即ち作者も數人あれば、板元も數軒ありて、是等が一躰となり、享保の俗文學を大成したる譯なれども、他の作者、板元は知る人稀れになりて、一般に八文字屋ものにて通用せしなり。然れども斯くまで八文字屋が名を揚げたるには理由なかるべからず、蓋し八文字屋もの、名聲を博したるは作者江島屋其積と版元八文字屋自笑の力なり。

其一 元禄寶永間の戯作界一斑

團水が言葉に、「京より大坂へ十三里、とても結ぶ夢を伏見の一夜船」と。「元禄太平記」は、此の伏見の一夜船に、京都、大坂の書肆二人を乗せて、當時出版界の有様を物語らせたるを聞くに、左の言葉あり。

大坂の本屋は京へ登り、京都の書林は大坂へ往來して、互に本を替へ云々

其状況見るが如し。實に京都、大坂は路程僅に一日程、三十石船に乗り、淀河を上下する交通の自在なること比なし。されば京都の出版物は、大坂へ、大坂の出版物は、京都へ、互に交換せられて、京坂の間文學思想の流通まことに速なりしかば、寛文に京都に發芽せし假名草子は、大坂に其の種子を齎らし、元禄に大坂に榮えし浮世草子が、今回は京都に復版し、享保を盛時として八文字屋もの、こゝに榮えたり。

そも、井原西鶴が、天和二年に『好色一代男』を著し、次で『二代、三代男』、『一代女』等、同じ趣向の草子が、大坂は勿論、京都の風流社會に、いかに歡迎せられしかば、今より容易く想像しがたけれども、寶永、正徳に至りて、同じ趣向の草子、殊に『好色一代男』の後日、又は之れに擬したる草子の、予が見たる限りにて、六七種に及べるを察すれば、ほゞ西鶴崇拜者の數は推量せらるべし。蓋し西鶴の作が、斯くまで持囃されたるは、是迄に例なき俗文もて、寫すところは粹人の理想世界、即ち此の人々の心には、一代男世の介となりて、日本國中の遊里を經廻り、なほも餘命が續くならば、女護の島へ渡航をなし、人間無比の歎樂を極めばやと、われも人も極端の肉樂主義に走せたる所へ、思ふ笑壺に適中たればなり。

西鶴が元禄六年に身まかりし後は、其の作者一時絶えたるに似たれど、元禄の末より、其の系統を繼ぎ、名乗り出たる作者あまたあり。西澤與四、北條團水、都の錦、月尋堂、あつゝ得意の

筆を振ひ、文華一時に燦然たりき。爰に其蹟は最初戯作に名を掲げざりしかば、其の初筆を詳にせざれど、八文字屋板に確證ある元祿十二年を出世の時と假定するも、先輩としては西澤一風に相前後し、而して他作者は、或は不幸にして驥足を延べざるに世を早うし、或は一時僅かの作に止まり、遂に歸する所は當時無名の作者其蹟にありき。元祿より享保を通じて凡そ四十年間、其の述作するところ百部に下らず。年代よりするも、文才よりするも、西鶴に繼ぐ者は其蹟なり、京都を中心とせる浮世草子、役者評判記の板元は、實は其蹟を圍繞せるに外ならざりき。

### 其二 江島屋其蹟の傳

其蹟は通稱を江島屋市郎左衛門といふ。京都京極通り誓願寺は、浄土宗の本山にして、本尊は佛師春日作の大佛なり、此の寺の門前に、むかし餅を賣る家あり、大佛餅とて世に持囃され、いたく繁昌して、富巨萬の財主となりぬ。其の後豊太閤洛東六波羅の南に、方廣寺大佛を建立せられしが、他家の餅屋こゝにも出來て、新たに大佛餅の店を開き、今に連綿として繁昌人のよくゑる所なり。扱京極通りの餅屋は業を轉じ、誓願寺通り柳の馬場へ宅を變じ、子孫ちのづと奢侈に耽り遊里にあまたの財を散じて、風流をこれこととす、其蹟即ち其の子孫なりとぞ（『翁草』等）其蹟は西鶴より後ること二十五年、近松よりは十六年、寛文七庚未年に生る。其蹟若かりし頃放蕩を盡し、遂に産を傾けしが、其の經驗こそ生涯の述作となりけれ。元祿六年西鶴の没せし時は、其蹟既に二十七歳、今日何の消息をも傳へざれど、釋法師と稱へたる人に、生前いかで相見

ざることのあるべき。又一方には近松門左衛門の盛時、而かも其蹟は役者評判記の作者として、時代を同うすること久し、其のまばく相往來せしやせり。あはれ是等の文豪を前驅に立て、後進に名作家なき理由なし。其蹟の出るは偶然にあらず。元祿十二年の役者評判記「口三味線」は、八文字屋板にては其蹟作の最初のものなりといへど、『目利講』によれば、此の以前「松本治太夫方へ浄瑠璃本を作り遣はし、其の語り本を八文字屋にて板行させし」事實あれば、『口三味線』以前に多少の述作ありしは勿論なり。唯今日傳はれるものは八文字屋板より數ふるの外更に證なきを憾みとするのみ。

### 其三 八文字屋の起業

八文字屋八左衛門は、京都歎屋町誓願寺下の町の書肆なり。いつの頃より業を營みしか、慶安四年説經佐渡七太夫正本に八文字屋八左衛門板とある由『南水漫遊』に見え、貞享二年九月印本の『京羽二重』に、浄瑠璃本屋として、二條通寺町西へ入山本九兵衛（又正本屋九兵衛とも稱す）同南側鶴屋喜右衛門と、八文字屋三軒の名を載せられたれば、既に久しく京都にては、浄瑠璃本又は草子類を鬻ぐ家なりしこと知るべし。然れども所謂八文字屋の名の顯はれしは、此の浄瑠璃本屋にはあらず、浮世草子、役者評判記の板元をなし、大に世の喝采を博したるに由れり。

當時の八左衛門は、即ち雅號を自笑と稱する人にして、姓は安藤、寛永六年の生れなり。其蹟よりは一歳の兄、『口三味線』を板行せし元祿十二年は、自笑が三十四歳の時なり。當時は徳川氏の

全盛期、元祿時代の風俗が、豪華奢侈の頂上に達したる時とて、上下おしなべて遊興に耽り、歡樂をこゝする折柄、遊里、芝居の繁昌は前代未聞の有様にて、名妓もいでたれば、名優もまた出でたり。而して之れが反影として第一に流行したるは、遊女、役者の姿繪、又は其の狀態を寫したる浮世草子なり。『元祿太平記』の所謂「當世は只堅い出物を取置いて、商賣の勝手は、好色本の、重寶記の、類が増じや」と京、大坂の書肆の眼が此の俗受に注ぎし時、八文字屋は、既に淨瑠璃本屋といふ草子類を出すに因ある家柄なれば、世才に老いたる八左衛門、其の邊には些も抜目なく、其の頃若手の作家江島屋其磧、後世浮世繪師の名家と仰がる、西川祐信、此の二人を籠絡して、専ら自家出版の作に従事せしめ、且つ板下書き、板木師も名工を選び、製本には意匠を凝らし、萬事流行に先立て、他の板元より出す本よりは、一見して舐裁よく、奇麗に出来上りをること、實に今日われ／＼が他板と比較して、容易く認め得べき事實なり。されば當時他の板元は是等の數點に劣り、忽ち八文字屋に壓倒せられ、遂に浮世草子、役者評判記は八文字屋の棟となり、前より多少名を知られたる鶴屋、正本屋をはじめ、谷村、柏屋、菊屋、中頃は其磧自ら江島屋を名乗り、多くの本屋と連合の策を運らし、齊しく八文字屋に抵抗したれども、一たび收めたる八文字屋の名聲に到底敵しがたく、遂に元祿の末より、寶永、正徳、享保、元文、寛保、延享、寶曆、安永を通じて、凡七十年間、草子類板元の權を握り、其磧の外にも作者を聘し、年々の出版少からず。即ち八文字屋八左衛門の銘打たる本の、多く書肆に商はれ、多く讀者の眼に

觸れしかば、他の板元よりも、相應に出版はありしに拘らず、其の多數に制せられて、さながら曉の星の如く、世間は一般に此の頃の草子類を呼んで八文字屋ものと稱ふるに至りぬ。蓋し八文字屋の創業に、其磧の功多きは勿論のことなれど、而かも自笑が文學思想に富みて、統御の術を得たるにあらずば、寧ぞよくあまたの名家を繋ぎ、此の全盛を致すを得ん。京都麩屋町八文字屋は櫻木の名所、自笑は一個の豪傑也。

### 其四 役者評判記の起原 八文字屋の評判記

寶永五年板の『役者替古三味線』の開口に云々、

(前略)東の山の端白く、芝居の一番太鼓に、正月程あつて、早くたゞき出せば、今日は是からすぐに春狂言見ませいと、帯しなをして立出れば、表には童たらしの役者姿繪を、幟にして賣男、一文に一本づゝ賣品に、それ／＼の役者評判申して、是をそへにしてあきないける、い、い、い、昔は芝居すいたものさ見えて、よくもしつたり、い、い、一本、坂田藤十郎を、い申さう、れん入て評判をそへてたもれ云々

古き所にては此の類の役者評判も行はれしなるべし。併し役者評判記と稱する冊子の起原は、明暦、萬治の頃より既に板行になりし遊女の細見に基き、其の位付もまた遊女の位付に胚胎せる思付なるべし。而して此の評判記はいつの頃より行はれしといふに『三升屋二三治劇場書留』には、天和二年より三ヶ津評判記出る由を記せど、天和に三ヶ津評判記あるべしとも思はれざれば、此の説

頗る覺束なし。『南水漫遊』には、役者の技藝を評したる書は、西鶴、團水に肇りて、其積自笑に至るとあり。『近世奇跡考』に、「貞享五年役者評判記野郎、立役二町弓といふ書ありて、此の頃の評判記は、さほく半紙本にして位付なし、元祿の末横切本となり位付あり」と、初代市川團十郎の藝評をさへ採萃したれば、これらをや古き評判記とすべし。元祿に至り八文字屋以前の評判記にては、同十一年の『役者櫻桐帯』あり。今假りに此の評判記を、元祿に行はれたる評判記の例とし、さて八文字屋の評判記に比せんに、『櫻桐帯』は一冊もの、紙數七八十丁の枕本にして、挿畫もなく、字跡も細かく、舛裁頗る簡畧なり。今年(寅の年)の評判を新評と呼び、其の後へに古評を集め、新評の足らざるを補ひたれども、藝評として見るべき點少し。此の評判記の口上書にいふ、

此評判京大阪江戸三ヶ國の役者何役によらず少にてもせしはまやうはさいふほどの役者なれば不殘是にまるし申候(不明)

と、蓋し京、大阪、江戸三ヶ津を合併したる評判記は、此の頃をはじめとするに似たり。此の本は和泉屋八左衛門板なりとぞ、後に其の證あり。『立役上々吉之分』として、

京 竹島幸左衛門 京 山下半左衛門  
 京 坂田藤十郎 京 中村七三郎

右は一例のみ。次に竹島幸左衛門の評に至り、

扱評判作者いづれも様に、しかられまするこが御ざりまする、當年は改て此人を巻頭へなをしました云々

蓋し此の『櫻桐帯』の作者は、當時の名優坂田藤十郎を以て、竹島幸左衛門を巻頭に直したる申

譯なり。

『役者口三味線』(枕本三冊)は八文字屋評判記の最初のものなり。元祿十二年三月板、京、大阪、江戸の三巻に分つ。これには挿畫あり。『立役之部』にて、

上上吉 坂田藤十郎 萬太夫座  
 上上吉 中村半左衛門 同座  
 上上吉 竹島幸左衛門 早雲座  
 上上 大和屋甚兵衛 同座

(以下畧す)

此の目錄終れば、次に開口と稱する序言あり。例へば

或有福の家に生れて、後家親にかゝり、よろづ心の儘に成長し子息、天性衆道を好み、朝夕珍居の噂のみして、罪もなく、若もなく、女房もなく、ちゑもなく、金計りはありあまる大ぶん、世わたりを手代にまかせ、ある春雨のまじく降る日、日頃出入する慶安さいふ醫者を招き、若衆遊びの贅をいひ合ひて、「酒心よき折ふし、次の間に田舎より學文の爲上京せられし出家、うち見は殊勝に見ゆれども、是も内證は菓子屋の客とおぼえて、佛書ひろげながら役者まゆるうばはきに眼をさらし、所々にふまん紙つけて、是一事かまへたる法師、隣座敷の賑かなるにおどり出、三人衆道の根本を論じ、役者の品評に及び、果ては此の法師「さてもの事に、京三珍居の子供役者の、善惡の評判、なたより名をさしてたづねませう、のこらず仰きいされい、是まばいまりめと口三味線にのせられ、よしなし事をうか／＼申ませうか。」

と是れより役者の評に移り

立役之部

上吉坂田藤十郎

替名伊左衛門

「法師の間ていはく、役者まゆるは、きには、竹島をあらため巻頭になをし、竹島のせらるゝ事、にせてにせられれ所あり、第一げいまやなれば、げいは役者の大根なれば、巻頭におくこの断り、尤可也、藤十郎には、げいせいはいの云たてより外、さらに今迄かはり所作を見ず、何のゆゑに巻頭におかるゝぞや、大だんこたへて」尤前評あしきにあられれその今迄かはりたる所作もせずして、ひさく京の見物に見あかれず、藤十郎くみ稱美せられ給ふは、さんだりはれたり、げいのありたけはたらかるゝ方よりは、まさりて徳有上手にあらずや。原來此人まばぬ役者に生れつゝかれたる所有り、されば此人かたづき玉ふさきく芝居はさながら、大まばぬのやうにきこえ、見物思ひ入格別なり(下略)

右の例にては全豹を窺ひがたきも、此の評判記は、前の『櫻欄帯』の評判に對し駁したるもの、坂田を揚げて、竹島を抑へぬ。當時は未だ定まれる評者なければ、所謂通なる人々が、最負くゝの役者を評判して、之れを本屋に與へ板行せしものなるべし。されば評者は成べく名の知れざるを欲し、且は他人を是非することなれば、開口を設けて他人の口に依て、評判せしむる方法を講ず、必竟役者へ對する斟酌に外ならじ。又一種の敬語あり、例へば此人といひ、或は殿といふ、兎角遠慮勝の所多し。但し前の『櫻欄帯』の一口評にはこれも要なけれど、『口三味線』に至り、段々藝評の微細に入るに従て、此の思ひ付あるは當然のことなり。然るに此の『口三味線』の作者が、年々評判記を作ることもなりても、此の法則を守り、開口は儀式のやうに附することとなり、又評判は大勢の口を假りてなましむる仕組となり、即ち問答辭を用ひ、今日にては此人など一種の敬語が、役者の評判には先例古格となりて存するもあかし。

此の『口三味線』が『櫻欄帯』に比して、いかほど進歩したる評判記なるかは、先づ三ヶ津を三巻に區分したること、挿繪を附し評判記に光彩を添へたること、開口を附し、多くの判者を拵へ、一種奇警の着眼と輕妙の文とを以て、斬新なる問答辭の藝評を肇め、所謂八文字屋評判記の基礎を確立したる等主なる點なりとす。但し位付は『櫻欄帯』も『口三味線』も、上、上吉、上上、上、中、上、中と階級は五段あるに過ぎず、爾來百五十年、維新前までに、評判の仕方が巧者になり、評裁にも多少の變化はありたれど、要するに舊格を守り、『口三味線』以外に一機軸を出さゞりしを思へば、此の評判記は此の時既に充分の發達をなしたるものといはざるべからず。『口三味線』一たび出て、評判記面目を改めしかば、二條正本屋九兵衛よりも右の作者に『役者一挺鼓』を作らしめき。八文字屋は商賣上喜ぶべきことにあらざれば、いかなる約束を結びしかは知らねど、遂に其積をして其の筆を縛り、正本屋方は圓水と號する人に書かしめ、其積は八文字屋の爲に専ら筆を執ることゝはなりぬ(『役者目利講』)。これ此の評判記が世間に喝采を博したる事實なりとす。『役者一挺三味線』は元祿十五年の八文字屋板なり。評判記の評裁は前に同じければいはず。さて是より寶永年間の評判記を擧ぐれば、

『役者三世相』  
『同 稽古三味線』  
『同 謀 火燧』

(寶永二年)  
(五年閏正月)  
(七年三月)

『同 友 吟 味』  
『同 胎 内 搜』

(四年三月)  
(六年三月)

等なり。右のうちには端本もあり、月日を記せざるもあれど、大概は三月付にして、正月付のものも三月に二のかはりの評判を出す例は未だ行はれざりし如し。尤も此の外に正月板のものもあるかも知るべからず、今は唯一部分に就て推量したるのみ。

此の頃評判記は他よりも板行せしと見え、『難波入江船』(上下二冊、西川書風、板元未詳)の如き、大坂のみの評判記あり。原來役者の評判には最負ありて、依怙の沙汰も少からず、兎角不公平に流れ、くろうとは淺ましきこと、思へりしか、其の開口に

(前略)成程御ていば御意の如くすしにても、挨拶が、最負があつては評判にあらず、去年の役者の評判を見るに、何ぞやら挨拶らしく、役者ごにも殿様つけて、いひたい事をも遠慮して、得いはぬやうすの書やう、まづわれは合點まいらぬ、よきはよく、あしきはあしく、齒にきぬきせず申すべし、後日に子共、役者聞てむねんにぞんとなば、すいぶん藝に氣を付けてはげんだがよいはづ云々

此の評判記は畫の様、舛裁より見れば、八文字屋板と殆ど相似たれど、或は柏屋にて出来たるものなるべし。そはともあれ、右の數言は今日よりいへば役者評判記に革新を催し、評判記の作者をして、批評家の如く、嚴然と局外に立ち、公平を保ち、是非の判者たる地位に高めんとしたる聲といはざるべからず。これ實に一進歩なり。

又寶永五年柏屋勘右衛門板「役者色將基」は、全部六冊の大評判記なり。これには挿畫なく、開口

一太夫	夕ぎり	引舟	あやめ
一太夫	かしはぎ	同	つがは
一太夫	小ぐら	同	まつ山
一太夫	きり山	同	おさは

▲中の町一文字屋七郎兵衛内

### 其五 遊女の『傾城色三味線』

もなし、江戸の巻は、日本はし小川彦九郎板を、柏屋にて取次げるものなり。頭書にいふ、此評判は子(寶永五)の正月に及、三ヶ津役者不殘評議致板行任候、尤前々より世間に評判多く出るさいへども、毎年同様にして板返し如く……其上推量書又は最負勝名々の詰開、上中下共に相違依有て、此度三ヶ津の役者一人宛所作細に改、大評判役者色將基大全綱目と名付け全部六冊に仕板行いたし申候、御望旁々機能く御吟味被成御求被下候とあり。これ八文字屋評判記が大に流行するにつれ、他の書肆にて競争をはじめたる一兆とも見らるべき歟。後に永代評判と稱するは是等をはじめとすべし。位付は寶永四年より白字の上を用ふ。

其積の作、浮世草子の八文字屋にて板行になりし初めは、『傾城色三味線』なり。『色三味線』は枕本五冊、繪は西川風、元祿十四年板にして、『口三味線』より二年後に由でき。一の巻「島原女郎惣名よせ」、二の巻「吉原女郎惣名よせ」、三の巻「大坂新町女郎惣名よせ」、四の巻「伏見鐘木町女郎名よせ」、五の巻「播磨室津女郎名よせ」等なり。一の巻「島原女郎名よせ」にて例せば、

一太夫 からはし  
(天神以下の名譽す)

右の如く、先づ大まがき六軒の名よせより、太夫、天神、鹿戀の總名よせ、端女郎、揚屋町廿四軒の揚屋、出口の茶屋、北の茶屋合せて廿軒の名、女郎の揚代、正月節句の庭錢が何程、揚屋の取錢がいくらといふこと迄、廊中一切の諸式を明細に書記して巻首に掲ぐ、即ち純然たる遊女の細見なり。而して此の細見に附するに、一條の小話を以てす。小話は必ず遊女のこと、吉原の細見にはまた吉原のことを綴れり。役者評判記の開口とは、文の長短、趣向の立やうこそ異なれ、彼にては粹のなれのはてが藝評をなす迄の順序を、面白く一條の小話に綴りて讀者を歎ばすど一般、此れにて、小話は細見の景物なり、其の景物が本文の細見よりも丁數の多きなどは、蓋し古風の愛嬌なり。一方には役者評判記を出し、一方には遊女の細見を板行して、専ら俗受に訴へたる八文字屋の着眼、なか／＼鋭しといふべし。然れども遊女細見をかねたる草子は、ひとり八文字屋のみにて出し、にはあらず。例へば『遊女懷中洗濯』(年號板元未詳、但し寶永頃の板)、『美景詩繪松』(寶永五年菊屋板)、『傾城手管三味線』(年號未詳中島板)等あまたあり。

因に記す、博文館の『珍本全集』に收めたる『色三味線』もこれと同本なれど、此の細見の部分を除きたるは、出版者の注意によるべけれど惜むべし。

此の細見は此の後八文字屋より出でし草子には餘り見受けず。『色三味線』に次で出板の早きもの

は『曲三味線』なるべし。

『傾城曲三味線』(枕本六冊)此の本、元板二種に就て調べたれど年號を詳にせず。されど其碩の言葉にも「色三味線、又は曲三味線、禁短氣」とあり、又『傾城伽羅三味線』(西澤朝義作)の序に、

世に三味線の類本みち／＼たり、或は曲色二挺連友繼などいづれも愚なく、さま／＼の秘曲を奏し云々

とあり。而して此の『伽羅三味線』は寶永五年もしくは六年板といふこと確實なれば、『曲三味線』は少くとも寶永五年前の板なるべし。『色三味線』以來凡六年の間には、「八文字屋板にては僅に此の一部といふ譯はなけれど、今はたゞ所見に就ていふのみ。前に數挺の三味線を挙げたるうち、『曲、色、二挺三味線』は八文字屋板、『連三味線』(寶永二、菊屋板)、『友三味線』(寶永五、板元未詳)等にして、此の頃三味線といふ題號の流行思ふべし。これ又八文字屋板の『口、色三味線』に負ふところなかるべからず。

因に記す、『曲三味線』といふ冊子は、『色競馬』、『榮大門屋敷』と、『長者機嫌袋』の三部を鑿案したるものにして、其碩が作中の尤も佳作とあれど、右は大概寶永二三年頃の板にして、未だ孰か先なるを知らず、されば『曲三味線』を右三部の鑿案なりとは容易に斷定しがたし。また此の本が尤も佳作といへるも、覺束なし。

『傾城傳受紙子』(枕本五冊、寶永七年、作者自笑)此の草子は赤穂義士敵討の話を綴りたるものにして、義士に縁故ある傾城みちのくといふが、辛苦艱難して、高師直が妾となり、四十七士に内應して、義士の爲に手柄をあらはすといふ筋。



『野白内證鏡』(枕本五冊、寶永七年、作者自笑)俗に字並どか稱して、永錢を以て吉凶禍福を占ふ法により、野郎白人の内證を許きたるもの、毎卷錢占の圖式を掲げたるなど、當時にありては斬新の思ひ付、頗る意匠を凝らしたるものなり。こゝに聊か注意すべきは、從來評判記に限らず、浮世草子にても、八文字屋板には、作者の名を署せざるが例なりき。然るに此の年(?)の作より、序文に作者八文字自笑と署せり。殊に本年二部の作あり、更に『禁短氣』板行のちらせあり。八文字屋の漸く盛大に向へるを知るべし。

『傾城禁短氣』枕本六冊、寶永八年作者自笑、此の草子は其積の傑作とて、既に人口に膾炙し、且は博文館の『其積自笑傑作集』に收められたれば、世の知る所なるべけれど、當時法話、談義の流行につれて、賛歎記より禁短氣の名を命じ、宗論に准らへ、談義にことよせて、衆道女色の優劣を辨じたる草子なり。此の趣向は寶永五年菊屋板の『風流三國志』三の卷「志の男色講談」、「志の禁談義」などに其の端を開けり。作者も自ら得意の作とあほしく、前の『傳受紙子』の卷末に、紙子傾城が敵討の後、尼となりて法話を演ずる所に、『傾城禁短氣』のちらせあり。又『内證鏡』の三卷末にも、

扱皆様へお断申上ます

傾城禁短氣先へ出し申管に評判の本に書のせ候へ共、少しいはく候ゆへ此内證鏡先へ出し申候、此跡へ追付來月中にちがひなく出し候、それゆへ書るし候

とあり、世間にも餘程待設けしことと思はる。而して少しいはく候ゆへとあるは何のいはくなるか、其積自笑の争端は此の邊にありしにあらざるか、そは次に説くこととすべし。此の『禁短氣』いで、八文字自笑の名は高くなりぬ。又『禁短氣』がいかに世間に持囃されしかば、是より凡三十年の後、寛保四年に、其の後篇として『情の手枕』(作者其積)あり。更に後れて明和二年に、江戸大傳馬町鶴隣堂より、『禁短氣』の次編、同三編(作者未詳、五冊もの大形枕本)を出し、又文政十二年には、大坂にて『禁短氣』を再板せり。以て其の一斑を窺ふべし。元禄十二年より寶永八年に至る間凡そ十二年に、八文字屋出版の主なるものは右の如し、なほ此の間に、『好色一代曾我』、『色情あい離形』、『御伽曾我』等、其の名を聞けど未だ見ず。寶永八年正徳と改元あり。正徳に入りて世に名高き其積自笑が確執はじまりぬ。

中 自正徳二年  
至 享保四年

其一 八文字屋と江島屋との對立

寶永七八兩年、八文字屋板の多きに比すれば、正徳二三年は、むしろ板行はかゝしからず。おもふに板元と作者の間に、既に紛紜を生じたるや明なり。そもく其積が八文字屋の爲に、『口三味線』を著はし、以來、一年正本屋へも『一挺鼓』を遣はしたる所、當時直に其の正本屋を斷りて専ら八文字屋の著作に従事せし事情は、今得て窺ふべからざるも、此の時八文字屋と其積との間に

は、或約束なくて叶はず。今より推測すれば、八文字屋は正本屋よりも高き報酬を拂ふとか、或は發賣高の歩合を入手せしむるとか、即ち板元と作者との間に、利益上の或約束ありしなるべし。さはれ自笑は、其積の作にて充分の利を收めながら、なほおのれが名を世間へ揚げんどの野心ありしかば、もとより其積承諾の上にて、實永七年頃より、作者八文字、自笑の名を掲げしが、世間は是迄も八文字屋本の作者を知らんと待設けし矢先き、自笑の名を見て、はじめて其の奇才に感伏し、忽ちにして自笑の名廣まりしや疑ひなし。然るに其積は初より名を出さず、又承諾の上にて自笑に名を記せしめたる位なれば、今に至り名を好む心はなけれど、されど自家の勞力にて他人の名聲を高むるが如きは、特別の場合を除きては、快からざるは人情なるべし。されば『禁短氣』を出すに當り、自笑の名を署することに就て、多少の悶着を生ぜしならん。蓋し故障ありて其の出板の遅れたるは參考すべき點なり。而して『禁短氣』は、著者板元の待設けたるよりも、更に世の喝采を博せしかば、自笑の名はますます揚りぬ。此の時自笑に謙讓の意あらばよかりしに、計こに出でずして、虚名を以て唯世間を瞞着せしに止まらで、なほ朋友知己の前にて『禁短氣』は自作なりと吹聴しつらんを、其積は之れをき、快々樂まざりしならん。蓋し争端は此の點なるべし。其積は自笑に掛合しも彼れ頑として應ぜず、乃ち作者争ひの端を開けり。就中『禁短氣』の作者争ひは後年まで絶えざりき、『自笑樂日記』にも、

愚老若かりしより、數多の戯書を著す事、十萬言に過ぎたり……樂日記を著して、筆を止むるに付て、將思ひ出しぬ、

昔禁短氣を述て板行し、其後佛原の狂言によせて、禁短氣の後篇を書おけりしが云々、と自ら名を署したる證を以て、旨く驚を烏にいひ黒めしなり。其積は名を奪はれたる事に就てはなほ忍ぶべき情實ありしなるべし。思ふに當時發賣高の最も多かりしは、草子よりも評判なるべければ、其積は此の評判記にて、其の利と彼れの勢とを殺ぎ、かくて自家の骨折に報い聊か不平を慰めんと思ひしなるべし。依て其の子をして江島屋市郎左衛門の名を繼がしめ、新に本屋の店を出し、さて八文字屋へは評判記の相板を申込みしに、自笑又斷乎として之れを拒絶したるのみならず、自家板行の草子もしくは狂言本等にて、あしさまに江島屋を誹謗しければ、其積は最早是迄なりと、遂に八文字屋と分離し、正徳四年正月には、評判記『役者目利講』を突然と板行し、口上の文を以て、單刀直入、八文字屋が内幕に斬入たり。

東西くさて別けて御断を申すは、役者評判本は中頃出水通和泉屋八左衛門と申草子や板行いたし、年々古板に書加へて或は役者舞臺、又櫻欄等など、外題を替へて出し候處に、此役者目利講の作者其積と申すべきもの三ヶ津を三卷にわけ、ひき切づの序をつけ、御断に上申又は白字の上など申位付を致して、役者目三味線と題號をつけ、ふや町八文字屋八左衛門へ遣し申せば早速板行にいたしぬ、それより毎年せがまれ、斟酌ながら年々仕り遣し候處に、又二條通正本屋九兵衛のたよりも一年餘儀なく頼まれ、止む事を得ずして、役者一挺つづみ申を仕遣候、然れども八文字やま、正本屋兩方かけ持に同ト事なりがたく、正本屋のたは開水と申す好入へ頼み、八文字屋方は例年たえず仕遣し候、五六年以來は評判の處ばかりは先格を以て、其年の狂言の當りを見て自分にもなるべき事と、評判の仕方を教へ、八左衛門に致させ、外題目録三ヶ津の序を仕遣し候、然るに此作者其積、一所の江島屋市郎左衛門と申す新本屋と役者評判本は向後八文字屋と相板にいたされ、末々

道入魂にせらるゝやうに、作者いろ／＼申せども、八文字屋一入していつまでも仕るべき由申きり、不同心にて却て江島屋方をさして似せ本、又はまぎらほしき草紙など出し候と、八文字屋より斷書出し候段作者身に仕候ては、心外の至りに存候、そも、八文字屋八左衛門と申草子屋は、何にて世間へ廣く名を發し候や、二條正本屋、同鶴屋は、古來より淨瑠璃本にて名を取、八文字屋は京芝居の歌舞妓本を板行仕候外、その名家名を御存知にても無之候、然る處此作者其積、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣し、其語り本を八文字屋へ遣し、板行させ候てより、年々の評判本は申におよばず、傾城色三味線、又は曲三味線、禁短氣、傳受紙子、色情あい離形、御伽會の類なぐさみの書、數年あまた遣し候處に、各々様の御意にりり八文字屋くは是より淨世本、評判本の名取のやうに罷りなり候事、八文字屋の功にて候や、作者其積のにて候や、此段は、かりながら世上の人さま御了簡可被下候、殊更作者の實名を出さず、作者八文字屋自笑と致させ候程の深切をへりみず今にては八文字屋と、名を取候上なれば、たゞへ鳥の母と書て板行仕出しても、八文字屋と申名にて賣申との所存、高鳥盡て良弓のくるまやらんにて、功を立遣し候作者の申分もちひず、作者一所の江島屋を削り、一人の功に可仕ぞんれん、是によつて當年より、江島屋方に役者評判本板行仕候以來は、毎年出し候間、御求可被下候、八文字屋方には今迄名をさらせ候作者の功を奪ひ、自分の功に仕度存念有之候へば、右之所世間へ披露いたす事氣の毒に存、かぶき本、配り看板等に、此方似せ本の或はまぎらほしき本など、小書をして八文字屋より出し候、右之通少しにても違ひたる事を、かく長々數書あらはし板行なるべきものに候や、まぎらほしきと申小書仕る手間にて、眞實まぎらほしきの似せ本のと申は、たゞへば八文字屋八左衛門板など、仕出し候は、まぎらほしきと申べく、あの方は八文字屋板、此方は江島屋板と仕候に、まぎらほしきと申わけは無御座候、其儘その作者の仕りたる振にて、新作出し候、八文字屋こそまぎらほしきと申べけれ、近頃片腹いたいせんさく、此方は數年おなトみの作者、御佳例の評判本、新規の作の八文字屋評判と、御見まがへ不被遊、御求御覽可被下候、扱京芝居の評判は、一座づゝ座づけに仕候間御まんべうに御一覽奉願候、追付評判のはトまり、さやうに御心得なされませう

正徳四年正月

江島屋市郎左衛門

満を持したる其積が鬱憤の矢は放たれ、而かも一々標的の圖星に命中したり。之れに對する八文字屋の復讐はいかに。其積に出し抜かれて、八文字屋一時の狼狽大方ならず。『目利講』に後ること一ヶ月、同年二月に漸く『役者色景圖』を出し、『目利講』の露骨的口上を打消し、自家の地位を保たんとして、ヤツキと盡力したるは、實に一奇觀なり。『色景圖』京の巻に、「祇園牛頭天王御託宣」と題し、

(前略) 扱毎年役者評判を書ついで、八文字屋が板行する事、芝居の爲役者のけみにもなること、いかほど神慮よろこばしき所に、當年午の年大評判とまゐりし、毛をふいて紙を求る目利講、古道具を買あつめるわけもない評判也、然るに年來八文字屋評判と沙汰する事、既に家の景圖なれば、當年の評判を役者色景圖と名づくべし。爰に目利講といへる評判本に、八文字屋が作を雜言したる慢心、いで／＼と替てさらすべし、先自利講の口上に、上中又は白字の上など、申位付をいたして、役者口三味線と題號して、江島屋の新作者がつくりたりと出たり、その口三味線よばり、八乳の猫の腹の皮ないぶんぞや、白字の位は口三味線より八年後、役者友吟味より付しぞ、是八文字が他の作を借ざる證據なり(下略)

然れども八文字屋の辯駁は一も肯綮に中らず、唯些細の揚足を取て、僅に罵られたる怨を報ずるに外ならず。八文字が他の作を借ざる證據の如きは、實に薄弱にして、『目利講』の大打撃を打戻す力毫もなし。然れども『色景圖』はなほも飽き足らずや江戸の巻にて「評判の毒付」と題し、

一 京都は四芝居にて名代まぼしや初太夫、座本光山七三郎座、正月廿五日が顔みせ仕候、他所より出し候目利講の評判には此座なく候

一 京都名代はていや梅之丞、座本中村新五郎座は、二月四日が顔みせ仕候には目利講の評判に右の新五郎座をのせ申候は

誠に『目利講』の此の粗漏を數へ立たるは多少道理あるに似たれど、其の實あて、推量の評判、また些細の間違は、ひとり『目利講』に限らざれば、これはた出版延引の口實に外ならず。又自笑が作者たる地位に對しての辨駁は、『伊勢風流』の序に、

後世しらすよばるゝ此古入道、久しく鶴翁の遺冊を懐ひて、かれこれ書つられけるに、世には物むつかしき人あり、それも是も他の筆をかりて、我名を顯はすさいへり、されば同藝相れたむならひさは侍れども、是又糸竹の道にもあらず、生兵法のほでてんがう、藏醫者の手柄話、いけすのよれの客よばはり、儒者の堅い自慢、世間法師の受賣談義、いづれかそしりの種ならんはあらざりき、今いせ物語の六の巻、北の窓をたて、嵐をふせきしつれんに、さゝのひぬ。耻なりく、死園の策、世に喧嘩の中買あらば、予は道をよけてあらそふ事をまぬかれ、木で作りし鶴の時もつくられば、蹴爪の生るまゝに幾久しく、筆さきにて御意得ればならぬで、ござりますと爾曰

作者 八文字 自笑

これ又徒らに文を弄したるのみ。もし自笑にして、『禁短氣』を自作と強辯すれば、其積が没後『樂日記』に述ぶべき要やある、何ぞ此の時一言『禁短氣』に及ばざりしぞ。蓋し世間を欺くも、流石に作者其の人を欺き得ざりしならん。かくして其積自笑の争論は、正徳四年に端緒を開き、是れ

より年々絶えず。同五年江島屋板の『役者返魂香』の口上にも、評判作者其積として断りあり、

此返魂香の作者は去春も目利講に印候通、八文字屋八左衛門去る卯年(元禄十二年)口三味線と申評判記を綴り候てより年々八文字屋方へ遣し、去る巳の年まで十五年が間仕候作者にて候へ共、八文字屋身が成仕形在之候に付、去年の春より此江島やかたへ仕遣し候ゆへ、八文字屋方には去年より素人の新作者をやまひ、右年々の作者のふりを仕、世間の人様へがづけ申候、殊に去冬狂言本の口書にめつたる評判出し候まは、成申分に候也、毎年御佳例の作者の評判は此返魂香と申本にて御座候間、外題御吟味なされ御求め可被下候、尤八文字屋方出候評判本其外風流本共に、まへの作者さかばり素人の新作に御座候、自今は江島やま申本やの方が御なすみの作者に紛れ無御座候間珍敷趣向共御よみくらへ被遊、御覽可被下候、紛敷申者在之候故御断申上候

江島屋方にては八文字屋の先を越さんと出版を急ぎ、八文字屋は新作者にてはかくしからず、兩方とも正月の評判記なるに拘らず、今年も亦八文字屋方にては一ヶ月も遅れて出でしと見え、直に右評判記の缺點を搜し、『役者懷世帯』は、

例年の評判に功成名遂けて争はぬ凡例

一念を入れればならざるもの

一 早過てうけさらぬもの

縁組と役者評判  
盆の廻りと役者評判

競馬流鏝馬扱は番船にひさしく他と争ひて早を賞説なりせば、評判本も霜月の中比にも出し御目につけ候半なれども、すでに當年も大阪の芝居京の芝居そろひかれ、漸く今日にまかりなり候  
一 京よし澤あやめ紋所、桐のさうなかやうにいたしてあり(即ち『返魂香』京之巻若女形極上上吉よし澤あやめの紋所丸のうち、桐のさうを誤て天地に印せるを指せるなり)

一 大阪は五芝居なり、他所より出候は三芝居計評入れ、尤八重桐座と嵐三右衛門座不足

一 京葛城常世座いまだ顔みせ仕らず、去かれ共名代座本相極るうへは此世帯にはあらた役者立を印し申候

一 大阪の座本篠塚庄松當顔みせより宗八名を替しを、他所の評判に宗八さいふ名みえず、是等の畧を御考下さるべく候、

作者争ひは去年と申又當年手前より申もおこなげなくやま、いづれも様のお手前を存下さしひかへ申上候已上

作者 八文字自笑

此の外評判の句中他の草子にも互に争ひの文字はあれどみな省きつ。以上引きし例にて、其積目笑が争點は粗知るに至りつべし。要するに八文字屋方は始終受太刀の姿にて、其積が『目利講』の攻撃に應ずべき手強き辨駁は一も出でず。これ實に八文字屋が此の事件に就ては、重々の弱點あればなるべし。

今日に於て作者眞偽の争をしたらんには、忽ち其積の方へ人望の歸すべきは疑ひなけれど、當時は既に久しく八文字自笑の名聞えて、却て江島屋其積の名はじめてなれば、實は八文字屋が作者の正統と認められ、江島屋はよし或一部の人には信用ありきとするも。到底俗受の讀者を動かす能はず、江島屋こそ驚を鳥にいひ黒めんとする似而非板元と疑はれけん、評判記、草子どもにはかくしく賣れず。是等の事情は、正徳四年五年あたりの板には、單に江島屋市郎左衛門と記せど、六年より享保二三年頃の板には、評判記は正本屋、鶴屋、江島屋三軒相板となり、其積作の草子は江島屋、菊屋、谷村などより出版し、互にちらせを交換せり。これ併しながら江島屋なる新本屋が一本立の出来ぬにより、日常八文字屋の盛大を抑へんと思へる本屋ども、其積を助けて

相連合し、八文字屋に敵對せしものと知るべし。然れども八文字屋が一度收めたる信用は、彼等遂に奪ふ能はざりき。然れども八文字屋は、よし其の信用は落さざりきとするも、立作者の其積に脱せられ、他の本屋は虚に乗じて我れを陥れんとする有様なれば、久しく對時の望なき勿論なりと、自笑早くも之れを觀破し遂に我を折て和を其積に申入れし所、即ち其積も困り、八文字屋も困り、こゝへ中裁入りて相方漸く和解するに至りしならん。評判記の上にて見れば、兩家確執の氣焔は次第に薄らぎて、享保二三年には、其の痕跡を認めぬ迄に和さぬ。宜なる哉、享保四年には、兩家和睦を事實の上に徴するを得たり。同年正月板『役者金化粧』の序に、

女は己を悦ぶ者の爲に容り、おもはぬ者の相手にはたのんでもならぬものなり、傾城買のくせつも我おもふものならん

はせぬ物ぞかし、愛を以て見た時は、きのふ迄譏りあふたも、互に心にいさむら、かなはぬ筆先で頁まいさいさいし、今日おもひなをしてみれば、夕霧が口舌にひさし、去春よりいひあふたさかしく、しい顔をつくりなをし、わつさり金化粧して、いつ迄もはらぬ中の相板、すりあげた額に角の立ぬやうに、まん丸びたいの置鬘の、濃中さなつたは下地がきれぬ心の糸の、引あふた口、三味線の柏子につて、三ヶ津の役者藝評を弘め初てより、毎年定て御佳例と成て、世の人さまのおもて難しに預る此忝さをおもへば、そもちも木望のいたり、随分氣をつけて評判に念をいりや、五六年も譏りつけた口ゆへか、ちさ此座の評判にもいひたい所があるが、一不審もつてまいらふか、ハテそりや春永に役者五重相傳の、二の替りの評判で聞もいたさふ、申もいたさふ、先愛は今までさちがふて、あらたまりぬる春のめでたさ、中なわりの手はすめなれば、互に機嫌ようにつこりさ笑ふて引幕く

于時めでたい年のうれしい春

作者 八文字 自笑  
島 其積

此の評判の奥付には、

享保四年亥ノ正月吉日

八文字屋八左衛門 相板

と記しぬ。右の序文は其積の筆なるべく、此の評判記は八文字屋方にて作りしものなるべし、されば其積はなほいひたき節はあれど、今度はいはずとなり、相板はもと其積が申込み、自笑は此の和陸に就て、充分地歩を譲りしこと明なり。江島其積の名が述作の上に記されしは此の時をばじめとせり。爾來其積の作には必ず名あり。八文字屋より出板の本には自笑と連名し、他の菊屋などより出したるものは單に其積と記せり。然れども享保以前の作には、其積の名あるは稀なり。其積自笑の確執は正徳四年に端を開き、享保四年に和解せり。正徳は六年にして改元ありしかば其の間實に六年なりき。

其二 八文字屋もの、變化傳奇もの、氣質もの

八文字、江島兩家對立の間、相方より出板したる草子の主なるものを擧ぐれば、

八文字屋版	五册	(正徳三年)
『百姓盛衰記』	五册	(正徳三年)
兩家分離前の板行		
『風流詭平家』	五册	(正徳五年)
『義經風流鑑』	五册	(正徳五年)

『分里醫行脚』	五册	(正徳六年)
『傾城野群談』	五册	
『野傾咲分色存』	五册	(享保二年)
『野傾髮透油』	五册	
江島屋版		
『丹波太郎物語』	三册	
『野傾旅葛籠』	五册	(正徳五年)
『世間子息氣質』	五册	
『當世名代男』	五册	(正徳六年)
『世間娘形氣』	五册	(享保二年)
『國姓爺民朝太平記』	六册	(享保三年)
『役者不斷容氣』	六册	(享保三年)

三ヶ津永代評判

右は板行の一部分に止まるべしといへども、また其の一斑を窺ふに足るべし。蓋し『百姓盛衰記』『民朝太平記』、是等は傳奇ものといふべきか、即ち他家騒動、敵討、さては軍談等に胚胎したる草子なり。そもく傳奇もの、爰に一生面を開きしは、既に二十年來、世間は彼の輕浮なる傾城野郎の内幕話しに聞き飽きをして、何か變りたる趣向の讀ものを要せし折柄、恰もよし、是より以前『通俗唐太宗軍鑑』(元祿の末)、『十二朝軍談』(正徳の頃)等、漢土軍書本の翻譯成り、一方に

は『武道三國志』(正徳二)の如き敵討もの、『義貞勳功記』(正徳五)の如き雜史類行はれ、又當時實際に生りし家騒動の事件を時代ものに敷衍すること行はれしかば、是等を母として、八文字屋ものに、傳奇ものを生みしなり、されど其の實は唯世間の流行に隨ひしまでの趣向なりき。更に一機軸を出だしたりと稱すべきは、氣質ものは是れなり。『役者我身寶』の奥に、

一世間子息氣質

全部

五卷

付り 一度は出さる瘧瘡色狂ひおやくもあつてきた身

右は、りし趣向をわつめ本出し置申候間御求め御覽被下候

どのひろめあり。これは其積が自笑と分離中、江島屋にて新案の作なり。かたぎの名は西鶴の『女容氣』にはじまりしならん。されは八文字屋もの、かたぎものはこの『子息かたぎ』ぞはじめなる。これに次で『娘形氣』あり、谷村板に『遊女容氣』あり。此のかたぎもの、出しは、八文字屋もの、變化のみにあらず、作者其積が蕩樂の夢裡より脱して、漸く實際界に入りし作者身上の變轉といはざるべからず。此のかたぎもの、新案は、其積が如何しても八文字屋を壓倒せんと刻苦したる賜なり。『役者評判記』は、兩家對立の間、前に載せたる外、『役者職敵』、『同我身寶』二部ともに江島屋板、八文字屋板にもなほあるべし。さて評判記の變遷は、唯役者の位付繁多になりし外には、一種の褒美づけ、即ち「無頭」、「今風」、「當り男」、「功者」、「風替り」など簡單の語を以て、役者の特質をあらはしたるが此の頃の評判記に見ゆ。

下 自享保五年  
至 寶曆明和

其 一 作家としての其積

畫工 西川 祐信

前章に述べたる如く、江島屋に於ては、八文字屋と競争の結果として、新規の工風のかたぎものを案出せり。然るに八文字屋に於ては、此の新趣向なきのみならず、當時の風潮につれて傳奇も概ね野郎傾城の内話、即ち好色本類の趣向を脱せざりしかば、此の間に於て浮世草子の上に一異彩をも發せざりき。蓋し『役者目利講』の説によれば、當時新作者を頼みて、著作に従事せしめたりといへり。今日にては自笑は多少の文才ありて、著述もいくらかあるべしとの説もあり。尤も自笑は其積の教を受けて、役者評判記の筆をとりし人なれば、思ふに八文字屋の板の草子、此の間に自笑の作あらば一二部もあるべし。又新作者にも頼みしならんか、されどいづれにもせよ此の時の八文字屋板は、評判記、草子ともに拙劣にして見るに足らず、之れに反して江島屋板は、其積が一生懸命の作のみなれば、評判記の開口といひ、草子といひ、殊に傑出したるもの多し。さて其積は自笑と和解したる後、江島屋なる本屋は依然として存立し、其の當座は八文字屋と相板せり。而して江島屋が全く本屋を止めしは、享保九年なるが如し。其の證は享保八年板『役者春空酒』まで、八文字屋江島屋の名を列記すれども、同九年『役者三友會』に至りて、江島屋と

相板の名目全く消え、其の後は江島屋の名を見ず。依て江島屋の銘打たる作は、正徳四年より、享保八年迄の板と知るべし。此の頃より役者評判記はますく行はれ、八文字屋の外、鶴屋、正本屋よりも出版し、其積が序文を附したるもあり。兎に角作者争は無功にあらざりしが如し。其積は新本屋を出し、経験なかりし爲に、其の本が賣れず、板元にて少からざる損乏を來したるに相違なきも、之れが爲に其積といふ奇才の作家、これ迄八文字屋ものうちに潜みしことを世間へ紹介したるは、即ち有形に負けて、無形には勝利を得たりといふべし。是より其積の名聲は高く揚りぬ。享保中頃よりは草子を出板する程の家は、争て其積が稿を求めき。其積は此の時に當り、最早八文字屋抱つけの作家にあらず。彼れは世間の作家として立ち、多くの板元をして其の門に伺候せしめたりき。是れ其積が全盛の時代なり。今享保の初年より其積没年に至る、主なる作を擧ぐれば、次の如し。

- 八文字屋
- 〔傾城電昭君〕 五册 (享保四年)
- 作者未詳
- 〔役者色仕組〕 五册 (同 五年)
- 〔女將門七人化粧〕 五册
- 〔櫻曾我女時宗〕 五册 (同 八年)
- 〔風流七小町〕 五册

- 〔出世握虎昔物語〕 五册 (同 十一年)
- 〔本朝會稽山〕 五册 (同 十三年)
- 〔記録曾我女黒船〕 五册 (同 十五年)
- 〔善惡身持扇〕 三册 (同 十六年)
- 〔風流東大全〕 五册
- 〔奥州軍記〕 五册
- 菊屋其他の板元
- 〔商人家職訓〕 五册 (年號未詳享保十六年迄)
- 〔義經倭軍談〕 六册 (同 十五年)
- 〔花實義經記〕 五册 (同 十八年)
- 〔世間手代氣實〕 五册 (同 廿年)
- 〔鬼一法眼虎の巻〕 七册 (同 廿一年)
- 〔商人軍配團〕 五册
- 〔渡世身持談義〕 五册
- 〔咲分五人塙〕 五册
- 〔武道近江八景〕 五册
- 享保二十一年元文三改元
- 〔御伽名代紙衣〕 六册 (元文三年)
- 〔其積置土産〕 五册



『藤太平記』	五册	(同十七年)
『楠軍法鑑櫻』	五册	
『傾城歌三味線』	五册	
『那智御山手管瀧』	五册	(同十八年)
『傾城友三味線』	五册	(同十九年)
『梅若丸一代記』	五册	
『風流四海硯』	五册	
『風流連理戀』	五册	(同二十年)
『風流軍配團』	五册	
『浮世親仁氣質』	五册	(同廿一年)
『高砂大島臺』	五册	(元文二年)
『兼好一代記』	五册	
元文六年寛保と改元		
『其磧諸國物語』	五册	(寛保四年)
『傾城情の手枕』	五册	

右のうち其の八分通りは京都寺町通松原上町東側菊屋七郎兵衛開板にして、菊屋は八文字屋に次ぐ草子の板元なり。

右書目は八文字屋には、其磧の作ならぬも混じ居るべく、又年號に多少の前後あるかも計られず。

これを總ぶるに、享保以後の作は、好色本退々跡を絶らて、傳奇もの次第に榮えしを見るべし。而して其磧が此の間の多作、前年の比にあらざ、但し享保以後の作には、『諸國物語』其の他三四部を除きては、實に千篇一律、是れ又寶永正徳の趣向に一々變化ありしとの比にあらざ。要するに前は主に創作に屬し、後は専ら翻案にかかればなり。又本の形よりいへば、八文字屋もの、早き所は概ね枕本にして、享保の末、殊に菊屋板は普通の美濃板なり。故に其磧は前半期に名編多く、また枕本に佳作多し。

こゝに一言加へたきは畫師西川祐信が事なり。『浮世畫類考』に「八文字屋本にて祐信が初心の頃畫きぬと見ゆるもの多し、畫名は記さしれども此の人と見ゆ」と記せり。祐信は師宣以來浮世繪の名家にして、其磧、自笑と時代は同うせり。其の畫本は菊屋喜兵衛板最も多く、其のうち『繪本答話鑑』、『同噺艸』、『女風俗玉鑑』などは、其磧が小書したるものといふ。八文字屋よりも『西川ひな形』、『百人女郎品定』其外風俗畫を多く出版せり。今西川が畫風より察するに、八文字屋板は、評判記、浮世草子ともに、元祿より享保の末まで、過半祐信風の筆意に似たり。菊屋板の其磧作も西川畫風なり。八文字屋、江島屋、菊屋を通じて、其磧作は大概西川派が畫きしものと思はる、而して評判記、浮世草子、西川が筆になりしもの百を以て數ふべし。八文字屋もの、速に世間へ廣まりしは、其磧といふ才筆の外に、祐信が艶麗なる畫風與て力あり。希代の二名家を得て、板元の利と名とを兩全からしめたる自笑は僥倖の人とやいはん。

其二 其積置土産

其積は享保を盛時として終に他界の客とはなりぬ。今其の事蹟を傳ふるものなし。たまく元文三年菊屋より出し『其積置土産』にて、其の消息を得たり。同書の序に

風はかたちなふして松にひびく、いにし二萬翁の遺札を味はふて其積生涯中述作する所の假名草子世にはびこりぬ、堅固なるふでの七十年はたつのさしのみな月比に此世をさりぬ、書殘せし反古のうちより一書を得たり、書林何某目出度春の一興にもせんまをまかせて其積置土産と名付るものなりし

洛東愚子 其 跡

とあり。其跡は即ち其積が子息にして、江島屋市郎左衛門の名を繼ぎ、新本屋の主人となりし人なるべし。按ずるに辰の年は元文元年に當れば、同年六月に七十歳を一期として身まかりきと覺ゆ。されば其積が名ある作にて元文以後のものは、享保中に述作したるを、本屋にて彼是れ遅れて世に出し、ものならん。かゝる例は前にもあり、『傾城歌三味線』は享保八年に追付板行のえらせありながら、實際は同十七年、此の間九年の有餘あり。併し『傾城情の手枕』は寛保四年、其積没後九年目に於て、板元もむしろ縁故薄き、江戸書坊升屋、信濃屋、京書林川勝等なり。眞偽のせんさく今は要なければ止むべし。

其積が述作百に上るといへども、其の事蹟傳はらず、天明の頃其蝸翁が『翁草』に其の一斑を記し、且其の文にも論及したる節あり。

(前略)又中頃此(淨るり)文句の作者に近松門左衛門といふもの出て、彼が文勢は人を寒からしむる言葉多し、譬は蝶の翼の

其三 八文字屋の衰運 作者多田南嶺

白粉を草にこぼして棺には鶴の霜毛を脱掛る杯、是等は老杜が對句を厭すべし、又八文字屋自笑が浮世双紙の編者に、江島其積といへる有り、よく世の情をのぶ、筆勢をさく近松に並ぶ所謂曲三味線、色三味線、契情禁短氣はたまるの容氣類などは、今の世の人も之を詠ぶ、されども淨瑠璃を書く事は成らず、近松は又双紙を作るを得ず、其差別をいかにいふに、其積が作文にては人形の働き薄く、近松草紙を綴れば文勢過ぎて人情くはしからず、己々が得たる所古今以同トと、實にや近松と其積とはおのづから其の才異なれり。蓋し近松が戯曲作者となり、其積が小説家となる、皆これ天稟とやいはん。『翁草』の如きは、むめて其積が知己と稱すべし。

其積に代り、八文字屋の作者となりしは、多田南嶺なりき。南嶺は國學者にして坪井鶴翁が門人なり。典故に通じ又俳諧を半時庵談々に學び、男齡と號す。後ち南嶺と改め又桂秋齋とも號しけりどぞ。南嶺は別に一家をなす人なれば、其が詳しき事は他日に譲り、爰には唯八文字屋に關係の大略を述ぶるに過ぎず。性質不羈豪放、所謂學者風にあらずして、好んで戯作に従事しぬ。其の作は朋友知己の間に起りし事、又其の人物を譏りたるもありしかば、兎角學者間には今に外道の如く目せらるゝといへども、而かも其の奇才たることに異論なし。當時南嶺は自ら名を掲げざれども、左の書目のうち幾部かは南嶺が作るべし。

『武遊双紙巴』 (元文四年、作者自笑)  
『善光倭丹前』 (同六年、同自笑其笑)

『女非人綴録』

(寛保二年、作者自笑其笑)

『鎌倉袖日記』

(同 三年、同)

『今昔出世扇』

(延享二年、同)

『自笑樂日記』

(同 四年、同)

『花楓劔本地』

(寛延二年、同 其笑瑞笑)

『道成寺妓柳』

(同 四年、同)

就中『武遊双巴』、『袖日記』等は南嶺作として今世に知らる。又南嶺は草子のみならず、評判記にも指を染めきと見え、『翁草』に「近時南嶺が書きし役者大全、或は耳塵集など」とあり。すなはち『役者大全』(寛延三年)は三ヶ津役者の總評にして凡そ十年に一度づゝ改むる仕組の永代評判記の一種なり。又『耳塵集』(同年)は俳家七部書の一部にして、昔し道外形の名人と聞えたる金子吉三郎が云殘せし言葉を集めしもの。其鯛翁の説の如く、かゝる果敢なき編輯に預りぬとすれば、南嶺が手に成りし評判記も幾部かあるべし。八文字屋の内幕には、いつも有力の作家潜伏し、表面には自笑、其笑、瑞笑の徒、責めに當れり、彼等は畢竟作者の署名人とも謂つべき也。

自笑は『樂日記』を名残りとして此世を去りぬ。其の跋に、此の『自笑樂日記』が筆をさめなる由を述べ、其笑は子なり、瑞笑は孫なりと二人の相續者を紹介して、其の終りに

霜枯はさもあれ龜の長齡草

八文字 自 笑

と記せり。齡は「九十歳に近き長壽」と其の序文に見えたり。此の『樂日記』には延享四年とあれど

も、『曲亭漫筆』には、自笑は延享二年十一月没し、年八十餘、京二條寺町本覺寺に墓ありと記せり。蓋し『樂日記』は板行の年月を記せしものなるべく、馬琴は親しく其の家就て聞きし所なれば、確實なるべし。

其蹟が稀有の文才を一生我物顔に操りて、九十にちかき高齡を有ちし僥倖の老翁も天命には打勝たれず、八文字屋も最早末運に近きけり。

かくて自笑身まかりし後五年、南嶺もまた五十三歳にして、寛延三年九月十二日没しぬ。『世間母親容質』は、其の遺作なり。南嶺が没後二年、寶曆二年板行せられき。八文字屋の主體たる其蹟、自笑去り、又南嶺之れに續きては、其笑、瑞笑、白露輩幾人ありとも、唯作者の名を汚すのみ。『翁艸』に云、

(前畧)南嶺は其蹟を欺く計に作意巧なれ共、其情陋うして、其蹟の上に立ん事かたし、それより下つた、樂て云ふべき作者なし、今世にちらばふよしなし事を見れば、つかまへ所もなき莊子のうへ行、うその出来損ひにて、筆しぶり文章なまりて評すべき類にあらず

と、其鯛翁暗に白露等の凡庸を嘲りしなり。當時の作者は其の器にあらず、徒らに古人の糟粕を嘗めて、唯一時の出板に間に合せたるに過ぎず。されども、流石に五六十年の老舗、殊に役者評判記、芝居道の書物などは、別に天才を要する次第もなければ、老練と經驗とにて家名と信用とを保ちしは、まことに先祖の餘徳、所謂惰力の作用なり。寶曆に至りては、其笑は自笑と改め、

其の他八文字屋の作者に、自碩、李秀、素玉、かんろなどいへる名あれども、未だ彼等の何人なるかを詳にせず。なほ八文字屋は明和安永の頃まで續きけれども、此の頃は眞に名あつて實なし。小川顯道が『塵塚談』に

百四十二

京都八文字屋浮世紙五冊、役者評判記の事自笑其碩といふ者述作して毎年正月二日定式にて大傳馬町鱗形屋孫兵衛といふ繪草紙問屋賣出せり、五冊ものにて名文も多し、評判記は京大坂江戸芝居歌舞伎役者の顔見せ狂言の善惡の評判なり、顔見せ狂言十一月朔日よりしむれど二三日の内は式のみにして狂言は省略す、やうく五六日頃より取る(？)狂言なるを評判を記し梓行し正月にて江戸にて賣弘む、誠に速なるこゝ驚入たる仕業なり、延享寛延のころは兩書とも皆人待兼ふる事にてありしが、五冊物は寶曆の末より絶て梓行なし、評判記は京都にて作りて今以て出れども正月二日より出す、程過ぎて江戸へ來るなり其故に折ふし江戸にて役者ばかりの評判をこしらへ梓行しけれども江戸作は人々さらに賞翫せず

と見えたり。馬琴は享和二年の夏漫遊の序に親しく八文字屋に就き、其碩、自笑が傳を尋ねけれども詳ならず。當時の主人は四代目にして、近頃京を去りて大坂安堂寺町に移り住みきとぞ。さしも久しき櫻木の名所も、こゝに絶えて今は名のみぞ香しく残りける。

因に記す、『曲亭漫筆』に、最初其碩自笑名を争ひ和睦したる後、再び争論して絶交したるやに記し、又南嶺は其の絶交の時、自笑に頼まれて草子を作りし如く記せし、其碩、自笑の争ひは一度にして、南嶺は其碩没後の作者なり。漫筆の記するところは稍事實を混同したるに似たり。

これを要するに、八文字屋ものは、上は西鶴を受けて、元禄十二年よりはじまり、寶永、享保、寶曆を通じて、凡七十年間、下は文化、文政度の中間を繋ぐべき、文學史上、長き小説の連鎖なり。

教訓もの及び怪談もの、作者

『好色一代男』出で、草子はこゝに一變し、戯作は過半好色もの、の押領するところとなりて、寛文に榮えたる教訓ものは其の領分を縮少せられたるは事實なれども、なほ一方に割據して其の餘威を輝かしけり。西鶴の如きも好色もの、の作者なる外には、當時有數の教訓もの、の作者にて、其の著また少からず、すなはち『本朝二十不孝』、『武道傳來記』、『日本永代藏』、『胸算用』の如きこれなり。これと共に寛文の假名草子中より脈を傳へて、好色ものに對峙して勢力を逞ふしたるは、彼の了意が『伽婢子』の種類なる怪談ものにして、元禄寶永の間其の作者頗る多し。今これらに屬する主なる人々を列擧すれば、教訓ものには、北條團水、月尋堂あり。怪談ものには林文會堂、青木鷺水あり。降て享保、明和に至りては、『これに類する戯作枚擧に遑あらず、彼の『古今奇談英草子』(寛延二年板)其の後編なる『繁夜話』(明和三年)さては『雨月物語』の如き、みな伽はなし、百物語の系統を承けて、江戸時代に稗史の一要素とはなりぬ。近路行者の津賀六藏、和澤太郎の上田秋成も、小説家としては實に此の怪談もの、の作者に屬す。

北條團水

團水は難波俳林の一人にして、はじめ椎本才磨が門人なり。白眼居士と號す。生涯清貧を樂んで

阮籍が操を守りきといふ。(『俳家奇人談』)

洛陽を去て七年、派華西鶴が草庵を守る云々

團水は後ち西鶴の弟子となり、其の歿するや、自ら西鶴庵の跡を継ぎ、俳諧點者として、其の舊庵を守りしこと實に七年に及び、此の時京部に歸りしと覺ゆ。團水は俳諧師として立ち、戯作はもとより餘業なれども、文名は當時に聞え、月尋堂等とならび、教訓もの、作者なり。戯號を鳳城團水といひ、又滑稽堂の主人、團粹然和南などを用ふ。正徳元年正月四日歿しぬ、享年實に四十九。

團水の作は、

- 『日本新永代藏』 六册 (正徳三年版)
- 『本朝智惠鑑』 五册 (同年版)
- 『おきこだて』 五册
- 一名『武道張合大鑑』ともいふ
- 『一夜船』 五册
- 『正月揃』 六册
- 『武道一覽』 八册
- 『獨鈷鎌論』 二册

等は、板行の年月未詳、隨筆牀の戯作にして、寛文頃の戯作に一進歩をも與へず、殊に其の得意とする所の博識は、これ又自ら古今和漢の書に涉りて得たる知識にはあらで、全く前の元隣、了意等が唾液を舐めたるに外ならず。或は儒釋道に辿り、或は諸史百家に出入して、全文殆ど古人の秀句、然らざれば古事の點綴、其の書目を列擧するや、作者はさながら一個の雜書架の如し。此の瑕疵の少きは『新永代藏』にして、團水作中の名作なり。然れどもこれを西鶴が作に比するに、團水の筆は暢びず、たゞ事實を記するに止まりて趣味に乏し。

### 月尋堂

月尋堂は未だ其の何人の號なるかを詳にせず。寶永、正徳の間三四部の浮世草子に、其の名あるを見て、此の作者あることを知る。今世に傳はれるは

- 『今様二十四孝』 六册 (寶永六年版)
- 『兄弟善惡車』 六册 (同年頃)
- 『子孫大黒柱』 六册 (未詳)
- 『武道眞砂實記』 五册 (明和九年板)
- 『世間用心記』 五册 (明和十年板)

等あり、其の標題を一見したる所にて、教訓もの、作者なることを知るべし。後の二部に明和

の年號あるは、再版もしくば、作者存命の節は、餘り流行せざりしが故、版本を其の儘藏して、後に年號のみを改め版行したるものなるべし。

月尋堂は北京散人、また篆書にて看花齋と讀まるべき別號あり。又『用心記』の序には「定延狂書」、「廉長」の押印あれども、未だ其の通稱を考へず。其の作は多く京都の書肆より出版せられ、北京散人と號するに依て考ふるに、或は洛北の某所に住へりし人なるべし。畫家などの例によれば、號の頭字に月の字を有するは多くは桑門の人に屬す。そもく月尋堂は俗なるか、僧なるか、看花といひ、月尋といふ、いかさま世塵を避けて風流を望むの意ならんが、さるにても看花齋とは餘りに通俗過ぎたる號といふべし。思ふに其の頃さる寺の住持などの、世を忍ぶ戯れの名にや。よし歴々なる僧籍に在る人ならずとも、たしかに長明、兼好が人行を慕ふの世捨人、彼れは松雲子了意の徒ならねば、恐らくは西鶴が流れを汲むの隱士なるべし。

駒の情は春くれば風にいばひ、狗は秋にぬんよくをおこすさいへり、まして人の心の美風麗姿になつむ事、かしこい人ばかりだけのほまりあり、虚は虚のますこし、半粹もさらなり、さかく土農工商坊主も神祇も色にあふてはらつちもなふ身を棒にふる事、まかる人もまかる人も、まんでいにおめてはかはらす、世のあらましいふにかたるに此うまき事、外に似たたのしみもあらず、すつる命をちりさも思はず、のがる、世の露、草に起、木かげに寝て、月にむかしのまのふ夜をかこちあつてすぎたるほこりぎすにくせつのはらみ句、樂なる身は今のすみぞめ、またる者なしまからる人もたす、法師は木のまたからむまれたやうに、色こそつうせぬさおもふもおかしや、われら今までのあくしやう、申さばくちびるもちびなん、書ばうつばりに充らん、まふて見たあまは空々、トやくは金銀、是なふてするはあほうのうはもり、あつてせぬやつはにげ

これ髣髴たる作者の傍ならずや、我れとても其の以前は随分と遊興も盡し、悪性も働きし身の果、其れを一々書き綴らんか、巻は積みて牛に汗し棟にも充ちなん、過ぎし昔しを想ひやれば、何に譬へんあさぼらけ、漕ぎゆく舟のあとの白波、悟て見れば空々寂々、嗚呼我れながら愚なりき、と覺めたるに似て覺めやらす、感慨無量、慙愧心に充ちて汪溢此の二三篇をなしたるか。あはれ作者は如何なる人の末路ぞや。

『今様二十四孝』

『兄弟善惡車』は未讀の書なれども、他の四部のうち、月尋堂の名作は『今様二十四孝』なるべし。二十四ヶ條の孝子の話し、當時の世話を、一部に收めたる作なり。勿論續きものにあらざれど、短き物語の好模範として見るべく、文は俗文なれども、其積ほど野卑に流れず、むしろや、平易なる西鶴の文なるが如し。今其の中の一篇「布施にひく三味線」を約して、聊か作者を知るの媒介とせん、一人の世捨人、夕まぐれに、こぬか雨に袖かさしつゝ、行けば、

次第にぼろつきて、此頃もよほせし空のけはひ、是は本雨になりけるよき、たいすむ野の藁門、まほらしうは見えながら、荒たるかべにまびれがづらのわがまにはびこり、おそくちる銀杏の黄葉、秋のなかばをだまりがほなるもよしなく、す

いきに萩に菊もまどりて、なくれあり早咲ありて、それよこれよき、わが庭の草むらをしわけ、ぬしがましき女、半びらきの花ぶき、一えだ二えだ手折て、内へ入さまに見つけて、旅のほんさまさいわぬ雨もふるなり、おやごい申すもおかしけれど、お茶ひまつまいれさ、いふこそ世のなまげ、うれしく内へ入ば、そこから見しよりはなほ物わびしく、宿のあるさいぜんの子を見えて、二十ばかりの座頭、三味線の糸ついでわたりしが、御出家さまはへくささぐり出で、挨拶する内にお袋何やら、くめんに行るゝていを見るより、是申し、すこしもお心づかいむやく、今のさきまたくもいたしたれば明日の朝までは、物たへ申すふくあいにあらず、われを招き入れられしは、定めてお志の台夜にてかなるべし、亡者の戒名を仰せられよ、御まご申すべしと申せば、座頭成程母人招中されしは、御出家に頼みあぐる事の、あつてのゆへなり、まかし未來の供養にあらず、御苦勞ながら現世祈禱の爲に、景清だちの觀音經を、御讀み下さるべし、このぞみけるゆへ、不審ながらだらにほんを讀經申せば、座頭はうしろにたてたる琵琶をさつて、平家をこそ弾下ける、互にいさなみをはれば、八つ手の葉に蕎麥のれり餅、妻木の折箸をそへて、はづかしきもてなしさ、涙にふしやくして、母人もりかへけるこそ、わひしながらの風流、むかしゆかしく扱もあはれなり、其後おふせを引申べき事なれど、御覽の通りの零落ちぢれであぐべきものもなし、されども御續經の御ふせ申さぬ事、罪深しさらばお布施に押者、今やうの三味線を引ておきけ申さんさて、さいぜん糸つきたる唐桑の三味線、ほそざほのれゆたかに、みすぢをあはせむかし聞にしかこの鳥、まなざやむま世にあるならひ、なげぶしなが歌、はで本手聞にいろあり、あはれあつて、みやこの小野川、あづまの淺利、爰にうつゝの姿、天人も雲のはしよりのぞかるべく、おもしろふ感下て後、

て深く男どかたらひ、亡命かげなして行衛まれば爲りしが、亡人は所の守護に訴へ、はつえの飯り來んまで過怠として、父浪右衛門を、三年このかたの牢しや、さるにても二人持ち玉ひし子供に、是ほどまで苦勞なさるゝ事、又世にあるまじ、これも畢竟我れ故と兄の座頭は、かねて習ひし琵琶を弾じ、平家を語りて神佛に祈ること三七日、今宵願の満づる日に、幸ひ旅僧の雨やどり、うれしく招き入れて御經を願ひしとの長物語、旅僧小膝を打ちて、

さてくさあるよな、我はつかしなから、其はつえさちなみ深く、いひはせし唐琴爪之巫、……心をあはせ、命にかけてぬすみ出し、東國へ一たびは赴きしに、世になさけなきは去年の霜月、はつえは木枯しのあした、風の心地といひしが、つひに其月の廿七日にむなししく成ぬ、此時のむなしさつらさ、さもに消えなん命と覺悟さほめけれど、一たびながれにまづみし女のつみ、未來も誰かはさふべきさ、惜からぬ命をながらへ、かく姿を曇染になせし萩は涙の川、身も流すべくぞなきける、

これより爪之丞上に訴へ出て、浪右衛門が苦役に代らんといふ、然るにちのくが孝心、天も納受まし〜けん、亡人が心も何時しか和ぎ、浪右衛門をば家に飯らしめぬ、此の上は夫婦もろ共に剃髪して、四人ひとしく行ひすまし

これもそれもかりの宿、夢さき川の松かげによるき庵は今も残りぬ  
と筆をといひ、一編義理を主眼とす。

『今様二十四孝』は、浮世草子中、稀に見る所の名作にして、これを西鶴が『五人女』に比するに、悲哀を寫す點は同じけれど、運筆彩色に至り、二者はちのく〜特異の畫なり。彼れは艶美春の景

色の濃なるが如く、これは冴えたる月の麗はしきが如し。

### 林文會堂

名は義端、字九成、通稱を九兵衛と稱す。京都の人にして家世々書肆を業とす。伊藤仁齋の門人にして、復古學派の一人なり。扁して文會堂と號す、此の堂の記は仁齋の子東涯の作る所なり。戯作は専ら淺井了意が『伽婢子』を摸倣して二三部これに類する作あり。もとより本領とする所にあらず。書肆としても儒者としても、戯作は此の人に取って些々たる餘業に過ぎず。『玉帶子』の序に云ふ、

僕竟日文會堂に座しそはくの書編を左右にし、まげく披閱していさか聖賢道統の藩籬をうかばんとするに、やゝもすれば巻を終らすして眠をおもふ、凡情のたしむころ、俗習いまだのぞかざるにや、たゞ怪しく新なる雑話小話を聞およびては、心よるこび筆にしるして倦こさを知らず、ひさり書編に求るのみにあらず、凡當時博識好事の人々、此堂に過れるには、先その郷里を問、その所に聞えし奇事をたづねて来るしとせめぬ、かく書編に搜り人々に使へて草稿せしを、先年友人のもさめに應じ繕寫して玉帶子七卷をあらはし釋了意狗張子の續集になぞらへり、今年猶またその遺るを集め、いまだ皮まらぬ田舎人の慰めにもせよとす、むるに、例の持擧にたへずしてまた玉帶子六卷をいだしぬ云々

文會堂の戯作は左の如し。

- 『玉帶子』 七册 (或は『玉すだれ』七册と同本歟)
- 『玉帶子』 六册 (寶永三年版)

『當世智恵鑑』 六册 (正徳二年版)

『近代御伽百物語』 (?)

『武家堪忍記』 八册 (?)

『智恵鏡』は、林喜兵衛二千風といふもの六十六部となり、諸國行脚の路次、東國に巡りける折しも、ある日の夢に源三位頼政を見て、古今の成敗、善惡の去就を論ずるに筆を起し、右二千風が四國中に出會したる奇事異聞を輯めたるものなり、此の作には往悔子の名ありて、文會堂の押印あり往悔子は九成が戯號なるべし。

林九成が歿年を詳にせず、或は元祿の末といふ、但し戯作はおもに寶永以後の版なるが多し。

### 青木鷺水

青木鷺水は京都の人、俳諧師野口立甫が門人にして、また俳諧に名あり。名は五省、通稱は次右衛門、白梅園と號し、また歌仙堂ともいふ。享保十八年七十六歳にして歿す。戯作者としては、淺井了意が系統を承けて、伽婢なし、教訓もの作者なり。

- 『御伽百物語』 六册 (寶永三年版)
- 『近代因果物語』 六册 (同四年版)

右二編に續編六卷を合せ、都合十八卷を全部とするの計畫ありし由、但し續編は版行になりしや



否やを詳にせず。

『本朝新堪忍記』

七冊

(寶永五年版)

了意が『堪忍記』に倣ひし作なれど、了意のは多く和漢の古事より其の材を取り、驚水のは當世の話を輯む。此の外に、

『丹前艶男』

六冊

(年月未詳)

『芭蕉翁諸國物語』

八冊

『風流吉日鏡會我』

あり。戯作ならざる著述數部あり。戯作の文はよく事を叙したるまでにして、波瀾もなく全躰に興味を缺けり。

## 上田秋成

### 第一章 秋成の生涯

ハムレットを繙きしものは、かのオフィリヤ姫の、忽然詩中に顯れ來たり、又忽然詩中の幻を絶つ様を見しなるべし。彼れの詩中に來たるや、さながら羽衣の雲間より舞ひ下りたる如く、彼れの詩中を去るは、小磯による泡の浪うつまに、くうせ去りたる如し。忽にして詩中に現じ、忽にして

詩中を去るものはオフィリヤ姫なり、忽にして現世に來たり、忽にして現世を去るものは秋成なり。秋成の現世に來たるや、又實にオフィリヤ姫の詩中に來たるが如きか。彼れ父なくして來たり、財なく、子なく、家なくして逝きぬ、詩的に出で、詩的に去るものは秋成なり。秋成は現世に處して事を爲し、人物の如くあらで、月の隈なき夕べ、獨り前裁に出づれば我が後に隨ふ影法師の如し。蓋し秋成自ら「無父不知其故」と云へば、あだし人いかで之れを窺ひ得べき。彼れ京師に生まれしか、浪華に生まれたりしか。これを京師の人なりと見たるは『假名世説』『小説史稿』の作者、及び『癖物語』の評註家、小林歌城『癖物語』の序に「又云此作者京人なれば其土に生まれたるものとせり」等なり、他は悉く浪華に生まれたるものとせり(撰者曰く、これより福門笑子『言狂作書』を引き、上田秋成が彼の崇禎寺馬場の敵討に因める生田傳八郎忘れがたみなる由を論ぜられしが、其の説や、俗傳に近ければ省けり)『花洛名勝圖會』には彼れ自ら記せるものありとて、曰はく、秋成年老い南禪寺に寓するや、當寺先々の住僧玄門和尚といたつて親しく交遊せり。一日其の死期の遠きにあらざるを知り、自ら土もて己が像を作る、今猶其の中に遺骨を納むといふ。即像の筥書付に自筆にてあらましの傳を記せり、

無腸生三浪華客于京師二十六年。無父不知其故。四歲母亦捨。有倅上田氏所養。歲六養母逝。性多病時々發瘡。後母依慈愛成長。年三十七父逝。三十八保三回祿。失居。始於是京攝之間移宅。凡十餘度。每地在神如迎。迎逐生活。商戶破產。爲醫患。疾不立。業泊然二十年。其間玩好國文。詩不以爲業。年五十七頓失左明。六十五饑悴過神醫。得左明。又及右眼。後母給

仕<sup>スル</sup> 五十三年亡妻禮三十八年今年七十伍。嗟乎天爲何生我耶  
老ぬれば世の人数々なには江のあしがるわざの男なりしを

吾人秋成の傳記を探らんと欲して、未だ其の信據すべきものを得ず、されば彼れが生活の大體を此の蕪文に徴して知らんとす、諸書の傳ふる所又誠に此文を根據とせるが如き感あればなり。

### 第一章 前期の生涯

秋成姓は上田、通稱東作、餘齋と號す、又別に休西、無腸、鷓居、前枝崎人、和氏譯太郎、等の名あり。享保十七年に生まる、四歳にして母を失ひ、上田氏に養はる、六歳にして養母亦逝く、遂に後母の手に成長しき。幼より書を好み、稍々長ずるに及びて學衆に抜く。嘗て云へらく、男兒生を此世に受く、宜しく奇功を立て、國恩に報ずべし、徒に紅を剪り、紫を裁して、譽を一世に街ふが如きは、丈夫兒の屑とせざる所なりと。花洛名繪圖繪 出石軒記等 其の身汚賤に居るを恥ぢ、家什を鬻ぎて千金を得、悉く書籍に換へ、小屋を某街に借り、醫を以て業と爲す。然れども性拗戾寡合、俗に容れられず、此を以て其の技售れず。古學小傳 近世叢記 遂に病を以て醫を廢す。花洛名繪圖繪 秋成の傳記を得んとするもの、唯漠として雲を捉ふるが如き感あり。彼れ漢學を何れの人に受けしか。和文はた誰に學びしか。其醫を業とせしは浪華の地にあらで京師なりしか。歌城は

上田餘齋秋應京師に住居して醫を以て業とす然れども放蕩不羈にして行狀狂人の如く赤貧なれどもこれを意とせず眞淵に従ひて國學を以て任とす

と云へど、秋成は眞淵に従ひて國學を得しものにあらず。彼れ『阿刈葭』に於て自ら云へることあり、曰はく

假字問答は往年美樹子に過し時借し與へられしを寫藏したるなり其間の理は魚彦の古言材の發端に美樹のいはれし言を見そなはしての事なりと談ぜられき更に他人の偽作にあらず美樹がたけなくも御名を犯すべからず秋成又師名を偽はらず下これを以て見れば秋成の師は、藤原美樹加藤字 万伎なりしこと明なり。歌城由兵衛と稱し四不出齋と號す藤下 勤む幼より學を好み初め長野美波留に従て和學を學び後に本居宣長に就きて古學を問ひ又傍ら漢學を修む幕府の季幕人の古學を以て聞えしものは此人を以て翹楚とすは其の時代畧々相同じく、宣長に従ひ、且熱心に『癖物語』を評せるより見れば、多少秋成を知らざるべからざるに、其の言の他と矛盾せるは世人多くは秋成を度外視して顧ざりしによるべし。又自ら隱遁して世を避けたれば、其の經歷は生存中と雖も、既に明ならざりしならん、况んや今日に於てをや。藤原美樹浪華に上りしをり

こは何れの年なりけむ美樹通稱大助家の名を靜酒屋といふ幕府の大番の騎士なり高二百俵淺草三筋町に住けり眞淵に學びあまたの著述ありけれど多くは家に秘して外に出さず又和歌も堪能のきこゑあり毎に京攝に勤番せられしをり門に入り教を受くるもの少からず上田秋成など高足とす寶永九年(秋成の生前廿年ほど)浪華に勤番に赴かれけるとき岐嶺日記あり又東海道を登られし時の日記もあり明和五年(恐らく此時秋成其門に入りしものなるか、これ兩月成る年にして三十六歳の時なり)復浪華へ在番のおり金の黄金そくばくを盗める者ありければ其縁坐にて美樹も公延にめされしがいく程もなく其盗人出で、罪許されき又安永六年京へ赴れけるが此年六月十日ふと病に臥して二條の小屋にて身没られぬ三條三寶寺に葬る法號了嚴院義洞勇徹居士碑は水曾路龜甲原にありさいふ美樹が母刀自も縣門にて聞えたる歌よみなり

秋成其の門に入り、和文また和歌をよくす。學成り別かれし時、美樹書を送れり以上古學小傳

秋もやいふけゆくものから猶土さへ裂けぬべき暑さを如何ものし給ふらんさうしろめたかりしを御せうそくを得ておちの侍りぬひさ日まう登りしうし何くれさあるし給ひしぞ奈けなきまことに出たちもいさちかづきの今更別れまいらす悲しさ思へばなにしにに世の事には馴れむつれけんさやみになん古郷に至らん後も御文もて御問ひご聞え給はんさななき御答も聞えかほし侍るべしん年には吾妻へまうで給ふべきうちにはおきても給ふさなんいかではかり給へげにかすくくの御おくり物いさ奈なう殊にかべしるの料紙は折柄わきてめで侍るなほまう登りて御給やも聞えつきぬ御名残も思ひ給ふるかきのふ今日にひさきもりらこいに至りて問かほし事ども何くれさいごさしげれば又の御面會はかり難しいよ、つきぬ思ひになんいもの君へもくれくよきに聞え賜ひてよ

東路のふしの芝山まば／＼に馴ても思ふわかれするかもきこえ給ふ御歌の忝けなきに答へまつるのみなり何事も限りある筆にはえつくしやらすなん穴遺文 集覽

ふみ月つこもりう

う 万 伎

上田のぬしこたへまいる

此の文を以て見れば、美樹秋成は師弟の如くあらで、朋友の如し、彼れ深く其の師に鍾愛せられ、其の師深く彼れの俊才を嘉したること知るべきなり。この前期三十八年間の生活は如何なりしか。思ふに當時の秋成は歌城の言の如く、放蕩不羈なるものなりしならん、時としては大言を吐き、又時としては妓樓に夢を結びて、曉を知らざりしならん。彼れ真に紅を剪り、紫を裁することを厭ひしならば、又何ぞ『妾形氣』『癖物語』を著して今日の名聲を得るに至らんや。

昔男ありけりならぬ狂言をかりにもでしがりけり其なたとへて云はば儒者たちの經濟りきみ國學者の上古にがれ國學

この一段歌城は「當先寫出作者胸中之事語々駭人言々驚人」と評したり。實にこは作者の思む所のものを寫せりとは云へ、老後より顧れば、幼少の秋成は、多少この境遇に立ち、かくいちびりたるわれがしこをなんりきみあひける」ものなりけらし。

おほかたのおやまはうちの息子とむつまつきもの娘などはかへりて中あしく心あはぬものにてよき絹などをしみて着せしとするを息子はけつあるが中によきをえり出してはれの夜の面目をおこさするほどにおやまのかたよりいつしか思ひつくものなり博奕など逢者に打ぬらむさいふおやま打みて粹とおぼして黒がりたまへごいさまへかたなりこのむすこさんに限らずなへて今の息子さんたちは色事心に入れ賜はすおほかたは茶の湯俳諧學文とやらいふ事をこり賜ひて人形淨瑠璃ものまねなど古風なあそびし賜へるはあらずと答へけるなり

こは蓋し娼家に生まれし子の、尤もよく經見したるまこと譚ならん。

又歌舞伎役者は五十にして天命を知り舞臺をひくを見識しおやま藝子は四十を猶老たりさせす花やかがるになん下あるは自賭藝子などかくし妻となりていふかひなく路次の奥住居にふきはきの朝ゆふのいさまに錢湯髪ゆひごころに來てはかなきわが昔語などしつゝあな太平やなご後ゆびさるゝをえしらでなんあるいさま淺まし

是一例なり秋成遊里の事情に委しきは『くせ物語』六十一、六十二より六十三ページにかけて見よ

こよひの座敷の戀衣女郎の手くたも佛の方便と聲あらかに罵れば誠に名うてのすつばの皮背中はげし藝子やま  
云ひつゝ、壯時の夢を貪り、數度花柳の巷を徘徊せしなるべし。されば彼れ身の汚賤に居るを恥ぢ  
たれど、未だ全く其の縁を絶たざりしか。これ自由放肆にして詩人たる資格を損せざる所なり。  
されど汚賤に居るを恥ぢ、丈夫兒の嘆を發せしが如きはいまだし。眞の詩人ならば、寧ろ此の言  
なきにしかず。詩人は詩のために詩を究め、天下を見るも詩的なれば、秋毫を見るも猶詩的なり。  
其の境遇に對して美感の伴はざるなし。故に能く國を忘れ、家を忘れ、己れを忘れて詩を作るに  
至る何ぞ「奇功を立て、國恩に報ずべし」など云ふの暇あらんや。果してこれを秋成の口より出  
でしものとすれば、彼れ未だ幼稚なりし故ならん云はずとすれば叢語子以下の士己れを以て秋成  
をはかりし言なり。余を以て見れば、秋成はだゞ一時の腹立まされ、意の向かふまゝに家什を賣  
りて書籍に替へ、又一時情の移りゆくまゝに書籍を賣りて妓を買ひしこともあめり。

むかし色好の賢き男ありけりかれはつかはれどおやまはわれに身をうつこま、つれにはこりていひけりさはいへど相應にか  
れもつかひけりまはりこゝる人にすぐれていさするごとくありければ逢ここの姉婦はもてわつらいにけり編辭

これ尤もよく顯れたるものに非ざるか。余初め秋成の家什を鬻ぎ書籍に換へ、自ら丈夫兒の嘆を  
發せしを見て、竊に勤勉素直にして遊惰ならざる如く思ひ、歌城を以て其の人を誤れるの甚しき  
ものとしき。善く遊廓の内部を知れるは身こゝに生れたるが故なり、彼れ茶人なり、茶を好むも  
の、自ら酒を好むものと異なり。必ず幼より茶を好み「小借家住の茶の湯ぶるまひ」をして樂めり

しならん。若し屢々妓樓を訪ひ飲酒三昧に世を送りしものならば、年老いて幽棲の域に處し、自ら  
酒もてやるべきに、酒を好まざるより遂に茶もて鬱を慰めしものならん。果して幼より酒を好ま  
ずば、何すれぞ茶を酌みて妓樓に夢を貪るを得んや。秋成は性磊落なりとは云へ、放蕩無頼の徒  
にあらず思ひき。されどつら／＼に考ふれば、こは皮相の見たるを免れず、當時の遊廓は今日の  
如くあらで、別の遊戯を樂しましむるものなりきとん。凡そ天下に生とし生けるもの、一たび  
戀愛の美感に接し、此の力の著く襲ひ來たる時は、己れを忘れ、他を忘れ、天下の物を忘るゝに  
至るものなり。この美感は諸の新なる物を作りて、自然を緋縮緬の色もて包み、朝な夕なに花を  
降らし、微なる物音にも心を躍らしめ、微少なる事物にも記憶の奥なる囊底を亂さしむ、戀人來  
たれば凡て眼となり、戀人去れば其の身全く空しき思ぞする。秋成の如き放肆なる少年にして、  
遊廓に親あり族あるもの、嘗て一度も之れを顧ざるの理あらんや。彼れ既に一度至れば其の時こ  
そ青年の情緒世界を改造し、家什を賣りし時の人は別界に去り、初めて万物を見て、意味あり、  
生命あり、自然も亦意識あるものとなるなれ。梢に囀る諸鳥は、其の心裡に徹し、あらゆる響は  
皆音樂となり、仰けば天上の星さながら眼を開きて彼れを眺むる如く、伏せば地上の花笑うて彼  
れに對する如き際、彼れの風流氣と奇骨とを合し、インスピレーションを駈り前期の著述を爲さ  
しなり。其の吾人をして恍惚の間に妙を感じ掌を拍つの遠なく讀み去らしむるも、亦謂はれなき  
にあらざるなり。

然るに中期に移るの際、美樹に従ひて國學を受け、妻を得、子を設けなどして、自然浮氣は内氣に抑へられ、彼れの奇は又他の方向にのみ著く傾きしものに非ざるか。其の師京師に死し、妻を洛陽に失ふに及び、身も亦昔時の秋成に非ざるに至り、全く人物を異にするに至れるか。

第三章 前期の著書

秋成の著書にして前期に顯れたるものは、小説なり。彼れ何時頃より筆を執り初めしか、今日世に傳はれるもの、『諸藝世間聞耳猿』、『世間妾形氣』及び『雨月物語』あるのみ。されど猶數篇を物したりけん。『作者部類』に曰はく

上田秋成が戯樂讀本は雨月物語のみならず春雨物語てふもの十卷ありとも續き物語にあらず一回毎に世界は異にして十回あり此書は印行せず傳寫の本も世に稀なれば己れは其書ありとも知らざりしに桂窓子いぬる年作者の自筆の巻物十卷を見たり其後類本を見ず當年簡書に寫させて藏奉すと予爲にいへりこも又得難き珍書なればいかで借贈せまくほりすよりて録して同好に示すのみ

其の他『雨夜物語』といふ作あり。余一日篁村翁を墨江の畔に訪ひ、これを聞く、翁曰はく我れ年來件の書を求むれども得ず、されど四方梅彦子柳亭種彦の門人にして當年八十有餘歲去年世を辭せりはこれを見たりとて其の筋を語られき、

こは雨ふりついで夜灯火かきたて、獨り文を繕くに前裁のかたに鐘の音かすかに聞ゆるより耳聾て近づきゆげ土の下にて鳴れるなりけりさてはいぶかしき歸り繼もて來り掘上げいつ入定したりけん一人の老法師の息絶えずありて一心不亂に佛を念じ居たるなれば救ひ出して浮世の月に心の隈もなく互に物語る様を描けるものなりとぞ

されば今日全く傳はらざる書にもあらず、これだにあらば秋成の宗教に對する思想を窺ひ得べきにあはれ見るよしもなし。

余竊に思ふ、秋成の第一着に筆を執りしものは、『諸藝世間聞耳猿』に非ざるかと。今其の題號に於て判ずるも、春雨、雨夜の兩者は、雨月後に成りしもの、如し、『聞耳猿』の序に

彼賢人の中間法度に偽りめきし眞は、たるも眞くさき虚言はつかれぬものぞや釋迦の藏經莊子の南華經うそのまこと眞のうそでおもはくは我心より出て人の口にかはりゆき詔さなり馳さなる其尾に喰つく世の噂を天に口なし婆嬭のそしりはしりにもいは猿のいましめをまれば、これ狙の指さしにあふさらば尻わらひの戯れ草を朝三暮四の筆まめに書聚めて題號を聽耳世間狙まよふ事は見猿の人の伽さもならむかし

とあれば、此の書は單に秋成の聞、にし事を、當時流行の八文字屋風に綴りて、見猿人の伽とせしまでなり。全篇五卷より成り、一卷三章、各天地を異にす。明和三年梓に上りぬ、秋成三十五歳の時なりき。全年冬『世間妾形氣』世に行はる、これ殆ど同時に筆を執りしものなるべし。其の序に曰はく

八文字が草子其積自笑の戯作多かる中に近世俗間のありさまありさある儘のついでに龜翁か糸口引せめし傳授車の綱手にすがりて商賣のそる盤形氣書出れば親爺の吝嗇氣は其中に求めたりと見ゆ石磨藝に親の財を空し惡所かよひに家藏を失ふ息子の我まゝ形氣やむ時ぞなきそれ諫かれし忠心の手代形氣母おや形氣の愛憐もよむにさこそ感あり又小娘の婚嫁までこがれまいくせの倫ならい若紫の歌舞妓子に思はくよするまで借もかしこや理老が筆談眞似てまねんか誠にまねられず荒にし我軒にいつしか浮浪子の中宿となりて長き代のかたみにはあらでさりしめもなき世説をいばざれば夜食の腹ふくるよき皆

よりつゞひて七つの鐘聞く夜はあまたいびそれが中にゐるこはなくて當世でかけもの、厚薄の情おかしきありはかなきあり編て冊とし故によりて妾形氣を號くされば二老が文理は五まきに猶名殘ぞおしまる其つやこまかぞふればはちに餘り撰めば一つとして採ものなし偶なくさむ一ふしほさても八文字が糟粕これを除き是を棄ててそのものして十種に充しめ四巻に己ぬ自笑をされる人は嘲みなん自笑を知らざる人は見ずも棄へしこきに明和丙戌の冬

和氏譯太郎述ぶ

以上兩書は、一時非常に流行を極めたりし形氣熱に犯され知らず、そを愛翫するあまり、筆を執りしものなるか。當時既に自笑其積没して文界寂然たる時なれば、此の書の如き歡迎せられざるべからざるに、世人皆形氣ものとし云へば、八文字舎に譲りて顧るものなかりき。此の書若し非常にもてはやされたる者ならば、秋成も此の類の著に縁を絶たざるべく、書買亦迫りて之を求むべきに、其の刊を増さず、其の名高からざるを以て見れば、さのみ賣れしものとも思はれず。されば『妾形氣』の巻尾に「世間猿諸國廻船近刊」の廣告あるも、或は未だ筆を執らずして止めしものならんか。此の人にして此の類の著書多からしめば、文界に一奇觀を呈せしならんに惜むべし。今『妾形氣』を以て自笑其積の著に比するに、人事の細微を描出するは彼れの優れるに如かずと雖も、華文の長技は此れにあり、蓋し秋成の思想に富み學才に秀でたるは、彼等の及ぶべき所に非ず。されど未だ數度人事を寫しことあらざるなり、寧ろ人事を其の儘活寫するより空想を描くに長じ、實存せし人物すらも猶現實界の人としてよりは空想界の者として畫きたり。『妾形氣』の

如き、極めて題を卑近に取りながら、猶浦島子の玉手箱を出だして男妾を作りたり。又花園の事を記して

上 畧あの口がしこい男めさうそのまこにたらされて身につく程の可愛さもつまらぬ末のどし合中、もし知れたらばあぶな物妾をすつかりぬけて出でいづくの里の住居でも女夫さいふてくらすたのしみはさうあらふまき切た男の園花園中畧首尾よしとしらせ目づかいに心おち付て其日の暮るを待てがれ裏門より忍び出手に手を取りて西東こころ落付所ぞこ外まら露の此所育ちたのみも夢の粟田口中畧戀のうはもり山科に兼てゐるべに借り置たる蕨茸の一寸家軒端も店もすかんとびん中畧然れども爰は東海道のさしくちにて往來繁き逢坂の關路なれば本錢入らずの茶店を出しそなたもお園名を替させ我等が少しの繪心に所からの大津繪畫で世渡りの手段かれてあり心おさすな下畧

と云へる文あり。彼れは先づ幻影を以て詩に命ず、未だ能く世間を材として咏じたるものあるを聞かず。其の材に因りて發揮せし想に至つては、甚だ幼稚にして唯皮相に止まりしのみ。

『雨月物語』

馬琴其の愛讀せし書關根正直氏藏の後に書して曰はく

この書は京師なる國學者上田餘齋がいさわかかりし時明和五年戊子の春三月戯れに綴りなせしものなり餘齋は浪華の市人な 阪に在りし余は明和四年丁亥六月生れしかば我ふたつのこしにや此書成てそれより九年を経て安永五年丙申の四月刊行せしより世にあらはれしなり

と。『出石軒記』には明和五年春四月『雨月物語』を著し、越えて十三年安永五年夏某月始めて世に梓行すとありきと覺ゆれど、此の間十三年を経しものに非ざるは明なり。蓋し此書の成りしは三

十六歳の時にして、翌三十七歳父を失ひ自筆といふに據る三十八歳居を失ひ、間もなく子を失ひ、妻も亦他界の鬼となりぬ、されば『雨月物語』は秋成平和時代の最後の著書ならんか、すなはち小説時代前期の終局期に成りしものなり。されば其の年より云ふも、其の作よりいふも、老成の期なるべきに、馬琴は何の據所ありて之を「いとわかゝりし時物せしもの」と云ひ『小説史稿』には「雨月の如きは若かりし時の筆すさみなり」と云へるにや。

『雨月物語』は秋成が名作なり、全篇五卷、九章より成る。「白峯」「菊花の約」「淺茅が宿」「夢應の鯉魚」「佛法僧」「吉備津の釜」「蛇性の淫」「青頭巾」及び「貧福論」是れなり。人或は曰はく、こは『支那小説』の翻譯にあらざやと、恐らくは然らん、たゞし文章流麗にして漢文句調の間に妙致あるは近路行者都賀六藏名は庭鐘字は公聲大江山人又大江の漁夫と云ふ千里浪子も亦其別號なるべしの『英草紙』はなやま『繁々夜話』に倣へるや明なり。後に京傳馬琴等の物せし繪入讀本の文、秋成に負ふ所尠からざるべし。

卷中の最秀を「白峯」の一節とす、こは西行の『撰集抄』に得たる思想を一層詩的に表現せるものと云ふべし。西行嘗て諸國を遍歴し白峯に至りて懐古の情に堪へず、あはれ崇徳院の空しく此の土に消えさせ給ひしを傷み、悲悼痛嘆して滿腔の感慨を吐露しぬ、さて秋成は直に新院の靈を現出し來て相問答せさせ一篇の好文章をなせり。例へば、

過し仁安の比西國はるく修行つかまつり侍りし次に讃州みを阪の林といふ所に暫らく住侍りき撰集抄  
と云へるをば『雨月物語』には

仁安三年の秋はあしがちる難波を経て須磨明石の浦ふく風を身にしめつも行く讃州みをかさいふに暫らくつと節をこむと記せり、翻案の本事は此の例也。試に『撰集抄』の一節を左に掲ぐべし。

深山邊のならの葉にて庵結びてつま木こりたく山中のけしき花の木すまによはる風誰さへこてかふなるよもぎのまこのうつら日終にあはれならずさいふ事なし長夜のおか月さひたる猿の聲を聞にそゝるにはらわたを斷侍りかゝる住家は後の世の爲さしも侍られども心そゝるにすみて覺ゆるにこそかくても侍るべかりしに淨世の中には思をさゝめつ思侍りしかば立はなれなんごし侍りし程に新院の御墓所をおがみ奉らんごて白峯と云所に尋ね参り侍りしに松の一村しげるほそりにくぎぬきしまはしたり是ならん御墓にやと今更かきくらされて物も覺えずまのあたり見奉りし事ぞかし清涼紫宸の間にやすみ給て百官にはつかれさせ後宮後房のうてなには三千の美翠のかんざしあざやかに御まなとりにかゝらんごのみしあはせ給ひしぞかし萬機のまつりごを掌に握らせ給ふのみにあらず春は花の宴を專にし秋は月の前の興つきせ侍りき豈思ひきや今かゝるべしこはわけてもはかなきや他國邊土の岸のおごるのしたにくち給ふべしこは貝鐘の聲もせず法華三昧つとむる僧一人もなき所に唯峯の松風のはげしきのみにて鳥だにもかゝはぬありさま見奉るにそゝるに涙を落し侍りき始あるものは終ありこは聞侍りしかども未かゝるためしなば承り侍らず去ば思をさむまききは此世なり一天の君萬乘のあるもしかのこごくの苦みを離れましまし侍られればせつりもまゆだもかゝらす宮も薬屋も共にはてしなきものなれば高位も願はしきにあらず我等もいくたびか彼國王ともなり給ひけんれども濁生即忘して凡て覺え侍らず唯行てさまりはつべき佛果圓滿の位のみぞ床しく侍る死にも角にも思ひつゝくるまゝに泪のもれいで侍りしかば

「よしや君昔の玉の床までもかゝらん後はなにいかはせん」此歌白峯の終りさうちながめられ侍りき盛衰は今に始めぬわざなれども殊更に驚かれぬるに侍りさても過ぬる保元の初年秋七月の比をひ鳥羽の法皇はかなくならせ給しかば一天村雲迷て花の都くれふたがり侍りて含識のたぐひうつゝ心も侍すなげき身の上のみ積りぬる山地ごもにておはしまし、中に僅に十日の内主上上皇の御國争ひありて上を下にかへし天をひびかし地をうごかす迄亂れ戦ひ侍りて夕に及て大炊殿に火かゝりて黒

煙おほへりしに御方は軍勝にのり新院の御方の軍破れて上皇宇治の左府御馬に召ていつちもなく落させ給しを兵者追懸率りていさいかも恐奉らず射まいらせ侍りしを見たてまつりしによしなき都に出て返て心うく侍りて後にこそ承りしが新院はある山の中より求出し奉て仁和寺へうつらせ給宇治左府は矢に當らせ給て御命終らせ給れば奈真の京、殷若の野の五三味に土葬し奉りけるを勅使たつて死骸實檢の爲に掘おこし奉りしにあれば六借世の中かな誰か知らざる現世はかいるべしとば茲にあやうくはかなき身をもちてふたりがほにのみ侍りてむなく明暮過て無常の鬼にさらるゝ時聲をあけて叫べども叶はずして惡趣にのみ經めぐり侍らんはいさ悲しがるべし盛衰もなく無常も離れ侍らん世なりとも佛の位目出度と聞奉らばなき願はざるべき況や盛衰甚しきをや無常速なるを唯心をまづめて往事を思ひ給へすこしも夢にやはり侍らず悦も欲も盛も衰も皆偽のまへのかま屋なるべし

此れを以てかの「白峯」に比すれば其の異同歴々たるべし。さて秋成のこの文は西行と近路行者とより生れ、更に一轉して馬琴の文に入りぬ、『出版月評』に學海翁云

爲朝諷白峯一節、不與前節相關、槍涼凄咽一種異樣文字、不是譚案出奇使人喫驚的文字、正是幽渺清迥使讀者低回玩不能置的文字、此評爲妥當、雖然其結構其文字、實皆是學雨月者、唯其妙于換骨奪胎之術、是以功弄讀者、使不得窺其斧鑿之痕、但取彼是並誦、細咀嚼其真味則雖馬琴文非不巧妙、到底不免爲東施之鑿邯鄲之步矣、學海翁評語宜移之置雨月卷上、不得贈與曲亭馬琴子爲其名譽賞牌也

と、げに『弓張月』を讀むもの誰れか其の文字の功妙譚案以外に出で、槍涼凄咽一種異様の致あるを驚かざらん、されど其の源の『雨月』にあるを思へば名譽は幾分か秋成の分取し得る所なるべし。『月評』にまた「翁又云

爲朝諷白峯一節結構自太平記南朝怨靈集會六本杉一段來、唯彼所說虛妄恠誕議論亦極沒理、文章不見甚麼精采、此所論的

切痛快皆極理義、然以予見之其議論之前切痛快一層深一層亦雨月上弓張月一等矣、馬琴實襲雨月矣然卒不欲爲秋成之王孫也、故其叙爲朝既到新院廟下處忽點出月光射廟柱、挿入雨月所掲西行國詩、暗示其粉本所在、用意周到、後人之襲前人者宜當如斯、馬琴不恥爲家」出版月評 日本華文

と。馬琴の秋成を景慕し『雨月物語』を見て其の妙に驚きしは、彼れ既に愛讀の書の巻尾に自筆もて題せる言を見るも明なり。なさでものわざながら、少しく『弓張月』のと『雨月物語』のとを比べんに

とあるは『雨月』の

百の官はかく賢き君ぞきて詔恐みてつかへまつりし近衛院に禪りましても藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見えて詣つかふる人もなき深山の荆の下に神かくれ給はんさは萬乗の君にてわたらせ給ふさへ宿世の業さいふもの、おそろしくもそひたてまつりて罪を逃れさせ給はざりしよき世のはかなきに思ひつゞけて涙わき出るが如し

とあるに基ける明也、而して『雨月』のは『撰集抄』の

今更かきくちされて物も覺えずまのあたり見奉りし事ぞかし清涼紫宸の間にやすみし給て百官にはつかれさせ云々  
とあるを敷衍せるなり。三昧子の馬琴が其の剽竊せるを隠さんとして折しもさし入るゝ月光に御廟の柱を向上げ二首の歌を書きたり



とて其の源の『雨月』あるを蔽ひ、且つ暗に之れを示して  
松山の浪に流れてこし船のやがて空しくなりけるかな  
と云へるは馬琴の馬琴たる所にして『雨月』の剽竊家漢朝の王莽なる名を免れたるなりと云ひ、且  
此の歌を評して

此和歌馬琴則爲西行詠、加詣讀之松山巾新院等序詞、然其語勢、其神情自是新院之詠、不得纂爲西行所詠  
と云はれたれど、これ或は馬琴の秋成に據れるをのみ見て、秋成の西行に負ふ所あるを忘れたる  
評にあらじか。若しこれを以て馬琴を責めば、彼れ必ず答へて云はん、余は秋成に據りしに非ず  
余と秋成と共に『撰集抄』に據りし也と。今『西行物語』を見るに

(上巻)讀破の松山さいふ所につきてはたらせ給ける所をさふにあさまなかりければ  
「松山の浪に流れてこし船のやがて空しくなりけるかな」昔は一天四海をなびかし百官萬乘にあふがれ云々

といふ文あり、さればこれ明に西行の詠ずる所ならずや。いづれにもせよ、此の般の貸借豈必し  
も深く論ずるに足らんや。要は換骨脱胎の妙にあり、若し能く踏襲する材料と同化してそれを全く  
自家囊裡のものとなすを得、人をして痕跡を認めざらしめば、すなはち可ならん。サーン、ブ  
ヴ曰はずや、大創家大發明家とも稱すべき人は最もよく模倣する者の謂なりと。

『くせもの』がたり時代より云へば中期に成りしものと思はるれど物語の續きなるとして茲に掲ぐ  
『癩癩談』は秋成の性行の一斑を見るに足らんものか、蓋し磊落、豪放、才氣奔逸、事物に拘泥せざ

る氣概、其の紙面に溢れたればなり。

秋成嘗て『伊勢物語』を愛讀し、晩年これが『古意校』を作り『よしやあしや』を物しき。而してこの  
『くせ物語』の序文に

この物語は朱雀のくつわがぬりの中へしこめてありしなり作者はたれもまらざれど傳へていふは在郷の中將さか  
やさだめて田舎道場の新發意しんぱついどのがやつし腹して才まぐるものか文辭ぶんじの京めかせるま故事を雅俗に摘きたれるをこれやそ  
れと聞のつぶての當料あてりょうなるかしら書して洒落社せいかか中にひけらかさんさすされば吾妻に京傳ありこゝに都のやほ傳がまはらぬ筆  
はかすが野の若紫のすりこ木ちやまで

とあるより見るも、其の本文より考ふるも、明に『伊勢物語』に據りしものなり。又別に據れる所  
あり、烏丸光廣卿の『にせ物語』是れなり。而して『にせ物語』は『伊勢物語』に倣ひしもの也、されば  
此書の旨は『伊勢物語』を讀みて後にこそ一入なるべけれ。俗語の間に「なん」「けり」「昔男ありけ  
り」など近體文を古體文と交へ用ひたるおもしし。此書何れの年に成りしか、卷中に年代を記  
さざれば明ならぬと、吾妻に京傳あり」と云へるより見れば『妾形氣』を物ま、時代はとく過ぎて  
京傳全盛の時なりしか。案ずるに此書本居宣長との爭論ありて後心平なる能はず、竊に己が性の  
癖せるを觀じて温厚なる宣長を思ひはかり、殊更に作せしものにあらざや。たゞしこは予が一己  
の臆測のみ。いづれにもせよ、こは中期の末政の作なるべく、後期の作にはあらじ、後期の作な  
らば村瀬栲亭の序にいひ及ぶべきに、其のこと絶えてなし。さもあれ茲に竹窓といふ人あり、「上  
田翁の御もとへ參」る書に

御うはさの辭物語拜借にて寛々拜見いたし候天王寺の法師かくすしの條物産老人の類畫屈候書家のくたり其人々を見るやうにてあかすくりかへし見申候誠に入には一くせきて才有人を才を相手さしわるかうものはわるかうを言たをさんごするがくせにていづれ其才其くせを持ぐさりにはしがたくて夫を捨て、仕舞こもく場を拵らゆる物なれば此本の作も定めて其こもく場なるべし其種につかはれたる人も定て才子かわるかう者なるべし是を面白き見る人も亦痴人にはあらざるべしわれらも其中間入にま一本を寫して原本を御返上申上候法輪味噺一曲新地より實候其御口へ御あがり可被下候かしこ

とあり。竹窓とは果して何人ぞ。(撰者曰く福笑門子はこれより竹窓は竹内玄々一なる由を辨じ、玄々一が著『俳家奇人傳』に論及したれども事實に相違あれば省けり)

秋成はまた多少俳諧をも解せしなるべし、『雨月物語』につれのたのしみとする俳諧風の十七言をまばしうちかたふきていひ出ける

鳥の音も秘密の山のまげみかな

旅視より出て御燈の光りに書つけ今一聲もがなを耳をかたむくる

は、或は秋成みづからにあらざや。予初め『くせ物語』を讀みて「俳諧師と博奕うちの宿するものはなきぞといふ」といふ一節に至りし時、こは國學者の俳諧師を嘲るなりと思ひしに、さにあらで、自ら好む道を自ら笑ひて人を笑はしめ、志かも之を俳諧師に送りて笑はしめしなりけり。宜なり法輪味噺を送り其御口へ召し上れとて返さしや。此れにも秋成の氣象見えたり。『俳家奇人談』續篇に無腸處士の名あり

無腸處士はゆめ醫を業として難波に住めり其人となり名利にうまき當世にたがへり自らいふ外剛にして内柔なるこれ我性な

りて因て更に無腸の號をなすといふ俳諧は宗因の流を汲さいへども又蕉翁の風を慕ふ一とせ柴陌を出て田野に幽棲するごとく月に遊ぶ己が世はありみなし蟹  
其落着かくのごとし深くやまごの國ふりに耽り古き書ども探り見す云ふこなきに竊に俳士の無稽なる連歌の抄物のみを據りし柱に膠し舟に刻める事の狭きを憂ひて也哉抄を著しテニオハの梗概をふるす其轍を同ふする者は窺はずんばあるべからず後代の龜鑑なるかな  
此は秋成の上ならん、されど予未だ『也哉抄』の著あるを聞かず、且思へらく、總じて外剛なる人は内柔、内剛なるもの却りて外柔、内外の柔と剛とは相隔て、消長する如き趣あるが常なれど、秋成の如きは内外共に奔馬の性を備へたるものに非ざるかど。『よしやあしや』の結尾に左の一節あり、曰はく

凡物學びて才ある人の時にあはぬは我有一寶劍といひしら玉はよし知らずとも我し知ればさよみ或は書は憤りなるとも云やまごもろこし人の心は異ならぬものなり彼處にては演義小説といひこには物語さよぶそれ作り出る人の心は身幸ひなきを歎くより世をもいきどほりては昔を戀しのび或は世の中のさく花のにはふが如く榮ゆくを見てはやうつるひなん事をおもひあるは時めく人の末いかならんを私ながらもあざみ又ためしなき歸を願ふも遂には玉手匣のむなしきをささし得難き寶をしも求めあるく痴ものうへを愧かしむにも唯今の世の聞えをはかりて昔々の跡なし言に、何の罪なげなる物がたりて書つくるなんかいふふみの心しらしひなりけるこのふみ物語も在五中將ならぬ在五物がたりしてそれにかこつけつゝ世の様のあまりにたはけたるをいひしれるにも猶己が思ふかたはだにおりて打いづべからぬにはふみの終に我に等しき人なきてふ打ほこりたるなげきせしこそおのが心をもなぐさめ且は命養ふさえ人のしほざなれど覺ゆそはよしあしやかゝるいなか言もこそわりあらばえらびさらせ賜へま云

彼れは小説を極めて狹義に解し、小説はなべて作者の感慨によりて成れるものとせりき、隨うて彼れが「くせもの語」も、此の主意に成りたり。されば又其の『伊勢物語』を見るや「在五中將ならぬ在五物がたりしてそれにかこつけつゝ世の様のあまりにたはけたるをいひそしれるにも猶己が思ふかたはし」を顯し「終に我に等しき人なきてふ打ほこりたるなげきせしこそ己が心をもなぐさめ且は命養ふさある人のしわざなれ」と評したり。されば又「くせ物語」を作り出る人の心は身幸ひなきを歎くより世をもいきどほりては昔を戀しのび或は世の中さく花の香ふが如く榮ゆくを見てはやうつろひなん事をおもひあるは時めく人の末いかならんを私ながらも推しはかるに外ならず。彼の作の初に曰はく

上みづからは痲症のがる、を他人からはわるぐせも氣まゝ病もなづけたりさてそのしれる人も又此癖なきにはあら  
畧れば人のくせが世の姿となりて高きもいやしきも都も鄙もあまねくいひはやす痲癖談を癖物語ともよめばよめかしきのふも  
むかしさきの間もむかしおとつひ跡の月去年の大むかし十させはさやのまつこのむかしまでをかたりつけて冊子めくもの  
こはなりけり

と。以て彼の作の自家の實歴に基く所趣からざるを推するに足るべし。殊に卷尾の一節の如きは秋成自ら出で、物語る様見えておもしろし。

昔深草の里に世を倦てや住家もさめて隠れたる人ありけりまばしやされるさおもふにもはや四させ五させばかりになりぬ竊に思ふに秋成は伏見に四五年の星霜を経しに非ざるか、これ附會の説に似たれど、この山中に

て奇石を得て愛翫し、履脱の石にしきと云ふこと聞ゆればなり。

都なつかしき折くはそなたの空のみ眺めてありけりいさまがらなる窓のまには枕のみ友として打寐れる夢のうちに庭のこすゑに遊ぶ小島ごものさへづる中に、こまごりの舌はやなるが人のものいふにははらでひりこするは春毎に此のいほに來てあそぶにこのあるは何れをわたりむにするともなきいたつら人なりかくても世に住むかひありやいこにむべきものなりといふ下枝にあそぶうそひめこれを聞てさればこのあるはもと都の人なるが生れつきて心せばく世をわたりむとすればおひかりの恐ろしく人は心のひろきまゝにあしきといふこもいつはりも世の害にだにならぬこはたくまずしてなすまゝなるをそれを見聞たびこに打もなげき或はいかりなごもしつゝ又書よめば昔のみまのばしくして今の世をうごみ藝に遊べば古き世の人は上手も下手も心高しとあふき今のまなこのつけごころをさげしみて樂しまねにより年月徒らにくらすなり世にあはれむべきものなりと答ふ

あはれ、こは秋成自ら駒王となり、うそ姫となりて、己を歌ひ、宣長を歌ひ、世を憤り、天下冀北の野に未だ一人の伯樂なきをうらめる文に非ざるか。

駒王き、てからくさわらひさればこそ世のおこりものあさましの心さまなれといふうそ姫曰く主は常によきこころを身にまこと事なくあまきを食はず紙のふすま紙の帳に事足りて何事にも儉を守りげにておこれるを見す駒王曰く我おこれるといふはさるこまわりに非ず

と獨りこの家のあるじを以て任じ自評を試みたり。蓋し秋成は

痲癖のやまひなつらしてえ養はぬおるかさより我をたふさしと思ひあかめれど世の人はみなにこれるものとす心奢のひまなり

秋成の我が強き、この剛情男我慢男の

おもふにかなふ世も人もいにしへよりあるこそなし

いかで自ら己を枉げて世に媚び人に諛はんや。

漢士大和の書にもあかすをしふるも世の人の直からずおほかたは依けのみゆくをなげきてに非ずや其こそわりをおしいたきてもそのをしへのまゝにおこなふ人はあらぬげなり（孔夫子さへ世におしたたてられて行ふ事かたきなり）あるもこれがたぐひなるへし

と云へるに至りて、己れを孔子の世に容れられざるに比し、詩人の一世に卓絶せるを示せり。遂に

かしこき人も世におしたたてられては行へど猶かひなきものか

とて他をうらむことなく、従容自適して精神を養ひ

かんへき談さもくせものがたりも何ともかこもあらうついな世がたりや

など云ひすて、みづから慰めたる、皆自家の感慨也、一氣呵成の文也。中に一節あり、曰はく

むかしみやがたに物語いさをかしくかく人ありけりもさよりさえある人なりければひたすらに興あらむまで筆はさかしくにすきてうはやり口さくいひもてつらぬるほどに讀むにいさあわたしくこゝろいそがれてちよんがれなきを聞くやうになんありける

この「物語いさをかしく」「さえある人」とは豈昔男ならで今現にこの文を草せる夫子に非ざるを知らんや。更に天下の學者を愚弄して曰はく

昔鳥獸草木のたぐひの世に見知らぬをばあまれくよく見分つ師ありけりこは唐土にては何さいふを此國にてはしかよぶ物なりなごいさくはしかりけりされざまれ／＼には辨へ難き物もあるにやこは何の類なりとも答へら、を或人聞きて何の類の類

の字は祇園町の娘分の分の字にひさしくいさまきらはしきなんいひける  
と、其の漫罵冷罵の才を見るべし。

### 第四章 秋成の文

真詩才ありて直に詩材に接して奥妙の靈火を捉ふるもの、所謂真詩人の作は、假令其の語格文法正しからず文致に幾分の疵瑕あるも猶其の妙を失ふことなし。然れどもあまりに詩形の不具なるは詩思を發揮するの障害となる。秋成の文破格をもつて知らる。歌城「くせ物語」につきていへらく

此書文章は猶いまだしくテニチハの誤り語格のたかひもまゝ見ゆめれど作意の高尙なる其氣象は賞すべし世の獸革面此書を觀て睡を覺すべし

此文首尾照應せず文脈不連且テニチハ語格の誤數々なるをいさゝかづゝ引直したれど猶かくてよしといふにあらざるをしきかな此作者の才氣は有ながら不文なるは其性懶惰にて學問に粗陋なる故なるべし蓋愚なる人は刻苦して學ぶもかゝる文は

書事能はず秀才なる人は勉めて學ばざる故にかゝる文は書くといふも一篇の始末精細なる能はず實に兩全の得難き可歎々々ど。蓋し秋成は思想富贍、時に靈妙人を驚かすに足るものありと雖も、之を語格文法家の前に致す時は、全篇恐らくは完膚なきに至りぬべし、まかも其の形容に巧なる、人物をして讀者の眼前に髣髴たらしめ、益々翫味していよ／＼妙なるを感ぜしむ。彼れの感情は敏捷なり、其の想像は奇警なり、而して其の聲調は雄大高雅なり。あはれ秋成は果して歌城の言の如く、學問に粗陋にして勉めて學ばざりしか。彼れ「才氣は有ながら不文」なりしか。「白峯」の一節を讀めるもの、誰

れか彼れを不文なりといふぞ。秋成若し能文家として立つ能はずば、何れの邊にか彼れを容れん。彼の『雨月物語』は果して「鼓腹之閑話衝口吐出」せしものなるか、あるは彫琢改竄を加へ刻苦して得し文字なるか、諸書の傳ふる所によれば、彼れの文を草するは極めて速なりしもの、如し。余もまた思へらく、彼れの文は容易に成りしもの、如しと、よし彫琢を加へたりとするも、そは文法上の彫琢にはあらで修辭上の練磨なりしなるべし。彼れは字義に拘泥し、係結活用等に意を用ふる底の人に非ず。さもあらばあれ、秋成の文には語格の誤多くして、歌にこれなきは何の故ぞや。蓋し歌は語格を離れて咏じ得べきにあらず、語格なければ歌なきなり、

もろこしに詩つくる人はなへて文をつくれるを、なたはいつの頃よりか歌にのみただむきをわけて言のあやをきそふ文はなすべきものと思はぬ人多きは、いかにぞや閑田文章卷一國文解

と云へるより見るも、當時の國學者の歌にのみ勉めて文を度外視したる様窺ふべきなり。もろこしの詩人にも、現に杜子美の如き、文に拙なるものあるにあらずや。秋成は歌を加藤美樹に學びたり、調をも格をもみだりて名聲赫々たる謂れあらんや。其の歌に破格なきは異しむに足らず。然るに文にありては、音に係結を誤り、過去現在の活用を亂志のみならず、全く文字の布置配合をも誤り間々其の意の通ぜざる所あるはいかにぞや。今一例を示さんに『諸藝聞耳世間狙』の序

聽耳世間狙の呼ぶ事は見猿の人の伽もならんかし

と云へる文あり、これ「世間狙と呼ぶ事は……ともならん爲なり」とか、あるは「世間狙と呼ぶは……ともならんと思ひてなり」とかせずば大なる破格の文字に非ずや。破れの語格は何を以て歌に正しく文に邪なる。彼れ自ら語格を破り語格以外に走るを好みしか。彼れ殊更に俗語を以て之を亂し、か、あるは不知不識の間に誤りしか。或人曰はく、秋成は國學を美樹に學びき何ぞ語格文法を知らざるの理あらんや。夫れ法格に束縛せらるれば文の妙減ず、特に秋成に於て然り、彼れの歌に面白きものなし。よりに思ふに『癖物語』の如きは、殊更に面白く物せんとしてわざと語格を破りたるものならんぞ。余を以て見れば彼れの歌亦面白からざるに非ず、若し論者の云ふ如く、秋成にして能く語格文法の正否を識別せるものなりとすれば、何の必要ありてわざと之を破りしか。さなきだに後世の識者を恐れ書を埋めしに非ずや。たとへ老後の思想は壯年の時と異なるとは云へ、わざと之れを破るの理あらんや。善く法格に通ぜざればこそ、善く通じたるものに取りては、法格も敢て邪魔とならざるをや。然らば彼れの文に破格多きは何故ぞ。他なし秋成に文字の布置配合を誤る奇癖ありし故なり、彼れは之を正さんともせず、否寧ろ其の正格の何れにあるかを知らざりしなり。蓋し當時未だ語格文法の良書なかりき。伴蒿溪は

國つ文の則を教へたるものは未だ見ず去れど古きふみをつら／＼にかうがへは其則は知らるべし閑田文章國文解

と云へれど、秋成はかく面倒に「古き文をつら／＼に考へんとはせず唯思ふまゝにかきすてたり詮ずるに國つ文の則を立てたるは富士谷成章の『あよひ抄』かざし抄』を以て嚆矢とす、秋成以前

に真淵の『語意考』ありしかど、これ唯言語の解釋を施したるものに過ぎず。宣長の『言葉の玉緒』はた文法を論じたるものにあらず、かゝり結びを論じ已然將然などの別を明にしたるは春庭いで、後のことなり。されば真淵宣長だに多少の誤なきにあらず、况んや粗放なる秋成をや。秋成の書を見て語格文法の誤多きを嘆ずるは木によりて魚を得ざるを喟つものど何ぞ擇ばん。宜しく其流れに従ひ川に網して真淵宣長をこそ責むべけれ。唯秋成の真淵宣長より誤多き所以は此奇癖ありしと古文の格に従はんことを勉めざりしによる、されば後年成りし國文(擬古文)の書は幾分か古人に模する所あれば、かゝる誤少し。照らしあはせて考ふべし。

### 中期の秋成

#### 第一章 中期の生涯

中期は、明和七年より寛政元年に至る二十年間なり。秋成三十八歳にして居を失ひ、京攝の間に移り、四方を遍歴して常住なかりき、此間は或は京師に上りて商を營み、或は攝津に下りて寂寥の間に生活しき。朝に熱鬧に處し、夕に幽境に在るは、彼れが半生の生活なりけん。されど秋成の性、繁に居て事を爲すに適せず、其商を營みしは、産を破りしを全うせん念にいでたるめれど又これいよゝゝ其産を破りて漂泊せし所以なり。「名利にうとく世の人どたがふ」秋成にして商に志し、止むを得ざればなるべし。曰はく商戸破<sup>リ</sup>産一爲<sup>レ</sup>醫患<sup>ニ</sup>疾不<sup>レ</sup>立<sup>ル</sup>業泊然<sup>ニ</sup>二十年<sup>ト</sup>と。そも彼れが商となりしは醫となりし以前なるか。余竊に思ふ、當時いかに醫たるに易かりきとも、尙幾

分か學ばざるを得ざるべし、疑ふらくは彼れの醫を業とせしは其家を失ふ以前<sup>即ち中期</sup>なるべし而して商を營みしは漂泊の餘、一時の思ひ付に由りしならん。『近世叢語』は彼れが攝津の消息を傳へて曰はく

上田秋成嘗居長柄或人問曰村居寂寞必有幽趣秋成曰然不能無愛憎者曰遠山青靄曳練曠野陰霽成籬、菜花錦繡、霜葉丹青、春曙秋夕月夜旅雁深寒蛩、春雨蕭蕭、露頭々、總角臨曠時且叱、野寺鐘聲、夕悲且待、霜如衾、雪爲歌葉菁鮮美、新穀先嘗、是可愛者矣、元早祈雨三冬無被、藁牀糲食、三月垂蚊帳、非綿或紙、蚊轍入、峰結房、人來則驚、蛛布網、除即喚、春夜蛙鳴妨眠、秋風暴吹害禾、野鼠飢穿牆、狐狸寄盜飯、或水濁、或柴薪乏無朋、無話食民餓鬼、里正關王是可憎者矣此の書甚だ信じ難しと雖も或は時として彼れの行ひ之れに近きものありしならん。

上田秋成居於長柄、結茅於水濱松林中、號曰鶴居、一夜盜鑿壁而入、其翼<sup>翌日</sup>の意秋成見之曰好、宜迎風、乃以懲賊盜意一日加茂季鷹來りて名刺を通す直ちに刀を提げて其室に入る秋成勃然色を變じて曰く子吾を殺さん欲するや吾老たりも豈徒に死するものならんやと傲然當るべからず季鷹喜ばずして去る<sup>古學小傳</sup>近世叢語

秋成の行爲動もすれば狂に類せり、而して老するに至りては益々甚しかりきといふ。彼れの狂は重に負けし魂の癡癖に基けり、すなはち狷介不羈の性の自招せし所也。

秋成雖中身攻業而才氣超絶不欲倚於他人瞻廡不屑區々拘法則其所持論多與世不合矣然不獨其所著者奇矣而其人亦奇矣<sup>續近世叢語</sup>古人曰はく微妙なる狂氣なければ詩人たること難しと、又曰はく神來と狂熱との二を得ざれば假空の人物を活動せしめがたしと。蓋し詩人の性の極めて多感にして聞規に敏なるや、時としては狂人の心狀に似たり、又其想念の具象的なるも狂氣のに相似たり。蓋し狂者は、其の思ひ浮ぶる

印象の甚だ強著なるが爲に、現實ならぬ空想を現實の如く思惟し所謂精神錯亂の發作に襲はるゝを常とす、これ狂者の詩才と共に夢幻の境に遊ぶ所以なり。秋成もとより狂人にあらず、然れども其の勃々たる妙想を思ひ浮べて直に之を筆に命じ、何等の努力をも感せずして自在の境に翱翔し、興來たり機熟すれば、滔々一瀉千里、妙想を傾瀉し來たる状態は、猶狂氣の殆ど意に制せられずして放縱不羈なるがごとし。あはれ秋成もまた眞詩人か、其の狂人に似たるも此の故か。

## 第二章 秋成の妻

秋成の妻は實家と其の生死とを詳にせず、思ふに秋成が漂泊の初、みまかりしものなるべし。『閑田文章』に、「上田餘齋亡妻の遺せる文の序を求めらるゝに應じて記す」といふ一篇の文あり、此の書巻尾に明和七年七月二十日とあれば、秋成の妻は明和六年の火災後、其の翌年、此の書の成りし前、世を去りしならん。文中に「長柄の庵よりこなたへのうつろひまでのあらまし述べられたるにて」とあれば、秋成家を失ひて直に長柄に行き、翌年京師に登り、そこにて妻を失ひぬと見ゆ。たゞし彼れの長柄にありしは少くとも四年、蓋し此の際「京師間移宅凡十餘度」とあれば漂泊の最中なるべし、されど母はありしものとあはしく「後母給仕五十三年亡妻糟糠三十八年今年七十五」とあり、蓋し彼れは六歳にして養母を失ひやがてまた後の母を得たりきとするも、五十二年給仕しぬとすれば、母は六十近くまで存へしか。彼れは漂泊の間常に繼母に伴ひしや否や明ならず。其の老後磯貝氏によりしは繼母うせて獨身となりしが故にや。又「亡妻糟糠三十八年」と

云へるは其の妻を失ひしより七十五歳まで、自ら薪水の勞を執り、三十八年を経過せしを謂ふなるべし。さすれば妻を失ひしは三十七歳の時、すなはち火災前一年なり。さはれは當推量に近ければさばらく閑田子の文によりて居を失ひし後一年と定むべくや。

閑田子の言によれば、秋成の妻はよく夫に仕へて家政を理し、其の疇癖を和らげ、よく諫め、よくなため、多少の内助を與へしに似たり。且や「文かき筆のすさびなども拙ながらざりしよし」なれば其の氏そだち卑しかりきとも思はれず。又「此君なんわかきよりせの君にひかれて見聞くこともさはにさるゝから云云」とあるを見れば或は早う秋成に侍したるに似たり。又「衣ぬふつとめ」にのみかゝづらひ給ひて深く學問あるをつゝみ「いきかよう人すらも其材を知らざりきとあれば、此の贊、例の誇張とするも、尙賢婦らしき面影見ゆ。『美樹の書に「いもの君へもくれくよきにきこえ給ひてよ」とあれば夫婦共に美樹に歌を學びしにや。『夏野の露』秋成の初に曰はく

田鶴のある長柄のはま松蔭にすむ翁有り身の病はたさんほごいさかりそめなるいほりして住けり

と其の夫をさして翁といふ、いと睦しげなれど、實際はいかゞなりしか。秋成嘗て一男子を擧げ愛撫養育す

上男子生れしをいできて見するにいさおほきやかに玉の光をさしてめでたかりければ誰もく限りなく喜びあへりけり此  
畧子の二つさいふ年に乳母は病して死にけり年月経るほどに愛嬌つき舌まく物云ひてよるづに才有て見ゆるを翁いさいたい  
つくしがりて身のなやめるやうを忘るゝものに唯膝の上にするおきていさほしみ給へりけり

さるを「三ツに成ぬる秋の比より」病に罹り四歳の「夏のはじめ世を去りしかば、夫婦悲哀に沈み  
あなや／＼なきさけべどかひなし翁足すりをし聲をあげてないたまへり  
さて長柄にありし折、小兒に「翁の物あつ（妻）が物をもぬいつりて打きせ」たりとあるに、平素  
貧なりしに火災後益々窮せしさま明なり。此の文さなきだに哀れなるに妻死して後之れを見いで  
たり。

いつのいさまにかゝるはかな言して打ち置たまへりしを物の中より探り出たる悲しさより捨んは忘れんさする一ツの心な  
りしかすまもまい豈忘れんやほさてもかくも捨られし身のいくべき命かはさてなん露わけ衣のむかし草さしもにかいあら  
ためて獨のみあるいは往に山ほさゝぎす涙を添ふるこそうきが中なるうき事にもあれさいふこなき人にかちつゝ青海  
原はてなく思ひつゞくる物狂ほしきよつらかりしこの年月のむくひしていかによまか我をすてけむ

と秋成の啣てる宜なるかな。案ずるに秋成の痛癖は之れを制する手綱たる妻を失ひて後一層の激  
しさを加へしものゝ如し。

### 第二章 中期の著書

中期は秋成の漂泊期なれば著書と稱すべきほどのものなし。此の廿年間は製作期にあらずしてむ  
しろ社會を觀察せし時代なりき。後日梓に上りし『毎月』『藤蓑』の二冊子の如きは概ね此の間に  
物せし歌集ならん。さはいへど『雨月』は此際世に顯れたりと見ゆれば『春雨』『雨夜』の如き物語は  
或は此の期中成りしにや、尙考ふべし。

茲に中期の秋成と共に當時の學者社會を窺ふに足るものあり、これ『阿刈葎』となす。こは本居宣  
長の所編、秋成との往復文を集めたり。猶此の期の著書と思はるゝものは『漢委奴國王印考』なり  
何れの時期に成りしかは明ならねど

茲歲天明四年甲辰筑前國那珂郡志加島之一農夫於三田畝中穿得一個佩印、印中配五字、曰漢委奴國王、黃金重二十九錢大方  
八分高三分、高鈕四分

とあれば、印を得し頃の作なるにや。全篇委奴國のゆかりを明辨し「皇朝の稱號に非ず」筑紫伊  
都縣主之祖「伊都々彦と云都詐て我國王也と云るを是が族子弟の中なる者私に漢朝に通知して封  
を乞ひ印綬を帶て來りしにやあらん」とて大に國牀を稱揚せり。『阿刈葎』の秋成はさながら我が  
皇國を度外視したる如く見ゆれど『漢奴國委王印考』の秋成は國粹家にして勤王家なり、をさ／＼  
宣長に譲る所なし。此印は今尙<sup>上野博物館に藏す</sup>國學者の喧傳する所、後世にはその由來を搜りしもの數多  
あれど其の先鞭は秋成なり。倭の一字を明辨せんために多辨を費したる、又大和と大倭と混じた  
りどて韻を論じ、古韻書に照し、

上東以下幽以上は上聲去聲皆通音中皇朝の假音は魏以降唐に専ら倣ひて其則を立たるものなるべければ梁以降の音韻を以て  
器漢代の字音は論定すべからざるなり

など云へるより見れば、彼れ廣く唐魏の書を繙き、仔細に漢書を読みし如し。されば『阿刈葎』の  
前篇の如きは、漢學者と和學者との衝突を現じたるが如き感あり。（撰者曰く、福笑子はこれより



『阿刈葎』に就き秋成と宣長との争論を叙すること頗る詳細なれども、本論縁薄き記事なれば割愛して載せず。

### 第三章 後期の著書

秋成の著書の梓に上りしは前斯と後期となり。前期の著書は小説にして後期のは専ら茶道和歌に係る、而して後期のは大抵門人の手に集められし歌集の如きもののみ、疑ふらくは舊稿を此期に上梓せしなるべし。第一着は『清風瑣言』也寛政六年七月刊。今や彼れは京阪の間に茶人としてのみ知らる。蓋し秋成は稗史壇に於ても、歌人としても、國文家としても、當時第一流の人にあらず、故をもて一般に世間は秋成を文人として注目するよりもむしろ雅客として推稱しき。これ當時中流以上の人々、平素閑居のひまに、小説を愛讀するよりも、和歌を朗吟するよりも、寧ろ茶器を翫弄せしによるなるべし。今彼れの雅人に重ぜられし様を窺はんため、餘所事ながら當時の茶人と『清風瑣言』とを見んに、已に『閑田耕筆』にも「茶香は風流の態にて近世盛に行はる」とあり、又『癖物語』にも「一天下こそぞりて茶の湯なる時代ありけり其世の人は郷黨ち茶なきには語らず室ち茶に非ざれば入らず割截ち茶に非ざれば食はず道具書付なきは買はずかさねばち茶と稱し、ぬかればち茶がないとそしる」などあり。總じて當時の雅客は千金の資を投じて一茶器を買ひ、家産を傾けても茶具を求めき

香はもてあつかふ調度なご金銀時給のものなひて貴人の翫びさ見ゆ茶具はもの翫びて其室も松の木柱竹のなげし中壁のまつ

らひ貧賤の様をさながらに隠士の態に似合しきをかへりて香の具はいかに美麗なるも限り有て茶具は古器の價數百千金にもあまるものありさればわびたる室かたわに見ゆる器は金殿に飽き珠玉の器めづらしげなき尊貴の翫給ふこそ御眼覺る心地すべけれ陋室に倦、陶瓦の全からぬを左右にするものはたま／＼香の具の翫に美なるを取扱ひたらんは暫しよき夢見たる思ひせん閑田耕筆

實に當時太平の餘、上下驕奢に耽り、華美の風を好み、されば閑散の便にとて茶器を弄びしもの多かめれど、未だ眞に茶を愛して其の理を究めしは稀なり村瀬梅亭の言によりて明なり今は秋成は世人の産を傾けて一輕甌を買ふを笑ひながら彼れ亦容膝の居に米石の蓄もなく棲みながら、尙鶉居珍玩とて南蠻製茶瓶を有せりけり、こはこの書の初めに圖示せるものなれば「からだを葬禮ごみに賣ても其かけでもない」珍品なりしなるべし。期くばかり茶事の流行せる折突然此の書出づ、其の歡迎せられしこととよりなり、さて又『伊勢物語古意校』よしやあしや』等の著あり

『伊勢物語古意校』は『癖物語』を著す際常に其文を翫弄せし消滴を止めたるもののみ、これが附録として『よしやあしや』成る専ら語源を搜索せるものなり、寛政五年秋九月を以て梓に上る、又『大和物語』を校したる書を見るに出版の年月も記さず單に其文字を傳へたるのみ、『露語通』ハ文法の、こを論ひたる書なれど云ふべき價値なし、『古今集打聽』は加茂眞淵翁の草する所なり、翁既に没し其の女其遺稿を公にせんさず、時に會々秋成の京師に鳴るれば校補を乞ひしものなりといふ、其他『落窪物語』を校し『萬葉見安補註』を作る、享和元年『冠辭考』梓行す、こは眞淵の『冠辭考』を補ひ、冠辭枕詞を究めたるものなり、當時年既に七十歳氣盡き筆力は衰へたりき、年月のわり／＼筆にまばし止めたるに、遂に其巻尾に「いゝいゝはぶきやりしなり老さりてはよろづに爲す事のたづ／＼しくてなむ」を慨嘆せり、猶『文苑玉露』の「瑞龍山下に應ずみのまき雪の日獨り言に」といふ文『蓬文集覽』の「十雨言草」等を見れば、當時の生活を窺ふに足るべし、又『背振翁物語』にて背

振山の隠士茶の靈に逢ひての物語を記せるものあり余は深く恩借を許されたる厚意を謝す其卷末に自ら書して曰はく  
老弱より愚に物狂はしくて万すゝるにのみ有しな世に落はふり遠まりの儘三ませこなたは目言く心も共に老はれてそれに  
つき憂事のみありしな文や歌やにまさらはされしかや心つきてつたなき言のみ云ひつゝ終らん事の悲しさに今は此一巻  
にいつはりながら心をやりてやみぬべし著書論辯注若千編庭の古井に濯めてやうく快しと思ふには

ななき夢見はてぬ程に我魂の古井におちて心さもしも  
いにし年月に木にゑらせつるの意なり事さものあしきを今はさりかへさまほしきを唯打うめきて止まんものか、あらいきう  
きの齡や香々

老れば世の人数が浪華江のあしかる業の男なりしを粗笨なる前の漢文と參照

文化三年二月

瑞龍山下無腸七十五齡書

これ秋成茶に事よせて己が思を述べたるものなり。彼れすでに世を觀じ盡くして死し後笑を後世  
に殘さんよりは寧ろ書を濯めて我が魂を安うせんと欲したり、其の梓に上りしものをすらなほ後  
世に傳へざらんとしき。其の性の奇なるを見るべし。

案ずるに『冠辭考續貂』を著し、享和元年の頃は、彼れ古墳累々たる間に生息し、徒に薙露を歌ふ  
を聞きては耳を傷ましめ、白楊の飛ぶを見ては我れ知らず悵然とし、秋草の晩、松柏の夕、獨り  
梵鐘に睡を驚かし、靜に世のはかなきを觀じつゝあり、然るに此際舊敵手、本居宣長は齡已に七  
十二、名聲天下に轟き、鏗鏘衰へず、世間に請せられて京師に上り、四條烏丸の東に寓し巍然門  
戸を張りぬ。秋成の當時の感如何なりしぞ。彼れの門下には千家俊信、田中大秀、渡邊重名、植

松有信等の鳴るあり、中山大納言、三條大納言、園大納言、花山右大將、日野一位、大炊御門中  
納言、綾小路中納言、芝山中納言、富小路三位等の諸卿、或は彼れを殿上に召し、或はみづから  
旅寓に來たりて、古典か講説を聽き和歌の冊を送り、厚遇至らざるなかりき。然るに此れは如何。  
霜枯れの落葉矮屋にふりかゝる昔物さびしく、訪ふ人もなき墓の戸には半夜の月の照すありし  
みこの時の盛なりし事は隨從の門  
人石塚龍磨の都日記に詳なり。

### 第四章 秋成の和歌

秋成の歌集には『毎月集』と『藤箋冊子』との二あるのみ。『毎月集』は曾禰好忠の集むる所、其の序  
既に墓碑に見ゆれば云はず、『藤箋冊子』は岡崎の僧昇道の輯せるものなり。昇道嘗て秋成に事へ  
たり、其の著の湮滅して世に傳はらざらんを恐れ、同志と謀り、其の文詞を集めて弘布せんとす  
秋成聞きて喜ばず、曰はく、吁吾目未だ瞑せず、何爲ぞ此の罪業をなさんやと。昇道答へて曰はく  
先生已に七十を以て涯となす、生くるも猶死するが如し。如何ぞ喙を吾が事に容るゝを得んやと  
秋成語塞り拒むを得ず、歎じて曰はく、己れの刀を以て己れの身を傷ふ者とは予の謂なる歟と。  
昇道即ち國文及び和歌數十種を收拾して一種とす、これ即ち『藤箋冊子』なり、此の書出で、秋成  
の才名藉々、洛陽の紙價爲に貴きに至りぬと云ふ(續近世叢談)。

蓋し秋成の名當時に高かりしは『清風瑣言』と『毎月』『藤箋』の歌集とにあり、こは文化三年を以て  
梓に上りぬ、時に年七十五歳なりき。同年七月二十五日は伴蒿溪が七十四歳にして逝きし時也。

秋成の歌學界に勢力ありしは橋千蔭の歌集『うけらが花』に散見したるをもて知るべし。又菑溪の著『閑田耕筆』に

百八十八

近江彦根の陪臣大管中養父其主の領地を檢する時或山家にて不納を責るにつきて其家の後山に林繁茂せるを見付是を伐剪て代さなきばかく未納にも及ぶまじきを告む農夫いなこれなくてはあわのふせぎいかにもすべからずさいふそれは何の事ぞと問しに雪は積るものなりあわはつみて崩るものなれば林をもて防かざれば家をうちたふすなりと答へけるに中養父は古義を好む人なれば初めてさいふ万葉集に

ふる雪はあわになふりそ吉張のわかひの岡の塞ならまくに

さあるも正しく是にてあわはふりて崩るゝ故に塞ぎさなりがたければあわにはふるこまなかれさいふなりけりさいへり凝雪は水氣ある故によくつむあわは密雪に充べし寒至て強き故に水氣盡て輕しされはあわさはいふならんこ上田秋成は釋せり常にあわ雪はふるほまなく消る春の雪さのみおもへりそれにて万葉の歌聞えさるはあられど切ならずこれらも夏に失て夷にもさむるさいふべし

と云へる文あり、以て彼れが當時一方に旗幟を顯へし、襟を窺ふに足る。されど彼れ既に本居宜長に斥けられたり、全體の國學者は殆ど彼れを夷狄視せしなるべし。現に今日歌學者中歌人として彼れを知らざるもの多し。秋成嘗て大文字火を詠じて曰はく

如意が嶽にはこの山づむのおほしやよらせけん相國寺の大まこの文字一つを谷峯かけて筆走らせふん月のその夜是に光を揚て宮も藁屋もあふき望ましむは世の目さまし上午よき岩倉花園加茂山につきて目を流しやれば受宿こそ空にかしらな突入るゝばかりにてそれがあたりの山邊は九重のこのへの御垣なしてむ辨大宮しづにますべき國原なりけり黒谷よし田の丘つとさまげみの庭もせの物に林の中よりそひへ出し巖もたが爲にさか造りけむ此見ゆるあたりはいにしへのにしごりの郷ぞと

人のをしへしに

露霜のあしたに見れば山姫の錦はいまも残るなりけり

大凡和歌に志すの士の繙かざるべからざる歌集に二あり、一は時代の風潮に率先し、一家の見識を以て能く特殊の格調を出だし、當世を風靡し、後世の模範ともなりぬべきもの、景樹の如き、眞淵の如き是れなり。さてまた『萬葉』『古今』『新古今』等各々其の時代によりて想を異にし調を異にす、これ吾人が人丸、赤人、貫之、伊勢の歌を玩讀する所以なり。且や古史、古人を知らんとせば勢ひ彼等をもて媒介とせざるを得ず。此等の價值ある歌集は皆讀むべし、されども同じく歌人と稱せらるゝも、敢て古道を發揮せし所もなく、其の歌はた格別の特調なからんか、後人玩讀するをなさいるへし、其を繙くの必要を感じることを薄ければなり。秋成の如きは蓋し此類ならんが、其の範圍狭小取りいでいふべき風趣なし。彼れの歌集はあるも只名のみにして其の人物を知らんと欲するに非ざるよりは之を繙かん要もなし。彼れの歌は『冠辭考讀』四にも已に

古歌の工みは思ひがけぬ事をいへども人情のまをいふなり後の人はおもてのみよろしくいふなり

とありて、眞淵の下流を汲めるものゝ如し、されど其の咏を見ればむしろ古今以下の調に倣へるに似たり。左に彼れが歌文に對する意見らしきものを掲げん、

昔へは歌ま文のけつめなく言に出てまらばさいのへしをやうつりての世にこは歌なり是は文なりましも言定めしは言に擧ぐるのみのうたひはやせるけぢめになんあるを立かへりてたゞ讀て見れば何のわきな言の幸ひなりけりもろこの人もいへりき(宋の陳氏文則)六經の文には異體なかりしなり故に易の文は詩に似たり詩の語は書に似て書は禮にひきし鳴鶴在

百八十九

陰其子和之我好爵吾與爾靡之云を詩の中に取交たらんに孰か是を交の辭を見あかさん其在于今興迷亂于政顛覆厥德一莛浮于酒一莛雖滄樂從弗念厥紹一罔數求三先王克共明刑との詞を書の語に入るとも誰か雅の章のこゝに交りしとて撰出べきかしこもこゝも古言はひこつものになん有けるかしこには音韻をたふさみて聲をさゝのへうたふさやこゝには言を延べ約めつゝしらべゆたけうたひしものさぞさるからに文にも歌にもおなじかむり装ひして言はあやなせしたれなん世のさま人の心の長くゆたけきをばつゝにもおぼし知らるゝなりけり(冠辭考續紹序)

秋成の意見概ね此の如し。歌文の一轍なるを覺り、而して和歌と文章とのけぢめを立てたる、俗流を抜く數等といふべし。

まことや秋成は粗放の譏をまぬかれがたきも、尙其の自由進歩の思想は時流の上に卓然たり。彼れ曰はく

(今の)人の心さかしきに過て言狭く苦しげなるはしも下なげかしき業なりけれなべての人は衣にもうつは物にもあなぐりもさめていにしへをうつさまくするもの我輩は此言の宮びをのみ戀をもふなりけり(冠辭考續紹序)

と、其の所見の妥正なるを見るべし。あはれ彼れをして僻せしめしものは時勢の罪にあらずして何ぞ。

### 上田秋成

饗庭篁村

おもひ出るも慚愧千萬、珍書がるもの二三冊讀見ると早忽ち小説家傳の通となりしと心得、おほけなくも近世小説史編集を企

て、始は着々事業も進みしが、多く讀見れば多きは、易きとむづかしく明かりしと思ひしこと暗くなり、只五里霧中にさまよひぬ、一發見ありて嬉しやと心暗々しくなるあさより疑の雲はまた立掩ひて、果は我心に分けかれて目も眩めく心地するに、我が淺學寡聞を今更知りて、筆を抛ち稿を棄てしが、左れども近松門左衛門、曲亭馬琴、上田秋成の傳のみなりと調べ見ん筆を再び拾ひ上ぐるうち、近松の性行も馬琴の傳も秋成の事も委しく述べられし人ありて、事はこれにて盡き、我志しも果したるが如くなりぬ、此上にまた古人を責たり矯たりし、金箔を剥がして味増を塗り付んこと我等が分には恐れありとあきらめ居たるに、此ほど親知某君大阪よりわざ／＼我が爲に秋成の書幅と其文集歌集を取寄られ、かつ秋成につきて文士不遇の論ありしより、感慨の餘熱此にまた、あつかましくも筆をさる、嗚呼後の慚愧は今よりはた幾許ぞや。

某君より賜はりし秋成が手書の一幅は一紙に茶瓶を畫き、上に

冥福掩天真 厄貢顯奇才

あつつきにいつも汲む水沸らせて煮る茶をけさは春の初花

文化五年巳往非我意

無腸

これよく翁自らの生涯を盡したるものさいふべし。

上田秋成は浪華の人とばかりにて、出生の地およびその實家を知らず、享保十七年生れ(或は十九年)文化七年に死す、享年七十九歳(また七十七歳)京都南禪寺中に葬る、我意に非ずと昨日の我を打棄たる夫よりわづか二年にして、眼を疾みてものよく見えず、起居を扶くる者もなく、寂寥のうちにすでに心、灰となりたる殘軀ばかりを常に愛たる紅梅樹下に埋めしなり、西澤一鳳の隨筆言狂作書に、上田秋成は崇禪寺馬場の敵討とて世に名高く敵として狙はれたる生

田傳八郎の遺子なりとしたるは奇を好む作者氣よりの開誤りなるべし、西澤一鳳は狂言作者にて江戸にも下り、すでに故河竹黙阿彌翁もよく其人となり知られ、折々此人につきてのをかしき話あり、其中の一に黙阿彌氏これが假寓を訪ひたりしに二階の壁には筆筒の書割あり、坐には古机と硯のみ、よくこそ來玉へ、先づ一服と火鉢押やり其の古机を持て一鳳二階を下りたるゆゑ、此は室の狭きゆゑ取片付たるならんと思ひしに、志ばらく待たせて一鳳は酒一壘と皮包を持ち上り、たま／＼の珍客折あしく囊中の寒ければ、古机を賣りて是だけを調へぬ、いざと勸めて少しも貧を苦にせざりし奇人なりと、斯く物に拘はらぬ質なれば隨筆は誠の筆まかせ人に聞くまゝ見るとまゝを深くも思考へず、書留たるにて言狂作書のみならず、同隨筆皇都午睡などにも他人隨筆中の話を多く聞くまゝに記し、また古人の和歌發句を引きしも間違數多なり、此人の隨筆一部によりて生田傳八郎の子なりとはにはかに信じ難し、まかも此敵討を初めて竹田小出雲が淨瑠璃に作りしは寶曆八年にして秋成すでに二十七歳の時なり、同じ大阪に在りての事なれば何とか他に志るす人もまた評判もありしならん七七八十年の後の一鳳の隨筆のみなるはいかにぞ、然れども秋成自身に其父母の名をいふことなければ疑案はつひに解がたきか、秋成一とせ妻をともなひて但馬の國城崎の温泉へ浴みし、事あり、其紀行を秋山記といふ、其文中丹波の福智山のやどりよりよしみの竹田を過ぎ大阪へとて歸るみちの件に「右手の山にそひて煙の立が賑はしく見ゆるを聞へば氷上の黒井といふこの聞ゆる郷はちやちやは父達の住たまひし古さといかねて聞しものから

かゝるついでにつけて尋ねゆかましを母刀自のいかに待たたまふらんと思ひ棄てこくりやうの阪道にかゝる云々」とあり、予其境にいまだ至らねば方角おぼつかなければ、明かにこれ秋成が父祖父の故郷を云ひしなり、崇禎寺馬場の敵討に敵を返り討にして単怯の名を取たる生田傳八郎は大和郡山本多家の臣にて討たれたるも同家中の者なり、寫本の貸本屋物に崇禎寺馬場仇討といふ十卷あり、それには生田傳八郎は播州明石藩庄林八左衛門の次男にて生田惠兵衛の養子となるどあれど、秋成が自ら親祖父の故郷と云しにはあたらす（尤も此寫本は種々不稽の事を取まじへたる坪もなきものなり）、四十年近くも連添ふ貞實の妻に我が家系を隠すのみか、よし隠すも偽り欺くべき秋成にはあらじ、小澤蘆庵は國學者中氣節ある人なり木下長嘯子を罵りて其集を手にせざりし人なり、其人にして秋成とは最も深く交りぬ、秋成家集中に名の見えて其まじはりの親しきを見るもの詩人にして村瀬栲亭、歌人には芳溪と蘆庵のみ

家集蘆庵しぐれのやざりして其あした傘もたせこされしに云やる

むら時雨ふるにさなれる笠の山かさてぞ君をさめましもを

南禪寺の庵をさひて

君がすむ宿の水音聞つれば濁る心もあらはれにけり

かへし

我庭のさいれ石こす谷水のすむさばかりは人目なりけり

年の暮にはいつも炭を切て贈らるゝによみてかへせし歌

蘆庵

秋成

秋成

埋火のすみつきかたき部にも思ひをおこす友は有り

かへし

蘆庵

また羨しき友垣ならずや、人を殺して國を立退き敵とねらふ孝義の者二人まで返り討にして身をかしくしたる無道人の子にしてまかも娼家に出るとせば慷慨潔癖の蘆庵膝をまじゆるも身の汚れとすべし、其家にやどり薪炭をおくるの交誼あらんや、よし蘆庵は世情に疎くして秋成が素性を知らずとするも、此兩人と共に友とし交り深き伴蒿溪は秋成よりは一の年上にて大阪に共に住み世情俗談に通じたるものなり、かゝる異事奇説を六十年來耳にせでやあるべき、有りて諱ば秋成には忠なるか知らぬと蘆庵には何と云はん、かゝる事は萬々あるまじき事なり、奇説は人を惑はせ易し、また聞て傳ふるに興あり、一鳳が筆すさみにのみよりて生田傳八郎（或は源八郎）の遺子とは予は信ぜざるなり

因に云ふさきに福笑門子ありて秋成が事はつまびらかに述べられ、夫には予も一兩度下問をうけたれば思ふ事は問はるゝに語りたり、左るゆゑそれに見えたる事は此には成るだけ省くべし只予が今調べたると異なる點は辨することあるべし、福笑門子くせものかたりに序したる竹窓さいふ人を誰なるらんと關根先生を訪ひ、故只誠翁の自記の中に竹窓は竹内玄々一なりとあるを見て直ちに此の竹窓を竹内玄々一とさきはめて其傳を事々しく擧げられ、夫より類推して秋成の江戸に來たりしとまで云はれしは若きはやり心の誤りなり、上田秋成の書に序したる竹窓は大阪の儒醫森世黄とて秋成と尤も親交ありし人なり關根正直氏も竹窓と只問はれしゆゑ併家奇人談の作者竹内玄々一と思はれて只誠翁の自筆を取出して見せられしならん、秋成が友の竹窓と事よく分けて問ひたらんに、なご方角邊の此盲人を引出されんや、すべて問ふ人は指したる其事柄の一方なれど問はるゝ方は突然のうへ深く事柄を知らず思ひ誤つ事なくして誤つ事もあるものにて、問るゝ人の迷惑なることもあるものなり、斯うは云へども福笑門子の此の穿鑿徒勞にはあらず、竹内玄々一は目に盲して心に盲せず、併家奇人談の著ありし事を紹介したる功少なしといふべからず。

上田秋成は崇禎寺馬場の敵討の敵手たる生田傳八郎の遺腹の子にあらざる證のもつとも確なるを云へば此仇討は正徳五年の事にして秋成出生前十六年なり、其日のうちに手疵にて死し、又は自殺したりと傳ふる傳八郎十六年ながらへあらん事かけても思はれぬ事ならずや。

攝津中島郡崇禎寺に在る遠城治右衛門安藤喜八郎兄弟の墓碑に正徳五年未十一月四日とありといふ

秋成みづから父母の事を云ひしは宮川保恭の爲に作りし旌孝記の文中に「噫、我れ父に別れて四十餘年、母二人さきなるはいとさきびはにて面をだに見知り奉らず云々」とありて末に享和二年三月かゝいあるしぬとあり、これ秋成六十九歳のときにして是より四十年をかぞへのほれば實暦十三年なり餘年とあれば夫より前なるべし秋成二十八九歳の頃ならんか、母は若くしてまだ秋成が幼なきうち死して其面だに見知らずとあり、其人生田傳八郎の妾ならんにはあまりの年の差ひならずやかたぐ、以て生田傳八郎の遺子ならぬとは斷然たり、一鳳が聞くまゝの好奇談より、前後を考へざるオインレ人共これを傳へあらぬ事を信らしくなして實事譚といふ怪しきものに載せつひには大方の人も是を實説として疑はざるに至りしこそ悲しけれ。左れども其父の何者なるよしは諱む事ありてやあきらかならず、おもふに丹波の豪家の子浪花の

遊廓に漂かれ狂ひて秋成の母とかたらししも、父母のいさめの厳しきに隔られ手切どかいふ事などになり父子の縁を絶ちたるより、父にして父ならず、子にして子にはあらぬやうになりしにはあらぬか、秋成はじめは放蕩にして後の母の訓にも戻り我儘に振舞ひ、父なし子と云る、恨みに營業などはせず、終に資産を失ひて諸所に漂泊する身とはなりしなるべし、前に引きし旌孝記の次の文に「後の母は今すでに十四年の昔へとなし奉りぬいまそかりし時は日を愛すべき心を露ばかりも持たらず大方の事ども御心にたがひて重き罪かうむりし云々」とあり勘當せんなどまで懲らされし事もありしならんか、若きほどより四十歳ごろまで學問に身を入れず、歌舞吹彈の花柳場裏にうつゝ心なりし事は其妻瑚蓮尼が老年に及び、二人長柄にやつゝしく暮したるに、斯くわびしき草むらの宿も、昔し君が家を外にのみなして、我一人母御の心をとり内外の事を取まかなひ、空しき闇を獨り守りて涙にあかすこと多き時にくらべてはいどのどけく嬉しと云たる文にも知られたり、又門人釋昇道がつゝらぶみを集めし故由を記したる中に。

歌や、文や、翁の齡にしては、いさ少きは、わかくてをばせし昔は、よろづ打たはれがちに、まめくしき道に心ざしもありざりき、四十さいふ年より、よみかきならひしといふ物がたり、べちにまち文を題せられし一卷あるを、こは耻ある事どもありきてゆるしなし、さは四十をばしめの手習の、それすら黄岐の術のいさまを偷みたる遊びなればうへも多かるましく云々

とあるにてよく知られたり、さきに福笑門子秋成を論じて秋成若きほどは放蕩不羈にして妓樓に

夢を結びて曉を知らざりしならんと云れしは知言といふべし、妾形氣、聞耳世間狙は即ち此歌吹海中の漂客たりし時の作なり、語格テニヲハの法に合はざるも宜なりけり。

文才縦横の秋成すでに其頃もておこなはるゝ八文字屋風の書ぶりは摸して直ちに其堂に上り、多田南嶺をしてひとり奇才を誇らしめず、此才氣を移して國學を獨り學びしたるに加藤美樹江戸より上りて大坂城に勤仕したり、此人加茂真淵の高足弟子なれば秋成は人を介してその門に入りぬ、そは三十七八歳の頃なるべし、此時雨月物語を著して板に刻りて世に出したれば、美樹は其才を奇として、待つに門人を以てせず、朋友として睦みかはせしなり、まかれども秋成は慎しみてこれに師事し、後年美樹が京都に客死したる折にも葬儀厚く取まかなひ、其歌集靜舍集を校正刊行し、また美樹のよみうた中もつとも世に知られ師の真淵もよしと稱へたる、桔梗か原古戦場の歌。

ものゝふの草むすかばれ年ふりて秋風寒しきちかふの原

といふを石に刻りて信州桔梗が原に建てたるなど其情厚しといふべし、美樹が雨夜のだみことばも秋成序を加へて浪華にて刊行させたるなり、かゝる因縁より本居宣長派よりは末徒孫弟子の如く見なされ、また彼が時めきて我が不遇なるより狷介の質は一倍はげしくなり物争ひも多かりしなるべし、我が詠み歌も時流とは同じかゝるまじとつとめて異躰に出でこれ古躰なりはた創意なり、我は我が歌を詠ずるなり人に倣ふて心の誠をのぶべきかはと我を張りしものなるべし、故に今の

世にも和歌者流としては傳はらず、將た二三の小説は變名なり若きほどのなぐさみなれば小説家としても知られず、幽寂の境界に止む事を得ぬ遺悶の煎茶の事のみ本事の如くなり、大枝流芳と優劣をあげつらはれて止みたりしは氣の毒の事なりし。

大枝流芳は大阪櫻の宮邊に住み風流好事を以て名あり煎茶の流行は此人を以て始すといふは早く青濁茶話の著あればなるべし時はおくれて出たれど秋成の清風瑣言の茶事に深切なるには如かず、故に煎茶家にはたま／＼上田無勝とて書幅なご席へかゝる事もあるなり、村瀬榜亭の藝苑日涉また茶の事を説くこゝ詳なり、秋成は莫逆の友にして其説も略同く、彼これに問しか、これ彼に據りたる互に相參政しものなるべし

前章に秋成江戸へ來らぬやうまるしたるも其證を擧げざりしゆゑ推量獨斷の嫌なきにあらす今集中を檢するに左の確證あり

比枝に雪つもれり

眞まられの日枝の深雪の曉は富士見ぬ老が思ひ出して

また佐々木眞足が東行を送るさいふ長歌の末に(上畧) 田子の浦にゆふ花さけり、みすまるの玉拾はずは浪の穂のゆふ花つみて漬づまに、もてこ我せこ歸りこん日は見ぬ老が爲、こあり秋成江戸に來らぬここ明かなり、是等の穿鑿無用に似たれど、今の瀛軍旅行と違ひ京阪よりすれば立歸りなるも一ヶ月は費すべし、まして江部の風光を見んきて來らば半年三ヶ月短かくも其所にあるべし、江戸の歌人文人に交りなばまた秋成の生涯にいかなる變化を來たしたるや知れざればなり、江戸の歌人にして書牘の往復ありしは只村田春海一人か春海の家集琴後集中に左の一章あり

上田秋成がもこへ

春たらかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ、今はいはほの中なるすまひをふり捨給ひて、ちまたの花柳に立まらひ玉ふらんば、いかに心ゆく御すみかならまし

すこもれる谷の鶯いかなれば都の春の心引かれし

こなん聞えまほしき、されどうき世の塵の、のがれがたかなるも、猶ほ市のうちに隠れけん、古人のためしにならひ給ふべければ、世のさびまらぬ人々さのみ、みやびがはし給ふらんは山住のつれ／＼ならんよりは、こおし許りまぬらすものから、いたすらに千里のよそにありて、萬まのあたり聞え承はらぬこそ、あかぬわざなれ、さはいへ雁の翅の行かひだに絶すは、中々に遠くて近きたぐひさや思ひなぐさみ侍らん、柳の糸のくり返しつゝ今年もまだえなく聞えまぬらばやこ思ふを、ゆめ鶯の鳴音、なむしみ玉ひそ

福笑門子千隆の歌集うけらが花に散見したり云はれしがうけらが花を檢するに其中に上田秋成の事更になし、おそらくは此琴後集の誤りなるべし、其誤りの責は予も分かつたざるを得ず、嘗て福笑門子の問に答へて秋成の如く來歴分からぬ人を探らんには其友人の詩文和歌など外側より集め來て借その面貌を認むべきなり、江戸にては千隆、春海京にては蘆庵、蕪溪、榜亭、六如など集を檢へ玉へよ必らず發明の事あらん、こ斯う云しより推測して、うけらが花に散見したりは鶯かされしならん、學びの道の數多にて、心のどけく校へ玉ふ暇なきには無理ならぬ事なり、又予が答へにもぶ／＼としてよくは聞えざりしならん

事迹あらはなる人だにも其底の心はいかにある、いかに世をば思ふていどなみつゝはあると云ふことは、他人より付度しがたきものなるに此上田の翁は、我より自らの事跡を晦まさんとし、心血を分ちたる著述歌文すらも世にとめじと構へたる事なれば、今よりして其人柄いかならんと推量することはもつとも難義の事にして、よくせざれば、我が始め思ひたる方にのみ引あて、あらぬ事になり行くべし、翁は自ら出所の陋しきを恥ぢて、我から身を持崩し、才にまかせて世上の人を白眼にのみ見しかとちもふに、長柄の假住にある頃も其妻と世がたりしての果に加茂の眞



淵翁は雲雀を題にて

霞たつ春野の雲雀何しかも思ひあがりて音をや鳴らん

と詠まれしが予もこれに付て

冬の野の枯生に交る草の床にいつ立空と雲雀鳴らん

とよめり翁も思ひありげなり、我もまたしか思ひありとや人の聞やすらんと打笑つゝ嘆息したりといふ、是を思へば放蕩の果の捨バチに世を嘲弄したる人なりとも定めがたし、福笑門子古學小説と近世叢語によりて、ある日加茂の季鷹尋ね來たりて名刺を通じ直ちに刀を提げて其室に入る秋成勃然として子我を殺さんとするか吾死たりとて徒らに死するものならんやと傲然あたるべからず季鷹よるこばずして去るるいふ一條を出し、秋成の行爲やゝもすれば狂に類せりと云はれたれど、此一話予が聞けるは大に差へり、加茂の季鷹もまた狷介不羈の人、嘗て東都に來たりて當時の歌人に交をもどめしが外面は皆な睦まじく歌の會などに呼びよばれまた其よみ歌も互に謙讓するやうなれど其内面は異を立て他を譏り、傍觀苦苦しき事のみなれば

此も大人かしかも大人どうしたらけ角突合の江戸の歌人

とひそかに嘲りたるに、これを聞傳へて皆いかると聞きて、また

大人たちが怒り出しては恐しやモウ〜こんな所に居ぬこと

と狂歌して京都へかへりたる程なれば、南禪寺にわびしくある無腸の翁こそ己が同調の友なるべ

けれど一日その庵の扉を叩き、これは加茂の季鷹にて候が此のあたりを不圖よぎり候まゝ御閑夢を驚し候對面たまはるべくやと云入しに、中より聲あらく、事の次手に秋成を訪ふ季鷹のあるべき必定、汝は偽者なるべし疾く去れと呼はるに、季鷹頭をすくめて歩をかへし、翌日また庵を訪ひ、翁に逢ひたてまつらん爲に季鷹わざ／＼參り候と云入れしに、よくこそと轉ぶやうにして秋成立ち出で先づこれへと座に招じ、志めやかに物語りしてありしが珍客の來られしに一種一瓶の儲なきは餘りに荒涼なりまぼし待玉へとて、やがてして薄き酒少しと菜のごときもの、味噌に和たるを取れたり季鷹それを味ふに何とも知れがたければ是はいかなる珍味にやと問ふに秋成は額を撫で、君が爲にとて今しも摘し垣根草といふものと云ふに季鷹も手を拍て笑ひたりと（此の一話友人川崎千虎翁より聞く）斯くありてこそ、兩人會見のさまでも思はるれ、名刺を通したりとて案内もなく其がまゝに刀を提げて初見參の人の室に入らば季鷹こそ先づ無禮の人といふべけれ、またこれを見て直ちに我を殺すかと悞るゝといふもあらぬ事なり、近世叢語はよき書なれど和文を漢文に書かへたるなれば其語氣大に違ふところあり、同じく秋成の事を云ふに長柄にありしとき其の佗住に盗人の入りたる事あり、壁をこぼちし其まゝにこれを盗窓と名づけし事も只これのみにては意を悉さず（近世叢語の原文福笑門子引かれたれば畧す）いま原文を家集より左に抄出す

庵を鶉居と名付しは、聖人鶉居穀食の謂にあらず、鶉は常居なしといふによれるなり、此庵に

ある夜ぬす人入りて、いさゝかある物をつぎもていにけり、あしたおもふ我よりもまづしき人の世にはあればうばらちひまくだるなり

其入し壁のこぼれ窓に作らせて、盗窓と名づけて、風を入る便よしと人にかたりしかば、あな忘れしどて、あしく云ふとも聞えし

これ他人が瘦我慢の翁よへちた物好よと笑ひしを自からもあざけりしなり、鹿笛を吹きすさぶを里の子等が聞て昨夜は鬼があめきたりと怖れしなど人も、笑へばみづからも笑ひしにて、狂といふほどの事にてはなし、かゝる氣ちがひの翁など自ら云しこと著書中に多し、これ老ぼけたるを卑下したるのみ其等を直ちに漢文にうつし、これを傳へて狂とせんは早からずや

また本居宣長と阿刈葭の事あるより執拗我慢の人とするも、あたれりとは思はれず（阿刈葭のこと福笑門子つまびらかに論じられたれば云はず）此の執念深き論難辨駁は、ほとんど國學者といふもの、特性の如し、また表看板とも云ふべし、秋成の事には要なきやうなれど事の因に予が覺えたるだけを擧ぐるも、先づ本居宣長が「直日靈」といふを著して其が道とするところを説けば市川匡麻呂といふもの「未賀能比連」といふを著してそれを難じ、それを説破するため「葛花」の著あり、また其を駁して三芳野檢校といふもの「級戸風」といふを出す、その答を小林文康といふがなして「ますみのかみ」といふ、又本居門人服部中庸「三大考」といふを著せば、本居大平は「三大考辨」といふを出すを打ちかへして「三大考辨々」といふもあり、又本居宣長

の「玉霞」あれば優婆塞竺愷といふ者の「玉あられ論」あり、それをまた三井高蔭といふ人の「辨玉霞論」といふにて論じたり、「衝口發」あれば「鉗狂人」あり、「天祖都城辨」あれば、そのまた「辨々」あり、村田春海の令義解の講釋を聞て和泉の眞國といふもの其謬りを詰りしに春海これ答をなし、また眞國それを論じたる「答問書」あり、此答に春海はつまりて、其が根にて病死したるなど、まで云ふは、口の達者なが云争に勝つたぐひにて、あながちに答の少なきを以て論の窮したるなりとは定むべからざるなり、前田夏蔭が「木芽説」のうち自の若き折の事を「宇那爲波奈理」とかきしを林國雄といふ人がめて、うなあはなりとは女にこそ云へ童男には云はずと云しに夏蔭答へて「宇那爲波那理辨」の著あり、其にまた「辨々」ありまた「辨々正譌」あり、それにまたまた「大黃根」といふもありといふ、此他もさだめて此類多かるべし、これ國學者の云ふまけじだましあなるべし、かゝれば秋成と宣長の取合も多かりうちの事といふべし、まかれども、國學の上におきては元より秋成は宣長の敵にはあらざるは論なきなり、此争ひの一事をもて秋成を執拗我慢とも云さだめがたかるべし

世の佗しさも淋しさも、ともなふ妻にぞ慰むなる、秋成は世をそむき、世の人にもあらぬものにうとまれしが、妻は夫の心も氣もよく知りて、睦ましく樂しく飢寒の中に志をつくしけり、霞は竹の簀子に轉べど、炊きて粥とすべき米はなく、垣にかけたる綿殻も被は薄く雪にまた實を見るほどの田舎住にも、温かき眞情に、夫が冷腸を慰めけり、貧苦艱難といふことは、善人の上にあ

りては、同情ます／＼深く、愛し愛する事も身にしみて固きゆゑか孝貞の行ひ多く顯はる、富貴安樂も悪人の上にありては財を争ひ、勢を嫉み、夫も婦も誠ならぬ行ひ出來て醜聲の隠れぬも多かりけり、秋成夫妻はまことに我邦の孟光伯鸞か、實にうらやましき中にはありけり、秋成みづから妻の没後に其の生涯のあらましを云へり

も九條の農家の女、いさなき時に植山の某に養はれ、父母にまがひて難波にうつり來たる、年二十一、我にかしづぎ、去年の冬五十八にして世をさり玉ひぬ、常に多病のゆゑに齡五十一といふさし、我母、おのが母をも見つきはて、髪を薙き名をも改む云々

名は玉とよばれしが剃髮して瑚璉尼といへり、和歌和文とも夫のかたはらに學びていと巧なりしかども女々しく物つゝましき本性とてこれを見せひけらかす事はなかりけり、梅津の橘經亮は秋成の歌の友なれば此方へはかくさず贈答もありしか、伴の菴蹊すら此の妻女の才學をばなきのちにて始めて知りしほどなりとぞ、斯う内氣なる人なれば秋成に嫁したるははじめ秋成は家を出て見かへらぬまで遊びまどへば姑の氣色さだめてよかるまじきをよく事へて家の事も取まかなひ、家を矢ひて諸所をさまよふ中も家計のことに顧みさせずして夫の心のまゝに學問させせたるは底に雄々しく絶忍ぶ強き性のありしが故なるべし、秋成も四十年來友とも母とも介抱人ともたのみたる此妻に別れては悲歎の涙に眼を病みて四年おくれれてよもつくにへ其あとをひて世を去りぬ、瑚璉尼が艱苦にもなひしさまは、秋成「鶉居」の文中に左の如くあり

一前畧刀自が聞きがめてよしや釘さしたためし小鏡戸も、君いまさぬ夜は、昔は物すさまじかりしを、今の時このひさりぬれんとわびつゝもあつすは歸さいふもの、心得さするよ、かう年をわたりて住つき玉はぬにも、めでたしと思ひし家には事しげく、君がおほし知らぬ物、うさの侍りしを、此草むらの宿にはかうのごげき世も有けるさ、わびしさにかふるにはよしともあしきと思ひ定むる心なんあらぬといふ云々

我爲のまもり神にておはしけりと秋成が戯ふれながら手をすりて云ひしも理りなり、此文にても始ははなやかに暮したるは知られたり、また源氏の巻々を題にて歌よみける事書に

冬の夜の長きをかこつ老をあらはれて、かたはらに在る人の（秋成が瑚璉尼をさして云ふなり）何くれさなぐまめかれつるあまりに、光源氏の物がたりを、つぶく／＼よみて聞ゆ、一夜に一卷、或は二まき、長まはふた夜三よにも、巻々のをばるこゝに、是があたひに歌よむべく云ふ、いなまでよみつるが、其心をたがへつらんも知らず（物語の筋によくかなはぬもあらんさなり）いみじきをこわざなりけらし

とあり、翁爐をかこみて一人は讀み、一人はおどがひをもたげ或はかうべを低れて聽く、此人の心しらし此君の情しきなど其あひだにあげつるはんはいかにもむき深き事ならん、濁富はねがふ所にあらず此の清福こそうらやましけれ

墓村曰此の妻女のこゝに翁がおきつきごころを定めたる京都南禅寺をさはんさて博覽會見物の次手に忍び立て京都には行きたるが、何がさて、如意峯頭のサンライズ、美術館の裸美人といふ愛敬者に魂は奪はれて、問ふも忘れぬ、尋ねてもまた答ふる人はなし、なれし東の花にもそむきて、歸ればやがて當世流行の風邪におそはれて文机のかたはらへ這ひよるもかなはず、何も拙者が流行を聞けばさて慌てまごひて病名を片カナで書て通がる譯にはあらず、實に據ない事にて此章大に遅くなりぬ、左れば此にて一段落さなし、熱氣も冷めたる其時に再び證語は書出すべし、瑚璉尼の實母の寺は京都二條河原眞行寺

なるよし尼が文「露分衣」の中にあり心あらん人、よき折もあれば其俗性なごをもさひて此雜誌によせ玉へかし  
上田秋成の文章（歌文よりは俗文小説）を世の人のめでたしと云出しは、太田南畝子がこれを紹介したるなり、蜀山人の推奨ありてより江戸にてもくせものがたり妾形氣など愛翫する人は出たるなり、蜀山人、翁の爲に長夜室の銘をつくり、翁また蜀山人が東都へかへるを送りて

風あらし木曾山櫻此春は君を返して散らばちらん

とよみぬ、蜀山人が我文界に、偉功ある、此翁を世に知らしたるのみならず、名古屋の也有翁も蜀山の賞鑒を得て後に其文の江戸にもてはやされしなり

此の終に秋成が其妻を戀ひて夢にみつる事を記したる文のうちを引くべし、此文まことに、晩年の秋成の性情を盡したる自傳といふべし、此記のはじめに、出したる同翁の文と照し合さば、いよく明かならん

昔の人のいへる國を去り、うからやからにうさまれ、家業をせず、あそびてかへらざるは何人ぞや、是を狂蕩の人と云ふ、又才能にはこり名をひかさん事をのみつさめ、おのれをいかなりともかへり見ぬは何人ぞや、是を智謀の人と云ふ、此ふたつとも道な失ふさまや、翁此ふたつなのがれず、さらばみどかき才に苦しまんよりは狂蕩の人と呼ばれて遊ばん云々

附言秋成には子なし、瑚璉尼が文の「夏野の露」にあるは隣家の子をあはれみしなり、此事福笑門子の記にあれば誤を正すなり

上田秋成著書（福笑門子查）

『雨月物語語』	五卷
『くせものかたり』	二卷
『諸藝聞耳世間猿』	五卷
『世間妾形氣』	四卷
『雨夜物語』	一巻
『毎月集』	一巻
『藤簾冊子』	一巻
『靈語通』	一巻
『冠辭考續』	七卷
『清風鎖言』	二卷
『古今集打聽校補』	二十卷
『伊勢物語古意校』	一巻
『よしやあしや』	一巻
『漢倭奴國王金印考』	一巻
『萬葉見安補註』	五卷
『大和物語校』	二卷
『落窪物語校』	二卷

池永泰筆記

『縣居歌集校』  
『靜舍歌集校』

正誤 西澤一風傳中『傾城國姓爺』を同人作としたるは事實に違へるを以て正誤す

近世列傳小説史上卷終

近世列傳小説史下卷

水谷不倒撰  
坪内逍遙閱

第一章 浮世草子の衰運  
江戸小説の發生期

京都、大坂に行はれたる草子類は、はじめ學者の手すさびになり、次第に戯作者専門の業に推移れり。すなはち寛文時代、假名草子の作者には、鈴木正三の如き佛法の玄理を窺ひたるもあれば、山岡元隣の如き國學に老莊の學をかねたるもあり、淺井了意は和漢古今の學に互れる博識にして、これらは實に戯作者中得がたき學者なりき。然るに元祿に至りては、都の錦ひとり學問を吹聴すれども、恐らく窮迫の虚勢とすれば、其の都の錦に文盲無學と罵られし井原西鶴の學問もた知るべし。然れども西鶴は俳諧師たるの地位よりして、兎に角國學、和歌の道に暗からざりしこと、未々の作者の能く及ぶところにあらず。されど西鶴の學力は、季吟等が刻苦勵精の功を積み、漸くに古文の義を解したるとは同日にあらず、彼等の手に成りし其の註釋書によりて容易く得たる知識なるべし。團水、一風の徒に至りては註釋書を手にしや否さへ覺束なく、恐らく

は『源氏物語』の如きも、『湖月抄』は通讀なまで、立甫が梗概の『をさな源氏』にて埒明けしこと疑ふべからず。蓋し浮世草子は西鶴の天才に生れて、學問の力に出でざりしところ却て假名草子よりも小説の軀形一層具備せし所以なれど、單に作者の學力よりいへば元祿は寛文の學者揃に比すべくもあらず。降て八文字屋一派の作者となりては、學問の力は殆ど無く、僅に才に任せて雜書の知識に腹を拵へ、軍書、假名草子を讀みて古今の成敗を知り、西鶴の好色本、近松の淨瑠璃本を六韜三略に備へて、當世の人情風俗に鹽梅なし、潤色附會、剽竊醜案勝手次第に著作して、さながら作者は版木師、筆工と同様なる一職業と心得、二三十年間戯作の命脈を繋ぎにき。されど其積去り、自笑失せて後は、遂に意匠盡き詞藻枯れて、浮世草子はこゝに終局の一段落を告げぬ。最初學者に起り、中頃天才に榮え、遂に無學の手に墜ちて滅亡に及ぶ、これ草子類の運命なりき。斯く京坂文學は亡びたれども、これより漸々に東に移りて、また江戸に戯作萌芽したり。而して其の起點は増穂、殘口なり。

増穂殘口は國學者にして名は最中、大和と稱す。似切齋の別號あり。豊後の人、京都に出て吉田家に屬する某社の神主となり頻りに神道を唱ふ。然れども純然たる國學者にあらず、むしろ神佛兩部を混交し、戯作に托して専ら無知蒙昧の社會を神道に感化誘導せんと勉めたり。すなはち『殘口七部書』及び『龜道通鑑』等にして正徳享保の初め世に行はる、殘口は諷刺的戯文の祖にして其の文脈は風來山人によりて先づ江戸に傳へられ、滑稽小説の種子となりぬ。

## 滑稽小説

風來もまた本領は本草學者なり、戯作は眞の遊戯に出でたれども、奇才一世を風靡せり。寶曆十三年に『根なし草』『志道軒傳』を著し、より、數部の戯作ありて、概ね殘口が作の換骨脱胎なりき。其の七部書に對して、『風來六部集』あるが如く、彼れの衣鉢を襲へりしことは、又さばく戯文中に見えたり。當時江戸には戯作と稱すべきもの、たゞ草双紙の幼稚なる赤本ありしのみ、而して其の趣向甚だ淺薄、たゞ荒唐無稽の昔し話を繪双紙に綴りて、新しき意匠殆どなく、僅に小兒のもてあそびに供せしに過ぎざりしが、安永に至り草双紙に滑稽の趣味加はり、大人も讀んで楽しむものと一變せりき。これ實に風來の戯文が間接に力を與へたるに因る。これより江戸に滑稽小説の一派起りき。式亭三馬の如きは自ら風來を先師と仰ぐ作者なり。なほ滑稽小説に著き影響を與へたるは、淺井了意が『東海道名所記』なり。これは十返舎一九が『膝栗毛』となりぬ。また寛文以降、京坂に行はれたる輕口ばなしと稱する話し本が頓智、洒落の素となりて大に滑稽小説の發達を助けたり。

## 歴史小説

歴史小説、俗に稗史と稱する一躰は、おもに支那小説の雛案に胚胎せり。たとへば京傳が『本朝醉菩提』は、支那の『醉菩提』より來れり、其の道濟の事蹟が一休の俗傳に附會せられたるより、京傳は、一休を主人公として、これに鈴木正三が『二人比丘尼』の骸骨のものがたりを補綴し、

一休が諸國のものがたりを合せ支那書の題をほのめかし、又『櫻姫全傳』の離魂病の事も、假名草子に志ばく見えたる支那譚の翻案なり。然れども京傳のは概ね先輩の翻したる案を更に翻したるものなれど、こゝに又自ら支那小説の翻案をして、風來が滑稽小説に力を與へし如く、江戸作者中に歴史小説の祖と仰がれしは、建部綾足なり、綾足は羅貫仲が『忠義水滸傳』を翻案して『本朝水滸傳』(安永二年)を著はしたること人の知るところなり。これに次ぎ佐々木天元が『日本水滸傳』(安永五年)伊丹椿園が『女水滸傳』(天明三年)等續出、一時水滸傳と稱する小説の外題流行し草双紙にまで其の影響を及ぼしき。綾足に繼ぎて曲亭馬琴支那小説の案を翻し、稗史に一生面を開き所謂唐山の小説は彼れが手中のものとなりぬ。また近松の淨瑠璃本、八文字屋の傳奇ものを巧みに草双紙の合巻に補綴し、滑稽小説、歴史小説以外に一派を開きしものは、柳亭種彦にして、西鶴、其積が好色本の皮想を穿ち、洒落本の跡を奪ひ人情本の一跡をはじめしは爲永春水なり。近世文化文政に於る小説の發達、其の緣由するところ頗る複雑にしてこゝに盡しがたし、大概は各自の傳に譲れり。以上はたゞ上方に榮えたる文學の江戸文學に影響したる主なる點を指摘して、兩者の關係如何を示したるのみ。

## 第二章 江戸作者

山東京傳肖像



### 山 東 京 傳

#### 緒 言

徳川時代の華文は寛文に京都に發し、元禄中大坂に榮え、享保中二たび京都に榮えたりしが、寶曆の末より明和安永の間たとへ江戸には江戸文學の起原ありとするも、風來山人のはしわたし媒介によりて京坂の文學趣味は少からず、江戸に移されき。風來山人より少しく後れて天明を盛時としては、戀川春町、明誠堂喜三次等の諸才子出で、頻に戯文壇に筆を弄びしが、未だ江戸華文の花は雪を帯びたる梅蕾の如く、花唇堅く結んで綻びざりき。

さる程に山東京傳、芝全交いで、戯文を弄ぶもの年に月に其の數を加へき。寛政のはじめ春町は故人となり、喜三次はた自ら筆を止めし頃には、唐來三和、櫻川慈悲成、田螺金魚、烏亭馬馬、森羅万象、初の振鷺亭など數ふるに追あらず、此の時に當たりて群を抜き嶄然頭角を現し、は京傳なりき。京傳いで、戯文の風趣一變し、其の門下より曲亭馬琴興り、式亭三馬、十返舎一九も相續いて世に立ち、柳亭種彦、爲永春水等いで、爰に文化文政の華文は盛春に逢へるもの、如く、柳櫻をこきませたる都の錦を織りなしにき、而して山東京傳は眞にそが花の兄なり。

つらく、惟ふに、山東京傳の生涯は種々の方面を具へたり。彼れは本業と藝術とを兩立せしめたりき。

馬琴が始めて京傳を見し時、京傳のいはく「草双紙の作は、世を渡る家業ありて、かたはらになぐさみにすべきものなり云



彼れは世間人、即ち實際家としても可なり成功し、戯作者、小説家としても一代に名を轟かし、又畫工としても浮世繪師としても其の名を著せり、蓋し赤本黄表紙の作者には往々にして畫作を兼ねたる人あれども、其の最も聞えたるものは戀川春町、北尾政演（山東京傳の畫名）等二三人に過ぎじ。さて又其の行爲に就きていへば、彼れの前半生は放蕩遊逸、後半生は畏懼謹慎、前の京傳は宇頂天の人にして後の京傳は悔悟の人なり、即ち彼れの半生は半無意識にして半生は有意識なりき。

壯年の京傳は、當時の戯作者の多數にひとしく、一個の放蕩兒なり。蓋し京傳は一九が一方に於て當時或戯作者等を代表せし如く、他方に於て或通人的戯作者等を代表せりき、すなはち京傳と一九とはともに放蕩の戯作者なれど、其の趣に大差あり、予は一九が遊逸の狀を詳にせざれど、常に遊廊に入りて遊ばざる樓なく面識ならざる妓もなかりきといへば、遊び様自ら淡泊洒落なりしならん、或時は勘定に差支へて行燈部屋におしこめられ、或時は的なしに遊びて附馬を曳き歸り或時は買ひなじみを外にして他の妓と馴れ、悪性露顯して見せしめの爲に衆妓に侮辱せられ、而も恬と面白がりしは一九なるべし。彼れは廊を以て遊樂の別天地となし、此所に一夜の春を買へども百年の契を結ぶの心なし。京傳は然らず、彼れは遊廊を以て別天地と見做す能はず、否、遊廊は京傳が爲にはさながら第二の家如し、彼れが北里に入るや、金錢を以て春をかかんとにはあ

らず、むしろ氣樂なる交際を求めんとするにありき。彼れが馴染の妓は彼れが妻と一般、あいらんの本間は、自家の書齋よりも居心よく、其所に小説の方案をも立て得べく、其所に書畫の求にも應ずべし。新造、かむろ、やり手、茶屋男の差別なく、青樓内の男女すべて彼れが家内の人の如し。豪遊を競ふは彼れが目的にあらず、寧ろ此の廊の内に一種の閑日月を見出だすを本意とせしに似たり。「娼妓絹飾」に柳標といへる通人の様を寫して

此客へしてほれらるゝ氣もなく又きいたふうの輩にもあらずたゞ口をきいて二かいちうで心やすだてをされ所々のざしきへ遊びにゆくを樂に来る客なり此風の客まゝあるものなり

件の柳標は京傳が當時の儂なるべし。されど強ひて惚れらるゝ氣はなくとも、彼れ素より色中の餓鬼、一たび馴染むに至りては膠漆も音ならず、其の情の深き、恐らくは其の文机に對するが如くなりしか。

文化十四年（京傳没後）弟京山、淺草寺中人丸祠の傍に、京傳が文机の碑を建つ、碑銘は京傳が存命中に作りし「文机の記」なり。其の記に曰く「明和六年さいふ年の二月ばかり齡九歳さいふに師の門に入り立ちていは文字習ひそめし時親のたまはりし文机なむ此つくまにはありけるさればつくりさまもおろそかにてみやびたるかたは露なかれきたふらし捨す年頃たのもしくかたはらなさらすひまり愛つゝあり經し年は五十に近く何くれさつくれる冊子は百部をえたり今はおのが心たましひほれしう眼もかすみゆくにいづしかこもれたしるぎがちにゆかみなごしてもろおひに老しられるさまなるはあはれいかはせむ

耳もそこね足もくつけてもろもに世にふる机なれも老たり

蓋し彼の巴山人の印章に於けるが如く

京傳が久しく其の著作に捺し來りし巴山人の印章は、曾て深川に在りし頃、質流れの品にて父傳左衛門が與へしものにて、于時京傳は十九歳なりしが、此の頃より愛玩して晩年に至るも絶えて之れを失はざりきと『伊波傳毛之記』に見えたり。物に熱中して離れざる性は彼れが特有なり。されば、遊女に對するも一時肉の歡樂を買はんとするにはあらで、多少苦樂を共にせんのもありしか。彼れの遊びは嚴密にいへば磊落ならずして寧ろ眞面目なり。遊廓の世界は凡て虚偽より成立つる「虚言」からでた眞實に遊ばんとするは京傳の本意なるべし。落花已に情あり流水豈ひとり心なからん。浮き川竹の流れの身、果敢なき勤めの遊女といふとも、竟には眞實なき能はざるべし。されば京傳が初の妻も妓なり。不幸にして此の婦身まかりしが、後に娶りし妻も亦妓なり。生涯二人の妻を娶りて、二人とも妓なりしは奇といふべし。

『伊波傳毛之記』に曰く

稟性質弱にして一臂の重きに堪えず然れども多病にあらず五十歳に及ぶまで多く二毛を不見眼明かにして歳に似すなま若き方なり齒は一枚だに脱落せず性好酒を嗜ます時として芳醇を傾け一盞を以て足れり又餌薬を好み服せず病あるも其自然に治するに任す唯食は淫は過度せず又夏日白雨降り雷一聲すれば懼れて殆ど人事を断つ故に夏日に他行するも遠きにゆかず又水を懼れて舟に乗ることなしこれ其餘のみ云々

『戯作者六歌仙』を披けば、巻頭に一個の畫像を載せたり、純然たる江戸町人の風にして、顯には髯の跡青く、年輩は四十前後、一眸に瘦せたりといはんよりは中肉にして花車なる形なり。冬の服

装とおぼしく、羽織の上よりゆるやかに襟巻を纏ひて、紙革製の烟草入を膝の上に置きたるが、左手を右の袖口へさし込み、右手に持てる煙管の吸口、口邊を僅にはなれ、吸ふでもなく下にちくでもなく志ばし漂泊の様、所謂通人がたのやにざかりたる身のこなし、髪はゆひ様も時尙の通人がたとおぼしく、意氣に洒落れたり。顔の色はあさぐろく艶ありて鼻高し、口元は温和やかに、ニコリとゑめる其の下より、清き齒並の一齊なるが、あざやかにあらはれたる、愛嬌あり。されど浮きくしたる方にはあらで、顔に見ゆる小皺は年の故とも見えず、はた疳癬にもあらず、寧ろ陰氣をよせたる證なるべし。眉のいさゝか下りたる、眼の心ばかりくぼみたる、而も圓なるにはあらで稍流れたる、眸子の黒くして下瞼のうちへ半ば沈める、悒鬱といふほどにはあらねど快潤ならぬ人を見えたり、これ實に山東京傳が肖像なり。

彼れ或時は字頂天となりて戯れ遊び

又或時は一心不亂に刻苦勵精す

「氣質浮きたるかたならざれども興來れば茶番狂言などして人を笑はすことありし(『伊波傳毛之記』)  
戯作者常に稿本を草する時は物さばがしきは更なり甚敷寒暑を惡み來客の長座をいさふ事は皆然り胸に浮みたる筋を書きめんとするときは甚に打入たる人の如く他念なくして食をも忘れ又用足しに立こをすらす惜むことありこは予も覺えあることにて皆人斯の如くなるべし翁(京傳)平常種本を綴れるをり食箸をも傍近くこり調へなきて時を定めず欲しこおもへる折食し云々(『戯作者撰集』)

或は粗放なるが如くにして縝密、或は怠惰に似て勤勉、一方は放蕩、一方は節儉、之れを京傳が爲人とす。要するに彼れは天明以降、文化文政の間に於ける所諸通人の模範、才子の雛形なり。

第一章 初期

山東京傳は本姓を灰田、(『戯作者撰集』には拜田に作る)後に又岩瀬と稱す、俗稱傳蔵、名は醒字は酉星、銀坐に居を構へて烟草入、烟管、家製の讀書丸等を鬻ぎぬ。其の居、愛宕山の東に當たりければ山東と號せしが、後に庵の一字を加へて山東庵と呼びき、蓋し山東とのみ呼ぶは僧上に聞ゆればなりとかや。又京橋の際に於て傳蔵と呼ぶが故に京傳と號しき、屋號をも亦京屋といへりき。狂名を身輕の折介、書名を北屋政演といふ。又醒々老人ともいへり。

京傳は寶曆十一年辛巳秋八月十五日、深川木場町の質屋伊勢屋に生まれき。父の名は傳左衛門信明、老後に剃髪して椿壽齋と號しき。傳左衛門はもと伊勢の産にて年九歳の時親と共に江戸に來たり、深川木場町の質商伊勢屋某方へ年季奉公に住込みしが爰に數年精勤せしうち、性來老實なりしかば、主人の氣に入り、遂に擧げられて伊勢屋の養子となり、やがて大森氏の女を娶りて子四人を産ませき。長男甚太郎とは京傳がことなり。

一説には京傳は傳左衛門の實子にあらずといへども其の確證を得ざればばられく實子となしおく

次は女子二人姉をきぬといひ、妹を米といへり。姉は後に小傳馬町二丁目の小間物商伊勢屋忠助の妻となりぬ、妹は幼き時より文才ありて狂歌を好み、狂名を紫鷲式部といひきとぞ、惜い哉芳

紀二八、花唇漸く綻びんとせしころ、此の花他界の庭に移されけり、天明の末のことなり。

『柳史年表』によれば天明四年刊行の草双紙『入まらず思ひ染井(政演畫)』は作者黒鷲式部とあり又同八年京傳が作の『時代世話二挺鼓』の開巻に京傳及び妹米かさし向ひの口繪ありて左の言葉添へたり

「いもさくろさびまきぶ此の双紙に女のたしなきを氣の毒に思ひよんごころなくこゝへ道具に兄弟に、んさやうにて暮をあける」とあるを見れば紫鷲、黒鷲いづれか是ならん但し天明四年頃には未だ十二三歳の年輩なれば作の名はたゞ借物たるに過ぎず而して『時代世話二挺鼓』著述の頃は存命なること明なれば此の後直に身まかりぬさおほし

末子を相四郎といへり、後に岩瀬百樹京山と呼ばれしは是れなり、(以上は『伊波傳毛之記』によりて大要を摘録す)京山は明和六年の出生にて、京傳より若きことは八歳なり(『蜘蛛の糸卷』の叙言に弘化三年七十八翁京山老人とあるによる)

『文机の記』に「明和六年といふ年の二月ばかり齡九歳といふに師の門に入り立ちていろは文字習ひそめとあれば、京傳が寺屋へ上りしはじめは八九歳なるが如し、又『伊波傳毛之記』には京傳が幼少の時手跡指南を受けし蒙師は本所伊勢崎町に住みし御家人行方角太夫といふ人」とあり。扱京傳は九歳にていろは文字を習ひ初めきといへど、こは唯儀式上の寺屋上りにて、其の以前より習字を學びしことは京山撰の墓誌にて察するを得べし、曰はく

自幼好文十歳縮寫孟子今尙存家

これを實とせば京傳が才能は割合に早熟のかたにて、既に其の頃より緻密精勤の質をあらはましを推量し得べし。

安永二年京傳は十三歳、京山は五歳なり『伊波傳毛之記』に曰はく

是の歳父傳左衛門故有て養家を離別し親戚某の家に寓居す大森氏及び京傳外數子俱に共に從へり未だいくばくもあらずして京橋銀坐二丁目に居を移す

此の銀坐に轉居したるは妻大森氏の親戚某の扶助尤も預りて力ありきといふ

是迄は彼等養家に在りて可なりに成長したりしも、今此の不幸にあうて木からあちし猿の如く、漸く親類の世話にて銀座街へ居を卜せしも、家計の困難なりしこと勿論にて

明年の春傳左衛門は初て町内を年首の慶賀に廻らざる可らざるに臨み家事不如意なりしかば別に從者をも雇はす京傳京山の兩人をこの從者に替へ兄には挾箱をかつがせ弟は盆を携へて年玉の品物を配れり此の事は京傳も口づから人にはなせし事あり。

と『伊波傳毛之記』に見えたり。時の状況さもありぬべきことなり。

太田南畝が撰にかゝれる、京傳が文机の碑の背面なる銘のうち「翁（京傳をいふ）及び百樹翁少好牌史小説」とあり、兄弟とも後に戯作者となりぬべき好尚は早くより備はりたりきと見ゆ、されど京山と京傳とは自ら性質を異にせり、京傳は才を頼みて放任せしもの、如く、京山は刻苦勉勵せしもの、如し。彼の京山が自撰の碑銘に「百樹自幼嗜文武」とあり、『作者部類』にも京山は

幼弱より漢學を爲して時彦と交り又書を東洲佐野文助に學びたり

とあれど、京傳は然らず、『伊波傳毛之記』は必しも信憑しがたき傳記なれどさすがに此のあたり

の記事は棄つべからず、曰はく

京傳は天稟の奇才ありき雖も讀書を好まず狂歌を嗜み洒落を愛して理屈らしき事は常に避るの風あり尤も弱冠の時なり日々境町に趣て長唄及三絃を松永某に習ひしが其音聲精妙を缺くをもて遂に止む然れども天性の好事は他の遊藝をたしむに倍ならず又北尾重政を師として専ら浮世給を學びしが給も亦得意ならず自ら棄て行はるべからずといふ故に中途にて廢す云々

京傳は多才の性來なりき、されば何を學びても器用にて、遊藝などもいろ／＼のことじ手を出だしきとおぼし、然れども音聲ばかりは才氣の能くするところにあらず、後々までも辯舌はよき方にあらざりきといへり。畫は得意ならずとて廢めたりといふは寛政中頃のことなるべし。兎に角京傳は早熟の才子にて少年の頃より自儘の振舞多く、遂には朋友などに誘はれて次第に放蕩をはじめしも、傳左衛門夫婦はさのみこれを咎めざりしが如し、此のあたりの事實はた『伊波傳毛之記』に據りて差支へなきに似たり、

性洒落なるより賣色を好み吉原に通ひつゝ家に在るは幾かに一ヶ月申五六日に過ぎず然れども父母何故にや是を咎めず或日其母物を遺失し捜索するも遂に京傳の革文庫までを開くに至る豈計らん文庫に吉原の仲の町の引手茶屋某なる者に支拂し遊女搦代の書出し數十通あらんさは母驚き見て又おもへらく吾兒の遊興に費すもの若干あらん然れども其身の衣裳調度はさらなり竊に親の物一品たりとも失しこまなく又私に遣ひしこまなし渠れ何の才覺何の金銀を儲けうるか奇も又奇其智我子といへども量るべからずと歎賞し京傳が遊里に赴くことを禁ぜざりき云々

さて其の財源を尋ぬるに、天明の頃華奢豪遊を事とするものを大通と唱へしが、此の通人等十八人の一團あり、十八大通と自稱す、其が首領は白銀の針かねを以て元結にかへ、平常髪を結ぶに

も之れを用ひて豪華華美を誇れりし文魚なり。京傳は此の文魚に殊遇せられ、「厚誼兄弟の如き交りあり、渠れ唄へば我れ舞ふ、情愈々伴ふ、此に至つて識る京傳が遊蕩の金銀は明に文魚の資なりしを」と『伊波傳毛之記』には見えたり。或は然ることもありしならんか。當時の京傳は未だ部屋住の身分なり、文魚の如き大盡の巾着となりて其の金穴を利用するにあらざれば、如何ぞ放蕩の資本を得んや、然れども同じ記に兩親が却りて我が子のはたらきを驚歎しきといへるはいかにあらん、こは恐らく記者の文飾なるべし。

安永八年京傳十九歳、此の年より彼れが書工の生涯ははじまりぬ、『稗史年表』(漣水散人編輯)によれば、安永八年の條に『花の江三曲の鼎』及び『かへり咲後日の花』(二部共作者未詳)書工北尾政演と記して其の年の備考に

書工政演今年より出づ後に作者京傳といふ是なり

とあり、これ京傳が草双紙に着筆のはじめなり。

『稗史年表』はいつ頃編輯せしものなるにや判然とせざれど『燕石十種』木の『戯作外題鑑』と大同小異なり恐らくは是れよりいでしものが『戯作外題鑑』には安永七年に政演書作『お花半七開帳利益札遊合』あり備考に「七曲舎案に京傳十五歳にて作□者未詳追可考云々

京傳は此の時十五歳にあらず、考證不確なればしばらく『稗史年表』に従ふ

同九年は草双紙を書きしこと更に多し、朋誠堂喜三次作『龍の都四國うわさ』躰下逸人作『あか

し咄お臍が茶』をはじめとして、作者未詳なる五部の草双紙を書き、尙自書自作の草双紙『娘かたき打故郷の錦』を著しき、これ山東京傳が處女作と稱せらるゝものなり。『作者部類』に曰はく

天明申初て敵討の草冊子を著す(二冊物、此書名を忘れたり)是其初作なり

爰に天明中とあるは記者が心覺を記したるより間違ひしなるべし『娘かたき打』と同作なること疑ふべからず。『稗史年表』の備考に

山東京傳娘かたき打に初て名を出す或人云おかし咄の躰下逸人も京傳のことなり其證は文政間に京傳が舊記を抄集せし戯作問答の頭痛の圖おかし咄と同圖なるを以て知るべし此外『くだ物見立』(作者未詳五部の中『三曲の鼎』なども其類なるべし)とあり、唯書工の名のみありて作者の知れざるは皆其の人の作なるべし、但し右の『娘かたき打』にてはじめて其の名を世に出だしきとほぼし。されど此の作にては未だ山東京傳の名は掲げず、北尾政演書作の名にて世に知られしならん、其の理由は『戯作外題鑑』に政演が書きしもの此年六部の名を掲げて傍ら

豊芥云此六番作者の名不知書工政演書作可成

とあればなり。

翌年にいたりて天明と改元せられき、此の年もまた芝全交、風車、喜三次、可笑等の作に挿書を物せしと七八部なり。かくて天明二年に及び、山東京傳の名はじめて戯文壇に掲げられき、即ち此

の年『御存商賣物』といふ草双紙、京傳作として世にいでにき。此の頃戯作者追々世にあらはれ草双紙大に流行しければ、此の前年四方山人草双紙の評判記『菊壽草』を著し「草双紙は大人の見る物と成りたりといへり」。(『稗史年表』) 流行につれて草双紙の次第に發達せしを察するに足る。此の年亦同じ人の評判記いで、山東が作の『御存商賣物』は「總軸卷極上々吉」の名譽を博するに至れり、『稗史年表』に曰はく

今年も四方山人評判記岡目八目を著す(中略)京傳が戯作『御存商賣物』にはじめて畫作の名を顯し文化の未まで四十餘年の間妙作多し實に稗史作者中の一人と稱すべし

又京山が『蜘蛛の糸卷』には

京傳翁十九歳の時(天明二年)『御發賣買物』(全二冊板元鶴屋自畫)さいふ繪ざうしをわかれしに其年四方赤良(蜀山)作にて繪ざう紙評判記つたや板出版ありし時京傳翁總軸卷極上々吉にあげられき是道を戯作の花澤へ踏み落さされしはためなりけり

『稗史年表』『戯作外題鑑』二書とも『御存商賣物』とあれば『御發賣買物』と京山が記せる恐らく覺え違ひの儘を記し、ならんか、或は寫字の誤ならんか。世間にて京傳が初筆を『御發賣買物』と持て囃すは此の『蜘蛛の糸卷』よりしなるべし、されど京傳はこれより以前に多くの著作ありしこと、上に述べたる如し、蓋し京山が此の作を初作と思ひしは評判記に上りたる事實などにて晩年までよく記憶せしが故なるべし。『蜘蛛の糸卷』は京山が七十八歳に及びてものせしなれば

間違あるも無理ならず。

そも、京傳が専ら學びにし畫工とならずして戯作者と變せしには何か仔細のあることならん、これにつき『伊波傳毛之記』は説をなして曰はく

京傳は思へらくおのれ十八大通の人々に睦みたるより分て文魚とは兄弟の思ひあり然して渠が評判を高くしあく迄も大通たる貫目の落ちざるやう補助せざるべからず此の補助するにはおのれ戯作をなし渠れをそれとなく裏面より賛美し恰も日本國中文魚の大通なる事をしらすばおのれも交情を盡すさやいはむさかり、と心に問ひ心に答へ爰に戯作の筆を弄ぶに至りしなり茲に至りて始めて天明の末冊子を著せしに頗る行はれたり然れども喜三次春町全交等が上に立こまを得ざりき依て又素志の文魚が粹たる所以を世にしらせばやこの意あるより洒落本を著したり

右は記者が例の臆測なるべし、はじめより確乎たる目的ありて著作に従事しきといふことは時勢より推すも、京傳が爲人より推すも、信じてたし。蓋し弱冠の京傳は「洒落を愛して理窟らしき事は常に避くるの風あり」と記者自らも評したるが如く、北里の花に浮れて飯るをさへ忘れし程の時なれば確乎たる目的の爲に筆を採るなどいふ思慮浮ぶべしともおもはれず、寧ろかゝる事には無頓着なるが當時の京傳なるべし、よし文魚がことを草双紙に物せしにもせよ、それは恩人を敬愛する情誼の自然ならん、又京傳が實に自らかく口外したりきとも、それは京傳が戯作者となりし口實と見て可ならん。原來當時の草双紙は出産<sup>あふみだ</sup>ちの赤本を去ること久しからず、未だ口も黄表紙の幼稚<sup>こども</sup>そだちなれば、其の趣向も頗る單純なるが多く、只管に小供等の目を悦ばせん爲のもの

なれば繪を専らとして、文の如きは寧ろ繪解たるに過ぎず、されば草双紙の作者には古き人にては清春、吟雪の如き、中頃春町の如き畫工より出でしもの少からず、否全く畫心なき者は草双紙の作者たる能はざるが如き理由もありしならん、一九三馬其他の戯作者が畫に巧なりしも偶然にはあらざるべし。仍りて思ふに京傳が戯作者となりしも別に深き仔細のありしにはあらで、己れ畫をかくのみならず、性來器用にして頓才ありしゆえ、且つ畫き且つ作りて漸々戯作者の名揚るほどに、比較的短なるかたを捨て、其長を取りしなるべし。後に掲ぐる京傳が著作の表を見よ、其の初めは著作せしよりも畫きしこと多し、而して次第に畫のみのものは減じて著作の數は増し、遂に自作自畫をも廢めて全く戯作のみに從事せし事判然たり。京傳が自畫を全く廢めて他人に畫かしむるに至りしは、寛政二年のことなるが、『釋史年表』は同三年の備考に數言を附して

京傳作此頃より大に行はれ其名高し北尾政演が青本を畫く事此年にして止む

とあり。案ずるに山東京傳は寛政のはじめ迄は畫工兼戯作者にして生計は寧ろ畫の力にて立てきといふも不可なかるべし、蓋し此の頃までは戯作者にして潤筆料を取りしものなけれど、他人の作に畫きし場合には、相當の禮金ありしなるべし。京傳は草双紙に畫きしのみならず、人物草花なども畫きて世に公にせしことあり。『伊波傳毛之記』に曰はく

(前略)天明の末年繪きたるもの世に發行せり人物又ひ草花などもまれにあり且紅繪もありみな政演畫とあり今も稀に見る

と、さるほどに天明二年四方山人に知られて草双紙の評判記に「總軸卷上々吉」の名譽を擔ひし青年の京傳はいかに奮發の志氣をふるひ起し、か、今之れを推量るに由なけれど、天明四年頃より續々と山東京傳が名を印したる草双紙の發行せられしを見れば、評判記の一言は多少彼れ舞鼓をせしを察すべきが如し。就中天明五年に出でし『江戸生浮氣蒲燒』は疑ひもなく黃表紙中名作の一にして其の趣向は百芳兩分限と呼ばれたる仇氣屋の一人息子艶次郎を立物にして世の自惚漢を諷笑したるにあり。艶次郎は性來の醜男子にして作者は其の低き獅子鼻を木瓜モカの圓の半片かたわらの如く畫きたりしに、此の冊子いたく流行して艶次郎の名世間に響き、爾來自惚子を艶次郎と綽號し、低き鼻を京傳鼻と稱したり。而して京傳は如才なき男なれば人氣を取らん爲に世間にて京傳鼻と稱するを機として、爾來草双紙に自家の畫像を挿入するときは、必ず此の低き艶次郎が鼻を己れが鼻に畫き其の像をも似せけり、然れども作者の眞の鼻は此の著ありて以來ますます高くなりけりとぞ。(以上の事實は『戯作者小傳』鈴木得知氏の『大通世界』に依る)

天明六年畫も作も前年に比して劣るところなし、此年別に山東鶏告と名のりて『御富興行會我』『西國信多染』の二部を著しぬ、一は京傳が別號なりといふ。同七年畫作五部のうち『三筋立客の氣上田』はこれ又名作の一なり、同八年此の年の著作甚だ多く十二三部に及べり、別に『雪廓女八朔』は京傳門人山東唐洲作とあり、是れ又自家の變名なるべし。『戯作者小傳』に曰はく

(前略)翁に近年は門人なし蓋くは門人あり見えたり京傳門人龜毛と物に見え文化中には拜田泥牛といふ名も見えたり又古

き冊子に『御富興行會我』といへるに山東鶴告(シホカセ)といふ名を記し享年二十五の曉に序す政のふさあり山東唐洲といへるも門人なり

活東子云龜毛は三教指歸にも所謂有名無實なり泥牛又鶴告なごもいかにあらん其人あるにはあらうなを尋ねべしと見えたり。いつの世にも小さき文人ありて少し名の知れたる人に乞うて門人となる例、珍しからず、されど京傳には前後に門人とは關亭傳笑(與の泉侯の家臣なり)唯一人のみなりといへば是等は彼れが假りの名なること疑ふべからず、而して京傳門人などしたるは、是れ又いつの世にも拙き作には己れが名を出だすを耻ぢ、さればとて出さずにはあけぬ事情あり、誰れの補助、若しくは某氏閑などして一方には其の拙劣をかくし、一方にて門人弟子のいかにも大勢あるが如く見せかけ、利益を天秤にかける名家も少からず、京傳も恐らく此の類にはあらざりしか。彼れが世にいづるまでは人氣を得ん爲にあらゆる手段を運らして名に汲々たりしことは『伊波傳毛之記』亦之れを説けり、同書に

京傳はおのれが名をひろむる爲近郷近在江戸各所の神社佛閣へ山東京傳を染抜たる手洗手拭を奉納し又狂歌師四方赤良野元木網等の社中及書畫の諸名家其他高名の先生に交らざるこなし

とあり、果して此の事ありきとすれば、先に蜀山が評判記にて「總軸卷極上々吉」の名譽を與へしも多少おひきたての恩恵ありしかも知れず。

是れよりさき天明九年の頃より洒落本を著して是れ又世評高し、こはおもに次章に述べなければ今はいはず。さて天明九年は寛政と改元せられたり、時に京傳は二十九歳なり。既に戯墨に従事

すること爰に十年、此の間の著作は概して陽氣なり、言々句句々輕妙洒落、彼れが眼中の世界凡て陽氣なり、多少猥褻の嫌なきにあらざれど、奔放不羈の處作者の眞を窺ふに足れり。其の特質は滑稽諷刺にして佳作頗る多し。『伊波傳毛之記』に曰はく

京傳は群を出で其作を賞讃すること大方ならざりける只全交の作れる草子折々京傳の作を凌ぐ事あつて當れり依て京傳に并びたつ者は全交あるのみ其餘の作者は曉の星の如く有共なきが如し云々

右は天明の末より寛政のはじめに亘れる京傳を評したる詞なるべし。蓋し戯作者中の先輩にして且つ才子の聞こえ高き喜三二は天明八年に自ら筆を絶ら、春町は寛政元年を名残りして世を去りければ、京傳に匹敵すべき作者一人もなく、さながら戯文壇は彼れが獨り舞臺の有様なりき。素より京傳の先輩としては市場通笑あり、又芝全交などいふ才子なきにあらねど、是等は京傳と文壇の椅子を争ふものにあらず、寧ろ彼れの爲に強敵ともいふべきは曲亭馬琴なりしが、馬琴も未だ頭を擡ぐるに至らざりしかば、京傳が文名は恐らく此の時以後二三年間より盛なりしはなかるべし。これ實に京傳時代と稱すべきなり。下りて寛政の半ばに至れば一身上に種々の變動生じ、戯作の趣味も一變し、續いて馬琴起り京傳の名尙高かりきといへども、寧ろ老功の稱ありしのみにて、此のころの全盛とは同日の談にあらず。天明の末は實に彼れが全盛期と稱すべし。

## 第二章 中期

本章には寛政元年より享和三年まで、凡そ十五年間の經歷を叙す。そも、天明の末に、戯作者



として世に立てりし京傳は、多少方便を用ひて其名を高めたりし嫌あるにも係らず、流石に虚名のみにはあらざりけり。『稗史年表』によれば、寛政元年中に發市せし草双紙は、都合三十二種にして著者は十四名なり、其のうち山東雜告とあるは京傳が變名なりとすれば、京傳、雜告二名一人の手に述作せられし作、十二番ありて、京傳が作は、實に總數の三分の二以上を占むる割合なり。素より『稗史年表』は、必しも精確といひがたけれど、尙京傳が戯作者中に有せし實力の一斑を示したりといふを得べし。

此の年の主なる作は『地獄一面鏡の淨はり』『艶なる哉女仙人』『三川嶋御不動記』『きしも中洲話』等に於て、中には此の頃、世上に起こりし事實に擬して作りたるも多しといへり、これ實にその頃の流行なりしが如し。

又同年麴町書林江崎屋が需により『孔子一代記』を著はしぬ、こは草双紙にあらず、畫入の半紙本なりきといふ。『作者部類』に曰はく

天明の季(『伊波傳毛之記』には『孔子一代記』寛政元年と明記せり)麴町善國寺なる書賣の需に應じて、孔子一代記(半紙本也、卷數を忘れたり、三冊もの也)弟京山が相四郎と呼れし頃、手傳して孔子國語禮記などより、孔子の事實を抄録して、マがて、和文に綴りたるに、挿畫(北屋重政畫也)を加へたるもの也、當時洒落本をつゞりて名たる作者に、孔子一代記を誦へしは、ふさはしからぬに、時好になふべきものなられば、いはかりも實れざりけり、是京傳が半紙形なる讀本綴りし初也

此の批評一理窟あり、されど之れを京傳が稗本の權輿とするは唯外形に就ての評なり。後の小説體のよみ本とは、自ら別種ならざるを得ず。

是れより先き、天明中、幕府政を失すること甚しかりしが、將軍家治の薨去と共に、弊政改革の時機到來して、家齊軍職を繼ぎ、松平定信入つて老中となるに及び、昔日の餘弊を一新して、政令漸く嚴肅ならんとしき。これ天明七年のことにして、是れより風俗の取締も隨うて嚴重になりぬ。然れども當時の戯作者は、もと天明中、不取締の治下に生まれいでし自由の兒にして、彼の天明の打毀と稱する大暴風のうちにさへ、別天地の太平樂を謳歌せし程の氣樂もの多かりしかば、爾來政令草まり戯文海にいかなる荒浪の騒立たんとする兆あるも、其邊に頓着すべき輩にもあらぬば、相變らず放縱洒落の筆を弄びしが、今や彼等の頭上におそろしき鐵槌は墜落し來たりぬ。例へば彼の天明八年に、無類の大當りをなし、朋誠堂喜三三が『文武二道万石通』は、當時營中の秘密に關する事柄を綴れる物(『稗史年表』による)の由にて、之を名殘として喜三三が戯作の筆を止めしも、畢竟は或筋より諭旨せられたる結果なりきといへり。次に戀川春町が『鸚鵡返し文武二道』(天明九年正月出版)は、喜三三が『万石通』の後編なれば、これ又當年の秘事に關する作なり。『作者部類』に曰はく

(前畧)就中万石通の後編、鸚鵡返し文武の二道、彌益行れて、これも亦大半紙摺の袋入にして、二三月頃まで市中を賣あるきたり、當時世の風聞は右の草紙の、こに付て白川侯(松平定信)めされしに、春町病臥に辭して參らず、此年寛政元年己酉、七

月七日没云々(天明九年寛政改元)

かゝる風説實にありとすれば、若し春町存命なりせば恐らく彼れも亦公儀の咎を免るゝ能はざりしならん。當時の状況既に斯くの如し、戯文壇に日の出の作者たりし山東京傳が此の禍を免るゝ能はざりしは異むに足らず。彼れは先づ畫工として公儀の一打撃を蒙りぬ。『小説史稿』に曰はく

寛政元年の春、石部琴好と戯名する者世直大明神金塚の由來を角書して、黑白水鏡といふ、所謂黃表紙の冊子を著し、北尾政演之に畫けり、琴好は本所龜井町に住める、用達町人松崎仙右衛門といふ者にて、政演は即ち山東庵京傳の事なり、然るに此冊子は佐野田沼騒動を書き綴りし者なる故に、忽ち絶板を命ぜられ作者琴好の仙右衛門は、手鎖の後江戸拂きなり、政演の京傳も、過料申付られたり、

案ずるに右『世直大明神』は天明八年の出版にして、其の翌年寛政元年に、作者の琴好、畫工の政演等處分せられしもの歟。『稗史年表』には此の作を掲げざれど、そは多分表中より省きたるものなるべし、同書天明八年の條、備考に、曰ふ

此の頃の稗史に營中の遺事に擬して作れるもの多しといふ、按ずるに「万石をかし」(中略)「世直大明神」など、寛政二年に於ける京傳が草双紙の作は、前年に比して、部数は少なかりしが、名作と稱すべきもの多し。即ち『京傳浮世の酔醒』山郭公けころの水上市『心學早染草』等是れなり。『京傳浮世の酔醒』は予未だ之れを見ざれど、作者の小傳(寧ろ戯作の魂膽を書きあらはしたるものか)に擬して作りたるものにして、戀川春町が『其返報怪談』にはじまり、『龜山人が家の化物』芝全交が智惠の程『万象亭戯作濫觴』一九戯作の種本など、皆同種の書なりといへり。爰に注意すべきは

『山郭公』と『早染草』との二作なり。前者は從來の脈を帯びたる佳作にして、後者は新に生面を開きたる名作なり。前者は滑稽を主眼とし、後者は教訓を本意とせり。『早染草』は此の頃、世にいたく心學の流行せりしによりて思ひ付き、矢張時好に投ぜし作なりきといへど、作者が平素の心掛、流石に精細周到の實あればにや、他の戯作者等が、徒に心學の文字のみを利用して、世俗を瞞着せんとするとは同じからず、作者先づ心學の一斑を研究し、其力の能ふ限りとはいへ、それを深切に、草双紙によりて説明し、世の婦女童蒙を教へ導かんと努めたり。蓋し京傳が、後來一轉して勸懲主義に至るべき最初の歩武は已に此の時に定まりたりといふべく、此の二作こそ彼れの生涯を分界すべき二箇の目標ともいふべけれ。

『早染草』は人皆の知れる善玉、悪玉を主材としたる趣向にて、情を悪玉にたとへ、心を善玉にたとへて、人間が悪事を働くは皆情の作用なれば、心を確固しつこくとして情に溺れざるやうに心掛くべし、といふ意味を寓したるに似たり。素より心の有様を説明したりといはゞ心學的としても淺薄平凡の見解なること論を俟たざれど、尙人の心の作用を幾分か戯作の上に具象的に現はしたるは寛文頃の假名草子中心學ものと稱する戯作に胚胎し、江戸にては新しき思ひ付といふべし。されば此の新趣向いたく世人の喝采を博して二編三編と續作し、善玉、悪玉の評判いよゝ高く、遂に人の非行を働くをば、彼れは悪玉なりなど、一般にいひ囃すに至りきといふ。『稗史年表』當年の條に

早染草に善玉悪玉といふ事をはじめて書出し京傳が妙作姦に教訓の意深く大に行はれて二編三編にいたる後世に善玉悪玉といふことの業は此時におこる歟

と見えたり。されば是れ亦京傳が名をいよ／＼高からしめし縁なるべし。

此の年慶事あり、京傳は此の年三十歳に達しながら、未だ配偶を得ざりしに春二月はじめて妻を娶りぬ。『伊波傳毛之記』に曰はく

寛政二年の春二月吉原江戸町扇屋花扇が番頭新造菊園京傳が元に走れり菊園は京傳が熟妓なり去年の冬勤の年期満ちて出廊すべきを尙止て扇屋にあり主人宇右衛門俳名墨河は京傳の友たりよつてひそかに菊園にすゝめ推て其家に遣せしなり京傳は渠れを元より馴染の敵妓なりしが敢て夫婦約束せしにあらざれども情の切なるを以て拒むことを得ず父母も亦これを咎めずして却て京傳に娶せけり此婦人顔せ美を以て賞す可きにあらざれ共其質柔順にして素直なり是を以て薪水の事能く此の婦人の掌裡に理し舅姑につかふるに意にさらはず身を又浮薄に裝す通れ京傳の妻として耻るなき舉動なりし云々

更に珍容あり、此の年の秋曲亭馬琴、はじめて京傳が門人たらんを乞ひけり。京山が『蜘蛛の糸卷』は當時の有様を記して

曲亭馬琴は、寛政の初、家兄の許へ、酒一樽持ちてはじめて來り、門人になりたまふをいふ、所を開けば深川仲町の裏屋に獨り住むよしをいふ、家兄曰、草双紙の作は、世を渡る家業ありて、かたばらになぐさみにすべき物なり、今時鳴る作者皆然り、さて又戯作は、弟子として教ふべき事一つもなし、さればおのれをばつめ古今の戯作者、一人も師匠はなし、まづ弟子入はおとわりなり、まかし心安くはなしに來玉へ、また書きたる物あらば、みる事はみてやるべしと示されるに、まづ／＼來りてものを問へり(中畧)

『蜘蛛の糸卷』は「いさ／＼かも文勢虚談なし」といふ書入れはあれども、そも／＼此の書は皆人の知れる如く『伊波傳毛之記』の後に世に出でし因縁附のものなれば、其の文意の字のまゝには信じがたきこと勿論なり。おもふに當時の事實はほゞ前抄文の如くなりけんも、京傳の馬琴に對する言葉使は餘り横柄にして穩かならざるに似たり、京傳の氣質としては、縱令彼れを弟子となすとは斷りしにもせよ、其の挨拶は必ずや丁寧なりしならんか、然らざれば馬琴いかに窮したりとて彼れ性來の剛愎、いかんぞ一時たりとも京傳が門下に屈せんや。『伊波傳毛之記』に曰はく

寛政二年の秋馬琴はじめて京傳に逢ふ一見して舊知己の如し其好む所同くければなり京傳は寶曆十一年辛巳秋八月十五日深川水場町の質店伊勢屋の家に生れたり此年三十歳なり馬琴は明和四年丁亥六月九日深川高松通日蓮宗淨心寺の近傍に住みし武家に生る是年廿四歳京傳よりは六年の弟なり其幼少の日は僅に隔る事三四町互に竹馬の友たるべきに識らずして東西に分れ今二十餘年の後逢見え俱に同好の知己ならむ奇遇も又殆ど妙といふべし(中畧)相逢ふにおよびて此日各々萬里を告げ互に拍掌して同胞の思ひあり是を以て交誼も疎ならず

『伊波傳毛之記』は京傳が死後の著にして、生前にも既に京傳と馬琴との交誼は昔日の如くならざりきといへり。殊に著者の傲慢(同書は馬琴の著なることいふまでも無し)は、自家不利益の事實を隠して一言其所に及ばざれど、當時の状況を記するに當りては、多少友情を禁ずる能はざる概あり、以て京傳が馬琴に對する舉動、さすがに冷淡ならざりしを想像するに足らん。而して京傳が勸告により、馬琴も自稿を示しきと覺しく、翌三年の新版に、馬琴が初作『用盡二分狂言』(二

冊物豊國畫)は、京傳門人大榮山人と名乗りて世に出でけり、是は京傳が馬琴に對して好意ありし章標とも見るべし。

寛政三年の作中草双紙に教訓の意を寓し且心學的なるは、『盧生が夢其前日』『人間一生胸算用』『心學早染草』の第二編なり)等の數種あり。京傳は此の年より全く他人の作に畫くことを止め、己れが作といへども、多くは専門の畫工に委ねて、自畫作のもの纔に一二部に過ぎず、即ち此の時は京傳が戯作者たるの地位確定せしのみならず、まことに名譽の頂上に達したる時にして、前章に

京傳の作此頃より大に行はれ其名高し、北尾政演が青本を畫くこと此年にして止むと『稗史年表』を引きしは正に此の年の事なり。

こゝに予は聊か前に遡りて、彼れが洒落本に就きて一言せざるべからず。京傳は洒落本を何時頃より著しくかといふに、其の作に記したる年號に就て考ふれば、多分天明五六年の頃なるべし。今其の二三を擧ぐれば、天明六年『客衆肝膽鏡』をはじめとして同七年『通言總籙』同八年『吉原楊子』夜半の茶漬』等あり。寛政元年には『通氣粹語傳』『新造圖彙』同二年には『傾城買四十八手』『繁々千話』『田舎談議』『京傳予誌』等あり。京傳が洒落本を最も多く著し、は寛政に入りて後二三年の間なり當時洒落本を作りて世に行はれしこと草双紙に譲らず。『伊波傳毛之記』に

洒落本には息子部屋、夜半の茶漬、傾城四十八手、京傳餘師、其他數種あり皆雅俗さなく賞翫せざるはなかりきこれらの洒

落本にて其名ますく、高し當時年々草冊子洒落本多しといへども世人京傳が作本ならざればすまざりけり

といへるは記者の過賞にあらず、洒落本は京傳が獨得の妙技なりしこと、後世に至りても異論なかるべし、志かるに此の得意の長技は却りて彼れが一身の上に厄難を招致すべき媒とはなりけり。そは寛政三年耕書堂葛屋重三郎の勧誘によりて、禁を犯し竊に洒落本を作りしに原因す。『作者部類に』曰はく

寛政二年、官命ありて洒落本を禁ぜられしに、葛屋重三郎其利を思ふの故に、京傳をそのかして、又洒落本二種を綴らしめ云々

又同じ事に關し『戯作者撰集』はいへり

京傳が作る洒落本も従前は潤筆を收めざりしかば當り振舞き稱して馳走し或は反物などを贈りたるが屢々戯作を依頼するに付娼妓箱ふるひより初て肴代金壹兩を贈り其後一部一分又は二分位づゝ潤筆を收むるとになりしが仕懸文庫は無類の大當りなりし故に潤筆三分を收め一夜玉樓に招待して饗應せりといふ

而して此の年作りし洒落本は『仕掛文庫』『錦の裏』等二三種なりき。此の頃は未だ著作の潤筆料といふものなし、京傳が作の草双紙前の如く行はれたりきといへども作料とて金錢を拂ふことなく、唯反物其の他の物品を遣るのみなりしに是等の洒落本に限り作料ありしなれば、葛屋の勧誘にうかど乗りしも利欲の手傳ひし間違なり。

『仕掛文庫』は「子共のきがへを入れてもたせて來るぶんこなり大いそ(深川のかへ名)にてきものをまかけといふ事人の志る所なり尤もまかけぶんこを持せる事は繩丁に限る」とかや、而して其の

繩丁の世界を寫せるが故に此の名あり、時代を鎌倉に擬して嫖客を朝比奈、及び曾我兄弟の名としたれど、其の實は深川岡場所の穿ちなり。又『錦酒裏』は攝州河邊郡神崎の廓の景にして夕霧、伊左衛間の情事に擬したれど、是れ又吉原の状況たるに外ならず。そも、遊里の趣は夜を以て日にかふる仙境なれば、燦爛たる不夜城の光景こそ眞に廓中の表面なれ、然るに此の書は「青樓畫の世界夜の景色の花美とはうつて變た案じの小冊」にして一切の有様、昨夜見しとは異なり杯盤狼藉即ち「昨夜の西施は今朝の無鹽」なる、美しき錦の裏の醜き様を寫したる一種の思ひ付なり。尙外に『娼妓絹飾』も同年の作にして以上三部なり。素より禁制中のことなれば、外題には教訓讀本と記して發賣しけるが、書肆はもとより作者もまた更に禁制には介意せず洒々落々たる有様、左の文によりても知らるべし。『仕掛文庫』の跋にいはいはく

河豚羹を不食愚園ありくふ礙呆ありくはぬ愚味は美味を不知、くふ素痴は有毒をしらす毒あるを知らずして食ふ人は論ずるに不足、美味を知らずしてくはざる人は一概にして危し不佞京傳嗜好淫蕩を著述すといへども實は前に美味あるを述べて後に毒あることを示し戒を垂るがためなり不知美味を知り毒をまつて恐慎んには河豚はくひたし命は惜しきは豈此境を悟したる君子の言といはんや孔夫子衛國の者一賣家を過りて曰くこゝあり吾未だ徳を好者吹肚魚を好か如くあるものをしらすと嗟夫れホンニ傾國傾城買ふものは此鐵砲汁の勢ひにあらずして何ぞや自ら後にまゐるす

まことに平氣なるものならずや、而して讀者よりも作者が先きに自製のふぐじるに中毒したるは自業自得といへ、寧ろ笑止の至なり。此の洒落本を作りしにより、公儀より咎を蒙り、制禁を犯して洒落本を開板し、且之れに號くるに教訓讀本と題せしは、上を蔑にしたる段不埒至極とて、ま

ば、公儀の吟味を受けしが、一同は唯射利の目當のみに拘り、公の下知を忘却せし趣畏入る旨を申上げて伏罪しければ、やがて一同を召出されて各々罰あり。作者京傳は手鎖五十日、板元重三郎は身上半減の罰所申付られ、行司兩人は商賣構の上所退放申付られ、『錦の裏』『仕掛文庫』『娼妓絹飾』及び古板の洒落本悉皆絶板となりけり。これは此の年の夏のことなり。『伊波傳毛之記』に「此一件は寛政三年の夏六月頃に起り全年冬落着」と豊芥子が言を引きて證せり。

さるほどに板元萬屋重三郎は元來大腹ものなれば、かばかりのこと畏るゝ様子もなかりしが、京傳はいたく恐懼して前非を悔い、再び法を犯すまじと、これより京傳は謹慎の人となりけりとぞ、喜多村信節が『聞之任』に左の一節あり、當時京傳が謹慎の有様を窺ふに足れり。

當春（寛政三年）戯作者京傳御咎にて手鎖にて町内預さなる（中略）京傳予に語りて曰封印改めに出る度腰懸より人の往來を見るに羨しく身にとなくばのどげかるべき春の日をさおもへり手鎖に逢ひし者のひそかにはづすやう有なき教けるがおそろしくおぼえて慥み居たりさいひしは實情なるべし

右『聞之任』當春とあるはいかゞあらんか、尙考ふべし。今は『伊波傳毛之記』の證言によりて「夏六月」のこととせり。

依りて思ふに曲亭馬琴は此の一件の時は江戸にあらざりしか、其の理由は京傳と馬琴とは當時交際日尙淺くして、情誼もまた他日の如く疎遠にはあらず、馬琴もし江戸にありしならば、京傳を見舞ひ不幸を慰めしや明なり。然るに此の一件の年月を證せるに、他人の言を以てするを見

れば、己れ目前、此の場合に接せざりしこと疑ひなし。彼れは恐らく他行中にて此の一件を忘らざりしならん。『蜘蛛の糸巻』に曰はく

(馬琴は)まば／＼來りてものを問へり其後すこしばかりト筆をまりしゆゑ、うらなひにて錢をさらんと、まるべありきてかな川宿を心あてに錢次第にて永くも足を止めんとていさま乞ひに來りしが、其後六七十日音づれを聞かざりし故、馬琴は狼にや喰はれつらんなど、家兄戯れいはれしが、ある日、今歸りしきて來り旅癖のはなしするうち、物など調てくはせ、さて立ち歸りしが、或日又來りていふやう、旅の留守に出水の(是寛政三年の洪水)ために、疊残らずくさり、壁も落ら、勝手物流れうせしも多し、旅の稼ぎもはか／＼しからざりし故、今我足なき蟹の如しいかゞせんさいふ、家兄曰、まからば當分我所に食客せられよ聞きて、馬琴大によろこび内弟子の心にて居し故、衣服までも心つけ給へり、かくてありしこ年ばかり、ある日、地本間屋萬屋重三郎來り家兄にいふやう、此節見世の番頭引負にていさまなやり、帳場あきて見世付あし、みれば居候の男年比もよし、帳だに付くればよし、かゝへたき物なり、いかゞあらんさいふ、家兄曰、酒はのみす、手も書き、文字もよめ、作氣もあり、てうごよからん、まかし實體たしかには請合申されぬ、何れ當人に咄して見んぞ、萬屋販りて此事を咄しければ、戯作者になりたく家兄をうらやむ馬琴なれば、大に喜び家兄世話にて別に請人ありて、證文をなし、萬屋が家僕となりしは、己目前知りたる事なり、さて奉公中、花の春風の道行、全二冊春期畫にて、萬屋出版、馬琴自序に京傳門人あり、此双紙大に行はれてより、年々作ありて高名になりぬ

とあり。京山が記する所日附判然せざれど、確に馬琴が神奈川宿へ出稼中に一件あこり、馬琴が失敗して京傳方の食客となりしころは、一件落着後のことなるべし。されど京傳は此の一件にて其の名ます／＼世間へ廣がりしかば、本屋等はいよ／＼彼れを慕ひ、強ひて翌年の新版を求めたれど、京傳は此の度の事件に深く恐怖したりけん、まばらしくは著作もはか／＼しからず、幸ひ馬

琴が家に寄留せれば、いくらか彼れをして代作せしめ、漸く己れが責任を免がれたりきといふ。

『伊波傳毛之記』に曰はく

京傳は深く恐縮して是より謹直懺悔の人となりぬ而して此事世上一般に聞えしより京傳の名聲いよ／＼高く牛打重うしはたる、蟹が軒端に迄も京傳の作本を知らざるなき迄に至りけるかくて立日は早く初冬の頃にもなりしかば手鎖御免の日もきて後例の萬屋龜屋泉市等板元より明春開板の草冊子の蠟本を頼りに求めてやます、こは年來の間柄の義理もあれば絶て推辭む、こあたはず然れども茲に其求めに應ぜんには最も時は冬のはじめ故幾部の著作をもなしさぐるいさまなく且つ彼の疲勞もいまだ調はず現地にあさる心なし茲において馬琴ひそかに代り京傳の越向を取りて専ら著作すまかも數種日子四十日ばかりにして稿しおほりぬ依之諸板元は明春開板することを得たり板元は不識が都て草双紙悉く馬琴の代作なりし此作の著述草双紙は實語教雅釋龍體鉢の木など或は教訓物或は昔はなしを直せしものありける

『伊波傳毛之記』は馬琴が寄食のことには及ばずで京傳を助けしことのみを吹聴し、『蜘蛛の糸巻』は馬琴が失意のみを數へて一言も代作のことには及ばず、二人が相反目して事實の幾分を抹殺せるは惜むべし。然れども彼此對照すれば當時の状況は明なり。馬琴が京傳方に食客せし證は『鼠婚禮塵功記』(馬琴作)の序にも京傳が「曲亭某嚮に予隠れ里に寓居しひとつ皿の油を嘗て友とし善し」といひしにても蔽ふべからず、又『稗史年表』を見るに、馬琴は寛政三年に『用盡二分狂言』一種を出だし、後、其の翌年は上梓せしもの一種もなくして、寛政五年より續々出版ありしを見れば、寛政四年は京傳が代作をなして、自家の名を出ださざりしこと事實なるが如し。かくて此の不吉なる年も暮れて、寛政四年とはなりぬ。京傳は最早再び洒落本に手を焼かざりし

のみならず、草双紙とても其の部數僅に七八部に過ぎず。悉く馬琴が代作といふ言は受取りがたきも其の中いくらか馬琴の代作ありとすれば、京傳の自作は極めて僅少なり。されど此の年記すべきは『梁山一奇談』とて『水滸傳』を草双紙に譚案したるものなり、此の作續に六冊十回に過ぎざれど、後の『水滸傳』の草双紙は、京傳が此の作に倣ひしものなりと『戯作外題鑑』に見えたり。これも實際は新趣向の浮ばざりし窮策に相違なきも、却りて時好に投ぜしは運のよかりしなり。

此夏京傳は思ふところやありけん、柳橋なる万八樓上に於て書畫會を開きけり。

是より先京傳吉原に於て素顔といふ小唄めりやすを述作し、秋江露友に三絃の手をつけさせ申の町にて件のめりやすをひろめたりこは心に考ふる所あつてなり京傳は今尙ほ恒産なきをもて業を立て以て生涯の謀を爲んと欲す是を欲せば苟も財を納めざるべからずと寛政四年五月、五日雨の曇れる空に定めなき世の人心如何はせんを躊躇せしがいで思ひ立ちぬるこそ果さぬも又男にあらずと兩國柳橋なる萬八樓上に於て書畫會を興行せしに來會するもの百七八十人盛なりといひ難きも先づ中位の會なりし故收納は三十金に近し尤も此會上の酒食及び席費は地本問屋鶴屋泉市等にて取賄たり茲に至て先回より貯る金今回の収入金を合せ尙ほ不足は借財し寛政五年の春京橋銀坐一丁目なる東側橋の方の木戸際に借屋し（此家間口僅に九尺なり）紙烟草入全煙管店を開きしに大に繁昌して月毎に入九十金の商したり然れども京傳は店頭的事を顧みず只烟草煙管の形などを工夫して製作させ而して是を賣らするのみ云々（伊波傳毛之記）

當時京傳は卅二歳にして妻をも娶り、加之去年の一件より深く考ふるところありて身後の謀を畫したるはさもあるべきことなり。銀坐二丁目より一丁目に轉居し、いろ／＼の商賣をはじめし

此の年なりきとちぼし。

寛政五年先きに娶りし妻、きく血塊といへる病に罹りて身まかりぬ。『伊波傳毛之記』は當時京傳が病婦に對する仕打を記して左の如くなり

妻きく血塊といへる患に罹り病尤も危篤なり于時京傳はこの苦痛になやむ叫聲を聞くに忍びずして日夜吉原の妓樓に在て曾て家に還らず此頃より先に京傳は江戸町彌八玉屋の抱娼妓玉の井（『作者部類』には白玉とありいづれも同人をいふなるべし）といへるに深く契りこめ雨の夜聲や風の夜も通ひ廓に居つゞけの口舌のはてのそら舞入れむり覺よと吹かくる烟草も薰る床の中家をば願ざりけり斯くつれなき夫を菊は更に恨もせて死去したるこそはかなけれ扱死去せし旨京傳にしらせければ次の日家に還り葬式形の如く執り行ひぬ急ぎては後妻も迎へず兩三年を過しけり

此の記事たるや例の筆癖、容易に實情としては耳を傾くべからざるも、尙京傳が前妻きくに深切ならざりし事は多少其の實あるべし。原來此の菊は前にも見えたる如く、樓主宇右衛門の計らひにて、強ひて京傳が許へ乗込ませたる事情もあり、當時京傳が情の切なるがために拒む能はざりきといふ語のうちには、好んで此の女を娶らんとする意のなかりしことを示したるに似たり。蓋し京傳の如きは弱年の頃より花柳の巷に入り込みて通人粹子をもて任せしもの、且や當時の習慣が習慣なれば此の種の人に對しては、あまり嚴格に夫婦の關係を論じがたし、さすれば此の頃既に玉の井（京傳が後妻）が許へ通ひしことなかりきともいひがたし。但し玉の井が後京傳に嫁せしは『伊波傳毛之記』によれば寛政十二年にして其の時二十四歳なりきとあれば、今寛政五年は其れより七年前にして玉の井は十六歳なり。十六歳にして妓となるは珍らしからざるも、此の以前

より彼れが許へ足を運べりきといふ同書の説に従へば、殆ど十年間の馴染とあもはざるべからず、かゝる長き間の狎妓なればこそ後に其の妻とはなりけれといはれそれまでなれど、多少の疑なき能はず、されば此の事に關しては予は兎角の批評を下さず、唯記して後の考を俟つ。

戯作の潤筆を定めしは山東京傳にはじまること人の知るところなり、こはいつごろのとなるかと問ふに、年月は定かならず。

寛政中京傳馬琴の兩作の草冊子大に行はるゝに及て書肆耕書堂仙鶴堂相謀り始めて兩作の潤筆を定め件の書肆の外他の板本のために作することなからしむ京傳馬琴是を許すこと六七歳爾來ますゝ行はれて他の書林も是を拒むことを得ず廣く著編を與へ刻さすことになりけり、又其潤筆も漸く騰りにき皆これ書林等が所に從ふのみ後に出來つる戯作者は例を推して潤筆を得るものあれどよく京傳馬琴が潤筆に及ぶものあることなし(『伊波傳毛之記』)

こは馬琴が京傳と並び稱せられしをほのめかさんとて故意にかくいへるならん。されど京傳馬琴が寛政中同時に潤筆料を得るとなりきと云ふは受取がたし、其理由は京傳は既に十餘年來文壇の經歷ありて當時第一流の名家なれども、馬琴は未だ京傳の如く名を爲す能はず、殊に『稗史年表』によれば馬琴は其はじめ寛政二年より文化三年まで鶴屋蔦屋以外の書肆にては一部も發行せず(但し草双紙のみをいふ)京傳は寛政四年より文化三年までの間に一度『化物やまと本草』を山口より出版せしのみ、依りて考ふるに寛政中に京、馬二家の手を書肆が縛りたる形跡見えず、こは寧ろ文化の頃にはあらざる歟、されど潤筆を取りはじめしは京傳なること洒落本の條に審な

り、馬琴は恐らくなほ後のことなるべし。

京傳は性來旅行を好まざりしにや、或時父傳左衛門強ひて勸めて京坂は遊ばしめんせしが果さず、然るに寛政八年遂に心を決して家を出でしが京坂には至らずして三島より沼津邊を百有餘日漫遊し、此の間書畫の求めに應じて潤筆二十餘金を得て家に歸れり。然るに此の時供に召連れたる從僕翌日其の金十餘兩を竊み去る京傳自ら追て品川に至るも捕ることを能はずしに後此の賊捕へられ十兩以上なれば罰死に當るべき所を京傳父子憫を垂れて九兩三分と申立て賊が一命を救ひしは是等は仇に報ゆるに思を以てするものなるべし、此の外に日光社參一度、京傳が旅行生涯に都合二度なりきといふ(『伊波傳毛之記』)

寛政五六年よりは作はかゝりしからず、唯年々六七部の著ありしのみ。寛政九年中に上梓せしものは僅に四部、即ち『三才圖會おさな講釋』和莊兵衛後日ばなし』正月故事談』嘘からでた實ばなし』等にしていづれも教訓の意を含み、以前の輕妙洒落は始ど其の姿をかくしぬ、これ一件以來京傳の心に著き變化を來たまゝ證にして是れより戯作の趣向次第に而白からず、最早昔日の京傳にあらず。

寛政十年京傳『忠臣水滸傳』(前後十卷、北尾重政畫)を著す。『作者部類』に曰はく

「文化のはじめの頃(こは唯心覺を記したるに過ぎず)忠臣水滸傳の作あり(前後十卷にて北尾重政の畫)此冊子はかな手本忠臣藏の世界に、水滸傳を撮合して、おかしく作り設けたり、是京傳が國字の稗史を綴る初筆也、且水滸傳を剽竊模擬せし者、是より先に、曲亭が高尾船字文ありき雖も、そは中本也亦振鷺亭が伊呂波水滸傳の如きは、醉語を題して相似する也、かゝれば綾足が本朝水滸傳ありて以來、かゝる新奇の物を見ること世評高かりしかば、多く賣れたり、此頃よりして、讀本



漸く流行して、遂に甚しくなる隨に、京傳の稿本を乞ふて板せんと欲する書賈夥からず云々  
 思ふに綾足が『本朝水滸傳』は初編十卷安永二年の板にしてこれ『水滸傳』醜案の嚆矢なるべし  
 然れども後篇十五卷は稿本ども上梓に至らずして止み、第三編は總目錄のみにして未稿なりと聞  
 けば規模の大なるとは知れたれど完結のものにあらず、殊に古言をもて綴りたるものなれば文學  
 的趣味も京傳の作とは異なるや必せり、又振鷲が『いろは醉語傳』(一冊)は當時相撲取九紋龍が  
 日本橋のほどりにて巾着切を取拉ぎたる風聞によりて作りし作なれば馬琴の作と同じく中本にし  
 て是れ亦同日に論べき書にあらず、されば『水滸傳』の醜案としては京傳が『忠臣水滸傳』普通  
 一般の讀者に讀まるゝ點にても、其の前後完結せる點にても、尠くとも當時に冠たり。原來水滸の  
 大作を忠臣藏の世界へ適應せしこと始めより無理なる趣向なれば木に竹をつぐといふ諺のこぢつ  
 けなきにあらぬと、大勢の思ひ附は頗る面白し。まづ宋の高休を高師直に擬し、名香薫る義貞の  
 兜を地中に埋めて其の靈魂を慰めんとするに當り、鹽谷高貞、高師直司りて穴を掘らしむるに地中  
 に一個の石櫃あり、師直は貪欲の心より中に黄金の埋めあらんなど考へてさぐり見るに、青石の蓋  
 に「遇高而開」の文字あり、高貞の諫むるをも聞かで之れを發掘すれば、何ぞ圖らん石櫃にはあ  
 らで万丈深き地坑なり、忽ち百雷の如き音して其うちより一道の白氣天に登り空に散じて四十餘  
 座の妖星を現出す、これを四十七士世に生るべき兆として水滸傳の百八星に擬し其の頭の名に大  
 星とあるさへこぢつ甲斐あると妙なり。さて兜あらため場のてかほよ御前を出ださず、鶴岡の

社參に師直がみそめてかほよを挑むは水滸の林冲が妻の件に擬したりと作者自身の序にもあり、  
 この條は『忠臣藏』大序の不自然なる醜書にも優して穩當なる趣向といふべし。寺岡平右衛門の  
 足輕といふことが神行早道の法にかなひて二日半に鎌倉に達すとしたるは落語に似てをかく、  
 天川屋の九紋龍俠客にはにつかはし、されど第十回に至りて大星由良が琵琶湖上石山に勢揃へを  
 なして鎌倉に出發する一條は彼の梁山泊に宋高が義を集むる趣意に擬したるものなれど、是等は  
 こぢつけ中の苦しき點ならん。要するに全編妙といはんよりは寧ろをかしく巧に作られたりとい  
 ふべし。

此の年又『四季交加』を著しき、此の書は京傳が書稿に従ひ北尾重政が書きたる江戸の名所、男  
 女の風俗などに假名がきの詞書を加へたる畫本なりといふ。『作者部類』に曰はく

寛政の初の頃、四季の交加と云畫本を著す、(半紙本二冊物也) 畫は北尾重政也(作者の畫稿にしたがふ) 此書は江戸の名  
 所男女の風俗を旨として、是を發するに假名書の文を以てす

されど此の書は纔四五十部賣れしのみにて世に行はれざりきと同書に評あり、但し寛政の初とあ  
 るは恐らく間違ならん、其の理由は『戯作者撰集』に「四季交加」二冊あり、寛政十年年印行京  
 傳の印ならびに詞書ありと記したるに明なり。

寛政十一年京傳の父傳左衛門病死す、傳左衛門は是迄京傳が家事一切を擔當したれば、こゝに於  
 て京傳はじめて家事を取りき、時に三十九歳なり。かくて親類などよりまば／＼媒介して妻を娶

らしめんとせしかど、京傳は聞かざりけり、蓋し京傳の聞かざるは別に仔細あるにあらず、深きなじみの玉の井あればなり。老母は内々兩人の關係を知れりしかば親戚にはかりて玉の井を受出し京傳が後妻となしぬ、これ寛政十二年二月のとなりと『伊波傳毛之記』に見えたり。同書に此の婦を娶らざる以前の奇話を掲げたり、以て兩人の關係を知るに足る。

此里はるり浮世ぞ思ふも君が待ゆゑか内を外なる京傳はかの玉の井が止宿して家にあるとまれくなるより父も心ないため京傳に意見すれども元より肯すべきにもあらず朋友知己の人々も京傳に用事ありて逢んざらば吉原の彌八玉屋に行くこそよけれと迄いひはやしける如斯妓樓を宿とし嫖客の名を得るも雖も自己は彼の京傳流にて儉約を旨とし晝夜娼代を除く外金壹分より上を費さず玉の井もまた打つけに明ていはれどわけの有る胸の思は此人を夫と頼まん心故費を省き衣裳をいさひ手づから草履鼻緒まではかする心配り娼妓にはまためづらしき婦人なり然れども京傳がこゝに數年玉の井の爲に消費せし金は六百兩ばかりに及びしなりされど此金は京傳が著作料の外書畫の潤筆或は不時の收入金より仕掛恒産の利益よりは毫も浮費せし事なし京傳は久しき嫖客の名たる先生なれども其中尤も似げなきは性磊落にして美衣を着ざるは既に述べたれど又髪を結び髻を剃るを好まず浴するとは夏秋の間は一ヶ月に兩三度位冬春に及びては皆無さふも可なりわけて奇談なるは或る日居纏二十日斗に及びし時歸宅せん玉の井にいふ玉の井みれば亂髪長髯殆ど鬚にかきし唐人の如く顔色黒き事かの朝日奈島物語にあるくるん坊の如し是日な累れ晝夜屏風を立廻し籠り居し故まはいへ此儘にて晝日中、なご往來の歩行るべきせて髪など結せ髻をもそりたらんには少しは見よからんさ勘るにいなみて應ぜず、しからば賤婦が剃てまいらせむといふに、よしと答ふ尚ほ起ざりければ玉の井手づから髮盤に湯を汲みもてきて臥したる鬚の髻を剃り又月額剃るに慈母の愛兒を扱ふが如しやがて剃果しに京傳もやむこを得ず身を起して髪を結せしとぞ

此の玉の井は尙年季一年あまりありけるが、主人彌八も京傳が玉の井に入れ揚げし金の莫大なる

を知るのみならず、玉の井が京傳を慕ふ心の切なるをも酌み、且は京傳は高名なる人にて己れが方に勤めし娼妓が婚姻したりといはんは樓の面目ともなりぬべしと思ひ、何や彼やにて京傳が求めに應じ、身代金貳拾兩にて京傳が許へ遣すに至りぬ。此の時玉の井は二十四歳、貌容美にして世才も大かたならず、其の名を百合と改めて呼びき、而して其後に京傳はまた遊廓に入らざりしといふ。寛政十三年享和と改元あり、享和は永く續かず、三年にしてまた文化と改元せられき。此間草双紙は年々二三部づゝの著述ありしのみ。享和二年珍しくも五六種の著あり、其中『通氣智之錢光記』『吞込多靈寶縁起』『賢愚淺淺湯新話』『枯樹花大悲利益』以上四部を春夏秋冬に別ち、四季になぞらへて出版しき、これ合巻のはじめなりいふ『稗史年表』に曰はく

京傳の作錢光記より大悲利益まで四部を四季に名けて出版す最初に上紙摺三冊合巻にして表紙も上の黄表紙に犬を黒摺にしたりこれ合巻の權輿とも云べき歟此時より外題を横に長き形とす年々同し

最早此の年間の記すべき事殆ど絶えたり、唯此年間に附記すべき一事は年月は詳ならずれど、松平定信職を去りて閑地に在りしところか、定信或る時『職人盡書詞』といふ古き書卷に擬らへて、新に當世の『職人盡繪詞』三卷を作り、繪を鍔形蕙齋(北尾政美)に畫しめ、其詞書を當時の名家三人に書かしめき、即ち此の詞書の上巻は四方赤良、中巻は手柄岡持下巻は山東京傳承りて各々得意の妙文句を附せりといふ。此の時の様子を京傳後に『聞之任』の著者に語りきとて、同書に

又曰(京傳なり)白川侯退役の後吉原深川などの遊所のさまを北尾政美に寫さしめその詞を京傳に命ぜられしかば揮る事な

くそこの事穿ちて書りさいへり、この巻物予が友人堀田侯にて拜見せしにいさよも書出来たりさいへり

京傳が詞書したる第三卷は遊里の状況を畫けるものと見ゆ。以上、京傳が一身上の俗事過半を充たし、記事頗る複雑したれど、彼れが文學的生涯は初期に比すれば寧ろ寂寞の觀あり。案ずるに草双紙の性質寛政三年までは初期のに屬し以後は初期の面白き分子失せて讀者を引く力は纔に頓智のみ、趣向も一昧に淺薄となりて教訓的となりたり、是れ京傳が一件以來放蕩變じて謹慎の人となりし結果にして、人物の上よりいへば進歩ならめど、戯作者としては寧ろ退歩なり。翻りて他方を見れば馬琴も既に地歩を文壇に占めたり、又寛政六年には式亭三馬、同七年には十返舎一九などいへ、戯文壇漸く賑かならんとせり、されば此の謹慎なる寧ろ臆病なる老将は最早戲墨の戰場を若手の大將に譲らざるを得ず、是れ此の期に於ける京傳が戯作者の地位なり。『作者部類』に曰はく

（前略）是よりして京傳はいたくおそれて（手鎖一件をいふ）五六年の間は奥双紙の趣向も勸懲を旨とし淺はかなる事を綴りしかば、世の看客はその所以を得しらず、京傳は冊子の趣向場たりけん、近頃の新作はおかしからずと云ふもの多かり、云々  
こは強ちに酷評といふべからず。『稗史年表』も亦寛政九年の條に

京傳の作今年四部いづれも教訓を專にして戯作の軌にあらず是より年々勸懲をこころす  
とあり。兎に角彼れが作者たる價值衰へたり、再び文壇の覇權を握らんと欲せば更に一機軸を出ださざるべからず、彼れ果して如何なる機軸をいだししか。

第三章 後期

京傳が後期の生涯は中期に劣らず複雑なり、殊に此の間には京傳と馬琴との交際、及び其の衝突の理由を明すに數言を費さざるを得ず。此の故に本章をば更に二分し、其の一は主に著述の來歴を主とし、其の二は京馬の關係を中心として俗事を專とすべし。

(一) 著作

京傳が最後の舞臺は讀本よみほんなりき。前章にも述べたる如く、京傳が讀本の初筆は『忠臣水滸傳』なれども、彼れは雛案なり、創作にては敵討ものをはじめとするか、即ち『復仇奇談安積沼』（五冊北尾重政畫）は（今發刊の年號を詳にせざれど）恐らく創作讀本の初筆なるべし。蓋し畫工重政をして讀本に畫かしめたるは、これより以前には『忠臣水滸傳』一部あるのみにて、文化元年以後の作には重政が畫けるものなきによりて考ふれば、『忠臣水滸傳』の時代に屬し、寧ろ中期に加ふべき作なるべし。思ふに此の書は寛政の末、享和の間の作にして、恐らく文化の作にはあらざるべし。『作者部類』は『忠臣水滸傳』の好評を博せし由をいへる次に曰はく

此頃よりして、讀本漸く流行して、遂に甚しくなるまゝに、京傳の稿本を乞ふて板せんと欲する書賣肆からず、是によりて、又安積沼五卷をつくる、（畫は重政）俳優小幡小平治が冤鬼の怪談を旨として作れり、いよく時好にかなひし、これら事數百部に及びしと云ふ皆つるや喜右衛門が板也

文化元年『優曇 物語』（七冊唐畫師喜多村武清畫）を著しき、此の物語の筋は

鍛冶橋内、其の妻小雪といふ夫婦のものあり、兩人とも實直の性質なれば、一人の親まかも盲目の老母に仕へて至りて孝行なり。小雪はもと後妻にて家には先妻が生みし一人の娘ありて、四歳になりぬ、小雪は實の子同様に慈み育てけるが、或日大鷲青空より舞ひ下りて小兒を掴み行方しれずなりけり。かくて幾年月を経しが、こゝに又西國に望月兵衛といふ武士あり其の子を同名皎二郎と呼べり、此の若者心ばへやさしく容貌も亦うるはしく、文武修業の爲に京都へ登りける路すがら、弓兒といふ旅の美人に出會ひて互に戀着の情禁する能はずされど相見しのみにて右左に別れ、其の後はいつくの誰なりしかといふことも知らずうち過ぎける。然るに皎二郎が父母は彼れが不在中には犬太郎と海といふ悪人の爲に殺されき。話ししかばつて彼の弓兒は、美濃國渥美左衛門といふ郷士の養女にして皎二郎と途中にて出會せしはそが上方見物の折なりき。この弓兒こそ先きに驚にさらはれし鍛冶橋内が女にて、渥美左衛門に拾ひ上げられ養女となり成長して弓兒といへりけり。此の渥美左衛門も亦賊の手に横死を遂げしが、これも玄海の所業にて、後皎二郎と弓兒と再會し持合の敵を討ち、先きに別れし橋内夫婦にも出會し、弓兒と皎二郎とは無論夫婦になりてめでたく局を結べり。此の作はあまり評判よからざりしにや『作者部類』に「趣向の拙きにあらざれども、さし畫の唐様なるをも俗客婦幼を樂まするに足らず、此故當時評判不の字なりき」と見えたり、全跡よりいへば弓兒と皎二郎との境遇同一轍にして淺薄なり、然れども當時の讀者は未だ趣向の功拙を判別する明なければ、唯畫の唐様にて遊きに失したる爲め、喝采を博せざりしならん。

『浮牡丹』（四冊歌川豊廣畫）は、板行の年月を詳にせざれど、按ずるに寛政の未までは京傳が作の挿畫、多く北尾重政筆を執り、文化二年以後の讀本はあはかた歌川豊國の筆なれば豊廣が畫きしは、此の中間四五年なるべし。『作者部類』に曰ふ

文化三年の頃、四ッ谷鹽町なる貧本屋住吉屋政五郎といふ者、曲亭に乞ふて其稿本盆石皿山の記（中本）を刊行して、其明年括頭巾縮緬紙衣（半紙本）を印行せしに、時好にかなひて二書俱に九百部賣る事を得たり、其折政五郎思ふやう、曲亭の

しの作を印行してすら、利あることかくの如し、今亦山東ぬしに乞ふて、かの人のよみ本を印行するを得ば、市利三倍疑ひなしと、一日山東が許に赴きて來意を告て云々乞ひしかば、京傳異議なく是を諾して、此稿を起さん云けり、是より後、政五郎は折々京傳が許に赴きて、其稿本を催促し、物を贈る事もしばしば也、さかくする程に、此年は暮て、次の年も稿本未だならず、京傳は素より遅吟遲筆なるに、當時は吉原なる彌八玉屋の藝妓白玉（玉の井のこゝならん）がり、ひたさ通ふ毎に、逗留せし折なれば、次の年に至りても、政五郎の責を塞くによしなれば、さすがに胸苦しくやありけん、趣向は未だ首尾せざれども、先出像より稿本を始めて、一二張づ、政五郎に渡し出像は豊廣に畫せたまへ、此板下の寫本を畫き終る頃には稿本をわたすべしと云、政五郎欣びてかたの如くにしたり、かくて豊廣が畫寫本出來ても、作者の稿本未だならず（中略）月には幾回か京傳が許に赴きて稿本の成をうかゞふの外他事もなく、思はず三歳を経て四年といふ春の頃稍發行することを得たる其書は浮牡丹是なり、本の形なごも作者の好みに任せて、半紙本ながら唐本の如く幅を狭くしたれば、紙に裁落の費多かり、表紙も唐本の帙のごとくしたり、出像も細密なりければ、本錢を容れたる勢からずなれども此書を印行せば三歳の費用を取返さん事易かるべしと思ひしかば、先九百部製本して發兌せしに板元の命謹願廢すべき折にやありけん、價例より貴しめて貧本屋等致て買す、纔五十部ばかり賣て其餘八百五十部は一部も出す成しかば

これが爲め政五郎は遂に分散しき云々。眞偽は例の覺束なれど玉の井が京傳に嫁せしは寛政十二年にて其の後遊里へ足踏みせざりしこと前に述べたる如くなれば、玉の井が通ひしが爲に著述延引しきとせば、そはいづれ寛政中のことならざるを得じ、ちもふに此の作は『安積沼』の次に著述せしものにて享和中の作ならんか。所詮『安積沼』と此の作とは文化中の作にあらざるべけれど、まばらく讀本のはじめに列記す。

『近世奇跡考』（五卷、隨筆）は文化元年の著なり。但し『作者部類』に

享和年間、近世奇跡考(五卷)印行の頃雅俗俱に賞鑒して、多く賣るべき勢なりしに、英一蝶の土手ぶしなどいふ小歌の事を載せたるを、英一蝶怒りまがめて、むづかしく云しかば京傳驚きて異議もなきよしを、板元大和田安兵衛に告知せて、其板を摧けり、京傳は寛政の初め、洒落本の咎ありしより、をさく／＼謹慎を旨としたれば、當時冊子の稿本を町年寄へ呈聞して、免許を乞ひし折なれば、故ありて奇跡考を板元自ら絶板すといふよしを、大和田安兵衛書林行事と俱に役所へ訴へたりと云ふ惜むべし

とあるを見れば此の書の世に出でしは尙後年のことなるべし。

此の年草双紙四部の著あり『作者胎内十月圖』『五人切西瓜のたち賣』『江戸砂子娘かたき打』七いろ合點まめ』此の頃世上に敵討もの大に流行しければ、京傳も時流につきて敵討の草双紙を作りしなり。『稗史年表』に曰はく

かたき打の本いよく行はれ京傳馬琴此年より始て敵打の作あり今年の新刻かたき打三分の二にして其餘わづかに戯作あり

又『蜘蛛の糸巻』にも

享和のはじめ南仙笑楚滿人云ふ敵討三組盃云ふ前後六冊物を出版して大に流行し翌年京傳翁敵討千鳥の玉川前後六冊大に行はる、是より戯作變つて實録めかす物となりぬ。

とあり。但し『稗史年表』によれば楚滿人が『かたき打三組盃』は文化二年の作とありて『敵討千鳥の玉川』は『三組盃』に倣ひたるかも知るべからざれど、實録牒の讀本は既に其の以前にありしこと上に述べたるが如し。但し京傳の讀本は敵討にはじまり、而して敵討流行の俑を作りし

は楚滿人なること疑ふべからざる事實なり。

『作者胎内十月圖』は作者を産婦にたとへ、戯作を胎見にたとへ、創作の苦しみを出産の苦みに比したる、面白し、其の發端に曰ふ

草双紙といふものは子供だましのたはひもなきものなれどもこれにも當り外れありて當れば板元の仕合、はたけば作者はへちまのやうに安くされるよにつらひものは草双紙の作者と、今年も亦本やから彼の作を頼まれたる所、瀆の眞砂さはいひながら年々のこまなれば頼向につきはてせん方なきにより

因果地藏に願をかけ申し子を祈りければ、作者の胎内に戯作の種子を宿し、月重なるに隨ひて戯作の形次第に備はり、満十月にして漸く産み落せば即ち草双紙上中下の三人兄弟なり。之を全篇の大意とす。文化二年には『櫻姫全傳曙草紙』(五冊、一陽齋豊國畫)の著あり。其の梗概は

丹波國桑田部に由緒ある武士あり、名を鷲尾十郎左衛門義治といふ義治妻野分の方に子なきを憂ひ、京都より玉琴といふ美婦を呼びて妾となし、家來某の宅に養はしめ寵愛大方ならず。既にして妾玉琴、義治が種を宿せり。野分の方に附従ふ侍女等此の由を聞きて快からず思ひ、野分の方に告げて暗に玉琴を除かしめんと煽動す、野分の方表に賢女を粧ひ侍女等が心得違ひを戒めける。されど内心には嫉妬の念燃るが如く、竊に之れを亡きものにせん案下ける家中に篠村兵藤太といふ無頼の士あり、野分の方兵藤太を竊に招き街はすに利をもつてし、妾玉琴を某が宅より奪ひ來たらしめ、おのが面前にて兵藤太に命とてなぶり殺す。さて兵藤太は玉琴が死骸をある谷川に沈めしが、此の死體より男子分娩して通行の修行者に拾はれき。野分の方は其の後間もなく粧身して女子一人を擧ぐこれ櫻姫なり。櫻姫二八さもなりし頃は容顔うるはしきのみならず、氣質も母親には似ず、心ばへ優にして管絃和歌の道にも長下たる絶世の美人なりければ、同國の住人信田平太夫勝岡之を見て心をなやましいかにもして我が手に入れんと媒介を以て婚姻を申入るれど、平太夫はまた醜男なるが上に心も奸曲の徒な

れば櫻姫はいふも更なり義治も承諾すべき要なし。勝岡は深く鷺尾一家を怨み機會もあらば仇を報せんぞを待ちける、さるほどに櫻姫は性來櫻を愛しけるにより、父母の許を受け郎等侍女等にかしづかれて都の花見に旅立ち、ある日清水に詣でけるか其頃當山に住する年若き僧に清玄といふ者あり。聰明にして學に志厚くいさ殊勝に行ひすまし、不圖此の日櫻姫を見て戀々の情に堪へず。こゝに又同ト花見のうちに狼藉者ありて櫻姫を奪ひ逃げ去らんぞす、郎等某の働きによりて漸く姫を取りかへしたれども、追ひくる大勢の敵を防ぎつゝ、姫をば山吹といふ侍女に托しておさしやりぬ、櫻姫遁るゝと數町にして遂に路を失し、宇治の川邊にいでしが櫻姫はおもひかけなき今日の危難にいたくおどろき病を發しこゝに至りて一步も進むこゝ能はず、山吹はいかゞせん途方にくれたる折しも、一艘の小船を漕ぎて其處を通りかゝれる風流男あり、其の名を三水之助伴宗雄とぞ呼びける。宗雄は姫が急病の様子を見て早速船を岸に近づけ、船に移し印籠の薬など姫にのませて介抱しければやがて病氣も治りけるが、こゝに櫻姫と宗雄が赤繩はまつはりは下めき。さて清玄は櫻姫を一眼見てより恍惚として魂天外に飛び、又昔日の道心あらず、いくたびか懺悔して正覺に歸らんことを祈るこゝも護摩壇上の不動明王姫のうつくしき姿に變つて、煩惱は夏の蠅の如く逐へども去らず。櫻姫はまた伴宗雄に別れてより只管に其の佛をたひ、遂に病の床に臥しければ父母の驚き大方ならず、醫藥ト薬手を盡すこゝへども更に効驗なし、されども姫の病少しく怠りければ双親喜びて宮脇村の下館へ保養に遣はしけるが、こゝに又伴宗雄は惡妾の讒言によりて父の家を逐はれ當國にさすらひ四五日前より此の下館の近隣に寓居し、はからずも再び姫を見て二人の喜び譬へんにもなし。姫は忽ち病氣全快し、二人のなかに希有の契さへ結ばれて春の日の長さをも忘れ、樂しき月日を送ると三月ばかり、然るに好事冤多く姫が身の上に一大事こそ起りけれ。そはかゝれて鷺尾家に怨を抱けるものあり、先きに櫻姫を得んとして望を遂げざりし信田平太夫と謀合せて、義治一家を攻め滅しければ、姫は虎口を逃れて一先づ片田舎に落ちのび、こゝ方ゆく末を案すして浮世の果敢なきをかこち再び病に臥して、遂にかへらぬ人の數に入り鳥部野の茶毘所におくられるが清玄はその後清水を去りて此處の御坊に墮落し今姫の死體を見て且つ驚き且つ喜び介抱に手を盡くし、姫は不思議にも蘇生して清玄が妄執に苦しめられ既に

かうよと見えしころに先きの修驗者、通りかゝりて姫の危難を救ひ其の場に清玄を殺す。此の修驗者ほも鷺尾家の臣なりしが故ありて佛門に入り諸國を遍歴するうち曾て玉琴が胎兒を拾ひしものなり。然るに清玄は此の修驗者に救はれたる玉琴が子にして櫻姫とは異母兄弟たること後に知られたり。これより忠義の武士ども伴宗雄と力を協せ義治の敵を討ち亡ぼし伴宗雄を櫻姫に配して鷺尾家再び興りけれども玉琴が怨靈櫻姫に執着して三たび病に臥し離魂病とて一身にして兩軀を現する奇病に襲はれて遂に十八歳を一期として得脱成佛し、宗雄も亦發心して姫が菩提を弔ひぬ正妻野分の方は行惡かきなり遂に雷死して因果應報の理こゝに明なり

是れまでの作にも勸懲の意を寫し、佛教的因果を示さるにあらねど『優曇華物語』の如きは、専ら復讐を主としたれば其の筋隨つて單純なり。然るに此の編は野分の方が嫉妬深きより玉琴を殺し、さて玉琴の怨魂が鷺尾家にとるといふ纏綿たる因果の理を骨子として雑多の事件を結びつけたれば、全局自ら複雑にして首尾貫徹の趣致あり。もとより人物の性格は例の漠としたる者なり、櫻姫は主人公なれど著者が漠然たる理想的美人の化現たるに過ぎず、而してそが正反對なる野分の方は殘忍酷薄の化物に似たり、されど人物としての貫目は重く、寧ろ主人公は野分の方かと思はるゝ位なり。案ずるに『櫻姫全傳』は京傳が讀本の才能を代表せりともいふべく、筋のよく通りたる點よりいへば、前に相匹すべき作なく、後にも(精巧熟練は或は勝りたるものあらん、然れども)人物、脚色、主義、事件等の組織配合宜しきを得たる點よりいへば此の編の如きは稀なり。兎に角に此時はじめて彼れが讀本は其の成熟に達したりといふを得べし。

此の書は讀みて面白きのみか、はじめて出像を豊國に畫かせたれば、豊國の妙筆京傳が意匠と相

照して一層の光彩を添へしかば世評頗る高く前年の『優曇華物語』の失敗を回復して餘ありき。『作者部類』に「櫻姫全傳（五卷）を綴るに及びて、出像を歌川豊國に畫かしむ、此書いたく時好に稱ひて雅俗ともに妙とせり」とある、證とすべし。此大當り一ツは豊國の畫によりしかば爾來讀本は豊國にのみ畫かせきとぞ。同年草双紙の作四部あれども特に記すべきほどの價はなし。文化三年には『梅花氷裂』（三冊豊國畫）いでき。

此の書は唐琴浦右衛門といふ武士、妻、棧との間に子なかりしかば、夫婦相談にて蓮の花といふ姿を入れしに、始めの程は中睡まどかりしが、夫の旅行中妻の棧、ある浪人と密通して、妾蓮の花を殺し手に手をとりて出奔す、これ話の發端なり。扱又浦右衛門は其の浪人の爲に討果され、いろ／＼の因縁ありて梅の與四兵衛其の妻小梅との話に移り、こゝに一場の愁歎あり。結局悪人亡び、善人榮ゆといふ筋にて『櫻姫全傳』と大同小異なれば畧しぬ。此の作は別に續編四冊あり都合七冊、増加の四冊は南仙笑楚滿人（爲永春水のこまなり）の作文政九年の板なり。

此の作評判よからざりき。『作者部類』にいふ

此書又評判妙ならず、思ふに冊子に載する所の小斷長吉は孝也、さるにより井を汲て七十金を得たりしは天感の致す所成べし、然るに、長吉は其金故に由兵衛の害に遭て、命を殞すに至るが如き、勤懲正しからずといふべし

と不評の理由を専ら例の主義にこちつけたるもをかし。

同年『昔語稻妻表紙』（五冊豊國畫）の著あり。此の書は前二作とは聊か趣を異にせり。即ち不破、名古屋を善惡主人としたる舊めかしき芝居仕立の趣向なり。されど時好に叶ひきとおぼしく『戯作者小傳』に

文化三丙寅年發行せし讀本『昔語稻妻表紙』（五冊）は書買文龜堂伊賀屋が藏板なり又同年印行の『普知鳥安方忠義傳』（六冊）は書林仙鶴堂鶴屋が藏板にして二書とも世に行はれたる事其頃知らざるものなり然るにその翌年文化五戊辰の春浪花の芝居兩座において『稻妻表紙』の旨趣を狂言に仕組ませしが大に流行たるよし也（下略）

と云へり。後年馬琴等の小説もまた間々演劇とせられしが其の嚆矢は『稻妻表紙』なりと云へり。爰に一奇話あり、『作者部類』にいふ

『不破名護屋稻妻表紙』を著はす、其冊子佳ならず、板元伊賀屋勘右衛門は前の勘右衛門が養嗣也、當年父子不熟の口舌あり、とくする程に、後の勘右衛門が妻身故りぬ、京傳齋におもへらく、稻妻表紙の書名は、昔巖市川才牛が初て不破伴左衛門に打扮せし折、雲に稻妻の縫箔したる、外套を被たりければ、今に至りて伴左衛門に扮する俳優は、必さる外套を被ぬる事世の人の知る所なるに、百年ばかり已前の物の本に、稻妻の形ある標紙多ければ、これかれをさりいで、云々命ぜしが、今さら思へば不祥に似たり、そをいかにぞこならば、不破名護屋は不和な子やにかよひ、稻妻表紙は否妻病死にかよへり、物の不都合にて思ひかけぬ事を、世俗いな事といへば、否妻病死に至るまで、悉皆板元の上に當れり、心づきなき悔しきとぞ、この頃所親にさゝやきけり

と。『作者部類』往々京傳が作に難をつける僻あれど、ことを事實とせば、作者の神経質もまた甚しといふべし。

此の年は讀本二部、外に草双紙三部の著述あり、草双紙は即ち『敵討兩輪車』『敵討お大河原』『敵討孫太郎蟲』等なり、爰に注目すべきは三部とも敵討ものなる事なり、蓋しこは作者京傳が著書の變化にはあらずして時の好尚の然らしむる所なり。『稗史年表』當年の條に曰ふ

今年の開板する所すべて敵打となりたり、作者の名を記すに戯作の戯の字を省きて只作とのみ書す抑も此戯作の戯の字は實  
曆の丈阿に始り安永の春町喜三二に傳はり四十年用ひ來りし戯の字此時に至りて絶えたり是も時運といふべき歟  
と、滑稽洒落を生命とせし赤本の系統は全く此の時に及びて亡びきといふも不可なし。

文化四年には『善知鳥安方忠義傳』(六冊豊國書)いでき。

此の書は平親王將門が後日譚にして其の子良門、瀧夜又姫の兩人、父將門が滅亡せしを遺憾におもひ遂に兵を擧げて父が遺  
志をつぎ再び相馬の内裏を回復せんとするにあり。編中の主なる人物善知鳥安方は善良なる士なれば兄弟の隱謀を諫めて良  
門の手に命を殞す、然れども彼れが忠義の魂は凝つて去らず、其の後も良門を諫むるとまば／＼良門怒りて刀を抜いて之れ  
を斬れば忽ち化して鳥となり空中に飛び去るをもて結局せり。

此の書は荒唐無稽のものがたりにして全編悉く妖怪談なり、されど奇を好む時尙には叶ひて流行  
しきとぞ。

又うさふ安方忠義傳をつとりて、印行せしに、いよ／＼其新奇に愛て是を見るものは只三都會のみならず田舎翁も亦此佳作  
あることを知れり、京傳が作のよみ本、多かる中に、此二種『櫻姫全傳』も尤さかんなりと云々(『作者部類』)

後天保年間市村座にて此の書を劇に演ぜし由、『戯作者撰集』に曰はく

近年江戸堺町中村座にても右稻妻表紙の趣を狂言に仕組たり、又善知鳥安方忠義傳は近年天保七丙申年夏狂言に市村座にて  
せり名題は『世に善知鳥相馬舊殿』といへり二番目は世話狂言にてお房綱五郎等を入れ六月七月初日にて興行す作者は中村  
重助寶田壽助三升四郎等なり此狂言見ざらんは残念とて七月廿九日見物するに役割の瀧夜又姫後如月尼二役善知鳥安方三や  
く十太丸四やく藤浪五やく九郎兵衛六やく藤内七やく権兵衛八やく純友〔右市川九藏勤む良門二役頼信三役二の瀬源吾四役  
綱五郎五やく大宅太郎右市村羽左衛門勤む豊沼六郎二役かげち三役佐五郎右市川團三郎勤む小蝶の前二やく錦木三やくお

房四やく小原右坂東玉三郎なり荒猪丸二役老熊三やく佐七右大谷藤右衛門也大當りにはあられども此狂言評判有しなり斯の  
如く彼物語の趣向を今に至るまで狂言に仕組看官の目を悦ばする事翁が譽れといふべし  
けに京傳が死後の名譽なるべし。されば其の後編を増作するものありて十八冊の大部となれり、  
今増作者の名を忘れたり、南仙笑の春水にや松亭金水にやありけん。

文化五年『本朝醉菩提』(前後十冊豊國書)を著す、此の書は『稻妻表紙』の後編なり。一休の事  
を中心として其が俗傳の逸事を綴合せるものなり。そも／＼一休の俗傳は支那小説の『醉菩提』  
を雛案したるものなれば、作者はそをほめかしたるものにして、鈴木正三が『二人比丘尼』の  
大意を取りたるものなれど、首尾貫徹せずして寄木細工の如し。されど流石に老練の筆の跡賞翫  
すべき節無きにもあらず。

此の書につきて京傳と豊國との間に『作者部類』に面白き一話あり、京傳の爲人を知る足にもな  
るべければ左に掲げん。

本朝醉菩提六卷、後篇四卷、共に十卷、亦是伊賀屋板にて、出像は豊國畫きたり、當時是等の畫工、例として未だ畫ざる已  
前に、其潤筆を受ながら、技に誇りて畫くに通かり、醉菩提を板するに及て、伊賀助しば／＼乞へども、豊國事に托して敢  
て畫かず板元に説薦めて、羽二重の袷半折二領を製らしめ、これを作者と畫工に贈らしむ(其折に京傳と豊國の花紙を付た  
りかゝる事は、歌舞妓の當場作者に、此例あればいへり、只此事のみならず、或は酒肉珍菓を贈り、京傳と豊國を伴ひ  
て、雜劇を觀せ、或は酒樓に登としば／＼なりき、かくても豊國はなほ多く畫かず、催促頻りなるに及びて、又板元にいふ  
やう、已かく家に在ては、雜客もたえず、且錦繪の板元に賣られて、よみ本のさし畫は筆を把(把の下脱文あるべし)邊裏



屋二軒を借りて、此處に豊國を請待し、日毎に酒飯を饒りて畫かせるに折から三月の頃なりければ、豊國が又いふやう、時に今咲匂ふ花の三月なるに、斯垂籠てのみ有りては、氣鬱して病ひを生せんぞ、いかで墨田川邊に徜徉して、保養せまくほしさいひしを、伊賀助聞て思ふやう、もし一日外さば、再び此處に歸るべからず、要こそあれと思案して、さりげもなく答ていふ様、花を見まく欲したまは、遠く墨田川に赴くに及ばず、吾取よせて參らせんぞとて、大なる枝に花みちたる櫻を許多買とりて、そを花瓶にも樽なごへも活けて、豊國の几邊に置ならへ、其活花衰ふれば、取替く見せしかば、豊國竟にせん方無くて、日毎に、件の出像を畫くほごに、伊賀屋はさら也、京傳折々此假宅に來訪して、うちかたらひつゝ慰めけり、此等の事は京傳の本意にあられど、さきに優曇華物語の出像を、唐畫師に誂へて後悔せしに、櫻姫全傳の作よりして豊國に畫かして、特に時好にかなひしかば、是より豊國と親しく交りて、功を讓ると大かたならず、夫に今淨瑠璃をもて譬ふるに、畫工は大夫の如く作者は三味線ひきに似たり、合卷の臭双紙はさら也、讀本と云も畫工の筆精妙ならざれば賣がたしといふにより、豊國も亦自ら許して其功我に在りとおもひしかば、是より合卷の奥半張に畫工の名を上にして、豊國畫京傳作と署したり既にかくの如く、畫工に權をつけしかば、豊國の恣なるをにくしくは思ひながら竟に諫むる事あたはず、其好に従ひつゝ、二させばかり稍印行することを得たれども、思ふにも似ず冊子は世評、妙ならず、損するほごにあられども、初に畫工作者をもてなしたる諸雜費のいも多かりければ、竟に板元の算帳あはず、加納此板元に不如意さへ打續きしかば、活業既におさるへて他町へ轉居したりけり云々

思ふにこの話は文化五年以前のことか、然るに同七年出版の式亭三馬が『阿古義物語』の挿畫のことにつき、三馬と豊國との間にも一條の悶着ありき、『戯作者撰集』に曰ふ。

大人(三馬を指す)が撰たる阿古義物語といへる五卷あり稿成て(文化六年頃と知るべし)故一陽齋豊國が許に稿本を渡せしかども一陽齋いかなる故ありて、綴繪中にして夏後を經るに畫れずやうやく閑滯に及しかば(其故、半より末國貞が筆な

り)式亭憤を發しひこる刎頭の交はり厚きをかく迄に已を蔑如にするその心根こそ悪けれきて自ら一陽齋にいたりまのあたりにこのこまをもて罵りその怠慢を責しかば、豊國めし言を盡して詫たれども、式亭が怒解けずこれより何まなくたがひに隔心いできて此方にては吾作意する冊子には向後彼をして畫しめトさいへば彼方にては彼が作たる冊子には吾ふつに畫くまトなき罵りあひしが

後には和解するものありて、又舊の如く畫くこととなりき云々。蓋し三馬は比較的に我の強き男なれども、京傳は弱き人なり、一は己れを立てんとするが故に他人の我儘を許さず、一は強ひて自己を立てん意なし、否、意なきにあらざるも立通す勇氣なし、とはいへ堪忍強きは京傳の美德なり、殊に晩年には他人と争はず、成るべく堪忍して一生を送らんとせりき、そは英一蝶が故障によりて『奇跡考』の板木を毀ちしにも明なり。

此の年草双紙『万福長者榮花譚』『紋染五郎剛勢談』等の著あり。『紋染五郎剛勢談』に就ては珍談あり。そは此の作に辻君の姿を種々をかしく畫きたるを彼等誹議せられたりと怒り、作者京傳を路に擁して苦しめきといふ一話なり。此の事件より京傳が名更に高くなれりといへどいかにや。此の事を記せる『戯作者撰集』の著者自らも眞偽を疑ひて曰はく

又一説に、この辻君を多く畫きたる冊子は寛政の初年の著述なりといふ然れ共予は其頃の冊子に辻君を多く畫きたるものを見ず後の説に従ふときは(文化五年の作とするときは)草紙の表題あきらかならず寛政の初といへば強勢談より遙に前の事にして年に甚疑あり何れを何れと定がたく又話の虚實をも辨へがたし

ど。案ずるに同著者は京傳と時を同じくまれば、昔は知らざるも文化の頃は知己の間柄なり、若

しかる事件ありきとすれば、目前其を聞かざる譯なきに、かく唯漠然と風聞のみを記したるをみれば、此の事恐らく虚談ならん歟。寛政十年『雙蝶記』(六冊豊國畫)の著あり、是れ京傳が讀本の絶筆なりと云ふ、

腹稿大抵なるに及で、馬喰町なる書買西村屋與八報るに其腹稿を語す、こ首尾極めて精細也、京傳は能辯には非ざれども、其腹稿を人に説示すに、其趣を盡せしかば、俗子は其稿本を讀せて聞よりすぢよくわかるるに感賞せざるはなし(京傳嘗て云様、其讀本の腹稿なる時は、先づ妻に説示すなり、しかせざれば、吾忘れたる折、是を求る所なし、近頃は記憶うすくなりて、折々忘るゝ事多かり、其折妻に問へば預け置たる物を出すが如く、勞せずして便りいさよしさいへり、されば腹稿成毎にそを印行せん云書買に、其趣向は云々精細にさき示せしかば、板元早く欣び受てたのもしく思はざるはなかりき)其折、京傳亦言やう近頃曲亭などの讀本、雅俗を混交しぬるを以て吟誦をなさざる者也、己れ此度の雙蝶記は吾妻與五郎の事を旨としたる世界にて、世話狂言と云者に似たれば、おまゝ劇の趣きに倣ふて、詞は今の俚語をもてすべし、しか綴る時は、婦女の俗耳に入らざる事なし、其樂一しほに倍すべし、此書一度世に行はれれば後の讀本の面目を改むべけれと云々、やき示したりければ西村屋與八感佩して、いよく頼母しく思ひしかば、雙蝶記を彫刻しぬ云々

かゝる考ありて此の書を著し、や否は知るべからざるも、二つ蝶々といふ傀儡の戯曲にもとづきてつくればなり」と自らもいへれば、これはた芝居仕立の趣向なり、次にもいふべけれど此の頃は京傳馬琴不和の後なれば京傳も多少馬琴の學者風を嫌ひて向ふを張る量見なかりきともいふべからず、そは此の序を通俗文辭にもして殊更に漢文を用ひざるを斷り、又「素より童をなぐさむのみなれば、俗耳にとほき雅言を好まず、無下にいやしき言をもてふるしつ」、などいへる、意

味ありげに聞こゆればなり。あまりにくだしくしければ梗概は擧げざれど、此の書は彼れが最も丹精を凝らしたる緻密の作なり。

文化五年に『醉菩提』の著ありしより五年目に唯此の一著のみなるはいと少きに似たれど、尙別に草双紙の作はあまたあり。例へば讀本の小なるもの、及び従前の頓智脈を受けたる作等これなり。而して最も多く歲月を要したるならんと思はるゝは『骨董集』の著なり、京傳は晩年戯作の世に益する少なきを悔いて、文化のはじめ『奇跡考』を著し、今また此の著ありきといふ。太田南畝撰、京傳が文机の碑の背面に刻せる銘に「京傳者晩悔少作無益於世改勵刻苦搜奇秘著近世奇考及骨董集二百年來奇談逸事考據精確可以補小史矣」とあるを合せ見るべし。但し「悔少作無益於世」とあるはいかにぞや、こは恐らく口實に過ぎざるべし、寧ろ當時の戯作者の學者と比肩する能はざる地位にあるを慨して學者の看板ともいふべき隨筆を著し、名を後に傳へんとしたるにはあらざるか。作者『胎内十月圖』にある序文にも聊か其の述懐とあるはる節あり、

戯作者ばかり羨しからぬものはあら、人には絲瓜の皮のやうに思はるゝ、詩歌連併、古事來歴何でもよりミリ十九文と、ならべたて、は見すれども、つひあやまりては弱く、實學者に出あひては一言も、流しにいづるごぶ風のごま、尻尾をまいて逃つべし、予此場を悟らざるにはあらず、越國屋の番頭范兵衛があきを慕ひ、編蝠羽織で身退き、上田鶴の西施をこまなひ、油壺に棹さして齊陶の出店に隠居せんさ欲すれども、板元の越王あへてゆるさざれば、掠なく作者の腹のくちらやみの耻をあかるみへ出して、此草帯を作る、かくては遂に絲瓜の皮となりて、生涯人の眼をあらふべし、嗚呼是非もなき哉

これ素より一編の戯文に過ぎざれど、一口に戯作者と呼ばれて朽果てんこと何ぼう口惜くおもひしならん。彼れおのが像に賛して「櫻木にのぼるすがたは山王の猿に三本たらぬ戯作者」と謙遜せしなど、いづれか其の述懐の言ならざる。されば京傳が是等の著述ある所以は戯作の世に益なきを悔いてといはんよりは寧ろ戯作者の地位以上に名をなさんとせしなりといふべし。吾人は此の事に就ては南畝よりも『作者部類』に従はざるを得ず。同書に曰ふ

文化の年に至りて、又骨董集の著述あり、嘗て云、吾は素より經書史傳を讀ざりければ、儒になるべくもあらず、亦國學をもて更に名を成さんと思へども、國學にも名哲前輩多ければ、企及ぶべからず、只二百年前後、民間の風俗、古畫の事などをよく考察してさる書を後世に貽さば、戯作の足を洗ふに足らんとして、其考察に苦心する事、一朝の技ならざりき

京傳にして眞に戯作の世に益なきことを覺らば、當時既に財産あれば、斷然と戯墨を放擲せざるべからざるに、其事なくして言行の一致せざるは其意なかりし證據なり。さもあれ『奇跡考』及び『骨董集』は隨筆めけども、彼のいかなることも録しおくといふ覺帳的隨筆の類にはあらず、整頓せざる風俗史のたぐひなり。此の著いで、弟京山が『歴世女粧考』柳亭種彦が『用捨箱』『還魂紙料』等いで風俗史の素材ますく、豊富なるに至りぬ。『骨董集』のおほむねがきに曰ふ

およそ正史實錄のふみは、おほやけごをむれとして、わたくしさまのいさゝけきことにはかゝらぬものなれば、ふるき代のため手ぶりなごかうがへんたよりさなるべきはすくなく、ものたりさうしたぐひは、そらごごつくりでたるものからなりにふれしありさまいへるは、まのあたりそのころのことともうちみるばかりにあかしさすべきがおほし、またいさちかき世のことなどにいたりては、舞臺のことは、連歌俳諧のふみはさらなりむげにはかなきたはぶれかきたるさうし

（かうがへのたよりにそなふべきをばひきいでつ）

と、蓋し著者の本意は風俗の變遷を調べ正史を補はんとするに在りき。『骨董集』前帙（二冊）文化十年、後帙（二冊）は同十二年に出板せられき。これ京傳が名残の著なり。之れを要するに京傳が後期の主なる著述は讀本にして、風俗史的隨筆之れにつき、草艸紙に至りては徹々たり。若し夫れ中期の教訓主義は明に勸善懲惡の主義となりて此の期には最早猥雜の分子を止めず、然れども荒唐無稽、殘忍酷薄の事柄を寫して専ら俗客の注意を引きしは、前期の殆ど無意にして猥褻に陥りたるよりも、有意識だけに罪重しといふべきか。總じて此の期の作は、隨筆は勿論、小説といへども、一々出所を明にして事實正確、用意周到、文章平易、而も卑俗ならず、又重に悲哀の筋を主としたり。さはれ是等は必竟老熟の結果にして彼れが詩才は後期に至りて發達しきとも見えず、縱令京傳の文名は晩年の讀本に至りてますく、揚がりしにもせよ、眞の名譽は寛政三年以後にあらで、寧ろ其の前の草艸紙、洒落本の上にあるに似たり。

（二）京傳と馬琴との關係——馬琴との絶交——京傳の末期

前章に述べたる如く、京、馬二家のはじめて會合せしは、寛政二年の秋なり、是れより十有餘年間彼等の交際は依然として親密なりしが如し。然るに何時のことか、又如何なる理由ありてか、さしも久しき水魚の交りも、一朝にして破壊せらるゝに至りき。二家絶交の事に關しては予は未だ眞因を發見せず、只曲亭が手に成れる『伊波傳毛之記』によりて、其の大概を知るに過ぎず。

六十  
そもく「伊波傳毛之記」は何の爲に著はされたる傳記なる歟、先輩とも稱すべき京傳が徳を頌せん爲か否、「伊波傳毛之記」の巻首にいはいはく

吾友なる京師の某生は盤瀨京傳とは文の交り篤かりき故に京傳の物故を聞て哀悼尤も深し曰く鴻翼はより絶て竟として其面を見ざりしを遺憾とす因て余に就て其人となりを詳に知らむと欲す余其交遊の情誼を感じて書集めて遣れり然れども其家に於ては必ず秘するこゝあり密とするこゝあらん乞ふ一覽の後には奉火に附せよ切りに賣弄するこゝあらば、余が率は大なるん穴賢

なき人のむかし思へばかぎるひの  
いは傳もの言いふぞわひしき

是編己卯冬十二月十二日起草至十五日今夜三更卒業倉卒之間聊又加校正焉此其稿本也唯以舉事矣故曲筆飾文也自超氏之賢畫狐不能免矣宣秘藏者

即ち「伊波傳毛之記」は京師の某の爲に京傳が爲人を録したるに外ならず、然れどもつくづく其の詞を翫味すれば疑ふべき點多し、蓋し「書集めて遣れり」といひ、「此其稿本也」といふからには、此の稿は京師の某生へ贈りし別本なること疑なし、又「一覽の後には速に奉火に附せよ」といへるを見れば、其の後或人に見せたる趣あり。既に京師へ一本を贈りながら、なほ家に秘したる其の稿をば他人に見するに當たり、之れを火にせよと命ずともいかで此の稿の世に傳はらざるなきを保せんや、文意の曖昧にして實を欠くこと斯のごとし。思ふに記者のいふところは口實たるに過ぎざるべし、此の著の眞の目的は別にあらん。予は以爲らくは京傳と馬琴と絶交せし件に

就きての説明書なりと、即ち「伊波傳毛之記」は京、馬二家絶交の是非を公衆に訴へたる告訴狀なり、而して著者は曲亭の辯護士たること勿論なり、其の要旨を摘すれば

- 一 京傳は著書なり、否、少くも彼れは俗物なり
- 二 京傳は放蕩遊逸なり、前後二人まで娼妓を身受して妻を失したり
- 三 京傳は理に暗く情に溺る
- 四 以上の理由により京傳の人物を評すれば君子人にあらず、故に馬琴既に孔孟の道を以てすれども彼れ頑冥にして悟らず、却りて馬琴を驕慢とせし己れを輕蔑せりと思ひ疎んじたり
- 五 京傳と馬琴とは意見斯の如く相合はずして遂に絶交す、而も其の罪孰れにあるか、請ふ世間有識の人理非の歸するところを明斷せよ

此五條の外に出でじ。而して何故にかゝる告訴狀を呈出すべき必要ありしか。蓋し當時京、馬二家絶交のことは文人社會の一大問題たりしこと論を俟たず、而して京傳が弟京山と馬琴との不和は多少の流言を此の件に關して醸出せしなるべし。それやこれやにて剛愎なる曲亭は黙して止む能はざりしならん。此に於てや京傳が死後三年、即ち文政二己卯の年、此の匿名の回護的傳記竟に世に出でき。本意已に曲亭を回護するにあり、悉く信憑すべからざる勿論也。案ずるに文化元年京傳が母大森氏没し、同三年丙寅府下に大火ありき、此の際京傳が銀坐の家も類焼の不幸を蒙りしが

幸にして土藏は火中に存して恙なきにより是を元としてさし掛の假普請をなし少し計の造作をなして其當分の住居をなしたるを明斷せよ

ぬ門は板扉を廻らし屋上には蠟燭を敷置す因てまつ普請は出来さなれり京傳心計に新宅開の祝をなし所親を寄て飲む、時に話ていふ吾に子なく且つ妻は若し加之近日の出費些少にあらず然るに商賈不如意にして今回の災遭實に迷惑なりし、然れども不幸中の幸讀本は流行して注文も絶ざれば作料は初に倍したり、又書畫には已れ至て拙けれども人好んで之れを求むる故に其求むるに應ずれば潤筆を贈らる是らの金額を以て家を造らば又相應に其美を盡すを得べしと雖もしかせば財を失ふに急にして利を得るに緩し因て以て今假の屋宅を造り竣功に至るを以て君たちを招き一杯を喫して此事をいふ寧ろ此家を足れりとし暫くかくてあらんこすさいへり意志遺財に汲々たるを見るにたれり、此頃より自盡贊の扇又短冊皆價を定めて是を賣る遠近買求るもの多し薬も讀書丸はよく賣れゆけども烟管烟包は初の如く販賣なし因て京傳を人呼で富さいひ又射利家さいへり(伊波傳毛之記)

是れ曲亭が彼れを吝なりとする第一理由なり。げにや『戯作者撰集』にも「舖上にて自盡贊の扇短冊など鬻ぎぬれば自詠の發句のたぐひは多く世の至るところ」云々といへり、此のことは實なるべし『伊波傳毛之記』は又曰はく

京傳は文墨を採て穎敏奇才あつて世俗を籠絡すること決して人の及ばぬ所之にそゆるに天稟の愛敬他人を制服する事も又天資さいはん(中略)此人の缺たる所は算術には疎にして九々よせ算だに知らず然れども心算の敏利なるに於ては商賈鍛練の人さいへども及ぶものなし射利の才あます所なし又儉約を旨として衣裳などは縞紳家より賜はり物或は有福なる町家用違杯より惠まれし物の外に自己の金錢を費して買求むる稀なりまして家にある日の不斷着には吉原妓樓或は引手茶屋娼妓又は俳優などより贈り來る仕着せも唱る木綿反物を服さし一ツ着物を丁嚢に二三年は必ず着用すること、す著作に引用の書籍は藏書家より借覽し文房具は好まず唯此中に古書畫は至て愛翫せり對等の人と實際するにも或は散步して神社佛閣に詣る日も費用は總て多少さなく割出し我に損なく渠に又損なきやうにして食さず借りす自任して京傳流さいふ、たま〜馬琴、眞

顔、蜀山など京傳と俱に近在に遊歩せし時喫飯すれば其場にて割出し茶屋に休みては茶代を餘々に鏝八文づゝ出させて此處を去る實に一癖とすべし然れども毫も貪る意なし淡泊にして洒落なり斯くの如き舉動あるか見れば又知己朋友の窮々するも敢て救助するの念なし然らば吝なるかと謂へば鄙吝さいふにあらず之を要するに天資貨殖の人さいはむも過當にはあらど、いひまはし婉曲なれど、こも又京傳が特質の俗情にあるを暗刺せるにやあらん。さばれ「商人七分文人三分」(『枯樹花大悲利生』)と自白せる京傳にとりては、錢儲に着目せしことも、到來物の反物にて夏冬の衣類を埒明けしことも、更に彼れを賤するに足らざるべし、否、ひとり京傳に限らぬ當代の戯作者風必しも咎むるに足らざらんか。京傳が志の遺財にありしは或は然らん、然れども射利といひ吝嗇といふは酷に過ぎたり、これ曲亭を回護せんとてのいひ過ぎなるべし。同じ記者も虚平なる際には左の如くいへり

京傳の質は前にも述る如く無益を省く風尤も嚴格なりし其の一二事を例せば或時百合夫に向ひ帯一筋を求めたしさいへば京傳直ちに金三分を與へ然していひけらく今其許が求むる帯此金だにあらば即時に調へらる、也今其許帯なきに非ず有て猶望むは奢を好むなり然れども求むるも與へざる時は我も亦吝なるをまねがれず因て其の價を取らず今用る所の帯きたらん時買ふべしそれまでは金にて貯へ置べしと説諭す其後又百合琥珀の櫛一枚欲しく買給はれさいふ此時も又價即座に遣し説得前日の如し百合又其理に伏し欲望を制節するに至りし故に家に器の餘有なく服は寒暑を凌ぐに足る淡泊洒落の境なりし

こゝらが公平の評に近かるべし。彼れもと通人、吝儉の差を辨せざるものならんや『夜半の茶漬』かけ合の序にいはく

金をいかしてつかふさいへば儉約する事のみ心得たるもあれど、此廓に入つて儉約さいふことなし、吝嗇の人は必ず此里へ入べからず」云々

要するに『伊波傳毛之記』は京傳が俗臭あるを笑へども、善後の計畫をなさで妻子を路頭に迷はせ耻を子孫に残すは憂むべき文人にあらじ、京傳が遺財に汲々たりきとて咎むるは偏頗なりといふべし。

さて京傳が放蕩は辯護するの要もなきことなれど、これとても彼れが壯時の過失なり、一生の瑕失とするは酷なるべし。

案るに京馬疎遠になりそめしは文化六年とおぼし。『伊波傳毛之記』によれば京傳が生涯に一度商賣にて損したりといふ彼の長野善光寺の出開帳の時、京傳が全所並木町へ糕店を開業なしは、享和三年にして京傳の母が身まかりしは翌文化元年のことなり。此の間の記事中に左の一節あり。

百合子なし京傳は我弟京山の兒を養子せんか又百合が弟を養はんかを考慮躊躇する中百合が弟は病にかかりて早逝せしかば追て京山の次男を養子するに決意し百合にも此事を相談したり百合も其願なるを答へ肯て後いうやう妾の妹今九歳なり知らるゝ如く最も極貧の者に養はるる是を取戻し給らんやと京傳聞てそはよき考也(中略)養女として鶴と名づけ三絳書畫活花なんど稽古させ夫婦共愛み育てけり

右は京傳が玉の井の百合に對する溺愛の一斑を示して隠然弟京山と面白からぬ關係あることをほのめかしたり。蓋し京傳が一たび弟の子を養はんと決心しながらそれを百合の妹に見かへしは、人

情として京山が悦ばざりし所なるべし。而して此の際京馬の間には異狀なし。

文化三年の秋、麴町なる書肆角丸屋甚助、判木師米助に彫刻金、前借遅滞の出入ありて、角丸屋は遂に米助を町奉行小田切土佐守に訴へ、且この儀につき故障をなす者は作者馬琴なりと申立しに付、曲亭馬琴召喚せられて吟味に逢ふ、もこより事の間違なりしかば馬琴の申開きたち、やがて和談に及び米助は當金三兩を甚助へ返し、其餘は十二月晦日限りに返済すべしといふに、甚助も今更企圖外れて、せん方なければ其の儀をうけひき、遺恨なきよし證文を入させ只一吟味にて事平きしが、此の折京傳、鶴屋など多く奉行所の腰掛へ來會して、甚助が所作を惡むものから此のよしを聞き、心地よしとて祝はぬはなかりき。

かくて甚助は曲亭にわびげれど曲亭は「甚助理不盡に連訴したる恨、生涯忘るべからず」さて其の後は稿本も遣はさず、甚助殆ど困却して京傳に頼みしに、此の後久しくなるまで京傳が乞はるゝ稿本わたさずとて、甚助催促せしに、京傳怒りて、著編は問屋より買出す物と伺つければ、遅速はかかれて料りがたしとてはれつけしかば、甚助も腹立ちて其の後は來らざりき(作者部類)

これ些細のことながら、京傳の馬琴に對して冷淡ならざりしを見るに足れり。然るに文化六年京馬の間に、意見の衝突起りたり。『伊波傳毛之記』に従へば是より先き養女鶴が十三歳の頃、京傳は曾て我母の尾州家に與勤めせし所縁により、鶴も亦尾州家の御守殿へ部屋子に遣はし、今年十六(享和三年九歳とあれば文化六年には十五歳なり)にして竟に早逝しき。百合はもとより京傳の哀悼大方ならず。馬琴は京傳が家に不幸ありし時、訪ひ行きて慰めけるに、

京傳曰く我れ子なきにより荆妻の妹を養女とし生育せしに今回ばかりすも遠逝しこの悲みに落入たり、然れども弟京山に幸

ひ敷子あれば後には又何さかなす事もあらん、なれどもこれ表向祖宗の祭祀をたゞる世上の方法のみ莉妻の如きは若し我が死せし後は肉身の者もなく又かれを賣ぐものなしと思ひやれば、是が計福もなし置たし兼てより心掛やうやく先頭金百五十兩を出し或處に籠頭店の株を購ひ得たり、即ち一ヶ月金三分づゝを入学す因て此所得金を妻のものさ定め置けり又多少の貯金もあれば我は變あるも彼れの一生は安く送り得らるべしと、又曰く我が身後彼れ若し零落して困窮せば世人は必ずいはん京傳は死後のたしなみなきがゆゑ其落ぶれし妻を見よ是我が耻る所のもの也兄如何に考へらるゝや

と。馬琴は之れを聞きて答へず、談を餘事に移して暫くして去りぬ。其の後逢ふたび毎に京傳は馬琴の意見を叩くに、馬琴も然らば參考までに愚見を述べしとて

我思ふ所は甚だ先生と異れり顔子家訓にいはすや遺子萬金不薄藝從身と君子は其子にすら財を遺すを欲せず況乎其妻の爲めに何ぞ此事あらん先生若し苦心焦慮して漸く千金を蓄へ没するの時にあたつて賢妻に之を遺す遺訓嚴ならざるに非ず、賢妻又遺命を奉ぜざるにあらず然れども世道は輕薄にして事物の度合久しく安全を保たず万一も此場合に遭遇すれば計圖外より齟齬し内は能く之を維持保存する力に堪はず、人事止むを得ずして變せん孔子曰其人存則其政存其人亡則其政亡是なり先生茲に考ふる所あらば攝生の法に従ひ身軀を養生し長壽を保つことを計り弟京山子の兒子なり或は他實直の人の兒子なり之を撰み之を養ひ繼子の家督を定め万歳の後相續者の異論なき道を立ざる可らざるは理の當然にあらずや世の諺に老少不定さいふ妻若し先生に前だつて下世せば遺財は元より多年の苦慮空く消散して較圖茫然たらん古人曰愚以謂財と先生余は失禮を願ふ其意見をいふ斯の如きののみ

京傳は唯默然として言葉なし。馬琴は其の後も京傳を訪ふこと兩三度、談話數回に及べども京傳は馬琴の説を賞賛して毫も隔意なきもの如し。さる程に此の年の暮十二月、馬琴は『夢想兵衛胡蝶物語』を著し、が、編中に『忠臣藏』のおかる勘平がことを論じたる一節あり、即ち夢想兵

衛がおかるを叱する條にいふ。

全昧夫の爲なりとも既に影の客に身を汚して年季が明たらば又舊の夫さひさつにならふと思ひしは色慾から出た了簡らがひにて女の心操を正しくする道理をしらぬ誤なり同ト事なら金魁全傳といふ小説に翠翹といふ箱入娘が金氏の息子と夫婦のかたらひしたれどもいまだ婚姻はさゝのへすそのうちに親父が身に保た不慮なことが起つて囚徒となりしかば親を救はん爲に已にこを得ず翠翹が身を賣つてその罪を贖ひしが既に影の人に身を汚されしかば結髪に夫に耻て後には尼となり妹をもて彼金耶に妻せたるは道理至極の始末なりこれさへ一旦賊首の妻となり我れつらかりしものに冤を報ひし事などは女子の才覺に過ぎたりこれらによつて論ずるときは縦ひ早野氏が恙なくて世にありとも耻をしたらば年季あけて後に尼となりには貞を破て貞を全すといふべし年季あけたらば又舊の如く夫婦にならんと思ひしは色慾の腐がゆゑ故の感ひなり二人川の上に立て一人溺るゝときは救ふべし二人もろもろに溺るゝときは救ひがたしもし一人溺るゝときは一人岸にありこゝをもて救ふに便あり二人もろもろに溺るゝときは二人水中にありこゝをもて救ひがたしそもト夫婦御親父迄みな色慾名利に溺れしゆゑに夫は妻を救ふに便なく妻は夫を救ふに道なし云々(『胡蝶物語』)

『伊波傳毛之記』に従へば右は世に身を花柳の街に沈め「貞操と思ひて此禽獸世界に恬然として耻ともせず勤めするは人の眞といふ道を知らず婦徳を誤るものなるを反復丁寧に説き去りて後世の輕薄男子が探花春を買ひ柳絮風に舞ふを見て無上の娛樂とし家を顧ず内經綸の亂るゝあるも愧とせずして世に處るは奚ぞと論詰したり」といふにあり。

京傳は此新冊子を見猜疑の情何ぞ堪ふことを得ん大に憤懣し獨思惟らく渠舊證を棄て我を暗に誹謗す渠れ高慢字句言語の上に執て己を賣るの情を以て綿中針を入れて他人を刺し紙鷲に跨りて我を睨す假裝の語を造示して我妻に及ぶ蓋そ詰問せざるを得んや

とて大に怒り、明くる文化七年、年始の嘉禮を機とし、京傳は弟京山と共に馬琴を訪ひ、語次著作のことに及びて遂に一場の争端を開き、京、馬互に詈りぬ、京山傍に在りて中裁せしかば漸く其場はすみしが、是れより二家の感情よろしからず、たまたま所用あるも唯書狀のみにてすまし交通は全く絶えき。以上皆曲亭の辯護土がいふ所なり。辯護土また京傳が邪推深き例を擧げて曰はく

は「め万象亭と交り淺からざりしに寛政のはじめ彼れ田舎芝居といふ一小冊を著はし、其自序の文中に今の洒落は擧丸を出して笑ふが如しといへり京傳之を見て已れを讒れりとして恨み憤り意に其言を謂すして遂に又万象亭と交らず一旦馬琴を恨みたりしも又是に似たり

と。嗚呼これ事實か否か。いづれにもせよ、今こゝに二者の理非を判ずるの要を感ぜず。

馬琴は京傳を指して先生といふ馬琴會て寛政二年京傳を見て戯作の弟子たらんといひ乞求せし時京傳戯作の所以を述べ門人として教ふべき伎に非ざるを説得し相談者となり而て緊要の所を指示すべし云々師たらず馬琴は恬然人の餘業を繼紹し又他の唾を嘗て世を籠絡する徒にあらずと雖も京傳に依り今茲に至るを以て京傳を指して先生といふ其德操見る所高し〔伊波傳毛之記〕

自賛自評して高しといふ、高きか、高からざるか、世間よく之れを判せん。

馬琴は京傳が万象亭と絶交せしを證據として馬琴を怨みしも亦然りといへど、馬琴もまた學問上のこゝにて山崎美成と絶交せりといふ、而して京傳と万象亭との話は『伊波傳毛之記』作者部類にて喋々する所あり

文化十二年の頃より京傳は脚氣を煩ひ歩行すれば胸痛すとて家におみ閉居せしが、明年の夏に至

りて病少しく癒えければ、おろ／＼散歩の爲に友人を訪ふこともありき。十三年丙子の秋弟京山書齋を新築して一夜座敷開の宴を張り、眞顔、靜石、京傳等を請待せしが、京傳は快く食事を畢へ眞顔等と平常の如く談笑して三更に至りて辭して家に歸らむとす。眞顔は既に家に飯りしかば京傳は靜石と共に京山が書齋を出て行くこと一町ばかりにして、俄に胸痛甚しく足すゝみがたし。靜石驚いて其の木屐を脱がしめ肩にかけ扶けて家に送る、京山も此の報に接して走せ來たり、妻百合と共に介抱し醫者を招きて診せしむるに軋脚氣（脚氣衝心なるべし）と唱ふる危篤の症なりといふ。百合京山手を盡くしゝが終に及はず、其の夜四更に至りて全く不起の人となりぬ。時に文化十三年九月七日享年五十六歳なりけり。明日未の刻柩を兩國回院に葬送す、會するもの、蜀山人、狂歌堂眞顔、靜石、烏亭焉馬、曲亭馬琴、及北庵紅翠齋、歌川豊國、勝川春亭、歌川豊清、同國貞等文人墨客當代の名家百餘人に及び頗る盛弔なりきといふ。法名「辨譽智海京傳」〔伊波傳毛之記〕

山東京傳の末期は要するに悲惨なりき、蓋し京傳が自ら求めし所とはいへ京山も兄に對して冷澹なりきと『作者部類』に見えたり。而して京傳が相談相手とも恃みたりし馬琴は前の如く疎遠となりたり。彼れは其の妻の身の上を苦勞しながら空しく他界の人となりぬ。一言彼れの生涯を評すれば初期の京傳は陽氣にして春の如く中期のは疑惑即ち變遷の期なりしが、後期に至りては稗史の特質に現れたるが如く荒涼寂寞ながら秋のものがなしきに似たり、されば戯作者としての



譽は當時已に高かりき。現に

寛政の年、岡崎名古屋の間を遊歴せし者、山東鹿京傳たる由を伴りて、其地の風流士を欺きたるものあり(作者部類)  
上田秋成の如きだに『くせ物語』の序中に「吾妻の京傳」を稱し、太田錦城の如きも「今は考證の學、北野屋鞠塙、山東京傳に下り及べり」と『梧窓漫筆拾遺』にうめきたり。いづれか彼れの名の一世に高かりし證ならざらん。

因に記す、『蜘蛛の糸巻』には「家兄死去の時馬琴へも知らせやりに、寺へばかり倅宗伯を名代として、自身不來、舊友は蜀山翁までも來られしが、馬琴が來らざる故、人々宗伯に尋れしに、病氣にはあらざるよし、七日佛事の時も馬琴をも書中にてまねきしかゞ、佛前へ少しの使物のみにて、其後は亡兄のいたみいひにも來らず、書狀にもたづねず、音信不通なり」とあり、馬琴が會葬せしや否は明ならず  
又記す『戯作者撰集』に「後言」の詞をひき、京傳が病を得しは『骨董集』のこゝにつき他人と争ひいたく激昂せし爲なりといひ、なほ之れを疑ひ「然るや否はしらす印書買文壽堂が話に聞おけるはさる類に非ず」と辨せり『後言』に「こゝを記せるは誤れり」

京傳嗣子なかりければ弟京山入りて家を継ぎ、長子筆吉を傳藏と改めて之れに其の跡を傳へき。  
妻百合は京傳の死後悲歎のあまり發狂して文化十五年正月二日没しぬ。弟京山も當時の一名家爰に其の傳を附記すべくもあらず。

### 山東京傳著作一覽表

此の表を分ちて四類とす、青本之部、洒落本之部、合巻並稗史之部及び雜書之部是れなり。青本之部の初に著作と挿畫との二項を設けたるは、京傳が初期の生涯には、畫工と戯作者との二職分あることを示さん爲なり。

表中に收めたる書目は『稗史年表』『戯作外題鑑』『合巻外題集』『作者部類』『近代著述目録』等を参照して集録せるものなれど素より部數も多く、年代も遠かりたれば、誤謬、遺漏、年號の相違等若干あるべし。今は只大跡を世に示すのみ。

### 山東京傳著作一覽表

年	號	年	號	年	號
安	七	青本	自安永七年 至文化元年	安	八
永	七	挿畫	●『開帳利益札遊合』(作者未詳北尾政演書) ●『戯作者外題鑑』に○印を附し「七曲舎案に京傳十五歳にて作、譽者未詳」とあり、但「同書△印は大當りの符號、○印は次級の賞點なるべし、又此の書前年に作りし者ますれば京傳が十七歳の作にして草双紙着筆の初なり	安	八
安	八	挿畫	●『麻花扇之觀世水』(喜三二作) ●『雷工政演今年より出る後に作者京傳といふ是也』(『稗史年表』) ●『いさちよん』(未詳) ●『政演雷風名不出』とあり(『戯作外題鑑』) ●『花のお江戸三曲の鼎』 ●『わへり咲後日の花』 ●二種ともに政演書、作者未詳、但し『稗史年表』『戯作外題鑑』北尾政演の書作りとす、以下作者未詳同ト。	安	九
安	九	著作	●『娘のたき打放郷の錦』(政演書作) ●『山東京傳娘のたき打には下めて名を出す』(『稗史年表』)これ京傳處女作、但し京傳の名は未だ出でず。 ●『龍の都四國うわさ』(喜三二作) ●『夜野中狐物』(王子風車作) ●『おかし咄お膳の茶』(臈下逸人作)		

年	天明元年	天明
<ul style="list-style-type: none"> <li>「或人云おかし咄の臍下逸人も京傳の事なり」云々(稗史年表)</li> <li>「くだ物見立お世わ話」</li> <li>「遊入三幅對」</li> <li>「よれまんちうの始め」(作者未詳)</li> <li>「通さは世事」</li> <li>「やさ模倣會我の難形」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>安永十年天明改元</li> <li>挿畫</li> <li>「運ひらく扇の花」(喜三二作)</li> <li>「煙くらべそげやの薪」</li> <li>「其後ひよんな物」(風車作)</li> <li>「大津名物」(可笑作)</li> <li>「七笑貌當世すがた」</li> <li>「うんつく太郎左衛門咄」(作者未詳)</li> <li>「敵討魚名の劔」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「御存商賣物」(自畫)</li> <li>山東京傳の名此の作よりあらはる「稗史年表」に「京傳が戯作御存商賣物にはじめて畫作の名を顯し」云々</li> <li>四方山人此の年草双紙評判記</li> </ul>
二	天明三年	天明四年
<ul style="list-style-type: none"> <li>「岡目八目」を著し、此の作に「總巻軸極上々吉」の位を附す(蜘蛛の糸巻)</li> <li>挿畫</li> <li>「たげこの響一時」(通笑作)</li> <li>「市川三升圓」(岸田杜芳作)</li> <li>「七福神大通傳」(可笑作)</li> <li>「いはひます福壽草」(作者未詳)</li> <li>「敵討染分手總」(作者未詳)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「かれは上野歎」(自畫)</li> <li>挿畫</li> <li>「混雜武者くしゃ咄」(芝全)</li> <li>「通人いろは短歌」(交作)</li> <li>「通の春歳旦關」(杜芳)</li> <li>「放蕩張本日本左衛門」(杜芳)</li> <li>「仇な草伊達を下谷」(紫蘭作)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「天慶和句文」</li> <li>「不案配即席料理」(自畫)</li> <li>挿畫</li> <li>「八たし調の流」(芝全交作)</li> <li>「跡目論うその實録」(杜芳作)</li> </ul>
年	天明五年	天明六年
<ul style="list-style-type: none"> <li>「全盛大道記」(作者未詳)</li> <li>「人知らず思染井」(黒鷲式部作)</li> <li>黒鷲式部は山東京傳の妹よれ女が俳名なり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「從中惡言駁骨」</li> <li>「可富見ほの夢」</li> <li>「匂ひん線香」</li> <li>「麻中丁子」</li> <li>「江戸生浮氣の蒲」(自畫)</li> </ul> <p>此の作大當り、自惚子を艶次郎と呼ぶこと又京傳鼻の由來此の作に基くといへり</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「江戸春一夜千兩」</li> <li>「あく七變目景清」(自畫)</li> <li>「三階圖繪」</li> <li>挿畫</li> <li>「景清塔のれふり」(万葉亭作)</li> <li>「通丁お江戸の鼻」(唐來三和作)</li> </ul>

年	天明七年	天明
<ul style="list-style-type: none"> <li>「釘のおれ二度目の清書」(杜芳作)</li> <li>「御富興行會我」(山東京傳告作)</li> <li>「兩國しのだ染」</li> <li>山東京傳は京傳が別名たること前にいへり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「三筋立客のきう(田)」</li> <li>「百文二朱むだがるた」</li> <li>「三千年になるてふ蜉蝣」(自畫)</li> <li>「是氣儘作種」</li> <li>挿畫</li> <li>「芝全交が智恵の程」(芝全交作)</li> <li>「世の中は諸事天文」</li> <li>「かな手本不通人蔵」(杜芳作)</li> <li>「島壘目正月」(万理作)</li> <li>「ばて嫌息子のすき」(山東京傳告作)</li> <li>「化もの樂屋異狀」(告作)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「敵跡のまつり」</li> <li>「まな手本義士の筆力」</li> <li>「小倉山時雨珍談」</li> <li>「會通自慢のいみ」</li> <li>「名物梅ヶ枝でんぶ」(自畫)</li> </ul>
八	寛政元年	天明四年
<ul style="list-style-type: none"> <li>「扮接銀烟管」</li> <li>「富士の人穴見物」</li> <li>「今日現金湯起請」</li> <li>「時代世話二丁つみ」(行磨畫)</li> <li>「狂言末ひろの榮」(歌磨畫)</li> <li>挿畫</li> <li>「酒宴なるかな化物の交」(石山人作)</li> <li>「苦は樂の元トめ」(作者未詳)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天明九年寛政改元</li> <li>著作</li> <li>「化物樂屋異帳」</li> <li>「地獄一面鏡の淨はり」</li> <li>「早道節用御守」</li> <li>「三河島御不動記」</li> <li>「孔子緯時に藍染」</li> <li>「一百三升いま地獄」</li> <li>「花の東朝朝公御入」</li> <li>「眞實情文樓」</li> <li>「延壽返魂丹」</li> <li>「碑文谷利生の四竹節」</li> <li>「一生入福兵衛の幸」</li> <li>「江戸の花役者」</li> <li>「まぜみせ八人」(山東京傳告作)</li> <li>「面光不背の笠」(北尾政美畫)</li> <li>此の年政演他人の作に畫かず</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「拵跡のまつり」</li> <li>「まな手本義士の筆力」</li> <li>「小倉山時雨珍談」</li> <li>「會通自慢のいみ」</li> <li>「名物梅ヶ枝でんぶ」(自畫)</li> </ul>
寛政二年	寛政三年	天明六年
<ul style="list-style-type: none"> <li>「孔子緯後編藍通行義談」</li> <li>「同三編」</li> <li>「花はみよしの犬はうち」</li> <li>「ひやつこい波立」(政美畫)</li> <li>「清水記」</li> <li>「心學早染草」(政美畫)</li> <li>「玉みかく青砥が錢」(歌丸畫)</li> <li>「京傳浮世の醉醒」(龜毛畫)</li> <li>挿畫</li> <li>「新作徳政斷」(石山人作)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「至無我人鼻心中」</li> <li>「話染廓色揚」</li> <li>「落咄笑の書拔」(自畫)</li> <li>「九界十年色地獄」</li> <li>「人間一生胸算用」(早染草後編)</li> <li>「八百万兩金神花」</li> <li>「蘆生ヶ夢其前日」(政美畫)</li> <li>「箱入娘而屋人魚」</li> <li>「世の中洒落見繪圖」(菊亭畫)</li> <li>「京傳此頃より大に行はれ其名高し北尾政演が青本を畫くこと此年にして止む」(稗史年表)此の後著作挿畫の項を省く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>著作</li> <li>「拵跡のまつり」</li> <li>「まな手本義士の筆力」</li> <li>「小倉山時雨珍談」</li> <li>「會通自慢のいみ」</li> <li>「名物梅ヶ枝でんぶ」(自畫)</li> </ul>

寛政四年		寛政五年	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『女将門七人化粧』(畫工不明)</li> <li>●『天網垂楊柳』(畫工不明)</li> <li>●『只このろ鬼うち豆』(政美畫)</li> <li>●『化物つれく草』(政美畫)</li> <li>●『朝比奈異國めぐり』(重政畫)</li> <li>●『梁山一奇談』(重政畫)</li> <li>●『梁山一奇談』は水滸傳の繪草紙にして六册十回、後來繪入水滸傳之れに基くさいへり</li> <li>●『桃太郎發端咄』(春明畫)</li> <li>●『實語教雅講釋』(春明畫)</li> <li>●此の前年京傳手鎖一件あり、馬琴が代作といふは此の二部等なるべし</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●『新板替道中助六』(清長畫)</li> <li>●『貧福兩道中記』(春明畫)</li> <li>●『福徳果報兵衛傳』</li> <li>●『龍宮なまぐさ鉢木』</li> <li>●『先開梅の赤木』</li> <li>●『さつき下旬由干曾我』</li> <li>●『花の笑七福詣』</li> <li>●『四人詰兩片あやつり』</li> <li>●『堪忍袋緒めの善玉』</li> <li>●『心學早染草』三編なり</li> </ul>	
寛政六年	寛政七年	寛政八年	寛政九年
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『貧福兩道中之記』(畫工不明)</li> <li>●『昔語筆の操』(政美畫)</li> <li>●『小人國こゝめ櫻』(重政畫)</li> <li>●『三樹大夫七人化粧』(畫工不明)</li> <li>●『花之笑七福參詣』(不明)</li> <li>●『百人一首戲講釋』</li> <li>●『眉間三人生醉』(理重政畫)</li> <li>●『忠臣藏即席料』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『根なし草筆の若ばへ』</li> <li>●『金銀先生造化夢』</li> <li>●『忠臣藏前世の幕なし』(重政畫)</li> <li>●『落咄百講』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『鬼ころし心の角樽』</li> <li>●『人心鏡の影繪』(重政畫)</li> <li>●『諺下司のはなし』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『三才圖繪雅講釋』</li> <li>●『和莊兵衛後日咄』</li> <li>●『正月故事談』</li> <li>●『嘘から出た實咄』</li> <li>●『京傳の作今年四部いづれも教訓を専らにして戯作の体にあらず是より年々勸懲をこころす』(稗史年表)</li> </ul>
寛政十年	寛政十一年	寛政十二年	享和元年
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『百化帖準擬本草』(重政畫)</li> <li>●『人間一生凸凹話』(重政畫)</li> <li>●『一刻價万兩回春』</li> <li>●『兒訓かげ繪の譬』(清長畫)</li> <li>●『化物やまさ本草』(可候畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『京傳主十雷利鑑』(重政畫)</li> <li>●『兩頭筆善惡日記』(重政畫)</li> <li>●『五鉢和合物のたり』(豊國畫)</li> <li>●『かな手本むれの鏡』(豊國畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『甘い哉名利おろし』(重政畫)</li> <li>●『平かな錢神問答』(豊國畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『通氣智之錢光記』(春)</li> <li>●『吞込多寶寶錄起』(夏)(重政)</li> <li>●『賢愚港錢湯新話』(秋)</li> <li>●『枯樹の花大悲の利益』(冬)</li> <li>●右四種を四季に擬へて出版す是れ合卷の權輿なりといふ</li> <li>●『早わざ七人前』(重政畫)</li> <li>●『お染長壽小紋』(重政畫)</li> </ul>

享和三三年		文化元年	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『悟道迷所獨案内』</li> <li>●『分解道胸中双六』</li> <li>●『裡家算見通座敷』</li> <li>●『怪談模倣夢字彙』</li> <li>●『人間万事吹矢的』</li> <li>●『五人はやしひな物』</li> <li>●『青本之部終』</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●『客衆肝膽鏡』(天明六年)</li> <li>●『通言雜難』(天明七年)</li> <li>●『古契三姐』(天明七年)</li> <li>●『古原楊子』</li> <li>●『傾城醜』(天明八年)</li> <li>●『夜半茶漬』</li> <li>●『通氣粹語傳』(寛政元年)</li> <li>●『新造圖彙』(寛政元年)</li> <li>●『傾城買四十八手』</li> <li>●『繁々千話』</li> <li>●『田舎談義』</li> <li>●『京傳予誌』</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『四十八手二編葬之麻』</li> <li>●『仕掛庫』</li> <li>●『姐妓絹ふるひ』</li> <li>●『錦酒裏』</li> <li>●以下年號不明</li> <li>●『傾城買早學問』</li> <li>●『總併優細見記』</li> <li>●『小紋新法』</li> <li>●『地者八景』</li> <li>●『吉原大全』</li> <li>●『雜談紙屑籠』</li> <li>●『松魚智慧袋』</li> <li>●『獨樂新話』</li> <li>●『廓の大張』</li> <li>●『青樓麗談はたて貝』</li> <li>●『客衆水面鏡』</li> <li>●『總財ます』</li> <li>●『令子洞房妓談』</li> <li>●『傾城友人の眞辭』</li> <li>●『白川夜船』</li> <li>●『小紋雅話』</li> <li>●『息子部屋』</li> <li>●『小紋裁』</li> <li>●『不祥照房情記』</li> <li>●なほ數多あるべし</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●『忠臣水滸傳』十册(重政畫)</li> <li>●但し寛政十年作</li> <li>●『安積沼』五册(同右)</li> <li>●『浮牡丹』四册(豊國畫)</li> <li>●右二部年號不明</li> </ul>	
文化二年	文化三年	文化四年	文化五年
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『江戸砂子娘敵討』三册(重政畫)</li> <li>●『優曇華物語』七册(武清畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『山東奇談机之塵』(重政畫)</li> <li>●『原本復讐後の祭祀三册添』合卷外題集に見えたり</li> <li>●『敵討煎茶の始』(重政畫)</li> <li>●『櫻姫全傳曙草紙』五册(豊國畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『敵討兩輪車』六册(重政畫)</li> <li>●『河内の姥ヶ火話』(外題集)</li> <li>●『敵討奥州狼河原』六册</li> <li>●『同孫太郎』</li> <li>●『紫服紗茶人形氣』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『梅花水裂』三册(豊國畫)</li> <li>●『昔語稻妻表紙』五册(豊國畫)</li> </ul>
合卷		合卷	
<ul style="list-style-type: none"> <li>●『於杉於玉二見敵討』六册</li> <li>●『敵討岡崎女郎衆』(畫工不明)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●『於杉於玉二見敵討』六册</li> <li>●『敵討岡崎女郎衆』(畫工不明)</li> </ul>	

文	年五化文	年四化
●松卜梅竹取物語十五册 (國貞畫)	●女達三ヶ月阿仙傳 六册 ●万福長者榮花物語 三册 ●絞染五郎強勢談 五册 ●八重霞のしくの仇討 七册 ●岩井柳桑野仇討 七册 ●殺車九尾狐 九册 ●俠客双つ蝶々 九册 ●敵討白藤源太談 七册 ●妬湯仇討話 六册 ●敵討天竺徳兵衛 六册 ●熊女越路之仇討 六册 ●敵討木曾の棧 六册 ●本朝醉菩提 十册 (豊國畫)	●敵討千鳥の玉川 六册 (重政畫) ●於六櫛木曾仇討 六册 (豊國畫) ●安積沼後日之仇討 六册 (豊國畫) ●善知鳥安方忠義傳 六册 (豊國畫)
合卷	合卷	合卷
●志道野昔譚 七册 ●琴松娘錦之笈摺 六册 ●勤善辻談義 八册 ●果井筒紅葉打鋪 八册 ●一日替連理花王 十册 此の作前編京傳作、後編京山作 ●岩戸神樂劍威徳 六册 (春亭) ●風流伽三味線 十册 (畫) ●梅の於由女丹前 六册 (春扇畫)	●戲場牡丹燈籠 六册 (國貞畫) ●昔織博多小女郎 七册 (清峯) ●糸櫻本朝文粹 十二册 (畫) ●親の敵うまの傍 六册 ●富士太郎梅隠家 八册 ●夜の鶴親父形氣 八册 ●歌字墨青柳硯 八册 ●筆慰反古張團扇 (不明)	●今昔八丈揃 六册 ●釣狐昔塗笠 六册 ●妹脊山長柄文臺 六册 (豊國) ●二人虚無僧 九册 ●勇雲外氣節 六册 ●薄雲猫之話 六册 (國貞畫) ●外繫男子鏡 六册 ●籠釣瓶丹前八ッ橋 (不明) ●朝茶湯一寸口切
化文	年七化文	年六化
●咲替て花之二番目 六册 ●女優寛雪之花道 五册 (國貞畫) ●播州皿屋敷物語 六册 (春扇) ●物草姫昔雛形 六册 (畫) ●曉傘時雨古手屋	●大磯俄のれり物 六册 (豊國) ●袖の梅月の土手節 (畫) ●氣を替て戯作問答 (不明) 以上三部作者が遺稿なるべし	●長髪妾蛇柳 六册 (國貞畫) 此の年作者京傳物故
合卷	合卷	合卷
●黄金花男道成寺 十册 (豊國) ●信田妻昔繪草紙 六册 (畫) ●藤富士出口の繪笈 六册 ●敵討馬士歌の始 (不明) ●物草太郎正本所 七册 (明) ●腹筋鷓鴣石 五册 (内一册京山作)	●孔子一代記 三 (寛政元年) ●四季交加 (寛政はじめ) ●近世奇跡考 五 (文化元年) ●骨董集 四 (前、文化十、後同十二年) ●大靈舞考證 (不明) 又近代著述目錄に載せて傳本の存否詳ならざるもの左の如し ●春日話柄 五 狂書譜 五 雜劇好古	●梅由兵衛紫頭巾 六册 (豊國) ●男草履打 六册 (畫) ●娘景清襪襪振袖 七册 (畫) ●櫻姫筆再吹 七册 (不明)
十化文	年九化文	年八
●ハムムシ入道昔談 六册 ●婚禮累重寄 五册 ●兄ヶ淵櫻之振袖 六册 (國貞畫) ●重井筒娘千代能 六册 (美丸、國丸畫) ●春相摸花之錦畫 六册 (國貞、國丸畫) ●無間鐘娘縁記 八册 (豊國畫) ●朝妻舟柳三ヶ月 六册 (不明) ●安達ヶ原氷姿見 六册 (不明)	●今昔八丈揃 六册 ●釣狐昔塗笠 六册 ●妹脊山長柄文臺 六册 (豊國) ●二人虚無僧 九册 ●勇雲外氣節 六册 ●薄雲猫之話 六册 (國貞畫) ●外繫男子鏡 六册 ●籠釣瓶丹前八ッ橋 (不明) ●朝茶湯一寸口切	●梅由兵衛紫頭巾 六册 (豊國) ●男草履打 六册 (畫) ●娘景清襪襪振袖 七册 (畫) ●櫻姫筆再吹 七册 (不明)

三十化文	年二十化文	年一十化文	年
●石の枕春宵抄 七册 (豊國畫) ●琴聲美人傳 (豊國畫) ●黄金花万寶善書 六册 (柳川重信畫) ●蝶千鳥會我佛三 六册 (國貞、國直、國芳畫)	●繪看版子持山姥 九册 (豊丸畫) ●女達磨由來文法語 七册 ●娘清之振袖日記 六册 (豊國畫) ●猿猴著聞水月談 六册 (國直畫) ●草履打所縁色搦 六册 (美丸畫)	●當り升矢箭の筋限 六册 (よし丸畫) ●會談三ッ組 六册 (春扇畫) ●黄金花奥州細道 六册 (國直畫) ●不破名古屋稻妻表紙 七册 ●磯馴松金原腰月 六册 ●隅田の春梅若詣 六册 (豊國畫)	●雙蝶記 六册 (豊國畫)
合卷	合卷	合卷	稗史
●孔子一代記 三 (寛政元年) ●四季交加 (寛政はじめ) ●近世奇跡考 五 (文化元年) ●骨董集 四 (前、文化十、後同十二年) ●大靈舞考證 (不明) 又近代著述目錄に載せて傳本の存否詳ならざるもの左の如し ●春日話柄 五 狂書譜 五 雜劇好古	●黄金花男道成寺 十册 (豊國) ●信田妻昔繪草紙 六册 (畫) ●藤富士出口の繪笈 六册 ●敵討馬士歌の始 (不明) ●物草太郎正本所 七册 (明) ●腹筋鷓鴣石 五册 (内一册京山作)	●大磯俄のれり物 六册 (豊國) ●袖の梅月の土手節 (畫) ●氣を替て戯作問答 (不明) 以上三部作者が遺稿なるべし	●長髪妾蛇柳 六册 (國貞畫) 此の年作者京傳物故
合卷	合卷	合卷	稗史
●今昔八丈揃 六册 ●釣狐昔塗笠 六册 ●妹脊山長柄文臺 六册 (豊國) ●二人虚無僧 九册 ●勇雲外氣節 六册 ●薄雲猫之話 六册 (國貞畫) ●外繫男子鏡 六册 ●籠釣瓶丹前八ッ橋 (不明) ●朝茶湯一寸口切	●今昔八丈揃 六册 ●釣狐昔塗笠 六册 ●妹脊山長柄文臺 六册 (豊國) ●二人虚無僧 九册 ●勇雲外氣節 六册 ●薄雲猫之話 六册 (國貞畫) ●外繫男子鏡 六册 ●籠釣瓶丹前八ッ橋 (不明) ●朝茶湯一寸口切	●梅由兵衛紫頭巾 六册 (豊國) ●男草履打 六册 (畫) ●娘景清襪襪振袖 七册 (畫) ●櫻姫筆再吹 七册 (不明)	●長髪妾蛇柳 六册 (國貞畫) 此の年作者京傳物故
十化文	年九化文	年八	年
●ハムムシ入道昔談 六册 ●婚禮累重寄 五册 ●兄ヶ淵櫻之振袖 六册 (國貞畫) ●重井筒娘千代能 六册 (美丸、國丸畫) ●春相摸花之錦畫 六册 (國貞、國丸畫) ●無間鐘娘縁記 八册 (豊國畫) ●朝妻舟柳三ヶ月 六册 (不明) ●安達ヶ原氷姿見 六册 (不明)	●今昔八丈揃 六册 ●釣狐昔塗笠 六册 ●妹脊山長柄文臺 六册 (豊國) ●二人虚無僧 九册 ●勇雲外氣節 六册 ●薄雲猫之話 六册 (國貞畫) ●外繫男子鏡 六册 ●籠釣瓶丹前八ッ橋 (不明) ●朝茶湯一寸口切	●梅由兵衛紫頭巾 六册 (豊國) ●男草履打 六册 (畫) ●娘景清襪襪振袖 七册 (畫) ●櫻姫筆再吹 七册 (不明)	●長髪妾蛇柳 六册 (國貞畫) 此の年作者京傳物故

挿畫  
青本 五十種  
但し作者未詳二十種は京傳作に加ふ

著作  
青本 百四十一種  
洒落本 三十六種  
合卷 九十二種  
神史 十種  
雜書 二十二種  
但し内不明の書も多し

總計 著作三百〇一種  
外に挿畫三十種  
I-O-X

## 曲亭馬琴

## 第一章 昨夜の夢

蓮は泥中にいづれども清香に害なく、英才必しも世家にいでず、家門血統によりて人を評價するは識者のせざる所なり。まかりと雖も天性と遺傳との關係の小少ならざるを思はし、祖先來の歴史は、その後裔の傳記中の重なる部分たる事を認むべしわが小説壇の泰斗曲亭馬琴翁の性格の如きも、其の父祖の性格に由來する所尠からざるもの、如し、讀者よ徐に予が下に叙説する所を聴け。」翁は源姓瀧澤氏、其の先は世々徳川家の士、長澤氏に仕へて、三河にあり、天正十八年東照公江戸入部の時、主家に従ひて東にうつりぬ。忠直精厲世々をへつればとて冢宰の列にあげられて淺からず時めきけり。爾後世をかふる事二三、年を閱する事四五十、瀧澤大右衛門に至りぬ。

長澤氏又二三傳して養嗣大河内右衛門大夫正綱、東照公に近侍して寵あり、松平氏を賜はりぬ。正綱の子伊豆守信綱、才機絶倫にして大猷嚴有の御代に仕へて輔弼最道に叶ひければ、下總古河七萬石より武藏川越七萬五千石にうつされ、智恵伊豆の名譽は天下後世にまばゆきまで輝きたり。」信綱の四郎に頼母介堅綱ときこえしは、幼より聰明敏悟、最機敏の性なりしかば、信綱殊の外にめでいつくしみて、愁なる他家をつがせんより、むしろ宗家の藩屏たらしめんとて、同國埼玉郡羽生領志多美の郷にて、志多美、明願寺、下の三ヶ村、一千六百石を割きて別家せさせき（正保

二年）。其の時豆州大右衛門を招きて頼母は年若ければ足らぬ事のみ多からんと心元なし、汝は彼れが傳父といひ老功の者たれば。今度新家の家宰となして万を托せむと思ふなり、諫めもし懲らしもしてまに／＼助け導きてよ、唯秩祿從來の半にも及びがたきが心苦しけれど、汝ならでさる人もなければとありければ、あなかしこ、よしや粟半粒はまずともいかで若君と別れまつるべき、骨をくだき身を粉にしてもえこそ御過はあらせじとちかひてまかでつ、大右衛門が三郎久米之助といふは、早くより四郡の君（頼堅）の許に召されて、文の席遊の場夜となく日となく侍りて、雨の夕の語らひ敵、雪の朝の仕合の友と親しく仕りて、互に兄弟の思をさへなしければ、之れも従ひて別家にうつりぬ。やがて親は家老となり久米之助は元服して運兵衛與也と名のりて近習となり、内外相助けて、何くれと取りまかなひけり。

堅綱君嚴有公に近侍して君寵日を追うて加はりければ、大右衛門も殊の外に喜び居けるが、あはれ浮世は夢の如しといふたどへにもれず、寛文五年六月末つ方、いまだ世繼の男子だにあらぬ廿五歳を一期に、忽ち身を他界の雲に隠しぬ。一家悲歎の涙は晴るべくもあらねど、せむやうもなければ、大右衛門萬に心をつくし、一族大河内久綱の三郎又左衛門儀綱といふを養ひて家督となしけり。やがて所領安堵とはなりぬれど、今年僅に十五歳なる幼君なれば、輔弼の任殊に重く積勞つひに病をなして、事業やうやく其の緒につかんとしたる寛文十年九月十日、大右衛門終にみまかりけり。

享年七十歲位。屍は小石川深光寺に葬る。常光院月山秋圓居士。

運兵衛興也やがて家職を襲ぎ、猷替する所多かりければ、儀綱棚營の御覺もめでたくて、御徒士頭勤仕布衣にへのぼりしが、此君も又世子なくて、元祿七年七月七日にみまかられき。かなしどは常の悲しき時にいへり、かゝる時何どかいはんと興也をはじめうち嘆きしが、さてもありえぬば、之れも一族なる天野長頼の次郎内記信連といふを迎へ立てたり、此君常憲公の覺ありければ一家まばしは涙の袖をほしたりけり。

主家の不幸のみならず、興也も亦家督の幸なくて三十路ばかりにして妻を先て、後妻に二女はありけれど、之れも幼き程にうせて家をつがすべき者なし、こゝに主家采邑のほどり川口といふに真中全直といへるがなり、常にゆきかひて懇に交らひしかば、その三郎を養ひとり、佐仲興吉と名のらして、家職を傳へ、我れは信清軒と號して思を數島の道によせ、世を風流に送りけり。

元祿八年主家の命によりて志多美長昌寺の釋迦堂の縁起を撰び、其の終に和歌九首を附し、南無釋迦牟尼佛の九音を其の頭とせり。その第三首

白露に宿るもなき月影も西に入る社樂しかりけり

第九首

罪咎も今は消なむ出る月は助け玉へ彌陀佛

名歌さにはあらず。例として引けるのみ。此の燕石雜話中に此の翁の詠四五十首あり。

興吉又よく祖道にそむかず、深く佛法を信じ、謹慎精勵を圖りしかば、領内皆恩澤に浴せりけり。

り。此の人も亦文學の思想あり、詠歌また少からざりき。

謹慎精細なる證は其の日記の殘緒によりて見るべし。曲亭翁編『家廟遺墨』中寶曆年間の日記  
九月六

一朔日クモリ昨日より大にひる肌付に布子綿入羽織にてもまだ寒し。火鉢出してあたる。八月十四日比より蚊帳つらず。

七月十八日の狀大右衛門(興吉の子興誠の事なり)方より今日到來披見

一朝 割 茶汁 一壺 白飯 里芋 せん大根汁 梅干 酒しほ 一夕 粥藪蘇の粉 焼味

朝團子あたり大下り小用一度。晝又大下り小用一度。暮小用一度

其の精細なるさま見るべし。佛法の信仰文學の趣味を有せる事も同書に

彌陀頼む人は雨夜の月なれや雲暗れぬ共西へ社ゆけ

分け登る麓の道は變れ共同ト雲井の月ぞ眺むる

なごあるにて知らるゝなり。無下の俗人にはあらざりけり。

其の子興誠大右衛門と稱す。(後に運兵衛と改む)

文化中出版の『茶雜の記』には諱を興義と記しオキノリと訓したり。今墓石其の他諸書による。

よく劍を舞はし、弓を射、殊に一條流の御法に精しく、深く孫吳の興をきはめて、敢爲率直の風あり少くして劍を負ひ、西に東と經めぐりて、術を磨き、膽を煉り行きくして、興の棚倉にとままり、まばし小笠原侯に仕へたりしが、父興吉老衰の故をもて江戸にかへり。やがて松平家の家

宰となりぬ。決する事甚速にして、專横のやうにさへ見えければ、出頭をねためる小人輩、吾側に侍りて膚受澁潤の讒口をふるひければ、主君もやう／＼に輿城をば疎みなしけり。主家は内記信連入りて松平氏を襲ぎしより、舍人内記兵庫頭など、相傳へて鍋五郎信成の世となりぬ。年壯き者の癖として老臣の諫言立、どにつけかくにつけていまはしきを、同じ年比の近習の日どなく夜どなきさからし言に、初に左までも思はざりし輿城の所業の、やう／＼恣なるやうにのみ見えてにくさ限なく、いかで除かんと圖りしが、譜代の家臣といひ、忠勤久しき者なれば、其の口實に苦しみしが、遂に明和の末僅なるとより之れを追ひぬ。

輿城は罪ならぬ罪に暇賜はり、身は浪々のたつきなけれど、二君に仕へむとの快からず、高松通淨心寺のほとりに佗しく住まひ、賤しき業を營みたり。事の元を知れる人は、なぞて其の身の罪なき由を御本家守の殿（松平伊豆守）にきこえあげて、再び仕へ玉はぬと、勸むる者多けれど、我等輔佐の重任にありて、其の任を盡さねば、君に忌まれ奉れり、其の罪なしと言ふべからず、されど幸にして君御聰明にましまして殊なる御過おはさぬを、今此等の事を訴へむは、私の爲に君の非を顯すなり、古何某の卿罪なくて勅勘を蒙り、つかさ位を奪はれて草の庵に世を避けたるを、執權の朝臣に知られきとぞ、夫は縉紳雲上の人、我れは凡下の卑賤なれば、た比ぶべくもあらねども、其の志こそ志たはしけれ、若し吾が事の世にまらねば、君は不明と呼ばれやせん、あなかしこ、ゆめ人には語り玉ふなど、再三度に及びけれど、あへてうけ引く色なかりけり、

言葉にこそかくきはやかにいひつれ、日々に乏しくなりゆけば我はかくてもは卒りぬべし、いかで子共等には、よき主とらしてたのしき月日を送らせんと、生ひ行く末をぞたのみける。初、輿城の奥に仕へし程、侯の長臣松澤權右衛門、痛く其の氣概才藻を愛し、兄吉尾門左衛門の孤にて、幼きより我が家に養へりける女の、才氣は男にも劣らず、容貌さへ醜からぬがありしをめあはしたり。

これとの間に子共あまた設けたり、されどたよりとすべきは少くて、二郎と三郎とは生まるゝやがて二ツの指を折りあへでうせぬ、四郎常次郎は父四十二の二ツ子とて、藁の上より他家をつがせぬれば心ざまさかしけれどせんなし。次の佐五郎は才するどく甲斐ありげなるさまなれど、母の慈餘りに深きになれて、よろづ恣に行へば頼もしからず。次は蘭といひ、菊といひて、女子なれば語らひがたきともなるべきやうなし。只うひご左馬太郎のみ、年もやう／＼大人び心ざまさへまめやかにてよく父母に仕へしかば、之れをぞ末の頼とは志たりけり。

此の草想像に出たる者にあらず、悉く本據あり、然れども記詳甚乏しければ詮索最苦しめりき。今引用の書を列記すれば

『家廟遺墨』元祿以後『武鑑』十數種『塵塚談』『新篇武藏風土記稿』『燕石稗話』『燕雜記』『瀧澤氏墓碑』

因にふるす。萩原乙彦編『神史三大家文集』に翁の祖先を甲斐の人なりとせり、されどいふがし。今諸書を取る。

翁は兄弟七人ありし、こは仙臺の藩真葛の題に答ふる書簡中にあり、また二兄三兄の早逝せし、こは深光寺なる瀧澤家累代の墓碑によれり。

第二章 八聲の鶏

第一節 幼き比

紀元二千四百二十七年徳川十一代將軍、俊明院家治公の治世、明和四年丁亥夏六月九日は、文學に志あらん者の記憶すべき日にこそありけれ。わが小説家の泰斗曲亭馬琴翁の産聲は誠に此の曉に深川高松通浄心寺の傍なる武家にきこえそめけり。玉の如き嬰兒の軒端もる旭に射られて微笑めるを見て、あな逞しの子やと叫ぶ父の聲も嬉しげなり。いとし男子二人迄失ひつる上、又の子は生れたる年の凶しとて幼き人にとらせて、乳房淋しき年比をかこち暮し、母の喜は如何ばかりなりけむ。

下部炊女のさいめき、さては同僚下官のいひ傳へき、傳へてのほご言に、一家はさながら幸の雲もてみたされたり。やがておほぢの片名をとり佐五郎と名のらせて月花とていつくしみたり。

依田學海先生の『譯海』には翁の幼字倉藏とあり、今翁の自記『家廟遺墨』の書入による。

健かに生ひ立つ兒を見ては、常に涙の種となれる二人の兄の事も何時とはなしに忘れられて、憂きのみ世にもあらざりけりと喜びあへる程に、あはれ又幸のみもあらざりけり。高き枝風に折らるゝの譬に漏れず。父興臧は讒者の舌にかゝりて二百年來の名家を追はれぬ。そも當時麾下の小家に仕ふる身は祿軽くして費少からず、僅に妻孥を養ひて餘力なければ、自然其の地位を利用し威福を驅りて、民を虐げ賄賂贈遺の利を謀らぬ者稀なりき。

曲亭馬琴肖像





小川顯道著『塵塚談』に、寶曆より文化へかけての渡用人の給料六兩二人扶持より七兩三人扶持に至るを記せり、而も其の妻をば御新造様さよばせ、熨斗目差替大小途用意すべき定なり。其の收入と活計の度さふさはねとかくの如し。こは渡り用人の事なれど譜代にても大差はなきなり。

さはれ興臧は性廉潔にして、あへて民庶を侵さねば、餘れる貯もなかりしを、俄に主家の祿に離れぬれば、財源全く枯れて困厄一時にせまりぬ。

凡高尚なる生活は、其の志想を高むると同じく、あはれ貧しく足らはぬ浪家の生立は、無垢清浄なる幼き者の心をも狭くひがみたるねたみ深きいと卑しき者とはなしけり。

されど生れ得たる文學の才は困難窮厄一切の障碍の外に生ひたちて遂にこよなき途に至りぬ。

翁の曾祖父興也の號を信清軒の翁といひ、深く思を敷島の道によせ、春の朝秋の夕、花の席に樂を歌ひ、月の前に憂をのべし事は前にもえるしつ。祖父にも又佛恩をのべし咏歌あり、父興臧も武士の猛き中にも雅の心ありて、弓矢とる暇に俳諧の發句に心をこめ、折にふれ時につけて思を十七文字にのぶる事を好みたり。安永三年初春兵法發會の日にノシメといふを句毎の終にあきてよめるがあり。

新玉のとし／＼わかし老のうめ。〔燕石雜詩〕

よし巧拙は言はずもあれ、翁は血脈にあきて已に無下の俗人たるまじきを、庭の教は其の才を助けなしてます／＼あやしきものとはなしけり。

初より美しき庭のなでしこの培ツツキのよきに更に美しくなりまさりけり。

母吉尾氏幼きより文よむことを好み、古き冊子物語、今様なる草雙紙淨瑠璃本などよみうかべしが多かりければ、雨の日の徒然ツツクには、裁縫の傍に兄弟を集へて『鉢かつぎ』『鹽屋文正の物語』さては『國性爺合戦』『手習鑑』のおかしき節など物語り、添寝の床の語草には金平の勇力、兎の大手柄、さては鼠の嫁入、桃太郎など種々の昔語をとりいでければ、翁いたく喜び聞きて、やうく冊子物語を好みそめつ。

されば朝に夕に、日に夜に、暇だにあるときは、母の膝につきまつはりて、書をひらきて繪解を請ふ程に、いつか字母四十七字をさとりえて、六ッ七ッの比よりして母の部屋に納めたる物の本ども探りいで、拾ひ讀するやうなりたり。人々之れに驚きしが奇才は夫のみにあらざりけり。翁の兄二人

一人は左馬太郎さて八ッの兄、今一人は常三郎さて二ッの兄なり

早くより俳諧の師、師竹庵法橋吾山

武州越ヶ谷の人なり、俳諧に妙を得たるを以て法橋に叙せられきこそ『物類稱呼』の著者なり

の門に遊びけるが、翁は傍より之れを見ならひて七歳の春一句をなせり、

鶯の初音にねむる座頭かな (少年文庫)

之にぞ父母は呆れはて、學ばでだにかくの如し、あはれよき師もがなど求めける折、八幡宮

一、鳥居の傍黒江町に三井親和の書風を物する筆の師

三井親和は當時の書家なり、最有名にして世の需用一方ならず、篆隸ののりすり字を煙草入女帯などに織り出だし、又浴衣手拭其の他の染ぬき、「親和織」親和染」といひて流行せり。

小柴長雄といふがありと聞きければ、やがて其の人の許にかよはせて生ひ行く先をぞ頼みける。かゝりし程に父興臧、ふと病みつきて打ふしけるが、日をふるまゝに重りゆきて、遂に安永四年彌生廿六日、

深光寺墓碑には十六日とあれど、諸書の多きに據る。

さき句ふ花に先ちて、風のままに散りうせぬ、年五十一、法名便譽頓覺成正居士、なきからをば小石川茗荷谷深光寺に葬りぬ。

貧しくは暮しけれど、猶柱ある家の雨にも風にも傾かでありけるを、あるじうせにし後の瀧澤家やいかに。のこれる吉尾氏の苦やいかに。わが身一ッだにあるを、九ッなる男、七ッと五ッとになる女子のつきまつはるに、力となるは老たる叔父松澤氏と年わかきうひご左馬太郎とのみ。興臧の弟二人あれど共に祿かるく家貧しければ、心ばかりにて頼とはならず、どにつけかくにつけて吉尾氏細ぞわづらひける。並々の者ならむには、涙にくづはれてどかくに惑ひぬべきを、かひくしく取り賄ひし男心こそめでたけれど、人々いひはやしけり。

興臧の弟一人は田原氏、四郎左衛門忠興さて深川邊の武家に仕へき。今一人は兼子氏、新左衛門定興さて御船手組同心なり

まづ傳手をさま〜に求めて、今年十七なる左馬太郎を麾下戸田大學頭に仕へしめ、母子濱町なる邸にうつりぬ。是れより子は直次郎興旨と名のりて、勤仕頗るつとめければ、主君邸内の覺めでたく、やう〜へのぼりて用人となりぬ。母は後々の爲にもと身をいたづきて僅なる賃をえ、

奢をはぶきて之れを貯へしかば、や、朝夕に追はれずなりけり。かゝれば翁も又小柴が許を退き、母の家職を助けてかすかに其の日を送りけるが物の本を好む心はやまず、夙におき夜半にいねて、僅なる暇をもて書買の爲に筆耕し、其の代として書籍を借り、讀みと讀みゆく程に、十二の比に至りて印行の淨瑠璃本の大方はよみはてたり。なほ和漢古今の軍書實録をよめるも多かりけり

初よりして剛愎のさなりし上、流石に頭抑ふべかりし父もうせ、愛には雄心もゆるみ勝なる母のみなるを、愨に和漢の書を涉獵していさゝか文字を知りければ、心いと高うなりて人を人とも思はず、よろづ恣に行へば、母もつひには見放ちてあなまぶとき子や、えこそは人なみ〜の者とはならじなどつぶやきけり、誠になみなみとはならざりけり。深山の奥に炭たく翁、水を被きて鮑とるあま、牛うつ童、里の賤の男、大凡文字を知れる限、老幼男女きそひた〜し曲亭馬琴翁とぞなれりける。

## 第二節 武家奉公

翁や、十二三になりぬ。只もあらせがたしとて、とある武家に仕へさせぬ。

幼けれど卑職に安ずべき翁のさならぬば、主人の懦弱甚しきに忍びがたく、こゝのみ月日の照る事かは、五斗米につながられて徒に腰を庸主に屈むるこそ愚なれ、良禽は木を擇びて巢くふといへるを、などて唐主の下に齷齪せんやとて、房の壁に

木枯に思ひたちけり神の旅

どかきつけて夜にまぎれて逃れいでけり。柄杓一本笠一蓋、心安さは之れなりけりと出でたちけるが、直に兄よりの追人に捕へられてけり。之れより兄の推舉にて戸田家の徒士となり、祿を兄と共にくるやうになりけり。

初よりして文學の方には、才鋭き翁なれば、幼きより人を驚かしたると再三のみならず、みづから字母四十七字を知りえたる、十一二にして讀者數百卷に及びたる、七歳にして俳句を物せる事等は已にいひつ、その十歳の初夏また句あり。

門々のあやめも枯れて蟬の聲

といふ。木枯の句は誠に十四歳のなりけり。戸田家に仕ふるに及びて、いよゝ思を俳諧にこらし、俳文の作につとめ、十五歳の時「吊鶯の辭」あり元より圓熟の妙あらずと雖もなほ年少の筆としては稱へつべし。

櫻庭篁村先生所藏「俳諧古文庫」にあるを引く。

吊鶯辭

馬琴 九十

蔽垣まよへる舊寂たる庭あり。何ツこもふられず鶯來て巢をくふ。旭さすなる朝ナタナ東に向たる巢の窓に頭のさしい  
 たし邊の雛をも守りぬる親鳥の丹情つもりて形生し時々餌を運び是を養ふも日ありてやがて巢を立そこの雛こゝの小木  
 に舎りて初に渺々たる天地を愛す。かしこ小童の徒集りて之を捕へて籠中の鳥さはなせり其母鳥いたく悲ひて庭前に  
 さまよふ時をへて此小鳥遂に死したり。嗚呼あはれむべし。麟の爲には春秋行れ渠か爲には予吊するの辭を作りて曰  
 「鶯く。汝悲死をなげく。汝此辭をきいてたんぬせよ。汝は小鳥の一位にして人其徳を稱す。詩にもいふ繒蠻たる黃鳥丘  
 隅に止る。舞は聖徳を以て天位に止る。虫の舜は素堂の詞汝は鳥の舜なるべし。  
 「鶯く。汝春は四方を眼下に見おろし聲の高きを敬ふ。梅は汝が力にして汝は梅の力なり。  
 「鶯く。讀經して佛法をこそす。されば緋衣も着べきをいかに茶色の毛衣はまた執行の最申なるか。  
 「鶯く。汝よく歌を誦す。所謂古今の歌仙達は汝が徒なる物なるか。  
 「鶯く。汝は六藝に通ずるものにして徒童が手に今空しき體を見る。彼童子をにくまんや。渠も汝を愛する甚しきによつ  
 て終に籠中に汝を亡す。顔回が不幸も豈汝さいはむや。  
 「鶯く。汝が悲死を嘆く。汝此辭をきいてたんぬせよ。

又からうたを以述古風

庭鶯乍入衣 母鳥去如飛 童子將腐穢 慈嘆獨未歸

立つとなしに年はくれて、こゝには二年三年を送りぬ。その間に博く和漢古今の書を繙き、聖經  
 諸子百家の書より源氏狹衣諸隨筆等をも涉獵したり、その中に心になへる文字を擇び、諱を  
 興邦、字を子翼とつけ、鳥水と號し、亭々亭といひ、馬琴といひ狂名をば山梁貫淵といひけり。

曲亭といふ號は此の後寛政の比に至りてつけしなるべし、其の故は翁は精細なる性さて苟もわが名號を定めたる者は必ず記  
 録にのせざるとなし。天明七年三月書寫、翁の編『俳諧古文庫』列傳の内に

撰者馬琴者武州江戸産也嘗號亭々亭名興邦字子翼又號鳥水好風雅而著俳諧古文庫  
 とあり。寛政三年出版『二分狂言』の發端に

茲にてうくわ坊馬琴といふ者あり云云

とあるにても、曲亭と馬琴と其の成立の時を異にせるや明けし。又、にて、うくわとあるは後年國史舊録奇文諸雜書を繙く時  
 に用ひたる離齋さかく字なり。

或人曰はく翁初狂名を曲輪の馬琴といひしが、之れを改めて曲亭馬琴とはなせるなりと。

又或人は「曲馬に乗て琴を彈す」といふにされりといへり。されど曲亭といひ、馬琴といふ、互に出所を異にして、名け  
 し折も異なり。翁は自ら其の名の出所を説きて曰はく、「曲亭は『漢書』陳鴻傳及『大明一統志』に見えたる山の名なり、巴  
 陵曲亭の陽にたのしむ」といふとあり、馬琴は『十訓抄』野相公の句に「才馬卿に非ずして琴をひくともあたはト」とある  
 にされりといへり。

此のころ都には先帝後桃園天皇崩御あり、新帝光格天皇即位ありて天明と改元あり。おほけなき君の御め  
 ぐみには御世は太平なるべきに世の中穩ならず。其の七月江戸に洪水あり、新大橋永代橋之れが  
 爲にくづれ、翌年七月又江戸に大震あり。三年の同じ比には信濃なる淺間山やけて其の灰江戸に  
 ふりしきりぬ。猶天變地妖はまばらにして火災風難相つぎて起りき。

翌くる天明四年三月、大城に變あり、新御番佐野政言若年寄田沼意知を城中に傷けり。其の五  
 月天下飢饉にて人々如何がはせんと惑へるもありしが、君の祿に衣食せる身は思の外に心安く、

憂きにつけ十七文字をのべ、驚くにつけ三十一文字をつらねて、するともなく日をくらしぬ。其の年八月興旨は其の主下總守忠誨大學頭の子甲府勤番の支配頭となりしに従ひてかしこに移るべきとなりぬ。孝心深きものなれば、母の此の比は病勝なるを獨殘しおかんは心元なしとて、高井家に仕へたる弟興春によるづ母の事たのみきこえて、いでたちけり。之れより後定便毎に江戸甲府の消息たえず。興旨母の徒然つれづれを慰めんとて甲府へ赴ける道の記一卷かきつゝりて送りき。なほ文書中にもなぐさめの言葉多し。母のかへしにもいと喜べる様多く見ゆ。十月廿七日母よりの書中に

もはや朝夕にはこまりなく候まゝ何も遣し候には及不申事御申越被成いり許く安堵致しと私にはたべ物不自由なくたべ候やう御申被成忝存上候云云

などあり。十一月廿七日のには

さて又そもと殿御出立の後道中の空腹になきやうと影膳致し其後もそもと様出生の祝には影膳していはあり甲子にあげ候菓子少々ながら遣し候云云

とあるなど、えいはぬ愛情其の間に見えたり。かゝる和氣緩鬪たる間にありては翁の不平も出づるに所なく、勤仕の暇母を慰め其の暇には専ら和漢の書にふけりて、力を學術の蓄積につくしけり。

されど世の中はかくのみ幸ツキひゆく者にはあらざりけり。あくる年二月の比より母吉尾氏ふと打ふ

して枕やうく重くなりぬ。折柄興春は高井土州に仕へてありけるが、母病にふしぬときくに心安からず思ひ、せめては兄歸宅の折までと主家を辭し、濱町に至り、翁や妹等を勵ましたて看病怠らざりければ、たえなむとせし玉の緒もからうじてつなぎとめけり。

其の四月には興旨甲斐よりかへりぬ。再び逢はむと思ひつるに、母も喜び家の者心強く思ひなし、が病はかくも癒えず、水無月の末つかた、夕暮つぐる鐘に誘はれ男魂甲斐くしかりしおうなも、再びさめぬ眠につきぬ。年四十八歳なり。

父のみまかり玉ひし程はまだ物心をよくも覺えず母の残りてさへおはせしかば、悲しきうちにも慰む方ありしを、せめては反哺の鳥にならひて是れよりは身をくだきてと思ひし事は九甲斐なくなりぬる、かなしくもかなしかりけりと、兄弟相抱いてなげとすべなし。やがて法名海譽知覺慧正大姉とつけからをば源光寺なる興臧が傍に葬りぬ。

吉尾氏名は門子、細川家の家士、吉尾門左衛門の女なりき。早くより父に後れ、叔父松澤權左衛門に養はれて、棚倉の侯の邸にありしが、興門其の藩に遊べる比、之れにとつきつ。夫に江戸に従ひてはまめやかに舅姑に仕へ、寡となりてよりも身を慎み貧困窮乏の百難を排して幼き子供を人となし、十年が程少しもうまず、すべてのさま男兒も耻ずべきばかりなりしが、幾年月の心づかひ積りくゝて病をなしたれば、薬石遂に其の効を奏せざりけり。初やもめとなりぬる比は、浪々四五年の後にして子供さへ數多殘されつれば、朝夕のたつきにも

心置かれし程なりし其の中にありても、子等が爲に身の勞を厭はずして業に勵み、樂を行末に求めて約しき年月を経たりければ、黄金二十餘兩、衣類も身の程には過ぎて貯へもてりけるを、興旨遺言にまかせて人々への紀念とはなしけり。

『家廟遺囑』によるに直次郎即家督興旨へは金拾兩。清次郎即二男興春へは金三兩。佐七郎即翁（佐五郎）外にあれど、いかに何故か七とあり）へも金三兩、おらんお菊へは金三兩づゝに衣類數點、木挽町伯母様即門子の實姉へは金二分、松井内室まで直次郎同僚の妻へ金一分配分したり。又關へやりたる衣類は花色縮緬裾模様小袖一、木目縮緬袴一、緋縮緬小袖一、花色縮緬小紋むく小袖一、黒鷹紗綾紋付小袖一、縮紋付無垢小袖一、飛八丈小袖一、羽二重白無垢一、黒縞子帯一筋、花色モウル帯一筋、縮紋付袴一、媚茶縮緬紋付單物一。菊へのは紺桔梗裾模様小袖一、媚茶裾模様小袖一、鶯色龍紋袴一、緋縮緬一、反裏縮共添、小紋縮紋付小袖一、羽二重白無垢一、黒手モウル帯一筋、丹後縮袴一、等なり。貧家にしては多すぎる程なり。

此の他にも懇意なるものなごへ送りたるが五六點あり

兄弟多き中にもわけて掌の珠とめでられつる身とて、翁の悲はいふばかりなく、氣も心も亂れはてぬるやうなりけり。何時迄生きむとてか斯くはかなき世の業を勉めけん、我れながらいと思しかりき、いでさらば是れよりは心のまゝに世を経なんと身をもちくづして行を慎しませ、兄の諭にも従はねば遂に主家を逐はれて流浪の身となりぬ。されど母の遺金三兩は永き遊興の費には足らざりけり。なきが意見の總仕舞といふ俚諺にもれで、せん方なしに又山の手なるとある武家に仕へ、樂しからぬ年をすぐしたり。

### 第三節 流浪

天明も六年となり、翁は二十歳となりぬ。

今年千支丙午にして元日さへ同じ千支なりければ、事やあらむと人々思ひし程に、午の時より日蝕あり、未に至りて皆虧となり、あら玉の年たちかへる初より世の中聞となりければ、理を知らぬ人は騒ぎ惑ふ事大方ならず。其の夜より風烈しく、出火日毎に三、四に及び、入々其の堵に安んぜず。又此の比より雷にもあらぬ響天にありて、或は東、或は西、晝夜四方を定めずきこゆるを、こは天鼓とて凶作の兆なりなどいひのゝしる程に、其の三月十五日氣候遽に寒冷にして大雪櫻花の上にふりけり、あるまじき事なれば、今や天地のくつがへるとばかり恐れあへりけり、之れよりして風ふく事ますます烈しく、出火彌々まばら也。四月半に至りてや、穩になりぬれば、人々といきつく程に、今度は又五月半より霖雨少しの晴間なく、七月十二日夜より大雨盆を傾くるより烈しく、十四日より十六日に至りて近代稀なる大洪水ありけり。本所深川いへば更なり、下谷淺草外神田まで浸されぬ所まれなり。只呆れにあきれたる心も未だ静まらぬ八月四日の曉に兄興春みまかりぬ、享年二十二歳なり。

興春諱は廣厚、字は仁藝、幼字常三郎、興威の四郎なり。四十二の二ツ子なりければ幼にして鈴木氏を冒しぬ。

母吉尾氏の姉も木挽町柳生家の臣鈴木三太夫半後に嫁しぬ。興春即此の氏を冒しなり。

十四歳の時高田氏をつぎ、清次郎といひしが、十八才にして麾下下村家仕へき。天明四年二十

歳の時故ありて養家を辭し蒔田家を退き、更に高井土佐守に仕ふ。兄甲府に赴くに及びて母の許に至りて徒然を慰め、病を看どりたり、後水谷信濃守に仕へて赤坂にあり、稱を初右衛門と改めたり。性至孝機才に富めり。狂歌は蜀山の流をくみて縁原近勝といひ、俳諧は師竹庵吾山の門に遊びて、初己克亭好々といひ

好々庵己克もいふ其生年西なればなり

後好々を改めて鷄忠といひき。翁とは其の年二歳の差なれば互に相勵ましたる他山の石なりけり。

東岡舍羅文興旨 俳名 亭々亭馬琴翁當時 俳名 の之れをかなしめる俳文のせて『俳諧古文庫』にあり。友愛の情紙面にあふれたり。

打ちつゝく家のなやみに涙せきあへぬのみならず。世の中にも安からぬ事多かりけり、年々の飢饉凶作に天變地妖さへ頻なりければ、世の中やうく騒ぎ立ちなんどせし程、九月八日といふに將軍家薨去あり、やがて一橋治済の御子の西丸にあはしけるが名は 家齊 西丸に入り玉ひぬ。思ひもまうけぬ事とて、人々忙然としてある程に年もくれぬ。

今年こそ將軍宣下、さては萬のめでたき事にあはめど喜びしを、年の始より番頭狼藉の事ありて又もや眉うちひそむるうち、米價やうく貴くなりゆきて、五月大坂に暴民起こりて富家米商をかすめ、近國之れが爲に動搖せり。

流石に國遠ければ川向なる火と思ひしに、其の月の末つかた江戸にも起こりて狂暴諸國のにも増り、且出沒自在にして官の追捕も空しく騷擾をますのみなれば、市民安き心もなく、慶安の由井正雪再び生れたるらんなどのしりあへり。僅なれども君祿をはむ身は、かゝる中にも飢えもせずなか／＼に米價貴き爲に利をえければ今更のやうに君のめぐみの思ひえられて、勤仕に心を用ひたりけり。

『兎園小説』第十一集に翁當時の事を記して曰はく

予はこの市中の艱難にあはず。當時某候に仕へて切米の外月俸つかに三口をうけたり。其月俸の内三斗の米を月々に售る毎に價のます事漸々にして五六月に至りては虫の巢にてかゝりたる陳米をのみわたされしにその玄米三斗の價金壹兩三分になりたり。されば出入と唱ふる町人等月俸のわたる日に未明より宿所へ來て御扶持米を拂はせ給はゞ某に給はり候へ。餘人より價よく申受候はんなどいふもの多くて果は是彼せりあひつゝ言すまひを起すもありけり。僅の月俸をすらかくの如し。大祿の人々はさぞ有りぬべき事ながらよき夢は又覺むるも早きや。是によりて永く富みたりといふ人も見ざりき。云云

さて喉元過ぐれば熱を忘るゝの諺は誤らざりけり。學才ありて高慢なる青年のいかで永く此の卑職に安ずべき。よき伯樂もがなど求むれどさる眼あるものなければ、忽仕へ忽去り、こゝに三月かしこに一月仕へめぐりて志を得ず、遂に思を仕官に絶ち、嘗ていさゝか醫書を讀めりしを以ていざさらば醫藥の興を極めて濟世の大仁をなすべしとて、當時小川町に住める幕府の御醫師山本宗洪

山本宗洪は小石川養生所御醫師祿高二百石なり。

といへるに身をよせて、名を宗仙とよばれき。兄興春其の立志を嘉して一句をもて祝して曰はく  
百草の頭かずなりふきのとう

然るに新主人宗洪は痛く俳諧を好みて俳書あまたもてりければ、翁は暇をぬすみて之れをよみ只  
こなたのみ耽りて心を方技に用ひざれば、幾何もなくてこゝをも追はれき。

之れより東奔西走、或は龜田、鵬齋の従僕となりて儒道を修めんとし、或は石川、五老をどひて狂歌  
を學ばんとつとめ、又は橋千蔭の門を叩きて其の書牋をえんとしたれど自尊にしてみづからはか  
らぬ性なれば一も果たすと能はず。深川は生れたる所とて流石に舊故多ければとて、仲町のほと  
りにさゝやかなる家をかかりて書買の爲に筆耕してかすかなる月日を送りけり。

流浪の間芝の書肆甘泉堂へも寄寓せしものあり只誠關根翁はいはれたりき。又柴野彦助の門に遊びたりきとの説『戯作者  
撰集』に見えたり。

かく事志げく而も貧しく苦しめる間にありて翁の文學上の最初の事業として『俳諧古文庫』とい  
ふ書編せられたり。こは其の師々竹庵を初め兄羅文雞忠其の他同門五七輩と自分との作なる俳文  
をあつめて上下二巻となせるなりけり。當時出版結構ありし如くなれど、資なき爲か果たさず。  
後に其の文の拙なりしを耻ぢ深く篋底に秘めおきたりけり。是れ明七年春彌生、翁二十一歳の時  
なり。

箕村聖庭先生曰はく此の春又洒落本『猫ぢやらし』を出版す。實に翁が著述三百種中の處女卷たり。作者の名は正徳、馬鹿輔

とありて、曲亭馬琴門人くわいらいしの序あれど、翁の作たるや疑なし。後年翁の讀本行はれて曲亭馬琴の名四海のうちに  
轟き、最真面目なる勸懲作家として知らるゝに及びて深く此の作ありしを悔い、書肆を探りて之れを買入れ煙となして物議  
をふせぎつとぞ、とて翁の著述たる證として

一くわいらいしは翁の變名たる事

二序の書牋と本文のと共に同年翁自書寫せし『俳諧古文庫』の書牋と同一事

三他に馬鹿輔の作なければ變名の作たるべき事

四翁少時には淫靡の所行あり。かばかりの事は書くに憚からぬさまなりし事

五本文の場所殊に翁の生地深川(?)なる事

六他人ならば名もなき曲亭馬琴門人くわいらいしに序を頼むべきやうなき事

等を擧げて論せられたり。尙翁の處女作、即天明の作なりとの證としては

一叙に未の初春とある事

次の未は寛正十一年にて樂翁侯執政中にて洒落本の禁嚴しき時あれば此時にはあらざること

二寛正に京傳罰せられしより翁も恐れて行をつしめれば、寛正後かゝる著書あるべきやうなき事

三天明七年の『俳諧古文庫』の文字と此の書の文字と習熟の度殆ど相若けりとの事

等を擧げられたり。されど疑はしきか多ければとす。まづ此の書の出版天明七年ならしと思はるゝふしは

一天明七年には翁の名號に曲亭といふ者なし(本誌本傳參照)門人くわいらいしの號も寛政五年版増補『伊賀越物語』に初めて  
見ゆ。

二本書の畫工に子嬰といふあり。寛政十一年版『世説口緇屋雜形』の畫をかけるも同人なり畫を托する事前後僅に二書にし



て其の間十二年を隔てんとあるまじき事なれば此の書も寛政十一年比にはあらず。

三寛政に洒落本禁ぜられたり雖も尙竊には著作發見せる多かりしやうなり。寛政十三年（改元享和）板の一九作『野良の玉子』といふを見しに、男色の事をかける洒落本にして、『猫ぢやらし』と同一かりき。

四其の名いまだ世に知られぬ當時にありては曲亭馬琴の名何にかせん。まして其の門人の序文著書板元にとりて利する所なきなり。こは寛政後翁の名聲轟ける折のなるべし。

五翁の讀本は皆勤懇の意を主せしむ文化前の草紙類には淫靡なるが多し。寛政後はかゝる作あるべくもあらずさはいか

六『八犬傳』回外刺筆、『物之本江戸作者部類』こは曲亭翁の編なりと葦村先生もいはれ我れもまか思へり、其の他によれば、翁の處女作は寛政三年出版の『二分狂言』たりとの事實らしく覺ゆ。

等なり。且や斷じて翁の作なりとするも大早計にはあらずか。寛政の半より曲亭馬琴の名目を追うて高かりければ、營利を計りてひそかに其の名を冒し、もありけり。されば享和四年（改元文化）出版『敵打二人長兵衛』の序の末に正めい、簞笠、隠居と押印せるあり。かゝれば曲亭馬琴著とあらんとも直には信ずべからぬを、之れを只門人の（よし誠は其の人なりとも）名にて一片の叙を添へしのみなれば、之れを翁の作といふは斷定に急なりとやいはん。

### 第三章 志のゝめ

#### 第一節 山東庵京傳

元寛偃武の後太平二百年の化、著く文學の上にあらはれ、寛政より天保の世に極めてはやかに

飾りなされたり。それを飾れる文人詞客のうち錚々たりしものは山東庵京傳なり。

春町去り明誠堂老い歸橋已に筆を收め三和全交も家職にかられて暇あらざりし時に當たり、京傳年紀正に三十、文思やうやく熟し筆硯方に盛なる上、家には賢妻老僕ありて内顧の憂なく且世評彌高きに誘はれて、益々奇趣をこらし妙文を綴りて出版年々にましゆきければ戯作の名譽は殆ど京傳一人に歸しぬ。

是時にあたり曲亭馬琴は流浪幾年志を得ず、深川仲町の裏屋にかくれ居しが、京傳の名聲のかまびすしきをきいて思へらく、我れ貧しき家に生れながら自ら標致すること高く人の奴となるを甘ぜざれば官に仕ふる事能はず。一圃の土なく一緡の錢なければ耕すに由なく商ふに資なし。只幼きより心を文學にとめ書を誦すると幾千百卷、殊に小説野史戯曲歌俳の書はうかふ所少からず、玉を秘篋に藏めむこそ可惜しけれ。いでやさる人の許に遊びて高名の下にわが名をなさばやと。

#### 第二節 處女作

寛政二年秋一日翁酒一樽を束脩となし銀座二丁目なる山東庵をおとつれ、切りに門人たらむを請ひぬ。京傳懇に著作の家業とすまじき物なる由をのべ、さていふやう、大凡冊子物語は世の好事の輩、人の作れるをよく讀みてさて己が才もて傲ふべきのみ、師として教へ弟子となり習ふべき事もなし、ましてや學識なく才幹に乏しき身の何を恃みてか人の師と呼ばれん。さはれ同好の士見る所ありて訪ひ玉ひしをむげに辭みかへさんは禮にもかけ本意にもあらぬを、どかく友と

も見玉ひて暇ある折々は音づれて、もし作れる文などおはさば示し玉へ、御志のうれしきに殊に深川よりときけば懐しさの増すを今日一日は身の上などかたりくらし玉へなどいひつゝ酒肴を出してもてなし懇なり。さて互にうちくつろぎて其昔を語らふ程に、おのれは浄心寺の傍なる武家に生れ種々の不幸にあひ濱町芝赤坂の邊にさまよひ、つひに昔こひしくて今の所にかへりぬと翁いふ、さては浄心寺の邊とや、我れは木場町なる商家に生れたれば相距る事僅に一二町、年さへ多くもたがはねば竹馬讀書の友たるべかりしを、知らずして共に他所にうつり二十餘年を経て相見しこそ、かへすも奇縁なりけれど京傳いたく喜びて棄てがたき思あり。翁も其の懇なる志に感じまば、山東庵をたゝきて方につきて語らひければ、つひには互に兄弟の思をなしけり。

此の冬深川永代寺にて京都大佛内辨財天の開扉あり、群集を誘ふ興行多き中に、新に京より下れる壬生狂言といふもの専ら行はれて老若男女先を争ひて見ぬを耻づる有様なりければ、いでや此機を誤たず時好に投じて世評を得んと趣を此の狂言によせて『二十日餘 盡用而二分狂言』といふ黄表紙二冊をつらりて閱を京傳にこふ、京傳之れを見ていたく稱し、我れに賜へ、序を書きて書買に與へ、わが息の責を塞がんとて、戯號を大榮山人と命じつ。こは其の僑居永代寺の傍にありて同寺の山號大榮山といへばなりけり。心にもあらぬ名號を署せんこと快からず思ひながら、吾が名を揚げんたよりには其の人の名のあ

らではと思へば流石にすげなくもいなみがたく、翌春芝神前和泉屋市兵衛より出版の同書には京傳の序はなかりしが名は京傳門人大榮山人と記したりけり。ねらひしのは幸にもよく中たりけり。虎の尾につく狐ならねど、昇る旭の京傳がをしへごといふに入々まづもてはやし、挿畫の名工豊國なるにさへ世評はよきを、殊に壬生狂言の流行は去年より此の春に引つゞきて衰へず、幫間藝妓の輩争ひ學びて酒席の興とせる程なりければ只管其の時にかなへるをぞめで喜びてたゞへける。

學海依田先生の『譚海』には京傳此書を見て驚き歎て今より二三十年をへば世人また老夫を説かト云云といへり。説かれたれごまご左程巧なるものにはあらず。文の生硬なるは更にもいはず。其趣向支離滅裂其筋道紛亂雜痴人の夢ごは、る物にやご覺しき程之。其外題の如き『戀飛脚大和往來』の一句をとりたれご之に關せる本文はなく只二分壬生と通はせたるのみ。かゝる類のよく行はれたるを見れば當時の著作は甚難からざりしなり。世に此書の署名を證まして翁を京傳の門人とせし京傳已に著翁の教ふべからぬを知りて辭したる事はつとめて翁の身分を卑しくせんしたる京山の『蜘蛛の糸巻』に徴してすら明なり。且翁の性質人の門下に屈して甘するものにあらず。但此署名につききは墓村鑿庭先生は一時の戯につけたるなりと説かるれご(雜誌『史海』参照)思ふに高名をかりてわが名をなさんの方便に出でたるならんか。翁晩年の頑直に似ず、當時の行爲には機智にさめる事多し。世には又後年曲亭馬琴の名聲やうく高くなりしより京傳門人たりし事を人に知られんを耻ぢ廣く書買を扱ひて此書を求め悉烟さなしぬと傳ふれご甚いぶかし。京傳門人の署名あるは『花春風道行』といふ物もある由『蜘蛛の糸巻』にいへり。(但此書は大方誤ならん)且此著ありし事は自著『物之本江戸作者部類』『警傳毛記』『八犬傳』『回外剩筆』其他の著作に記せり。又墨川亭雪庵著『戯作者撰集』活東子の『神史六家撰』等に翁の直話なりて記せり。されば左迄苦心して此書を焼く

べき必要を見出でぬなり。

當時翁の目的は大小説家にはあらで俳諧師たりし如し。此書の開巻まつ筆を芭蕉の句に起して「物言へば唇寒し秋の風」は實に爾り云云と序文の始にかき本文には

茲にてうくわ坊馬琴といふ者あり。世は桑の杖折やすきをいさひ風の身は竹簪に似たる哉と行脚の志願にして芭蕉庵の舊跡を慕ひ深川八幡へ參詣して閨女櫻も今は名のみ昔をまのびてそこを眺め歩行き猶俳道を祈らむと云云

此の著少しく行はれければ、何とはなしにうちゑまれて只管文筆にふけらんとするを京傳論していふやう、著述は元好事の業にて昔より今に至るまでもて生業とせしものなし、其の日々を追はれては學識文才も用ふるに所なかるべければ本業を定めさて著述まれ何まれして慰み玉といふと戀なれば、翁もさこそと思ひなりてさて何をか業とはせん、仕官は快からぬ所、農耕商賈はたえうせず聊書をばよみたれど獨學の事なれば人の師となりて經義道德を説かんと耻かし、只易經は幼きより好み讀みて少しく其の旨を悟り、卜筮占考の方書も軒端をうかへり、中たるも八卦中たらずば其の時職をかへんのみ、是なりと云うなづきて思ふ由を京傳につげ、神奈川にはまゐるべもあればまばしはそこにて世を送らんとて、出でたちたり。

天地乾坤掌中にありと自許せる者も、猶其の身にかゝるとは知り難しとや。たづね來し其の人は他にうつりつとてあらねば、頼む木の下雨もりし心地せしが、幸にもこゝは東海道のうまやぢにて人のゆきかひまげく殊に青樓軒をならべたれば迷ふまじきに迷ひ、疑ふまじきに疑ふ嫖客遊女

の輩判断を請ふ者日に多し。思の外の事に止まる事五七十日に及びしが、年わかき者かゝる界に獨くらせば如何なる事の起こりけん、やがてはふくの様に江戸にかへりぬ。

まつ人もなき裏屋なれど、流石にわが宿と思へば道の急がれて晝過ぐる比至りつきぬ。

思ひきや、いぬる九月四日の夜津浪はげしく寄せたりとて家こそは初のみに残れ、壁落ち席朽ちて僅ありし家財調度は影もなく、隣れる家々も大方は同じさまなりけり。見る目も凄じくて龍の宮よりかへりつる浦島の子の昔覺えて、かゝらんと知らましかばちどの貯は残すべかりしを悔ゆれど甲斐なし。折柄兄臺右衛門（直次郎與旨の後の名なり。主の諱を避けて改む。）は戸田家を辭し、新主君山口勘兵衛直良に従ひて御城代引渡の爲大坂にあれば行きて謀らふべき術もなし。今は全く足なき蟹の如しとて山東庵をどひて嘆きければ、わが方にも圖らぬ珍事ありて慰み兼ねし折なればまばし留まりて雜事を助け玉へといはるゝにいと嬉しく、今年をば京傳の許に暮しぬ。

### 第三節 出版法

あらしの後の月影さやかに、雪のつとめてひかげ麗なるたどへ、慶元に干戈やみてより東照公専ら心を文教によせ給ひ常憲公はた奨學の政にいそしみ給ひければ、世はやう／＼文筆を以て太平の餘澤を樂しむ者多く、出版年々に彌まし來ぬるは殊更に言ふべくもあらず。

されば其につきての法令も屢々出で、制禁又嚴なりけれど、志士國を憂ふる餘り筆を走らして忌

諱にふれ、愚夫若らず、痴態を記して罰せらるゝ者少からず、まして人の利につくは蟻の甘きを加ふが如く鐵の磁石に従ふに似て、法いづれば法をくわり禁發せらるれば禁をぬけ、或は異説を布きて世を惑はし、或は淫猥を舒べて俗を亂り、以て營利を謀る者多し。

寛文六年兵學家浪士山鹿甚吾左衛門高裕、『聖教要録』を著して痛く朱子派を嘲りたる爲、配流十年に處せられたり。

延寶元年五月には令を板木師書買に下して、官の事は勿論、諸人の妨となるべきこと、其の他奇怪の事を上木せば見付次第吟味の上嚴刑に行ふべしといひ、猶都て出板は兩番所兩町奉の指圖を請ふべしと定められたり。

其の後天和二年三月浪士筑紫團右衛門といふ者奇怪の流言をなし、無稽の處方を傳へたりとて、江戸中引渡の上斬罪に處せられたり。

此事元祿七年三月十一日の條にもあり。孰是孰非は知らず、雖一方は誤なるべし。耻叟内藤先生『徳川十五代史』による。

貞享元年十一月又令して

一町中ニテムサトシタル小歌流行候事勿論當座ノカハリタル事致板行賣候者有之候家主致吟味何方ニテモ左様ノ者一切板行仕間敷候尤辻橋ニテ賣候者有之候ハ、其町ニテ相改捕へ候テ番所へ可申來候穿鑿ノ上賣候者ハ不及申板行致候者急度可申付候近日改ニ相廻シ候間旨相心得（此令文も同十五代史に元祿十一ベキ者也。年二月二十二日の條にあり。）

といひて異説の流言を禁ぜられたり。されど違法の者はありて元祿七年左の令あり。

- |         |       |      |
|---------|-------|------|
| 一書物作り候者 | 本町一丁目 | 平三郎  |
| 一板行仕り候者 | 通油町   | 甚九郎  |
| 一書物賣り候者 | 通旅龍町  | 三左衛門 |
| 一板木賣り候者 | 神田鍋町  | 仁兵衛  |
- 右之者共頃傾城町之隠其外草摺引と申ス書物作り候段不届ニ付四人共牢舎被仰付之書物并板木者奉行所へ取上之

元祿七年戊正月廿三日

かくて同じき十三年新に書物問屋繪雙紙問屋の組合を設け、月行事を定め、新板の書籍類は相互に検査し、猶舊板の院本、番付赤本の類も、檢閲の印をつくべきに定められたり。

同十六年二月又令して當世の事を小歌に作り、又は板行して賣る事を禁じ、又堺町木挽町の芝居にても近代の事をなぞらへ作るを禁ぜられたり。是は此の比赤穂浪士復讐の事あり、人々争ひて此れに關したる流言などしたりし故なり。

さても猶密には法を犯すものありければ、享保九年令あり禁制ますく、嚴になりぬ。

一自今新板書物之儀儒書佛書神書醫書歌書都而書物類其筋一通之事者格別、猥成儀異説等を取交へ作出候儀堅可爲無用事

一只今迄有來候板行之内好色本之類は風俗之爲不宜儀に候間段々相改絶可仕事  
一人々之家系先祖の事などを彼是相違の儀共新作之書物に書顯し世上致流布候儀有之候自今御  
停止に候若右之類有之子孫より出訴候に於ては急度御吟味可有之筈に候事

一何書物によらず此以後新版之物作者并に板元之實名奥書に爲致可申事  
一權現様之御儀者勿論總而御當家之御事版行書本自今無用可仕候無據子細有之者奉行所へ訴出  
差圖を請可申候事

右之趣を以て自今新作之書物出候共途吟味可致商賣候若右定に背候者有之者奉行所へ訴出候數年  
を經相知れ候者其版元問屋共急度可申付候依仲間致吟味違犯無之様相心得候已上

享保七寅年

山中出雲守

大岡越前守

十一月二十一日

之れより法を犯すもの稍々とだえしが、寶曆八年淺草の講談師馬島文耕、不稽の説を寫本として  
世に布きたるを以て獄門に處せられたり。

寛政元年石部琴好の著『黑白水鏡』は佐野善左衛門政言宿怨ありて田沼山城守意知を殿中に傷け  
たる趣を記したれば、公邊の内秘を暴露せりとて、著者は江戸拂を命ぜられ、畫工政演過料若干  
を科せられたり。

元祿のむかし、京師に西鶴輩あり。遊蕩の書を著して世に用ひられしが、其の風又江戸にうつり

て明和中丹波屋利兵衛洒落本『遊子放言』を綴りて淫猥の筆を弄せしより、其の流行甚しく、蓬萊  
山人、唐來三和相ついで起こり、京傳、萬象亭等に至り、淫風漸く盛なりしが白河侯老中となりて  
より法規大に正しく制禁また嚴しかりければ、是等淫猥の書は漸く將に其の跡を絶たんとせり。  
されば嫖客遊子は竊にあきたらぬ思をなして、せめては好著一二編もがなと望みあへり。利にさ  
どき書買葛屋重三郎は此の機あくべからずとて切に京傳をそのかし、遂に『青樓畫の世界錦迺  
裏』『仕掛文庫』『娼妓絹節』の三書を綴らせ、之れに教訓讀本と冠らして寛政三年春三月賣り出  
だしぬ。其の書の趣向姓氏地名等は鎌倉の事としたれど誠は其比の風俗をうつし吉原深川の青樓  
の事を京傳の例の妙筆もて綴りなしたるなれば、粹客通士と稱ふる者よみてめで喜ばぬはなく、  
流石洒落本起りて以來第一たり。

是等の事世に聞こえ渡りければ其六月町奉行初鹿野河内守關係の輩を召いだし種々糾問あり。利  
に迷ひて禁令を犯し剩へ教訓讀本と冠して上を欺き奉れる罪輕からずとて處罰せられたり。

翁は此事いまだ起らぬ程神奈川に至り、そこにまばしを暮らしければ江戸にかゝる事ありつとは  
まらず、家財を失ひてせん方なさに憐を京傳に求めけるを、よき折柄なりとて其の家にとめられ  
何くれの雜事とりまかなひけり。

初冬に至りてぞからくして此の咎は解かれける。  
京傳性老實なりければ、痛く此の度の過を悔い、書買の求たどへいかに強くとも、我がとる所堅

くして筆を取らずばかりる事もあらざりけんを、先には人の爲に挿書を物して罪せられ、今又僅なる利に迷ひて禁を犯し、こそ我れながらおどましかりけれ。いでや今よりは筆硯を洗ひ、几卓を拭ひ、せめては婦幼をだに教へさとして再度の耻を雪がんと思ひ定めたり。

艶史情話こそ京傳の得意なれど、教訓の書には筆なれず、日比遅筆なる上此此の疲勞もいまだいえず。殊に年内餘す所わづかに七旬のみなれば數多の著述かなふべくもあらず。

書肆等其の苦を知れども、各々利を思ふ心より先を争ひとひ來りて明春出板の稿本を求めて、なりがたき由、再び三度辭めども猶さとりも請ふ事切なり。流石に従來の交誼もありて一家に與へ、一家に辭まんともえせず、竊に翁をかたらひて代作せさせ辛くして其の數に充てけり。

翌春出板京傳が作四種の内『龍宮羶鉢之木』(二冊物葛重板、重政畫趣向は京傳、文は馬琴代作)『實語教幼稚講釋』(三冊物同畫、趣向書入共馬琴代作なり)など代作なれば馬琴の名を著さず書買へも秘しければ是を知るもの稀なり(當稿は京傳自ら書きたり) (『作者部類』の本文)

初より鄭重懇切なる京傳の性なるをかゝるとありければもてなしいやあつく、是れより食客をもてまたず、萬のかたらひ敵とはしけり。

翁も此の恩に感じ、其の爲人を慕ひなるにつけ、京傳その放蕩遊逸なりしを悔い、自ら戒むるを見我れも昨日迄の非を知りぬと之れより行を改めて足を淨きたる里にふまず、心を艶なる花によせず、まめやかに身をもてなしけり。

『曲亭雜記』に載せたる「吾佛記」の一節に、解不肯雖年二十五の時より志を改めて行狀を慎みつ云云あり。解は翁が此後に定めたる實名なり。

#### 第四節 葛屋重三郎

日本橋通油町に住みし耕書堂葛屋重三郎といふ書買は姓喜多川、名は柯理、本姓丸山氏、狂名を葛の唐丸といへり。初新吉原五十間道とかいふにありて細見といふ小本齋げりしが、天明の比今の所に丸屋といふ地本問屋の見世庫奥庫のあきたるありしを購ひえてうつり住みぬ。頗る世才に富みて俠氣さへありければ文才ある青年シカバトの遊のためなどに身を過り進みもかね退きもえせで路の傍に迷はんとせるなど救ひとり、家に養ひて其の所を得させたるが多く、その人の世に名高くなりぬるはた少からざりけり。

頓才機智古今に比なく狂歌としいへば必ず其名の伴はれて田老賤婦にまで知られたる蜀山人太田南畝も誠は此の葛蔭に生ひたちしなりといふ。(?)卓識時流に阿らず、筆を俳優劇場以外にたて悠に流風俗を寫して浮世繪に一新面目を開きたる歌麿も此の家に人となりて喜多川の氏をさへをかしたり。此の他文人墨客いへば更なり、畫家彫工筆耕等此庇により名をなせる者いと多く耕書堂はた是等の人によりて著名の士に交誼多く其の名いやましに高くきこえければ従ひて佳作多くこゝより出で、その行はるゝとも他にこえたり。

此の重三郎かの京傳一件にて上にもいへる如く咎を蒙りけれども深くは畏れず、猶稿本を高名の

士に請ひえて出板初にもいやましければ、店もやうやうに賑ひましけり。

時に重三郎思ふやう、我れ貧しきに起こりて書林も多きにかく迄になれる事、元天運と雖もかつて養へりし人々の今の世にもてはやさるゝが故なめり、されば猶一人二人を得て後の幸となさまほしと志す程に、翁の山東庵にかゝり居る由殊に此の春行はれたる草紙『二分狂言』の作者太榮山人といふ者の由さへ聞こえければ、いかでさる者をこそと慕はしく覺えて、一日山東庵をどひて家のおとな過ありて出だしつれば店の事とかくに付けて足らぬ勝なり、あはれ御家なる若人さる方の才ありときけばまばしだに貸し給ふべくやと請ひ求むると懇なり。

京傳やがて由を翁に告げて其の意をとへり。人の奴となりて隨使に従はんは、翁の性として喜ばぬ所なれど、つらくに思ひ見れば、さ、つれなくのみもてなすべくもあらず、京傳とは好む所同じく代作の勞さへとりたれば心あかるべくもあらねど、家の人々にいぶせく思はれんも口惜しと思へりし上、葛屋は名たゝる書買にて、心ざまも賤しからずと聞ければとて、いつかは事の便にもなりなんをたのみにて、心を虚うして腰をかゝめ、耳を掩ひて辭をひくうし、商賈葛屋重三郎を主人とはなしけり。是れより佐五郎を改めて佐吉とぞ呼ばれける。

翁是まで見る所の小説雜著少なからざりしが流石にこゝには猶めづらしき物あまたあれば、なりはひの暇には之をよみて見ぬ友達とかたらひて、思はずして笑壺に入るとありけり。

京山著『蜘蛛の糸巻』に(上巻)さて奉公中『花の春風道行』全二冊(但一冊五枚つゝ)春期(後に北齋)畫にて葛屋出板

馬琴自序に京傳門人あり。此双紙大に行はれてより年々作ありて高名になりぬ。つたやに三年ばかり奉公して云云とあれど

此説甚不密なり。『花の春風道行』は恐らくは寛政十二年山口忠の發兌『花見話風盛衰記』の誤にや。さらば豊國の畫にて時も書肆も違へり。又春期畫は寛政六年發兌の『福壽海無量品玉』といふ三冊物初なりと覺し。京傳門人の署名あるは先にも記し、『二分狂言』の事にや。又奉公三年とあるも年期少しあわぬやうなれどさりとも寛政三年の極冬より五年の早春までもや居りたらんか先は之に従へり。猶一考すべし。

此書は末に天滿宮も照覽あれと醫へる程の者なれば大鉢におきて儲はなかるべけれと兄京傳の死年をすら誤り記したる程なれば老年暗記の失は多かるべし。

寛政五年春初めて曲亭馬琴の名もて草雙紙四種を出だしき。

馬琴の名は已にいひつ。天明の『俳諧古文庫』にも用ひられ、初作『二分狂言』の主人公の名をもせられたり。

曲亭とは此程名づけたるにやと覺し。曲亭は山の名なり。『漢書』陳湯傳に巴陵曲亭の陽に樂しむといへる語あり。又『大明一統志』にもいでたり。

『鼠兒婚禮塵劫記』は三冊物、豊國さしゑにて和泉屋より、『浮世御茶漬十二因縁』は三冊物、春英挿畫にて伊勢屋より、『自花團子食氣物語』は三冊物、『荒山水天狗鼻祖』は一冊物にて共に大和田より發兌したり。此の四書行はれて曲亭といひ馬琴といふ名、やう／＼世の中にえられたり。

同じ春、鶴屋より曲亭馬琴門人傀儡子著の増補『伊賀越物語』といふ書いでたり。是れにぞ驚きたる人もありける。當年初めて世にいでたる曲亭馬琴の早く戯作の門人あるといふかかしき事なりといひあへりけり。

翁平生の高慢に加へて是れまで發兌の二三種思の外に行はれければ抱負自ら大となりて、書買に迫られて心にもあらぬはかなき物を綴る時は、妄に曲亭、馬琴の名を用ひず、門人、傀儡子（又魁番子に作る。杜甫の句梅雷魁春とあるにどれり。）といふを作りて其の名を署したり。これ其の拙き責を免れ、且は地位の高きを示さんとなり。然るに後に至りては此の名をだに惜みて心にあらぬ文を綴る時は、玉亭、光峨、逸竹、齋、達竹などいふ異名を記す事すらありけり。

玉亭といふ由は『作者部類』にあり。又『慶長以來小説家著述目録』に玉亭光峨とあり。著述三四種あり。

こゝにある事三とせ勉むるとまめやかなりければ、萬屋の叔父なる人新吉原にありて引手茶屋をなせるが、痛くめで、いかで吾が家の婿にと誘ふ事まば／＼なり。初の翁ならましかば辭むまじかりけんを、既に行を改めて淫猥蕪雜を惡みなれる折柄なれば、妓は猶乞丐盜賊の如し、なかさる中に交りて父母の遺骸を汚すべきとて斥けたり。

主家にかゝはるべき事ならねど流石に恠しからぬ様の見ゆるに心おかれ且は入夫の約とのひければ由を京傳に告げて萬屋を辭しけり。

或人此事は馬琴を神聖にせんせざる崇拜者が白石の小蛇の故事にならひて作りまうけたるならんといへれど反證なく一概に虚偽なりとし妄に傳説を煙消せんとするは好ましからぬわざにこそ。先是翁四方に流寓せる程一力士あり。翁の鉢幹肥大なるを見て只管力士たらん事をすゝめ出精によりてはやがて暮にも入りつべしと説けり。翁答へて角力は人の玩具のみ大丈夫宜しく人を動かすべし。豈人に弄はるゝを甘せんやとて從はざりけり。是事實否確なりにはあらざれど、この言をなす人

あるにても翁の性行の幾分を察しつべし。

### 第四章 昇る旭

#### 第一節 いりうど

こゝに九段の下飯田町二丁目の家主に伊勢屋といへるあり、中坂下南側に見にくからぬ見世をかまへて、下駄傘の類を賣りてなりはひとせるが、今の主人はやもめにて會田氏、名は百といひて年老いたる母と二人暮せり。百早くより伊豫大洲侯加藤遠江守殿の母堂に仕へまつり御覺めでたかりけれど、家を繼ぐべき身の何時までかと強ひて暇を申し賜はり、家にかへりて夫を迎へつるは其の廿六七の程なりけり。

父は早くうせてわが手一つにおほしたてし愛子アトゴなれば母のいつくしみは殊に深く、只疾く初孫見せよといひせまりて樂しむ程に、あはれ比翼の契早く破れ連理の誓全からず、幾程もあらで婿うせにければ家内涙に袖の乾くひまなく泣きあかし泣きくらして月日を送りぬ。さてもかくてありはつべきにあらず、とく再醮して家の内をかためなし又悲をも忘れ玉へと、ある人毎にすゝめけれどせめては一年の喪にだに籠りて亡き人の戀しき跡を吊ひもしつわが心をもやりてんど、いなみ來て今年は早三十路になりぬ。

家の血すぢこそ尊ければ今は早疾かるまじき比なり、まけても從ひ玉へと、母さへ勤めてやまねば猶すげなくは辭みかねて、さらばいかにも計らひ玉へと僅にうべなひけり。



時に曲亭翁年廿七歳、葛屋にあると三年、著書の行はるゝ者五六種なりければ何時までか人にたよりて世をば渡らん、ますらをば荒海も高山も我れとこそ超ゆべけれど思ひなりて、獨立の志切なる折柄なれば此間に煤する人ありて縁直に結ばれ、翁は是れより履商伊勢屋、清右衛門の名跡を繼ぐ事となりぬ。

依田先生『讀海』及是を引用したるらしき諸書には清左衛門とあれど誤なるべし。自記の諸書による。されどなりはひも多きにいやしきが中に、賤しき此のなりはひこそ誠にいとはしけれど翁つねに快からず人に對してもはぢ言ひけり。

生れ七年四月には家の老母みまかたる程に其の翌寛政六年には長女さき（豊庭先生の説及び夫れよりい、たらしき諸書にはつこありりて憚の關やう／＼ゆるみなりぬれば、元のなりはひをやめ、聊千蔭様を書けば、近きあたりの見を集へて讀書手跡を授け、

當時入門の徒三十四五人より四五人にも及びたる事ありし由翁の齋孫の直話なり。又かつて山本氏にかゝり居て宗仙と呼べりし程習ひえつる事とて、ちとばかりの藥を製り鬻ぎて著述の傍に其の日のたつきをぞ助けしる。

此後曲亭著作の草雙紙に賣藥の廣告あり。家傳神女湯、婦人血之道諸病の妙藥一包代百兩。精製奇應丸大包代貳朱中包代一匁五。分之は藥種を撰み製方家傳の加減を以てす此故其効恰も神の如し。熊膽、黑丸、子くまの汁を以て丸す多く糊を交へず。一包代五分。婦人つき虫妙藥一包六十四文半包三十二文。産後の下り物おりのるにも甚妙なり。製藥江戸神田明神下同朋町東横町瀧澤氏

弘所元飯田町中坂下南側四方みそ店向瀧澤氏

取次所大坂心齋橋筋からもの町河内屋太助

右の如し文は文政中のなれど此比より始めし。

さても翁の性として人の後をつがん事つひに快からず思へりければ會田氏をばよき様にいひ計らひて此の程より本姓瀧澤氏とぞ稱へける。

されど淺はかなる女子の心より名分といふ事を知らねば、夫婦主客の地位をかへたと歸るに家なき身となりぬる事、わが氏の祀絶えたることをも知らず、放恣初にかはらざりけり。

同じ比より實名をも解と改め、字を瑣吉とつけ著作堂主人、飯臺陳人、其他の號を設け、専ら心を文墨の方に用ひたりけり。

翁の實名は是迄與邦といひしが此程解と改めたり。解は易の雷水解をさるるにや。別に雷水山人の號あり。字瑣吉は佐吉の文字を改めて瑣瑠の事に附會せしならん。其初名けたる時は深き意味なきも後に夫と暗合すべき事實を見出す時は初よりまかんくの故をもてかくしたりといふ事誰か上にもある所なり翁の如き自負心高き人には殊にしかありけんかし。

翁文化四年著『三七全傳南柯夢』編後に門人東園魁菴子の名もて其名號の出所を説きて馬琴何也。取十訓鈔野相公句、才非馬卿(司馬長卿)彈琴未能云云。先生(翁)の事也門人の心にていへば也。管京(墓司馬相如才。是以名解字瑣吉。解瑠也。郭璞江賦云瑣瑠腹。蟹水母目。鯢。其象名於蟹也。王吉所夢亦是長卿(相如の事なり)故事也。さいへり餘りにさいのひ過ぎて附會の疑なきにあられど姑く記す。

第二節 著作

さても世の中ばかり心にまかせぬ物なかりけり。流浪の程は其の日の口に追はれて報なきに著作して好事にふけらんとならず。人の家において吾が身にしてわが身ならぬば更にいふべくもあらず。翁飯田町にうつりてさて是れよりと思へるはたあだなりけり。肆のなりはひある上、二百戸ばかりの家主たれば、

地主は小林勘平なり。翁の孫女つき現に飯田町貳丁目三十貳番地にありて家主をつとむ。之は當時より引續ける者ぞ。

因にいふ猶伊勢屋には小傳馬町邊に地面二三ヶ所ありき深光寺僧はいひたり。

思を煉り筆を弄ばんの暇なく、殊に新に入りつる身なれば流石に憚るべきふしもありて、翌くる寛政六年には『福壽海無量品玉』全三冊 春期畫一種を出だしたるのみ。其のあくる七年の出板も同じく

『昔怪談諷教訓、心學晦莊子』四週摺心學双紙といふ 一種のみなり。

是は京傳が當り作なる『心學早染草』の第四編にて

初篇『早染草』京傳作寛政二年發兌にて甚だ行はれたり。其後篇『人間一生胸算用』同作同三年發兌また行はる。其三篇『勘

忍袋緒ノ善玉』同作同五年發兌。翁の此作は其四編なり。

二編三編流行の後をうけたれば行はるゝ事又甚しく其の名忽に高くなりき。

其の名やうく世に知られぬれば、やゝ肩身廣き思ある上、夏の初に姑うせにければ、おのづから思ふ事かなひなりて、是れよりつねに賤めりし履商をやめ賣藥と小兒の蒙師との外、専ら著述に従ひけりされば其の翌春發兌の雙紙忽ち五六種の多きに及び、別に中本『高尾船字文』の著さ

へあるに至れり。

こは是迄の草雙紙は繪組を旨とし文章趣向を次としたれば、むしろ文章に得たる翁には其の力をつくさん所なく、あきたらずのみ覺えたれば、こは讀む事を主と綴りたるなり。されど當時滑稽物流行の折柄といひ挿畫少ければ、婦幼の好にかなはず、僅に江戸にて一百部京坂にて五六十部られたるのみなり。

之れより二三年は筆を中本にとらず。あくる九年春は新作十二種を出したり。みな世のもてはやしよき中に『無筆節用似字盡』の如きは翌年京都西陣より金襴純子に書中の文字を織出して多く諸國に出だせるにても其の流行のさま思ひ見るべし、之れよりして翁の名はますますひろく世にきこえて年毎の新作十餘種、行はれずといふもの一つもなし、當時一九三馬いまだ名なく

一九は其生明和二年にして初作は寛政七年なり。其名の知られしは享和中出版の『膝栗毛』よりなり。三馬は其生安永四年にして初作は寛政四五年なり。寛政七八年の頃芝全交の名跡をつがみせし程に寛政十年作『俠太平記向鉢巻』の著ありて火消入足の事ありければ其名急に世に知られたり。其前はいまだ名なかりしなり。

京傳はた手鎖の事ありて後専ら教訓を旨として淺はかなる物のみ綴りければ、彼れは趣向の盡きにけんと世評初の如くならず、文界は獨翁の物のやうにぞありける。

此の程の著作の殊にとりいでいふべきはた少からず。寛政十年には『似字盡』の後篇『鹿相案文當字揃』三冊を出だせり。之は前編の行はれつる一つの證ともあるべし。十一年間形本ていが(書の種

類につきては後にいふべし。繪本『大江山物語』小冊『鹽梅餘史』をい出す。間形本は此の後三四種の作あり。小冊は是れのみといへり。

此小冊『鹽梅餘史』は落語の書之きり。落語の書は別に享和二年草双紙六冊掛徳用双紙のうち「賣切申候落語」といふあり。なほ發兌の年不詳『花鬘』といふ書もある由少年文庫にいへり。但其製本の小本なるは此書のみなり。

同年又『國盡女文章』をつくる。此の類の者は後に『花鳥文素』『雅俗要文』『新編古狀揃註解』等の著あり。寛政の末『俳諧歳時記』をえらぶ、該博精通せる翁の著なれば俳諧者流いたく之を重じてかゝる書には比なきまで行はれ、再び三度板をかへたり（嘉永中再板明治に至りて又板をかへ）其の他此の類には『俳諧節用抄』『俳諧いろは韻』『俳諧早引草』『俳諧人物志』『古今歌話』等の著あり。

享和元年草双紙『曲亭一風京傳張』の著あり、これは京傳の爲に其の商品をひろめんとて也。なほ別に『山東一風煙管簿』の著ありともいへり。

同年又書買の需辭しがく『繪本復讐録』三冊をつくる、其の著心にあらねば曲亭馬琴の名をあらはすを屑とせず、玉亭と作り名せり。

同じく三年『曲亭傳奇花鏡』をつくる。からくにの傳奇の趣にならへる中本なり。

同年『簞笠雨談』三冊を出だす。之は去年京極漫遊の紀行『羈旅漫錄』の拔萃なり。

翌文化元年讀本『月水奇縁』五巻を出だす。之よりして翁の妙技特に世にあらはれ、士君子又戯作

の書を玩味するやうになりぬ。小説稗史の書從來は只婦女童幼消閑の具たりしがこゝに至りて一變せりといふべし。

其の所をえつとにはあらねど、其の名多くこゝにいでたれば聊當時の書籍の種類をいふべし。青史經典實學の書は姑く置きていはず、大凡世の弄となるべき文にくさゝの類あり。其の名に

従ひて形も異なり、形によりて其質も同じからず、今其の一つ二つをいへば

横本 初め元祿の比西鶴自笑其碩の輩の作には黒表紙の横本多かりけるが、之をば別に八文字屋物江島屋物など稱へたり、其の後「俳優評判記」など此の形をとり、夫れに擬して作れる種々の評判記など多くは黒表紙の横本なり。

翁の著『八犬傳』巡島記』を殿村篠齋等の評し翁また之に答へたる『大夷評判記』は此種の書なり。

草雙紙(赤本表紙、合巻、青本) 初め享保の比よりしてはかなき雙紙に丹表紙をかけたれば世に之れを赤本といひけり、其の後かふるに黄表紙をもてしければ之れよりは黄表紙といひけり。折ふしは黒表紙もあれどなほ通じては黄といへり大抵一冊五紙にして大きさは半紙半截の者多し。文化の初より二冊三冊を合本して之れに色摺の表紙をつく、之れより合巻とは稱へけり。是

等は皆繪を旨とし文は其の繪解にすぎねば只婦幼を慰むるのみ、正しき雙紙に對して之を草雙紙といひけり。又草といふ文字よりいへば青本ともよびけり。讀本 此は草雙紙の繪を旨とせるにむかへて讀むとを主とせればかくいふなり。大方半紙本に

して一冊二十紙より三十紙に至り繪は冊毎に二三紙あるのみ。されば翁の如き奇趣妙文の作者にはかゝる者ならぬば其の筆を恣にする所なきなり。翁の讀本に名を博したるは其の學其の筆の讀本の性質とよく相かなへればなりけり。

讀本と草雙紙との區別は主とする所異なり、外形異なる外、なほ一ツの異なる所あり、そは其の趣向大體において一は人情やうの事多く、二は歴史やうの事多し、芝居にていふ世話物、時代物とやうの區別あるなり。

小本　こも讀むことを主とする者なり。半紙半截の製本にて一冊二三十紙、口書といふもの二枚ばかりあり、其のゑるす所遊里淫猥の事のみなれば洒落本と稱へて識者は之れを排斥せれど、遊蕩治郎之を以て無上の樂となせば行はるゝ事他の者にまされり。寛政の初め令ありて嚴禁せられつれどなほ竊には行はれて文化文政の比までもあり。なほこんやく本、油揚本、豆本、等大きさによりて名を異にするあり、共に洒落本なり。

翁の著には只落語『鹽梅餘史』壹冊あるのみ。

中本　半紙本と小本との中なればかくいふ、舛裁すべて半紙本の讀本に似て繪は多し、其の文其の趣凡て讀本草雙紙の間をゆきて讀本の方に近し。

翁の著には『高尾船字文』其他十餘種あるべし。

間形本　其の大きは半紙本と中本との間なり、舛裁は草雙紙に似て其の文其の趣は讀本雙紙の間をゆきて草雙紙の方に近し。

翁の著には『繪本大江山物語』繪本武王軍談『白久屋お妻古手屋八郎兵衛』敵討賽八丈』など此種の本なり。  
鹽庭蘆村先生のいふ如く『猫下やらし』を翁の作とせば合せて二冊なり。  
大本　半紙本より大形なればいふ、大方は隨筆やうの者此の種の製本なり。  
翁の著に『燕石雜誌』『燕石雜記』其他の雜著は大方此の種なり。  
大方は右の如くなり。

第三節 家の内の事

流石に入夫の身の常の剛愎のやうにはえあらで、二年三年は心ならずくらしつる事、女兒生れまうとめ失せ、著作年々に行はれゆけば、やう／＼に身ひろく覺えなりぬる事などは、始にゑるしつ。さても其のあくる年寛政八年には二女ゆ、といふが生れき。九年發の草紙『無筆節用似字盡』は行はるゝ事大方ならず。只年毎に幸のいやまさりゆくやうにてわが世の中とぞ思ひ樂しみける。然るに同じ年五月六日耕書堂の主人蔦の唐丸うせぬ。すぎにし事など志のばれて

思ひきや今日は空しき藥玉も枕の跡に残る物と

などうかいでも手むけけり。昨日までもわが家に養はれつる身の今は多くの人に知られて人の下にのみはつかぬ程なるを思へば、草の蔭にもなほはえある心地こそえけめかし。ことし十二月廿七日男兒生まるこゝに來てより幾年を経ぬに子供二人まで設けつれば、嬉しき事に思ひしものから、共に女子なれば猶あかぬ心地のみせられつるを、あなよくこそ生みつれなどうかよろこびて物狂

はしきさまにさへぞありける。

やがて名をは鎮五郎とよび『蜘蛛の糸』に  
は清吉とあり手の中の珠かざしの花もものかはどぞめでいつくしめり。  
新玉の年を迎ふるめでたさはかはるまじき事なれど、今年ばかりは殊なるやう覺えて、乳房求め  
て泣く兒の聲も鶯の初音ときしなされ、心そらるに浮き立つ人々のさまも理なり。

幸はこれのみにもあらず。この作『似字盡』の中なる文字を綾錦に織り出だしたるを此の春西  
陣より賣せめければ、翁の名はいや高き際まで知られわたりぬ。かゝれば年毎に入る潤筆の黄金

潤筆は著作料。書買より著作料をとりたるは京傳馬琴に初まりぬ。翁の著『作者部類』及『警傳毛の記』等にくはし其前  
は書買より新板の繪紙錦繪等を贈りて作者に謝したるのみさいへり。

思の外に少からねど一分は古今の書籍をわがなひ殊に舶載の新著は價の貴きをいとはず

『八犬傳』回外剩筆に(上略)毎に衣食を省き節儉を旨として和漢必用の書籍を購ひ求むる者五十有餘年其書藏めて五六千卷  
六十餘櫃に至りしも(下略)とあり。

一分は故舊親戚の貧しきを賑はして樂とせれば

『家廟遺墨』に翁の叔父田原四郎左衛門忠興の書簡數通同叔父兼子新賀定興のが數通あり。其中には金子借用したしこの意の  
者あり。又金子を與へられ忝しきの禮狀あり。翁の賑恤の事實を證すべし。

餘財常に多からず、衣食の費そこばくを省きて豊ならず其の日を送りぬ。此年の八月兄臺右衛門  
與旨病によりてみまかりぬ年四十歳なり。

與旨幼名左馬太郎、後直次郎、と改め、更に臺右衛門といふ、性篤實温雅にして至孝なり。幼きより

父祖の資を承きて風流の界に遊び、かつて師竹庵越谷吾山の門にあり、東崗舎の主羅文といひ雅  
漢甚多し。

『家廟遺墨』『燕石雜語』等に其句をのす。一年旅中の吟に

遠近に春をかくして雪の空

寛政の中比病後の吟にて

年きよめ五臓の煤も拂ひけり。

其他翁の著作の口誦の資に此人の句多く見ゆ。

わかくして父におくれ母を助けてよく貧窶のうちには處り、幼き弟妹をうゑも凍えもせぬ程に養ひ  
なし、戸田氏に仕へては忠誠廉直、冢宰の任を耻かしめず、甲府勤番の中も配下の指揮よろしき  
をえつとて賞せられ、事によりて同家を辭し、山口氏に仕へても、重く用ひられ面目古參の輩に  
もまじたり。

うするに及びて翁いたくなげきて、我れ幼くて父におくれ、其の後母にも仲兄にも別れれば、  
うきにも樂しきにも只此君一人を頼どはまつるを、今またあへなくも見捨てられぬること悲しけ  
れど泣き叫び人心地さへなかりけり。

かくてありはつまじければつとめて雄心引立て、やがて法名を深譽勇遠羅文居士とあくり、から  
をば小石川深光寺にをさめき。

男子の家をつがすべきもなく年僅に二つなる女子の名は葛といへるが、残れるをぞ瀧澤のちす

ぢの流細かれど涸れずしあらば千代もくむべくなど思ひたのみて母もろ共に養ひとりて万かひくしくもてなしけり。

今年九月風雨にされて文字わきがたくなりぬる家の石碑改め立てつ。其の文に。

先考先妣之墓安永乙未春三月家兄所建焉風雨摧剝泯滅過半是日家兄嘗有欲再建之志而不果今茲尋就本解不堪哀悼之至爰三位合墓建石於先塋之側目遂其宿志云

寛政戊午九月

愚弟瀧澤清右衛門解謹誌

どあり翁の父祖にあつき心推しつべしや。

之れより後も筆の暇には小石川に至りておくつきを拂ひ、こがねの餘は香花の料に喜捨して専ら後の營をぞつとめける。

年もくれて寛政も十一年となりぬ。

八月十二日は羅文居士の一周忌とて僧を請じ經をよませなどするにつきて、孤の人なみくく健やかならぬをなげかひつるが、心なき身にもよみぢなる父や戀しかりけん、こえて二日その月十四日といふに此の世を去りぬ。かねて行末はあほづかなく思へりし者なれど、さて今更のやうにうちなげかれ兄は日比至孝なりしを家督の幸なくて死後に圖らぬ不孝をかもせり、只幸にして我れに三子あり。男子は殊に秘藏なれど宗家の祀をたつべくもあらねば鎮五郎をもて兄の後をうけしめ、わが家は姉に夫を入れて兩家相助けて永く後の榮をはからんと思ひ定めき。今年京傳の父傳

左衛門信明うせぬ。

寛政も十二年となりぬ。今年三女歟生まる(翁の外孫松野渥美正幹氏の生母なり)此の秋豆相漫遊を思ひ立ちて九月十日

江戸をいつ。まづ武州金澤にいにし文庫のあとをたづねて北條顯時が往時をまぬび、能見堂に入つのがめにあきて巨勢の金岡が昔を思へり。浦賀に遊べる夜は親しき友と清談して長き秋の夜をあげやすしとかこち、幸ある旅を喜べり。かくて相摸灘三十里の舟路には風にあひて一日岬にかゝり、遙に東の空をながめて人知らぬ涙をまぼりつ。下田に遊ぶ事十日ばかり。大島八丈の事まで探りみたる少からず。躰を家路にめぐらしてかへるさ、又好事の癖にかられて連臺寺のいでゆより天城六里の山中をこえ、狼の聲に送られて腸を故郷の空に斷ち、笥の響に迎へられて獨りゆく足をとめて袂を妻子の上にするほしなどしつ。夫れより修善寺の温泉に旅寝しては源家の末を悲しみ、三島沼津に友をとひては故きを談じ新しきを語らひて暮れ易き秋の日をうらめり。繪島鎌倉に至りては北條氏奸黠の謀をにくみ、同じ時に生れて其の肉をかまざりしを惜み、源家の覇業のあとを見てはひそかに皇權を亂る俑を作れるを憤りて慷慨の涙にくれたり。

かくて十月の半ばかりに家にかへりぬ。大凡此の三十日あまりの旅行間に知りえたるそこはくの事どもは此後皆くさくさのめてたき物語となりて世のもてはやし草とはなれるなり。

十三年辛酉革命の年とて享和と改元あり。今年尾張の人椒芽田樂

神谷剛甫といふ醫師なり。滑稽を好みて小才あり。戯號を椒芽田樂といふ。

其の著『挑灯庫閣七夜扮』を出版せんとて筆削をこひおこせり、文致たゞふべきふしありとにはあらねど志の程流石に捨てがたくて聊筆を加へ、あくる正月鶴屋より出ださしめつ。馬琴門人とあるに世の覺はやゝありけり。

今年享和二年夏の初翁西の方都浪花に旅す。いぬる年伊豆相摸に行きて種々のめづらしき事にあひてはからぬ樂を得、かつ多くの人に知られて著作の行はるゝ事初にもましゆきつるなどよき事のみありければいかでまばしのいとまをえて京浪花へはゆかんと思へる程に、かねて翁を慕へるふみやどもよりいかで一度は來り遊び玉へとうながさるゝももだしがたくて、五月九日江戸をいでたつ。

旅行大凡百五日、雨天洪水其の他の爲に逗留日を重ね歸朝早く迫りぬれば、訪ふべきをもとはぬが多く、見るべきをも見ぬが少からず。されど到る所、名勝舊跡は更なり古人の略傳墓誌遺墨珍書古墳等より風俗方言妓院雜劇のさま年中の行事等大凡異日の参考たるべきもの殆もらさず見聞したり。やがて歸江の後『羈旅漫錄』三卷を著はしぬ。自序あり、旅の行方のあらましを示せり。

吳竹の狭き臥にれざめを啣ちしも、さへの神にや誘れけむ。神風の伊勢の宮居拜まむと、さみだるゝ頃、杖と笠よと立睡ぎつゝ、駿河路や、不二の眺に頂たるゝ遠つあふみに旅宿りしてまだ夏ながら秋葉の山によちのぼれど、ふる郷人に事告げ

むなつかし鳥の啼にさへまのぼれ、三河も吉田岡崎や、紫麥の杜若、洗ひ流せしき月をすぐし、山鳥の尾張の國に、長き旅寝を慰め、星まつる初より、京にまげし杖をさめて、残るあつさを賀茂河にうち流し、東山の夕つく日、茜さす赤前垂もにくかられど、浪花人にまたるゝ身の心急かれ、伏見の夜舟夢にこがせつ、浦の片葉の足休めして、三の眺もあかなく、薄もの寒き秋風に驚かされ、立つさしいへば浪枕、堀江の月に袂を分つ、夕は牛の角文字や、伊勢路に入ればつるさ弓、竹の都に御社を拜み、山田松坂の踊目に珍らしく、津の町の長き夜すがらをあかしたる、瓢箪屋より走りいで駒のはづなを早めつゝ桑名の宿の始も、あへばにくからぬ友人に止められ二日雨ふり風ふきて、宮舟はきれものなればさやへまはりて怪我もせず、よに目につきて急ぐ程に葉月廿日あまり四日おのが家路にたどりつきぬ。旅に遊ぶも百日餘、目に見耳にきけるとまめやに書い付け見れば遂に物の本となれり。

(下 略)

到る所雅客文人に迎へられ風流韻事を談じ故事野史を聞く。同志の士と相會ふ事少からで知音甚だ多くなりけり。

享和も三年となりぬ。

さてもこぞの旅ありてより、翁の名京攝にもてはやさるゝ事、初に倍して、文の林の譽は獨り翁の上にあつまりぬ。されば浪花人松好齋の作『滑稽繪本役者濱真砂』

滑稽繪本と題せれど可笑的の者にはあらず。當時所謂滑稽は現今謂ふものさ意味自違へりやの如し。此書は今の脚本さといふべきさまのものにて題名甚だ似合はしからず覺ゆ。

は百四十里を遠しとせず殊に翁の序文をえむとて江戸に送られたり。まして近き江戸の小才あるものゝ其の筆すざみを送りて筆削を請ひ束脩をもたらして門下の者たらんと求むる者、面謁を望

み詩歌を欲する者、日毎にいくばくなるを知らず、翁の性として深く世俗に交はるを好まず、殊にもし一々之れとあはれこそ机に倚らん暇もあらじとて『夫木集』衣笠内府の身の憂きときの隠家にせんとよまれたる心をとり自養笠漁隠と號し、常に病と稱し深く門をどぎして知音の紹介ある者の外はあへてあはず、詩歌書畫をかねて短冊扇面等に認め書屋に取らし置きて僅に欲する入々の心をみたせり。

されば許されて門人と稱する者當時僅に五七輩に過ぎざりけり。

翁は曰、我に戯作の門人なし。門人たらんと請ふ者あれば理をさきて辭したり云々。されど是は後に文化の未より文政へかけての折の事なるべし。但妄に門人を許せば際限なきをもて當時といへども多数の請求者をば辭みけり。少く共門人といふものありし事は事實の如し。

文化三年發兌『勸善常世物語』に門人梅村園門人嶺松亭同校といふ文字あり。

文化五年發兌『三七全傳南柯夢』の終に門人琴驥の名をもて翁著述の廣告あり。

又同文化三四年より七八年に至る諸著に新作を知る歌さて『小野篁歌字靈』風の歌三四首ありその中に

敵討自鳥の關も自作なり、鈴菜に甚三は門人の作とあり。『驛路春鈴菜物語』は節亭琴驥、本名島岡權六が作なり。敵討甚三

紅緒』は川關櫻琴川本名川關庄助が作なり。

此の年初めて半紙本の讀本『月氷奇縁』五巻をつくる、こは浪花の書買河内屋太助と約しつればなり。あくる春出版するに及びて喜ぶもの音に婦幼のみならず、文士雅客も皆其の奇趣妙文を稱ふる程に賣る、一千百部をこえ、なほ年毎の再刷少からず。草雙紙はやう／＼に幼き者の玩具の

やうにぞなりゆきける。

世の中もやう／＼大人びて繪組よりは趣向文章をいふやうなりゆきぬ。そはやがて文章の方にはあやしく妙なる力ある翁の世となりぬるなりけり。

### 第五章 巳の時すぎ

#### 第一節 著作

享和四年改元ありて文化といふ。まことによくこそ名けられつれど覺ゆるばかりなる此の頃の有様なりけり。

雙紙年々に行はる、儘に世の好はたやう／＼高くなりゆきて、口合秀句のはかなき類は既に見かへる人もなくなり、草雙紙にすら敵討やうの理めきたる者のみぞもてはやされたりける。さればかたへには合巻あらはれ、

合巻とは雙草紙二三冊を合せて繪表紙をつけ後には彩色繪さなる上下二巻合せて五六冊をもて一編さなるものなり。

文を稱へ趣を味ふには讀本こそ其物なれど挿繪少くは婦幼の愛をひきかたし。さればさて今迄の黄表紙にては稍ましまり

たる趣を綴りこむに紙數足らば合巻といふもの出できしなりけり。

一方には讀本やう／＼に行はれ來にたり。

かゝる折柄といひかねて知られつる浪花よりといひ『月氷奇縁』の覺は思の外にて忽にして千部を賣り盡しぬ。之れにぞ心そらるに喜ばれてやがて『復讐奇談稚枝鳩』豐國齋『小夜中山石言』五冊



遺響』北馬畫を綴りて今度は江戸と京都との肆よりいたしたり。之れまた大く行はれたり。

翌けて二年乙丑、『椿説弓張月』北馬畫前編六冊、『四天王剽盜異録』豊國畫前編十冊、『三國一夜譚』豊國畫、『勸善常世譚』北馬畫等を綴る。(別に中本合巻雜著等あれど讀本の名譽に比べて旭に向ふ星の如くなれば以下は

必要なき限は畧す)

三年、『標注園の雪』北馬畫、『隅田川梅柳新書』北馬畫、其他數種四年、『三七全傳南柯夢』北馬畫、『賴豪

阿闍梨怪鼠傳』前後九冊、『弓張月』後編六冊、其他數種五年、『弓張月』續編六冊、『俊寛僧都島物語』八冊、『夢想兵衛

胡蝶物語』五冊、其の他數種を綴る。

專、巷談俗説に基きたるはかなき者すら切にもてはやさるゝ翁の名なるを、正史實録を骨となし、博き學もて肉をそへ、艶やかなる筆もて肌をかざりたるなれば、高き低きにわたりて狂へるばかりにたゞへられたり。殊に浪花人は一年壬戌の漫遊の折親しく風采をのぞみ博識妙文に驚けるより、神と尊みひじりとあがめて、只るひにゑひたるやうにてたゞ人とは思はざりけり。されば文化二年『稚枝鳩』いづるや、佐川藤太といへる淨瑠璃作者之れを『會稽宮城野錦繡』といふ淨瑠璃に作りなして人形座にて興行し、太く行はれたり。三年春『四天王剽盜異録』いづるや、其の十月角座にて其の一節を歌舞伎に仕組み之も又行はれたり。五年は殊に夥しくて翁の著の歌舞伎に上る者四座五度なりけり。

八月十一日開場 角座 三國一夜譚

九月十七日開場 中座 舞扇南柯話

十月 新淨瑠璃 人形座 鎮西八郎響弓勢(佐川藤太作)

十一月十三日開場 中座 島巡月の弓張

十一月 大西座 軍法富士見西行(賴豪怪鼠傳)

かゝれば世評は割るゝばかりにて、書肆より稿本を請ふ事矢のやうなれば寝ぬるに机邊を去らず筆に枕し紙を衾となし夜を畫にかへて綴る程に、文化の半に至りて稗史ヒストリ三十餘種、中本、合巻、雜著併せて六十餘種に及びぬ。知らぬ者は馬琴といひ、曲亭とよぶ者、二人も三人もあるらんと思ひ、さらぬはよも只人にはあらむなどいぶかしみあへりけり。

翁の讀本其の數甚少からず、まかも悉く新奇妙案なりと雖も殊に『南總里見八犬傳』、『椿説弓張月』、『三七全傳南柯夢』をとり出で、世に三大奇書とぞ稱へける、そが中に『南柯夢』は文化四年書肆榎本平吉の爲め綴りてとらしたるが、障はる事やありけむ、出版翌くる五年三月末つ方になりぬ。時の後れたればにや、此の日賣るゝと僅に二百部なり。平吉色を失ひて驚き憂ひけるが、世評漸く聞こえてきて、初秋に至りて、千二百部をうりえたり。殊に浪花の歌舞伎に大入ありてよ、我れも〜と求むるもの日にましゆきてければ、平吉の喜たどふべくもあらず、いかで續編をど請ふ事まきりなり。翁全編已に終を告げぬれば、書き續くべきふしも残らず、と辭めどきか

ず。よしや事は何にまれ只『南柯夢』の名だにつがばと只管こひけり。よりて『占夢南柯後記』八巻を綴る。其の名にめで、購ふ者多く謀れる事あだならざりけり。さても前編の世にめでられたるさまこそ志らるれ。

『権説弓張月』は翁が日比の慷慨をもらさんとて、殊に力をこめ、思をこらして、英士王事につめて志を得ず、遂に難をどつ國に逃れて之れを靡けたる趣を説きたれば心なき女小供さへ大君の爲には火にも入らん御國の爲には水もかづかんの大和心を起すものありけり。

初文化二年前編六冊を綴り、同四年後編六冊、同五年續編六冊を出だしぬ。同じき十月例の佐川藤太『鎮西八郎譽弓勢』といふ淨瑠璃に作り、十一月には道頓堀、中の座にて『島巡月の弓張』とて狂言に仕組み、いづれも大入ありけり。翁之れを聞きて『弓張月』はわが得意の筆なるを、さもてはやさるゝこそうれしけれとて新曲を作りて喜びたり

梓弓 ひげや歌舞伎の 顔見せに 心慰む 爲ともならず 白縫に 身をば盡して 來ても見よ 曉の七ツ  
ハッ代に八町樂のあたるも嬉し さいらえにしの つきやらぬ うまの國の 親子草 男島の島に 通ふ神風 福祿壽  
つごひし人の 山雄にも 野風さやけく 機業つむ 名にし高間の手ざりして 猛き心の 鬼夜叉が 鬼ならなくに 照  
る月の わこは九ツ 藤市が 引く馬の轡に 武藤太を くらす契は 眞智よし 讀岐の院の 荒御靈 二十八騎の いさ  
なしは じんぜい揃の 勇ましく 遊べや阿曾の 忠國に冬より開く 花むこの 花のわさをき ふしきもくぐに 九郎  
が玉の 春まちえてや 梅の浪花津 中々に 中の芝居を守るらむ めでたき時に 大島の 宮居久しき 物語 宮居久し  
き 物語

さらぬだにめでたきふみの、かゝる事におぼえいよ／＼まして、春毎の出版をまちつけて、我れ先と争ひ求むれば、つゞともなく編をつぎて、思の外に長くなりぬ。當時讀本の作少なからねど、大方は五六巻を限り、長きも十巻を越ゆるは稀なるを、之は筆を文化二年に起こし、六年が程に渡り、編は五ツ、巻は二十九にぞ及びぬる、まど人のわざにはなかりけりなど驚き呆れける。いでさらば此の機を外さず、二ツ三ツの大著して世の肝を冷してん、紫式部一個の女子、陳壽、羅貫中はた何者ぞと、つひに意を定めて『八犬傳』『巡島記』の筆とりそめぬ。之れよりは多く他の讀本を綴らず。文化八年より十年に至り、僅に『南柯後記』八冊『青砥藤綱摸稜案』前後編十冊、『絲櫻春蝶奇縁』八冊、『皿々郷談』六冊あるのみ。是の他合巻、中本等も十餘種に過ぎず、専ら力を二書にぞつくしける。而して此の間の諸書に『小説快事八犬傳』豫告には、名題なりき、『朝夷巡島記』の豫告出でければ、人々只首をのべて待つ程に、文化十一年初冬に至り、『南總里見八犬傳』第一輯五巻は江戸青山堂山崎正入より、『朝夷巡島記』第一編五巻は浪花河内屋太助より出だされたり。翁五七歳の昔より書を讀む事幾千部、十五六歳より文をつゝると三十年、筆硯漸くなれ文思又熟せり、老かもし思をぬり筆をこらせる文の、いかで行はれであるべき。之れより他の讀本を綴らず、合巻も二三種のみにて年を隔て、二書をいだしければ、江戸浪花の紙の價上りつべくさへ見えて、京傳文化十年に讀本の筆を收め、つぎて十三年に失せにければ、世は只翁の物とぞなりけ

る。

一方にはかく作者の王にのぼれる外、かたへにはまた學者先生の名もひきからざりけり。初寛政に京傳の下に世に出で、より其の名旭の上るやうにて、藍より青しとの評高かりけれど、猶なみ／＼のえせ作者とひとしなみに見られんがうしとて文化三年小説『園之雪』前編五冊を綴り、わがかへ名なる門人魁菴子して故事難字等を標注せしめていだしぬ。標注の例むづかしげる文字事柄をぬきいでみんに注せり。

例へば未 婦幼は煩はしとて見もやらす、識者其の學を銜ふを嘲へれど、なま好事家其の高才博學をめでたふれば、なか／＼に甲斐ある事として翁もふみやも喜びけり。かくても猶誇り足らず、文化六年隨筆『燕石雜誌』六卷を綴る、俚諺童謠方言俗語の考より地理物産歴史人物の説等博く和漢古今の學にわたり、精く聖經以下稗史までに通ぜる翁の著なれば、あまりに牽強にすぎこそすれ、誤まれる所多くとも流石に見るべきふしもありけり。ふみやの殊に喜べるにも世の人のおぼえはまられつ。

八年『烹雜之記』四卷を綴る、大方は『燕石』をつげりとも見つべし。七年『質屋庫』五巻をつゝる、夢に事よせて正史を考へて傳のあやまれるを解けり。同じき十四年『玄同放言』三冊をつゝる。こえて文政二年同續編三冊をつゝる。是等皆學にまかして筆を走らし道を論じ、史を是非せる者讀むだに物うかるべきを、なか／＼に巻を指しがたき興あるもあやしき翁の筆つかひにこそよりけらし。

## 第二節 京傳

我れもまかなきてぞ人にこひられしと打ち嘆きたる、誠に人の心ばかり頼みがたきはなかりけり。さても京傳は寛政三年公の控に觸れてより、深く畏れ慎みて、又淫猥の筆をどらず。専ら心を教訓に用ひけるが、元其の人にあらねば、行はる事前の日のやうならず、馬琴の作のいたく行はれゆけば、之れにけをされてぞ見えける。さはれよく人を知り己れを知れば、あへて争はず、生涯の計をせんとて、寛政四年兩國万八樓にて書畫會を開き、三十餘金を得ければ、夫をもて翌くる五年の春銀座一丁目東側橋の方の木戸際今讀賣新聞社の向角何某さ。に、間口九尺の家を借り、紙煙草入煙管等の店を開きぬ。通客粹士など、唱ふるもの争ひて來たり買へば、月毎に八九十金の商あり。後いくばくもなく父が支配内の醫師の家の明きたるを購ひて移り住みぬ、こゝは間口三間あり、土藏さへそひたれば世の覺やう／＼ましゆきたり。之れより讀書丸といふ賣薬をも始めけるが、流石に京傳の名のかけにて行はれけり。

草雙紙は何となくおかしからねば、只僅にふみやの責を塞ぐのみにて、多くつゝらず、寛政十年稗史『忠臣水滸傳』十冊を綴る。巧に水滸の骨肉をとりえたりとて之れより世評たまましゆきて稿本をこふふみやも多くなりぬ。享和二年『通氣智之錢光記』以下四種を四季によそへて出版せり。之れより合巻といふ者行はれて人々京傳の妙趣を感じあへりけり。かくて其の名も本にかへりぬべく幸を喜びたる甲斐もなく寛政十一年に父傳左衛門うせ、文化元

年には母さへうせぬ。京傳は此の程まで吉原彌八玉屋の遊女玉の井一本玉になれて家にある日少く、こそ身受して妻となしつれど、永く商賈になれぬば、家も如何と心づかひする者ありけるが、流石に幼きより商家にそだてる身とて貨殖の道にはかしこく、玉の井またさる者に似ず、よくかひ／＼しく家の事をとりまかなへば、思の外に家はやう／＼さかえゆきたり。かくては行末の運にも頼ありと喜べる程しもあれ、文化三年三月四日風烈しくすさめる夜出火あり、道へ落ちつればどおちあたりしに忽にして燃えひろごりて、思の外の家共皆灰となりぬ。京傳が家も只ぬりごめの残りたるをせめてもの心やりとはしたりけり。

かなしみは之れのみならず、かねてより老い行末をたのめてし養女、つるみまかりぬ、年僅に十六也。

初京傳寛政二年の比、吉原の妓菊園を妻となしけるが、居る事三四年子なくしてうせけり。其の後寛政十二年又妓玉の井を妻となしつれど、之れにも子なし、百合とよびかへつる名にも似ずなど戯れけるがさてあるべきにあらねば養ひ子せむとするに思ひまどふしありてたゆたふ程に思の外の事いできぬ。

京傳の弟京山も同じく妓女を妻となしけれど、あやしく子五六人生みけり。されば京傳の子となすべきは此の一人なるべけれど、京傳京山も誠の兄弟ならず。

其確證はなけれざまとならずと覺ゆるふしは、かす／＼あるなり。まつ

一 享和中京傳の家に食客たりし儒生蘭洲さいふものいつの序にかもれき、つさいへり。

二 京傳京山の性質いたくかはれるもいかゞ。尤同胞と雖全然同トこにはあられど疑へば疑の種となりかれます程の事なり。

三 京傳の壯時いたく放蕩なりしを諭さむもせざりしは眞に親子の恩愛なきかのやう見ゆる也。

四 京傳よりも殊に京山を愛でたりし由作者部類にいへり。

五 椿壽齋家の妹をば娘きぬの夫にゆづりたり。之にも疑はなきをえす。

故只誠關根翁の談に京傳は某侯の落胤なり。母大森氏若くして某侯に仕へ京傳を生む。後椿壽齋に歸きて二女及京山を生めり云云いへり但其證はきゝもらしたり。(警傳毛記に大森氏わかくして尾州侯の御守殿に仕へたり云云)

互に快からず思へれば、なき後の百合が身を思へば、その親戚ならではと思ひて、より／＼にゆかりを求めて、つひに日本橋に甘ばかりなる弟あるを見いで、之を養はんと思ひ定めぬ。只流石に京山へ憚かりて、明日はあさてはどたゆたふ程に、此の子俄にうせけり。まだ手にとらぬ者ながら、持てる玉を奪はれたらん心地して望を失ひつれど、その妹にて九ツなるが幼きより他に養はれ居るをこそとつひに之れを捜り求めぬ。さるにその養家は時の不幸にあひて貧困甚しく一女を養ふだに便あしき折なりければ、是までの養の代に聊の禮謝をそへてやがてを女となしぬ。千歳の命あれかしと名をば鶴と呼び、書畫、三絃、琴、活花、煎茶、香道何くれとなく學ばせ、そが十三になりける折、母大森氏のためよりもあれば、尾張侯の奥に宮仕へせしめぬ。之れによき聲をとりて家をつがせなば、よしやわがなき後なりとも、百合も衣食には安かるべし、と

心ひそかに樂しみて、早年比になれかし、早よきむこもあれかしとぞまちける。かくしもたのめける身のあはれ勞症の病にて十六といふに失せにけり。うたての風や、かゝる蒼をど京傳百合が悲は一方ならず、物狂はしき迄になげきけり。馬琴此の由をきゝ行きて吊ひければ、京傳涙のひまにいと嬉しくて、こし方の物語など打ちいでたる序、我れ不才なれども幸にして世にめでられ、聊か名を成しぬれば明日の命も惜しからずなん、血筋はた京山が子あれば絶えぬべくはあらねど、此の子のうせぬるにつけても百合が運の末こそ覺束なけれ。たのむべき方もなくなりて路傍にさまよはんも哀れなれば、常に衣食の費を省きて貯へたる百五十金もて篋頭店の株を購ひおけり。此れより六ひら七枚の黄金はうべけれど、其の日を送らんには足るべくもあらず。家のなりはひもやう／＼に衰へゆけば、ましてなき後はと心安からずなん。かねて眞の弟とも思へればこそかくは内々しき事迄かたらふなれ。よき謀あらば憚らず授けてよとこふと戀なり。されど馬琴は思ふ由やありけん、言を四方山の物語にうつしてそこ／＼にして歸りぬ。

此の後相見る毎にくりかへし／＼ていかでなき後の事よくはからひてといはるゝに、今は流石にもだしかねて、こは仰せらるゝとどこそ覺えぬ、顔氏家訓に子に萬金を遺すは一藝の身に從ふに如かずといひて、君子は子にすら財をのこすとを欲せず、況して妻にをや。今心をいため思をこがしからくして千金を蓄へんとも、死後のさまはかねて謀る所と同じからじ。されば孔夫子も其れ去りぬ。

京傳之れを喜ばず、我れ年頃のよしみを思へば、人にも告げぬ家のひめ事をさへ語らひつるを、なか／＼にうとまじとや見けん。少しく和漢の書をうかへるに誇りて、さかしらだちたるいらへこそ心得ぬ。過ぎつる事いひづべくもあらねど、水の爲に家を取られ、はふ／＼わが家におどづれたる時を思はゝかうつれなくはあるまじきを、頼もしからぬ人の心なりけり、とかねてよりあまりに時めく様をねたましく思へりければ、之れよりますます／＼快からずなりぬ。さばれ我れをこそ名の敵とも疎まめ、なからん後は流石にあはれと見て力ともなりなんをど常に百合に向ひては、さきの日思ふ由を馬琴に語らひつるに、其の言ふ所容易くはえ行はじと見ゆれど、理にはかなへり。只かれ自ら高きに居り、人を人ともせぬ事いと惜しけれど、志かもわが友に又さるべき人なし。わがなからん後、思ひ惑ふ事にあはれ、彼れにこそとひはからふべけれなどいひきこえて、つねに争を好まぬさがとて腹立たしさは色にも出でずなほ心地よげにゆきかひ交はりけり。

京傳は其心まめやかにて人争ふ事を好まず。己をひく／＼して人に愛せらるゝ事ま／＼に商人の家にそだちたるさまは見ゆるなり。

京傳文化の初『近世奇跡考』五巻をつくる。うちに英一蝶が土手節の事あり。一蝶が子一峰(後二代目一蝶一説には門人といへり)之を怒りてむづかしくかめければやがて絶板しけり。同く比神史『優曇華物語』の繪を喜多武清に畫かして行はれず。翌年の神史『櫻姫全傳』は豊國の挿畫にていたく行はれたり、之より豊國己を功として強慢甚しく合巻の署名にも豊國畫を先とし下に京傳作さかきけり。京傳快からずは思ひながら争へば利ならずとて忍びて之に従ひけり。又書肆西村屋興八は大書肆鱗形屋の子なりければ心ざま人に下るを欲せずみやは作者畫工の名をあぐる者なれば我より稿本を請ふべきにあらずといへりければ文化の頃迄京傳馬琴の書はいださざりけり。其後京傳はつひにもごかくなり我より折れて稿本の印行をこひけり。是等の事曲亭翁には到底えずまじき行なりけり。

されどかゝる人の又のくせとて猜疑の心は深かりけり。相手の方にてあからさまに名のりいで、戦をいごむ時は心を屈して從へどもおほめかしたる言葉の我をそしれるを覺ゆるあればいたく折り腹立ちけり。始万象亭と交淺からざりけるに寛政の初万象亭『田舎芝居』といふ小冊を著し其序中に「今の洒落は墨丸を出して笑はしむるが如し」といへるを見て己を譏りたりとて恨み憤り竟に其事を言はずして交を絶ちたり。後に馬琴翁を恨みたるもひそかにほめかせり見つけばなりけり。

馬琴はまた性としてまげじ魂なる上、此の比の世の覺まばゆき迄なれば、やう／＼に心高ぶりきて、京傳をも竊に學淺しとあざわらへれど、流石に過ぎつる事を思へば、口には先生と敬ひ、をしへごとへりくだりて、あつく交らひけり。

まかるに文化六年冬に至り、二人が中に事こそ起りけれ。此の冬十二月馬琴遊谷子の寓言に倣ひて『夢想兵衛胡蝶物語』前編五巻を出だせり。中に「忠臣藏」の戯曲を評せる件に、お輕がかにかくと身の幸なきを論し、よしや夫の爲なりとも身を花街に售りて耻ぢず、而も自から撰をゆ

るせる、をさ／＼禽獸の行なりと詰りたり。京傳之れを見て大に疑ひ、これまさしく百合の身をいひ、我れをさへ譏れるなり、と忍びに忍びたる心も亂れ、あくる七年の初春をまちつけて京山をめて飯田町なる著作堂を訪ひたり。いと早くもどうや／＼しく出迎へてかにかくともてなす程に互に初春の壽四方山のうはさより物語は著作の上につりぬ。京傳やがて形を正しうして、さても足下が去年の新著『胡蝶物語』にどほまほしきふしあり。そはかのお輕が回につきてなり。夫れ遊女にも賢あり貞あり、強に薄情淫奔の者とのみ見んは酷ならずや。まかも身を鬻ぐや、或は親兄の爲にしくは主夫の爲ならぬ者稀。元より清操をば語るまじきも、よく孝悌といふに似たらずや。我れは聖人の道にくらけれど、足下は和漢の學に深く、尙も聖經をとき賢哲を論ず。もし今聖賢あらば、なほ彼等を不義放逸といはんか足下代りて答へ玉へとて一言に遊女の操をいひけちたるをなじり、年比のよしみを忘れて筆を弄びて友をうりつる志こそ嬉しからぬと憤にたへぬ有様なり。翁驚きて偏に京傳百合が上ならぬ由を述べ、「其の世間個人につきて見れば娼妓を妻とし得色驕然たるもの幾方いまだ之を知るべからず、されどかの物語をとり來て我を恨み我を憤る者なし、唯是れ先生のみ、先生少しく誤れるなきか。乞ふ先生かの物語をとりて漫然看過せず、智識を注いで須く熟讀せよ。先生の憤とけて不肖が世を喚起する真意のある所を知らん」(磐傳母記)といひきと、されば遊娼花妓につきて聖人の説をきかんと仰ずることありなけれ。「覆載問堂々として天下の眞理を窺知す。道德の事奚ぞ痴愚猥醜の娼妓を論ずるものあらん

や、孔子曰はく女子と小人とは養ひがたしと、况や娼妓をや。(磐傳母記) など人にもあらぬかのやうに言ひ放ちたり。京傳愈々怒りて、あはや事こそ起ころんずれと見て、京山傍より之をなだめて、誰れも知る事なれど、昔芭蕉翁は門人杜國が目しひたれば、遂に盲目の句なく、朋友杉風が聾たれば、又聾の句をなさりきとぞ。今馬琴子意を用ふる事こそ、に至らず、誤りてわが兄に思まれたれど、他意あるべくも見えぬ。之れより互に慎しみて人に怒られぬやうにこそすべしれといふに、翁もまかへ〜と悔い、京傳も心解けて互に争はぬ初の如く、蓋を更め歎を盡くしてかへりき。

されど心の中はよからざりけん、之れよりは往復年に三四度にすぎず、用事は書簡もてのみ通じけり。さは世の人の思へる如くはた『蜘蛛の糸巻』に記せる如く、ふつに交を絶ちぬるにはあらず。京傳此比隨筆『骨董集』をあまんの心がまへあり、翁に考を求め藏書を借るとて文通はまば〜ありけり。

『著作堂雜記』文化七年の條に

山東京傳子より著述の骨董集に書加る挑灯の考あれどもいまだつくさずと考あらはしらせ玉へといひ來たりよりて聊愚考をかいつけてつかはす事左の如し

(考四五枚ありて終に)

右御約束に任せ愚考をさし上候もし御用立候事もあるべくや一笑

四月十五日

馬琴拜具

山東老兄

右之通また、めつかはす

さあり。又同書文化十年五月十五日の條に再挑灯考あり紙數七八枚ばかりあり。

又同ト此の書簡を葦村先生所藏さて『史海』にのせたり。其間柄親しからぬやうには見えぬ。

此間の雨天にて少々涼氣相成申候益御壯健遊幸奉存候先途は御藏書くさくさ恩借難謝奉存候『昔々物語』一冊右返上仕候御落手被遊可被下候右は好本にて御座候私藏書は寫本にて御座候故校合仕りたく候へ共何くれとせわしく其暇なくアマリ返上運々仕候間先返上仕候追而拜借校合仕度候其節は又々御借可被下候様奉希上候日本風土記今日返上仕度存下候處見出付置盆前にさしかり雜用にて書扱不申是は今少し御借置被下候様奉願候何事も雜用多く本讀候暇もなく世事にのみつかはれ候殘暑去り秋色最中に相成候は一日御同伴遊行仕罷散仕度候欽白

七月十七日

京傳

曲亭先生

なごあり。猶翁が見聞考案の諸説にて骨董集に入りたるもの甚多し。梶久寄進大坂本願寺石の手水鉢の墨本近松が墨迹の寫など皆翁より贈りたるものなり。

かくて文化十一年『骨董集』上編四冊世にいであたり。考證精覈誠に十年の辛苦を償せりとの評高く醒々老人の名は戯作者京傳の名を知るを耻ぢたる上さまにさへ知られ渡りぬ。それにも馬琴の力は興りけり。なほ中編をといそしむ程に積勞つひに病をなして同じき十三年秋九月七日五十六歳にて身まかりけり。翌くる日、本所回向院に葬る、法名智譽京傳信士。

一本辨譽智海京傳信士とあり。今『磐傳母記』による。追て回向院なる碑につきて精確なる訂正をすべし。

葬を送るもの蜀山人、眞顔、靜慮、焉馬、重政、豊國、春亭、豊清、國貞等其の他知名の士壹百餘人、いとめざましきさまなりけり。

馬琴は京山と相見んどの快からず、此の日は子興繼をやりて柩を送らせけり。

さて京傳にいれつる事を思ひ、百合が事も流石に心にかゝれば、ひそかに銀座のさまに心をつくる程に、うたてき事のみぞ日に多かりける。

京傳はつねに万につまやかにして、篋頭店の株さへ持てりける上、従兄弟なる長崎屋何某といふが失せて世嗣なくゆくりなき財をえたれば、少からぬ貯ありけるを、京傳にはかたうせぬるやがて京山万を取りしまりて少しも百合が心にまかせず百合はたゞ商を守りてからく其の日を送るのみ、ありし昔を思ひいでいひ出でつゝ涙がちにぞあかしくらしける。

馬琴を初め京傳がありし程往かひ交らひし人々、折ふし毎にどひなぐさむれど、いつも述懐の涙にうちけられて慰めはえせず、共に京山がつれなきをうらみてかへるのみなり、さて親戚のわざなれば人々せんすべはなかりけり、さても百合はくやしかなしの日に重なりつひには心そはしくなりけり。文化十四年九月には京山漫遊中なれど、かねて豊國して書かせつる夫のにすがた成りければ、美しく表装して床にかざり、かねてめでよるこべりし書畫珍器のたぐひをおきならべ知れる人の眼を招き心を盡くしてもてなしけるが、京山がつれなきことなどいひいで、或はうらみ或は憤り、忽にしてさめくどなき、忽にしてかやくと笑ひ、人心地なきさま。あはれと

きゝめたる人々も興さめてせん方もなければ別かれ去りぬ。京山やがて歸りて此の由をきゝまた其のさまを見て一間うちにとぞしこめて其の病を養へどもうらみのしる事日にはげしく終に文化十五年（改元文政）寅正月廿二日狂ひ死にぞうせぬ。年はいまだ四十路を多くも超えざりけり。人々京山をにくみ怒れど、さてかゝづらふべき事にもあらねば其がまゝにやみぬ。

京山其のさが兄のまめやかなるに似ず。初め笹山侯に仕へて近習となり、中比佐野東洲が家をつぎて儒林に入りなどしければ、其の心さま高く慢れり。勢利の爲には腰をかゝめて其の女を萩の殿の婢妾となせど、風流の友にあへて禮なく、老いて再び笹山家に仕へたれば、我れは武士なり汝が曹とはひとしなみならずと誇りけり。されば馬琴の時めくをいぶせく思ひ我れはかれが師の弟なり、苟も師の恩を知らば我れをもあがめ尊ぶべきを、學才にはこりて我れに下らぬこそころ得ねと譏れり、馬琴はたまけじ魂なれば我れはかれが兄の友たれば、猶兄とし敬ふべきを、往事をのべて侮るこそわりなけれ、と互に譲る事なれば、中らひいよ／＼よからずなりけり。

文政二年馬琴京師の友の爲に『磐傳母記』一卷を稿して京傳が履歴をのぶ。當時は篋中にひめおきつるも如何にしてか世に知られけん京山又うかひ知りて家のひめ事をあらはしたるこそにくけれ、我もえせでや有るとて、隨筆『蜘蛛の糸巻』にわざとならぬ様に馬琴が若き程の事などかきてひそかに其の怨をかへしたりけり。是は後れての事なれど序なれば志るしちくなり。

## 第三節



さても翁の名日に高きを慕ひよりて教へ子たらんと請ふもの多く、さらぬも詩歌書畫をだに得ん、それもならずばまばしの物語だにきかん、面をだに見んと、音づるゝ者多き由、翁はなか／＼にうるさがりて、知人のひきつけなきものにはつや／＼あはず、殆ど世と絶ちぬる由など、前の章にほのめかしおきつ。

さる程に讀本文化に行はれそめてより、名はますます高く、訪ふ人は日に多きに、ふみやの需は彌まげれば、門をどぞす事もいよ／＼堅くなりぬ。さればかねてよりの我れのみ善しの性はやう／＼に強くなりて、頑しき行のみぞ、殊に多かりける。文化三年の秋思もかけず、町奉行所より召されぬ。こぞは一九歌丸豊國などの事ありければ

文化二年乙巳の春より繪本太閤記の人物を錦繪へあらはして是に雜ゆるに遊女を以てし或は草冊子に作り設けしかば畫師喜多川歌麿は御吟味中入牢其他の畫工歌川豊國事熊右衛門勝川春英喜多川月磨勝川春亭草冊子作者一九事貞一等手鎖五十日にして御免あり

それかあらぬかとも覺ゆれど、常に筆を慎める身にはさるべきやうもなしとて、いぶかしみつゝ出づれば、麴町の書買角丸屋甚助より板木師米助を訴へたるにつれてなりけり。

米助は牛込御納戸町に住める頭彫なり。

物の本の繪をふるに景物（人物にも身軀）などはさらぬ工人の刀になれど、おもて頭は良工を要するなり。之をば殊にめんぼり、又はかしらぼりといふなり。

因にいふ。讀本の繪に微妙の刀を盡すは翁の著水滸畫傳を米助がふりたるよりの事ぞ。

永く角丸屋よりのさうしなどをり來たりけるが、わざを得たるもの、癖とて、どかくに怠りがちなる日を過ぐせば、前借の黄金いくひらかを空しくつかひ果たしぬ。新なるわざならぬば黄金を得がたければ、翁になげきて鶴屋へのひきつけを請ひ、そが讀本『梅柳新書』をゑりそめければ、角丸屋の方はます／＼後れゆきぬ。甚助由をき／＼いたく憤り、やがて奉行所に訴へ出で、且こそ米助をいひこしらへてかくはせさせつれどきこえあげけり。時の町奉行小田切土佐守殿、双方をめしいで、吟味の末、米助が怠をせめ、疾く金子を調へて角丸屋へ返すべき旨仰せられけれど、翁はかゝはり知れる事にもあらぬば、そがまゝにゆるしかへされぬ。

互に怨を殘すまじき旨は誓ひけれど、翁の志ふねき性には、甚助がにくきまわざの忘れがたく、我れ素より人の借財の保人たらず、まいて人の實をかりてかへさぬ事なければ、常に後安しと思へりしに思ひきや、理不盡の連訴にあひて、大人氣なくも公を煩はして、白き黒きを争はんとは。此の怨世を終ふまで、えこそ忘れじと憤りけり。

此の年十月、甚助本所森下町の書買、榎本平吉三七全傳其他の發兌書買なりによりて、深く其の罪をわび、『水滸畫傳』の雪の續稿を請ひ、且『園の雪』の校訂をせまりこひたり。されどいかでか、にべなく言ひ放ちてつや／＼之が爲に勉めず。平吉困じて、仰はさる事ながら、『園の雪』の校合をさへま玉はずば、彫刻の誤多くて、却に先生の面目をや汚し玉はんずらん、凡てを甚助が手にかけ

ず、やつがれ往きかひすべければ、と乞ふ事懸なるにぞ、さもこそとて之をばゆるしぬ。あくる春、甚助また平吉及び前川彌兵衛によりて、罪をわぶる事初の如し。彌兵衛のいふやう、『書傳』は甚助とやつがれと合刻なれば、もし彼れを怒り玉は、續稿はやつがれに賜はり、『園の雪』は彼が恠に賜はらなんやといふ。翁はつや／＼うけひかず、よしや御身に與へんとも、甚助が名を除かずは、彼れがためにも綴れるなり、且其の親と絶ちて子と交らんやうやあるべき。ときびしく言ひたしなめて、永く杜絶に及びけり。

さても米助は猶こりずまに飲酒懈怠に其の日を送りければ、冬に入りても『梅柳新書』の刻ならず。翁よしをきいて痛く驚き、此の刻もしも其の期を後れ、發兌其の機にあはずもあらば、我れ鶴喜(鶴屋喜右衛門)に向くべき面なきのみならず、甚助にさへ笑はれんと、志ば／＼米助をはたれど、いらへのみにてはか／＼しからず。かくてありなば、いつかは志はつる日の至らんとて、其の十一月朔日より自米助が訪ひ、其のわざを守りて怠るを防げり。日毎に朝とくゆきて日暮れねばかへらず、ひるげはつねに家より割籠をもたらし、さらぬ折は近きほとりのめし屋にて飢を凌ぎ、ひねもす守りゐて一ひら彫りはづれば傍より之れを訂し、直に補はせ、一卷に至りて書買へ送りければ其の間の勞いたく省かりて思の外に成る事とく其の月末に至りて全効ををへたり。

鶴喜喜ぶ事大方ならず、次の日、翁をどひ厚く禮をのべて、肴しろそこばくをいだし、いかで納めてとこふと切なり。翁笑ひて我れ此の日數もてふみをつらんには、五ひら六ひらの金はえがた

からじを、もし報をほりせば、なとてかく愚しき事をやすべき。吾れ其の人となりをも知らず、みだりに米助を御身に介したれば、其の責あり、かつ甚助に笑はれんもくちをしければ、身をいたづきて辛くして本意を果たしぬ、報など思もかけぬ事なりとてつひに受けず。此の暮又米助鮭一尾をもたらし、翁をどひ、前には毎日の來臨をいとうるさくもうらめしくも思ひ候ひけるが、今年のみゆたけき暮にあひて、初めて御情の程思ひまりぬ。いかで欣の心ばかりを納め玉へといふに、さる心つきたるこそかひある心地してめでたけれ、とあつくもてなし、後々の事などいひさとして、之をば受け納めけり。

猶志ふねくもかたくなしき事こそありけれ。文化の比、浪花に五島一彦といふ者あり。名は惠廻字は文敏もど播磨の儒者にして赤水子とよべり。文化七年そが漢文集『赤水餘稿』一卷をあらはして世に頒てり。中に口を極めて翁をそしれる篇あり。知らずしてふる事十年、文政二年に至り、京の友角鹿比豆流之を見いで、いたく怒りて爲に解嘲の文を作らんといひこしぬ。翁其の文を見て憤りけれど十年の怨をいひいで、世に行はれぬ書をひろめんも愚かしき至りなり、雀をはじくに登階玉を須ひんや、只打すて、あくべしといひやりけれど、心には深く刻みて何十年の後も忘るゝ事なし。『物之本江戸作者部類』にも、『八犬傳』回外剩筆にも、『吾佛の記』の一節にも、わがこし方をいふ度には必かにかくといひいで、胸にみちたる憤をもちせり。

人を人とも思はぬ行、わがあしきをもよしとせる事など、かきつらねなば、十枚廿枚にも餘りぬ

べし。そもあまりにうるさければとて省くなり。

北齋『三七全傳』にて争へる事靜慮に『燕石雜誌』の誤の忠告うけたるに答へたる事『大夷評判記』の事などあまたあるなり。他日かゝる類をあつめて氣質編といふをなす事あるべし。

### 第六章 日のまさかり

#### 第一節 松前老侯

其の志頑なれば人に阿りてめでられんと求めねども、言は仁義勸懲の旨にかなひ、行さへなみくくの戯作者ばらとは異りければ、桃李物言はねど、其の下に蹊をなすとの理にもれず、際高き方々の或は近習して物とはせ、または自らとひて疑をたし玉ふもあり。いひかひなくどり亂したればと辭み申せど、猶ゆるし玉はず、老ばくどひ玉ふさへぞ多かりける。

松平冠山侯は

本姓菅原、久松氏、徳川氏より縁深ければ、源姓松平氏を賜はる。侯は縫殿頭定常朝臣といひ、文學を好み、賢君の聞あり。文化の比『武藏名所考』あみたまへる程、つねにとはせ玉ひけり。深川なる舊君も

化中家を世子尙五郎君にゆづり、退隱して冠山と稱す。又梟崎陳人と稱す。鍋五郎信成、天明元年家を其子舎人に譲る。舎人は十一番組の御徒歩頭たり。舎人子なくて失せたるにや、享和二年弟信行家をつぐ。吏才あり。擧げられて公事方掛御勘定奉行となり兵庫頭といふ。翁をたづねたるは鍋五郎君にや。

翁の名のいや高きをきして、よそならずゆかしく覺されけれど、流石にそのかみの事を思へばあからさまにも尋ねかねてや、藥求めんとて、ひそかに家のさまなどうかいはれたる事あり。

故只誠關根翁の談話にいふ、文化中一日翁墓參の留守の間なりけん、身なり賤しからぬ翁の從者具したるが奇麗丸求めん立よりて夫れとなしに主翁の上をくさくさひたつれ、今日は折あしく家にあらずこの答にいさほいなげにかへりさりぬ。翁かへり來てそがひひつる言のはしくより年ばへの身のこなしなど凡てのさまなきに夫れかあらぬが、よそながら見知れる深川の舊君に似たりけり。夫れよりよく探り見るにまことに其君なりし事知られければさ迄に覺さるゝこそうれしくも添けれ涙にくれて喜びけりぞ。

殊におぼさるゝ事の深き由は文化の頃噂ありて馬琴こそあへなくも此程みまかりぬれなどいひあへりければ、いと心元なくて、人を深光寺にやりてとはさせたりとの事にては知られけり。

此の事は翁の自記『後の爲の記』にくはしくまるとせり。

又御寄合衆石川左金吾といへる麾下の士も、深く翁を慕ひて、自ら琴籟と號してひそかに門人の思をなせり。

三田古川町に住みて高三千石を賜はれり。『八犬傳』第九輯の第貳套の初に序詩あるは此の人のなり。序は長ければ畧して詩をのす。曰はく

犬姓俊雄都八人、俱備里見股肱臣、乾坤到處會無敵、陣際襄翁釋史陳。

そが中に、松前老侯ぞ殊に値遇はあつかりける、侯、御名を美作守道廣朝臣と申し、蝦夷をすべての主におはせり。遠つ御祖の此の地をうちなびけ玉ひてよりこゝに幾代を治め來玉ひぬれば、民安く國平けく心づかひのふしはあはさねど、流石による年波に政ものうく寛政四年の冬より世を若殿志摩守章 廣朝臣に譲り玉ひぬ。之れより我れは松翁とよび玉ひ、春の朝は、花を霞かくれにめで

て、思を三十一文字にのべ、秋の夕は、月を水のほとりにたゞへて、楽しさを二十八字につらぬ、うき世の外に年比をへ玉ひけり。

草子物語は、殊に好ませ玉へば、翁の著はせるを見玉ふ事も多く、従ひて世にありがたかるべき學の程をうかひひ知り、慕しさに堪へず、つひに親ら飯田町をどひ、贅を捧ぐる心にて、物など賜ふとまば／＼なり。

文化十一年『八犬傳』世に出づるや、直に著作堂をどひて其のめでたき由をたゞへてやまず、世の覺の高きをばわが譽のやうにぞ喜び玉ひける。之れより殊にまば／＼門を叩きて、和漢の故事をたづねどひ、雨の日、秋の夜長の徒然毎には琴嶺翁の男領五郎の地名なりを召しよせて今昔のかたひかたきどなし玉ひつ、なほ珍らしき者ある時は分ちて之れを、翁にとらせ、むつかしき事ある時は特に使して翁にどはせ、めでたき事の折ふし毎、歌文を翁に求めてことほがせ、どにつけかくにつけて只翁をいひ出づるなど、恩寵日を追うて深かりけり。

文政二年春の初、殊に實とし玉ふなる大福米一包を分ちて翁にとらせ玉ひたり。初め寛永十七年春二月廿二日、松前家のおもと人蠣崎主殿友廣が家にあやしき米わきいでて、日毎に一升二升と湧かぬ事なく、四月末つ方に至りてやみけり、友廣いぶかしみ且喜びて、之れを大福米と名け、由をいひそへて主君公廣朝臣

松前家第七世の主とあれど詳ならず。此の人より兵、高廣、矩廣、邦廣、及び資廣をへて道廣に至る。

に捧げまつりぬ。朝臣いどあしくもめづらしく覺して、其の内數年を瓶に收め、事の由をさへかいまゐりして御庫に秘め玉ひぬ。是れより年をふれどもたえて虫ばみ朽つる事なく、且ふど此の瓶の開かるれば必遠からぬ程にゆくりなき家の幸ありけり。

さるに當主章廣朝臣の時に至りて松前家にゆゝしき事こそ起こりけれ。朝臣豪邁の質をもて航海の要衝に君たれば、ひそかに外國と交易の風評あり。露西亞との間やう／＼事まげからんとせる程なりければ、幕府にもいと易からず思ひけん、享和元年の春、御小納戸戸川藤十郎安倫大河内善十郎政長して松前の地を巡視せしめつ。此等の復命は如何なりけんか、文化四年春三月にはかに蝦夷の地をめしあげて奥の伊達郡梁川にうつしたり。此の時大福米を見るにさしも百年あまり全かりけるを、此の一年が程に虫ばみくちて粉となりたる者半を過ぎけり。さても／＼と怖れあひて、扱朽ちたるを除き、全きをば又瓶に納れて梁川におかせ玉ひけり。

文政元年冬十一月廿一日、御勘定彼交代の時倉の中取り調ぶる打ふど開き見るに半にも及ばざりける米の七八分になりあたり。章廣朝臣見そなはして且驚き且喜び、次の年初春、その米幾合かを梁川より齎らして老侯に奉り玉ひぬ。老侯もいと喜ばせ玉ひ、家の幸あらんずらんと、やがて一包を分かち翁に贈り、つぶさに事の本末を告げ玉ひけり。翁もいたく喜びて、さる大方ならずめでたき物を殊に賜はすこそかしこくも忝なけれ。さても古もかゝる事ありけりどて、天智帝紀を始め和漢の故事をかきつらぬて言ほきをまゐらせけり。老翁もはえありけりといよ、翁を慕ひ

なりけり。

老侯またかつて馬を好ませ玉ひけるが文政元年冬一駿馬を得玉ひぬ。之れを錦帆と名づけてめで玉へりけるが、翌年春二月長臣蠣崎左兵衛廣晃してこれを試みしめ玉ふに、兩日にして鎌倉往返二度に及べり。此道程六十七里弱こは未曾有なりとて、老侯殊に喜のあまり翁に其の記を求め玉へり。翁辭みておのれはわきて漢文をよくせず、能文の儒者多かるに此の義はゆるし玉へと申せど、あだし人には望なしと仰すると切なれば、やがて筆をとりて「駿馬錦帆の記」一篇を綴りてまゐらせけり。

此文『菟園小説』五馬、三馬、二馬の中二馬の二にあり。

文政三年秋老侯翁をおぼす除り、琴嶺が宗伯とよびて醫をわざとせるをもてめして月俸三口を與ふ。是れより出仕まばくにして恩遇いよく深かりけり。

文政四年冬十二月七日、大福米の奇瑞にたがはず、松前家に大吉事あり、かつてめし放たれつる蝦夷地をかへされ玉ひぬ。翌くる五年春立つ比翁ことほぎの心をよみて奉れる歌あり。

こたび舊領にかへらせ給ふことほぎの心をよみて奉れる長歌

瀧澤馬琴

陸奥の えみしの國は くさのきぬ 眉連りし なめ人の たけき心に 歌なす 己がまにく 行ひて 親を親さし 墓はれば 君を君さし いやまはず 家しもあらで かちごちに あさりすなごり 朝な夕な ふす弓さつ矢 さらほこり そむきまつるを 朝廷より 軍の帥を またしつゝ 討たし玉へば 従ひつ あがは亂れて 年あまた 貢をたえて さもすれば 青人草を ほふりたる 嘉吉の年に 若狭なる 武田の殿の 白眞弓 遙々道を ふみわきて かゆきかくゆき

討ち治め 教へ導き まつりごち ちりぞ鎮めて 常磐なす 松前の城に 百年を 四ツ重れつゝ いそのかみ 古りにし 事の 彌高き 御代に開えて いやちこに 遠つ御祖の 麗しき いさをも送に 生よみの 甲斐なき途に まがつひの 損ひけらし 武士の やな川へきて 月も日も うつればかはる 島つ鳥 うかりける世に 喜の 時は來にけり ゆくりなく 本の境に 本の如 かへされ玉へば 冬ながら 春かこそ思ふ 春くれば 東のさたを こさきへぐ えぞに傳へて えぞ人の うちもあほぎて たのもしく 思はむのみか おしなべて 知るも知らぬも 難儀の 千歳の後も 龜の子の 万代までも 松竹の 榮ゆるまいに 限なき 北の守は 君ならで 誰やはあるま かくばかり 言はさまつる 言の葉に よむ共つきト 三枝の ささくありける 事のみにして

反 歌

陸奥のえぞの高濱荒れぬ共立かへる涙の花ぞめでたき

四月十五日章廣朝臣父子世子千之助君任官あり歸國の暇を玉はりぬ。よりて宗伯をめし俱して食するに祿八十石月俸五日を以てせんと玉ひたり。宗伯こたへて仰はかしこけれど、父母稍とあそるべき年に向かはんとせれば遠く離るべからずとて、辭みけり。されど君にはなほ止みがたくやありけん今より後出入醫師の筆頭となし譜第の家臣並たるべしとて、近習格となされ、老侯の上をたのませ玉ひけり。

かゝる御覺なりければ此の後も間なく時なくめさせ玉ひけるが、老侯志州朝臣相つぎてうせ玉ひ、幼君天保五年に家をつぎ玉ひてよりは、值遇又初の如くならず、宗伯さへ其の翌年うせにければ中らひ全く絶えにけり。

## 第二節 眞葛の姥

百五十八

その高き名を欽び、そのめでたき筆を慕ひよるもの、女にさへぞ多かりける。

尾張の御内人何某とか聞こえたるが、母とじはその綴りたる『新瀉』といふ草紙を翁によせて、引直し玉へと請ひきぬ。本郷なる田中氏の少女は、草紙物語は及びなくともふみ書かんすべをだに教へてどこひて、幾度辭めどもなほこりずまに、こゝに十年餘に及べり。又ある寡の、其の子の爲に教どもなるべき者を、かきてといひ來つるもあり。いづれの志のあろかならぬは知れど、既に幾人かの若者をすら辭める上、よしや道は隔てりとも、老幼年の志なありとも男女のなからひの親しきにすぎんはうしろめたしとて、許さざりけり。

さるに文政二年の事なり。春きさらぎ末つ方、従者ひとりあたる尼の、著作堂をおどづれて、主の翁にあはんどいふがありけり。あやにくに人のあらぬば、翁自らいで迎へたれど、かねてより世を避けたれば、今日は家のもの皆外にいで、我は、近きほどりなる者の、まばしの守をよせられたるなりといつはりて、來れる由をどへり。尼は草紙三卷に消息をそへて、こは人づてならで翁に渡してとよせられつる者なれど家にあらぬをいかにせん。明日とひまひらせんに、一筆のかへし賜はらなんと申し玉へといひてかへりけり。

翁やがて其の狀を披き見るに、いとあはしく書き流して、其のさまいたくおごれり、日比思へるよしをかきあつめて「獨考」と名けたるが、三卷になりぬ。いかで之を世に出だして、わが思

をもしらし、あやちほぢの名さへのかさんと思へれど、たよりなくてすぎぬ。あはれあしからん節をば引直され、そなたにて彫らせ玉はなんやなどありて、馬琴様、陸奥の眞葛とあり。あな禮なき物の問ひやう哉と思へど、まづ其の草紙をよみて見るに、元より學淺く、心せまき女の筆なれば、傍いたき事のみ多けれど見る所なみ／＼に異なり、世を慣れる筆づかひ、かいなでの女には似ざりけり。まして名たゝる儒者も國學者も多きを、戯墨の外に我れを去りたるも心にくく、はるはるとよせぬる志もむげにすがたしと思へば、二言三言のかへしまたゝめて、あくる日かの尼にとらせぬ。

廿日ばかりありて又使あり。こたびはいたくへりくだりたる文に、「昔がたり」「秋の七草」とはずがたり、「筆のすさび」、「陸奥はなし」、「磯づたへ」などこゝらの草紙をそへたりけり。我が身の上をいぶかりおぼせる理にこそ侍れ。かねてつゝりおけるさうしどもまゐらすれば、よみて走り玉へとて、其の遠つ祖は播磨野口の城主長井四郎右衛門なる由より、大父長井大庵は紀州侯の醫となり、父平助は工藤氏を冒して仙臺侯のくすしとなれる事(以上「昔語」)其の身またはらからの事、實の名はあやといへど、はらから七人を七草によそへて、己は眞葛とよべる事(以上「秋の七草」)親の望にまかせて、君の御内人只野伊賀にとつきて、江戸より陸奥氣仙の奥に埋れぬる事今はやもめにて傍いたき繼子とくらせる事(以上「とはすがたり」)などさへいとつばらかにつげおこしぬ。

百五十九

此送りこせるさうしの中「筆のすまび」には歌文などあつめたるにや。見ざれば知らず。「陸のくばなし」磯づたへ」は共に隨筆にて博文館『温知叢書』中にあり。

さて「獨考」の事をばくれくも頼みきこえて女の身のなしがたき事とは知りながら、猶世を濟はばやのはかなき思に、我れから苦しむぞ無益しきなどなげき、心にこめて獨り物を思はんよりはと、そいろに筆を染めて三巻をなしぬ、さて誰れに志らげを頼まばやと思ひまどへりけるを、神の告げさせ玉ふにまかして、かうは翁を煩しまつれるなり、などうちわびて、瀧澤解大人先生様、あや子としたり。

翁之れにかへしすとて、陸奥の文に御筆の暇もあはさらんを、心なくてなどわびたりければわが宿の花さく比も陸奥の風のとどりはいとほざりけり

とまれ「獨考」の事はことしの暮までには、よくもわるくもなしはて、御笑にこそ供ふべけれどいひやりて、月比をへにけり。

之れより消息のかよひ二度三度ならず。かの初の尼は眞葛の妹にて、瑞祥院菽の尼といふよしも知られたれば、之れども歌などよみかはして交らひけり。

彌生廿四日翁よりかへの文となりて『國民之友』第九十五號に落合直文君のいだされたるがあり。事の末末いかにぞや覺ゆるふしなきにあらざらん當時の参考もならんかさてまげきをそきてのする事はせり。いゆる比始めてさせ玉ひかすくあからさまに答へ奉りしよるづ無禮なるをも尤め玉はて再まはせ玉ふける御消息のれもころなる目のあたり見参に入る心地にて侍りき春もや、暖になり候にいよく、ますく御機嫌よくあらせられめでたく奉

賀候さては御先祖并に父君御はらからの上をさへつばらかにまらせ玉ひしによりかれてよりさあるべく思ひながら今更にうち驚き候迄かしこし見奉りて侍り誠に御家からは名たるもの、後に殊に數世御志をうつされず聞くにすらいと勇しきはさすがに御先祖のなごりと思ひながらいさありがたからむと見奉り侍り今とても紐の國の殿なり氣仙の殿なり御家二かごに立せ玉ひてたぐひ多からぬ主をもたせ玉へばなほかくともあるべきにあまたなりける御同胞もなごり少く世を早うし玉ひたるはいさいたましくこそ思ひ奉れつきては遠つ祖の上さへ世に知らせまほしく思ひ入らせ玉へる御志こそいさめでたく思ひ奉れ世に男も生れながら女の心さなる多かりまいて女にして男魂はいと有がたし(中畧)神むすびの神のひがとにやかゝる姫たちをなごて男には作り出し玉はざりし必よ男子にて此兄弟ましまさばき名をもあげ家をも起し玉はむになごせざるに思ひやるにつけてもまづ涙のみはふりおちてせむすべなし七はしら兄弟を秋の七草にたくひ玉ひし御文章いさあはれに侍りこはまばらくこゝにまゝめて暇ある折うつしさらばやと思ひ侍りそをゆるさせ玉へかし。その類にはあられ共我も初は兄弟七人侍りよたりは兄にて二人は妹なり。此四人の兄はいづれも世を早くして或はあげまき或は二十餘或は四十路を限にして侍りきのこれは妹なれど心さまいさ淺はかなれば詞がたきになる由もなしわが幸なきにて君の心ばへをもやしほに思ひやり奉るにこそ世に知音は得がたければ博雅は琴の緒をたち侍りさるを同胞御志を一にして先祖の御名をさへあらはさむと勵み思し候事誰か感づまつらざるべきされ共事のなるさならぬほすべて天つ神達のわざに侍ればならずさてうらみ玉ふにもあるべからず一旦の名はなき後にきこえずなりゆくが自なる勢に侍ればかく申すにて候夫をいかにぞいふにすべし侍る文には禁忌の事をゆるされすひまり考にあらはし玉ふ事は多く禁忌にわたり侍り其禁忌の筋をけづりまいては板するも要なしやつがれが年々著し侍る草紙に此禁忌を逃るゝを第一の勤にし侍るをや夫も書やにわたらばで自板をふらせ玉はゆゆるさるゝ方も侍るべけれどもさては世にひろまる事も稀なり殊に三巻の草紙を板するには黄金あまた費すわざなればたやすからず侍らむかしはあれどかの獨考を三巻うつしりて心ある人にしめしなば十人に二三人はうつしむむむとするものもあるべしそれより又うつし／＼せはながく寫本にて傳はり侍らむ此傳はるる傳はらぬまはその文のよしあしによる事にて

あながち板せし故に長く傳はるにもあらず寫本なりきて残らぬ者にも侍らればそは物よくさゝのへて後に謀ふべしにかく  
眼前の事をな覺しめされそつきては獨考のうちに見え候水の下にあつまる虫の事などは禁忌にかゝつらひし事もなく殊に御  
説新しく見奉る此一件を己れの著せる支同放言のうちへかきいれ苦しからず陸奥氣仙の眞葛女の説として顯し侍らばや  
思ひ候もちる獨考著作の事又苦しからず長井の御末などいふ事も夫はなしにほのめかしおき侍らむやまかくも覺しめ  
すまに／＼すべし猶かの虫の事ならぬも禁忌なき御説はさり／＼にひろうし侍るべしこそはかり奉る誠心かしこき御心の  
末に露ばかりのかたう人はありけり覺しめされよ。それもたはれたる草紙のほしなどへ加へ候へば早くひるまるべけれど  
さては後々のためにわろし隨筆やうのものならはあたら御説も作り物語のやうにや聞え侍らむ。  
まも世の中は胸若しきものにて古き新しき書にも教になるべきよきは見る人まれなり。世に書買程利の爲にせざる者なけれ  
ば書の雅なるを喜ばず俗にちかく今めかしき物の外板にふるはいさまれに侍り歌文章などの折々板し侍るは多く弟子をもて  
る人にてこなたへ何十部かひさり侍らむなど初に約束して板にふるはせ或は密に黄金をよせて刻らするもあり殊に名高く  
こえたる江戸にては春海千隆儒者にては北山鶴齋なども古書にすがりて自説を著せるのみ自の著述はいさ／＼稀之伊勢なる  
本居宣長こそ著述はなるめれど夫すら玉あられ字音かなづかい漢字三音考のたぐひのべて作らざる字書やうの者は今に行  
はれ侍れど玉かなづかいふ隨筆ものは今は人々すまざるにやちか比は其文の直段いたく卑しくなりゆき侍るにて知られ  
たり古事記傳は彼人生涯の大著述にていさよき者なれど價貴ければ持見ぬ人多し雅の文は今の人の著せるが多かれど聊も  
やまつとあればの／＼しりそするのみに侍れば文屋には自眼ありて板行するものならぬにこのそれみ言なきにげに利の多  
らぬは此故にこそ思ふ心つかぬはなし歌文章一くだりのふみすらかくの如くして人の教さなるさとし言は聖の教さといふ  
さも好みよむ人稀之末々なる世の人心名聞利慾にさかしのみ身の行さまわるきを耻にせざればなるべしよき文の行はれぬ  
はかしこき人の用ゐられぬに同卜人の教になるべき文の行はれぬは是諫言のきかれぬに同卜かるべくや商人の利にふけるは  
もちろに侍れど今の世は武士も十人に八九人は利をたづねざるは稀なり疎高く仕おもく常に上下引かけていさいかめしげな

る或はかせなごよばれて人の師となりつゝ聖の教をさへづり侍るもはた利の爲にして行さまには臭味あるも侍り形はいか  
にも羨むべき人々なるも心さまの賤しき傍いたきも侍るめれば己は露ばかりも身の賤しきを耻とせず行のひさしからで心  
の賤しきを耻と侍り(下略)  
なほ申すべき事あるもあまりになが／＼しきはうるさくぞおぼしめすべき尙かされて雁のつばさをまちてこそつばらには申  
すべけれあなかしこ

彌生二十四日

眞葛賢娘へ

御もご人々

解

まも月になりぬる比、かの事は忘れ玉はずや、などいひおこす事さば／＼なれど、もしわるきを  
かりとらば残らん言の葉もなかるべしとて、かなづかひのたがひたる、文字のあやまれるなどた  
いし、別に「獨考の論」二卷(又は三卷ともいふ)をつらり、之を送るとて、いつ／＼までもど  
は思ひ侍れど、男女の交はかしらの雪を冬の花と見あやまりて人もやどがめん、是れを限りど  
おぼせなどいひそへたり。眞葛いと喜びて御暇なき冬の日、春のまうけをよそにして、かうねも  
ごろなる御心の程、いつの日にやむくいまつらんなどかきつらねて、越前のさくに紙十五帖、同  
じ國の剪刀、陸奥名取川の埋木の栞、もとあらの萩の筆など送りこしたり。

翁よりは贈ものゝ喜をのべ、みちのくよりはそのかへしありたれど、互の消息こゝにたえけり。  
されど此の後、雨にも風にも、月にも花にも、流石に思ひいでられてありし消息とりいで、そ



いろに慰む朝けもあり、涙にまどぬの袷をうるほし、えまどろまぬ宵もありけり。事(後章)にその第  
文政八年、翁同好の士と兎園會を開き、各々文をついで奇を傳へ、思をのぶのぶべし。その第  
十會の時、一翁眞葛の姪の傳を詳にしたる、其の文同會集説のうちにある。

『著作堂雜記』文政九年戊辰四月七日の條に左の意の事を記せり。  
今茲三月尾張の友人俳諧師田鶴丸松島に遊ばむとて著作堂をこふ。よりて眞葛が消息をきかむを托す今日歸着。僅に眞葛

は文政七年に身まかりぬこの計をもちらせり。  
(第二節完)

### 第七章 未ばかり

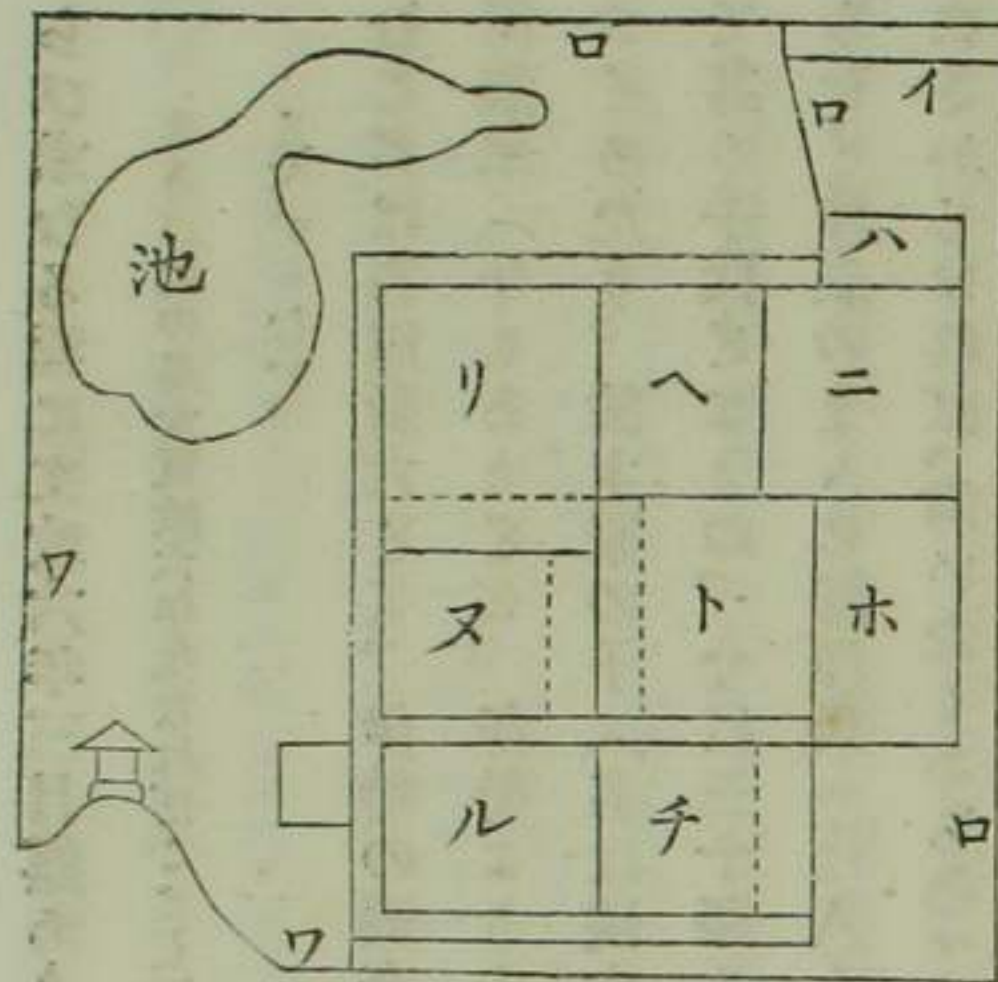
#### 第一節 わたまし

榮えゆくまゝに、その程をこえさまになりゆくはうつそみの人の身にはえ免れぬ勢にや。さしも  
つゝましかりける翁も、世の高き覺に惹ひてか、やう／＼に万をはでやかにぞ行ひける。その輝け  
る名と比べてはあへてさまではあらねど、そが神田なる家のさまなどよ。筆を命のかたくな翁  
の住居には似ざりけり。

本郷臺の巽、神田明神の麓、同朋町に地を限る事八十坪、

俗に鼠屋横町といひたりとぞ。今の末廣町なり明神社の女坂を下り。左へ二三丁今諸岡何某といふ醫師のすめる角より折ま  
げて縦横九間が昔の名残りなりと翁の孫飯田町なる瀧澤つぎ女の物語なり。

家居廣しとはあらねど、爽にすみなして客間あり、居間あり、書室あり、くりやあり。室を限



る事八ツ、さうじふすまを初め調度すべて備はらぬはなし。植ごみのさまはたいやしからず。花  
は落葉の見苦しとて常磐の色を多くうえたれば風の調いとゆかしく池の漣金鱗をうかべてまばゆ  
し。良には高き山を築き稻荷の御社を勧請せるは鬼門の鎮とにや、庭もせに生ひ敷ける芝生を塵  
もすゑじと掃らひ清めたるなど心地よしとよし。あはれいかならむあて人來まさむとも耻かし  
からぬさまなりけり。

之はつぎ女の物語によりてかくもありけむさける瀧澤家のさまなり。

つぎ今年六十六歳、七歳の幼き時見捨てたりし家を六十年の今の記憶に求めたるなればあへて誤なしにはあらねど大方は

かいらむさいふによりてかけるなり。

上圖におきて イは門、ロは塀、ハは玄関、ニは藥局にして診察所を  
かれたる所、ホは茶の間にてくりやをかぬ、ヘは居間、トは納戸、チ  
は居間、リは客間、ヌは書物置場、ルは納戸、ナは便所、マは垣、を  
以て限れるは床の間押入等、室を圍めるは椽なり。井のありかはき、  
もらせり。本圖は大方は二分一間のつもりなり。

翁はかねてより興繼には兄の祀をつがしめむの心がまへ  
ありければ、幼きより醫師のわざを學ばせ、文政の初こ  
ゝに家を求めてうつらせけり。我れもどく世の事を捨て  
ゝとは思へども家をば流石にてあはれよき聲をがなとえ

らび求むる程に文政六年三月媒ありてさきが夫を定めぬ。

さきは翁の長女寛政六年生なればこゝし三十に及びぬるといふよし。二度三度入夫して都合ありていたしたるにもやあらむ。

むこ名は吉田新六とて、伊勢の國奄藝郡白塚村の生なり。幼くて江戸にいりて長谷川町なる吳服問屋俵屋（今もありとぞ。伊勢よりの出店にてかなりの大店とぞ）の小ものとなりてまめしくつとめたり。後主家の子（名は淺太郎）いで、志摩屋（之も吳服商などにや）をつぐに及びて従ひて其の手代となりぬ。今は三十路も半を過ぎて、惑はずといふ年に近きぬれば、いつまでかくてあらむと仲立のまゝに瀧澤氏へは入りたり早くより商家に人となりてなりはひの事はさらなり、萬にさかしければ、翁いたくおちめて、いでや年比の望足りぬ、とく家をわかき者にまかして我れは浮世の外に筆をもてあそばむとて神田にうつらむとはしけり。

冠山侯松前侯などまばく訪はせらるゝをあまりに見苦しかるべしとて、さてこそ地を東の方にひろめ、新に家をたて、園を作り、木をうるゑ、池をうがち、垣をゆひなどまけれ。工事三月より十一月に及びぬる上、八月中比、嵐ふきすさびて垣をたふしなどしたれば入りめ思の外にかさみて八九十金百金にも及びけり。

かう思のまゝに居なりたれば、あくる文政七年三月吉日をえらび、飯田町の家株をば舞にゆづりて二代の清右衛門となし興利とよばせ

會田氏の清右衛門は幾代なりけむ。之は瀧澤を名のりてよりの二代なり。

我れは瀧澤笠翁となんよびける。

『著作堂雜記』文政七年の條に

（上巻）かくて今茲夏四月に至りて尙させる功はなけれ共身退く事をえたり。隱居して後の名を何ぞかつかましきかかれてより思ひめぐらしつゝ初は公民とつばやと思ふものから公の字は何ぞやらん憚あるに似たればさてしもあらず。或は鈍齋或は淵靜或は愚山など様々にえらみしがごも（中巻）つひに瀧澤笠翁とさなへかへてけり。清朝人に李笠翁といふがありけり。著述多かる中に傳奇の作殊に行はれて名たる才幹なりき其名を擬するにはあられどわが一號を笠翁といへば彼にも似たる過世あるにかと思ふまゝになん。此名を改めしは文政七年甲申夏四月望の日の事なり。

隠れても猶あだなりき笠翁の名は願れし天の下か。

其の五月九日びんのそゝげを束ぬるが煩はしどてかふべをそりこぼちぬ。

『傾城水滸傳』初篇第八册花がらのおたつ出家の條の書入に

吳竹の世をすつるにはあられ共びんの毛をざれたぶさ細りて元結の届きかれるを油こちなく物するがいさいよせくも煩はしさにいぬるさつき初つかたかふべをなんすりまらめて

雪にのる越路もおのが白髪もそりすてしより夏はすいしき

さくらすきみつゝ獨笑へりをこまきわざながらこのまぐみにさりあはせてかきいれの埋草さすあなかしこく

刈拂ふ利鎌が下の夏草の根も止めずば何か生ふべき

同じ月やがて神田にうつりすみけり

第二節 耽奇會 兔園會

さても翁の文化の末を思ひいづればあさましき迄の世のあり様なりけり。年毎に綴りいづる文の数は讀本よりはかなきさうしに至りては十種に下らず。稿を請ふ文や門にまちて我れをさきと争へば夜を日にいそしめどもなほひるげをば机をはなれてえ食はず。夜は亥をすぎても筆をとる事あり。夫より今昔の書をよみとよみてもし佳境に入る時は曉を覺えず。隙間も朝日かげに驚かされてやがて硯にむかふ時もありけり。かくて久しきをへたれば、さしかよはしども覺えざりし身もやう／＼に病まりそめてかしら重く目くるめき、口の中はれたれ、むし齒痛みなどしてたへがたくなりぬ。

かくてはえあらじとて、紀安長法眼の訪ひ來つる折、志か／＼の由を語りければ、法眼諫めて、九石の誓も變きて久しければ折るといへば、夜をだに徐に安らひ玉へといひけり。さは思ひまりながら、わかきより愁に義侠の心ありて其のくせ今にうせず、諾ひし書をあみもはてずば、人に見ゆる面なからむとて、多くは初より需に應ぜざれど、あやにくに志ひもとめられてかくはなりぬ。夫れも思へば愚なりきとて、是れよりは初の如く勉めず。『八犬傳』『巡島記』の外はか／＼しくはさうしも綴らず。閑齋（又は間齋）と名のりてひたすら身の養につとめけり。まして文政五年よりは故ありて『八犬傳』『巡島記』の筆をさへとめければ、よしや其の間わたまし何くれの事ありきとも『金比羅船利生續』『傾城水滸傳』『殺生石後日怪談』などや、長き合巻を出だせりとも、なほ閑齋の名はあだならざりけり。

『巡島記』は發見の書や浪花にてきにつけかくにつけてわづらはしければ文政四年第五編をい出して後まばし休みたり。『八犬傳』は翁の殊に力をこめぬ用たる筆とて念るべきにあられど、書賈山青堂家衰へて文政五年發第五輯迄の刻までを湧泉堂美濃屋甚三郎（合巻『見雷也豪傑物語』の作者なり）にうりけり。こなたにはかほるべくもあられどはりつめし力のゆるみたるやうにてかくにもものうくみの甚又まひても求めれば、二年三年は筆をおきたり。

此暇ある間に唐土小説の三大奇書の一なる『西遊記』を案して合巻『金比羅船利生續』をつゞり文政七年芝甘泉堂より其初篇を出したり。其原の書さいひ翁の筆さいひ翁を好む人いたくめでつがへりけり。此の行はるゝを見すまして翌年『傾城水滸傳』をいたしぬ。こは『水滸傳』の翻案にて草賊亂倫の趣をかへて勸善懲惡の旨をこめたれば行はるゝ事『金比羅舟』にもましけり。かくて年をおひて二書をつぎいだしければ婦幼さへかつては見もかへらざりし『西遊記』『水滸傳』の國字本をめぐるに至りぬ。

此比まで合巻はなほいさ淺はかなるものにて編をつぐものも二三編冊の多きも五六冊をいづるものなかりしを『金比羅船』其初をなしてより合巻にも長編大作（必しも名作にはあらず）いでたり。『見雷也物語』『白縫物語』『釋迦八相』『田舎源氏』など長きものにて十編二十編の者は數へがたき程なり。

翁が神田の家程近くする屋代輪池の翁といふは其の比なだゝる手かきなりけり。和文和歌にも拙からず。かつて台命により都に旅寐したる紀行『道の幸』三冊ありまことの名は太郎弘賢（後に詮文と改む）とても幕府の小吏なりしがやう／＼にへのぼりて祿百石をはみ御右筆格となりけり。今はよはひも傾きぬれば、仕をやめ、好事風流に幾年かをあくりぬ。

翁神田にうつるに及びて、好む所同じく、年ばへはた多くたがはず、家さへ程近くすめりければ、互にゆきかひて二なく交はりけり。

輪池翁は有名の藏書家にて其書庫を不惑文庫といひけり。翁之を借りたる事しばしなり。又稗史小説の類書よりかしたる

なほ道をもてあつまる友少からず。柳川立花侯の御内にて西原稜江父子麾下の士に桑山修理書家に關克明父子藥商山崎美成など十名あまりなり。

西原稜江一輔といふ。立花家の用人なり。好事にして家に奇器珍品を藏する事多し。同好和新右衛門といふ。一輔が二男なり。立花家の留主居さなる。臨齋度をかえたればさて此後國醫居を命ぜられ天保中うせぬぞ。松蘿館と號す。

桑山修理は本所三ツ目富川町に住み餘千二百石を食み頗風流に富めり。龍珠館といふ。關克明名は忠藏、廣南といふ。書家關其寧の子にて土屋家の士なり。

同思亮名は源吾東陽といふ。克明の子にして西原稜江が婿なり海棠庵といふ。山崎美成名は新兵衛字は文卿北峯と號す。

又理齋好問堂なごもいふ。下谷の藥舖長崎屋の主なり。

その七月桑山西原の議にて耽奇會といふまどをひらきぬ。月毎に日を定めて、今日は龍珠館、又の月は松蘿館、さては著作堂、海棠庵とやうに互にその會の主となり、各とあやしきめづらしき品をもてより、かれ評じこれ論じてたのしむなりけり。

其まごめに入れる人々の大方を知らむとて其十一月西原家の會にあつたりたる人の名を翁の雜記によりて次に記す。

戸田美濃守殿 屋代太郎弘賢 關忠藏 同源吾 中村佛庵 長崎屋美成 亭主西原一輔 同二男新右衛門 同長男某 曲亭

合せて十人なれども會毎に多少の異動はあるべし。されど珍器名仕には限あり西原桑山などさるべき家にこそあれ、翁をはじめ多くの人は世にも希にて人にもほこらむずるものさほ多くもつべしや。あくる文政八年の初よりは、翁、海棠庵、好問堂の人々いひいで、兔園會といふまどをひらきぬ。こは今昔めづらしき物語、さては古事考證など大きくがまゝに思ふがまゝにかいして各まどをのむしるに披講するなり。二の會どもにめづらしきを旨とし、且あつまるやうも同じけれど、一はたからをもたる好事家の意にいでは文に得たる人々のすさびなり。まばしが程は並び立ちてさかえけるがいつとはなしにどもにやみけり。後にその會の記をあつめ、一は『耽奇漫錄』といひ、一は『兔園小説』と名け、共に翁の許に收めり。

兔園會の人々はまづ翁を始め先にしるせる好問堂、海棠庵、輪池堂、松蘿館、龍珠館等の外に麻布學究、文寶堂、秋生護園、

清水豚齋、中井乾齋及翁の子興繼の十二人を本員とし、京都の人角鹿李庵、柳川の人西原異樹を客員とす。

麻布學究は大郷金藏其則の事なり。其則字は伯儀號は信齋越前鯖江の士なり。林門五藏の一人として其名高し。

文寶堂は飯田町の藥商龜屋久右衛門が事なり。蜀山人の弟子にて後師の名をつぎて二代目蜀山人といふ。

護園は秋生窓右衛門維則が號なり。字は式卿本姓は淺井氏也物徂徠の孫鳳鳴の養子となりて郡山の儒官をつぐ。

豚齋は清水俊藏正徳が號なり別號を赤城といふ上野赤城山下の生なればなり琴嶺興繼が經學の師なり。

乾齋は中井準之助豊民の號也。豊民は太田錦城の門人なり。

翁が傳へたる分は小津桂隠に譲りたり翁の日記にあり。

かくのどけて此二年三年は夢とすぎぬ。『八犬傳』巡島記の第六編をつらりと『金比羅舟』  
『傾城水滸傳』のいみじき世の覺とが此間にやゝ記すべき事にぞありける。

### 第三節 憂のかずく

みちぬれば月もかくなり眞盛はやがて傾く初めなりけり。盛にもゆる火にも猶いくらの水は含めりどよ。げにやまばゆき福にもうちまめりたるかなしみは伴へりけり。そのあらはせる書どもは、文字あるきはみ深山の奥荒磯の果にももてはやされその身は高ききはの人々はあふがれ尊ばれ世に慕はれ人に敬はるゝ翁の身には世に思ふ事などさらになげなれどそれはたよそめなりけり。翁のうひ子鎮五郎與繼は生ながらに頑痴の症あり。二三歳にていえつれどなほ万によわくして世の常の童とは似ざりけり。さはうちはなる性を、特に物堅き翁の厳しき教の下に唯大人しく生ひ立ちぬれば獨樂紙鷲の外にいづる遊はかけても喜ばず。かりそめの心やりにも机をのみ友とはしけり。

かゝれば早くより文字まりそめて九の程より清水赤城(翁の兎園會の友なり)の門に入りて聖の教をうけ又金子金陵に従ひて書を學べり。十一二より佐野東洲の弟子となりて手かく事を習ひ佐野師身まかりて更に荒木適齋の門に遊べり。

はげむにすゝまぬわざもなくてまばしが程にいづれ心にくからぬはなき程となりぬ。あはれいで

世にも人にも見せさせてむどの親のほこり心にて『燕石襍語』『烹雜記』などに其筆ずさみをのせたる事もありけり。さはれ生れてかよはき身のかうくさくのわざにえたへず。ことに眼かすみ腕うちふるふにせむ方なくてやがてにして書と手とはやめけり。文よむ事はかねてしもいと好めれば太田錦城蒲生君平龜田鵬齋などの門に出で入ります。つとめ學びけり。

年十四の程より父翁がかねての友なる小川町山本法眼

法眼名は宗英表御番醫師四丸兼勤なり父永春院法印の後を襲きて與御醫師とされ法眼に叙せらる。永春院宗洪法印は翁が幼き時の師なれば自然いで入りにて懇なりしなり『兎園小説』中一節に「扱も件の法眼は予三十餘年ばかり交遊の義を辱うせられたる少年よりの友にして云々」とありて其死を悲しめり。

に従ひて名を宗伯とよびくすしわざをはげみぬ。かく二年三年をふる程に官醫の弟子は只管名聞にはやりてわざすゝまず、それらと立ち交らむは心地よからずと思ひまりて更に神田玉が池のくすし鈴木良知に従ひ猶鍼の師小坂元祐の許に通ひそのわざくを學びえたり。

わざのすゝむにつけ身のかよわきをぞ父母のつねに心安からず思ひわづらひしがそが十八の時なりけり、都浪花の旅に思はずも脚氣症を引おこしぬ。させる難症にはあらねどはかしくもいえねば今更にまた憂をましけり。

我を初め妻與繼まですると道にたがへたりとも覺えぬにかううちつらく不幸はいかなりけむ宿世の因なるらむなど流石に我よしの翁のさかもうち折れて方に迷深くなりぬ。さても迷には又災の

つきまどふものなりけり。今は世にいづべしとの父の心より文政元年秋の程ふさはしき家もはや年頃もよくわざもたけぬ。今は世にいづべしとの父の心より文政元年秋の程ふさはしき家もと求むる程に神田明神下の家を煤つ者あり。興繼が知る人にて何某法印とかやいふに卜はせつるに乾の大有をえ十八變爻澤火革にていとよろしからずと勘へけれどほど／＼成りぬる約なればとて心にはかゝれど引きうつりぬ。

興繼つねはうちはなる性なれど時折には怒にまかせて知らず／＼事を破る病あれば父と別れては殊にそをつゝしまではどの心より新しき家を守忍庵とよびて自誠しめけり。

年わかき身のいかにやなど思ひ煩ひしにも似ず、父翁の名に蔭にやいやましに世の用もあつくこどに文政三年には松前侯にめされ五年には出入醫師の筆頭譜代家臣並近習格になされたり。あしといひし卜筮こそ據られねど覽ゆる程の時めきも只身のかよわきにぞ思ひなげかれける。

さても守忍庵の東に隣りて刀研師すみけり。常にならずものをつとへてよからぬ事にのみふけりければ物がたき興繼との中らひつねによからず折ふしはいひ争ふ事もありしが遂に交を絶ちけり。地主橋本氏はたその人をにくめは之を逐はむかを興繼に謀りたり。迷深くなりぬる翁はやがてその善悪を定めむとて關帝識をとりて見るにその文いとも／＼あしかりければ夫となしに斷りぬ。かくて元のまゝに幾年をすぐす程にどにつけかくにつけて家居せまきは便あしくそもわが言一ツにかりうべきをと思へばつひにはそ

の地をかりうけたり。こは文政五年の末なりけり。こむ春はとく家を立てましまむなどのしみつゝことしをばくらしぬ。

あけて文政も六年となりぬ。春正月十八日の事なりけり。深光寺なる家の墓のあまりに亂れたりしを調へせまかりし構をひろめなどする程にその構の中に鏡空夢幻大姉とある卒塔婆の下に枯骨あり、そをうつし埋むとて焼ける灰のいかにしけむ風もあらぬに、傍にありたる興繼が身にはら／＼どかゝるものか。心地例ならずなりてうちふしぬ。病はつねの事とて殊に心にもどめてありし程にその二十四日は松前家の春毎の御祝の日なれば病をちしてまゐりたり。いでまからむとするに地氣にやうたれけむ腰俄に立たずなりぬ。まことに誤たざりけりとかの卜を恐ろしがれど今はせんなし家まで人に送られてうちふしたるがやう／＼に重り行くにとかく氣も屈じて事毎に怒り勝にぞなりける。みどりの母妹などほど／＼困はてけり。

さる程に三月の末つ方母百また脚氣にてうちふしぬ。せむ方なければ興繼は飯田町に至りて姉にみどられ翁は百をみどらせむとて明神下にうつりぬ。

逐はせてかりつる地をそがまゝにおかむとかの研師の思はむ程もうしろめたしとて翁のつねのまけし魂に、宗伯百の病中にはあれどみどりの傍にとりまかなひて家を立て垣をゆひ木をうる苑を作りなどしけり。

かくて文月ばかりに百の病はいえけれど興繼のはいえがたにも見えず。服薬八百餘貼に及び年を

こえて。文政七年も五月になりぬれどなほ老るしなればくすし豊田泰助さへ呆れはてたり。翁思へらくこそは大将軍東にありしを犯したるとがにてかもしくはかのありつる骨のしうねくも祟るにやなど災には迷ますし深くなりてあるは星を祭り佛を吊ひなどしけり。

かの女をばありつを正月十八日を更に命日と定め法名をも即空夢幻と改め今年一周忌の法會を行ひ施餓鬼などして追福を修したり。猶之れより三年七年十三年の忌まで吊ひたる事「後篇記」に見ゆ。其の後は知らずこの後のこゝなれど序なれば記しおくなり。

そのかひかあらぬか足腰ははつかに立ちぬれど猶はかしくはなかりけり。

勞症にやならむずると鳥小弓川狩などすむれど一日二日はあれやがてあきはてしやめぬ。みとる人さへみづからさへ呆れはてぬれどさても命はある者にてかうしにみいきみの間にさまよふと一年あまり半ばかりにていつともなしにいえけり。すがすがしくならずとも苦だに免るれば此人にはかくいふなりけり。

さても此二年三年は殊なるともなくすぎぬ。翁はかねても老るしつるが如く引つゝきての心づかひをせめては慰めむとてふみもつとめてはつゝらず。(されど年々に五七種の合巻をば出せり)思ひあへる友どちとちつどへがちに世をおくりぬ。興繼はた松前侯への勤仕の外事もなかりけり。

文政も十年となりぬ、興繼病勝にはあれどはやく年比ともなりぬ、いかてよき妻をとほ十年ばかり

りの父母の心なれどかくにふさはしきもなく今年三十路に及ぶまでさる事もなかりき。此程媒ありて紀州家の家老三浦監物の醫師土岐村元立が娘にてみちとよべるは齡は二十二ばかり心ざますなほに容貌さへ醜からずときこえけるはといへば例の關帝識を見るにいとよかりければ今年彌生の比迎へとりぬ。

まめりがちなる家の内も此花一枝にぞなぐさまれけるなど老夫婦の喜いふばかりなし。うれしき春を送りて夏も六月となりぬ。三日の朝なりけり。翁は若きより齒を失ひて今は上齒一ひら残れりしがかけおちぬ。老の身元よりあるべきとなれど何となくあしきさがにもやなど心にかゝればいほぎ直してむとて「ははなくもきは猶若し我もかもさぼてんに似て常磐なるべし」とよみて自慰めけり。

それさごとにはあるまじけれど閏六月十七日朝心地あしくてうちふしぬ。唯かりそめの事と思へばさしも心にもとめざりしに巳の比ほひより苦一方ならずなりぬ。興繼うち驚きてかにかくに心をつくして藥をすむれどかひなし。十八日つとめてみちが兄元祐を招きよくかたらひて藥をすめたれば老るしばかりはありつれど病はなほさらぬ方に重りゆきぬ。あけて十九日より多紀安淑法眼の藥を用いたれど之もかひなく聾溼美覺重三女くは夫なり。宇都宮戸田家の醫師なり。繪をよくして赫洲と號すも日々のやうに訪ひ來、娘妹

長女さき入夫して飯田町をつぐ。次女ゆふ田邊久右衛門といふに嫁ぎぬ。三女くは瀧美兵の妻なり。長妹ひで初の名は蘭一

ころ戸田大炊頭奥に仕へていぢまふ。後寛政の比寄山氏に嫁ぎたり。次妹さく嫁所を知らず。

などもかたみかはりに来てみどれどいついゆべしとも見えず。やう／＼に重りゆきてかゆは更之  
葛湯かたくすり多くえすゝらず。僅にもゆに飢を凌ぎ梨の志はり汁にぞ渴をばいやしける。  
多紀氏もはか／＼しからずとて廿九日より林玄曠の薬を用ゐたれど聊の志るしは見ゆるものから  
なほ月半を苦しみすゞしぬ。

流石に時や來にけむ、薬やあたりけむ、はた誠心にあつき宗伯は更之覺重元立元祐などのくすし  
達常に傍にありて起居にさへ心をつくしぬるかひにやよりけむ。魂まつる比に至りてからく赤豆  
粥少しつゝするばかりになりぬ。夫よりもどかしくはあれどやう／＼に力つきて八月七日には  
おこたりはてぬとにはあらぬぞ床を離れたり。

なほ身内疲れて歩行など叫はぬぞ病の床を訪れ給ひし人々にせめては禮をかへさむとて印ばかり  
の祝を擧げたり。あるは物をおくりあるはこひまねきてあつき心ざしを喜びきこえけるこれかれ  
三十八九人のそが中に、屋代輪池翁は我身の上かのやう氣づかひて日毎守忍庵をおとつれぬとも  
なくもし所用あれば使してとせられぬるちすぢなりともかくやはと涙にくれて翁の喜びたるけ  
に理なりかし。

此度はよもいきじとて何くれの心がまへもしいふべきとなどいひのこし辭世とて  
世の中の厄をのがれて元のまゝかへすは天と地の人形

今はそれもあだなりきとて

今は逆手まはし過し遺言のやくにも立たずなりにける哉  
などよみ捨てけり。

此日又笠翁の名を改めぬ。松前老候松翁

余が職、翁の『雜記』の抄に祐翁ともあり。本誌『曲亭馬琴が珍らしき書簡』中には秋翁とあり別本の多くには松翁とありきと  
覺えたり。三ツのニツいづれ書損なるべけれ原書につかひては實否知れがたし。

と稱し玉ふにあり翁字とかくに憚ればといつかはと思へりける故今日をよき折とてかねて思ひ  
あめたる公民の公字をかへて尊民とよびけり。

屋代翁ことほぎて

節毎に千代をこめつゝ榮ゆべき兆ぞ見ゆる尊の民

九月に至りてやう／＼快く十一月に至りて全くいえはてけり。

かゝる中にもふみやに迫られて筆はえあかず。七月廿日比よりかきそめて日に夜にいそしみなし  
たる文のかず／＼は合巻には『傾城水滸傳』第五編八冊『金比羅船利生續』第五編四五六の三冊  
讀本には『唐蓬大和言葉』後集七八卷『八犬傳』第七輯七卷など大凡四五百丁なりけり。

あけて文政も十一年となりぬ。二月廿二日みち玉のやうなる男の子をあげたり。世に喜の數はあ  
めれどかゝみむことはと涙ながらにこをどりする翁夫婦の物くるはしきさまこそ中々に理なりけ



れ。僅によきとあればやがて重きなやみある瀧澤家の運こそはかなけれ。さきには興繼の妻定まりて喜びたるやがて翁の大病あり。今年うひ孫をえて喜びたるその四五月よりまた興繼重き病にふしぬ。

初はさもなかりしにやう／＼に強くなりてくだること日夜に八九十度なればつねにかよわき身の疲れに疲れはて、たちあさえて心にまかさず。ことに舌のさきに瘀血塊とやいで来てそれいえて後も小き瘡となりて口の中にひろこり久しくいえず。例の林玄曠多紀法眼の薬を用いたれどはか／＼志からず。九月比に至りてぞからくして暴瀉やう／＼にかろくなりけり。なほ病より病を生みてこの頃興繼の思ふる所上は頭痛齒痛の喘息心痛の諸病より下水瀉腰痛脚氣など皆特病となりて身内すこやかなる所更になし。

さればよしといふよき事はいかなるともせずといふ事なく高輪なる岩尾ばい加持、新吉原甲斐やが灸、千住の齒神鐵砲洲の漆や金次郎が筑波山異人傳法の名灸、麻布相摸殿橋なる卜筮、醫師平野章二が傳法の湯藥、番町西郷殿家臣某が神授の湯藥三田荒坂不動のばい加持深川の町人何某が按摩針治など費をいとはず人のそしりもかへり見でそれこれと取り用ひけれど更にかひあるべうもなかりけり。老の身の氣も心も亂れやしぬらむと思ふばかりなる不幸に愛深くなりぬる孫の太郎をかきいだきて是をせめてもといふ／＼涙にくるゝ翁夫婦の心のうちこそけに推量らむも

愚なりけれ。

## 第八章 傾く日かけ

### 第一節 興繼病死

病をつねの興繼も、戊子のなやみ辛くして明くる夏の半程にいえてよりくすしのわざをやめたる心安さにや、怪しくも一年あまりは床にもつかで折ふし毎に松前侯を伺ふ外はいと長閑に世を送りけり。

天保元年閏三月十八日みち又女の子を生みぬ次と名けてめで喜びて今年をくらしぬ。

書くもくだ／＼しきばかり僅に愈えては長くなやみ、辛じて床をはなるればやがてかへる。かくして天保も二年三年四年とすきて五年と爲りぬ。

此夏また翁瘧やみにふしたり。文化の比にやありけむ、六十八歳の壽あるべしと夢みたりしを今年まさしく其齡なれば興繼驚きて薬をすゝめみどり心をつくせどあきたらず。わが病を推し杖にすがりて生駒なる琴平の宮に日毎あゆみを運びなみ／＼の精進潔齋はいはずもあれ鹽氣を絶ち垢離をとりて祈りけり。

身を忘れたるま心に神もあはれと思さしむ。やがて薬も驗ありて二十日許に翁はいえぬ。嘆はなほさりやらすわざはいは又興繼の身にうつりてひえと疲とに病ひ重りて秋より例の床にふしぬ。今年はかなくあけ六年となりぬ。

世はめでたき年を迎へて富める貧しきをのがじ、喜びあえる中にあはれ今年の初春は瀧澤の家をよぎてすぎけり。

例は病勝にありけれ、朝とくをきいで、諸神家廟に禮して三つの元を祝ひ松前家に至りて幾代を壽さまつりそれよりそこゝの知る人がり祝ひめぐりてかへればまちつけたる家の誰彼どうちよりのほろゑひ、憂が中にもかゝる樂はありけるをそれさへかなはぬ此春こそうたでかなしけれ。流石に禮になれたる身のせめてはとて寢衣に熨斗目きぬひきかけよろめく足ふみしめて妻に

助けられて父母に今日の壽をいひけり。知る人への年賀には太郎ぞ今年はいでける。

木の芽もみきもはるの長閑けさにや病もやう／＼に怠りて桃の節會には起きいで、晴の衣きるばかりになりぬ。またくすこやかどにもあらねど心地よき日は外にいづるとさへありけり。あるは太郎をみて上野の山を又は姉を訪ひて飯田町をなどそゝろありきし殊に不忍の辨才天はかねてより頼の神とてわが病もいゑ家にも幸あらせと怠らず歩を運びけり。

有明がたの燈のやう／＼に暗けれど消えなむ前は俄にあかき類にやなど思ふも心細しや。

喜もかひなくてやがて四月の半より乳のあたり痛みいで、日に夜にもだへ苦めりしが之は三日ばかりありて僅にいゑぬ。廿五六日の比より又痛みて血を吐く事夥し。世を思ひ絶えぬる事一度ならねどなほ今度をこそと枕邊なる妻をゆしてわが病肺癰を添へたればよしや扁鵲蒼公あり共いかにせむや愁なる醫師の手に斃れむこそ長き憾なればむしろわが手にこそ死なめと思ふなり。さる

時に至らばまに／＼何方にも身をば寄せよ只父母己に老い子はいまだいとけなし、もし志ばらく留りて養をつくしなばそは一志の功なるべしなど涙ながらにいひきこゆるをみち傍よりさりども心つよくおぼしていま／＼しき事ないひ玉ひそと口にはいへど日増に衰へゆく様を見てはそゝろ涙にくれけり。

五月はじめより胸の痛いやまし烈しくなりぬ。醫師は思ふにまかして招かねど褥は強ひてまつらひて妻みちまめやかに見とれり。

やう／＼に重りゆきぬ。五日には飯田町がすどつかはしおける長女次せめて今のは對面とてとひ來ぬ。六日土岐村父子來知る人々も來る者多し。林玄曠を招きたれど折ふし他行とてこず。今し／＼と人々汗握りて打まもるばかりなり。

七日も事なくすぎぬ。やがて悲しき日は來りぬ。

ふりみふらずみ五月雨の時間も見ず、病より病にふしてつひにかへらぬ身となりぬるは八日辰の比なりけり。法名玉照堂君譽風光琴嶺居士 石川清水山深光寺に葬りぬ。

病める日比を思へばあるまじき事にもあらねど四十路にも足らぬ身の今とは思ひまらざりきと翁の悲いふばかりなし。

遂にゆく道にはあれと思ひきや子を先き立て、嘆せむとは

子夏すら三ツの罪ありきとよ。淺まし凡夫なれば罪も報も多かるべし。何を悲しみ何をか嘆か

むと思へども猶そいろにて

雲のゐる袖ならなくに五月雨と共に晴せぬわが涙かな

やせがれたる手して太郎をかいよせよく人となりて大父大母はごくめなどはふくたえ入りたる思ひで、

親の思ふ子も又子をや思ひけむ今はにかけし言葉の露

身をも忘れて父を氣づかひ生駒琴平の宮にまうでたりし事など思ひいで、

長かれと親の齡を祈りける子の玉の緒はなぞて短き

かくなりての後はさしもなき事共思ひいづる者也。四月廿九日なりけり。始めて時鳥なけるを起いできていかにき、玉ひつやといへる面影まのあたりに残れりて

時鳥初音き、つといひし人のなき魂かへれ今朝はまばなく

日本外史よみさしたるを見いで、

敷島の日本とつぶみ乗してよみの旅路に何急きけむ

今は思ひたえなむとつとむれどいかで。

忘れては猶ありとしも思ふ哉まはぶく餘所の聲をきても

かたはなる子はこのと諺にはいへど猶まめなるぞいとほしきや。せめて老いたる親にもそむきはた世にも容れられずしもありつらむにはかうもなげかじをどは翁夫婦が此比のなげきなりけり。

り。

興繼幼字鎮五郎琴嶺と號し玉照堂芳流舍守忍庵謙齋なども唱ふ。醫には宗伯とよびたり。寛政九年已十二月廿七日父の飯田町の家に生る。伯父興旨うせ嗣なればいで、其祀を承く。九ツ書畫を學びたれど病によりて果さず。十四醫を學び廿一歳一家をなす。廿四歳松前侯の値遇をうけ世は安く送らるべきを惜しき哉まふねき病にみいられて一日の歡なく病床の中に夢の世を夢とすしぬ。

生れて世の才にはうとかりけれど心さまはまめやかにて父母に仕ふる事は殊にあつかりける。文政五年四月松前侯歸國の暇玉はりたる時祿石八十月俸五口もてめし俱せむと仰せられし面目此上なくは思ひながら父母稍おそるべき年に向はむとせればと辭みぬ。つぎて七年わが方に引きとりて孝養誠心をつくして至らぬくまもなし。朝はとく起きてまづ父母の居間を伺ひ謹みて脈をとり少しの恙あれば直に藥をすゝめて介抱忘りなし。もし年始嘉節にあへば必禮服に容を正しまづ家廟に拜しつぎて父母に禮す。かゝる事こゝに十年あまりかつて一日も怠る事なし父母の用には大方の病は事どもせず。長き病に疲れぬる四月の末也けり。やせがれたる手にはけとりて賣藥の包紙數多くすりあけるかねてなき身と思ひしりてせめては父の勞を省かむとの心じらひなりけむと父母の長き涙の種となりけり。

そのさが又うきたるとを好まず。事毎につまやかにてあまりに女しくさへありけり。日々の雜

用は朝にこかねを翁にうけひめもす費す所ことごとく物に記し夕にあまれるを父に捧げ一厘の誤ある事なし。又潔癖あり家のうちくまなく清めちどのちりもなき中に徐に座するをこよなきたのしみとはしたり。されば年毎の煤拂など人の手をからず獨一日を費して一間を拂ひ日毎にかくして十日に及ぶ事さへあり。文才はなしといへども流石に父の子なれば世の並々の人にはなほ立ちまさりけり。

孫も三人となりぬ今は世に思ひあつく事なしと思ひなりぬる比となり柱とも骨とも頼める人の俄なる事いで來しなれば老の身の氣も心も狂ひなむか涙にや死なむかなど知る人々のいひあへりけるげにあはれなり。

## 第二節 書畫會

行末を思ひ頼めりし宗伯あへなくも失せてければ、流石に心強き翁も世をはかなく思ひなりぬ。幸に身は健なりといへども古より稀といふ齡ともなりぬ。我もしあらずならば幼き者さては年若き寡らの如何様にならぬゆくらむと思へは今夜の程もうまひまがたし。かつて山東庵大人のなき後の事を謀られしを教し殘さば黄金銀何かあらむとあざみしは中々に世になれざりしはやり心なりけりと此比にして思ひまりぬ。

太郎は曾祖父(翁の父興城)の心ざまをやつぎけむ弓射馬乗るわざを好めば如何ならむ輕き仕をも求めて武士の列に入れなむ。と思へど幼き身のとりいでしえたるわざとてもなし。とにつけかく

につけてあらまほしきは黄金なりけり。若かりしより衣食を軽くして貯へたる和漢のふみ幾千卷なごりなく賣り拂へる時の翁の心の中いかなりけむ。

これにぞそこばくの金を得たれどなほいくらを補はむ代にとて恰も齡七十にあたりたればその賀筵を名として書畫の會をぞ催しける。

かねては口を極めて利欲のわざ文士のいさぎよしとせぬ事なりなど譏りに譏りたる事なれど今はさる事にかゝづらふべくもあらずかし。

日比は人と遇ふを厭へりし身もかくなりてはせむ方なく足さへ腰さへ弱り果てぬるをつとめて籠に打ちのり知る人がり行きめぐりて服紗扇子に

盡させじな齡はさいれ石龜の萬蓬が鳥をふまで

名にしおはれ出でよ千歳の友にせむ隠れ簀龜隠れ笠松

など書贊せるを配りてその日の事を頼みきこえたり。

かくて今年天保七年秋八月十四日といふに兩國万八樓にて開かれぬ。思ふにまして盛なりける其時のさまやその前後の翁の心の中等は翁より菰侯の與家老林宇太夫(翁とは極めて懇なる様子なり。此人の妹藤浦も同侯の與に仕へて中老たり。深く翁の著をめで廣く購ひよせて大方はもちたりとぞ)といふに送りたる書簡につくしたればこゝにかゝげぬ。

私事元より賀の祝など致すべき望は無之罷在候處去る五月上旬八犬傳板元丁子屋平兵衛さこみ屋其外懇意の書肆并に書家松本董齋等度々罷越類に申すいめ候御世話は我々如何様にも可仕候間まけて衆議に御つき被成候様にさ申くれ候故むげに心強く辭み候はむも流石にて遂に其意に任せ候ひき

さて六月に至り右の世話人等うちより配り物等の世話致し畫齋の帛紗二百五十幅并に畫齋扇一千五百對長壽磁盃一千箱右上下中下と三段に分ち夫々の職の者どもへ申付下旬に至り追々出来まあり候帛紗の畫工一職と申すは抱一門人にて兩國藥研堀に居住致し相應行はれ候者に御座候右帛紗面は私自筆にて賛歌をかき候様に世話人等申に付辭み兼候て認め候へ共扇子は三千本ばかりに候まゝ私一筆にては手廻りかれ候間半分は書齋董齋にかゝせ候を人皆あかぬ心地すさて人々いづれも私の私のかさ望み候もなしく覺え候かれては七月廿九日を會日と定めて候へ共畫齋もの數多く候間出来かれ候上盆前後は世話人等多用にて處々なうちまはるもなり兼候間八月に可致の旨を申に任せ八月十四日と再日を定め候事に御座候

かくて七月盆後より處々會觸に出ある候故私歩行不自由につき出ざる筈に致し候へ共流石に高名なる文人墨客の宅へは自身出かけ候様に世話人等申に付是非なく駕籠にて兩三日出歩行き其外は嫡孫瀧澤太郎を出し遠方へは婿を名代に出し候其出る度に世話人さりもち人等畫工書肆の輩多き日は八九人づゝ從ひ少き日も五六人は附隨ひ罷出候故に途中に酒飯の入りも少々の事にあらず候ひき

凡廿日あまり江戸中を名残なく廻り果る程に八月中旬になり候然るに八月十三日は御存の如く風雨にてふり暮し候間明日もかくの如き雨天ならむには出席の人々如何ばかりもあるべからず世話人等が勉なる事を勤めて諸人用多かるに元の輪に納まらずば如何がはせむ外間旁胸安からぬ空のたゝすもひかなき思ふものから今更せんすべ候はれば只天命にうちまかせ候ひしに御存の如く其夜九ツ頃に雨風故更烈しく大雷雨兩三聲はためき候ひしが夜半よりかきはらふ如くさつぱり晴わたりて月光隈もなかりしかば是天助ならむとて世話人等喜ぶ事限もあらず候ひき

やつければ朝より駕籠にて兩國柳橋万八樓へ罷りこし候嫡孫并に家内の者共は跡よりまゐり候取持人は嫡孫を始繼上下にて

朝より相詰め帳附刀番酒番番番草履番に至るまで四五人づゝ手分をして各司る所あり扱出席の雅俗來る程に畫後に至りては人の山をなし候御存下の如く万八樓は中座敷四十疊左右貳拾四疊別席十二疊凡壹百拾疊の座敷も雖も立候所もなきまでに入々つごひ候ひしかば一人座をたてば餘の人共あさへすはり候故に居る所を失ひ候て椽側にて座を合せて居るも多下座敷も又かくの如く寸隙もなく人つごひ候酌取には藝子を雇ひ候が當世の通例の由にて世話人等藝子五人を召寄せて酌を取らせ候ひき此等は最服はしく會主の本意にあらず候へ共世話人等の計らひなれば止事を得ず苦々敷思ふのみやつがれば其藝子等をよく見すまいて物なごいふ事もあらず候ひき

かくて其日出席の雅俗八百餘人にて候之に世話人其外來客ならぬ身よりの者を加へて候へば千人にも至りしならむ當日膳札肴札千二百八十四人前出候由に御座候酒は三樽にて足らず又半樽かひ調へ候へば前日風雨なりければ世話人等あやふみ候て膳は僅に三百人前膳へ候處當日快晴盛會にて千人に及び候間万八樓の料理場大騒を致し亭主はめしたき役を致し女房御にて洗方を致し候てさかくして間を合せ候是故夕方に至りては飯を炊き果つるを待かれてたうべすして歸るもあり又横着なる者は混雜にまぎれ膳札を三枚も四枚もかすめさり肴に替へてつゝませ土産にするもあり千差万別の人心中々寸楮に盡しがたき有様は御存の如くに候

まかれ共万八樓渡世の上に馴れたる事さはいひながら三百人膳へたる膳の俄に千人に及びしをよとも間を合せたる畫世世話人等も殊に感心致し候万八の主人始めて飯焚したるがまいたきも幾盞も急にたくは扱々骨の折たる物なりとて笑ひ候田万八の手代次の日世話人共の方へまゐり拂を受取候節の物語の由にて候又申候は昨日の如き盛會は二十年以來たぐひ無之候昔年天民と誰やらがあひくにて書齋會の節と鴟聲が一世一代の名残の會の折なごこそ最盛會に候ひしがなほ昨日の會には及ぶべくもあらずと申候由後傳へ聞てはゝるまれば候も當日出席の文人墨客高名の人々は

- 儒者 琴臺 東條文左衛門 信齋 大郷金藏 大窪天民 菊池五山  
 本畫師 谷又晃 老病に付名代に孫女を出し候 谷文一 文晁孫 渡邊華山 有坂蹄齋 南嶺 南溪

鈴木有年 長谷川雪旦 一職

書家 關根江山 關金三 松本實齋

浮世畫工 歌川國貞 貞秀等五七人の高弟を俱して出候 英泉 國直 國芳 歌川廣重 柳川重信

葵岡北溪 後北齋殿斗

戯作者 柳亭種彦 山東京山 湯治ニ罷越欠席 墨川亭雪齋 同梅齋 笑亭鯉丈 爲永春水 東里山人

烏亭焉馬(之は二代目のなるべし)

歴々家 石川疊翠子 近習を以て使者とす 屋代弘賢翁 山本法眼(宗英法眼の家なるべし) 山本昇亭子

此外草紙間屋不殘出席 同書林不殘 紙間屋五六人 表紙屋兩人 板木師棟梁(人數逸す)

此外の者大勢まわり立はたらき候

狂歌師 芍藥亭長根 梅のやまきつ 六竹園白酒

此外汎々の輩略之

武家にては 隆州家老伊具氏 同家中司馬更(松前家にては先是道廣公章廣公相つぎて没し今は幼主人たれば值遇初

の如くならず。殊に宗伯病死の後は全く胡越の如くなりければ今日も出席なかりしなるべし) 雁の間留主居三十一人

帝鑑の間二十人 菊の間三人 大廣間何人か忘れ候

此外武家町人聊も風流心あるものは出席すやつかれ平生紹介なくして尋ね来る人に決して對面せず候故今日こそ馬琴を見む

さて出候生和學者生書生賣卜者など名も知らぬ者多く候會主は十徳にて終日來客の挨拶に口がすくなり候晝後は人々酔

ひ候て大にのぼせ候やうに覺え候き如此大勢つごひ候へ共紛失ものもなく口論もあらず候ひしかば是大幸不過之を歡しく存

候ひき 會日席上にて頼まれし扇子百本餘り絹地唐紙などは皆神田の居宅へもちかへり程へて後かきて候て夫々へ別ち遣し候是より

九月中までは會の殘にて日々來客引もきらず始あぐみ候てつかれ果候事に御座候立入候事ながら此會の體聞え候ひし比相知る人々眉を蹙め營秋以來万の物ますく直段のほり人々くらし易からぬ時節なるに配物其外多分の物入をわけ候はゞ元の體に納りかれ候はんさてひそかに噂を致し候ひし由聞え候然るにこの盛會なりければ其人々我を折りて高連なりて感下候由に御座候

此會の折は市中の米直段は百文に五合賣に御座候ひき會の當日万八にて金三兩餘の米をたき出し候と申候是より四五日をへて八月廿日に至り白米日々に四合五勺にのほり推つてきて四合に成候間上より江戸中裏屋の者共へ御教として御米錢を下され分限の町人は各施行をひき候故人心何さなく穩ならずなりゆき候扱もよき折に曲亭は會をしたりもし此節に至らば出席の人先日如くにあるべからずさにもかくにも徳ある翁なりと被申候由

是のみならず會の翌日十五夜は御存の如く朝より雲立候て風もあり夜に入りて小雨さへふりければ十三日十五日の中にはさまれる十四日の美日なりしも必天助ならむさひいきの輩は申候へ共畢竟は偶然にて私は徳もなく運も妙ならず候義は去年の夏の事御存の仕合に御座候(興繼病死の事なり)當日の祝儀日録の寄金は一包にあまり候へ共諸入用さし引候へばいかにりも殘らず候なれ共當分は此噂さりの由にて外聞はあしからず是のみせめても事と存候までに御座候是等は樂屋内の事なれば人に申さぬ事ながら御懇意の御義に候へばあけすけに申上候御一笑と奉存候

そもく書畫會などいふ事は畢竟利の爲にする者に候へば風流に似たる大俗事に候へば志あらむ者は爪はちきをしてかけてもすべきわざには候はぬ故にやつかれは始より算賀會などせんと思はす候ひしに人々に勤められ止事をえす此體を世話人等にうちまかせ候へ共近所にては平生交らぬ高名家の門に参り出席を希ひ候杯申は身を斬らるゝより厭はしく耻しく存候へ共世話人等が親切にて申すゝめ候へは何も世渡なりと觀念致ゆかて叶はぬ所へ兩三日出あるき候ひしに幸にして右の盛會なりければいなる事をしける甲斐ありと思ひ直し候ひき又御一笑と奉存候

人を人と思はざりし昨日をすて、頭を低くし腰を折る此の比の心げに實ばかり世にあやしく奇

しき物なかりけり。一は情ある人の意もだしかたき爲にはあれどもまとは太郎等が爲なりと涙ぐむ老のさまこそあはれなりけれ。

第九章 誰彼時

第一節 志なのどの坂

(前畧) かれて御話申候如く私儀は生涯浪人にて兎も角も世を渡り候へ共その夏獨兒琴嶺を先き立て候ひしよりつく／＼思ひめぐらし候に嫡孫太郎はなほ總角にてよめはいまだ三十路を多くすぎず候然るに私事七十路に及ながら後の事を思ひはからでなほ此まゝに候はなからむ後孫共は身のたつきあらで母に分離致し或は所親に養はるゝに至りては如何なる生立にもなりてまこそ難儀にも候はめいでや我ながらむ後も孫に母子分離せでまもくもあるべき謀をなさばやさてさる事心得候者などに談合しつゝ小謀の御家人株を購ひ求めむ事を謀り候ひしに去る七月上旬よりふさはしき者の株式を黄金にかへて譲り渡さんさいふ者ありやがて談合調ひて公に願ひ奉り十月廿八日に右の明跡へ御抱入を被仰渡候て相勤め候然れ共太郎はなほ幼年に候へば當分番を勤めさせ難き故によめの所親なる三男の田舎者を故兒琴嶺が假養子と致し瀧澤次郎と改名致させ太郎が十六歳になり候まで此者を差出し候てつとめさせ候此者田舎より出で久しく市中にぬ候ひしが貧しき者に候へば身の皮穿るゝ事もあり兼候破屋に候へば是非なく又乏しき財をわきあつめつゝ此比むさ／＼右の二事を取急ぎ候へ共半も未造り終らざるものから遠方に隔り居り候ては費も多く萬不便利に候へば来る十日にわたましと定致し候此等の故に去る六月より今日まで俗事朝の如く集ひ候て兩三日前より筆まり候へ共日々に入出入多く殊に心あわたりしくてかきかいて出て客に應對致し或は家の内のものにさしづなご致し候まゝ一日に如何程もえかゝすして徒に日を費し候へば思ふ半もえかゝすてなん御覽に入れ候は耻かしき事みに御座候此度うつり住み候新宅は四谷信濃坂と申し永井信濃守殿の下やしきの裏手青山六道の

辻に近き邊土に候へ共御住居より凡一里半許も候はむされど櫻田の御上屋敷よりは一里に足らず候へば鎌太郎様御番掛に御出かけ被成候はゞ相かはらず御左右も折々うけたまはるべく候私事山の手は嫌に候へ共人の行衛は心にも任せぬ者にて思ひげなき所に餘命を送り候仕合に御座候凡此度の諸雜費私分には大きやうにてちまの貯まては候はれど借財を致候ては憂を後に残し候事故年比衣食を省き候て求め置候秘藏の珍書などを多く沽却いたし候て黄金を調へ候へ共當年は物の價貴く賣り候には買入稀に候へば是將思ふ如くならず不便の事少からず候かく孫等の爲に残し置き候爲かゝる苦心を致し候のみ近火にて焼失ひしと思ひあきらめ候へば惜むべきにあらず候へ共再得がたき所藏の義に候へば何となく忍ばれ候事に候へば思はず筆のこゝに及び候を止め兼候てよしなき事を御聞に入れ候何事もくわたまし前にて心穩ならずくだ／＼しきは御推讀の程を奉希候あなかしこ、

天保七年乙未月五日

林 宇 太 夫 様

瀧 澤 堂 民

我にはすぎたりと見るまで思をこめ心をこらしてつくりたて便よき街ながらに塵を逃れてすみなしたる家を捨て、名さへ南千日谷とかや物すさまじげなる、前と傍とは永井侯の廣き家居に塞がれたる

所の名を信濃坂といふも此故也。麴町の紀尾井坂本郷の豊岐殿坂など、同。

坂の上に西に向ひて狭く奥深き怪しげなる家の幾年の煤塵にや埋れたるに移り住みたる翁さては人々の心いかなりけむさらでだに老い行く末を顧みてし愛子を失ひて嘆き渡りつる月日をかう打ち籠りたる所にあかし暮らせば自心も屈し袂もぬれまさりがちにて樂しとは昔いへりし詞なりな

どつぶやくこそあはれなれ。

方に事なれぬ田舎人世を知らぬ頑強乳兒抱ける若き寡さては十を僅の幼兒のみ誰を力と頼まむ方もなくて獨七十路の翁始より終までとりまかなへば身も心もつかれ果てぬ。其日の爲に強ひて物

うき筆をとれどそのかみのはか／＼し何所にか失せぬるも理なりけり。悲は更にそはりぬ。今

は之をど便りたる飯田町の聳清右衛門與利天保八年七月八日年五十一にてうせぬ。之にぞやう／＼忘れなむとしたる興繼の事さへ思ひ出で、次の清右衛門正次を迎ふるまでの二年三年、年は定にみたねどひく人ありて太郎が番にいでたる迄の四年五年は猶露けくのみぞあり渡りける

### 第九章の續及第十章の大畧

涙はかくのみならざりけり。

まだ神田に興繼と共にありける天保四年の程なり。秋八九月にやありけむ。ある朝ふと起出づるによべ一夜にいかにしけむ、右の眼ふつに見えずなりけり。あまりの驚きにまばしは言さへなくひた呆れに呆るゝものから。興繼も打ち驚きてよく見るに瞳の上の方流れて容易からぬさまなればこの道に得たるくすしに見せ玉へどく／＼とすゝめたれど翁あへて従はず。我文化の比よりは筆につかれ思にやつれてどかく病がちになりてめくるめきて熟睡しがたき夜半をかさねたる事もあり。齒は三十路よりかけそめて六十路ならではやく一枚も残らずなりぬ。かくてこもりぬ四十年に及べば身さへ足さへやう／＼心のまゝにえ動かずなりぬ。さりけれど只眼のみは幼きよりちどの患なく流行目すらかかつてやまず。今もなほ眼鏡だに用うればよむもかくも若き折と異なるべしと思はず人にもまかほこらひたりしをかく俄なる今朝の様こそ安からぬ。思ふにこは年比の勞にもあるべく且は冬春毎に高き火桶を机のほとりにおくと久しければその火氣いつとなく眼に入りて眼漿を乾したるにぞあらむざらむ。譬へば老樹の片枝立ちながら枯れたるにも似たらむ。よしや若公者鵠の術をつくさむとも草根木皮のよく及ぶべしやといひけしたり。

是よりまばしが程は硯の中心見えかねて毫を染むるに困じたりしが世渡なればすてかねていえぬながらに筆をとればやう／＼になれてさしも苦しまず年比をへにけり。

其間時としては惱ましきともありけれど興繼が事より引つゞきて書畫會わたましの忙しさに紛れ



清右衛門さへうせければそれらの事にかゝづらひて忘ることもなく打すてくすしにも示さず。左

の眼を力草に筆をとりて天保九年春とぞなりぬる。其比よりまた左の方かすむやうにて夏になりてはやう／＼にあしざまになりまさりぬ。さはれいまだ病なりとは悟らず。眼鏡のくもりたる故と思ひとりて俗に本玉とかいふ水晶製の價貴きをもいとはずこれかれと多く求めてかけかへく凌ぐものからちどの志るしなきのみならずなかくに重りゆきぬ。あくる亥の春に至りては病なりとは悟りぬれどなほつとめて筆をとりふみやの望をみたせりけり。

かくてそのあくる年天保十一年子の春まではとまれかくまれかきつぎしが夏より秋に至りてはさながら雲霧の中にある如くて十一行にかきし稿本を五行四行にかけど、なほしどるもどるにて墨のつかぬ所さへあり。十一月になりては全く一字もえかゝずなりぬ。目志ひては生ける甲斐なしとこゝに初めて等閑なりし昨日を悔い名ある醫師に藥を請ふと三名に及べども早時後れにけむ験だになし。くやしき事限なければとせむ術もつきぬ。

ながらふる甲斐こそなければ見えすなりし文卷川に猶渡る世は  
どうちなげけるぞ理なる。

さてもあだし書はとまれ、八犬傳はわが心をこめたるもの、世の人皆も今日明日とやうに待てりとかや。且は書買の請の切なるももだしがたければいかで是れをば編みはたさまく思へど水母の

蝦を借るにあらねば(郭璞が江賦に瑣瑁は蟹をもて腹となし水母は蝦を眼となすといへり)一字の稿も成しがたし。あはれ興繼のながらへたらましかばえびたる由もありけむをなどにつけかくにつけて袖ほしあへぬ世なりけり。忘れ紀念とめづる太郎興邦はまだ乳の香うせぬ童なり。まして父にも祖父にも似ず、ひちぢの武き心をうけ弓矢の道は喜べ共さる方には見もかへらず。只その母琴童(琴嶺興繼の妻土岐村氏名はみち)は人なみにみじり書もすればと之に教へて書かするに流石に女として日々の事こそ足れ、漢字雅言は更なり、假名遣てには等辨へず。文字毎にくどくどと教ふるもどかしき、口惜の眼やかきも破り棄てむと翁は思ふなるべし。まして教をうけてかく者はさながら夢路をたどる如く困じて泣かぬ日も稀なり。

筆捨の松の古葉も言の葉も子等に教へてかゝするぞ憂き  
げに傍目にもあはれなるかこち言なりや。

かくいたづく事一年に近くからくして稿本十卷をなして八犬傳をつくりはたしぬ。文化十一年秋九月より天保十二年秋八月に至る二十八年の汗膏こりてこの壹百六卷とはなれりけり。

あはれとは見る人思へ八重すだけかゝる病眼にあみはたす書  
憂しとは知りながらなほ筆をどらして書肆の望をみてたるもの美少年録の續篇なる玉石童子訓若干卷、小き女八犬傳ともいふべき女郎花五色石臺四編、新編金瓶梅の末の方二卷三卷などはつかはありけり。

さはれ目しひてよりの翁の身はきかでも世の憂さはき、獨慰むべき文はえよまず、時めきし昔を夢みつゝ悲の外には事もなくて老いゆきぬ。

天保八年清右衛門うせてよりやう／＼病む眼に苦めるその十一年に妹うせぬ。あるときはありのすさびに女と思ひおとしめて語らひ敵にもせざりしものから血を分てるはらからなれば悲しさは袖にしられぬ。今年せめてもの喜は興邦まだ十三の總角なれどひく人ありて特に召されて番にいづるやうなりぬ。(十五の年までとて故興繼の義嗣瀧澤次郎今迄はつとめたり)

あけて十二年春妻會田氏うせぬ。その性頑にして折々は翁の言をも用ゐぬ事あり、又心ざま賤しくしてつねに興繼と合はざりけれど、翁よく教へて倦まず怒らず、比翼の契こまやかに連理の交淺からず、琴瑟略調ひてこゝに五十年忽にして別れぬる身など涙のなくてやは。

十四年の春將軍家日光御社参あり。太郎も御供の列に入りたれば喜にたへず。わかき者として家の程身の程(此時俸祿三十俵三人扶持なり)をもかへり見ず、いかで新しき筒をもちて日比我は顔なる人々に誇らむと翁に請ふ事まきりなり。さらぬだに旅立の衣裳何くれの用意に心をなやませる折なればそのかみの翁ならば打腹立ちても止むべきを然はあらでかねて秘めたりける兎園小説貳拾卷(文政八年兎園會に人々のもちつどへたるもの十二卷其後翁獨してかきあつめたるが八卷あり)を太郎のいとほしさにはえこそかへじとて折しも訪ひこし伊勢松坂の友小津桂窓に賣りて五ひらの黄金をえやがて新しき筒調へていでたせけり。

興繼をばあまりに厳しくおきてたればつねに安き心もなくてかの病は起りけむと妻のかきくどくに翁も「なでしこをよく花咲けと水そゝぎ過ぎて枯らしぬあはれなでしこ」の思起りて太郎をば多く叱りこらさず。見もむつみなるゝ程にやう／＼にいつくしみもましぬ。されば公にめさるゝ時諱なくてはあらじとて翁のわかき比名のりたる興邦といふをそがまゝ與へ、號をば千歳ことほぎて琴鶴となんよばせける。まとや子よりも孫と世の諺にいひけり。

さればはつかに十日に足らぬ旅なれど翁の心づかひは一方ならずかよはき生とてなれぬ水に病みもせむ、初旅とて歩みなやみ列に後れて咎められやせむなど思ひやりてかへり來ぬるまで安くはいもねず。焼野の雉子夜の鶴と名にこそ立てれ、なほ人の親こそ優りけれ。

かくてより事もなくて天保もすぎぬ。弘化もすぎぬ。行末長きうまご等の生立をせめてもの慰草と悲しき世を老いゆきぬ。

わかくしてはらからに捨てられつぎて子を先て今は妻妹にあくれ知る限の友にもどり殘され慰にかいなき命あるを恨みし身もやう／＼に悲を捨つるうれしき時に近きぬ。

つひに嘉永元年冬十一月六日は來りぬ。

此日わが翁は八十あまり二とせが程負ひ來たる「世の中の厄を逃れて元のまゝ」形をば土にかへして小石川若荷谷なる清水山深光寺のをくつきに眠りぬ。

柩を送れるものかねての友高松の木村氏は更なり何がしかがし侯の御名代、太郎が友皆のしめ肩

衣に道もせき程立ならび世の文筆をとるものきはみ書肆の限畫師板木師紙屋など大江戸をつくしてつどひ、さらぬも名を慕ふもの筆を慕ふものさては壽を慕ふもの共、よりとよりつどひにつどひて幾千人をや數へけむ。人目も草もかれはて、淋しき冬の片田合も今日は一日の都をなしぬ。」あはれ來む春より著作堂隱譽簀笥居士の名の佛の御國にめでられて紙の價いかばかりをやますらむ。

此世にもなほ高き名はその著はせる幾千巻と共にどこしなへに傳はりて芳しからむ。むかし四條按察使大納言音羽の瀧をよめる歌あり。

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れて猶聞えけれ  
本傳局を結ぶにあたりうつしてもてわが瀧澤の翁を賛す。

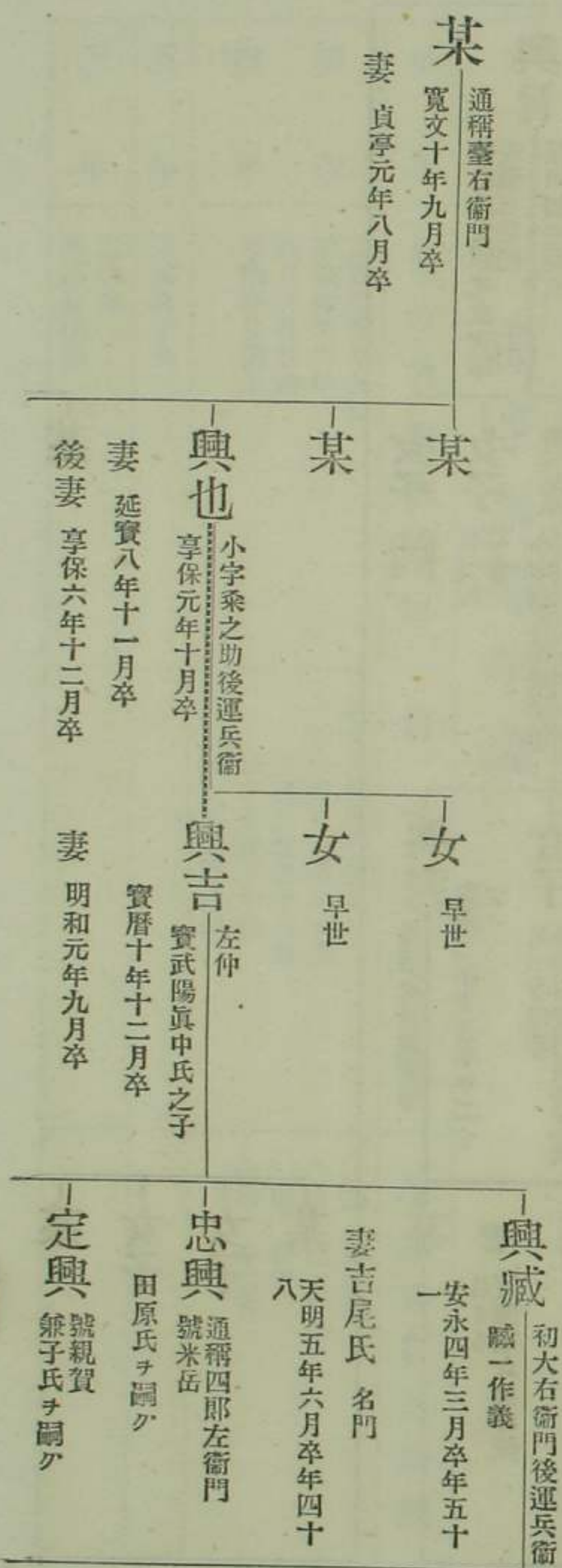
第十一章 殘の燈

此章には翁の子孫の事を記るさむとて飯田町二丁目三十二番地なる故翁の孫なる壺をとひ又菩提所茗荷谷の深光寺の法師をたづぬ其他知れらむと思ふ人々をたづねとひて略詳なる事を得たり。されど現存の人の事を記さむは聊憚ありと思へば本傳にいでたる人の成行、及憚あらじと覺ゆるふしのみあらく記すべし。

太郎與那は翁みまかれる時病の床にあり極を送るにもかこを借りたる程なりしがそれより一年をまたす嘉永二年十月九日享年二十二歳にてせぬ。

土岐村氏みち子は安政五年八月十七日うせぬ。ここに流行のコロリ病なりければ人々のなげきは一しほなりきぞ。飯田町をつげる翁の長女さきは早く夫におくれ再夫に見えしが之にも嘉永四年におくれぬ。子なければ太郎の妹つき(此子今現存す。年は六十六なるべし)といへるを八ツの年より迎へこりて家をつがしめぬ。安政元年十二月うせぬ。年六十一。さら、與那の季女太郎の妹なり。兄うせて家をつぐ。此子女一人男一人今現存す。女の子にてさには孫にあたる男兒二人今飯田町なるつきが手許にあり。年は八ツと七ツなるべし。さて瀧澤氏の略系を示せば左の如し。

瀧澤氏家系畧譜



某

某 女子 女子 某

興旨 初左馬太郎次直次郎  
後臺右衛門  
號東岡舍羅文  
寛政十年八月卒年四十

妻某氏

某 早世

某 早世

興春 初常二郎後清次郎更  
改初右衛門  
幼時鈴木氏ニ養ハレ  
後高田氏ヲ嗣ケ後家  
ニカヘル  
天明六年八月卒年二十

女子 名せい 早世

女子 名つた 早世

興繼 小字鎮五郎後宗伯  
號學嶺又稱守忍庵玉  
照堂  
實解子也  
天保六年五月卒年三十

興繼 伯父興旨ノ後ヲ承ク

女子 名さち 承兄之後

興邦 通稱太郎號琴鶴  
嘉永二年十月卒年二十

女子 名つき現存  
承清右衛門正次之後

某 名さち  
妻 實興繼女興邦妹

某 實大友氏  
妻 名さち

某 現存

女子 現存

某 現存

某 現存

解 初左五郎又左吉後清右  
衛門室氏號曲亭馬琴  
嘉永元年十一月六日卒  
年八十二

妻會田氏 名ひやく  
天保十二年二月卒年七  
十八

女子 名らん又名ひで又名  
いち崎山氏ニ歸ケ

女子 名さき 田口氏ニ嫁ス

女子 名くは 瀧美氏ニ嫁ス

興利 通稱清右衛門二代  
天保八年七月卒年五十  
妻 名さき

正次 通稱清右衛門三代  
嘉永四年二月卒年五十  
妻 名さき

伯嘉 通稱清右衛門四代  
妻 名つき實興繼長女

某 早世

某 早世

曲亭馬琴年表

年次	世の事	文界の事	翁一家の事	著述書目並冊數
明治四年	後櫻町天皇五年 家治將軍六年 正月元日日蝕 芍藥亭長根生		六月九日馬琴翁生 今年現在瀧澤一家族 父運兵衛四十三歳 母吉尾氏三十歳 兄左馬太郎九歳	△印 草雙紙 ○印 讀本中本 □印 雜著 ◎印 未刊書
五年	蒲生君平生			
六年	京山生 眞淵昆陽卒			

七 年	天皇御讓位 遊子放言板	此比妹らん生	
八 年	後桃園天皇御即位 二月行人坂出火江戸大火 十一月改元 田沼意知老中	此比妹さく生	
元 安	疫癘大行死者十九万 本朝水滸傳板	翁七歳發句曰 驚の初音に眠る座頭哉	
二 年	建部綾足加賀千代卒		
三 年	高田與清生 雨月物語板 金々先生榮花夢大行	三月廿六日翁父運兵衛卒年五十一 左馬太郎仕戸田家	
四 年	四月日光御社參 平田篤胤池大雅堂清水濱臣式亭三 馬生	翁十才發句曰 門々のあやめも枯れて蟬の聲	
五 年			
六 年			
七 年	大島燦 京傳十八歳初作	翁此比仕某家就專職	
八 年	櫻島燦 天皇崩御 風來山人卒		
	光格天皇御即位	翁逃去主家發句曰	□流行唄全金平 大お世話 二册

九 年	額山陽柳亭種彦生 山岡明阿卒	木枯に思立けり神の旅	一竹達竹作 是翁初作トイフ人アリ
天 明	湯淺常山卒 四月改元	翁仕戸田家 翁爲渡徒士	
二 年	三井親和卒 群書類聚成		
三 年	淺間山燒 近松半二横井也有卒		
四 年	春佐野政言傷田沼意知于殿中 連坐	八月翁兄直次郎(初左馬太郎)從主 行甲府	
五 年	卜部某著黑白水鏡被誦政演(京傳)	翁仲兄清次郎出高田氏歸家 六月母吉尾氏卒年四十八	
六 年	正月元日日蝕 此年災害切至 將軍家治薨 罷田沼老中	八月四日仲兄初右衛門(初清次郎) 卒年二十二	
七 年	家齊將軍 樂翁老中 江戸大坂暴民蜂起	此比會田氏仕豫州侯加藤家奥	◎俳諧古文庫 猫ぢやらし 翁本年ノ作ト云人アリ
八 年	禁裡炎上	翁入醫門	
寬 政	正月改元 平秩東作戀川春町卒		

二 年	三 年	四 年	五 年	六 年	七 年
禁裡新成 紅毛入貢 壬生狂言大行	京傳著淫史被罪手鎖五十日連坐多	林子平禁齋 三馬十七才初作 京傳移銀座一丁目	此年會號事件 魯西亞使來 建利學講談所 林子平芝全交卒	圓山應舉卒	小金原鹿狩 一九三十才初作
秋翁訪山東庵遊于其門 翁二十四歲卯紙初作	翁卜居神奈川 翁寓山東庵為京傳代作草紙 冬仕書肆葛屋	翁為主管	翁入夫飯田町履商會田氏真婦 初署曲亭馬琴名于戲作	翁長女さき生 四月外姑會田氏卒 初作讀本	翁二女ゆふ生
△廿日餘 五十兩盡用而二分狂言 署名大榮山人	△實語教幼稚講釋 △龍宮撰錄之木 共署名京傳	△花春風道行 此作アリシ由云人アリ	△鼠子婚禮塵劫記 △浮世御茶漬十二因緣 △街道御茶漬十二因緣 △自花園子食家物語 △荒山水天狗鼻祖 右署名曲亭馬琴 △增伊賀越物語 右署名琴門人魁當子	△福壽海無量品玉	△高尾船字文 △昔怪談心學誦莊子 △福教訓心學雙紙 △四遍摺心學雙紙 △小雷雨見越松株 △報警獵狂尾 △勘忍五兩黃金會語
二	三三	三	三三三三三	三五	三三三

八 年	九 年	十 年	十 年
寬政曆成 十一月改曆 集古十種成 五月萬唐丸卒	十二月廿七日翁長男鎮五郎生	朱羅管江卒	八月十二日兄臺右衛門(初直次郎) 卒年四十 九月建碑供齋大修羅文居士(兄臺 右衛門法名)追福 同時更建祖先碑數基
△曲亭增補万八傳 △彦山權現誓助劍 △養山狐修怨 末二種署名魁當子	△无筆節用似字盡 △安信清兵衛一代八卦 △加古川本藏綱目 △庭莊子珍物茶話 △大黒橙黃金柱礎 △押繪鳥疑漢高名 △北國順禮唄方便 △龍宮苦界玉手箱 △楠正成軍慮智輪 △武者合天狗俳諧	△鼻下長生藥 △大維書拔交縁組 △似字盡相案文當字揃 △後篇鹿相案文當字揃 △御慰忠臣藏之攷 △時代世話足利染 △足利染拾遺難形 △增補猿壁合戰 末三種署名魁當子 △小册鹽梅餘史	□戲子名所圖會 ○繪本大江山物語
三	二二三三三	二二三三三	五一

年一	年二十	年
孝義錄成 許女入登富士山	魯使來 羅馬使來 本居宣長小澤蘆庵細井平州卒 藤栗毛板 二月五日改元 修聖堂	
八月三女くは生 九月伊豆相摸漫遊	五月遊京攝 八月歸家	
△彼岸櫻勝花談議 △鯨魚尺品革羽織 △料理茶話即席話 △無茶靈押が兵 △風見草綠女節用 △世諺口紺屋雛形 △東華早月落際 □國畫女用文章	○繪本武王軍談 △洞人形肢體機關 △備前摺鉢一代記 △人間万事塞翁馬 △錢鑑金貨字譜 △視藥證報條 △警論美理與鴉禪 △花見話風盛衰記 □俳諧歲時記	△教訓跡之祭戲草 △春霞男達引 △坂東七兵衛 △入武士忠義功 △福徳三年酒 △父雙字津宮物語 △同後五段淨瑠璃酒肆 篇末三種署名魁童子 △繪本復讐錄 右署名玉亭 ◎繪本天神記 右署名仙鶴堂
一	二	三

年二	年元	和
蝦夷奉行始此年 松岡某著服忌便覽被罪 唐衣橘州卒 土井利厚老中		
△野夫鶯歌曲詠 △初老了問年代記 △種時三世相 △養得翁名鳥圖會 △六册掛徳用双紙 △五大刀三畫訓讀 △實切申候落話 △衣食住世帯評判記 ◎彌次漫錄 △墨田川柳秀筆 △太平記忠臣講釋 △同 後座之卷 末二種署名魁童子	△繪本漢楚軍談 △曲亭一風京傳張 △山東一風煙管薄 △春駒象蒸行路 △浪速秤无女芬輪 △買餘紙薦野弄語 △足手書草紙畫賦 △敵討蚤取眼	
三	二	三

年 三	年元化文	年 二
大島燒 渡邊華山生 京傳開菓子舖子淺草	八貫野狩 一九著仇物太平記被罪 魯船來長崎 二月改元	鹽澤某石川某著懷中道志留邊被罪 秋元某嘉治某座
此年初編牛紙形讀本月水奇緣是也 此年初記著作堂雜記爾後年々不廢	冬多作讀本明春出版	冬大坂人形座演翁著稚枝鳩
○小說比翼紋 ○曲亭傳奇花鏡兒 ○月永奇緣 ○養笠雨談 ○信濃賓客俟待開帳話 ○淺草主人 ○花洛之水 臍沸西遊記 ○浪速風爐 ○陰與陽珍紋圖會 □俳諧歲時記下	△小夜中山夜啼碑 △新研十六武藏坊 △御伽五人拍子郎言 △怪談五人拍子郎言 △松林木三階奇談 △敵討二人長兵衛	○復讐稚枝鳩 ○小夜中山石言遺響 ○四天王刺盜異錄 ○妙黃奈粉殺道成寺 △二代禮佛奉打札所誓 △猫奴妻忠義合奏 △武者修行木齋傳 △復讐阿姑射之松 右一種署名魁雷子 △清談爰有身成金言 □女筆花鳥文素
二二二二二二二二	三三三三三三三三	三三三三三三三五

年 四	年 三
魯人驢蝦夷 松前氏國政不舉被召上蝦夷地一圓	笠亭仙果生 伴瀧溪卒 十二月藩翰讀讀篇成 此比黃表紙變爲合卷
弓張月雨柯夢大行	春大坂角座演翁著四天王刺盜異錄 中一節 翁著書被愛梨園 秋角丸屋甚助訓劇人米助翁連座 春大坂某座演翁著三國一夜物語
○弓張月後篇 ○新累解脫物語 ○標注園之雪 ○雲妙間雨夜月 ○松浦佐用媛石魂錄 ○賴家阿圍梨怪風傳 ○括頭巾縮緬紙衣 ○三七全傳南柯夢 ○敵討紀念長船 ○遊君揀連理餅花 △島色蟹湊仇討 △敵瀧幼稚復讐	○權說弓張月前編 ○三國一夜物語 ○新篇水滸畫傳 ○勸善常世物語 ○墨田川梅柳新書 ○敵討誰也行燈 ○盆石皿山之記 ○同 後篇 ○敵討枕石夜話 ○敵討裏見葛葉 □戲子三十六家備極色紙 △敵討雜魚廢物語 △敵討那之壯夫 △大師河原撫子話
六六 二六三九三五五五	五六二五二二二二六五 十一 六六



年	五	六
橘千隆柴野栗山森島中良卒	上田秋成卒 淨世風呂板	
八月大坂角座演三國一夜 九月同中座演南柯夢 十月淨瑠璃座奏弓張月淨瑠璃 十一月中座演弓張月 同月大西座演怪鼠傳 於大坂翁著流行大勢如此	春南柯双六行	春京傳惡訪翁詰作中私譏已
○弓張月續篇 ○俊寬島物語 ○旬殿實々記 ○松染情史秋之七艸 ○巷談陡坡庵 △小鍋丸手石入船 △歌舞伎傳助忠義話 △復離兒手柏木 △復離身代名號 △復離白鳥之關	○弓張月拾遺 ○夢想兵衛胡蝶物語 △旬全伽羅柴舟 △玉櫛箭刈萱後傳 △八郎兵衛敵討賽八丈 △小女郎蜘蛛怨學環 △山中鹿之助幼稚譚 △十三鐘孝子功績 △釣鐘綱左衛門奉加助太刀	○普語實屋庫 ○弓張月殘篇 ○常夏草紙 ○武者合竹馬鞍 △松月新刀明鑑 △討也敵野寺鼓草 ○敵同志石與木枕 △姥櫻女清玄
△復離岬之洞 △寶茶郎談 ○柳巷話說	○燕石禪詩 ○胡蝶物語後篇	
五六六	四六	十十二十六三三五五

年	七	八	九	十
			寬政諸家譜成 山本北山藤田幽谷市場通笑卒	後櫻町上皇崩御 蒲生君平卒
				大坂春蝶奇緣淨瑠璃大行
	○占夢南柯後記 ○青砥藤綱摸稜案 □金毘羅利生記 □煮雜之記 △梅遊吉兵衛發心記 △相馬内裏後難棚	○摸稜案後篇 ○絲櫻春蝶奇緣 △鳥籠山鴨助太刀 △浪之花桂夕沙 △千葉館世繼雜談 △行平鍋須磨酒宴 △傾城道中雙六 △復離仇名物好奇	○皿々椰談 △復離藤爾乘掛	
	二一五八	二三五二五六五	三六六六六八五	六六

年	十一年	十二年	十三年	十四年
喜三二卒 骨董集成		八月類聚國史刊行	職官志板 九月京傳卒	天皇御讓位 仁孝天皇御即位 南畝莠言板
八月大坂中座演摸稜案後篇 此年著里見八犬傳朝夷巡島記		春大坂中座演園之雪		四月改元
○南總里見八犬傳 ○朝夷巡島記 △蘆名辻塞仇討 △皿屋敷淨名染着 △西都大内鑑 △驛路鈴與作春駒 △已鳴鐘男道成寺			○八犬傳二輯 ○巡島記二編 △手鞠唄三人長兵衛	八月二十日宗伯(初名鎮五郎)卜居
一六六六五五	一六六六	六五五	六六六六三	六六六六六

文政元年	二年	三年	四年	五年
幕士譯滿州魯西亞書 いろは文庫板	田舎源氏初篇板以下年々續出 盡工北尾重政卒		七月紅夷獻駱駝	二月將軍爲左大臣世子爲内大臣 堀保己一鳥亭焉馬式亭三馬卒
神田同朋町業醫 宗伯舊師山本宗英法眼卒	二月下旬仙臺寡婦真葛姥寄書翁 松前侯分賜大福米 爲同侯作駿馬錦帆之記 此年作磐傳母記述京傳事蹟	宗伯爲松前侯抱醫師		
○八犬傳三輯 ○巡島記三編 □大夷評列記	○八犬傳四輯 ○巡島記四編 △安達原秋錦木 △弘法大師誓筆法 △信田妖手白猿牽 △籠細工竹取物語 △月夜好阿玉池		○巡島記五編 △宮戸川三社網舟 △めたく六三文章 かしく	○八犬傳五輯 △女阿漕夜網太刀魚 △照子 △池浮名寫畫 ◎吾佛記卷
二五五	六六二	六六五	六六五	六六六

十	九	八	七	六
還魂紙料用捨箱板 將軍爲太政大臣	國史畧成 龜田鵬齋卒		刑政總類成 清水濱臣卒 仙臺只野綾子(眞葛姥)卒	太田南畝卒
三月宗伯娶土岐村氏女名路 夏翁大病 秋撤改名墓氏	正月與同志起冤國會 此年又醜案水滸傳著合卷傾城水滸 傳行優金毘羅船	五月讓家務習清右衛門剃髮號笠翁 同月移神田宗伯家 七月與同志起耽奇會 此年醜案西遊記著合卷金毘羅舟大 行	長女さき迎夫 大修神田宗伯家屋庭園 此年妻會田氏及宗伯大病 宗伯病爾後年々漸重	
△牽牛織女願系竹 △代夜待白女辻占 ○八大傳六輯 ○巡島記六編	△金毘羅舟三編 △殺生石三編 △水滸傳二編 △大和莊子華笈笄 △姬万兩長者鉢木	△金毘羅船利生鑑 △殺生石後日怪談 △童蒙話赤本事始 △梅櫻對姉妹 △襲妻辻花染 ◎耽奇漫錄	△諸時雨紅葉合傘 △女夫織玉川晒布 △膏橋河原祭文	
五六六六	六六八八六	十二六八八六	三六六六六六	六六六

年	十	三
去年十二月改元	史籍年表成	十二月改元詔出大紋 北川眞顔白川樂翁卒
閏三月宗伯長女つき生	二月宗伯長男太郎生 夏宗伯大病 此年起讀本近世說美少年錄筆	三月江戸大火翁親戚大樞樞災 秋將移根岸而不果 此年義譯通俗金翅傳著風俗金魚傳
○美少年錄三集	○八大傳七輯 ○松浦佐用媛石魂錄後集 ○近世說美少年錄 △殺生石 △水滸傳四編 △同 五編 △今戶土產女西行 ◎雅俗用文 後天保十二年板行	○美少年錄二集 △金毘羅舟五編 △同 六編 △殺生石 △水滸傳六編 △風俗金魚傳 △漢楚賽擬選軍談 ○繪本漢楚軍談 ◎近世流行商人盡狂歌合 繪詞
五	六八八	八六五

年 三	年 二	年 元 保 天
	<p>石川雅望卒 書家關思亮卒</p>	<p>石川雅望卒 書家關思亮卒</p>
	<p>賴山陽十返舎一丸樓亭琴魚卒</p>	<p>此年醜案金瓶梅著新篇金瓶梅 此年著讀本開卷驚奇俠客傳初篇蓋 欲散動王慷慨積鬱也</p>
	<p>或人謂此年翁署名小說家主人著後 言發當時文學六家內事云云 或謂此書小林歌城作也又謂近郊某 寺僧作之歌城補助之云云</p>	<p>○開卷俠客傳 △金瓶梅舟七編 △水滸傳七編 △殺生石 △風俗金魚傳二編 △擬選軍談二編 ○漢楚軍談二編 △新篇金瓶梅</p>
	<p>○去りうこ ○八犬傳八輯上 △金瓶梅舟八編 △水滸傳八編 △殺生石 △金魚傳三編終 △擬選軍談三編終 ○漢楚軍談三編 △新篇金瓶梅二編 至天保十三年達九編如其年々 發免今編者不詳之故中略</p>	<p>三四八 八八五</p>
	<p>○八犬傳八輯下 ○俠客傳二集五 ○漢楚軍談四編 △殺生石大尾 △水滸傳九篇 △千代諸良著聞集 △同 後篇 ◎本朝水滸傳前編總評</p>	<p>一四八八 四五五</p>

七 年	六 年	年 五	年 四
<p>九月將軍辭職</p>	<p>此年仙石騷動</p>		<p>仙鶴堂卒 本居大平卒</p>
<p>八月十四日於兩國方八樓開七十賀 筵 十月移四谷信濃坂 養瀧澤次郎爲宗伯子</p>	<p>五月八日宗伯死年三十八</p>	<p>此年松前老侯捐館幼君繼家齋翁一 家待遇不如始 此年著江戸作者部類但署名盤行散 人 此年翁大病</p>	<p>八九月交右眼不見 八月十七日宗伯二女さち生 九月大坂某座演弓張月</p>
<p>△水滸傳十三篇</p>	<p>本年以後著作編者不詳之今僅 記所知限 △水滸傳十二篇</p>	<p>○八犬傳九輯上 以下至天保九年年々多有少發 免但編者不詳之中畧 ○美少年錄四集 ○俠客傳五集 ○水滸畧傳一集 ○水滸畧傳一輯 先有此題名書發免不審 ◎判官太郎白狐傳 ◎武者繪本初集 ◎物之本江戸作者部類 △水滸傳十一篇</p>	<p>○俠客傳三集 ○同 四集 ○漢楚軍談五編終 △水滸傳十篇 ◎三遂平妖國字評 ◎續西遊記國字評</p>
<p>八</p>	<p>八</p>	<p>八二二五</p>	<p>八四五五</p>

二年	引化元年	十四年	十三年	十二年	十一年	十年	九年	八年
大城成 水越罷 學習院立 芍藥亭長根卒	大城火 瀧亭禮丈卒	將軍日光御社參 平田篤胤卒	天保曆成 柳亭種彦爲永春水卒	先將軍家齊薨 堀田正篤老中 渡邊華山卒 屋代弘賢卒	光格上皇崩御 鶴衣板 文晁卒			二月大鹽後素亂 八月家慶將軍 水野越前守老中
				春會田氏死年七十八 秋八大傳大成 時翁年七十五	眼全不見 口授婦琴童令寫八犬傳稿 秋妹死	眼病漸重	春左眼亦漸不見	七月蟹清右衛門死 此年翁著視藥霞報條再板
		太郎日光御社參御供						△視藥霞報條 ◎後爲記 再板
	△金瓶梅十篇 後弘化四年出版			◎八犬傳 △小女郎蜘蛛怨學環 △大師河原常夏話 □雅俗要文板	△敵討賽八丈	△無筆節用似字盡	○八犬傳 ○八犬傳九輯下	再板 一
			◎吾佛記自二至五					四
								三

嘉永元年	四年	三年
一筆葦可候卒	孝明天皇御即位 高田與清卒	仁孝天皇崩御 伴信友卒 蜘蛛糸卷板
十一月六日曲亭馬琴翁卒年八十二 葬小石川若荷谷清水山深光寺	翁名號多し今之を列記すれば 通稱 佐七郎又佐五郎 佐吉 清右衛門 笠翁 篁 倉藏 藏海小字 字 藏翁藏云	△女耶花五色石臺初篇二篇 △五色石臺三編四編 △金瓶梅十篇板
著述出版年月不詳の者も多し 讀本 桂葉秋波新語 瀧口横笛想夫戀 梅川忠兵衛大和紀行 藤藤房忠謙錄 花蝶翁再遊外記 玉石童子訓 合卷 復讐ごうてつ 復讐石ミ木枕 青山警仇討 淨瑠璃坂仇討 時鳥淺間嶽暗押紙 對模樣萩ミ尾花 院本 化鏡丑滿鐘 雜著 落語花之圖	與邦諱 翼 瑣 吉 子 邦 諱 翼 瑣 吉 與邦諱 翼 瑣 吉 號(名居所) 解 亭々亭 曲笠軒 著作堂 乾坤一草亭 飯齋臺 狂齋 警齋 又 閑齋 問齋 又 閑齋 葆光舍 又 閑齋 馬諸號 鳥水養笠	

### 式亭三馬

#### 其一 生涯

「餅好酒中の趣を知らず、饅頭那ぞ酩酊<sup>ドビロク</sup>の心を知らん」とは「酩酊氣質」の序文中に見えたる句なるが、過度に酒を好むものも、亦必しも酒中の趣を知るとはいふべからず。真に酒中の趣を知るものは夫れたい過ぎず及ばざることなく宜きほどに中を得て能く酒の美味を解する上戸なるべし。予の如きは酒道よりいへば所謂餅好にして、下戸の部に入れらるべきものたるべけれども、亦一二盃の酒の味を知らざるには非ず、これ予が上戸ならざるにも拘らず、妄りに三馬が酒中の

雕 高  
 厚皮面人  
 半問又半閑  
 信天翁  
 雷水山人  
 山摺貫淵  
 曲わの馬こま  
 魁 子  
 逸竹齋  
 玉亭  
 小説家主人  
 てうくは坊  
 大樂山人  
 愚山人  
 傀 子  
 達 子  
 蟹行山人

戲聞春之壽  
 隨筆駿馬骨  
 同 遠近紳紙  
 禽 鏡  
 新篇古杖揃  
 古今歌話  
 俳諧人物志  
 同 早引草  
 同 伊呂波韻

式亭三馬肖像



趣を知らんとする所以なり。

同じく酒を好めども三馬と一九とは酒癖に於て大に異なるどころあり。チビリチビリと飲み續けて限を知らず、段々に飲募りて飽くことなき所謂梯子上戸は一九なるべし。グイ／＼と強飲け醉がまはるに随ひて次第に眼を据え、或はぬちくり或は腹立ち、果は他人と口論をはむるは三馬が酒癖なるべし。

三馬は實に酒癖の悪かりし男也故關根翁の話に三馬はトめは焉馬の門人なりしが其のころ酒の上悪かりし爲師に禁酒の證文を取られしこ雀庵が筆記に見えたり云々

酒の上のみならず、三馬と一九との兩者は相離るべからざる關係あり。蓋し一九と三馬とは或點に於ては頗る相似たり、而して或點に於ては然らず。頗る似たりとは何ぞ、二家齊しく滑稽家と稱せられたること是れなり。似ざる點とは何ぞ。喩へば辛夷の木蘭に於るが如く、鴉の鵝に於るが如し。即ち一九は純粹の滑稽家なれども、三馬は然らず。

また三馬と一九とは共に學問に淺くして文藝の才に富めりしとに於て相似たり。一九が書と畫とに拙からざりしと同じく、三馬も亦「手跡は惇信様にて拙からず畫は學ばざれども頗る出來者たり」と許さるゝまでにもしき。されは實際の事に關しては二者決して同じからず、一九は世才に乏しかりしに、三馬は頗る經濟に長じき、されば其の初無一物より興りながらやがて一家を興し「三馬が新製の江戸の水といふ賣藥世の婦女子に愛せられて漸々多く賣れしかばなほ種々の藥

を齎して終に其の身の様になし」たるのみならず當時戯作を以て産を興し、は實に京傳と三馬とありしのみ。されど京傳は子なかりしかば弟京山に家を譲りしに京山繼ぐに及び本業の煙管煙草入の商賣を廢したりしが、三馬は其の子に至りて父の生業を改めず、身後の福は三馬京傳に勝りきといふ。果して然らば三馬は實に戯作者中の經濟家なりけらし。大まかにいへば、此の一事のみにては、いかに彼れが世務に長じ世才に老けたりしかを推量るに足らん。

世人に愛せらるゝ點に於ても、一九は、彼れ自身愛の目的物たる趣ありしが、三馬は然らず、彼れが工夫に成れる戯作若しくは賣藥こそ盛に世間に持囃されたれ、三馬其の人の人柄に對しては世人同情を表せしや否や甚だ疑はし。『作者部類』の著者は

其の人に憎ありて性酒を嗜み人争闘せしこと屢々聞えたり

と評せり、片言いまだ輕信すべからずと雖も、また以て三馬が性質を知るの一材料とするに足るべし。

三馬の先輩は京傳、馬琴等なり、年齢は三馬、京傳より若きこと十四歳にして、一九より若きこと九歳、馬琴よりは八歳なりき。安永四年淺草田原町三丁目に生まれき、版木師菊地茂兵衛といふ者の子なりといふ。或は謂ふ其の祖は八丈島爲朝神社の祠官なりきと。幼時の生涯に就いては唯二三の消息を傳へたるに過ぎざれども、後年戯作者となるべき才氣と、それを長ぜしむべき涵養とは、已にその當初に存したりしに似たり。

そも三馬はもと版木師の子にしあれば、寺子屋へ上りし外には、別に教育とては受けざりしと論を俟たざるべし、されどその總角の時より小僧奉公に住込みて後に手代とまで經上りし彼れが主家は、幸にも江戸本石町なる書肆翫月堂（一説には茅場町の地本問屋西村新六方ともいへり）なりしかば、彼れは日毎に其の性來好むところの稗史小説などを讀むの便宜を得、十三四歳の頃までには雜籍あらかたを讀盡くし、爰にはじめて後の述作の素を得たりき。之れより先三馬の伯母某の某邸に與勤めしたりしを三馬幼きころ屢訪問し其の都度旁にありあふ稗史草双紙などをとり上げて仔細らしく朗讀す、讀みかた巧なりければ、傍聞せる女中皆感心してはめたゝき。

因みにいふ式亭三馬が其の作『浮世風呂』などに諸侯の奥向勤の女房などの情態又は表向の詞まては内證の雜話等をよく穿ちたるは本文にいへる親戚の女中に負ふ所尠からざるべし、件の女中は或ひは三馬が姉なりきともいひ從姉なりきともいふ、よし直接に負ふ所ありきといふべからざるも夙に奥向に出入せし事が大なる素となりしや疑なし彼の『浮世風呂』の中なる御殿下りの母子の問答は穿の妙に入りたるものにて其の筋の者だに舌を巻きぬ、云々故關根翁いはれき

さて十六七歳の頃より已に戯作の志あり、遂に十八歳にして始めて黄表紙三冊を綴り、畫は豊國にかしせ、西宮新六の版にて寛政六年世に公にしき、これ『天道浮世の出世操』とて三馬が處女作なり。又『人間一心のぞきからくり』も同年作なり。『稗史年表』同年の條に、

式亭三馬は芝全交が作の趣を慕うて世俗の風を穿つ事を得たり妙作多し

とあり。これより年々草双紙の著作あれども、寛政中は三馬の作甚だ少し、享和に至りて其の數



を増しぬ。中にも『草双紙憶説年代記』は鉢かつきの物語を綴りたるが、繪様文艸ともに、自畫にて草双紙代々の風を寫し、傍ら赤本、青本の變遷を説く、簡なれども参考に資すべき珍書なり。

右の初作は三馬が年季奉公中の作なりや否や詳ならざれど、恐らくは年季開けて後の作ならん。蓋し三馬は年季満ちて後山下門外なる書林万屋太次右衛門の（蘭香堂の）婿養子となりしに、妻早世しければ後其の家を出で、或時は四日市に古本屋を始め、或時は石町の裏店に借宅せしが、其の頃より漸く戯作に着手し、西村方より二冊三冊の小冊子を出版しき、さるほどに大坂の町人某といふ者、そが江戸の出店の中絶したりしを再興せんとて、この事を三馬に委任せしかば、遂に三馬は本町二丁目に移り、賣藥店を開き、やがてそを本業となすに至りぬ。此の事の年月詳ならざれども三馬の名が漸く世の中に知れ初めしは寛政八九年の頃なりとぞ。

さて三馬といふ號の由來は圖を拾つてさぐり當てきともいひ、又『作者部類』には

みづからいふ吾は唐來三和の才を慕ひ鳥亭子に忘形の友とせられしより三和馬の一字を取りて三馬と號く云々

と見えたり。なほ本町庵は町名によれること勿論にして四季亭とは式の代字なるべし。又洒落齋、哆囉哩樓、游戲堂等あまた別號あれど、世に著く知られたるは式亭三馬の號なり。

三馬が戯作の幼年は赤本及び洒落本に力を用ひたりし時代なり。そのころ洒落本の名人には山東京傳ありしかども往ぬる寛政三年『任憑文庫』錦之裏』等を名殘として筆ををさめければ、一九

又は三馬の作やうく世の中に喧傳せられたり。當時洒落本の流行は實に驚くべき程にして、寛政八九年（恐らくは尙一二年の後か）の頃には、一年に新版の洒落本四十二種の多きに及びしとありといふ。されど公儀も其の風俗に於ける影響の少ならざるを認めて黙するを得ず、巨細に、版元を穿鑿しけるに、其の作者中には武家もあり、役人の家人さへも有りければ、事實を申しつるに及ばず、いづれも版元の自作に取做してそれ／＼に處分し、其の後は取締一層嚴重になり、名高き『辰巳婦言』の如きは實に其の一種にして寛政十年の出版なり。然るに其の頃より禁令厳しくなりぬればこの篇などは恐らく洒落本流行の殿なるべし。たゞし洒落本にては三馬の名はいまだ甚だ高からざりしが偶然の出來事が縁となりて其の名俄に廣まりし原由を尋ぬるに、同年のこと當時一番二番組の火消人足等が鬭争せしことを筋として『俠太平記向鉢卷』（寛政十一年）といふ草双紙を仕組み、そを翌年の新版に賣出し、に、よ組の人足等大に怒り、こは我我を誹謗せし者なりとて、其の正月五日といふに版元及び三馬が宅に押掛けさん／＼に破却しけり、さて此の一件にてよ組の人足幾名か入牢し裁許の日に至りて版元西宮新六は過料、作者三馬も罪を得て手鎖五十日に處せられけり、かゝりしかば親類縁者はいたく恐怖し、三馬が赦免となりて歸りし後、もはや戯作の筆を執るなどさま／＼に忠告しけれども、三馬絶えて聞く色なかりき、志かるに此の過失は諺の如く功名となりて、これより三馬の名漸く世間に聞こえ、著作も著

く流行し始めけり。三馬は更に機に乗じて『雷太郎強惡物語』などいふ合巻物をも綴りけるに此の書いたく時好に投じ、三馬の評判いよ／＼高く、遂に文壇に地歩を占めて、漸く先輩を凌がんとする勢とはなりけり。

されど此の僥倖に遭遇せし以前にも彼れは決して立身の工風に迂なりしにはあらず、其の汲々として名を求めんとしたりし形跡の一證ともいふべきは、二代目全交が名を繼がんとせしこと是れなり。『作者部類』に曰はく

寛政の季に芝全交が没せし後全交たらんを欲せしに障るこゝありて果さずこかくする程に彼の火消人足圓等一件より三馬の名號暴に噪しくなりしかば初念を絶ちなき云々

さて全交跡目の事は當時世間にも多少知れ亘りたりし事なりきとおぼし、されば之を中途にて故障ありとてえ果さざらんは三馬にとりては頗る外聞に關したることなりきとおぼしく、彼れは現に其の作の『樂屋通』及び門人馬笑が作の『廊節用』等にて取消廣告ともいふべき辨解を物しき。曰はく

式亭三馬儀古人芝全交の遺言に付此度より二代目の全交と可相成候へ共いやしき妄作を以て古人の高名を汚すは恐れ有ま存  
トいまだ改名は不仕差控罷在候猶不相替全交儀と被思召御一笑奉希候

と、また自ら詞の上にも他人に向かひて此の事の辨解を努めきとぞ。蓋し三馬が世間を籠絡するの手段は概ね此の筆法にひとしきものなりしに似たり。前にいへる時好に適ひたりし合巻物の如

きは殘忍殺伐荒唐奇怪なる作にして健全なる文學思想を有するものゝ殆ど讀むを屑とせざるものなれど世俗は素より其邊には頓着無く只小供おどしの殘忍の分子と奇怪不思議なる脚色との爲に注意を奪はれて恐悦がるものなれば、人氣作者といふものはかゝる乗ずべき機會を見逃さず流行を追ひ時好に媚ぶること勿論にて、かゝる事は決して三馬より始まりしにはあらず、唯彼れは此の秘訣を知りて機會に投ずることに上手なりしのみ。されば『作者部類』にいへらく

いたく殺伐なる臭草紙を設けて時好に媚びしかば其の名一時に噪がしくなりたり

彼の京傳が作の稗史も此の點に於て間々同類の譏あり。おもふに三馬は前に京傳が作の頗る世評よかりしに思ひつき、それを模倣してかゝるものを著作せしにあらざる歟、卑猥と殘忍の分子満ちたる作を難ずるは至當なれども『作者部類』のひとり三馬を咎めしは聊か片手撃の嫌あり、但しは評者が京傳への遠慮も籠りたりしか。『作者部類』の評は流石に大我慢者の筆とて灸所を捕らへたる所勘からねど又徃々偏頗を免れず、就中式亭三馬の評に至りては苛酷に過ぎたり。原來三馬は勝れたる天才あるにもあらず、而して名に汲々たる徒なれば先輩と快からず、殊に京傳馬琴は彼れが前途に横はれりし邪魔物なれば、彼れは此の二人をさながら目の上の瘤のやうに思ひしならん、すなはち馬琴とは隱然一敵國の趣を存して兩々相譲らず、馬琴は三馬が小才を侮蔑し又彼れが虚名を悪みて何事につけても攻撃の鋒を向け、三馬も亦馬琴等が學者ぶれるを嘲り笑へり。『作者部類』に曰はく

(前畧三馬は)京傳馬琴等と交らず就中馬琴を思ひこむ雙敵の如しと聞えたりいかなる故にや己に勝れるを思む胸狭ければならん

又三馬が學才なきを嘲りては

學問は無けれども才子なれば自序なきを綴るに能く故事を取まはして漢學者の如く思はれたり  
三馬は山下町に居りし頃よりまばら狂歌堂に交加して狂歌を真顔に學びたり眞顔も其の己れを愛敬するを欣びて常に人に對して三馬は才子なりと褒美しける然れども其才狂歌には足らざりけるにや聞えたる秀逸は一首もなし況して狂詩などは作り得ず俳諧の發句すらせざりしか一句だも見るこゝあらずかれば純粹の戯作者也明の謝肇淪が所謂才子書を讀まざるの類なるべし

こは元より敵人の評なれば其のまゝには採りがたしといへども、さりどて是等の冷評に對して吾人はた大に辯護するに由なきを如何せん。げにや三馬は度量も狭く、學問もなく狂歌も俳諧も大に見るべきものなかりしなり。所詮彼れは眞の風流の心掛ほとんどなく俗氣紛々たる一才子たるに外ならざりしなり。

ちなみに曰ふ故關根只誠翁の話に曰はく三馬は頗る癖癪持にて了見の狭かりし男と見えたり書肆又は畫工など、屢々爭論せしこゝもありき通油町の鶴屋喜右衛門方にて作者畫工などを響應せし事ありしが三馬京傳の徒皆其席に列りぬ宴闌なりし時西村屋興八といふ者(書肆)盃を京傳に與ふるこゝて京傳先生と呼びたりしが後又三馬に盃を屬して三馬子お一つといひしかば三馬佛然と色を作して忽ち大聲に叱して曰はく京傳を先生と稱し予を三馬子といふは如何、江戸氣象の作者といふは予を除いて誰れぞ云々さかくて大騒ならんとせしを人々なだめけり云々、又嘗て西宮新六が『雷太郎物語』の當り振舞をなせしもあり、蓋し京傳が『娼妓絹ふるひ』以前には作料さいふ物なし大抵品物報酬なりきこゝに謂ふ當り振舞は作の大

に人氣に叶ひて利得ありし時書肆が作者への禮心にて作者畫工などの取巻となり劇場又は遊女屋若しくは船遊びなどにおもむくをいふ、さて西宮は他の書肆の主人某と共に三馬を伴ひて新吉原の廓に到りぬ、折しも彌生の櫻時なりしかば人々の心浮きたり西宮は三馬と共に仲の町をさびめき歩きながらフト三馬を顧みて「シカシ先生かうして爰で遊ぶは實はムダでござりますねといひしを三馬聞きもあへず大に憤り「ムダならお氣の毒だ歸りませう直に歸りませうといひかけてスタスタ歸りかれば新六驚きおしこめ「今のは冗談なりとて詫ぶれどもきかず三馬雪駄をもぬぎて懷中におさまやがて又驅出だす新六やう／＼追ひすがりてさま／＼なだめ「ナセ雪駄をおぬぎなされしと問ふ三馬曰ふ「これも穿いてゐるはムダなッてす、遂にスタ／＼と走り去りぬ云々

されどかゝる冷評も三馬にとりてはさながら糠に針打ちし如く何の効目もなかりき、蓋し三馬は陋俗に甘じ、無學を以て誇り、才子を以て任じ、絶えて學者ぶらんことを好まず、また高尚ならんことを欲せざりしゆゑなり

ちなみに曰ふ、三馬が學問を蔑如したるこゝの本文にいひたる如し或時の事なりけり同代の戯作者墨川亭が三馬に問ふ我れ近こる『源氏物語』未摘花の巻の講義を聞きつるがこゝは幾分か戯作の補助ともなるべくやと、三馬答へていふ『源氏物語』は諸物語の翹楚なれば雅文辭を綴るの師表とすへけれど戯作者には用無し戯作者の本意はさるむづかしきものならず君も戯作して心を慰めん志ならばさる講義を長々しく聴くには及ばず源語をも少しづつ聞きはつりそを似つゝこらしく取做して巧に物せんこそ戯作者の腕なれ餘に源語に誤りすぎてカヤ／＼と笑ひサヤ／＼と繰りひらきなご生ごなしの源語風かたはらいたして手を拍ちて笑ひき云々、これも故關根翁の話なり

『昔唄花街始』の跋に曰はく

饗食ふ虫も己が好々まは宜なるかな八種、餅餌、五羹、水饅の上菓子を盛ひて一山四文十個三文の琉球芋や陰瓜を好むあり

これを稗史に譬へば讀本は上菓子にて草双紙は駄菓子なりされば這双紙はあまり大俗トやと仰せらるゝ看官もあるべけれど作者の腹が黒砂糖なれば太白の製法を知らずてには口へたまるやら焉哉乎也が半熟で待るが思へひつゝいたらば折角老店な菓子の株も受敬を失ふべしと這般仕入を吟味仕り趣向は和にして齒につかずまみはなれど俗文章に繪虚言の衣を付けて上菓子屋と駄菓子屋と讀本と草双紙の其趣向の國字小説彼琉球芋や陰瓜を御好物の女中方子供衆にも讀易く味安き一家の風味は上菓子屋の嘲を願ざるあつかましき戯作者心チトあまくちな製法なれど新製とおぼしめされて云々

右はやゝともすれば學問を銜ふ嫌ある馬琴一流の小説及び國つぶみぶりの作者の頭上に加へたる諷刺にして三馬が通俗文學者の本領を示したるものといふべし。されども唯我れは俗受のみを主とすと得意げに自白せる其の人の肚見えて淺まし。

三馬は先輩として京傳馬琴と相容れざりしが一九どの私交は甚だ圓滑なりしが如し。こは三馬か彼れを容れたりきといはんよりは寧ろ一九が好人物なりしかば三馬に容れられたりきといはん方が穩當なるべし。案ずるに自ら謙るの明なき一九は我が才能の三馬に勝りたるを知らずして唯三馬の虚名の高きに服し、若しくは彼れが世才に長じ如才なき男なるに服し、多少尊敬する所ありしに因るか、又は例のお心よしの結果なりしか、その本意を知りがたしと雖も、彼れは三馬の作に序文などを草するにも

(前畧)式亭主人が机上に筆を走せて書つくしたるそのしりへには天窓をかくより外はあらじ

戯友

十返舎一九

など例の洒落の筆癖のうちにも多少敬意を表したり、或はこれ所謂通人流の心にも無き世辭なる

か。兎に角に洒落本述作時代以來中本述作時代に至るまで此の二人は殆ど相提携して著作に従事しきといふも不可なし。『作者部類』は此の關係を示して左の如くいへり。

洒落本既に一變して浮世物眞似めきたるを世物語流行す其冊子翻入のみよし紙を二裁にしたれば中本物と呼ばれたり又其作者に匿しからず各才に任せてなすは雖一九が膝栗毛にますものなし

なほ同書は本町庵三馬が記事に移りて

一九が膝栗毛の行はれてより亦赤幟を其間に建てんとして作りたる中本多かり

といひて三馬が中本『生酔氣質』『浮世風呂』等の書目を列擧し、且三馬が作は剽竊多しと難じて一々出所を指摘し、中本作者等が世に媚びてものするを嘲り。

只浮世風呂のみ當年評判第一なりされば四編まで相續せしを看官飽かすまで又浮世床前後二編を出したりされば皆膝栗毛の二の町にて等類を脱れがたり畢竟淺草の奥山にて留藏が落語に聞はれて長き春の日の暮るゝを知らぬ看官を一の得意となせる冊子にあなれば好悪褒貶なき事を得ず豈は振鷺亭の文を受づるものは振鷺が中本を妙とす

「三馬をひくものも亦これにあなじ、然れども走る者は必疾く勝者は自ら強し、只一部たりとも多く賣るゝを板元の忠臣とすべければ、膝栗毛の久しうして貸本屋等をさへ肥せしに及ぶべくもあらずかし」と冷評せり。三馬が剽竊のことは別に次章にいふべけれど、兎に角三馬は此の中本にて名高く而して其が彼れの傑作と稱せらるゝ分もまた此の中にあり、而して皆文化の初年より同じ末年へかゝりたり、即ち三馬が晩年の作なり。さてこゝに注意すべきことは三馬が捷筆と速作となり。彼れは三日三夜にして凡そ六七卷又は八

九卷の稿を脱せしこともありどかにて、自作の卷末にわざ／＼三日三夜急案など、記したるもあり。現に『潮來婦誌』の前編にも附言したるあり

(前巻)娼門に登て遊樂する事一晝夜翌日舟中に想を發してまづ發端を編又万葉堂に飯り再び筆を採て凡五日にして著述校を脱す云々

思ふにこは三馬が作の拙なるを蔽はんとての口實にはあらざるべし、否、口實にはならず、世間にも許され且自らも許し、自家の長所を誇りしのみ。

あはれ文人の自信己惚の甚しきや久し、蓋し三馬は京傳等が遅筆を知りしゆゑにわざと面當にかゝることを公言せしものと見えたり、さりながら退いて考ふるに彼の『潮來婦誌』の如き端物二三篇を草するに五日を費やしたりとてさまで速しとはいふべからず、よし速しとするも速きは何の爲に貴きか。多く作すといふ健腕の貴きか。其の作取るに足らざば如何。速筆なる割合に懶惰なる時も多かりきとせば如何。三馬の達筆なりしことを事實とするも、彼れの一生の全著は割合に多からざりしなり。

世に振鉢巻と稱する一種の文人あり、彼等は常に懶惰遊逸に日を暮し一時送りに執筆を遷延し、ソリヤ鎌倉といふ日に至れば俄にコップ酒に勢を着けて、振鉢巻をして晝夜を分かず筆を走らせ、辛く稿を脱して是れを版元に送る、されば推敲の餘裕もなければ字句の配置を正す暇もなし文成るといへども素より神來ありて筆を採りたるにはあらず、止を得ずして責を盡くしたるも

のなれば、支離滅裂殆ど章をなさず、唯是れ汗牛充棟枯木も山の賑を増すに過ぎず。三馬は此の振鉢巻流の鼻祖にはあらざるなきか。

ちなみに曰ふ、三馬が不規則なる作者なりし事は本文に見えたる如し文化のはじめ書肆の三馬に稿本を乞ふ者頻々たりしころ彼れは屢々約束の期を誤り催促に苦められし事常なりき、されば絶筆絶命の極五日或は七日程づ、件の書肆の許に寄寓し鉢のよき生捕同様の姿となりて一室に閉籠り稿を物せしこと屢々ありけり、されば一月中居所一定せずのふは何屋の二階にありしもけふは他の家の離れに閉居しめぐりて述作に従事せしがかくても尙手の届かぬ他より違約を責めらるゝ苦しさに果は二三日行衛知らず成りしこともありきか、故關根翁の隨筆に見えたり

馬琴は孜孜として倦まず年八十に餘り巻積んで山をなしぬ、縱令世界第一流の作家と稱すべからざるも彼れの名聲は決して一處一代のみに限らるゝものにあらず、蓋し彼れが丹精を凝らし、作には彼れの精神宿ればなり京傳はまことに遅筆なりしが如し、然れども京傳の作は着想意匠さすがに綿密なるものあり、是れ恐らくは其の成るの遅き一因なりけん、彼の三馬の作の脚色もなく統一もなき唯場面のみを寫したる記行同様の著作と日を同じうして其の遅速を論ずべんや。三馬の識見の卑きかゝる點に思ひも及ばでひとり速作の小才を誇りき、三馬が大文豪たる能はずして端物の作者を以て終はりしこと偶然ならずといふべし。

三馬が父茂兵衛は始終三馬と同居せず別宅に在りて割腕を營みける、彼れはた酒を嗜みしかば三馬は毎月酒錢として南鏡三片づゝを贈ること數年來間斷なかりき。例の道德的なる『作者部類』の著者は此の一事のみを賞すべしといへり。

三馬は初老に及びて大に酒害を恐れ其の後には只管醉狂を慎みて渡世を旨となしぬ、されば時既に晩かりしにや、教訓亭が『浮世床』三篇（作者瀧亭鯉丈）の序に

柳髮新話の三編目を本町庵へ言入れしは三年以前のこゝなりしが近來先生多病にして風呂加減も床髪も暫筆を留置のみ云々  
此は癸未の春の新版なれば文政六年にして三馬が死去の翌年なれども、此の序文を草せしは未だ存命中とおもはる然るに三年以前近來多病等の語あるを見れば文政に入りては恐らく三馬は病の床にうち臥しがちなりしならん。されば「大酒を好みて病死せり」と傳へたり、著作の年號附にも文政とあるは稀なり、彼れは文化を以て全盛を極め遂に文政五年正月六日四十八歳を一期として他界の人となりし也。墓所は深川雲光院地内長源院にあり法號は

歡譽喜樂奏天信士

門人十數人あり獨り狂訓亭三驚（爲永春水）三馬の門下よりいでし中本に名高し。其の他には聞

こえたる作者もいざざりき。

ちなみに曰ふ、俗に三馬が辭世して世にいひ傳へたる「善もせず惡も作らず死ぬる身は地藏もほめず閻魔もからず」云々いふ歌は當時の醫師須藤某の爲に三馬が頼まれて詠みたりし狂歌也、三馬には辭世といふものなし、故關根翁の説に曰はく三馬の病危篤なりしや或人ひそかに其の枕邊に居寄りて「さる事もあるまじけれど万一の變あらんには高名、大人の如くにして辭世の詠なきは遺憾にあらずや一言いひ残したまはずやいひける、三馬憤然として「辭世をよめさや予はまだ死なざる也いって我れ死すべきぞいひもあへず其の男の面を目がけ枕を搦つかみて抛けつけき云々

○後の式亭三馬

血統によりて戯作者の名を継ぎしものこれよりさきに山東京山ありしが三馬が子に幼名を虎之助といふあり、三馬が没せし頃はなほ總角なりし由なるが、文政十一年戊子の春なほ少年にして『三國妖狐殺生石』といふ合巻物を綴りて、式亭三馬倅虎之助作と著名し鶴屋板國安の畫にて公にせり、これ其の初筆なり。この明年己丑の春より彼此の書買に請ひて戯作を印行せしが尙式亭虎之助と落款したりき、かくて四五年を経しほどに竟に亡父の名號を嗣ぎて自ら式亭三馬と號しき、大に聞こえたる作も無けれど父子共に戯作者たりし異例の一としてこゝに附言すと云爾。

其二 中本

『作者部類』に據りて爰に中本と題したるは一名を滑稽本ともいふ、即ち一九の『膝栗毛』三馬の『浮世風呂』の類是れ也。三馬の作には草双紙、稗史も若干あれど何れも見るに足るべきものなし故に爰に論ずるはおもに中本に就きてなり、これ三馬の最も長じたる所と思はるればなり。關根氏の『小説史稿』滑稽本の條に曰はく

草双紙に滑稽を盡し、は、安永四年戀川春町の金銀先生榮花の夢、及び翌年出版の、高慢齋行脚日記などいふ書嚙矢なりと云々、此頃平賀源内も滑稽本の著數多あり、何れも滑稽の不平を、戯作に寫せしものながら後世の滑稽本は、全く其の著根なし草の類を、小形になし、ものなるべし、下りて寛政の頃十返舎一九の膝栗毛、式亭三馬の著書など大に行はれき（下略）  
又『作者部類』「洒落本并に中本作者の部」に曰く

明和の季より、寛政のはじめ迄、柳巷花街に耽りぬる癖客のおもむきを、半紙二ツ裁りたる小冊に綴りて、よく其情狀を述

たる誨淫の露史を世俗洒落本と喚ばたり、其が大牛紙半枚をもてしたるも有り、寛政のはじめに至りて官禁あり、なべて洒落本の絶板せられしより以來、叫化子のすなる浮世物似こいふとめきたる根なし話説をいさおかしく綴り成たるもの、各一二巻を一編せしを中本と唱へたり、こは牛紙半枚の小冊と牛紙本の間なるものなれば、中本といふなりけり、これらは青樓標客の事にあらす、畢竟洒落本の一變したるものにして、たゞ看官の噴飯に供ふるの外なし、洒落本より今も行はる、浮世物真似の中本に至るまで、細に其作者を、儼なば數十名なるべけれ共みな絶せられぬも、泛々の作者をば忘れざるは稀なり、この故に只其充けき者を録して具ならんことを欲せず、記者の好まぬものなればなり。

案ずるに前者の説は文の形及び其の作に現れたる世界には關せずして、むしろ滑稽といふ特質を主眼にして系統を立てたるもの、如く、後者のは例の主義によりて滑稽を貶視したる嫌あるものから、むしろ著書の種類により起原と變遷とを示したりいづれ此の二説ありて互に足らざるを補ひ吾人をしてほゞ中本の來歴を知らしむるを得たり。

そも、明和年間にはじめて『遊子放言』といふ書のでたるぞ「脩を作りし」と『作者部類』には見えたり、夫れより安永天明に至りて漸く流行しけるが、此の頃より既に洒落本に四の特質の備はれるを發見すべし、即ち是等の書は原來標客の實驗を種として成りしものなれば(一)其の世界の遊里に限られたること(二)經驗話なるが故に寫實なること(三)ありの儘を寫す必要ありしゆゑに地の文よりも詞を主とせること(四)もと遊惰なる子弟の消閑の具に供せん心にてたれば、戯謔滑稽を專とせること等なり。但しもとより例外あり、例へば春町の『金銀先生』風來の『根奈志具佐』は同じ類のものならめど遊里の事を畫きたるものにあらず。さて下りて寛政に至りては

洒落本全盛を極めたり、而して其の代表者は前にも述べたる如く山東京傳にして其の著書最も夥しきるほどに寛政三年の官禁にて洒落本一時其の姿をかくし、がやがて又新流行の火の手上りぬ。此の時の代表者を一九三馬等の一團とす。折しも寛政の季二度目の官禁に遭遇し、其の後は引續きて公儀の監督最重なりしかば洒落本の氣脈漸く衰へてまた振はざることとなりぬ。

されども作者の手は縛られたりしにあらねば、彼等の健なる筆はいづれかの方角へ向かつて延びざるべからず。かくて一二年を経しうち寛政は十二年にして享和と改元せられ、其の二年に一九の『膝栗毛』はじめて世に出でしがこれぞ洒落本の轉生兒なりける。

轉生兒の『膝栗毛』はいかほど形を變へて生れ出でしかといふに、從來は京傳といへども、洒落本の世界を唯吉原深川の狭き場所のみ限りたりしに、一九が旅行好の故と其の見聞の廣きとによりて、單に花街柳巷とは限らず、否寧ろ是等の地を避けて一般の下情に亘る趣を寫すに至れり。當時洒落本の官禁ありしは、名義上よりいへば逆なれど、其の結果上よりいへば彼の解放令の下りける時にひとしく、さしも久しく閉されたりし花街柳巷の大木戸これが爲に一時に開けて壺中の天地は廣大無邊なる自由の世界とかはりたり、明言すれば戯作家が弄筆の範圍、俄然として擴がりたり、彼等は狹斜の寫實より社會全躰の寫實の方へ目を轉じぬ、而して例の對話的洒落本の脈は此の時も尙依然として用ひられき。されど一九の『膝栗毛』は未だ全く遊里的景物を離れたるにあらず、蓋し『膝栗毛』は吉原深川の世界をこそ寫さぬ地方に於ける遊女の性癖并びに花

街の状況をば常に主要なる材料の一となして一般の人情に混じて書きなればなり。然るに式亭三馬いで、はじめて一生面を開き廣く市人の情態を寫實せんと試みたり。こはひとり中本の變遷たるに止まらず、我が寫實小説史上の一進歩といはざるべからず。

三馬に至りて中本の趣全く變化せり、彼の『浮世風呂』を見よ、縱令其の世界は専ら中流以下に限れりといへども、尠くとも江戸町内大の世界なり、即ち其の風呂は狹斜の洗湯にはあらで浮世の風呂なり。且や洒落本傳來の對話、三馬に至りて圓熟し、更に一轉して獨白、兼ねては一人の言によりて敵者の様子口吻をも讀者に悟らしむるの新體となりぬ。これを要するに洒落本一變して一九の中本となり、狹斜世界は押擴げられて我が下流全體の世界となりしを、三馬更に一變して江戸町内の世界となし、漸く本來の花柳脈を解脫し、普通の人情を主眼としき、敘事轉じて之をなし、は此の以前に其碩自笑等あれども對話、三馬が嚆矢なるべし。

### 其三 三馬の才能

式亭三馬或時人に語りて曰はく、

(前略) 戯作者の腹さいふものはたゞ屋臺店の賣物にひさしく手裏劍うちたる唐茄子も菟菟の田樂も何でも四文とりまぜておかん、こ本意なれ云々(『戯作者小傳』)

右は三馬が當時の戯作者等の内幕を覗きて、彼等を嘲らん意に出でたらめど、自家もまた此の旨に安じたと、已に前にいへるが如し。即ち三馬輩は著述をもて縁日の露天店同様に心得たりし

なり。

『作者部類』の著者は三馬を剽竊家なりと難じて一々其の據所を指摘し、『小野篁虛字盡』は寛政中馬琴が著したる草双紙『無筆節用似字盡』及び其の後編『鹿想案文當字盡』を剽竊摸擬したるものなりといひ、又『人心視機關』は芝全交が『十二傾城腹の内』を摸擬したるもの、『田舎芝居忠臣藏』は萬象亭の『田舎芝居』といふ小本よりいへ『忠臣藏偏痴氣論』は曲亭が『胡蝶物語』に忠臣藏あかるが小浪を論じたるを見て稿を起こし、ならん、且鷺坂伴内を忠臣なりといふが如きは古人唐來三和が常に論ぜしことなれど物に記し置かざりしを三馬が自説の如くいひなしたりといひ、なほ三馬が中本の全體をさへ一九の『膝栗毛』が流行せしによりて案しつきしものならんときで極言せり、但しこは例の筆鋒酷評の嫌なき能はず。されば吾人は三馬の爲に一々原本と對照して『作者部類』の説の眞偽を確めんかとも思ひたれども、それも亦煩はしかるべし、殊に三馬の作に剽竊の多きとは争ひがたき事實にしてたとへ若干の回護をなさんも、到底彼れの名を全く淨うするに足らざるをや。むしろ爰には最も甚しと思はるゝ剽竊の一二例に就きて其の何等の度合まで廻護し得べき者なるかを檢するに如かざるべし。案ずるに『浮世風呂』にて三助が薯蕷の半分化したる鰻の談話は、これより以前福内鬼外が作の淨瑠璃『實生源氏金玉櫻』の第二齣のはじめ四五枚の所に同じ道化場あり、此の話は鬼外以前既に落語などにもありしにや覺束なければども鬼外の意は世の山師を諷刺したるにあり、三馬の妙は寧ろ三馬が田舎なまりを能く寫したるにあ



るべけれど、剽竊たるや掩ふべからず。又『四十八癖』中「つまらぬとを苦にする人の癖」に見えたる天地が轉倒したる時の心配、地震は頭上に揺りて雷は地底に鳴るといふ思ひつきは、安永八年戀川春町が作の『楠無益委記叙』に、凡て物の轉倒せる意を寓したるに據りしに似たり、即ち其の中の

地震空で揺て雷地の底で鳴るよつてばら桑葦万葉

とある總解に胚胎せること明なり。其の最も甚しきは『戯場訓蒙圖會』にてこは『羽勘三臺圖會』の殆ど其の儘といふとも、恐らくは証言にあらざるべし。

予は竊に思へらく、等しく剽竊といふものから、其種類によりては深く咎むるに及ばざるべしと。蓋し其の骨を借りて肉を附し之れに生命を與ふるが如き、若しくは肉の一塊をとりてこちらの全身を補ふが如きは許さざるべからず、即ち前者は近松が謠曲の木格によりて幾多の淨瑠璃を物せしが如きをいひ、後者の場合は曲亭が『弓張月』に於ける白縫が新院に見え奉る條を、上田秋成が『雨月物語』より借りたる如きをいふ。然れども彼の三十一文字なる歌、十七文字なる發句、或は唯穿ちを主とする落語などは、よしや其の形に於ては全く變じたるも、其の主體にして他より奪ひたるものならんには、これ決して許すべきにあらじ。三馬の剽竊はいづれに屬するか。近松が淨瑠璃、曲亭が『弓張月』の類なるか、或は一首の歌の場合の如きか、或は全幹の剽竊歟、又は落語の穿ちを奪ひたる類なるか。蓋し一九の『膝栗毛』も落語を剽竊したる所多き由なれども、一

は其の未だ全編を傷くるに足らざると、一は彌次喜太の二人物がゆたかに平等性（通用性）と差別性（特性）とを兼ねたるの故を以て、予は敢て咎めざりき。然るに三馬に至りては然らず、彼れは脚色の結構、若しくは話の筋の上のみ剽竊を行ひしにはあらず、其の編の精髄なる穿ち其の物を全奪となせるなり、罪甚だ深からずや。但し吾人は之をするも深くは咎めざるべし、彼れの作は悉く剽竊なるにあらず、若し彼れが創意に係る分に、一二の秀抜なる華文あらば、巧過相償うて餘あるべければなり。

さらば作者としての三馬の眞價果して如何。案ずるに彼れは到底實際を離るゝこと能はざりし作者なり、彼れが眼の及ぶところは單に實際の世間のみ、彼れは毫も無形なる靈界を認め得ざりしなり、隨うて彼れは現實の摸寫に長じたりき。彼れは文章の上にて口真似、物真似をなすこと巧なりき、假聲を物すること巧なりき、『四十八癖』『酩酊氣質』『古今百馬鹿』『大千世界樂屋探』『早替胸機關』等は其の特色の著く見えたるものなり。三馬の才は所詮摸倣にありて創造にあらず。夫れ造化の美は窮なし、詩人其の鋭敏なる想像と感情とによりて精華を直覺し、これを己れが想の靈火の中に投じて融解總合し、更に美しき物を産す、これを詩才といふ、詩才は一言をもて蔽へば鋭敏なる想像力なり、其の範圍頗る廣し、大なる詩才あれば小なる詩才あり、知らず三馬が詩才は如何。吾人は三馬の作を讀みて其の觀察の鋭利なるを認む、然れども彼れの觀察は廣きのみにしていと淺し、彼れは普く江戸市人の皮相を畫けども未だ曾て其の肺腑に及ばず、其の癖と弱點と

を書けども其の全き殊性を書く能はず。彼れは只通有弱點を描き得しのみ。特性を活現して個人を紙上に躍らしむるの技術無し。

今より十四五年も以前、春のや主人『中央學術雜誌』にて三馬を評し、彼れは穿ちに巧なれど脚色結構の才無し、彼れの諸作は譬へばおもちや箱をひつくりかへしたるが如しといはれたる、蓋し支離滅裂の性癖の平<sup>ゾエラリチ</sup>等を活現するの技術はあれども、それを特殊なる個性となし、且又かゝる個性を相働かしめて虚空に一小世界を現出し、以て宛然として人間の真相を縮寫するの腕前なきことをいはれたるならん。西鶴其積等の作と雖も、小説としては此の缺點を有すれど、彼等は流石に物語の質を具備して脈絡貫通の妙あれど、三馬のは本來ウガチたるに止まり、物語といふべからず、即ち小説にあらずしてカリケチエールの集合なり。之れを要するに三馬は頗る鋭敏なる觀察力を有すれども、大なる綜合の力を欠きたり、又深刻なる直覺の力を欠きたり、彼れは只皮相の妍媸を認め得たるのみ、彼れの觀察と諷刺とは到底少時のヂッケンズの上にいはず。彼れは作家としては『帳内講話』に滑稽の名を知られたるドウグラス、ジョロルドの上にいづる能はず。

#### 其四 滑稽

一九の『膝栗毛』は好笑の粹なり、かるが故に吾人が『膝栗毛』を讀むや、哄然として絶倒せざるを得ず、其の好笑みの醇なるがためなり、吾人をして別天地に遊ばしむるの力あればなり。然

るに三馬の可笑味は此の點にあらず、彼れ素より好笑の小道具に富まざるにはあらざるも、彼れは曾て實世間を離れず、吾人をして出世間の人とならしむるの力なし、三馬の特有は俗人の弱點を穿つにあり、皮相の寫實にあり。加ふるに彼れは同感して同胞の弱點を描くといはんよりはむしろアラを探しつゝあるなり。彼れの穿ちを讀み彼れの諷刺を味ふや、吾人は隣家の通人が世人を嘲けるを聞く心地す、はるかに規模の狭小なるスヰフトに接し、若しくは一層劣等なる風來の雜言をきくの思あり。例へば其の傑作の「一とも稱すべき『芝居客者評判記』の妙趣の如きも、全く表面的寫實の妙たるに止まれり、彼れ其の跋の中に言へらく

(前略)されど技藝の評のみにして拘欄<sup>しほ</sup>と呼れし先哲<sup>せんせつ</sup>いまだ看前<sup>けんぜん</sup>人の評論あるをきかず在下<sup>そげ</sup>も一個の好劇<sup>しほんげ</sup>的なれば一時戲場に遊ぶの日意馬を戲門に繋ぎ心猿を戲房<sup>げいぶ</sup>に放ち眼を東西の棧敷道に配り兩側の茶棚<sup>ちやなだ</sup>に止むれば光棚<sup>ひかりだ</sup>、戲棚<sup>げいだ</sup>合して兩面の照子<sup>あかり</sup>に似たり

と、思ふに此鏡といふ觀念は始終三馬の心を去らざりしが如し、然れども彼れの所謂鏡はシェークスピアが所謂自然に向かうて捧ぐるの鏡にはあらず、三馬のは單に表面の實、俗に謂ふ實を寫す鏡なりき、而も尋常の鏡の如く公平無私なるものにあらず、彼の淨玻璃の鏡の如く、正邪を公平に現するものにあらず、否此の鏡には美しき形、善き形は映せずして醜き癖笑<sup>くせ</sup>ふべき缺點卑しき弱點のみぞ映りたる。左に彼れが觀劇者の笑ふべき形を寫したるものを掲出せん。

その御見物の癖<sup>くせ</sup>といふ癖性<sup>くせ</sup>といふ性を見やうとて、るがけ芝居繁昌<sup>しばい</sup>と書てある守護札<sup>しよご</sup>の中に交て傳風<sup>でんぷう</sup>の上から見おろしたれ

ばどうもいへぬ面白さイヤ又御見物が狂言を御覽するよりも舞台の方から御見物を見た所はよほどの一興でんさたまらず今  
 まで悟らぬ別世界一大奇觀の佳境なりすはや慈嘆の場へのぞめばかぞへも盡ぬ諸見物眉は八字の頰をよせ口にへの字の筆意  
 をあらはし表向からべそを作れば我を忘れて泣くもありこらへかれて涙をかみたり得ずしてうつむくあり白粉はけて睡赤  
 きは四角に疊んだ紙をばなます唇紅落ちて目を腫らせしは鼻に束れた手拭を覆へり泣かぬ顔して笑ひに隠せば見るにまの  
 びす後向く折から道外形のをかしみ出れば慈眉たちまちに開けて満面笑を含み口を抜いて笑ふ聲はるかに三階の耳をつらぬ  
 くかゝる所へ荒事の三本太刀ア、つがもれへの聲につれて見物おのれと眉毛を動かし目を見はり齒をくひしりて灸の皮  
 切を堪ゆる如く、頬をあらはし抹額を正しうしてはためて前なる見物のあたまの高きこそを覺ゆ瀟事の場合には、竊笑ひイ  
 三畜生めさいへるは響詞の意に違へど打擲の場に至りて討があたると罵るは心にもなき悪態なるべし大根を吹くいやみ辛  
 味役者さほむるありがた迷惑イヨ金箱の千兩箱云々(『客者評判記』)

又意地の悪き姑婆の皮相を寫したるを見よ  
 コレおみつ(嫁の名)ごのは二階かの、まだ髪かあてこももない、朝御膳をあがるさお晝まへまでおぐした、此方らが若い  
 時分も覺へが有り、彼やうちやアなかつた、舅姑二人に小とうさか三人、實に／＼息のれもあがらなんだが、それでも亂髮  
 もせなんだあのおみつ杯は、小とうさはなし、何にも角にもおればかりだに、其のまづ面倒が見られぬさは、よく／＼のお  
 引すりさまだ、何處が聖殿の氣に入つたやら、おれが舅ださ三日も持ては居れへ、ナアりんやさうトヤアねへが(『早替胸機  
 關』)  
 そも／＼好笑を組成する第一の要素は失適宜なり、又凡て物の不具なる相は好笑の一要素な  
 り、一九の『膝栗毛』の可笑味は人情の根底より生ずる前者に基き三馬の作の可笑味は人情の皮  
 膚に現じたる後者より生じたり。三馬の一九の比すれば其の由りて來たる所淺しといふべ

し。蓋し一九と三馬とは同じく滑稽家と稱すれども其の趣は頗る異なれり。夫れ富岳はいづれの  
 方面より見るも白皚々たる圓錐形の妙なる峰たるを認むべし、一九の滑稽はさながら富士の山を  
 望むが如し、純潔透明いづれの方面より見るもいとをかし、三馬のは然らず、一方より見れば好  
 笑の面なれども、他方より見れば澁面なり、即ち一面には意地わるきアラ探しの底意を現じた  
 り彼れは到底一九の如く飄逸として別世界に遊ぶこと能はざりしゆゑに、また吾人をして好笑の  
 靈界に遊ばしむる能はず

其五 諷刺

諷刺家といへば我が國にては先づ風來を推さざるべからず、而して竊に風來を前世の師と仰ぎ、  
 自らを其の弟子と自稱したるは三馬なりき、彼れの瘦我慢といひ、實際的傾向といひ、觀察の機  
 敏といひ、頗る風來の衣鉢を傳へたり、風來が士にして本草家たりしと、三馬が商にして藥屋た  
 りしと職業に縁のあるさへいとをかし、但し三馬は大器量なかりしゆゑに、大不平なく、大不平  
 なかりしゆゑに、大諷刺なし、かれは只中以下の弱點を攻撃し得しのみ、加之彼れは重に不具な  
 る人間及び皮相の習癖等を嘲るに全力を費やしたり、三馬が諷刺の範圍を調べればほゞ下の如  
 し

『四十八癖』中「女房をこわがる亭主の癖」「万事を氣にかくる人の癖」「何事も苦勞になる人の癖」  
 「金を無くす人の癖」又『酩酊氣質』にては「面白くない上戸」「泣き上戸」又『百馬

鹿』の「鼻毛をのばす亭主馬鹿」等は其の意久地なしを嘲れる部に屬し  
 「亭主を尻にしく女の癖」大言を吐て諸道を止る人の癖「腹自慢する大食馬鹿」「嫖客を叱る辯問  
 馬鹿」人身觀機關の「高説を吐く草澤醫者の表裏」料理を食自説する人の表裏等は高慢に屬  
 し

「浮氣なる人の癖」人の非を數ふる人の癖「不實者の癖」克く應答をする人の癖「蔭で舌を出す  
 人の癖」狼ものとよばるゝ下卑女房の表裏」等は輕薄の部に屬し

「金をためる人の癖」及び「早替胸機關」の「姑婆」等は貪欲に屬す。  
 之れを要するに三馬が諷刺の正的是は單に皮相のみに就きていへば、英に在りてはフィイルデング、  
 佛に在りてはモリエール等の最も好みて嘲笑冷罵せし者と同じきに似たれど、彼等偉大の諷刺家  
 は同じく自負、虚飾、貪婪、輕薄等を攻撃しながらも、之れを超然として高き處より見下し、普く  
 且深く諷刺したり、加之彼等は此等弱點に富める人間を、巧に小天地の中に活現して、自在縱横  
 に云爲せさせたり。三馬の如きはひとり弱點を描き得たるのみ、竟に之れを個人となす能はざり  
 き、况や小天地を造ることをや。又更に嚴酷にいへば、三馬の諷刺はサツカリーの如く婉曲精緻  
 なる能はず、モリエールの如く普遍奧妙なる能はず、フィイルデングの如く洒々落落たる能はず、  
 スプットスプットの如く嚴酷周到なる能はず、アヂソン、スチールの如く温雅風流なる能はず、彼れは單  
 に諷刺家として見るも、十九世紀の吾人が大に推重すべきものにあらざるが如し。

以上三馬の欠點をのみ酷評して、殆ど其の秀所を評せざるは、或は偏頗なりと罵る人もあるべ  
 し、然れども予は今日の文壇にてすら、此の大に推重すべきの價値なき諷刺家が、存外大層に買  
 ひかぶられ、或部分の人々には師表と仰がれ、甚しきに至りては近松、馬琴、西鶴などいふ立派  
 なる小説家と同列に見做されたるを解する能はず。若し明治の今日の諷刺家にして三馬の諷刺に  
 安ぜんか、諷刺家の筆鋒は、到底現世間にだに何の効能無きナマクラものたるにといまるべし、  
 鋭く諷刺すべき人物は總て三馬が領分外に言動すればなり。又明治の滑稽小説家にして三馬の滑  
 稽に甘せんか、明治の滑稽小説は到底美術たる能はざるべし、何となれば三馬の滑稽は、單に現  
 實の摸寫たるに外ならぬば、到底讀者をして出世間の妙境に遊ばしむる能はざればなり。予が三  
 馬を酷評せる、故なしとせんや。

## 十返舎一九

### 其一 總論

如何なる人といふとも右と左との二方面を有せざるはなかるべし。こは有形なる肉體の上に於て  
 のみ然るにあらざ、又無形なる精神の作用に於ても然るが如し。四支、五體、耳目等に右と左と

の分あるはいふに及ばず、肉眼に觸れざる感情の上に於ても、此の區別は明に立てるに似たり、譬へば餅が欲しといふ情緒は右にして、酒が欲しといふ情緒は左なること、已に俗にいふ所なり。今一步を進めていはんに、金を儲けんと思ふ欲は右なるが如く、財を散せんとする無欲心は左なるが如し、精を出し家業を勵むなどを右に屬せしむれば、遊興に耽り放蕩を盡くすなどは左に屬せざるを得ず。算盤を弾く智恵は右の如くに思はれ、繪を畫く才は左の如くに思はる。家政を理する計畫を右として、戯作を仕組む方案を左とし、凡て實用ある方を右とし、實用無き方を左とすれば、一九は四支、五躰の形有る部分を除く外は、精神の働に於ては頗る左利の男なりしが如し、蓋し彼れは餅よりも酒を好み、金を儲けることよりも使ふことを先にし、精を出し家業を勵むよりも遊興に耽り放蕩を盡くし、算盤を弾く智恵よりも繪を畫く才に長じ、家政を理する計畫よりも戯作を仕組む方案に富みたればなり。すべて彼れは實用ある事よりも、實用なき事に一生を費やしたる、古今稀有の偏人物なりしが如し。

一年三百六十日の中十分の入までを實用に費やして、残る二分を遊戯に當つるは普通一般の習俗なるべし、然るを一九に限りては、十分の二を實用に費やすことすら出來がたく、寧ろ年百年中遊戯三昧に送りたりし如し。これを一言に盡せば一九は實際界に住ひし人といはんよりは、虛靈界に遊びし人といはん歟。

そもく虚靈界にも、真と善と美との三區別あり、されど一九は固より真と善との境界に在りし

十返舎一九肖像



にはあらず、美の範囲にのみありしが如し。されど美の範囲にも、亦三區域あり、即ち莊大、優美、好笑なるが、一九は其の孰れに屬すべきや、思ふに彼れはミルトンの莊大ありしにもあらず、紫式部の優美ありしにもあらず、彼れはフィールディングよりも、モリエールよりも、デッケンスの壯時よりもドウグラスジョーロールドよりも、はるかに純粹なる滑稽の資に富みたり。彼れは好笑の美の中に棲息したりしが如し。

富士の山の高きを見ても、其の莊大の力に壓倒せられず、却つて是れを好笑の種とせんものは一九なるべし。櫻花の艶麗なるに接しても、其の優美の色に屈伏せずして、却つて是れを滑稽の材とせんは一九なるべし。森羅万象凡て一九に對しては皆好笑の面相を現す。蓋し内に畏敬の念ありて始めて莊大に打たれ、内に風流の情ありて始めて優美に動かさる。故に謬信家は暗鬼を生じ無信仰者は不可思議を見ず、暗鬼あるにあらず、不可思議なきにあらず、天地は玄妙なり、万物は流轉して其の變化窮盡すべからず。暗鬼を生じ、不可思議を見ざるものは、唯我れに在りて外物は諸念を起さしむる媒介たるに過ぎず。万物を皆可笑と見つる一九の主觀はいかにしても好笑の坩堝ならざるべからず、いかなる莊大の力も、いかなる優美の色も、悉く溶解せられて彼れの前には唯滑稽の鑄器を止めき。

其二 生涯

文化文政には文士星の如く輩出しき。先づ指を屈すれば、小説中興の祖と稱せらる、山東京傳の

れば、歴史小説家の泰斗と仰がる、曲亭馬琴あり、穿ちに妙を得たる端物の作者には式亭三馬、合巻物に得意なるは柳亭種彦、人情本に名の高き爲永春水皆是れ當世の名流にして、十返舎一九もまた彼等と其の時を同じうしき。

當時京傳、馬琴、三馬、種彦、春水の諸名家、各々一方に割據して特異の旗幟を翻し、互に鎬を削り、相對峙したる光景は、宛然戰國の狀に似たりき。一九は此の間に並立ちて、『膝栗毛』の馬を陣頭にたて、奔放なる筆の劔を振ひ、頓智、滑稽の飛道具を使ひて、四角八面に當たり、一世を風靡せし功名手柄は、正史に於ける辨慶清正の威名と同じく、彌次郎兵衛北八の變稱は、長く文學の歴史に傳はりて、三歳の童子といへども、今に至りて記して忘れず。嗚呼一九もまた文壇の一驍將なる哉。

十返舎一九は明和三年に生まれき。姓を重田といひ、名を貞一といふ、駿府の町同心重田與八郎の二男なりき。一九稍壯なるに及びて、小田切土州が大坂町奉行の時、其の家に仕へて浪華にありき。原來小田切侯は江戸より彼の地に赴任しきといへば、一九は最初江戸に出で、侯に仕へ小吏となりたりしが侯と共に大坂には登りしならん。されど一九は性來放蕩無頼なりければ日々花柳の街に遊びて吏務を理めず、遂に職を辭して、大坂なる材木商人某の女嬭となりしが、此の家にも居たまらず、離縁せられて流浪の身となれりきといふ。

某書には是等の事實に就いて臆測の判斷を下し、一九は性來羈落不羈なりしたため、吏事を屑して

せずして、遂に辭職せし如くに記せり。然れどもこれ一九を風來と同視したる嫌なき歟。蓋し風來の戯作はいかなる斷簡零篇と雖ども、彼れが稜骨の化現ならぬはなけれど、一九の作は卷數積んで山をなせども、未だ曾て彼れの主義を現せず。こは風來の作の主觀的なるを、一九の客觀的なると起因すといへども、而も兩者の地位の轉換することは能はざるべし。案ずるに戯曲は客觀的記述法を以て躰と爲すものなるに、風來は淨瑠璃の作にすら尙主觀的なるを免れざればなり。畢竟客觀的記述法は、作者の主義の大なるが爲に見えざると、全く其の人に主義無くして見れざるとの二途に皈すといへども、一九は前者にあらで後者なるべし。一九は殆ど主義を有せず、稜骨なきを以て彼れは本躰となすものなり。

或時風來に小説を作る法を問ひしものありしに風來は是れに答へて、

傳奇小説は遊戯に出づといへども必ず實に據りて敷衍せざるべからず、然らざれば意趣淺薄觀るに足らざるなり云々

一九は曰く、

予多年著述をなすといへども虚を以て虚を傳ふるを予が本意とす云々

右は兩者の特質を示すに最もよき例といはざるべからず。現實を脱する能はざればこそ、風來は稜骨あるなれ。一九は然らず、實を離れて虚に在り。風來は俗と共に在るが故に不満足起り不平を唱れども、一九は超然として脱俗の界に在れば、世間に對して絶えて不満足も不平もあることなし。されば寧ぞ吏事を屑しとせざるなどの誇言を許さんや、否、彼れは實際の事には天性より適

せざるなり、彼れは自ら身を退きぬといへば、大に躰裁よけれど、其の實恐らくはいつも先方より謝絶せられしならん。これ却つて一九が一種の詩人たる所以にして、風來が終に俗人たりし所以なるべし。

一日二三の書を繙きしに、當時の戯作者六七の肖像を載せたるものあり、うち年頃は四十格好とも覺しく、蜻蜓ほどの鬚の刷毛尖いたく亂れたるは、其の人平常の身嗜み、甚だ無頓着なると思やられ面長なる顔のさのみ瘦たる方にはあらで、少し赤らみたる色を帯びたるさへあるにギラ／＼と脂溢つたる、疎なる眉は一字を畫けど、更に慳貪の相とも見え、小雨／＼したる眼中、光るは涙を湛へたるなりけり。鼻は高けれども柔和しく閉づるでもなく開くでもなき口元より、涎の滴らんとする形は、誰が目にも酒好きと見え、締なき笑と呂律のまはらざる管どが、今尙耳の邊りに聞ゆるかとおもはるゝは、これぞ一九が手に猪口を持てる肖像なりける。酒さへ呑めば外に樂みもなく、一生笑つて氣樂に生活するを本分と思へる一九は見識もなければ、高慢もなし。されば此の世の生涯をば土芥も同様に見做して我が身を塵塚の中に放擲するも、惜しども思はざるが彼れの本色なるべし。『物の本江戸作者部類』にいへることあり、

自らいふ重田氏、名は貞一、然れども人只一九と喚べるのみ、性酒を嗜む事甚しく、生涯言行を屑せす、浮薄の浮世人にて文人墨客の如くならざれば書買等に愛せられて暇あるをり他の草冊子の筆工をさへして日暮に給し云々。

同じ時に生まれ同じく文人と崇められながら、博士ヲヨソソと崇めらるゝは、蓋し傲岸なる馬

琴なるべく、ノール／＼と安く思はれ同時に皆人に可愛がらるゝは、一九其人なるべし。馬琴の生活は楷書の如く一九のは走りがきの平假名の如し。『膝栗毛』は直に一九自身の経験のみより成れりといふべからず、又彌次喜太も一九が化身とのみは見るべからざるも、時としては一九其の儘を寫せる所なきにあらず。『膝栗毛發端』なる神田八町堀に於ける裏店住居の如きは、其の一例といふべし。

す、し貯へあるに任せ、江戸前の魚の貴味に、豊嶋屋の鯛菱、明耀はいくつきなく長屋の手水桶に配り、終に有金を呑なくし、(中略)彌次郎又國元にて、習ひ覺えたりしあぶら繪などを書き、其の日ぐらしに春米の當座買、たいき納豆あさりのみきみ居ながら呼込で喰てしまへば錢一文も残らぬ身代、(中略)十年ばかりの星霜おほりければ、薯蕷餅にならず、相變らず食料なれども風託せぬ氣生にて、売酒落にしやれちらし、近邊のなまけものごも遊び所となり、五合徳利の癡すがた流し元に絶えず云々

これを讀みて吾人は成程惡氣のなき好人物とは評すれども、實際的人間としての價值は、いかにといはれ、熊公八公とさしたる相違なしと答へんのみ。一口にくだらなき人物といふの外なけれど、それは唯道德の標準より下したる見解に止まり美の見解又は自ら別問題ならざるべからず。いかに人物としては詰らざるも、藝術家としては古今超群の名人なきにあらず。吾人は畫工若しくは彫刻家などの傳を讀む毎に、屢々此例に接することあり。一九もまた此の藝術家を以て遇すべきものならん。

彼れは曾て他の女婿となりて離縁せられしのみならず、寛政の季に至り江戸長谷川町なる市人某



が家に入夫したりしに、是れもまた離縁せられき。斯の如く一度ならず二度ならず實際の事には失敗せしも藝術の範圍に於ては、悔るべからざる伎倆を備へたり。先づ一九が大坂に在りし頃、志野流の香道に稱譽を得、其の後思ふ仔細ありとて、斷然香道を廢しきといへども、十返舎の戯號は蓋し黃熟香の十返をとりて然か名づけたりといへり。

又同じ年頃、大坂なる淨瑠璃作者等と交を結び、並木千柳、若竹笛躬と共に、近松余七と署名して『木下蔭狹間合戦』といふ院本の作あり。これ寛政元年のことにて、即ち一九が二十四歳の時なれども、此の作は恐らく唯補助したりといふ位なるべければ、未だ以て一九が處女作とはすべからざるも、彼れが文人としての生涯は此の時より始まりぬといふも不可なし。

一九の處女作は、其れより後六年、寛政七年に出版せられし『心學時計草』といふ三冊物の草双紙なりと『作者部類』に見えたり。猶同書によれば、一九は寛政六年の秋の頃、通油町の地本問屋葛屋重三郎の食客となりて錦繪に用ふる奉書紙に、鑿水などをひく役を務めしが、其の性滑替にして頓智あり、又いさゝか浮世繪の心得もありければ、此の年葛屋が詠にて、此の草双紙を綴り、繪も亦一九自ら書く所なりしが、此の冊子頗る世評よろしかりければ、是れより年々に草双紙の作ありきと見ゆ。

『作者部類』には「初は多く自畫にて板したれど、畫拙ければにや時好に稱はず」と見えられど、こは俗受けのせぬことを難じたるものとあぼし。享和三年の版に『怪物輿論』と題せる一書あり

しが、古來不思議なる逸話を収録したるものにて、挿畫は矢張一九の自畫なり。素人眼には善くは解らざれど、才氣の溢れ且畫にまで滑替の見ゆるなど、凡手といふべからず。『膝栗毛』もまた自畫なりといふ。且つ一九は頗る能書なりとて、彼の旅行好きが旅費の工面も、多くは書畫等を認めて得たるなるべしといふ。香といひ書畫といひ、凡て藝道に於る才能はほゞ藏めて彼れの藥籠中に蓄へられしに似たり。假令實務の才はなくとも、假令實生涯は無價格なりきとも、藝に於て價ふところなからんや。况や一九は藝術家たりしに止まらず、更に一種の詩人たりしをや。一九が一代の名作『膝栗毛』は、享和二年始めて其の初篇世にいでしが、其の後は毎年一篇づゝを出だし、文化六年には第八篇を出版して、こゝに一先完結をなしぬ。一九は初より第八篇までも此の編續かんとは思はざりしなるべし、されども『膝栗毛』の一たび世に出で、上下おしなべて、一九の滑替を愛し、一版出づる毎に製本の間合はぬばかり購讀者夥しく眞に洛陽の紙價これが爲に貴しといふ程の流行なりし由なれば、一九も機に投じて、斯くは續作せしなるべし。されど一九が秘密藏も追々空乏を告げて最早滑替の種切れとなりければ、八編にて兎に角一度は終ること、決心したることは、其が序文を見て知るべし。

凡而、この十分なるは缺るの光、九分なるは充るの首なれば、八の數を以て永久の嘉瑞とし、物のめでたき極位とする事は、先大江都の八百八町長にして盡さず、神に八百萬神永く跡を垂給ひ、法華經の八部末世に傳へて弘く、歌書は八代集を最上とし、易に八卦十露盤に八算、食言にも八百の相場あれば、實も八ヶ月を限さず、予が膝栗毛も此の八篇にて足を洗

ひ引込思案の筆を措くこと、花の半開、酒の微酔に託けたれど實の所は逃口上、智恵袋拂底なれば、はたき仕舞し栗毛の趣向、據なくおつもりの大坂着、長町泊から滑稽のはつまりく、  
二百五十八

其後『續藤栗毛』として翌年より又十二篇も續きて世に出でしが、前の序文は此の續篇の趣向あるを包みて、強ひて窮したるが如く吹聴したるにはあらで、全く前編にて終ふる心算なりしことは明なり。續編の序文に曰く  
予若年の頃播磨浪速にありし時、一こそ高地に所用ありて下りし船の序に象頭山に參詣し善通寺彌谷を遊歴したりしが秀異勝景の地多くして其の感情今に想像するに堪えず、されば此藤栗毛去年八編に筆を止むといへども書肆常に予が金毘羅信仰の事を知るが故にせめて其の記行の巻を編よと投む、(中略)固辭すれども再三のせめを防ぎがたくて竟に此二巻を編出せり、此に於て書肆又曰く諺に毒咽んものは血迄さいひ露を厭へるものは其濡ざるさきにこそその、譬にいへるが如く藤栗毛もまたそれに倣しよて八篇迄を限り一編とし此書を續藤栗毛初篇と新にもして彼の隨客が東都に歸着せむまでを編よ(中略)原より戯作のかけり編数を累れ出せるは他に例なし、撰者の幸甚多からずさせすや事を曲てものに乘するも又得失の境なれば強て投むるにいなみかたくて此頃岐蘇道中の記行を約して既後にその標題をおくにいたるされど予が蠅才の筆力、ころに任せず、趣向稗精となりたれば覺束なし、只家職の爲にのみものする歎き見給はんも面目なきことこそ  
何ぞ其れ申譯の煩はしきや。吾人は是れを讀みて、一九がいかに窮したりしかを思はずんばあらず。前にもいへる如く、當時は外に五小説家並び立ちて各々勝負を競へる折しも、一九の『藤栗毛』ひとり喝采を博して、讀書社會を壓倒し、戯作者一般の恐慌を來して他の戯作者殆ど顔色なき有様なりければ、彼等は口を揃へて千篇一律、趣向淺薄の非難を、『藤栗毛』一部の書に集めたりしな

るべし。然るに一方にはいつの世にても本屋の主人といふ唯金の儲かることをのみ專一にする輩あれば、強ひて一九を勸めて續稿を起こさしめんとせしなるべし、固より格別の見識なき一九なれば、是れ又錢になると無碍には排斥もせず、前篇の糟粕とは知りながらも、儲かることとて再び筆を着けしに相違なし。當時同業者のうちにて、いかに嘲笑の甚しかりしは、因より知るべからざるも、一九が死後二年を隔てたる、天保五年の日附ある『作者部類』の評を見れば、當時の状を推量するに難からざるべし。

文化五六年の頃より、藤栗毛と云中本をつりて、太く時好にかなひしかば、年々に編を繼で本集九編續集九編、共に十八編に至れり、此冊子は彌次郎兵衛北八と云浮薄人、同行二名、諸州を遊歴しゆる旅宿の光景を、いさをかしくつゞりたり、はとめ一二篇は新案を旨とせしが編を累るまゝに、古き洒落なごをもまどへ、且相似たる事多けれ共、看官は其所らに意をこゝめず、只笑を儲すを愛たしとして飽くとなかりしかば、板元はさら也貸本屋等も利あるものはにまされはなしと云にき、はとめは通油町なる村田屋次郎兵衛が印行したり、其後村次は衰へて其板株を賣與しゆる事二三傳に及びしかども藤栗毛の評判はなほおさるへず、是をもて一九は編毎に潤筆十餘金を得て、且趣向の爲に折々遊歴すこて板元より路費を出させしも聽からずと聞えたり云々

右は一九が藤栗毛を草する年代よりは少しく後れたれども『藤栗毛』を冷評せし同業者の詞を代表せるものと見て可なるべし。一九は平常無頓着なる氣樂者なりしにも拘らず、續編を出だすに當りては、又もや非難の聲の揚らんかと、流石に心苦しく前の如き長たらしき申譯をなすの已むを得ざるにあひしならん。

然れども此の評たる多少俗にいふ商賈敵といふ意味の伴へることを思はざるべからず。固より一九の『膝栗毛』は古き洒落を交へ、同じことを繰りかへすといふ嫌もあるべし、然れども詩人の才能には、物を産み出だす才と物を組立つる才との二者ありて、共に貴きこと猶兩手の玉の如し、一九は疑もなく其の後に屬する天才なり、何ぞ他より種子を得たるを以て其の全勝を斥くることを得んや。さればこそ『作者部類』の著者も絶対に一九が天才を拒む能はず、

只村農野驥の解易くて笑を催すを欣ぶのみならず大人君子も、膝栗毛の如きは、看者に害なしとて賞美したりける、げに二十餘年相似たる趣向の冊子のかくまでに流行せしは、前代未聞なり、只是れ一奇さいはまくのみ

と、冥々の裡に此の書の價值あるを思へりしは、彼れ著者流石に凡眼にはあらざりけり。されども一九が滑稽の粹は固より前編八篇にあることも亦公論の如し、續篇を始めとして、『江の島みやげ』『金の草鞋』などいふ諸作に至りては實に糟粕を管の譏あるも己を得ざるなり、こは書物の多作に伴ふ弊害といふべきもの歟。

『膝栗毛』の外に一九に青本の作あれども、固より京傳の奇想頓才あるに及はず。又讀本には敵討もの數部あれども、概ね話の筋書といふべく、餘りに單純にして無味なり、兎ても馬琴の巧緻複雑なるに如かざるなり。ひとり洒落本は見るべきもの尠からず、就中『吉原談語』(上下)の如きは、一九の作として傑出せるのみならず、恐らく洒落本中の出色文字といふべし。されどこは比較的の評なるのみ、一九の奇才たる所以は是等の數作あるが故にはあらず、唯一篇の『膝栗毛』あ

るが故なり、されば『膝栗毛』を除きては一九なしといふも不可なし。

文化元年五月十六日難波の畫師法橋玉山が圖せる『繪本太閤記』大坂に於て絶板を命ぜられしが、其の原因を尋ねるに、當時江戸の畫工喜多川歌麿、歌川豊國等が、玉山の『太閤記』を學びて一枚繪として賣出せしに依り公儀の忌諱に觸れ、太閤記と名の附くものは、畫は勿論、戯作といへども悉く絶版を命ぜられしが、是れが作者及び畫工をはじめ版元に至るまで皆科料又は手鎖の咎を蒙りしことありき。此時一九も亦時好に投じて『化物太閤記』といふ草双紙を著し、かば、遂に手鎖五十日の罰を受け、期日満ちて免ぜられきと云ふ。

是れより以前、年代は詳ならざれども、一九は更に妻を娶りて通油町鶴屋の裏なる地本問屋の會所を預り、其處に住みて一女を擧げき。此の女兒年頃に及びて踊の師となり、親の生計を資け居たりしに或時某侯より一九が女の踊に巧みなる由を聞きて妾にえたしといひ入れしに一九は否みて、彼れあらでは吾が旦那をいかせん、假令後に幸あるもさることは願はしからずとて竟に謝絶して遣はさうりきといへり。文政十二己丑の春三月の大火に一九は類焼の厄に罹りければ長谷川町邊なる新道の裏店に借宅せしがこの頃より手足に偏枯の症を發して遂に起つこと能はず、天保二年辛卯の秋七月二十九日享年六十七歳にて没しき。辭世の狂歌に

此世をばどりやあいとまにせん香のともについはは灰左様なら

遺骸は淺草土富店善龍寺(俗ぬけ寺といふ)地内東陽院に葬る、墓所は物亂塔裏門方より二側目に

て東三つ目にあり戒名は

心月院一九日光信士

彼の牛島長命寺境内の碑は一九の男及び二代目一九其餘の門人等が集まりて建てしものなるべしといふ。碑銘に曰ふ

なべての人のいかに異なりとおもふことも常となりてはめづらしかられどいつともあかぬものは月の夜さみの飯さては筆  
と酒なるべし

十返舎一九

爰に十返舎一九とあるは俗稱を糸井鳳助と呼び下野の産なり、一九の没後未亡人及び其の男に乞うて二代目十返舎一九の號を襲ぎし人と知るべし。『奥羽一覽道中膝栗毛』(弘化五年の刊本)は此の二代目十返舎一九が作なり。

因に記す。一九が生涯の事蹟に就ては奇怪の話頗る多し。されど大概は信すべからざる辻褄の合はぬことのみ多し。例へば

一九が南畝を訪ひし時の模様の様如きこれなり。

又一九が死後に烟火線香を棺中に仕込みて會送者を驚かし、話は、今更辨するまでもなく怪談話の元祖林屋林泉のこゝを附會したるなるべし。これらは取らず。

### 其三 文人としての一九の位地

徳川氏の治世二百五十年の太平は、日本國人總幹の心に八九分以上の満足と與へたり。固より久しき間のことなれば、隱謀を企てし大小名、反亂を煽動せし浪人者、一揆を起し、百姓などあり

て、多少の不満足、多少の不平を漏したりし形跡なきにあらねど、是れを一國全幹の上より見れば、甚だ僅小なる數といふべく、大多數の人は皆徳川氏の治下に鼓腹し、各自其の堵に安じ、無事を祈り、太平を謳歌せしこと、疑ふべからざる事實なり。

斯の如く満足を得たる徳川時代は、之を人々が不安堵不満足に生活したりし足利時代に比して、如何なる現象を呈したりしか、是れを廣く社會全幹の上より證せんは本題の目的にあらざ、ひとり是れを美文學の範圍内に於て徵せんに、足利時代には沈鬱なる厭世の文學生まれ、徳川時代には是れに反して快活なる樂世的文學榮えたりき。是れやがて時勢の變遷の著く人心に及ぼせる影響といふべし。蓋し足利時代に在りては、打續ける亂世に失望して、人々の氣質自ら沈鬱となりけるに、徳川時代に在りては、太平歡樂の結果として、人々の心漸々に快活と遊惰とに赴きしこと知るに堪へたり。

抑々徳川時代二百五十年間は、是れを通じて樂世的時代と號け得べし、就中元祿は雄大活潑の遺風を繼承し、多望の前途を有しつれば、士氣民心共に得々として、是れを四時に譬ふれば、徳川時代中盛春の季候ともいひつべし。百事皆此のときに於て花の満開せざるはなく、美文學の如きも燦爛たる光澤を帯び、馥郁たる香氣を發ちて、當代の春色に幾分を加へたりき。此の時に當たりて、近松生まれ、新に戯曲の生面を開きしが、殊に近松は悲劇(専ら心中物を指す)を以て勝り、加之其の悲劇ならざる時代物に於ても、寂滅爲樂の氣満ちて、其の紙面には涙痕の斑々たる

を見る、是れ併しながら當代の快活なる人性には相反したるものといふべきも、これ近松の價値ある所にして、彼の沙翁が時代に拘らず、超然として社會の外に立ち、天地と共に永劫無窮なる大作を物したると類を同じくする所なるべし。されど近松が斯く悲哀の分子を蓄へたりしは、彼の淨瑠璃といふもの、形の上に於て既に足利時代の無常觀を有せる謠曲より胚胎せるのみならず、又其の精神に於ても多少、彼の時代の悲哀的觀念に養はれたりしに緣因せずんばならず。爾來淨瑠璃の作世に出でしもの幾百編といふことを知らざれど、眞に悲劇の性質を具へたるは殆どなく、喜劇の性質に近きものいづく多きは、一は近松ほどの天才を出さざりしにも由るならめど、一は最早此の徳川氏の樂世的時代は近松の如き悲劇家を養ふこと能はざりしに由るならん、果して然らんに、近松は徳川時代の盛期に生まれたる詩人なるにも係らず、其の特質の上よりいへば、幾分か足利時代の系統を承けて、彼の厭世的作家の後殿として世に現れたるものといふべく、徳川時代に特有なる樂世作家の祖といふべからざるに似たり。

樂世作家の鼻祖は近松にあらで井原西鶴なるべし。西鶴は其の身自ら元祿時代の代表者たるのみならず、彼れの作亦樂世的社會の活潑なればこそ、後幾多の繼承者は皆之れをもて其の丹青を施すの標本とはなしつれ。

八文字屋一流の出版物を初めとして、めでたしく結局を結ぶ淨瑠璃及び脚本はいふも更なり、江戸文學の過半を占むる小本、即ち黄表紙、赤本、こんにやく本、草双紙、滑稽本、及び狂歌等

はいづれも樂世文學の血脈を有し、其の得意とするところは輕妙洒落にありて絶えて雄大、莊重、悲哀等の分子を含まず。而して是等の作は大概無用の人の胸樂三昧になりて太平の世の華美なりしことをおもへば、いかに當時の社會が愉快の極世に達したりしかを知らん。

然れども物の進む勢は決して無際限のものにあらず、或點にまで達すれば、必や反動の作用起らざるを得ず、治の極は亂、亂の極は治に移る、まことに數の免かれがたき所なるべし。或意味にては國家の興亡隆替を預言すといふ文學の上に、いかに反轉變化の期來たらざるとあらん。文化文政は其の反轉變化の期なりき。さしも久しく榮えたりし徳川文學の太平樂も、進む處盡き、行く處極まりて、今や將に慘憺たる悲劇の幕外に近かんとする氣運萌しぬ、これぞ滑稽の作の生まれつべき秋にして、蓋し十返舎一九の『膝栗毛』こそ誠に此の氣運につれ、時の需に應じたりし述作なりといふべし。されば前に近松を以て彼れ足利時代に於ける厭世作家の後殿なりといへるが如く、一九は徳川時代に於る樂天作家の押後として世に生まれき。即ち近松の悲劇家たるに對しては一九は當世を代表する喜劇家たりき。要するに徳川時代太平樂の餘澤は『膝栗毛』となりて好笑の粹爰に凝結し、樂世文學の一時期を畫しつ、而して文化文政の後にもた一の文豪をだに止めず、六七十年間の長日月は荒涼寂寞として枯野を見るが如く、唯將に來らんとする大時期を跋つ者の如し。

#### 其四 滑稽家としての一九

人の長所とする所は、亦其の短所たらざることいと稀なり。徳川時代の民のごとき實際的人民は實務に當たりては頗る敏捷出精なりし代りに、かゝる人民は時として又法外なる遊樂に耽ることあり。當時の民を代表せし江戸ッ兒並びに其の統を引ききたる現東京兒の行爲を見よ、彼等は平常熱心と勞力とを傾けて只管に家業職務を勉勵する代りに、遊ぶ時には前後をも顧みず、方圖に外れたる大馬鹿を盡くすことなきにあらず。

我れ常に思へらく、江戸兒が崇め祀る、祖神ウヂノカミの諸祭禮に行はる、二十五座の神樂、又は山車に伴ふ馬鹿囃は恐らく彼等の理想的音樂ならん。蓋し是等の音樂は多少江戸兒の好尚より來たり、幾分か彼等の理想を代表せるものとすれば、いかに彼等は愉快なる氣質を有し、いかに彼等は滑稽の分子に富めるかを推量るを得べし。

春は隅田の花の蔭に、秋は瀧の川の紅葉の下に、彼等が遊ぶところには屢々ヒツツシ彦徳的假面を被り、茶番狂言を任組み、滑稽戯を演ずるは江戸兒又東京兒の特色ならずや。彼の神田明神、深川八幡、山王等の祭禮に當たりて、踊り屋臺を擔ぎ出し、山車を曳き、歡喜踊舞打興する状を見るに兎も本氣の沙汰とは思はれざる者あり。彼等は殆ど世間を忘じ、親子兄弟を忘じ、身をも忘じたるが如く浮れ廻りて、恍惚として無我夢中に大笑するは何ぞや、蓋し彼等は今や眞面目を離れ、現實より脱して、美の境に遊べる瞬間なればなり。

然れども此の猛烈なる大笑の瞬間に、誰れか隱微なる悲慘の分子の埋伏せることを知らんや。一

夜明れば歡喜哄笑も悲みの聲と變ずると實に轉瞬の間なるのみ。祭禮終はりて家に飯れば、忽ち夢の覺めたる如く、昨日までは別段怪しと思はざりし遊興も今日となりては馬鹿らしきこと限りなく、爰に始めて後悔をなす。平常は木綿布子をすら碌々着ることの叶はざる赤貧子も、お祭り熱に冒されたる瞬間には、身にも相應せぬ縮緬の浴衣を着ることを憚らず、されども其の熱の冷却したる曉には、思ひもよらぬ負債に頭を痛まし、借金カネの淵に沈みて如何ともすること能はず、少しばかりの家財什具を典し、夫婦離別をなし、甚しきに至りては愛女をも苦海に沈むるなどの悲劇を演ずるは祭禮後の世間には珍らしからざる出來事なり。皆是れ實際的人間に特有なる敏捷出精の反動作用に外ならざるなり。吾人は此のお祭狂に在る凡ての人間を目するに滑稽の一大塊を以てせんとす、蓋し彼等は其の裏面に涙を湛へながら狂喜大笑する者なればなり。而して『膝栗毛』は此のお祭狂の世界を総合したる作といふべく、主人公なる彌次郎兵衛喜多八は、彦徳の面を被り、馬鹿囃に挑撥チカセられて狂奔演舞する氏子のお目出た連を代表したるものといはざるべからず。是れを愚なり、狂なり、馬鹿の骨頂なりと笑ふものは共に美を談ずるに足らず、宜しく美の眼を以て遊戯の境に在る彼等を現實社會に在る彼等と區別して見ざるべからず。さて是れに同感を表して彼等と共に笑ひ、彼等と共に泣ける者は十返舎一九なりき。一九は眞に我國の滑稽家といふべきなり。

### 柳亭種彦

附種彦が作の蘭譯につきて、澳譯『浮世形六枚屏風』

#### 其一 性質

テーン曰はずや、殻の背には動物、書の背には人ありきと。文致は善く人を表す、著書は常に著者を宿す。已に著書あり、著者の爲人知りたからんや。

夫れ考證的隨筆のたぐひは、客觀性のものなれば、概して著者の人物性情を知るの便宜とはならざれども、それすら尙處々に挿みたる章句に、屢著者の性格を現す。見よ、『歴世女粧考』には京山現れ、『玄同放言』には馬琴見え、『用捨箱』には種彦あらはる。譬へば、

およそ著述をなすに、五ツの富を得ざれば雄篇を出しがたし。一には學才に富、二には藏書に富、三には記憶に富、四には青年に富、五には閑靜に富、此五ツの中に於ておのれたも一ツ少しく閑靜を得るのみ、鹽米を問ざるを以て此作あり。もこより孤陋の著述管見の辨説なれば外譯最多かるべし。

玉人の玉を磨く、隨て磨ば隨て光を出す、著述の稿を換るは玉人の玉を磨くが如し、まばく稿をかへざれば全澤をなまず、吾が此片瓦の作も稿一脱してのち讀みたれば、心ゆかざる所多かれど、續きて後編をも書終んに心闢く且<sup>なほ</sup>它に著述もあれば疎漏は後に補ひなんさて稿を換す(『女粧考』)

と申譯の多きは、用意慎重なる京山にして、いにしへの才ある人、書讀むまきは考あり、考あれば撰みあつめて、兒孫後世に貽すもの、慈善のこころなしはいはんや、然

柳亭種彦肖像



れども覽ること博からざれば、その考くはしからず、或は覽き考きの志はありながら、その才あるにあらざれば、文のうへ  
をさなくして、いふこと毎にこころをほらす、或はその才ありといふことも、文筆のみ弄びて、道に志薄かるものは、玉腸  
當なきが如し、嗚呼ふみ作るこころかたくもあるかな

とて自ら信景、白石、洪邁、益軒、栗山等に比し兎角道義に拘ふは、『玄同放言』の馬琴なり、  
而して

おのれこそは物知られ、友人には和漢の學者多くあり、是にかたらしひなば砂も玉の光を添べし、されど益なき書に他を勞せ  
んも心なきに似たれば誤りのまゝ不文は不文のまゝの我一方にて門人にだに校正かゆたれず

といひて、謙讓の間に自信の影を示すものは『用捨箱』の種彦なり。思ふに用意の綿密と考證の該  
博とは、三家おのゝ似たる所あれども、其の性格は同じからず、京山は世間慣れたる商賈の如  
く謙退し、馬琴は儒家の如く武士の如く、其の讀者を見るや子弟、家僕を見るが如し。種彦は然  
らず、山東の如く悪く卑下するにもあらず、又曲亭の如く妄に高慢にもあらず、彼れの如く飾る  
にもあらねば、是れの如く街ふにもあらず、其の中間にたちて自ら信ずる所厚く、おのづから別  
に一家の見識を備へたり。

柳亭は其の身分を問へば幕府麾下の士なり、地位既に中流以上にありて、俸祿は衣食するに餘あ  
れば、著作に従事するも、必しも名のためにあらず、また糊口の爲にあらず。固より彼れとても  
著作に伴ふ名譽、報酬を悦ばざりしにはあらず、然れども彼れは必しも名聞衣食の爲に作せざり  
しなり。「初は好きより作者となりしも、名の揚るにつれ本性が綿密家なれば、いよく著作に念



を入るゝやうになり、隨うて名いよく高くなりしならん、蓋し戯作は彼れが道樂ともいふべかりき」とは篁村翁の評なり。されば他人を凌ぎて強ひて我が地位を高めんの心もなく、またみだりに謙遜して世間の人望を收攬せん必要もなかりき。これ種彦が一家の見識を保ち得し理由なるんか。世には地位名望を有しながら、尙利欲の奴隸となるもの多けれど、種彦は一種片意地なる所ありて、どこまでも見識を保たんの念ありしかば、よく此の弊をまぬがれたり。嘗て門人仙果へ送りし手紙のうち

他人は此やうな事笑ひ可申候へども小子は一向に笑はず小子角力ざらひにて角力の事一向書き不申 甲州侍ゆゑ 信玄君の

事わるく、す川柳點には玄君をほめた句でなければ點にいたし不申近年水天宮信心にて平家ぼつらくの事を書くまいと願

むかけ申候いと馬鹿らしき事なり(中略)御きらひなる物(按ずるに仙果は雷神嫌とおぼし)妻も幼年のさきざらひにて戸棚へ

かくれ夜着をかぶり癪おこしなごいたし候よしある人それは何の弟子になるがよきさをしへ申候其法六月初日赤の飯に備へ

餅豆腐御酒四色そなへあなたのお弟子になさりくださりませをがみ此四色他人に喰せず自一人にて喰なり如此いたし候後

段々こはなくなり只今にてはあまり曇き日には小子へむかひ小聲にてちつと夕立でもあればようござりますさいふくらひ

平氣になり申候

註 小聲トハ母がきらひゆゑそれへはかり且女のあまり平氣もにくらしき物ゆゑなるべし

此弟子にならぬ前はそのおそるゝ事狂亂の如くなりしと申なり候小子も實は好き不申候へども侍のをそるゝは見るしきも

のゆゑつゝしみくいたし今ではまづ平氣のやうな顔なり

右の一節にてほゞ種彦の爲人を窺ふに足るべし、「甲州侍ゆゑ信玄君の事わるくかゝす川柳點」云

云、所謂武士かたぎ見えていとおかし。又種彦俳名を木卯と號せしをある人譏りて、柳は木扁に卵にして卵にあらずとて

あのが名のつくりを知らぬ點者かな

と嘲りしに、種彦謂へらく、柳を卵に書く事、俗字ながら古きよりの例なり、正親町公道卿の『雅籟醉興集』に乙卯の歳を、

くる年や柳の文字の扁つくり

とよみ給へりとして、依然木卯の號を用ひきといふ。(『小説史稿』)其の自信の強きを知るべし。又水天宮のこと、並びに雷神を侍のをそるゝは見るしとて堪えしことの如き、いづれも種彦の武士氣質ならざるはなし、殊に前の書簡のうち例の考證的註釋を加へたるなど、平素の注意見えて面白からずや。さりながら種彦の武士氣質は強き武士氣質にあらず、弱き武士氣質なり。内に勇壯の元氣燃え立ちて發するにはあらず、寧ろおのれ武家に生まれたれば、飽くまでも強からざるべからずと辛抱するの力なり、椗の木の硬く、松の木の太きにはあらず、柳の枝には雪折なしといはるゝ粘り強きが柳亭の特質なり。

「小子角力ざらひ」といへる種彦は、頗る劇を好み、又演劇の才ありき。彼れは坂東秀佳(二代目三津五郎)の藝風を愛し、戯に茶番狂言を演ぜしや、屢々その儘なりとの評を得て、茶番連中には、三ッ彦と持囃され、頗る得意の色ありき。されば壯年の頃には現に三彦といふ印章を

さへ用ひし由『戯作者六歌仙』に見えたり。されど種彦は自ら芝居ものとは交際せず、總て役者の紋付きたる手拭、衣服、髪飾等、一切家に用ひしめざりきといふ。

種彦は頭つきや、大きなが、月代廣く刷りあけて、髪はまやうりやう蜻蛉ほどの鬘にゆひ、今傳はれる肖像繪によれば、年齢は五十恰好にして道行を被たり、圓く小粒なる眼爽にして眉毛濃く、眉間に瘡癬の小皺あるにも係らず、猶溫和篤實の相あり、鼻高く口元に愛嬌あり、さて顔は長き方にて肌理は濃し、但し威嚴乏しければ莊重の風采具はらざれど、總躰身奇麗にして上品なり。所詮彼れは太平の世の麾下、げに當時の八万騎のうちにあらずや柔和の武士なり。彼の『戯作者六歌仙』に收めたる肖像は、いづれ甚だ醜きはなけれど。種彦は中に就きて上品の目を具へたり。すなはち彼れは其の好尚の優美上品なりしと共に、其の風采もまた優美上品なり。彼れは一九の内外共に滑稽より成れりしに同じく、内外共に優美より成れりき。彼れは實に『源氏物語』の俗譯者として適當の作者なりき。

種彦嘗て戯作者の心掛を語りて曰はく

およそ戯作者も俳優や傾城にひこし、たまへば傾城は顔のみ美して張も意氣地もなくまた髪飾も衣裳の綺羅なければ客つかず、又俳優も男つきよく藝も未熟ならずさて、此も衣裳の綺羅と諸人愛敬を専らさせざれば見物喜ばず、人惡みて蟲負の客なし、この理に似て戯作者も全才が上手にて、よく綴るさいへども拙き畫工に畫が、れ、惡しき彫工の手にかゝり外題もに惡しければ榮なくしてうれず、當りをさるゝこ難かるべし。されど後に上手さ人はいはるゝものは未熟なる初より、その器量おのづからあらはるゝなり。爰に一つの晰ありむかし名人さよばれし俳優、元祖中村仲藏(秀鶴後に中山小十郎)初

は藝道も未熟、俗にいふはいゝにて顔を赤く隈どり麻衣裳の素袍にて並び大名にいでしが粘強き麻素袍なれば、二日三日も着るに、粘氣おちて皺多く見苦しきを樂屋に入て後外の同位の役者は人手にのみかけてたゞみもやらず、其のまゝに衣裳棚へあげ置きて、又翌る日其場來れば前の素袍を着て出るゆゑにいさ見苦しかりしに秀鶴一人は、衣裳を人手にかけず自ら其の素袍を水のししてよくよく疊み日毎にかゝるこく丁寧になしおきしかば、翌日着て舞臺へ出て、列座の俳優と立ならびし時も一際勝れて立派にいかにも上手らしく見え看官の目にもたちければ劇場中の役人も目をつけて彼れは一器量ある者なり後の狂言には夫々の役相當ならん其の役をさせて試ん衆の中より拙て役割を附たるに案に違はず其の役も相應に勤めたれば次第々々によき役を勤め位も昇り終に名人となり今にその譽を残せり。天下に名を轟かす者は初より其器量衆にこえたり、戯作も此の秀鶴が心得にて常に心を用ひ一句一章たりともおろそかに書まざりしものなり丁寧反覆してつゝまやかに筋の通るやうに書たけれ畫わりにも工風をほごすべきかこ予(豊芥子ならんか)及び黒川亭にも物語られき(戯作者六歌仙)

と、案ずるに種彦が第一に着目せしは世間受なりき。然れども時機に投じて名利を博せんとにはあらず、げに道樂ぞ其の本意なりけらし。されば彼れは強ひて創作家たるの譽を得んと欲せず、否自ら譚案家と明言するを躊躇せざりしなり。一例を擧ぐれば合巻の外題を『譚案道中双六』など物して公然譚案たることを標示し、若しくは其の作の序文中に明に憑據を説き、暗に譚案の鹽梅を見よと誇れるが如き例もあり。彼れ仙果に語りて曰はく

いろ／＼目錄のうちにて御入用の品どもこりまらへ當春のうち並便にて出しを可申春になりてゆる／＼御らんなさるべく候種につかひ候あさかなほ見たいさは甚だよき御心がけなり、おな／＼種でもつかいやうにてかはるもの京傳が美人傳東西庵南北がつなだ車同年に出版かだ栗嶋よめり難形さかいふおな／＼種なれど黒白のたがひなり

いろ／＼つかひ候ぬけがらの本ごもありおひ／＼御目につけ可申他人が見候ても少しもまひ不申候門左衛門だにいくらもはめ物あり作者の常の事たゞそれをおもしろくするが上手なり

此春の夜がたりは正徳頃の武道三國志さかいふふみ本に少しばかりありし筋をひるがへして書たるなり此頃自笑があいで筆始を見るに似たるころありかひ出し所が同所かも知れず

(案するに『春の夜がたり』は『外題集』に天保二年の出版あり、又思ふに此の手紙同年の冬尾州へ遣はせしものなるべし。此の年種彦は五十歳也)

以て彼れが覺悟を察すべし。要するに彼れの最も長じたる所は文の修飾なり、これやがて其の醜案に長ぜし所以なるべし。彼れ同じ書簡中に修辭を論じて曰はく

文章の事京山子の譯のころあたり本朝の俗語多く水コ傳らしくなきさいふ評なり七編よりさる人をたのみ譯し申すすでに稿本二十丁出來候處これに俗語甚しく此はつつやうさ小書にはくそでもくらへなごいふ事ありこれではうれぬさいふて板本より少々の筆紙料おくり小子をたのみ書直し候のなり書ぶりの事は小子のがまぬり候間傳へ不申まぢがひにて御書こみの趣承知いたし申候直しにあげ候ころが往來貳百里(仙果は尾州熱田の人なり)の事ゆへこれはまづこのまゝにてあまり耳たち候處は小子書直し可申「かゝア」さいふ事を女房さいふ位の事なり

十一編よりは今少しまづめなる文章のかたがよかるべく存候ましかたたくてもゆかす御見はからひなさるべく候(中略)あまり譯に苦しみ候と「かぜあめはげしくさいふやうな事ができるものなり風雨さ書てもかなに和らぐればあめかせさいはればならずたゞ水コの意をうけて作をする心もちがかんどんなり小子の六十丁のうち楊子が弓引る事をいふ條に左のかひなは太山をのするばかりにためながら右のこぶしばみどり子をいやくこらにいさかくひいたる弓はみつる月なごるゝ星より矢はばやく

又曰はく

此文章ばかりがうまく譯文のはまりたるにてあまは譯ではなく作なりごうて水コをかんでそのまゝには書ケ不申かいたごころがそれでほうれす「林仲が骨こゝにありきたつてひろへ」なご水コにはなき作文なり」云々

しよせんが唐本を見たる人が繪さうしは讀ますよしみたりとも千人に一人なり唐本はこんなものかまだましておけばそれでよしおさしげなごでもふさうしでも

九人にほめられ壹人に笑はれるはトつは下手なれど利は得るなり  
九人に笑はれ一人にほめられるはトつは上手なれども錢にはならず

以上、評に及ばず、彼れが爲人顯然たり。仙果へ送りし書は草村翁所藏細字にて長六尺もあり、こゝにはその半を掲げたるのみなれども此の一通のみを見ても、其の爲人は知らるべし。種彦の平常用ひたりし硯は茄子の形したるものなりしが、其の蓋に自詠の狂歌を彫らせたり、  
名人になれ／＼茄子とおもへどもとにかくへたははなれざりけり  
其の致々として修辭に罪勉せし跡を推知するに足る。

其 二 一 經 歴

文化文政度の作家のうちにて最も年若く又最も後進なりしは柳亭種彦なり。種彦は天明三年庚卯に生まれたり、京傳より若きこと十九年、三馬より若きと五年、姓は源、名は知久、通稱を高屋彦四郎といひ、幕府旗下の士、祿二百俵、もとは横手氏、甲州の士、居は淺草堀田原なりき。(『作

者部類』には下谷御徒士町先手組屋敷内に借地して住めりどあり。幼少の時、疳癪強く、志ばく激怒しければ、父某

風に天窓はられて睡る柳かな

といふ訓戒の句を作りて彼れに授けければ、これより身を慎み、且天明風の狂歌を嗜みしかば、狂名を柳の風成、後改めて心の種俊と呼びぬ、これ大和歌は人の心を種としてといへるに因めるなりけり。其の頃下谷邊に三彦と并稱せらるゝ者ありき、種彦は其の一人なりしがはじめ柳の風成といへりしによりて柳亭と號し、俗名を彦四郎と稱せしによりて、人よんで種俊の彦々といひしゆゑ、俊の字をはぶきて種彦と名乗りし。柳亭の名は蓋し父が遺訓の紀念なるべし。又愛雀軒、足薪翁とも號しぬ、別號修紫樓は『田舎源氏』大に行はれたりしによる。種彦はじめ某の門に入りて漢書を學び、後俳諧の古調を好み、又川柳が俳風を嗜みて秀吟多かりきといふ。戯作者六歌仙』この一事には流石に馬琴も我を折りしにや「此の人させる學力も無けれど狂才は餘の作者の白眉たること、世の婦幼の評する所也」(『作者部類』)と冷し半分は稱したり。

さて種彦は何時頃より著作せしかといふに、詳しくとは解らざれど『合巻外題集』によれば、文化四年より其の作あり。(此の時種彦二十五歳)そも『合巻の權輿は享和二年、京傳が作の』つき地の錢光記』なる由いへど、こはたゞ青本四種を四季に擬へて合冊せるのみにて、續物の必要より卷を合せたるにはあらず、むしろ三馬の『雷太郎強惡物語』こそ合巻のはじめなるべけれ。されば

「合巻繪双紙を、世に流行させしは、予が一生の譽と思へば、老後の思ひで潔く侍り」(『三馬の日記』(萱村翁藏))と自らも許し、世間も許しぬ。『稗史年表』文化三年の條にも

此年三馬が作雷太郎合巻のはじめさいふべし此本出てより世上の稗史すべて合巻なれり今爰に載る所は今年合巻出さる前に發行せる本を載せたり合巻出てより後はこゝから次の合巻部に出たり

と見えたり。蓋し文化三年は青本の末期にして、同四年は草双紙の形全く合巻と變ぜし時なり、而して種彦は此の年文壇に名を掲げき、彼れは純粹の合巻作者なり。

文化四年、『奴の小万もの語』(初篇二冊、優遊齋畫。二編二冊)桃川畫、山崎平八板。『江戸紫三人兄弟』(一名『總角譚』)桃川畫、同板)を著す、此の二部ともに中本とあり。『江戸紫三人兄弟』は此の年より文化八年まで年々一部(二冊もの)づゝ著して初、二、三、四編に至りぬ。また此の年稗史一部を著す、『阿波之鳴門』(五卷)北齋畫)是れなり、柳亭種彦子著、友人玉豕癡夫校とあり。玉豕癡夫は何人なるか審ならず。以上三部其の前後は知れざれど、種彦が初舞臺の作なり。

此の年より同八年までは他には草双紙の作なし。稗史は文化五年に『淺間嶽面影草紙』(三卷)あり。文化八年、草双紙合巻『鱸庖丁青砥ノ切味』(七冊)蘭齋北齋畫)及び『勢田橋龍女の本地』(上中下三冊、北齋畫)等の出版あり。『勢田橋』は淨瑠璃に擬したるものなりとて其のはじめに曰はく

此勢田橋龍女の本地は、淡海なる湖水に近き、名所くゝをたれとしてつくりもふけしなれど、彼湖上笠翁が毛錐の釣竿をこつて文池に流し稗史にもあらず、しほなき海にかけ清き月にめでつも、法華經のうらにかいつけたる、紫式部が筆のす

まみにもならず返代平安堂近松門左衛門義太夫にうたはせ、傀儡にまはさんさてかける、淨瑠璃にもとづき、近曾もつはら世におこなはれる小説に混てあらはすなれば、新に讀本淨瑠璃といふなり。

と、さて普通の淨瑠璃本の卷末には通例「右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若針弟子如縷因吾濟所傳沙先師之源幸甚」などあるにあらひて

右之讀本淨瑠璃者柳亭一家之戯作而以通俗爲要故隨物國字正字俗字各爲用捨勸善懲惡義理分明也予爲懸望令開板候と附記したり、是等は物數奇たるに外ならぬと、必竟柳亭が閑散の樂、商賣氣を離れずばかり、贅澤な趣向は浮ばじ、こゝらが旗下土の道樂なるべし。

同九年合卷二部、稗史は『執着譚』(三卷、『淺間嶽面影草紙』の後編)及び『練手摺昔木偶』(五卷)の二部あり。これまでは稗史多く草双紙は少し。同九年よりは専ら草双紙合卷の作に力を盡くして稗史は一部もなし。

文化十二年 正本製 初編『於仲清七物語』(天保七年再版)同二編『小いな半兵衛』(或は十三年歟)を出だしぬ。これより年々續出、文政十二年(文化十五年)に文政と改元)に至り十二編『花咲綱五郎』にて完結す、畫工は歌川國貞なり。舁載はなべて芝居がかりにして、一編若しくは二三編に亘れるもあれど、全編には亘らず、さて作者は勿論畫工、板本だにみな芝居物の心持にて、普通の草双紙の序とあるべきところも、此の書にては口上なり。同五編『吾妻花双蝶々』のはじめに曰はく

(國貞口上)私儀此度伊勢參宮より上坂仕りましたにつきました彼の地の芝居のおもむきを正本下たて五へん目へしたため

するやう板本のすいめによりまして又候相かはりませぬふつゝかなるゑさうしをこらんにいれます

(種彦口上)國貞申上まするまほり板本のたのみによりまして愚作いたしてはござりますれど私は上坂仕りましたことござりませぬばかの地のねはんをかりうけましてたゞかうでもあらうかますありやうばかりのおしあてくざあてると申がえんぎになりれいねんよりは百そうばい

(貞)御もさめこらんのほご

(兩人)ひこえにこひれがひたてまつります

と、種彦は上下、國貞は野がけにて弟子大勢をつれて讀者へ口上を述ぶる趣を書けり、その外全編の挿畫一として劇的ならざるはなし、されば好劇の時向に叶ひて讀者の喝采を博しき。必竟ずるに此の冊子の妙は讀者の目に訴ふる點にあり。

「此合卷文を少なくして畫を旨とす、其畫精妙、本文に勝れり」『作者部類』

との評當れりといふべし。されば精妙なる畫の趣向を除かば其の興味半減すべし、これむしろ畫を專とせる草双紙の本領にして種彦の作の如き殊に然りとす。誰れか翻刻本の草双紙を讀みて著者の好尚を知り、技倆を味ひ、苦心を察したりといふものぞ、たま／＼その出所を發見して、彼れは近松入文字屋の剽竊なりと罵らざればまだしも作者の幸といはん歟。草双紙の眞味を解せんとする者は必ず原本を見ざるべからず。

畫工國貞は五渡亭と稱して一陽齋豐國の門人なり、役者の似顔繪に妙を得て出藍の譽あり。種彦が芝居がかりの草双紙に兩技相投じて唇齒の關係ある、さながら京傳の豐國に於けるが如し。

種彦が作る普通の合巻(おもに六冊續、國貞畫)の盛にいでは文政中なり。多き年は六七種、少きも二三種に下らず。是等の冊子のうち名作固より少からずといへども一々これを示しがたし。文政十三年天保と改元、同五年作『邯鄲諸國物語』(近江、出羽の巻)の序に曰はく

是繪冊子は西鶴諸國ばなし(一名大下馬)其續諸國物語等ならひて作りいでしなれば種彦諸國物語よびなさんと思ひしが、愚名を標題にあらばさんも徑庭く取ごころ無實無夢物語といふにて邯鄲の二字に替つて近江の巻は狂賊竊築を吹の語にて耳食録に事ふりにたれご更にそれを翻へし善人にあやまちなく懸想ごちは夫婦となり最愛なき草紙にて是に出羽の巻を付前巻後巻八冊にて二箇國の話全く終れり

天保五年甲午開端

柳亭種彦

これも二編(大和の巻)三編(播磨の巻)等、年を追うて出版しき。種彦の著作中最も世に知られ且長く續きしは『偽紫田舎源氏』なり、每編(四冊、畫工國貞板元鶴屋喜右衛門、初編「桐壺」の巻は是れより先き文政十二年に出で、年毎に一二編づゝ續きて天保に亘り、同十三年「藤ばかり、巻ばしら」の巻に及ぶ、而して完結に至らざるうちに作者他界の人となりぬ。『作者部類』は

田舎源氏といふ合巻冊子、世評呀がしき迄に行はれたりこもまた國貞にて其繪ますます妙なればなり既に數編におよべり是をもて當今臭双紙の巨擘と稱せらる、其の身に於ても自負甚しといふ(中略)思ふに元祿年間より源氏ものがたりを無下に俗文につゞり更て婦幼の遊び物せしめ多かり、そは女五經あかし物語五冊(延寶九年の印本也)風流源氏、(元祿中の古板也)若草源氏(寶永三年の印本也)難鶴源氏(右の後篇なり)猿蓑氏(享保三年の印本、江島生島の事をほのめかし作り設けたる

なり)此餘なほあるべし、田舎源氏は竊に是等のを父母として作り設たるなるべし、本を得しらで、未を取るはながれての世の常なれば、きのふけふは某源氏なり云中本物さへ出て種彦の聲に倣ふもありき聞きにきつぱりの作者にだも及ぶものなきを思へば實に才難しといふべし

と、おもふに記者は馬琴の作にもましてかゝる繪双紙の世に行はるゝを悦ばざるならん、但し此の評妥當ならず、蓋し『源氏物語』の高雅なる文章を矢張り高雅に寫さんにはもとより醜案の必要なし、『源氏物語』の原本を讀むに如かざればなり。此の書の價值は『源語』を通俗(即ち草双紙)に直したるにあり、このことはなほ別にいふべし。天保十三年水野越前守の改革ありて風俗の取締嚴重となり、芝居ものは處替を命ぜられ、神佛の開帳に觀せ物を出だすことだに禁ぜられ、富興行も不殘差とめられ、惣身へ彫物をする事、與力同心等が音物を受授すると等皆禁ぜられ、町内なる唄淨瑠璃の女師匠が許へ、男は決して替古無用、水茶屋の茶酌女等は商賣替いたすべしなど殆ど極端の干渉となり、種彦の如きも『田舎源氏』を著し、爲、其の頭(氷井五右衛門ならんとの説)に呼出しを受け

其方に柳亭種彦といふ者差置候由右之者戯作致事不宜早々外へ遣し相止させ可申

といひ渡され『田舎源氏』は絶板せられき。原來此の『田舎源氏』は横山町の板元鶴屋、家業難澁にて柳亭に『源語』の醜案を囑托せしに由來す、然るに此の作幸に大當りを得て入金多く、やゝ生活も立ちける處、今かく絶板せられしかば、また忽ち零落しきといふ。柳亭も此の本の作料にて大

に利を得、元の宅よりは遙によき家求めて移住しけるが、折節大病後なりしにかゝる災ありしかば、いよ／＼病篤くなりゆき、遂に身まかりぬとぞ〔聞之任〕。但し『田舎源氏』譚案の思附を鶴屋の案なりといふはいかゞ。

又『田舎源氏』の挿畫に見えたる殿中の諸構造粧飾等がすべて大御所(家齊)の物數寄、即ち當時の西丸の裝飾を模寫したる故に此の咎を蒙りきともいふ。

さもあらばあれ種彦は三十八編「藤ばかま、巻ばしら」の巻を名残として天保十三年壬寅年七月十八日卒しぬ、行年六十歳、赤坂一ツ木平河山浄土寺に葬りて法號を「芳寛院殿勇譽心禪居士」といひけり。篁村翁曰はく、種彦の墓所には柳亭に因みて柳の木を植ゑたり(門人高島藍泉などが植ゑたるものならんか)。此の柳俗にいふ猫柳の類にてツン／＼と立ちて一向に風情なし、故に糸柳に植ゑかへて墓所をも清めんとおもひしこともありしが未だ果さず云々。辭世の句に「ちるものにさだまる秋の柳かな」又「源氏の人々のうせ給ひしも大かた秋なり」とありて「秋も秋六十帖をなごりかな」。

柳亭門人あまたありき、中にも笠亭仙果は種彦没後、誰れにも断りなく二世柳亭種彦と名乗りき、これを後に神主種彦と呼びきとぞ、尾州熱田の社家に因縁ありし故なり。また故高島藍泉は三世種彦となりぬ。たゞし仙果の跡を継ぎたるにはあらず、藍泉は仙果の僭稱を憤りて別に自立して二世種彦と名乗りけれども、世間は公平にしていつれも僭稱なれば彼れを三世と稱へしなりとぞ。

序ゆゑに今ひとつ種彦の高名なりしことを記して彼れの靈魂を慰むべし。京傳の條にも既に其の例ありしが天保のはじめの事なりき、一年柳亭種彦の名を盗み冒して、伊勢の松坂に遊歴せしものあり、坂人またあざむかれて馳走などせしを、同郷の人小津桂窓(曲亭の知人)はかねて其の名を聞きてありければ、そはにせ物なるべしと看破しぬ。その時僞種彦は言を改めて、予は種彦にあらず、實は種彦の弟子なりと白状しければ皆々大笑しけりとぞ〔作者部類〕

予は今此の章の終に臨み、種彦が考證につきて一言すべし。夫れ考證的隨筆にして専ら風俗門に力を用ひたるは京傳の『骨董集』なる由前にいへるが。此の脈を受けて更に一層の精確周到を加へたるは種彦なり。

『還魂紙料』上下二冊、文政九年十二月發行)「此の書を脱したるは文政甲申の春なりとあり、」甲申は文政七年なり。此の書種彦が隨筆の初刊なるべし。

一日客あり此稿本机上にあるをとりて朗誦する事少時大に笑ていふ孔なき笛は耳よりほかに音を聞へし絃なき琴は指ならずして調へしは禪機の活法なり嗚呼、この書用なき無絃無孔の琴管に劣り破窓を補ふに□して投す已答ていふさあらば還魂紙料とせんか客點頭て去故に名とす

足 薪 翁

『用捨箱』(上中下三冊天保十二年の印行)は種彦が没する前一年の著、初版には初めに柳亭種彦と記名し、表紙の副葉には柳亭種彦隨筆、東都書房青雲堂連玉堂合梓とありしを、其の後これを刪落せり、おもふに種彦罪を得しかば書肆等連累の咎を蒙らんかと恐れてかくは計りしものなるべ

しといふ。

なほ『文箱の紐』『骨董ほりかへ』『江戸塵拾』等あり。後者の序に

江戸ちりひろひは何人の作なる事知らず一日閑窓に誤れる字を改め闕たるを補ふきのふけふの事を記しもはや六十餘年のむかしになりぬなをいくさしなふらば予さひひさしき好古の人の助さもならん歟文の拙をいさはず其の説の正しきをさるべしとしらぬむかしの人に力をそふるもをかし

文政癸未夏

玉川のうち水涼し江戸の塵

柳亭種彦

とあり、案ずるに此の書は種彦が著にあらざ、藏書と見えたり。收むるところもまた雜駁にして柳亭一家の隨筆とはちのづから別あり。

『足薪翁百話』寫本にて傳はれり、冊數不明なれど刊行せば少くとも五六冊を成すべし。これは柳亭が遺稿なりしを、門人笠亭仙果の手に渡り、それよりつたへて今尙存せりといふ。

因にいふ近頃『足薪翁之記』『柳亭筆記』『柳亭記』など名けたる寫本を見たるが多分此の『足薪翁百話』と異名同本なるべし。『吉原書籍目録』(一卷寫本)あり、吉原にかゝる著書を考證したる隨筆なり。例へば『吉原伊勢物語』といふ書の條下には左の如く考證せり。

二冊、小形の半紙本、寛文二年、山田市兵衛版。

標題にも知らるゝ如く吉原の事をいせものがたりになぞらへて書けり、紙數五十餘張、後は張付の外にてあこよりさしこみたるものゆゑ初にすりたるは給すくなく後に摺りたるさおぼしきには給多く文章もさころく入木して彫あらためたるがあら

り延寶の寫本箕山が色道大鑑の引書にをかし男さあるは此冊子のことなるべし元祿の書目録に載てあり等なり此の書種彦が傳記等に戴せたる著書目録中には見えざれど柳亭種彦編とあるによりてこゝに掲げ、後の考を待つ。なほ『還魂紙料』の卷末に近刻の書目録を掲げ『還魂紙料』二編(二冊)『ふる元結』(三冊)「此冊子も還魂紙料のたくひにて雅となく俗となく古きことどもを記したる隨筆なり」とあり、また『俳諧古道具』初編(三冊)「此冊子は永正の犬筑波集天文の守武千句をはじめ近くは正徳享保のころまでの俳書のうちより人名地名器物の名等なにくれとなく撰出しことごとく證句を考へ附したれば故人の句を□すに益あり又俳諧のたすけのみならず好古の人の目ざましぐさともなるべし」とあり、此等の書は預告のみにて刊行には至らざりしか、篁村翁は『古道具』は脱稿せざりしが如くいへり。種彦また字引を作らん計畫ありしが如し。その理由は篁村翁所藏の柳亭が雜記帳の紙背に、いろは別をなして文字に一々解を附したるものありとぞ。されども例の用意綿密の質なれば念に念を入るゝうち、世に出して他の譏もいかゞならんなど考へ、遂に脱稿せで止みしものならんと。

其三 稗史

是より前に記すべかりし種彦が稗史、なほ幾部かあるべし、例へば『風狸傳』『近世怪談霜夜星』『文化五年、五冊、北齋畫』等なり。『霜夜星』の大意は左の如し、

高西伊兵衛といふ風流の才子あり、下總笠森觀音に詣でけるに年若き姉妹の女にいであふ、こゝにて妹花子と伊兵衛と相戀



戀するにほぐまり、その後長く相見ざりし間、花子は盜賊に勾引されて思はず人の妾となり、又伊兵衛はさる人の婿養子となりしが、この娘おさばといふに至つて醜き女なりしかば伊兵衛快々として樂まず、然るに因縁深かりしにや伊兵衛花子再び相見ることを得て情火忽ちもえいで、兩人は不義を知らず夫と妻との目を忍びて密會數次、遂に露顯に及びしが、お花の夫情あるものなりければ花子は伊兵衛に還すことになりしも、家にはおさばあるにより花子を迎ふること能はず、こゝに於て伊兵衛は一計を案じ妻を待遇すること極めて残酷なり、おさばは夫に逆待せられ怨を呑んで入水して相果てたるが、亡婦の一念蛇となりて、夫伊兵衛は勿論此の事件に關係あるあまたの人を取殺して、怨を報する恐しき物語なり。

これ所謂「四ッ谷怪談」を稗史に物したるなり、劇に演ずるは重に此の作に基けりといふ、(『外題鑑』)

案ずるに文化五年頃は、彼の荒唐奇怪なる京傳の稗史『櫻姫全傳』善知鳥安方忠義傳』等の盛に行はれたる頃なれば、これも一時の流行に投じたるものなるべし。種彦の稗史のうち、最も佳作と思はるゝは『緜手摺昔木偶』なり、されど種彦の長所はもと稗史にあらず、自らも不得意なることを悟りて早く其の筆を投じれば、予もまた是れを評せんとせず。

### 其四 草双紙の變遷

江戸の名物草双紙は其のはじめ赤本と呼べりき、是れ、貞享、元祿の頃より、凡そ四十年間行はれたる草双紙の總稱なり。其の種類一にして足らざれど鉢かつぎ、文正草紙より、土佐、薩摩が正本類、又は享保の頃の桃太郎の昔噺等を含みたるものにてすなはち草双紙の最も幼稚なる時期をいふ。

### 赤本の例

『鼠のよめ入』(紙數五丁、二冊もの、丹がら表紙、年號未詳)。案ずるに此の冊子は『桃太郎』猿蟹合戦』等と時代を同じうするならん挿畫の外は小書のみにて本文なし、例へば婚禮の場にて介添女の傍には、

かつぎの綿をおとりなされませ。

花嫁の傍には

どうもはずかしうござります  
など記したるに過ぎず。その後長く繪草紙の稱號にて世に持囃されしとを推察するに足るべし。赤本一變して青本の初期となりぬ。即ち元文、寛保の頃より凡そ三十年間、一代記、敵討等の専ら行はれたる時代なり。是等の冊子は表紙に至るまで淺草紙の漉かへしの白く薄きを二つ切にして摺りし故、紙にも灰墨にも臭氣あり。此の年間のはじめには黒表紙にて一巻の價五文づゝなりしも、寛延、寶曆の頃よりは漸々冊子の價貴くなりしかば、代ふるに黄表紙を以てし、一巻の紙數五丁、全二冊にて十二文、もし三冊物なれば十八文に鬻ぎけりぞぞ

### 黒表紙の例

『由良の湊三庄太夫』(紙數五丁、三冊もの、黒表紙、年號未詳) 安壽姫、對王丸の二人、父なる磐城判官をたづねにいで、由良の湊に至り、三庄太夫に苦しめらるゝ物語なり。安壽、對王、三庄

太夫の館を逃亡せんとする條

あねさままづさきへおち玉へ

いや／＼われらは女子の事、いかよでもそのぶん、なんじは男子なれば先祖をあらはし世に

いで玉へ、はや／＼おちよつしわうよく

さて少しく地の文を挿みて

あねは弟をおもひ弟はあねをおもひ、はや／＼おち玉へ

などあれど、純然たる地の文とはいふべからず。又『一代記』の類は紙數五十丁、一冊物にして地

の文も見えたり。黒表紙と年代の前後いかにや、詳ならず。

一代記の例

『義經一代記』(紙數、五十丁、一冊もの、年號表紙未詳)義經安宅落の一節

すでに十二人の人々あたかのせきにさしかりければどかしの左衛門にて(?)人々はよしつね  
べんけいその外なりとてゑつに引合(?)打どらんとするべんけいわれ／＼ははるる山のけうじ  
やなり此度なんと大佛でんくわんじんたいとにまいるといろ／＼ちんじけれどもがしみあら  
はすところ

「まからばくはんじん帳があらうそれをたからかによまれよ」とがしの左衛門みあらはす。べん  
けいが人がたをいだしあわせてみる。せひなくべんけいわうらいのくわんを讀上る

「それぞおんせうじやのかねのねはしよ行むじやうとひらきせしやうめつ法はこれくはんじん  
たいとなり」

此の種類の草双紙には『三國誌』を五十丁一卷に縮めたるもあり。是等は固より一例に過ぎざるも  
前期赤本に比しては一層發達せるを見るべし。此の間に、丈阿、清春(畫工)等の作者あり。

次は青本の後期なり、安永四年にはじまり文化三年に至る、凡そ三十年間とす。四方山人『菊壽  
草』(草双紙評判記)の序に云ふ

中昔寶曆十辰の年丸小が板丈阿戯作の草紙に始て作者の名を顯はし外題の繪を紅摺にして出せしを其の頃はまだ錦繪のなき  
時代なれば珍らしき事におもひ所々より出る草しの外題みな色摺となりたりしに鱗形屋はかりは古風を守り赤き色紙青き短  
冊鯛のみそつに四方の赤のみかけ山のかん鳥大木のはへきわふさいの根かてんか／＼位のしやれなりしと思へば／＼昔にて  
二十餘年の榮花の夢金々先生といへる通入出て江戸中の草双し是が爲に一變してどうやらかうやら草双しといひのほりはお  
こな物となりたるもおかし云々

右は安永四年戀川春町が『金々先生榮花夢』を著し、より青本の躰裁再變したりし時の評なり。是  
れより秀才あまたいで草双紙に滑稽洒落を盡くして天明寛政の全盛を極めき。事は山東京傳の條  
に詳説したれば乞ふらくは對照あるべし。

さて此の年代のはじめに當り作の新板あれば、大半紙の二つ切に摺りて茶色の一重の表紙をかけ、  
色ずりの袋に入れて、三卷を一冊に合し、價五十文或は六十四文に賣りぬ。これを袋入とぞ呼び  
ける、今新聞の續物を更に一部にして出版する類なるべし。

袋入の権輿は安永六年朋誠堂喜三二が「新板桃太郎」(藍摺表紙、五丁紫紙綴)なりといふ。

寛政の初より草ざうしの價更に上りて、黄表紙は二冊物二十文。三冊物三十文。黒表紙は二冊もの、十六文、三冊物二十四文なりきとぞ。

かくて文化三年に至り、其の以前より敵討の草艸紙大に流行して青本の後期こゝに終はり、式亭三馬の『雷太郎強悪物語』より更に合巻の初期を作りぬ。これ種彦が全盛の時なり。

合巻の冊数は一定ならず、されど四冊物、六冊物を普通とせり。こゝには種彦が作の六冊綴きの合巻に就きていふべし。麗しき錦繪摺の表紙をつけ、外題、及び作者、畫工板本の名、年號干支等は裏面に記すを通例となし、が如し。初の一丁の表には序文あり、其の終に年號職名を記すこと例なり。一枚翻し、二枚、三枚はみな口繪なり、編中の主なる人物を表出して姓名及び身分の大畧を知らしめたり。されば残りの丁數僅に一葉半にして一の巻は終はれど其處には別に界紙を挿入せず、「二の巻へ」「一の巻より」の符號にて巻別を示せり。かくて二の巻の末五丁に至れば同じ符號ありて二より三の巻に移ると前の如し、但し三の巻の終には裏面の表紙あり。此表紙は小紋紙もあれば黒色の無地もありて、一概にはいはれず。以上三巻をば上編となし第四巻より第六巻までを下編となせり。下編の表紙は上編と異なるところなけれど、唯口繪なきのみ。巻末には再び大字にて作者と畫工の姓名を表し、又筆耕彫刻師の姓名をも附記したるは種彦が作にまゝありこれ作者がひとり功を貪らざる徳義なるべし、他の作に稀なることなり。下編表紙の飾繪は上編

のと一對に書けるもあれど然らざるもあり、是等は一定の標準を示しがたし。要するに文化中頃

此の次は合巻の後期續物の時代なり。此の時期は『傾城水滸傳』『金毘羅船利生續』『田舎源氏』等よりはじまり天保の末より弘化、嘉永、安政に至る間、盛に行はれて數十編の續物巻積んで堆をなせり。中にも万亭應賀の『釋迦八相倭文庫』笠亭仙果の『八大傳犬のさうし』殊に柳下亭種員の『白縫物語』の如き、嘉永二年其の初編を著し、より年々續出、文久二年までには三十編を綴りぬ。三十六編よりは柳亭種彦(三代目なるべし)更に其の稿を續けて明治四年、六十一編に至りて筆を止めき。此の種彦の筆にて輕氣球、劍つき鐵砲、洋服きたる醫者等、戯作の内地へ西洋風の挿畫雜居して、さしも二百年來徳川氏の太平に鼓腹したる無邪氣の草双紙も其の特質を失ひて、長き草双紙の系統こゝに斷絶しぬ。これ草双紙變遷の大要なり。然れども今日畫入新聞の續物は純然たる草双紙の派を受けたるものにして往時の定時刊行を日刊に變じたるに過ぎず。さもあらばあれ草双紙の全盛期は初代柳亭種彦の時代なりき。吾人は『田舎源氏』の三十八編に互れるを見ていかに昔の著者の刻苦精勵なりしかに驚き、併せてまた當時の讀者の倦まず飽かず同一物を歡迎せし其の根氣の強きに驚かずばあらず。

### 其五 種彦の草双紙

種彦の作は年代に照らして吟味せんには、多少の巧拙を作の上に見るべし、即ち著者が技倆の變

遷あるべけれど、概していへば齊一なり。これを酷に評すれば其の趣向凡て千篇一律なれど、其の千篇一律なるにも拘らず、讀者をして不知不識面白味を感じしむる手練は、これを所謂名人の腕といふべし。これを食物に譬ふれば初生の茄子の珍味にもあらねば、大牢の滋味にもあらず、さながら鹽梅のよき常食の如し、一句若しくは二句のうちには必ず同じ魚、同じ野菜に接すれども、其の配合、即ち附合の上手なるが爲に食するものは飽かず、いつも新しき献立に接するのちもひあり、種彦は巧みなる料理人の如し。

『曾我たゆふ染』(文化十四年、二冊、國貞書、西村板)

此の作は種彦の著述として有名なるにはあらず、曾て近松門左衛門が書き残したる一編の筋書を多少時様に直したるものなり、序文に曰はく

近松門左衛門は下めは歌舞伎狂言の作者なり其頃の正本曾我多遊染といふを友人の許より借得て是を燈下に朗誦すれば怡も百有餘年の昔狂言を目前視るこゝちして最めづらかなりければ古風を世に傳へまほしくて趣向は原本を聊も離すたゞ辭のみ今様にさりなし標題もそのまゝ曾我昔狂言となづけぬ  
原本に年號なしといへども元祿六七年の頃なるべしと卷中に考るこゝろあり事なげればこゝにもらしつ  
狂言名題を大夫染といふは案するに大夫は水木辰之助なり其頃彼がつれに着たる染絹を辰之助染まよび専流行なしければしかなづけしなるべし

文化十四年丁丑孟春

柳亭種彦誌

此の草紙の卷末に作者机に憑りて眠る、その夢に近松老翁の道行を着て一軸の巻物を手にしたる

姿のあらはれたる圖あり。

『浮世形六枚屏風』(文政四年、六冊、豊國書、西村板)

此の作は阿蘭陀にて翻譯になりし有名之作なり、而して種彦の門人四方梅彦子更に阿蘭陀本を再翻譯す。但し當時の戯作者が蘭語を解し得る理由もなければ、其の實は種彦の原本によりて傍訓讀本牀に譯したりといふ、これも一種の類才なるべし。そはともあれ我が國の戯曲、小説中早く外國語に譯せられしは、近松の『國姓爺』(但し漢文)及び種彦が此の作なるべし。

『蛙歌春土手節』(文政九年六冊、國貞書伊藤屋板)

色男に闇路屋六三といふ若旦那あり藝妓かしくどの艶話を例の妙文もて面白く綴りなしたるものなり、番頭環八の悪計女房おそのゝ貞節さばきやくには雲形丹作といふ無上の力を有する士あり。原來種彦の作には必ず一人のさばき役ありて紛紜たる事件を程よく落着せしむること、さながら馬琴等の著作に於る神佛の力が人間を左右するに異ならず、而してそのさばき役は作者自ら之れに擬するものゝ如し。こゝにをかしき一話あり、そは作者と畫工との鼻の突合せは京傳以來久しきものにて、三馬、馬琴、みなこの争なきはあらざりき、種彦と國貞もまた兩技相合して頗る流行せしだけに、功を争ふこと一層烈しく畫工は挿畫の妙にて賣れると信じ、作者にはもとより作者の自信あり、されど種彦の如きは畫工の名を己れが上に掲ぐるなど能ふべき限りは功を彼れに譲りしこと疑ひなきも、必竟著作の評判は種彦の獨占する所となりければ、國貞の喜ばざるや勿論な

り、さればその意趣返しといふにはあらざるべけれど、種彦より草稿を送るも國貞は容易に筆を  
 とらず、いつも延引させて種彦を迷惑せしめしことなきにあらず、然るに此冊子を盡くに當  
 りて例と異なり、直に挿畫して作者のもどへちくりかへしぬ、これには少々仔細あることなり、  
 當時國貞に此の作中の情事に似たる範圍ありければ、それを種彦が作りくれしものと喜び、ひそ  
 かに大得意になりて色男六三は自分國貞のつもり、さばき役は種彦と定めてさて雲形丹作をば種  
 彦の肖像に書きたりとぞ。然るに種彦には毛頭かゝる趣向のありしにはあらずとなん、今に傳は  
 りて大笑の種となりける。因にいふ作者の肖像を掲げたるものは『戯作者六歌仙』あれど、種彦の  
 肖像は此の作の雲形丹作最もよく本人に似たりとぞ。

『邯鄲諸國物語』(一名『種彦諸國物語』)

前章にもいへる如く、『西鶴諸國物語』及び『其積諸國物語』にならひてつくりしものとさへり、され  
 ど『西鶴諸國物語』と相似たるは唯外題のみ、又『其積諸國物語』は三回づゝ一編、五つの物語を五卷  
 に綴りたるものにてみな諷刺のはなしなり、而して種彦のは一ヶ國にて一説話を收むるやうに綴  
 りたる所其積のに似たれど、要するに八文字屋物と草双紙との差ありて、種彦の負ふ所はむしろ  
 淨瑠璃本に多かるべし。近江、出羽、大和、播磨の卷みな別々の物語とはいへ、各編の人物前後  
 に多少の關係ありて、初編より通じて讀めば別に幾分の興味あるべし、されど一編のみを讀むも  
 面白からぬにはあらず、これ此の作者特有の趣向といふべし。

『近江の卷』(天保五年、八冊、國貞畫)

近江國蒲生郡鏡の宿に富有なる旅舎あり。此の家の一人娘おかな、同國八幡の町竹花屋の一子鯉七と契りて夫婦の約を結び  
 しも、共に一粒種なれば縁談整はず。こゝにまた其の頃盜賊の主領に藥王太郎熊頼、同次郎鬼門といふありて、金銀財寶を  
 掠め、良民を苦しめしかば、國司算作判官、家臣石倉慰之助、青崎武者五郎等に追討の命を下しければ、兩人奇計を運らし、  
 賊魁等が右旅舎へ忍び入りし所を首尾よく生捕り、おかなと鯉七は望の如く夫婦となりて局を結ぶ。

『出羽の卷』は僅に二三葉の短編なればいはず。

『大和の卷』(天保六、八、九年、十二冊、國貞畫)

茂山鍾三郎の物語なり。鍾三郎はも近江の箕作家に仕へし料理役人なり。職掌のこゝにて庖丁を使ふこゝ巧なりし所より、  
 同藩の稻積一有齋といふ劍術師匠の婿養子となりて、一有齋が一人娘おさみを妻となし、夫婦なかに睦まじく暮らししが、  
 おさみは一子京之助を残して夫に先き立ちぬ。鍾三郎の愁歎大方ならず、殊に先達て藥王次郎追討の時、討手に赴かんこと  
 を願ひしに、故ありて許されざりしかば、己れ小身より成りあがりしものなれば上に於ても取り上げ玉はぬと推し、快々  
 して樂しまざる折ふし、妻の早世に逢ひて世をあぢきなく觀下、再び侍奉公致さる旨上役に誓ひて、強ひて永の暇を乞ひ、  
 京之助は鍾三郎の姉おたまといふに預け、亡妻の遺言もあればさて、高野山に骨を納めん旅の途中、若き婦人にいであひ、  
 その名をきけばお笹とて、これもなき夫の骨を高野山に納めんと手代某に伴はれて來りしところ、手代は原來の悪者なれば、  
 道にて衣類金錢を奪ひて逃げ去りしに不圖鍾三郎に出會して好伴侶を得たりき。さて兩人は途すがら互に亡夫亡妻を慕ふの  
 あまり相戀戀して飯山の後遂に夢幻のうちに交情中となり醒めて悔れども及ばず。する／＼べつたり夫婦となりて、名も落  
 窪鍾三と改め、前に誓ひしことを忘れて大和の國司花木の家仕へ、一時は武運榮えしも、遂に相役の偏執より、果ては毒  
 殺せられて一家こゝに零落に及ぶといふ聊かの勸懲あり。その間いろ／＼の物語ありて京之助親の敵を討ち、再び近江國箕

作家の臣に復讐して此の編は局を結べり。

此の巻は初編より面白し。鍾三郎とお笹どの會合の趣向は近松が淨瑠璃『婿うたがるた』の瀧口と横笛、かるもと左京之進二組の密會に胚胎せるもの、如く、(よし事件は異なるも)又京之助とお谷との出會は『近江の巻』にておかなが鯉七に逢はんが爲に、雇人お只と床をかふる手段と同一轍にして、而も近松が『おさん茂兵衛』より來れるもの、如し。此の類なほ有るべし、もとより新奇の趣向にもあらざれど、草双紙には恰好の趣向なり、而して作者は同じことを繰返しなから、目先をかへて陳套の痕跡を止めざるは老練と稱すべし。

『播磨の巻』(天保十一、十二年、十二冊、國貞書)は近松が『鎗の權三重帷子』の醜案なり。權三は前の鍾三郎と後妻との間に産れたる梅之助なりといふに、前編との連絡を繋ぎたれど、話の筋には關係深からず。原作と異なる點は權三よりも淺香逸之進を主なる人物となしたるにあり、されば權三とおさめとの間違の生ずる後よりも、其以前逸之進が經歷を詳しく記せり、近松の淨瑠璃にては、お菊をば未だ十二三の少女として、母のおさめが「表小姓の笹野權三様に添はせたい、といへばお菊は童氣の申しか、様權三様は大人でおち様のやうにあらふ、私やいや／＼と頭ふる」と作りしに、此の巻にはお菊は二八の盛の娘にて、殊に若殿大江の助と關係あるが故、母の勸も承諾せぬやうに拵へたり。而して此兩作のおさめはいづれも一人合點の女にして何でも我が娘を權三に妻はせんと一途に思へり。然れども前者のおさめは前見ある仕方にして伶俐の氣質おのづか

ら表れ、後者のは目前のことをだも悟り得ぬ痴鈍の氣質を示せり。蓋し近松のおさめは權三と實際の關係はなくとも半の丞の爲に一たび姦通と叫ばれるに及びて、「チ、いとしゃ口惜いは尤なれど(中略)不肖ながら、今こゝで女房じや夫じやと一言いふて下され」と權三を強迫して本夫の刃に骸を曝らす必然的傾向を有すれど、種彦のはおのれひとり自害をして夫に申譯し、夫もまた寛仁の人に作りかへて、權三とお雪とは何の故障もなくめでたく夫婦になるといふ轉意の趣向なり。たゞし作者の才能と著作の種類に大差あれば、兩者を對照して同一理の下には其の輕重を論じがたし。簗村翁は曰はく、種彦が醜案の妙は茶番にありと、而して草双紙の讀者はまた此の外には多く望まざりしならん。前にもしばしばいへる如く種彦は文辭の修飾に最も長ぜり。此の巻また稱すべき所少からず、例へば一編の動機とも稱すべき逆臣青淵帶左衛門が滅亡の光景を寫すや、作者は之れを正面より畫かずして僅に使者二人の口頭を假りて反而より現場を見せたるは、半二が作の『忠臣講釋』早打の段に似て更に一層の妙あり。之れを要するに種彦の文は自ら、西鶴、八文字屋、近松に胚胎すといへれど、負ふところは主に淨瑠璃本、及び芝居の正本なり、今此の脈の現れたる例を示さん『近江の巻』娘あかなの床へお只が入かはりて母親に見出ださるる條に

よぎびきかけてやりませうさいひつ、手をさりうちまもり「此まアふさつたこはいなそして手くびをたいはくのいさでむ  
すんでこんなこ人がらがるいさでいちごもしやつたこはなしがてんのゆかぬさひきまくりのほさしのぞいてあきれは  
ておたぐ／＼さよびさまされびつくりさびおきうろ／＼さ「はいおかみさんわたくしはてうづにいつたかへりがけついでま

ごひをいたしましたおきやくがきそかしはらたて、きにげいだすをさむるお山はづみにくわつたりたる、しやう「そこにあるのはおかなぢやないかはいではわからぬこゝへおトやそなたもおほかたやつぱりさまごひ」云々

文章も斯くの如く綴らるゝものとすれば、句讀を切らねば讀みにくし、假名文は讀むに五月蠅しなどの小言も自然に無用となるべし。何はともあれ種彦が此の筆法は後の文士、殊に戯曲を作らんもの、好摸範なること疑なし。

種彦が『諸國物語』は『正本製』よりも『田舎源氏』よりも後に着筆せしものなれば作者の技倆は此の作に盡きたりといふも過言にあらじ。實に種彦が一代の傑作なり。

『播磨の巻』は前編を天保十一年に出だし、中、後編を十二年に出したり、即ち其の歿する一年前なり。此の後笠亭仙果此の稿を續けて矢張り『種彦諸國物語』の題號にて『伊勢の巻』『遠江の巻』を著しぬ。『伊勢の巻』の序に

戯作者の魁たりし柳亭翁往年田舎も都も流行し、ゆかりさいへる染色も、藤袴を綴目として紫の雲隠ありしより茲に七年、そも／＼翁の草双紙、永壽堂にて梓行せし、鱧庖丁を初とし、本店にては權三の鎖の、征魂を以て終す、其の切味の鋭かりしも滑川の水逝てかへらず、播磨に名さへ高砂の、松も昔時の松はなし、是に若木を植つけよと、榮久堂のすゝめなれども、予も師匠に別れてより、書作る事も懶惰で、五六年筆を断にき、然るを朋友たれかれが打栗果んはよからぬ事と、諫られて又些やつて見る氣になつてつて、こは名作師匠の後、續紹あまり尾籠がましく、當時翁が著述れし物を、再用ゐて聊取捨し、勉強伊勢巻二套とす、故にわが手に成るさいへど、更に我が作にはあらず、但付録の遠江の話、是は翁の作にあらず、其積が園の根分にて、彼古市の風邪話の、千種の散し暮秋、蕃瓜の尻よりむくつけなる、花形は咲せば、あ、

いかにせんこひいきの、御目には菊の花角力、外の造紙に負るなの、お詞もかゝりなば、故人もさぞ喜び待らん  
弘化五年戊申孟陞

笠亭 仙果 謹述

とあり。案ずるに仙果の初筆は『合巻外題集』によれば、天保二年『合せ物端唄弾初』にして、是れより年々一二部づゝ天保十三年まで著述あれど、同八年まではことごとく「柳亭校」と記しあれば、未だ獨立して旗幟を戯文壇に翻すには堪へざりし也。原來仙果は尾州熱田の人にて「初代種彦を景慕し、書を寄せて門人となり、冊子の稿を師の許に送りては、校訂を乞ひ潤筆の料を要せず、冊子の發兌を冀ひしかば、種彦懇に訂正し、且序、跋杯添へて、書肆鶴屋に進め發行せしめき、仍りて鶴屋は種彦へ校訂の謝儀として、些少の金を贈りしかど、種彦は自ら受けず、直に仙果の許へ遣したりき、斯くする事さばくにて、仙果の著漸く多く、其名遠近に聞えければ、仙果ひそかに思ふやう、書肆は若干の潤筆料を出すべきに種彦其多分を沒收し、我には薄謝を贈るならんとて、江戸に來るや、旅装の儘に鶴屋の店を過ぎ、名刺を通じて先づ潤筆料のことを問ふ、鶴屋の主人答ふるやう、貴著潤筆料を要せずとあれど、柳亭先生序跋など添へられ、それが爲め世に行はるゝなれば、先生への謝儀として聊の料を送る、由を答へしかば、仙果赧然として大に師翁の清廉を感じ、さて後ぞ種彦が訪らひける、然るに此事鶴屋より柳亭の方へ洩れ聞えければ種彦も仙果の腹ぎたなきを憤り、仙果も面目を失ひて、自然師弟の交りは絶えにけり」云々(『小説史稿』)さればにや仙果は種彦歿後まばらく筆をとらず、こゝに再び先師の餘光を擔ひ

て世間へ再出しきと見えたり。

縦令種彦が舊案を補綴したりとはいへ、此の作を以て前師の作に比ぶるは氣の毒なれど、第一仙果の文は冗漫に失して、挿畫にて趣向の大半を表出する草双紙の面白味を殺ぎ、第二文と言葉と調和せざるのみならず、語呂また澁滞して讀むにもうし。蓋し文才は其の人の天性に屬し、或程度以上は學びがたきものなるべし。要するに種彦の所謂名人の秘傳は、此の人には傳はらざりしものゝ如し。然れども唯一事師匠の特色を保ちしといふは、趣向を鹽梅するに、妖怪變化の力を假用せざるにあり。そも、神變不可思議の藥劑を投して場面の危篤を救ふは、京傳馬琴をはじめ多くの作者の慣用手段なりしが、種彦は少くとも、草双紙の世界にては此の弊無かりき。但し淨瑠璃又は脚本に於ける無理なる趣向、不自然なる事件をほしいまゝに用ふるの大膽は種彦に優るもの少し、されど其の荒唐無稽不自然なる範圍をことごとく人力の上に限りて、之れを人間以外の力に求めざりしは、化政度の作者中ひとり種彦の特質にして、仙果の如きまた此の脈を繼承せり。然れども人間以外の力を借らずして小説の局面を新奇にし、且面白くなさんは凡手の能くなし得べきにあらず、かるが故に小作者は殘忍若しくは淫猥の劇藥を投じて僅に一時の命脈を保たんとす、これ無名の文士が妖怪談、敵討、人情本等に筆を染めし所以なるべし。さて仙果の文才は師匠種彦が特色を維持するに足りし歟、あらず、此の『諸國物語』を讀まば讀者は倦厭を生じ、睡眠を來たすべし、否彼れはなほ一層墮落せり、彼の『田舎源氏』の餘波とも稱すべき

『根源實紫』(嘉永四年頃より安政五年に亘れる長編)を見よ、紫式部の傳記に疑したる草双紙たるにも拘らず、野卑淺陋また『田舎源氏』の優美なる姿色をどゞめず、種彦が作の妙は此の對照を得て更にいぢるしといふべし。

## 『修紫田舎源氏』

前章にては此の冊子をも評すべく思ひしが、しばらく見合せ代ふるに此の作に關する面白い話一二を掲ぐべし。

そも、『田舎源氏』は廣く持囃されたれど、當時主なる讀者は、實に奥向の女中なりき。されば女中達が種彦を最負せしは中々今日の婦人が福助を最負するにも優りつべし。『田舎源氏』世に行はれて種彦の名頗る高く、彼れが一喜一憂は奥向女中の一擧一笑といふも過言にあらずき。種彦病篤しと聞えける時、脚本丸廣敷の女中數名、『田舎源氏』の絶えなんとを悲みて、平常信仰する神佛へ祈念をこめ、又は護摩をたき、或は百度を踏みなどして病氣全快を願へるもありしが、中にも重き役を勤めし松惠といふ女中は、堀の内妙法寺へ七日の間代參をたて、若干の金錢を納めて祈禱をなさしめしが、『田舎源氏』の冊子を奉書に包み封をなして之れを祖師堂の厨子の前に備へ、僧侶數人にて日々祈禱を修しければ、人々疑ひて種々の噂をなし、或は人を呪咀するにやあらんといふもありて、遂に隠目付の點檢するところとなり、彼の封を切解き見れば、何ぞ圖らん『田舎源氏』の冊子なりければ、其の場は笑にて濟みけれども、此の事廣敷番の頭の耳



に入り、松恵は遂に暇となりきといふ。

又八丁堀の組屋敷にて、此の冊子を持囃すもの多しとの取沙汰聞こえければ、仁杉某が發起にて、柯堂翁を聘し『源語』の講釋を組の女どもに聽聞させなば、教訓の一助にもならんとて、自ら財を費し講筵を開きしに、婦女子どもは草双紙の源氏ですらかばかり面白きに、『源氏物語』はその本といへば猶さら興あるべしと、最初の日は凡五六十人も集りしかば、某は悦喜に堪へず、茶菓などいだしめてなし、翌晩も來たるべしと待設けるに、此の夜は二十五六人減じ、次會は僅に六人となりしかば、某大に失望して其の翌晩は自ら家々へ出迎ひに行きしに、或は風邪なりといひ、或は差支ありといひ、遂に一人も來たらず、此の會三日にして絶えき。某歎息して成程能狂言等よりは芝居の流行るも道理なりといひききとぞ。

『田舎源氏』の勢斯の如くなりしかば、其の頃「源氏香」「源氏鮎」「源氏煎餅」「源氏そば」など、源氏なる冠詞を物名に附すること流行しけるにより、一層種彦は其の筋の注目するところとなり、遂に嫌忌をひきぬとぞ、是等はまことに有難迷惑といふべし。

種彦が『源語』の力は、六樹園石川雅望の講義を聽き、また加藤美樹が註を施し、『湖月抄』に因るといへり。(以上の事蹟は故關根只誠翁の隨録による)

『田舎源氏』の挿畫につき、著者の苦心せしことは既に人の知るところなり。例へば座敷の構造、器具調度の配置、衣服の模様、凡ての裝飾に至るまで必要あるにあらざれば、成るべく目前を變へ、千變一律に陥らざらんやう努めたりき。篁村翁の話に、出入の本屋若しくは友人などより珍品奇器を知らせせしものあれば、或は之れを見或は聽き取りて例の如く綿密に覚えおき、さて『田舎源氏』の挿畫の材にしたるも多し。或時のことなりき、珍らしき石燈籠を見ん爲に、態々野州宇都宮まで出張せしこともありきとぞ。以て其の苦心の程を察すべし。

柳亭種彦著作一覽表

年號	稗史并合卷之部
文	稗史 ●『阿波之鳴門』五册(北齋畫) ●『奴の小万物語』四册 ●『江戸紫三人兄弟』(桃川畫) ●『江戸紫三人兄弟』(桃川畫) 一名『總角譚』 此冊子は初、二、三、四編各々二册づゝ同八年に至り完結す
文	稗史 ●『淺間嶽面影草紙』三册 ●『怪談箱夜星』五册(北齋畫) ●『勢田橋龍女の本地』三册(北齋畫) 淨瑠璃に擬したる作なり 合卷 ●『鱧庖丁青砥の切味』七册(蘭齋、化齋畫)
文	八 仙果作『諸國物語』の序に「柳翁(種彦)の草双紙永壽堂にて梓行せし、鱧庖丁を初とし」云々案するに此の作より種彦の名漸く揚りしならん。
文	九 ●『執卷譚』三册(重信畫) ●『淺間嶽』後編(同前) ●『綱手退治』五册(同前) ●『神史の作此の後無し』 ●『京一番娘羽子板』七册(同前) ●『梅櫻振袖日記』三册(國丸畫) ●『女合法辻談義』六册(清峯畫)

年二政文	年四十化文	年十三文化	年十二文化	年十一文化	年十文化	
<ul style="list-style-type: none"> <li>『曾我昔狂言』三册(國貞畫)</li> <li>原作近松門左衛門種彦修辭</li> <li>文化十五年文政と改元</li> <li>『國字小説三蟲母戰』六册(前、國貞畫)</li> <li>『千瀬川一代記』(後、國貞畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『花紅葉一對若衆』三册(重信)</li> <li>『女模倣稻妻染』六册(重信)</li> <li>『忠孝義理の詰物』二册(重信)</li> <li>『高野山万年草紙』六册(重信)</li> <li>『曾我昔狂言』三册(國貞畫)</li> <li>原作近松門左衛門種彦修辭</li> <li>文化十五年文政と改元</li> <li>『國字小説三蟲母戰』六册(前、國貞畫)</li> <li>『千瀬川一代記』(後、國貞畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『堀川歌女猿曳』六册(重信畫)</li> <li>『滑稽橋島の囃』二册(國貞畫)</li> <li>『花紅葉一對若衆』三册(重信)</li> <li>『女模倣稻妻染』六册(重信)</li> <li>『忠孝義理の詰物』二册(重信)</li> <li>『高野山万年草紙』六册(重信)</li> <li>『曾我昔狂言』三册(國貞畫)</li> <li>原作近松門左衛門種彦修辭</li> <li>文化十五年文政と改元</li> <li>『國字小説三蟲母戰』六册(前、國貞畫)</li> <li>『千瀬川一代記』(後、國貞畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『春霞布袋本地』三册(重信畫)</li> <li>『錦帯准無間』六册(重信畫)</li> <li>『花雪吹若衆宗芝』六册(春扇畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『合て三國小女郎狐』六册(重信畫)</li> <li>『娘修行者花の道記』六册(重信畫)</li> <li>『娘金平昔繪草紙』六册(重信畫)</li> <li>『狂言三勝』六册(重信畫)</li> <li>『忍實對の花卷』六册(重信畫)</li> <li>『色も吉由縁の藤澤』六册(重信畫)</li> <li>『傾城盛衰記』六册(重信畫)</li> <li>『浮世形六枚屏風』六册(重信畫)</li> <li>『床飾錦の額無垢』五册(重信畫)</li> <li>『小、平兵衛の物語、菊合柳作』六册(重信畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『桔梗が辻千種の彩』五册(重信畫)</li> <li>『二箇裂手綱の紫』六册(重信畫)</li> <li>『雷鬼二面鏡』六册(重信畫)</li> <li>『南色の梅早咲』六册(重信畫)</li> <li>『浅間ヶ嶽煙の姿繪』六册(重信畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『燈籠随秋の花園』六册(國貞畫)</li> <li>『唐八器今國姓爺』六册(國貞畫)</li> <li>『近江表座敷八影』六册(國貞畫)</li> <li>『紅葉名所扇』六册(國貞畫)</li> <li>『雁金紺屋作の早染』六册(國貞畫)</li> <li>『人形筆五色の糸織』六册(國貞畫)</li> <li>『蛙の歌春の土手節』六册(國貞畫)</li> <li>『笹色の猪只曆手』六册(前、豊國畫)</li> <li>『柳の糸花の組交』六册(國貞畫)</li> <li>『伊呂波引寺入節用』十二册(國貞畫)</li> <li>『關東小六昔舞臺』十二册(重政畫)</li> <li>『忍實時代時繪』四册(國貞畫)</li> <li>以上二種小形本、但し後者は天保六年再板常形八册(貞秀畫)</li> <li>『淡染遠山鹿子』(國貞畫)</li> <li>初編より六編に至る毎編六册</li> <li>『昔々歌舞妓物語』四册(國貞畫)</li> <li>『春日夕き藤のうら葉』(貞秀)</li> </ul>
年六政文	五年文政	年四政文	年三政文	年二政文	年一政文	
<ul style="list-style-type: none"> <li>『操鏡三人女』六册(豊國畫)</li> <li>『比翼紋松に鶴賀』六册(豊國畫)</li> <li>『水木舞扇の描骨』六册(豊國畫)</li> <li>『新編八百屋の蔵開』六册(豊國畫)</li> <li>『小脇差夢の蝶鮫』六册(豊國畫)</li> <li>『女郎花啼言の栗島』六册(豊國畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『浮世一休麻問答』六册(國貞畫)</li> <li>『鯨帯博多三國』六册(國貞畫)</li> <li>『孝と貞兩岸一覽』六册(國貞畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『合て三國小女郎狐』六册(重信畫)</li> <li>『娘修行者花の道記』六册(重信畫)</li> <li>『娘金平昔繪草紙』六册(重信畫)</li> <li>『狂言三勝』六册(重信畫)</li> <li>『忍實對の花卷』六册(重信畫)</li> <li>『色も吉由縁の藤澤』六册(重信畫)</li> <li>『傾城盛衰記』六册(重信畫)</li> <li>『浮世形六枚屏風』六册(重信畫)</li> <li>『床飾錦の額無垢』五册(重信畫)</li> <li>『小、平兵衛の物語、菊合柳作』六册(重信畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『桔梗が辻千種の彩』五册(重信畫)</li> <li>『二箇裂手綱の紫』六册(重信畫)</li> <li>『雷鬼二面鏡』六册(重信畫)</li> <li>『南色の梅早咲』六册(重信畫)</li> <li>『浅間ヶ嶽煙の姿繪』六册(重信畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『燈籠随秋の花園』六册(國貞畫)</li> <li>『唐八器今國姓爺』六册(國貞畫)</li> <li>『近江表座敷八影』六册(國貞畫)</li> <li>『紅葉名所扇』六册(國貞畫)</li> <li>『雁金紺屋作の早染』六册(國貞畫)</li> <li>『人形筆五色の糸織』六册(國貞畫)</li> <li>『蛙の歌春の土手節』六册(國貞畫)</li> <li>『笹色の猪只曆手』六册(前、豊國畫)</li> <li>『柳の糸花の組交』六册(國貞畫)</li> <li>『伊呂波引寺入節用』十二册(國貞畫)</li> <li>『關東小六昔舞臺』十二册(重政畫)</li> <li>『忍實時代時繪』四册(國貞畫)</li> <li>以上二種小形本、但し後者は天保六年再板常形八册(貞秀畫)</li> <li>『淡染遠山鹿子』(國貞畫)</li> <li>初編より六編に至る毎編六册</li> <li>『昔々歌舞妓物語』四册(國貞畫)</li> <li>『春日夕き藤のうら葉』(貞秀)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『浮世一休麻問答』六册(國貞畫)</li> <li>『鯨帯博多三國』六册(國貞畫)</li> <li>『孝と貞兩岸一覽』六册(國貞畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『合て三國小女郎狐』六册(重信畫)</li> <li>『娘修行者花の道記』六册(重信畫)</li> <li>『娘金平昔繪草紙』六册(重信畫)</li> <li>『狂言三勝』六册(重信畫)</li> <li>『忍實對の花卷』六册(重信畫)</li> <li>『色も吉由縁の藤澤』六册(重信畫)</li> <li>『傾城盛衰記』六册(重信畫)</li> <li>『浮世形六枚屏風』六册(重信畫)</li> <li>『床飾錦の額無垢』五册(重信畫)</li> <li>『小、平兵衛の物語、菊合柳作』六册(重信畫)</li> </ul>

天保二年	天保三年	天保四年	天保五年	天保六年	天保七年	天保八年	天保九年	天保十年
<ul style="list-style-type: none"> <li>『昔々歌舞妓物語』四册(國貞畫)</li> <li>『二日月怪談三島お仙』(貞秀)</li> <li>『富士裾野、うかれの蝶島』四册(英泉畫)</li> <li>『花は櫻木春の夜話』四册(英泉畫)</li> <li>『三ッ瀬川上品仕立』二册(國貞畫)</li> <li>追善物</li> <li>『奇妙順禮地蔵の道行』二册(國貞畫)</li> <li>『出世奴小万の傳』四册(國貞畫)</li> <li>『伏見常盤熊坂物語』四册(初、國貞畫)</li> <li>後、廣重畫</li> <li>『自問自答戲言句合』二册(國芳畫)</li> <li>『讀て宮城野忍昔』四册(國貞畫)</li> <li>『縁結月下の菊』三册(國貞畫)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『風理傳』五册(畫工不明)</li> <li>『草履紙』三册(貞秀)</li> <li>『昔話浦嶋ちんちん』三册(貞秀)</li> <li>『火焚ばい』二册(貞秀)</li> <li>『茶番いろは』二册(貞秀)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』お仲清七三册(文化十二年)</li> <li>『二編』小いな半兵衛(不明)</li> <li>『三編』二代源氏時代物(九册)</li> <li>一名『顔見世物語』(文化十四年)</li> <li>『四編』おきく幸助七役草(八册)</li> <li>『五、六編』二ッ蝶々(十二册)</li> <li>『七、八、九編』お染久松(十八册)</li> <li>『十編』夕霧伊左衛門(十二册)</li> <li>『十一編』花吹網五郎(十二册)</li> <li>『十二編』(文政十一年、十二年)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』近江出羽の巻(八册)(天保五年)</li> <li>『二編』大和の巻(八册)(天保六、八年)</li> <li>『三編』まげ山鏡三郎の傳(四册)(天保九年)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』(歌川國貞畫)</li> <li>『二編』(文化十二年)</li> <li>『三編』(九册)</li> <li>『四編』(文化十四年)</li> <li>『五編』(八册)</li> <li>『六編』(十二册)</li> <li>『七編』(十八册)</li> <li>『八編』(十二册)</li> <li>『九編』(十二册)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』(歌川國貞畫)</li> <li>『二編』(文化十二年)</li> <li>『三編』(九册)</li> <li>『四編』(文化十四年)</li> <li>『五編』(八册)</li> <li>『六編』(十二册)</li> <li>『七編』(十八册)</li> <li>『八編』(十二册)</li> <li>『九編』(十二册)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』(歌川國貞畫)</li> <li>『二編』(文化十二年)</li> <li>『三編』(九册)</li> <li>『四編』(文化十四年)</li> <li>『五編』(八册)</li> <li>『六編』(十二册)</li> <li>『七編』(十八册)</li> <li>『八編』(十二册)</li> <li>『九編』(十二册)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』(歌川國貞畫)</li> <li>『二編』(文化十二年)</li> <li>『三編』(九册)</li> <li>『四編』(文化十四年)</li> <li>『五編』(八册)</li> <li>『六編』(十二册)</li> <li>『七編』(十八册)</li> <li>『八編』(十二册)</li> <li>『九編』(十二册)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『初編』(歌川國貞畫)</li> <li>『二編』(文化十二年)</li> <li>『三編』(九册)</li> <li>『四編』(文化十四年)</li> <li>『五編』(八册)</li> <li>『六編』(十二册)</li> <li>『七編』(十八册)</li> <li>『八編』(十二册)</li> <li>『九編』(十二册)</li> </ul>
未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳
<ul style="list-style-type: none"> <li>以上四種は芥子形本まで可愛らしき製本なりとぞ、此の四種或は種彦の最初の作なるべしとの説あり、追て可考</li> <li>情史</li> <li>『春情水揚帳』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『三編』播磨の巻(十二册)</li> <li>『四編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『五編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『六編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『七編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『八編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『九編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十一編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十二編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十三編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十四編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十五編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十六編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十七編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十八編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『十九編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十一編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十二編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十三編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十四編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十五編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十六編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十七編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十八編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『二十九編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『三十編』(天保十一年、十二年)</li> <li>『三十一編』(天保十一年、十二年)</li> </ul>							

<ul style="list-style-type: none"> <li>●三十二編『乙女』 (天保十一年)</li> <li>●三十三編『はつれ、胡蝶』 (一年)</li> <li>●三十四編『はつれ、胡蝶』 (一年)</li> <li>●三十五編『はつれ、胡蝶』 (一年)</li> <li>●三十六編『はつれ、胡蝶』 (一年)</li> <li>●三十七編『野分』 (天保十二年)</li> <li>●三十八編『膝ばかま、まきばしら』 (天保十三年)</li> </ul>	<p>其三 雜書之部</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●『還魂紙料』二冊 (文政九年)</li> <li>●『用拾箱』三冊 (天保十二年)</li> <li>●『骨董はりか』 (寫本)</li> <li>●『足薪翁百話』 (寫本)</li> <li>●『吉原書籍目録』 (寫本)</li> <li>●『文箱の紐』 (寫本)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●『還魂紙料』二編(二冊)</li> <li>●『ふる元結』(三冊)</li> <li>●『俳諧古道具』(初編三冊)</li> </ul> <p>以上の四部傳本の存否詳ならず (完)</p>
---	---	--

左の一編は種彦が蘭譯の草双紙に就き、伊勢の麥林舎主人といふより、『早稲田文學』に書を寄せて、右は蘭譯にあらト英譯なるべしとの質疑ありしかば、其れに對する取調への結果なれば、種彦が傳の後に附す。

### 種彦が作の蘭譯につきて

櫻庭 篁村

柳亭種彦の事につきて、水谷氏の問に對し予が語りしこと、或はつまびらかならぬ節ありてか、一二あやまりたる事のありしが中にも、『浮世形六枚屏風』が蘭譯されし云々につきて、英文蘭文の二ある事を明にせざりしたため、麥林舎なにかしより蘭譯にはあるまじ、英譯の誤りならんと、少しく嘲りたるやうの注意ありしに、予もあざみて、伊勢人の例のひがごと、事をかしゃ、さらば惑を晴らしなんと、海運榎崎氏が愛藏の彼の蘭譯本を借につかはしたるに、林なす多くの藏書の中、ことに小冊子の事なれば、頼には探し出でず、其のまゝに日を過ごし、に、程經て同氏より

やうやくもどめ出でたりとて、借しおこされたり、これを先づ坪内ぬしに見せまをし、ぬしは一わたり見て是は蘭文に似たれど、なほ其の國の學びする人に見すべきにどて持かへられしが、水谷氏の深切と、そが友人中堀氏の熱心とによりて、全くこは、埃太利國にて譯出せしものにて、當時出版の苦心驚くべく感ずべき事ありとて、次の如くに其の翻譯の序を譯し出だされたり。四十餘年の昔、我が邦の小説を歐洲にて譯したるものなれば、直ちに蘭譯とのみ思ひしは予のみにあらぬを、麥林舎氏の注意よりして、珍しくも奇しく、此の書の漢譯なりしを知り得しは悦ぶべき限りにて、ひがごとは予にありて、麥林舎のぬしこそ柳亭が面をこしたる知音とは云ふべけれ此の譯本は原書を其のまゝ石版にやうつしけん、豊國が挿畫も其のまゝにて、實に珍重すべきものなり。すべて文士の著作をなす、その同國同文の人にはさへ、よく讀まるるは難しとすなるに、これは異文、異邦に愛重せられ、多くの困難あるにも拘らず、原形原文を添へて翻譯せられたる、文士が譽のかざりといふべし。後に馬琴の著作『雲の絶間』また爲永の『いろは文庫』が米國にて翻譯せられたりとは聞けど、さきがけて彼の國人にもてはやされし柳亭の光榮は、まことに我が邦文壇の一美談といふべし。

因にまるす英譯の『浮世形』は明治二年に松園なにがしが極めて粗く筋のみを英文にうつしたるにて、漢譯と比べて云ふべきものにはあらざるなり。

### 漢譯『浮世形六枚屏風』

曩に愛庭堂村翁、柳亭種彦が草双紙『浮世形六枚屏風』の英譯並に蘭譯の二書を予にも一覽せしめられたるが、蘭譯は予もさより解し得ず、たま／＼傍に友人中堀氏ありて、予が爲に解讀せられしかば、その大略を窺ひ得たりき此書につき、いかに面白く覺えたるは其の序文なり、これを見れば譯者の苦心、出版の方法など一々當時の有様の思ひやられて興味頗る深ければ其の大意を摘み、所々に註をも挿みつ。

撰者 識

『浮世形六枚屏風』譯名を "Vandeschirme," といふ、氏の蘭譯の成りしは、千八百四十年今去る前にして弘化四年即ち原著者種彦が、なり。澳大利の首府維也納なる帝室及び政府の所轄にかゝれる印刷所歿年、天保十三年より五年後なり。にて出版せる由を記せり、譯者はドクトル、アウグスト、フイッツマイエルなり。中堀氏は曰く、予未だ蘭書を繙きしことなければ、此の書が蘭書なりや否を明言しがたきも、文法は獨逸語とほぼ同じ、聊かの相違は文字と語尾とにあり、其の出版所の澳都維也納なるに殊に譯者が政府の保護を受けて翻譯に従事せし趣あるとによりて按ずれば、此の譯本は澳大利語なるべしと。果たして然らんには譯者も亦澳國人なるべけれど、今之れを知るに由なし。今より四十七年の昔は、我が國法阿蘭陀人を除きては一切他國人の入るを許さず、さればフイッツマイエル氏は澳國人にてありながら國禁に觸れんことを恐れて殊更に蘭人と稱して我が邦へ入込みしか、又其の人の譯なるゆゑ澳語なるをも蘭語の譯と誤り傳へたるか。さるにても氏が我が邦へ入込みしは何の目的ありてか、布教の爲めなりしか、成は政治上の目的なりしか、是れまた知るに由なし。然れども氏は我が草双紙を翻譯する迄に我邦の言語、人情、風俗を研究したるを見れば、我邦に久しく滯留せ

し人なるべし。疑ふらくは宗教家なるべし、兎に角氏の出所、渡來の目約等を穿鑿せば多少歴史上に補益あらん。

それはさておき、此の譯本の舛裁は、縦八寸に横五寸ばかりなる茶褐色厚紙張の表装にして、獨逸製本と其の類を同じうす。原本草双紙のまき寫と翻譯との二卷より成れり。右より巻を開けば摸擬の原本を見るべく、左より繙けば翻譯を見るべし、斯くして左右より中央に至りて終はる、此の書の純燃たる洋装と異なる點は、ページによらず枚を用ひしとなり、詳しくいへば洋書の例なる紙の表裏に印刷せずして、特に薄き紙質を撰びて其の表のみに印刷し、二ツに折り、全く日本流の紙の用ひ方に従へり。されば譯者は製本の時に當たり、縦なる紙の縁を職工が切斷せんことを恐れて、開卷の所に「紙の縁斷つべからず」と殊更に注意を與へたるなど用意周到也。また巻頭に「日本の名作集第一編」と記したるを見れば、尙數部を翻譯せん計畫ありしと見えたり。かかれは澳國になほ他の翻譯あるべきか、或は計畫のみにて繼續せられざりしか、それは疑問に屬す。原本にある「畫はことごとくまき寫として、墨色、製本、紙の質までも成べく日本固有のものに似せんと努めたり」といへる、譯者の苦心、其の深切感ずるに餘りあり。

譯者の序文

曩に日本の傳奇を翻譯して公にすべき約ありしが、爰に意外にも延引したる理由は、譯者兼出版者の事業が頗る困難なると、成るべく完全に翻譯せんとして訂正に多くの日子を費やしたるとに



連続の長句と思はれしも無理にはあらず。

此の傳奇の題を説明せんは、そも Wanderschirme と號けたるは、西班牙語の Wand をひなぞ合せたる義に取れり、Wand は障壁の義、支那語にては Ping-tung また日本語にては Bomboo (屏風)といふ。日本の諺に「人と屏風は直ぐには立たぬ」といへり、即ち此の屏風は屈曲せざれば立つこと能はざるが如く、人間の性格もまた生まれながら真直に保つ能はずといふとなるを、著者は此の諺は宜しからずとて『浮世形六枚屏風』を著し、人間は實際真直に立たざるべからずといふ意を寫したるに似たり。然れども題にある屏風といふことが、實際は作中に何等の關係をも有せず、また六といふ數に就ても何の意味あることなし。口繪に六人の姿畫はあれど、之れにも或關係のあるにはあらず、然るに原作の紙數をば六分して、其の一分なる紙數五枚を屏風の一折と見做し、都合三十枚を屏風の六折、即ち六枚屏風に譬へたるなり、但し譯書にては活字の都合にて紙數増したれば此の比例の如くならず。

かくいへるは譯者が種彦の序文を見て、直ちに之れを西洋の Preface の如く解したる誤りなり、そも草双紙の序文なごは一種の戯文にて必しも著者が其の作の主意を明示するにあらざり、之れを眞面目に受けて勿體を附けたる譯者の熱心はさるることながら、むしろ不當價といはざるを得ず。もさより其の序文に多少の意味あるべし、されど左の一文を意味せばむしろ口繪の戯文と見るべし、かゝるご其の國の事情に明ならぬ翻譯家にいくらもあるべし、深く咎むるに足らず。

此書に無物は、まづ第一に敵役、異人妖術怪談、狐狼ひきがへる、家の系圖や寶物、紛失すべ

き物もない、親子兄弟名のりあふ、印籠かんどし割髪搔、神や佛の夢じらせ、腹切身替ぬき刀、血を見ることがすこしもない、人と屏風は直にはたぬと、下世話をわらくこゝろえて、曲はいよ／＼立にくい、浮世新形六枚屏風、かゝるはかなき繪双紙も、意見のはし書あらしを、一寸つまんで記すになん

文政 庚辰秋七月稿成 辛巳春正月發版

柳 亭 種 彦

原書は木板なれども、此の木板は日本の外にて得られざれば、譯書には博識なる局長 Aloys Auer 氏の工風により、印刷局にて頗る短時間に此の出版を成就したるが、是れ日本模擬出版の世界に於ける最先と信ず、なほ此の出版事業を擴張すべき計畫あり。

譯者はまた所々に註解を施せり、例へば「鎌倉とは江戸灣の西、即ち江戸海峽を形成せる所をいひ、また難波とは海に沿ひて大坂の南にあり、有名なる大和川の近傍なり」などの如きは地理を調べんとする讀者の資となす。云々。序文の大意斯の如し。

さて英譯本は明治二年日本にて再版したるものにて英譯の原本にはあらず、原本は知らねど之れによりて見れば『六枚屏風』の稍、密なる梗概ともいふべく、前の漢譯の精細緻密なる翻譯に比すべきものにあらず。按ずるにこは漢譯を本として再び英語に譯したるものにて、日本の原本より

直に英譯したるにはあらざるべし、蓋し偶然にもせよ、種彦がさまでの名作とも聞こざる『浮世形六枚屏風』に限り、二國にて翻譯せられし理由覺束なければなり。

英譯『雲妙間雨夜月』

右は馬琴の作にて文化四年の出版、書工は歌川豊國(?)五冊一編の稗史なり。此の書は千八百八十六年我より十年前、英譯せられたり、"A Captive of Love" 意譯すれば『戀の奴』と號けたり。譯者は米國人にて名は Edward Greey なり。氏は "The Golden Lotus" 『黄金の蓮華』 "The Young American in Japan" 『日本に於ける亞米利加之少年』 "The Wonderful City of Tokio." 『東京市の壯觀』及び "The Bear worshippers of Yezo" 『蝦夷人の熊祭』等の著者、又日本傳奇の翻譯家として名ありといふ。現に氏の譯にかゝれる "Loyal Ronins" は爲永春水の『いろは文庫』を譯したるものなりといふ。

『雲妙間雨夜月』の翻譯は凡三百ページの大幅にして五冊物の翻譯としては頗る詳密なり。これにも原本の挿書を縮めて石版に附し、二十六ヶ所に挿入したるなど用意をさく行届きて体裁もまた甚だ美麗といふべし、然れども之れを種彦が澳譯に比すれば、時代の前後は日本の事情を審にするに拘らず、遙に前者の勝れるを知るべく、翻譯の巧拙にはあらずいよ澳譯の價值と譯者の刻苦とを窺ふに足る。

『雲妙間雨夜月』の緒言の大意にはく『いろ文庫』を譯して大に世間の喝采を博したれば今また馬琴の作を紹介せんとす。馬琴の作は荒唐無稽の傳奇小説にして著者はまは自家一流の文牀を有す、殊に書中説明の多きは 例へば雷獸の講釋などいふ 外國人を相手に著したる作かと思はるゝほど詳密に過ぎたり。譯者は是等の特質をも成るべく傳へんと努めたり。

馬琴は日本小説家中の餘々たるものにして頗る多作を以て聞こゆ、多くは歴史上の事實を敷衍し、名聲天下に布けりとなん。

予が『雲妙間雨夜月』即ち "The Moon, Shinning through a Cloud-rift, and a Rainy Night" を撰びたるは、今より五百年の昔に遡りて、日本人の思想、及び彼等の組織を知らんには之れに過ぐる好材なしと思へばなり、また書中には吾人の祖先にも珍らしからざる謬信の行はれたるを記したれば、一層興味を増すべし、かたゞ此の書を探りて譯するに至りぬ。

Saiki (西啓) 及び Hachisuba (蓮葉) の戀に關しては、馬琴は日本人が有する佛敎的觀念を表し、其をして明に全編に透徹するが如くまぐみたり。所謂勸懲主義を指せるなるべし

予が此の愉快なる事業を助成せられたる人々許多あり、日本領事高橋君は自國に於ける古代の風俗習慣に精通せられたれば予にとりて最大の便益を與へられたり、また参考書に就ては當時ニウヨオクに住はるゝ日本紳士に質し、就中佐野レン藏氏の如きは予が此の事業を賛し、少からざる助力を貸されたり。予は是等の諸氏に深く其の好意を謝す。

### 爲永春水

列 偉 小 説 史

人情本の元祖と打て出で、四方八方より攻撃の矢叫びにも避易せず、讀者の多數を今もなほ占めて、世間に珍重がらるゝことは、繖刻の『梅曆』が、圖書館にては特別保護の下に取扱はるゝにても知るべし。かゝる稀有の名譽を博したる小説家爲永春水は、實名を越前屋長次郎といひ、もとは書買を營業とせり。本姓は佐々木名は貞高、隻眼なるをもて人綽號して眼長と呼びしとぞ。(『作者部類』)春水まば／＼居を移し、はじめは橋町、或は通油町、又辨慶橋に住し、牛島に移りぬ。下谷池の端に住へりし時は蓮池庵の號あり、また淺草寺内に在りし頃は、金龍山人と呼びぬ、中頃糶書となり、程なく廢業して講談師と化け、爲永正輔といへり。著書次第に行はるゝに至りて、舌耕の業を廢し専ら戯作に従事したりとぞ。

『作者部類』にいふ、文政の初の頃より、合巻の草双紙を作りて、諸所の本屋より賣り廣めしかども、一もあたり作なかりしと。按ずるに春水が初筆は文政五年頃にて『八百や萬神樂の太鼓』、『小糸佐七紫のゆかり』等なるべし。合巻の草双紙およそ二十部もあれど、取りあげていふ程のも

江 戸 作 者

のなし。當時は京傳既に故人となり、三馬も文政五年にみまかり、作者の空位はあるに似たれども、馬琴全盛を極めて、一九未だ老いず、種彦は日の出の勢ひにて、合巻は手もの其の他群小作家星羅して殆ど彼れを容るゝに餘地なく、此の時長二郎なる本屋が、片手間仕事に草双紙を著はしたればとて、到底讀者の一顧に値せざるは當然のことなるべし。春水が見事に失敗したるは、ひとり其の作の拙きのみにはあらざるべし。

春水がはじめ戯作に従事するや、式亭三馬の門人となりて三鷺と號しき、されど式亭門人には馬笑、三友、三孝などありてこゝにては頭を擡ぐる能はざるを察し、振鷺亭が名を嗣ぎて、二世振鷺亭と看板を掲げしも一向に流行らざれば、又當時楚滿人のみまかりしを、春水は其の女に乞ひて、戯號を冒し、二代目南仙笑楚滿人と呼びしが、其の新作の稗史、世評なかりしかば、板元並に貸本屋が楚滿人と云名はふさはしからずといふに依り、又春水と改めたり(『作者部類』)南仙笑楚滿人の名は、文政中の稗史にまば／＼見かくる事なるが、其の名を改めたるは文政十一年なりといふ。

『春色辰巳園』卷の十に、

金龍山下に偶居して金龍山人と號し草庵さいへばまだ風雅めげど風流なることすこしもなし九尺二間の寮所を借宅して狂訓亭と自稱するは拙作の主意勸善の教訓他に異なり趣向文章前後して筆に狂ひの多ければ教さいふ字を狂さし響をきやうさよまするもおのれをいましむ享號なり一に爲永春水まば四澤に滿る御ひいきを願ふて替たる戯作の魯智以前楚滿人と呼ばれし時



は多く門人に筆をさらして自作の草紙まれば功拙さにも本意にあらず梅ごよみより已來は實に予が手に綴りしものなり  
そのこまほりを改名と共に四方の御ひいきさま方へ告ていよく御願を偏に願ふことになん

東都戯作者

金龍山人 狂訓亭爲永春水

といへり。其弟子に作らせたりといふものは多く稗史なるべし。式亭三馬が『阿古義物語』の後編、山東京傳が『梅花水裂』の後編『梅花春水』、『七國士傳』、『好文士傳』等數部あれども、みな先輩の唾液を舐めて、松亭金水或は小枝繁等と合作なり。『作者部類』は其の非を鳴らしていふ、

馬琴が舊作のよみ本の、火に係りて全部せざるものを板元より買取り、恣に補綴して畫を易て新板の如くになして鬻きしは、此男の所爲なり、當世物がたり三國一夜物語、化鏡、いし三つ鏡等此餘なほあらん、

と馬琴が剽竊をいひ立にして他の作者を貶したるは久しき例なれども、春水ほどまた大膽なる剽竊家なく、また虚名家も稀なるべし。曾て竹のや主人『出版月評』に、『春色梅ごよみ』を評して、其の人物をもあげつらはれしが、春水弟子に代作させし事にいひ及び、

此人は門人友人の助筆多し既に此の一人の傑作と聞へし『いろは文庫』は二世爲永春水（繪入新聞の記者たりし染崎延房氏）の代作なり又爲永春江翁の助筆も少からず是れ誣言ならず其の證據は當人の自白あり『八幡鐘四編の序』に「上畧東の春雨を著して以來更に門人友人の筆を借らす拙しと雖も自作愛玩せられ云々」とあり誰か自作を自作と取分けて吹聴するものあらんや斯く自序したる其筆已に御手傳あり其紙尾に狂文亭爲永春水補一文舎爲永柳水校と記せしは異なるもの也、

と前は稗史の代作を白狀し、これは晩年中本の代作を白狀するものにて、眞に春水が自作といふは僅に數篇のみなるべし。春水『梅ごよみ』出てより、讀書社會は其の熱に浮かれて、人情本の

大流行を來すに至りぬ。蓋し春水が俗に投じたる秘訣は、目前にあるらしき情事、また實際ありし事件などを際どく綴りなして、讀者をして己れ作中の人物たらんことを羨望せしめ、其の情念を奪ふにありき。而して春水自身も、

平生通人がりし爲め家業の本屋を潰して後には幫間藝者又は清元の師匠など、交はり香以の父の津藤といふ賣名通客に最負にせられ之が爲め其著述を遊び場所へ盛に擴むるに至れり津藤は巻中に出る通客藤兵衛なり堀の延津賀櫻川由次郎など皆其まゝに巻中の人となりて相悦ぶ其の賣方察すべし……著者は専ら情界の老仙なりと見せかけ辨慶橋のほりに住みし頃には妻も下婢もつかぬ色よき婦人俗に云ふ苦勞人を多く家に置き色のつれの捌き役其身も仇々しき出立して俗を驚かすこと多かりしとぞ（竹のや主人『梅ごよみ』の評）

かくして春水は躰よく賣名の小説家となり果せたり。まことに不幸の男といはざるべからず。さて天保三年に『梅ごよみ』を書きはじめしより、春水は乗地になり、翌年『辰巳園』を出し、『籬の梅』『春告鳥』『英對暖語』等數十編の人情本は、自作と代作との否とを問はず、年々出で、讀書社會の相場をくるはせ、自ら大得意となりて、人情翁、また人情本の元祖と頼りに吹き立つるうちに、天保十三年水野越前守といふ極端の改革家出で、嚴重に風俗の取締りをなし、かば、遂に春水は公儀の御咎を蒙るに至りぬ、すなはち其の時の申渡は左の如し

神田多町一丁目五郎兵衛店

爲永春水事

長次郎

其方儀繪本双紙の類風俗之爲に不相成猥々問敷事又は異説等書綴り候作出し候儀無用可致旨町觸相背き地本屋共方談候とて

人情本と唱候小冊物著作致右之内には婦女の勸善にも可相成さ心得違致不束之事ども書顯し刺へ遊女放蕩之跡を繪入に仕組遣し手問賃請取候段不埒に付手鎖申付る

春水はこれにていたく心を痛めしにや、同年七月十三日手鎖中に遂に歿しぬ、享年五十四、西本願寺地中妙傳寺に墓あり。『戯作者撰集』、『名人忌人録』種彦も此の年みまかりぬ。水野越前守が小説家に中りし爵のほどおもひやるべし。

春水が未だ人情本の元祖とならざりし以前にや、婦人の名にて戯作せしとありとて、『作者部類』に

圓屋賀久子

近頃此婦人の作れる中本多く出ると云、女筆にてかゝる戯作は珍らし、尙よく知る人になつて追て録すべし、後に此かく子の作の中本に赤繩結紙古蒲（前後二編共八卷、越前屋長二郎板）秋雨夜話（三編共九卷）を見しに疑ひあり、此二書は婦人の作也とおもはれぬ筆すさみなれば、是れ必爲永春水の作なるを、故意婦人の作なりといつたりたるものなるべし、當春春水が作の中本、世評宜しからずして貧本屋等が厭ふさかいへば、婦人の作にせば、看官の珍らしく思はんまてのわざなるべし、こは己が推量なれども大かたは違ふべからず、なほよく彼樂屋をさぐるべきになん

とあり、もとより馬琴の推量なれば當にならざれども、ざりとて春水の爲しかねまじき事柄なり。

たとへ此の事なくとも春水が名を賣るに急なりし事は毫も打消すには足らざるべし。撰者曰く、爲永春水の傳は本書を印刷に附する前に當り俄に起稿したるものなれば、其の著作を詳しく調ふる邊なく、江戸作者としては馬琴、一九等に對しいかなる地位を保つべき作家なるやを論ずる能はざりき。なほ次草の假名垣魯文に移つるの間、草双紙の作者にして紹介すへき人二三ありといへども、すべて今こゝに叙する邊なく他日に譲るこゝにないしたれば、

一言其のこゝほりを述べよ云爾。

假名垣魯文

（本文中一々翁の稱を用ひたるは原撰者の文のまゝなり）

假名垣魯文翁は本姓野崎氏、幼名を兼吉と云ひ後に庫七、又文藏と改め王政維新の際假名垣魯文を以て通稱とす、其の祖先は相模國高坐郡菰園村に住し世々農を以て業とす、魯文翁の祖父藤助の代に至り、故ありて本家より別れ東海國道の傍ら引地村に一家を構へ鎌鍛冶を職とす、男佐吉家督を繼ぎ父藤助、妻某を携へて文政初年江戸に來り京橋鎗屋町に住せしが藤助歿して後ち屢々火災に罹りて家漸く衰ふ、初め佐吉は魚屋を開業し店に小魚を並べて之を商ひ自分は半臺を擔ぎて得意先を賣り廻りしが後には窮して同町の裏屋に潜み所謂棒手振の魚屋となり辛うじて其日を送りしと云ふ、文政十二年正月六日夫婦の間に男兒を擧ぐ即ち魯文翁なり

父佐吉は少き頃より風流の心掛けあり相州に在りし時村内の若者を集めて俳諧發句の筵を開き自ら星窓槐葉と號して集句を選びなごせし事あり、其の自咏の句にも「野分野分案山子もへうさ放ちけり」「鬼灯の目にも涙や魂祭り」「川瀬の水音したり冬の月」等の感吟多かりしと云ふ又學ばずして山水或は人物を畫くに筆意固より畫法には適はざりしも素人繪として往々見るべきものありしとぞ、魯文翁も亦畫を學びし事なかりしが後年戯作者となりて草雙紙等の下畫を附くるに拙は拙ながら人物の態度稍や整ひ其間自から意匠の凡ならざるものありき是れ或は父の遺傳にはあらざる乎

後年文壇の一奇人として世に持て囃されし魯文翁も産れてのち五六年の間は亦通常の赤ン坊のみ

通常の子供のみ、天保七年即ち魯文八歳の時父佐吉は鎗屋町より具足町へ轉居せしが此年天下大飢饉、さらぬだに困窮なりし魯文の家は是が爲め益々窮して三度の食事さへ一度缺くこともありし程なり、魯文空腹に堪へざる時は竊かに四文錢一個を携へ行き今の太刀伊勢屋の前に出でし家臺店にてカラ鮮鱈の腹に豆腐の殻を詰めたるものを買食す、一日父佐吉之を見て大に怒り縱令三度の食は足らずども人間の子たるものが兎の餌を以て腹を肥やすは我家の耻なり若し此後ち買食ひを思ひ止まらざれば直ちに我家を放逐せんのみと、魯文は子供心にも此說一理ありとし終に復た鮮屋を顧みざりしと、是年魯文は父に就て實語教、童子教を學び又草紙に向ひて初めていろはの手習を爲し僅かに四十七字を習ひ得たる時山東京山作の「娘評判記」一冊を貰ひて讀むと數回、初めは毫も其意味を解せざりしが讀んで十回二十回に至りて漸く本文の大意を會得し母に向つて自ら其講釋を爲せりと云ふ(同年妹かよ産るされど魯文翁の傳記に必要な關係なければ委しくは記さず)

天保八年の春魯文は新橋竹川町の諸藩用達鳥羽屋多吉方に十年の年期にて丁稚奉公に住込み此年都路往來を半ばまで學びたれど後は見ず又毎夜店を鎖せし後は机に向ひて手習を爲したれど是すら掛々しくは上達せず唯此頃より最も好みて手を放さざりしは京傳、三馬、一九等の戯作本にて毎年正月七月の籤入にも他の丁稚子僧のごとく紙鷲、獨樂の遊びに耽らずして貰ひ溜めし小遣錢にて膝栗毛の初編二編と春秋の出版には缺かさず之を購ひ暇あるごとに通讀するをこよなき樂みとなせり、此鳥羽屋といふは姓を三村と呼び本家は世に十人衆と呼ばれし一人にて三十間堀五丁

目に住し鳥羽屋清左衛門といふ豪商なり、竹川町の鳥羽屋中店も身代豊かにして、數人の雇人を使ひ取引先も亦多かりしが斯かる大店の習慣として蠟燭の流れ、紙屑等は丁稚どもの所得となせしかば雇人は之を帆待と稱へ其錢を分配せらるゝ時は先を争ふて芝居觀物を見物し又は買食等に遣わ捨るごと子僧どもの常なるに魯文は之を以て必ず合巻物を求め毫も買食等には徒費せざりき去れば鳥羽屋の子僧中には魯文より年長けたるもありしが番頭手代は其子僧を誠むるにチト兼吉を見習へなど、言ひし事あり、斯くて居ると二三年の間に魯文は鳥羽屋の子僧中にて第一の藏書家となり又第一の博識となれり

或人の話しに當時丁稚中の奇兒と稱せられしもの三人ありて是を新橋の三子僧と云へり、其一は鳥羽屋の兼吉(魯文)にして自ら鳥羽給子僧と號し宛字まよりに高慢臭き俳諧文を綴り又折に觸れては發句などを詠み出るに中には誦するに足るものあり、其二は同町の質舗堺屋の丁稚某にして幼き頃より手跡を能くし俳諧の句に妙あり此人後年田川鳳朝の門に入り笠庵鳥吟と號せり、其三は同トく堺屋の子僧仙之助にして同人も亦董其昌流の書に巧みにして且屢々點取發句に手柄を顯はせし事あり此仙之助は後年釋吳服商となり金屋笠仙と呼びて現に淺草新福富町に住せり、銀座役人某深く此の三子僧を愛し自ら髮結錢を抛ち三人の前髪を剃落させて古風なる撥琴奴となし且數月間其髮結錢を貰きしと云ふ去れば三子僧は才に於て既に奇なるのみならず形に於ても亦此奇ありて、往々他の惡太郎等を凌ぐの權力を有せしと云

其頃香以山人といふ一畸人あり山城町の酒舖津國屋の男にして幼名子之助後ち藤次郎と改め大に狹斜の地に豪遊を試み山城河岸の津藤と云へば誰知らぬ者もなく其の金錢を湯水のごとく遣ひ捨るを見て世の人綽名して今紀文と呼べり、父藤兵衛は天保十二年の頃魯文の主人なる三村多吉

(鳥羽屋中店)の姉すみを娶りて後妻とせしが香以はまた子之助と呼びて部屋住なりし頃より遊廓に立入りて多くの負債を生ぜしかば、父藤兵衛大に憤はり終に子之助を繼母の里方なる鳥羽屋に預けて我家の出入を禁じたりき、子之助は斯く勘當せられて親類預けとなりしにも拘はらず猶ほ人目を忍びて屢々吉原に遊ぶことあり又當時の文人等に交はりて多くの金銀を與ふることもありしかば戯作者、俳諧師、狂歌師若くは幫間等の日毎に鳥羽屋に訪ひ來りて世辭を並べ追従を言ふ者引きも切らず魯文も其取次にいで、俳諧師等の顔をも見知り彼等よりも兼吉どん／＼と呼ばるるやうになりぬ、是より先魯文は京傳、三馬、一九等の名高きを羨み其の著書を読むにつけて我も亦た戯作者となりて名を後世に傳へんと志望を抱き其手初めにどて町内に點取發句の催しある毎に出吟して高點を争ひし程なれば今斯く戯作者、俳諧師等の出入するを見てまたと得難き好機會なりとし先づ俳諧師涼窓露菫に就て俳句を學び又香以の紹介にて三世千種庵諸持元淺草の里長勝田權左衛門に弟子入して狂歌を詠習ひしも固より主人の目を忍び使先の隙を偷みて通學せし事なれば唯心の焦つのみにて其蘊奥を極むるに至らず、香以は最初より此事を知りたれば深く魯文の變り者なるを愛して時には藏書の二三を分ち又俳諧の道などを口授する事ありき

其頃最可咲しき一話あり鳥羽屋の隠居某といふ者折々土藏の三階に上り新しき小葛籠の蓋を開きて餘念なく其中を眺め居りし事ありて誰も之に心附かざりしが或日魯文が土藏の三階へ登りし時隠居はあはて惑ひて葛籠の蓋を蔽ひ匆々並を立去りぬ、魯文は此の事を當時同家に發居中なる香以山人に告げたるに香以は暫く考へて横手を打ち隠居は新吹の金貨が大好きな

れば是れ必ず新吹の黄金を其葛籠に入れ折々員數を算へて樂み居るものならん云いて意にも留めずして打過せしに間もなく隠居は物故せり、香以は部屋住の身さて金銀の自由にならざりし折柄なれば一日魯文を小影に指し兼吉貴様に相談があるが日外話した三階にある叔父の小葛籠を竊かに取出しては呉れまひかとの頼みに魯文は頭を掻き且那は御存じなき物にもせよ無断で持出すは宜しかるまゝと辭みしを香以は打消し叔父の物は甥の物なり萬一間違ふた處で辨償さへすればよいでは無いかと云はれ魯文も葛籠の中には何程の金があるかは知られぬ縦令千兩二千兩あるにもせよ子之さま(香以)の實家で辨償するは容易の事なりと思ひしかば直ちに葛籠を持出すを承引し、併し貴耶の御部屋で葛籠を開かば忽ち人に告められん此儀は如何致さんか問ひたるに香以は夫ならば沙止の山崎へまで持出し呉れよとて萬事を謀し合せ魯文は奥土藏より彼の小葛籠を背負ひ出して山崎に至り子之さま餘程重いから澤山這入つて居ませうと二人も笑を含めて其蓋を開きしに重きも理り中なるは金銀貨に非ずして板おろしの香畫が葛籠一杯に秘めありしなり偕は隠居が樂しげに見て居たるは此春畫でありしかと二人も呆れて顔を見合せ居りしが魯文取敢ず「昔し／＼あつた土佐繪の笑ひ本話の種に残るをかしさ」と吟さみしかば香以も「化物が出ることも知らずしよひ出せし重ひ葛籠は慾の張り抜」と一首のされ歌を咏し其葛籠は故の如く土藏の三階へ納め置きしと云ふ

此時より香以は魯文を愛すること益々深く同人が鳥羽屋を忍び出で、足を遊里に運ぶ時には必ず魯文を伴に連れ途中より家に歸りて斯く答ふべしなど言合めて魯文ひとりを歸す事もあり又或時魯文十四五歳の時とも云へり魯文は「朝顔や水入竹の水を揚げ」といふ句を詠せしに香以はいたく之を賞して香雨亭應一の號を授けし事あり、是より後ち魯文は米羅坊守一に就て江戸座風の俳句を學び幾程もなく俳道大に上達せり

天保十四年魯文は露周、守一、香以等の勸めに由り當時の狂言作者にして傍ら戯作を業とする花笠魯介の門に入りて戯號を和堂珍海と號し初めて一編の戯文を綴りて師の添削を乞ひ、又

十五歳の時初めて戯文を作りて

砂はらに蚯蚓のたぐる暑さかな

和堂珍海

の句あり(魯介は本姓東條、文京又は李園と號し有名の儒士東條琴臺の兄なり天保年間『役者必讀妙々痴談』といへる書を著はして大に劇場社會を騒がせし事は人の知る所なれば茲に贅せず、當時魯介は淺草茅町二丁目に住せり)其翌年弘化元年和堂珍海を改めて英魯文と號し同年『政談青砥碑』と題せし讀切の草雙紙を著せり是れ魯文の戯作が上梓して世に出でたる初めなり

魯文と號せしは師の名なる魯介の魯と文京の文とを併せ用ひしものなり又英と名乗りしは花笠といふに因みしものなるべし、其頃尾張町に住して漢書の教授を爲し居りし奥川樂水といふ人魯文の戯號を見、五雜俎の故事を取りて能くも名けしものかなと大に感賞す、時に魯文は年十六いまだ五雜俎を讀まず樂水に就て其故事を問はんも面目なければ急て五雜俎を借り來りて所謂は下り讀に通讀せしに昔し周の世宋國の女仲子生れて其掌中に魯の一字あり古文に魯の古篆、此の如し是に依て此女後に魯國惠公の夫人となれり云々の一節を見出して大に喜び人に我が戯號を告ぐる時には必ず五雜俎の故事を引證として語りしかば漢書などは覗きし事もなき當年の戯作者等は竊かに魯文が見聞の廣きに舌を捲きて驚きしと云ふ

嘉永元年魯文は戯號の披露を爲さんとて主人には隠れて諸方を奔走し曲亭馬琴其他の戯作者、狂言作者等に祝ひの狂歌俳句等を乞受け之を櫻木に鑲めて黄表紙めきたる綴本に製し知己の人に配らんとせしに父佐吉は此年重き病に臥したれば急に山王町今日の吉町の裏屋に移轉し妹かよ、弟作太郎をして病父に侍づかしめ魯文も鳥羽屋より通ひて其看護を爲す等片時の暇を得ず其内病ひ愈々篤く終に佐吉は同年九月黄泉の客となりたれば其葬式法會等に多くもあらぬ貯へを遣ひ果して赤貧洗ふが如く是が爲め摺物の版木さへあはや其儘腐果てんかと思ひしに翌年友人の助けを得て僅かに百部ばかりを印刷し之を知己の人々に頒布して漸く素志を全ふせり、其摺本は『名聞面赤本』と題し表紙には溪齋英泉が鉢かつぎと桃太郎の圖を描き都て黄表紙の躰裁に倣ひしものにて其本文は左の如し(此摺物中に名を著せし曲亭馬琴は其前年即ち嘉永元年已に物故せしものと知るべし)

夫子童謡をすてず。痲固巷説をさる。夫れから思ひ机に寄り。下手の畫きし丸ならで。天窓かく山濛くり。神史を戯作の手習ひ初めに。筆架の初登山にのぼり。難波津の梅の花笠大人に寺入して。先づ讀習ふ實語教。人賞めたるが故にたん書かず。京傳翁が秀句を思ひ。兼て書抜く故事來歴。神釋無常口説の文句。彼の丸本を六齋三畧。たしなき智恵を絞りても。くくり枕は碎くによしなく。何でも四文の切抜文作。まだ口嚙も黄表紙の。筋と畫組は生捕るも。芝居知らずの野暮驚。詠りも多き作者よりは。おこがま識者の笑さなり。昔々あつた土佐繪の古風を慕ひ。金平本を初めとして。世に流れたる桃太郎。人並に毛が三本たらぬ猿蟹合戦。舌切雀の舌たるき。作意ながらも板元から。お宿はごんややお尋れありて。一番詠へたまひなげ。月の兔の手柄にて。夫れこそ枯木に花咲爺イ。鯛の味喰すのなまぐさ鍋。四方のあかの他人さも爲したまはず。其評判を待兼ね山の郭公。何ぞ童蒙衆合點か。ひたすら願ふ商ひ口。こまじ戯作に仲間入して。古き作者と諸共に同下く肩を並べんさは大木の切口ふさい根下やふてら。い

嘉永二己酉春

赤本の口調に倣いて

英魯文

○門人魯文なるもの嘗て別號して和堂珍海さよび數種の稗史を編めり  
通用のよきこそ人の寶なれ錢さいはずに筆を取るべし

春雨に今宵夜と共はなさばや  
双六やあがりは京の仲間入り  
初午や寺さもたちの幼なごし  
精出せと清書見せたり花の兄  
別入ればいよく深く迷ふかな道ある花の山を尋れて  
説わくる高座は鼻の高みくら耳をつらぬくきみが雷名  
繪草紙に花ある梅の作者さはそのみもさこそ粹な營み

魯文をさなかりし時草雙紙の終りの圖の机にかりし作者の眞似して遊びたりしに今また

砂文字や野良を土筆の筆始め

善惡をかき別けて菊の根分哉  
我田へも一畝入れよ作をまこ  
田作や春のはじめの祝ひもの

當春も予共同意の作あり

駈ぬけて廻りくらせん花の山

さはいふもの、お前ではなしさいふ前句に

世の中は三日見ぬ間の作者哉

花笠文京  
立亭京樂  
星亭京兆  
玩玉亭京英  
柳川重信  
葵岡北溪  
一龍齋小文車  
梅園主人

星窓梶葉  
夏堂守一  
櫻田左交  
並木五瓶  
藤本斗文  
西澤一鳳軒

誰筆ぞ空に聲ありいかのぼり

紀の海音さいふ名家もあれば未たのものし

珍らしく海に音ある漁りに魚の趣向のたればつきま

美人をあがなふな手活の花さいへごも花笠先生の門人を取立るは花の苗を  
植うるが如し

自から振ある枝を挽めては花のうつはに挿すぞ楽しき

作さいひ役者さいへば離れぬ中なり

黄鳥やわけて親しきうめの宿

強者と呼ばれん迄は夜の目寐ぬ作者も武者の心なるべし  
鶯にまづ賞めさせん作り枝もめだつ若木の梅がかな文

廣がれる蕭りや梅のつくり枝  
兩の手に桃ささくらを持そへて花の大枝さけるかた腕

聞ずして道はふるさも共々に筆持そへよ文字を教へ子  
ふみ習ふ春よさく者の三番叟

芳しく其名は四方に蕭れかしさくさいふのも花の阿兄  
うちは四角そさを丸く世の中を通用のよき人は此人

櫻咲く山路をゆかば教へなん登るもはやき花のちか道  
おもしろき作の趣向のたれ本もいまに筆柄にぎる此人

手入してやがて美事に咲せなん作りおぼえし梅の花笠

河竹新七

鶴屋南北

平亭銀鷄

八代目三升

六采園

星屋春兄

涼窓露蘭

一筆庵英泉

松亭金水

万亭應賀

式亭小三馬

十返舎一九

立川焉馬

朝櫻樓國芳

墨川亭雪麿

幾人も欲さふ梅のさくをさこ  
墨附があるで一村つくりさり

玉に疵あるほりものゝ灸

赤本の赤きは虚の常なれど面白くこそつかまほしけれ  
腕たけの力たのもしさくをさこ

種蒔て人の田地もつくりさりうまい趣向の作の出来秋  
名を更へて門札まろし梅の庵

月花はおのが手にある作者哉  
まだ生て居るかさ人に言れても斯こそ長かれ筆の命毛

師と頼む人の教をちからあしふみ見る毎に恩を忘るな  
飼たてゝ羽づくろひする鶯の笠にきるなり梅のはな笠

花笠先生の社中管文字にまめす

みそ揚て作り上手に成た頃は世に能なれし甘口ぞよき  
僕がつきはきする狂文のはさみ仕事にふる着の趣向を洗ひ張して戯作者の

手前符牒をつけんさて

赤本の桃ならなくにわれは又洗濯ものゝ名や流すらん

寶田千町  
文亭綾次  
爲永春水  
笠原仙果  
五柳亭徳升  
綠亭川柳  
柳下亭種員  
豊介子  
爲一百翁  
山東京山  
香蝶櫻豊國  
曲亭馬琴

英魯文  
(未完)

魯文は馬琴翁に面會すると二回、京山翁に逢ふと三四回なりしが當時馬琴は兩眼已に明を失ひ唯だ音聲を聞きて其人の誰たるやを知るに止まれり、魯文初めて師文京と共に馬琴翁を訪ひし時馬琴は戯作者となるの不心得を懇々魯文に諭せりと云ふ、諸是よりのち魯文は入湯の歸路近傍瀧山町に住せる習字指南佐々木龍藏に就き謝儀二百文を投じて四書五經を素讀せり戯作者になるは四角な文字も讀めねばならぬと云ふ考へなりしなるべし又花笠魯介に面會したしと思ふ時は主家の留主守安兵衛といへる者が茅町の近傍に家を構へしを幸ひ同家を借りて雙方より出會ひ以て師弟談話の席となせしに安兵衛夫婦は魯文の訪ひ來るごと鰻飯一碗づゝを馳走せりと云ふ、魯文は心ひそかに京傳、三馬の筆の跡を慕ひ我も亦社會の有様を其裏面より寫して人情の精を穿ち滑稽の中に自から諷諫の意を寫せしものを作らんと心掛けしが夫には我れ先づ身を著述の材料となし花街に遊びて泥水の底をあさり其真情を探るこそ肝要ならめと思ひ定め茲に遊蕩の端緒を開きて品川驛なる俗に阪の五寸と呼べる妓樓に足を運び又或る時は近邊の常磐津、清元の誓古所に這入り金春新道の藝妓の門を訪づれなどして是が爲め遣繰の金を遣ふと一方ならず果は番頭手代の目にかゝりて異見を加へらるゝも屢なりき是れ魯文が廿一二歳の頃なりとぞ、主人多吉は魯文が戯作三昧に耽ることを疾より知り居たれど深く咎むべきに非ずとて其儘に打捨て置きしに今又遊興に身を持崩すを見て竊かに眉を蹙め斯くては店の取締にもならざればとて一日魯文を膝元に招きて太く此頃の不行跡を責めまた年期には満たざれど斯くなる上は暇を出すより外なし能く考へよと

説諭せり、主人はかく威し置かば必ず番頭手代を以て詫入るなるべし素より憎からぬ兼吉の事なれば其時は人々の謝罪を聞入れて故の如く召使はんと慈悲心より出でし策畧なりしに魯文は既に暇を出されしものと思ひ取りしかば罪を謝せんともせず又心中にては最早や戯作者と成すませし了簡なれば何時までも商家の雇人たらんよりは筆一本にて浮世を渡ること氣樂ならめと立所に決心し謹しんで主人に御請して住馴れし鳥羽屋の家を飛出しぬ、借血氣にまかせて主家を飛出しては見たれど其頃父佐吉は既に此世の人にあらず弟佐太郎妹かよは夫々奉公に出だし山王町の家さへ疊みし後の事なれば差當り身を寄すべき處なきに苦しみしが其頃木挽町の劇場河原崎座が猿若町へ移轉せし跡へ新築したる二三のグレ宿今云ふ安泊りありしを幸ひ松川屋といふ家に泊り込み素麵箱を机とし矢立の筆を染めて草雙紙の草稿を作ては見たれど魯文の名未だ世に知られざれば之を書林に持廻りしも誰とて買んといふ人なく素より注文の來べき筈も無ければ大戯作者も此に至て進退維れ谷まり僅かに重ねたる衣服を賣りて一日々々と過しけり、此グレ宿といふは多く無宿者などの立入る處なりしに或夜盜賊詮議の爲めとて岡引目今の探偵どやどやと松川屋に闖入しあかしの如き者に拘引して嚴しく身分を問糺されたり、魯文は來り此奴胡亂の者なりとて魯文を木挽町の自身番に拘引して嚴しく身分を問糺されたり、魯文はぬからぬ顔にて我は戯作者なりと答へしに岡引は猶ほ信用せず戯作者ならば家もあるべき筈なるにグレ宿に泊り込みしこと合點行かず夫とも何ぞ證據ありやと詰られければ魯文苦しまされに

仲間には入らぬ縁の林そまいまだ閉出しの草本作者

英 魯 文

と書きて示せしに此岡引の中に「面赤本」の配り物を見たる人ありしにヤム、花笠の門人かと云其儘に放免せられぬ、魯文は是に懲り長くグレ宿に居るは面倒なりと思ひしかば其夜自身番より直ちに立出して相洲菰園村なる本家野崎方に赴き身の不幸を語りて世話を頼みしに百姓となりて我家の業を助け呉るゝ了簡ならば何時までも世話をすべし又奉公が望みとならば南須賀村長樂寺眞言の住持方へ遣はすべしと答へぬ、魯文思ふやう鋤鎌を握りて一生朽果つると我望みに非ず夫よりは長樂寺に赴かば住持に就て學問を爲すの便りありて我身に得る所少からざるべし思案を定め本家の世話にて翌日長樂寺に弟子入を爲し頭を圓めて日々經よむ事を習ひ居しが是さへ好む所ならぬば後には經机に向ひて阿房墮落經の文句などを作る事に身を入れければ半年に満たざる中に住持の爲めに退出され又もや江戸にさまよひ出でけり、夫より葭町の慶庵奉公人に就て奉公の世話を頼み頭髪の五六分延びかゝりたる儘にて通り油町の書肆藤岡屋慶次郎方の店番となりしが好む道とて賣物の合巻物を片端より繕きて餘念なく讀入り客の店頭に來りて値を聞くとあるも掛々しくは返答せず折には並べたる小本などを盗まるゝとあるも一向之に心付かず店番の職掌はいつも怠りがちなればアレでは困るとの主人の小言さへ折々は鼓膜に響きぬ、或時の事とか豫て知己なる柳下亭種員が草稿を携へて藤岡屋に來り主人と店先にて談話の折柄フト魯文を見てイヤ先生茲に居るかど聲掛けられ魯文は急に我身耻かしくなり其儘裏口より逃出して再び藤岡屋に歸らず、其夜は或る旅人宿に一泊せしに同宿せし武藏屋良助と云ふ者魯文に向ひ見受ける處にてはあ



前も定まる職業もなき容子なるがナント私と一所に故郷なる上總の新堀（今の市原郡西村）へ行て見なさらぬか田舎の事とて氣樂に暮される道も有うかと勸められ別に活計の考へもなき折柄とて魯文は二も二もなく承諾し翌日大雨を冒して良介と共に旅立せしに良助は一文無し魯文は僅かに二三十文の小遣を所持せしばかりなれば駕籠に乗るともならず二人濡鼠の如くなりて漸く新堀に辿り着きしに良助の家は昔しは豪農なりしも今は零落して家財何一つなく燻ぶりし大きな家に老母ひとり淋しげに留守を爲し居りし始末なれば是では一日も此家に厄介には成り難しと魯文大に失望せしを良助は早くも見て取りナニ心配するには及ばぬ私の妹婿で長我部（カキカ）の幸藏といふは處で名を得たる博徒の親分株なれば是に頼んでお前の身の振方を附けて遣ふとて其日魯文を幸藏に紹介せり、幸藏は魯文の顔をつくく見て商家で育つた人にしては人品あり丁度好い使ひ所があるとして獨り笑を含みたる牀に魯文少しく怖氣だち先づ幸藏の顔を見るに眼鏡く骨逞しく何さま一癖あるべき人物、其傍らに坐したる乾見には刀疵の残りしもあり黔の見ゆるもありて我身は宛がら山賊に捕へられしが如き思ひにて心も心ならず、其内幸藏は魯文に向ひナント今宵から武士に化けて賭博場へ往つては呉れまいかナニ大小は手挾むばかりで人を斬るには及ばぬ唯だ何處までも武士の積りで威張つて居さへすれば濟む事じやと頼みぬ（當時博徒仲間の習慣として其親分株は必ず二人の浪人者を養ひ賭博場へ連れ行きて張番をさせるの例あり是れ一には親分の威權を示し又一には争論等起して人を害せし時には無禮を働きたり其浪人に言はせんが爲めなりとぞ）否と言はれ殺しもすべき權幕に魯文は是非なく承諾して髪を大髻に結直し怪しげなる木綿の紋付を着し腰に大小をたばさみて其夜より二三度も賭博

場に臨みしが或夜上州の悪徒ども幸藏の賭博場に踏込みて喧嘩を仕掛け益筵をめぐり金錢を掴み出す等亂暴至らざるなく雙方血を流して鬨ひければ僞武士の魯文は膽をつぶし大小を谷へ投棄して儘宙を飛んで新堀の良助方へ逃げ歸りモウくあんな怖い處には片時も居られぬ畢竟お前が口車に載せて此片田舎へ連れ出したればこそ斯る憂目も見る道理なれば世話序（ついで）に何處ぞ奉公口を捜して貰ひたしと頼みしに良助も氣の毒に思ひ上總の九十九里に大野と云ふ知己あれば是に頼んで見んとて翌日良助は魯文を伴ひ三日がかりにて大野を尋ね求めたれど其居處さだかならず僅かに木賃宿に雨露を凌ぎ四日目の明け方范然として新堀村に歸り來りしを良助の老母見て機嫌わるく母子の者が食ひ兼ねる中より他人の世話に數日を費し母を饑渴に迫らするとは親切も程こそあれとて涙まじりの愚痴をこぼすに良助も當惑し夫ならば今より復た江戸に出で何か商賣に有附かんとて急に我樂多物を賣拂ひて之を老母の小遣錢に残し又同家の床板は梶（カキ）の如輪木理（カキ）なれば江戸へ持ってきて賣拂はよき直に買ふ者もあらんとて其板を外して魯文に背負はせ二人とも再び新堀を發して江戸に向ひしに孱弱なる小男が生れて初めて斯る重きものを背負はせられし事とて魯文は歩行抄取らず中途五井の原といふ處へ來掛りし時は遙かに良助に後れて其影を見失ひ且背中（カキ）の梶板はだんく重くなりて骨も碎くるばかりなりしが終に板を脊負ひたる儘途上に倒れて氣絶せり、時過ぎて通り掛りし馬士の爲めに呼び活けられ其板を馬に附け辛うじて五井の河岸まで辿り着き良助に逢ひたれども同人も錢なければ魯文は今まで締め居たる小倉の帯を五百文に賣拂ひて

駄賃を濟ませ徒歩江戸に來りて以前馴染なる木挽町の木賃宿松川屋に泊りしが江戸にも思はしき儲け口なく手を拱きて二三日を送るうち當時將軍家慶下野國日光へ御社參ありて同所は非常の賑ひなりと聞き日光へ行きて何か仕事に有附かんと又もや良助同道にて同地に赴き鉢石の米屋といふ旅店へ一女なしにて投宿せり、主人出で、御商賣は何ぞと聞きければ魯文は狂歌師千種庵諸持の門人にて斜月窓諸兄魯文は實際のく名乗りし事あり見え當と云ふ者なりと答へしに主人は風流の志さしあるものにや去らば如何なる譯にて此日光へは來られしぞ其意味を狂歌に詠みて賜はるべしとて短冊一枚を出しければ魯文取敢へず

笹原のすれに針持つ欠落は日光までもはしり大黒

斜月窓諸兄

と書きて與へぬ、主人其言葉の飾りなきを悦び實に狂歌師はかく磊落にありたきものなりとて太く魯文の氣風に感ぜし容子なりしが夫より狂歌師が來りたりと近所を觸れ廻りしかば色紙短冊など携へ來りて揮毫を乞ふ者日々二三人あり魯文茲ぞと氣を勵まし出たらめの即吟を書き散して與ふるに謝禮なりとて多少の錢を置きて歸る者もありしかば先づ二人の宿料には事を缺かず去れど長居しては耻を搔くとあらんを恐れ良助に別れて日光を立出で鹿沼まで來りし時江戸八丁堀の香具師虎屋倉吉と同宿して懇意になり打連立ちて江戸に歸り魯文は下谷簗輪町なる馬屋某の家に寄留し倉吉の爲めに糊附本の戯作即ち「亞米利加口説ヤンレ節」「質屋雜談融通軍記」「佐倉總吾一代記」など云へる卑しき文を草して與へしに淺薄にして拙劣なるもの却て世の好みに投じ倉吉も

爲めに利を得ると少からず、魯文の名も亦漸く世に廣まるやうになりしかば一二ヶ月の後は人形町の書肆傍ら番附繪草紙等を出版す品川屋久助より合巻物の注文を受くるやうになりけり是れ魯文が廿三四の時即ち嘉永四五年の事なり

やまご新聞載る所の魯文翁小傳に曰く一年將軍家慶公日光御社參の時翁は花簪を出商ひの爲め日光に到りしに偶々病ひに罹りて心地死ねべかりしを僥倖にして健康に復せしかご囊中に一物なく殆ど困却の折柄同ト木賃宿に居たる八丁堀の倉吉といふ瓦版師あり(瓦版は我邦新聞紙の鼻祖とも云ふべく當時の出來事を瓦に彫り之を印行して賣り歩行くな業とせしものなり)翁の困難を見兼て救助せしかば翁も其報酬として瓦版の原稿に筆を取りしに素より文才に富みし事とて倉吉は翁の爲に意外の利益ありしを徳とし歸府の時翁は倉吉と共に八丁堀に來り倉吉の食客となりて益々瓦版の原稿に筆を取れり彼の世帯平記、雅樂多合戦など稱ふるは翁が當時の作なり、其頃鈴木主水のヤンレ節でふもの流行し大工殺しなど云ふヤンレ節にも筆を採られしが翁は若かりし時常磐津節を學て美音なり然れば讀賣壘も翁に勤むるに洒落に讀賣たらんとを以てせしに翁も血氣定まらざる頃なれば時として我面白にヤンレ節の讀賣に出られし事あり其頃の著作に編笠大道軒の名あり當時の讀賣てふ者は編笠を被りて立ちたればなり、去れど黄金いかに長く砂中に埋まり居るべき幾程もなく品川屋久助といふ書肆翁の文才あるを見抜て翁を瓦版社會より引揚げたり云々(此記事は前項と稍異なる所もあれど参考として茲に掲げ置きぬ)

虎屋倉吉、品川屋久助兩人は意外の利益を得たれば嘉永六年の夏兩人醺金して翁の爲めに湯島妻戀町なる一軒の小家を買取りて之に翁を住はせぬ、其家は間口九尺二間、奥行二間半、表の間三疊敷は疊あれど裏の方は根太板の儘にて之に處まばらに薄縁を敷きあり唯だ家不相應に立派なりしは表の格子戸と二階是も物置へあがる大階子の二ツにて格子戸は葎町の藝妓鈴木屋お秀の拂い物を

二分にて買ひ階子は或る料理屋にて用ひしものを引取りたるなり謂はゞ猫の額にも比すべき小家ながら魯文は既に一軒の主人となり且品川屋久助、糸屋庄兵衛、其他書肆の需に應じて絶えず切附本を作案するやうになりしかば今は一廉の江戸作者と成り濟ませし氣にて一枚の槻板を買來り淺草並木の正木龍眠の弟子龍昇は豫て懇意の中なれば同人に頼みて其板に

談笑諷諷滑稽道場

御詔案文認所

江戸作者

鈍

亭

魯

文

と認めさせて之を門口に掲げ又家を野狐庵と號し同年の冬は狐の皮にて作りたる袖無し羽織を着て机に對ひ専ら戯作に従事せり彼の「小栗一代記」「白井權八一代記」など云へる類の切附本は多く此年に作りしと云ふ

翌る安政元年妻戀下に住む旗下酒井新三郎の妾某の妹にて名をよよしといふを媒介する者あるに任せ娶りて妻となせり是れ亡長男太耶の實母なり當時の作料は引札の文一枚作りて二朱貫へば上等の部なれど出來星なればと自ら卑下して魯文は一朱を以て其定額とし又切付本五十丁内挿畫十丁其下畫も皆作者より附けて遺る例なりの潤筆料は金二分と定めたり固より價ひ廉なれば俄かの夫婦暮しに世帯兎角足らぬ勝ちなれど其頃切附本大に流行し其作者は魯文に限るやう書林仲間吹聴せられしかば幸ひ馬喰町の森治其他の書肆より續々注文を受けて相應の收入あり去れど魯文は少しも之を貯へず錢あれば花街に至りて之を散じ錢なき時のみ机に對して商賣に取掛る有様なればいつも木綿布子に三尺帯を締め窮々として蝦蟇のうめくが如く貧々として馬の嘶くが如し

翌二年十二月二日の夜は寒さ殊に強し是夜一冊の讀切本を脱稿したれば魯文は之を通り二丁目の書肆糸屋庄兵衛方へ妻よしに持たせ遣りしが體て作料二分を受取り歸りしにぞ内一分を地代の滞りに拂ひ残り一分にて米を買ひ妻は井戸端にて米を洗ひ魯文はよごれ蒲團を纏ひ寐ながら本を讀み居たるに突然百雷の轟くが如き響きと共に地震大に起りスワといふ間もあらず彼の家不相應なる大階子は壁土もろとも魯文の寐たる上に落來りてヒシと魯文を敷付けたり妻は周章て駈來り力まかせに階子を持ち上げ魯文は漸く這出したるが幸ひ蒲團を着て居たりしと壁土に埋められしとの爲め身に怪我も無かりしかば夫婦とも戸外に逃出して一夜を明しぬ、斯る時にも素早きは際物師の常として翌早朝一人の書肆來り何ぞ地震の趣向にて一枚摺の原稿を書いて貰ひたしと頼みければ魯文は露店にて立ながら筆を取りて鯨の老松といへる趣向を附け折よく來合せたる書師狂齋後姓々曉齋改むに魯文下畫の儘を描かせて賣出せしに此錦繪大評判となりて賣れると數千枚、他の書肆よりも續いて種々の注文ありて魯文は五六日の間地震當込み錦繪の草稿を書くに四五十枚に及び皆賣口よくして鯨の爲めに思はぬ潤ひを得たりと云ふ、左に掲ぐるものも亦當時魯文翁の作りし戯文の一なり其繪は七代目團十郎柿の素袍大太刀にて足下に鯨坊主を踏まへ要石にて其首を押へ附けし形ちなり

雨には



困りに

東醫南醫骨接外料。日々發行地震出火の其間に。怪我を爲さざる者あらんや。數限りなき仲の町。先づ吉原がすぬ市川。

市中三疊自作

つぶれし家の荒事に。忽ち火事に大太刀は。強く當りし地震の筋隈。日本づみのわれ先き。轉びつ起きつかけ烏帽子。きやつ／＼と騒ぐ猿若町。芝居の焼けも去歳に二度。かされ鶴菱また灰を。柿の素袍はいづれも様なんさ早いトや御座りませぬか。實に今度の火難は嘘トや御座らぬ本所深川。話しはつき地芝山の手。丸の内から小川町。見渡す焼場の赤ッ面。太刀下ならぬ梁下に。再び敷かれぬ其爲めに罷りつん出た某は。鹿島太神宮の身内にて。磐石太郎いしすゑ。けふ手初めに鮎をば。要石にて押へし上げ。五重の塔の九輪はおろか。一厘たりとも動かさぬ。誰だと思ふア、つがも。内證の立退き藝者のかん酒。焼けた潰れた其中で。色の世界の繁昌は。動かぬ御代のおん恵み。ありが太鼓に鉦の音。たえぬ二日の大施餓鬼。ホホつらなつて坊主。

又此年「安政見聞誌」三冊を出版す二世一筆庵英壽と魯文二人の合著なりしが公儀の許可を得ずして出版せし科にて版元と英壽とは手錠となりしも魯文は署名せざりし爲めに其罪を免がれたり、刑滿ちて後英壽來り見聞誌はお前が九分まで筆を取り私はホンの手助けを爲せし迄なるに名を署せしばかりで此災難に遭ひたりとて愚痴をこぼし夫にかこつけて屢々無心に來りたれど固より常には一朱の貯へもなき魯文なれば是にはほど／＼困じ果てたりとぞ

魯文は其家に貯へなきを結句竊盜の入るべき氣遣ひなしと言ひて表戸を引寄せし儘夫婦も外出すると屢々なり、或日の夕刻魯文ぶらりと我家へ歸りしに家の内に襦袢、足袋、懷鼻禪の類取散らしありて何となく怪し氣なれば先づ筆筒の抽斗を引出し見るにたつた一枚の着換へ烟となりて行方知れず若しや竊盜い道入りしと思ひて猶ほよく見るに筆筒の環に結付けたる紙に「錠前をあけて言はれぬ譯ゆゑにあひ鍵の手のなほ免せかし、萬般享積丸」記しあるを見出し偕は積丸め遊びの金に詰り己の着換へを持出したなト言ひし儘其後氣にも留めずして打過ごせしと、此積丸は姓篠田後ち二代目笠亭仙果と改め明治初年「月ミスツボンチ」と題せし滑稽雑誌を著せし人なり、又當時別けて魯文と懇意にせしは琴亭文彦（川原氏後

ち岡丈記と號し又風來山人の號を繼ぎて三世紙鷲堂と名乗れり）全亭おろか（疊職富藏）と前記積丸の三人なりしが其内二人は既に故人となり全亭おろかの子のみ今神田に住せり

安政四年の春魯文は「操松月号清」といふ三冊物の草雙紙を著し口繪さし繪とも一惠齋芳幾筆にて吳服町の書肆榎屋茂吉方より出版す、魯文はまで著はせし戯作多かりしも皆切附本と稱する印刷紙質とも粗悪なる冊子のみなりしに此書は彫刻精巧、製本も亦美を盡したれば世評随つて宜しきのみならず魯文も亦初めて繪舞臺に上りたる心地なりと言ひて喜びしとなん、又翌五年九月長男熊太郎産る此時二世岳亭定岡下谷廣小路の里 長岡部助左衛門といふ者出産の祝ひにて火消壺へ金百疋今の二を入れて贈りしに物に頓着せぬ魯文も是には少しく眉を擡め此倅も長生はせまじと歎息せしが後年火消壺の歎はのがれしも長男は果して早世なりき

長男熊太郎は成長の後ち父と共に讀、いはば、今日の各新聞社に入り編輯長に署名せしが後ち故ありて小笠原島に赴き明治十九年病に罹り父に先だちて同島に歿せり魯文翁此時「さかさまを見るも浮世か水の月」の句あり又其追悼の句を編みて「月の輪」と題する冊子を配れり、

魯文妻戀に在る間は半ば遊興に日を送りしが如くなるも廣く雑書をあさりて社會の沿革、人情の變遷等を研究せしは亦此時の事なり去れば何處へ行くにも必ず一二冊の書籍を懷中し妓樓に登りて廻し部屋などに入れらるゝ時には小暗き行燈の下にて其書を繙き興に乗じては聲を上げて朗讀する事もありしかば此時より既に奇人の名廊内に高かりしと云ふ、斯くて萬延元年の三月先師花

笠文京病歿す此時文京は太く零落し弟子筋なる瓢々亭千成名古屋の人が深川佃の辻番所を守り居りしを便り同所に寄宿中病ひを發せし事なれば死去の後も差當り之を葬るべき道なかりしが魯文は斯くと聞きて佃の千成方に至り茲へ來合せたる京鶴、仲丸共に文京の弟子と相談し先づ早桶を買來りて死屍を納め京鶴仲丸に之を擔はせ魯文は柔弱非力の身なれば早桶に附添ひて寺町の菩提所なる某寺に赴きて埋葬方を頼みしに年來益暮の附屈けもなく墓地も無縁に屬したれば埋葬は承引き難し何れへなりとも葬られよと寺僧一向に取合はねば三人は困じ果て此上は茶毘場にて火葬となし其遺骨のみを墓地の隅へなりとも埋め貰はんと魯文は鬼泉堂ゆかんばに打捨てありし白張の提燈に火を點して先に立ち仲丸、京鶴は後より早桶をさし擔ひ又もや寺を出で、南葛飾郡逆井の邊りかる茶毘所をさして赴く途中京鶴は小溝に足を沈らして水中に轉び落ち早桶を投出すに周圍をからげし細ちぎれ蠟燭の火も消えんとせしかば孰れも忙慌あはてふためき漸くにして繩を故の如く結び締め三人とも雨あがりの泥まみれとなりて茶毘所に至りて火葬を託して歸りしは翌日の丑の刻今の午頃なりしが夫より二日を経て京鶴ひとり茶毘所に至り遺骨を拾ひ歸りて之を魯文の菩提所なる谷中の永久寺に葬りたり

萬延元年の夏魯文翁は友人數名と共に富士に登山し又箱根七湯を巡り道中あらゆる滑稽を盡せしが江戸に歸りし後ち文久年間同行者の滑稽失策等を材料とし「滑稽富士詣」十卷を著はして大に喝采を博し魯文の名益々世に高くなりぬ卷中の人物は皆種々の變名を用ひたれども皆是れ同

行者の實地に演じ來りし諸謔滑稽を其儘に寫し出せしものなれば巧まざる處に自然の妙ありとて一時は殆ど一九の膝栗毛と併べ稱せられしと云ふ

文久年間初代柳亭種彦作の「正本製」といへる合巻物大に世に行はる、其三編ことしまたゆきのしらべうし「當歳積雪白標紙」一名顔見の挿畫に歌川國貞後ら豊國が赤本入道假名書といふ餘坊主を當時の名題下俳優阪東三津右衛門の似顔にて描きし事あり、一日魯文翁笠亭仙果二代目柳亭種彦と稱せし人を淺草堀田原の宅に訪ひし時仙果は此「正本製」を取出して魯文翁に示し赤本入道の顔が魯文に生寫なりとて手を拍ちて笑ひぬ、當時魯文翁は故ありて剃髮し其頭髮の一二分ばかり延びかゝりし處など我ながら能くも其繪に似たりと思ひし程なりしかば折能く同家へ來合せし梅素玄魚と相談し今より假名垣と改名せんと云ひしに二人とも夫れ然るべしと立どころに同意し仙果は祝ひの歌まゐらせんとて「をさな子の摘むこと草をゆひ込めて筆のたくみも見ゆるかな垣」と咏じければ玄魚も亦取敢ず「皇國文字かながきと書く筆架よてかひのやまと心を磨かざらめや」と詠み棄てしとなん是れ魯文が鈍亭の號を改めて假名垣と名乗りし所以なり

初代種彦の「正本製」初編は文化十二年出版、爾來年々一二冊づゝ引續き發兌し其の三編は文政の初年梓に上せしものなり、去れば魯文翁が之を見たるを文久の初めとすれば同書發兌の時より四十餘年後の事なり、但し此年まで魯文翁は「正本製」を見ざるには非ず唯だ仙果に赤本入道の繪を示され初めて我顔に似たるを心附きしなるべし

其頃また惡摺といふもの大に作者仲間流行す。此惡摺といふは友人の不品行又は失策話し等を

粗畫に顯はし之を瓦版に付して印行し普く其人の知己又は得意先に配り以て其非行を諷刺するの意に出でしものなるが後には此惡戯は誹毀一方に傾き一家の秘事も摘發して痛く人身攻撃を加ふるやうになりぬ魯文は此惡摺に筆を採ると屢々にして當時一枚の惡摺出れば又魯文の惡戯ならんと言はれし程なり、又此惡摺の流行は明治初年までも打續き慶應年間には「鳴々者評判記」の出版を見るに至れり其内惡摺の立役として魯文は足立座、染谷座、白縫座、皆惡摺の版元三座かけ持に其名を著はし魯文の作りし瘤陀羅經梅葉芝魚の意氣事を阿房陀羅經の文句に作り換へしもの 萬八番乘組與畫角力勝負の名前盡し 地獄變相交來が拵へし罪を 等は皆大上々吉の部に加へられ後には此惡摺だん／＼と大袈裟になり終に邪魔妬魂など云へる彩色入奉書上彫刻、上印刷の惡摺を配るやうになり

やまこ新聞所載魯文翁の小傳に曰ふ文久年間の頃惡摺といふ不風流の遊びが専ら風流社會に行はれ魯文翁は此惡摺に筆を採ると好み成時與畫合せの開巻序を洗滌に見立てたる事あり正面栢榴口の華表は赤毛氈を以てまつらへ畫のある處は眞翁の筆になる風呂先屏風にして衣類を入れるべき戸棚文庫を設け此中に小袖、羽織、帶、襦袢等思ひ／＼の景品を入れ置く趣向にて羽目に寄席の貼牌數種あり此中へ翁は獄屋政談叩きばなし井双庵大笑といふピラを作りて貼りたり此大笑といふ人は相馬家土屋家なんどの爲換御用達を勤むる松塚某といふ豪家の主人なりしが放蕩をし盡して若隱居の身となりフト博奕場に遊び居りて手當さなり五十敲きの處刑を受たる事あり出獄の後剃髮して僧となり傍ら雜俳の點など爲し居りし人なれば魯文翁の叩きばなしの趣向はよく飲りて大受けなり然るに大笑は以ての外憤はり斯る惡戯は洒落の外にして遺憾ある者の所爲に出たる也ドウデ一度臭ひ飯を食ひし體なれば此上は魯文を殺して自首せんと臺所の出刃庖刀を懐中して其家を去り只魯文の歸途を窺ふ者の如し人ありて之を翁に告げたるに翁も初めは眞事とせず魯文の體には骨があるなご威張り居りしも出

刃庖刀が見えぬ臺所の訴へに其事實たるを知り素より臆病の翁はふるひ上り歸途は船にせんや寧ろ爰に泊らんか大笑者し一泊せしを知りて謀殺に來らば如何はせんぞ職き居りしに其後ち大笑の跡を追ひて仲裁を爲す者あり翁も平あやまりに説び叩きばなしのピラを割がす云ふ趣意に事濟となり

此惡摺若し明治の今日に行はるれば忽ち秘密出版に問はれ又は誹毀罪に陥りて永續すべきものに非ざるも當時さる法律の設けなきのみならず作者畫工は皆匿名なりしを以て仲間内に非ざれば容易に作者の誰たるを知るを得ず爲に其取締りも自ら緩漫なりしなるべし去れど偶々作者の誰たると露顯する時は誹謗されたる當人は作者に嚴談して版木を取毀たせ又は證文を取りて、罪を謝せしむる事などもありしなり左に掲ぐる証文の如きは其一例なり

御説申上候一札の事

一 銀座稻荷云々

一 清濁くらべ

右我版内輪にこしらへ各先生御立腹の段恐入候全く老老心違得ひ申譯も無之候右版木さし上げ御ゆうめん被下雖有奉存候依て爲後日説書如件

丑九月十九日

二代目 柳亭種彦

- 一 惠齋芳幾先生
- 山閑人交來先生
- 山々亭有人先生
- かな垣魯文先生

魯文翁の外に好んで惡摺を作りし者は山々亭有人條野二代目柳亭種彦初號笠梅素玄魚、武田交來、一惠齋芳幾、葛飾醉櫻軒高野出揚扇夫等の諸氏にて殊に盛衰競、南子の馬鹿など云へる惡摺は大に文人社會を騒がせしのみならず是に就て奇談頗る多けれど傳記の餘事に渉るを以て茲には略せり、又文久二年の春魯文は妻戀町より日本橋龜井町へ移轉せしが同年七月妻よし麻疹に罹りて死亡せり

龜井町へ移轉せし當時の事さ、妻戀の地主が地代の延滞を催促に來りし時妻は熊童子長男熊太郎を背負ひし儘挨拶に出でたるに魯文は二階より手を振りて留守だ云へし手眞似にて教へしを見て童子は何の氣も附かず阿父さん妻戀の叔父さんが出だそんな手なごを振らすに下りてお出で云ひければ妻はハツミ顔赤らめ挨拶に口籠りしが地主は氣を利かせイヤお留守か又來ませうと立歸りぬ、此日は流石の魯文翁も腋の下より冷汗を流せしが大に地主の慈愛に感入八方算段を爲して翌日地代の延滞を皆濟せし云ふ

又此年の春翁は淺草門跡添地の梅を觀んきて友人芳幾、支魚、扇夫等に誘引はれて我家を出でしが他の三人は皆新しき白足袋を穿ち魯文のみ汚れて風色となりし物を履き居たれば魯文は途中大道にて體鼻種切れ端などにて足袋を仕立て賣り居る者あるを見附け三人を待たせ置ながら往來にて我が汚れ足袋を脱ぎて足袋屋に下に取りませ其内新らしさうなるを買取りてはき換へ是でよしと連立ちて梅林に入りしが其足袋は永く大道の砂はこりに塗れ居りし事とて猶ほ他の三人の足袋と較ぶれば黄ばみて見にくかりければ魯文翁これを氣にして「白足袋のよこれ目立つや梅の花」と吟みし由

其頃また三題斷の催し流行せり、是は文化の昔し元祖三笑亭可樂が一分線香三題ばなしと名け下谷廣徳寺前なる孔雀長屋に演じて當時大評判を取りしを思ひ出だし柳島の金座役人高野某俳名花兄醉櫻軒

も號せりが之を再興せんものと假名垣魯文、山々亭有人、河竹新七後ち黙阿綾岡輝松、梅素玄魚、落合芳幾、武田交來、福井扇夫、瀬川如臯の諸氏、黒人の三遊亭圓朝、柳亭左樂、春風亭柳枝等と謀り其仲間を粹興連と名づけ文久二年の秋日本橋萬町の柏木亭に高座を設け知己朋友及び其家族等を聽衆となし各々三つの兼題を結びて一席の落語を綴り高座にて講演せしが人氣これに集ひて忽ち市中の評判となり翌年は大傳馬町の豪商勝田某俳名春の屋別屋幾久に興笑連なるものを組立て兩國の柳屋樓上を以て定席とせしにぞ夫より後は粹興、興笑の兩連は昔斷の昔といふ字に因みて毎月二十一日交るゝ同會を僅せしに終には江戸一種の流行物となり其流行に連れて三題扇子、詩繪三題櫛、三題張煙管、銘酒三題ばなし、三題菓子、三題染浴衣、三題模様半襟などを賣出す者多く又後には粹興奇人傳馬喰町二丁目丸徳出版三題斷評判記同春色三題斷春の屋著作など云へる書籍の出版を見るに至れり、魯文は毎會出席して三題斷を演ぜしが翁は音聲低き上に抑揚なく且話しの色はいつも錯雜して明瞭ならず中には随分無理附會こつひの趣向もありて上評を得るに至らず初め魯文が話しをするに聞きあひの人の頓才ならば定めて趣向も面白く且滑稽をも交へて人を笑はせるならんと樂みし者もありしに其話しは意外に眞面目なりしかば筆と口とはあひのやうにも違ふものかと失望せし聽衆もありしとぞ是に引替へ毎會大喝采を博せしは河竹新七後ち古河黙阿彌にて氏の斷は脚色に無理もなく且音聲爽かにして黒人も及ばぬ妙處ありしと云ふ後年高座にて演ぜし三題斷を其儘狂言に仕組みて舞臺に掛け大評判を取りし事あり彼の和國橋の藤次、斗々屋の茶碗のごときはなり

魯文作「劇場繁昌記」中の一節に左の記事あり曰く、文久三年正月七日粹興連長高野氏は早春の發會を興突連より先にせん  
と嘶初の相談かたん、有人、芳幾、魯文を誘ひ當時茅場町の居宅より常に出入する茶道の宗匠村田匠伯をも伴ひて五人體の  
渡場より豫て仕立てし家根舟に同船しつゝ、東兩國の割烹店青柳樓の棧橋に舟を繋ぎ同樓にうち登りて其頃柳橋の流行藝妓二  
名を聘し半日の酒宴に談話を交へ宗伯は其夜七種の茶の湯ありて一歩先に席を辭し殘る四人は夜に入りてイザ歸らん、樓  
を下り棧橋に繋ぎたる彼の家根舟に乗移れば藝妓樓は陸より左橋ならば御機嫌よう、紋切形の賽セリフをキツカケに漕出  
す船は軸を向けて兩國の橋間に近よる折もあれ橋と舟との隙しき間へ上よりドンアリ水煙そりや身投よ、船頭の聲に船中四  
人は吃驚し高野氏は此時はやく船頭身投なら助ける、呼はりめ船頭は斯くも見るより突出す棹に軸を返せば橋に近づく  
舟の舷に一汲一浮アク、浮出したる死骸の襟先手をさし延べて芳幾が其半身を引揚ぐるに魯文も是を手傳ひて彼の腕首  
を引提へ、醜氣ながら提燈の火影にひさしく死相を見やるに年頃五十前後の男、鬚栗頭髪の身に着けたる衣服は單衣か、袷かは夜  
目にいづれと分られぬ上に纏ひし黒色のひさへ羽織は空蟬のもゆけの殻の水浸し襟首より刺繡の少しく見えしを察するに當  
時幕府の茶道家杯かやくさ際居のあまされ者か瘡毒などに病はうけ身不隨の處より一家親族には見放され便る方なく入水  
せし者か、さも想像せられぬ此時船頭のいへるやう此死骸既に橋杭にて鼻柱を強く打ち氣脈全く絶えなければ引揚ぐるも其甲  
斐なし若し引揚げて蘇生せば情が仇の關係にて多少の難儀は旦那方御一同のみならず我々も亦免かれ難し疾々放して水葬  
禮と促し立てられ高野氏も同船の芳幾、魯文も遺憾ながら船頭のいふに任せて南無阿彌陀佛の聲も共し手を放せば闇はあ  
やなし川下へ流れ果は如何なりしや、船頭は此時船を早めて間部河岸より行徳河岸を横ざりて、渡場の舟を留め此棧橋  
より高野、有人、芳幾、魯文は打連れて茅場町へ歸りたり、同年同月十一日に有人、芳幾の兩子が當春例の三題ばなしの  
發會兼題配りさして淺草寺内麻釋迦堂、今の馬道二丁の奥地たる河竹其水子、阿彌翁に到るなり彼の身投一件を物語りしが其  
水子の得たる兼題は「斗々屋の茶碗」「山笑ひ」「居合抜き」の三題なるより直ちに連中の噂高き兩國の身投話を種子とし  
その時魯文芳幾が引揚げし坊主の背中に刺繡ありしと茶道家ならんとの鑑定を其儘斗々屋の茶碗に趣向を持た込み同月廿一日

の發會兼題は三題に纏めて話されしが此趣向新なり奇なり且は實傳に近しとて連外の評判年を追ふて高く爲めに河竹に乞ひ  
て彼の嘶を狂言に仕組まば如何と勤むる者多きより遂に維新の後ち明治三年猿若町三丁目守田屋狂言二番目に此番作の三題  
嘶を新案に取仕組み名題は即ち「時鳥水響音」役人替名は花垣七三郎に澤村調升、後ち助高船頭、久太に中村仲藏、下  
男友藏に市川左團次、七三郎妹お露に尾上多賀之丞、手代與兵衛實はまむしの次郎吉に尾上菊五郎等なりし、演劇中の役名  
に花垣七三郎とあるは粹興連長高野氏の雅號を花見と云ひ別號を櫻垣と呼びしに因み七三郎は七五三丸の狂號ありしに依て  
なり又其時中村鷹八後ち魁の役名茶の宗匠東伯とありしは村田宗伯が宴席一座せしを船中の人數に加へたる働きなりと云  
々

文久三年の春出版せし「粹興奇人傳」には此三題嘶に出席せし人々の小傳、肖像、自詠の歌等を  
載せ又自作の三題嘶をも附記せり其内魯文翁の小傳と同翁の作りし三題嘶とを左に掲ぐ

魯文は下め鈍亭と號して花笠又京秘藏の門人たり其かみ富家に仕へて丁稚たりし時或人相して此子僧長く商家に在るべきも  
のならず文に遊ばせ世に名を揚げんと言はれしが果して幾程もなく主家を退身し路過が昔なられども處定めぬ旅路にさまよ  
ひ其外種々の艱難して終に妻戀に居を設けてより次第に賣名す元と是れ幼少より商家に仕へ半途にして大に窮し物學ふいと  
まあらずと雖もそも十八九歳の頃より作道に志ざし深くまた兼吉と呼びし頃より著述の書あり好こそ物は上手の理り今戯作  
者中の才子なり

○水滸傳 大女涼み舟

假名垣魯文作

宋孔さいへる通客、常問の都林中、講談師燕青なごを伴ひ暑さを水の滸に避けんと柳橋より舟を泛べあちこち漕過るに頃  
しも五月二十八日川開きの夜の事にして揚げる煙火の星降りば百八の數に滿ち各々佳興に入る折しも橋間に繋ぐ家形の軸先  
に身の丈ばつくんに勝れし女立出で、涼み居たるにこなたの人々これを見て「コッ、見さつしアノ家形舟に立てぬる女



はがうぎに背が高いつヤアれへか、ありやア何處の化物だ。<sup>林</sup>「モン巨那あれを御存下しなしかへ今度横濱から來た肉饅頭の小さなさいふ囊者さ。<sup>宋</sup>「ハハアあれが名代の大女だノ背の高さはいくら有らう七尺はたつぶりだせ。<sup>林</sup>「なに七尺できくものか八九尺はあるだらう。<sup>宋</sup>「イヤハハ八九尺トヤアきくめへぜ。<sup>青</sup>「まさかさうでもござへすめへ。<sup>宋</sup>「さうでれへ小三だから。」<sup>丈</sup>せいだらう。

當時魯文翁は戲號の下に善惡の印を捺す事あり或人其の出處を尋ねしに翁は答へて是れ善玉と惡玉とを合して余の性質を表せしものなり余の性元來感情に強く例へば人の薄命にして落魄するを見る時は己れの貧苦を嘗め來りしに思ひ較べて力の及ぶ限りは之を救助する事あり然れども若し其人にして他日余に不快の感を與ふるの舉動ありとせんか立どころに前日の厚意を棄て、飽までも其人を攻撃し陰に陽に復讐の念を暗さんとするの氣風あり之を要するに余は愛憎共に動もすれば極端に走り易く忽ち善となり忽ち惡となると掌を反すが如し是れ此印章を用ふる所以なりと物語りし事あり晩年に及びては翁の性質大に變じて只管無事を樂しむの風ありしも猶ほ時としては情實に制せられて昔しの氣質を顯はす事もありき、又此印章は明治十二三年頃門人伊東橋塘に譲與せり

やまご新聞所載魯文翁の小傳に曰く、文久年間魯文翁は千住の貧賤敷大黒屋の遊女おのぶに馴染みて雨の夜風の日の嫌ひなく通ひ詰め遂におのぶは同棲を忍び出で翁の寓居に逃げ込みたり此時與畫合といふ事流行し河竹新七氏は芝居の演劇の趣向にて連中の穴を穿ち役名として其巻を讀みたる時翁の役名は左の如し

白石街道大千寺の住職鈍亭和尚實は大黒屋おのぶの情夫假名垣谷五郎

然るにおのぶ逃亡の事が面倒になり先方より嚴しく取戻しの談判に來りしも翁は身を償ふ金はなしおのぶは元の主人へ歸さるゝならば死ぬと云ふ騒ぎに翁は困却の餘り或人に計りたるに其頃下谷廣小路に石井大之進と云ふ居合拔あり水戸出生の者にて身幹拔群の男なりしが一日いかめしく大小を横たへて千住の大黒屋に赴き拙者は水府の浪人なるが當家へ出稼ぎの遊女おのぶは拙者が姉の娘にて則ち姪なり拙者は國を去りて五六年を経過したれば姉の動靜も知らざりしに此頃のおは突然拙者の寓居へ参り遊女となりたる不幸を話し案より病身にて憂き動もなり難ければ苦海を抜き矣よとの頼みなれど赤貧洗ふが如き拙者に争て彼が身受を爲し得らるべき然れども茲が相談なり永き年賦にて償ふべければおのぶの證文を卷いて拙者に呉れる譯には参らずやまご脇を張りて掛合ひけり當時水戸の浪人といへば人々恐怖の念を抱く折柄なりしかば大黒屋の主人も諺にいふ犬糞の警を恐れ、たかが遊女一人なり死んだと思へば夫れまでなれば寧ろ證文を卷て遣つた方が宜からんと思案を定めたる折しも大黒屋の娘が何心なく其處へ來り大之進の顔を見やりて不審の跡なりしが漸く思ひ當りしもの、如く父を小陸に招きたり此小娘は十二歳の頃より下谷廣小路の手習師匠惠泉堂の内弟子となり居りて此頃實家へ歸りし者なれば廣小路に居る頃大之進が居合の業を度々見て其面跡は能く知れども立派なる武士出立ちに氣を吞まれて疾には思ひ出さざりしが漸く夫れと思ひ出して斯く父に告げたるなり是に於て主人は再び大之進の前に出て來り手前の娘は久しく廣小路の惠泉堂へ内弟子に遣はし置きしが御自分様を度々お見受け申したりと告げければ大之進は案より惡人でも何でもなく義侠心より事の並に及びたる理由なれば良心に太く耻ぢ掛合もそこへして逃るが如く立歸りしは飛んだお茶番なりき此時翁は神田久右衛門町に居りて彼の博阿彌<sup>佐々木</sup>老人は其大家たりしかば店子は子なり子の爲めに盡す何の不可あらんま白石街道大千寺建立して八方に義捐を募り其頃二十餘兩といふ金を纏め再び大黒屋へ掛合ひて奇麗に妓籍を抜き目出たく結婚の式を擧げたり此夜弊社の探察<sup>前山</sup>亭<sup>入</sup>は夜鷹蕎麥一荷を擔仕舞にして進物にせしに來客は一同大受けなりしが花嫁は少しく不満の顔色なりしと

魯文翁が龜井町より久右衛門町へ轉居せしは文久二年の冬か翌年の春の事なりしと覺ゆ當時佐々木博阿彌老人の借家に住ひて其の店子たりし者は山々亭有人、假名垣魯文、講談師寶井翠凌今の翠凌の父なりの三人なりしかば前記白石街道云々の奇談は探菊翁實見の話なるべし、又魯文翁が久右衛門町へ移轉せし當時一奇話あり、初め翁が其借家を見に來りし時家主博阿彌に向ひ疊、襖の古きは我慢すべきも障子だけは是非とも新しく張替へて貰ひたしと約束して歸りたり家主は之を聞き戯作者とはおしなべて道樂者にてかゝる事には頓着すまじと思ひ居りしに魯文の奇麗好きは不思議なりとて言はるゝ儘に表の障子を皆な新しく張替へ置きしに魯文轉居の後ち偶々外出せんとする時は其留守中に尋ね來べき人々への用事は悉く此障子へ書附けて他出するを例とせり譬へば種彦に用談ある時は種彦來たならば之を見よと前書して「今夜行く筈であつたが行かれぬ」と認め置くなり留守中種彦來りて之を讀み同人も筆を染めて又其障子へ「夫では困る明朝は屹度來れ」などと書置きて歸り後には借金の日延べをも此障子へ認め置くやうになりしかば二三ヶ月を経ざる間に障子紙は草紙の如く眞ッ黒になりたり家主博阿彌之を見て偕は一杯魯文に歎られたか是では半切を買ふて遣つた方が餘程ましであつたと嘆きしとぞ

當時三題漸に次いで流行せしは興畫合せといふ遊戯なり、此遊びは先づ會日を定め其前に兼題を配り置きて當日其趣向を持寄り衆議判にて之が優劣を定め高點の部へは夫々賞品を配るといふ方法なりき其興畫の認め方は兼題の品物を畫中にあらはさず故事又は古歌等の意を取り他の景物を

描き出して夫となく兼題を利かする趣向にて例へば寄月水といふ兼題の出たる時は薄うすの原と富士の遠見のみを畫きて武藏野と見せ月と逃水にげみづとを隠して夫となく兼題を利かせ又養在深閨人未識といふ詩の句を兼題に取りし時は室咲の梅を描きて餘意を示すがごとき趣向なり、魯文も亦此遊び仲間に加はり時々興畫を出品せしが是は三題漸の不手際なりしに引換へ毎度高點を取りて喝采を博せし事あり或時江戸市中の橋名を分ちて兼題とし花水橋といふ題を取りし時翁は鶯と蛙とを短冊に畫きて持出しぬ是は彼の古今集の序に花に啼く鶯水にすむ蛙云々といふに因み夫となく花と水とを利かせたる趣向にて一座大受けなりしが此催しも亦年を追ふて盛大となり慶應年間には或人の追善の爲め「隈なき影」といふ興畫合連中の影畫と自咏の句とを記せし美麗なる彩色摺の大冊子を配るやうになりぬ、茲に掲げしは即ち魯文翁の影法師にて同書中に又左の如き小傳を載せたり（畫畧す）

筆頭の疾きと風來を欺き狂文に走れると三馬の才も遅かるべし著述の神史愛説を得ざるは無くぶツつけ書の引札滑稽至らぬ限も無ければ虚名を一時に高うせり唯癖として一日花街にいたられば寢食をよくせれど強ち京傳の昔を忍ぶものにあらず思ふに此子西村主が志を繼いで花街漫録の後編を輯めんとの腹稿あれば夫等の故ならんかし

魯文翁は久右衛門町より轉居すると二回、慶應年間には淺草寺地内寐釋迦堂俗にいろは長屋と云ふに住せり當時福地源一郎氏も亦同所に寓し福地鬼外と號して翁と共に戯作に筆を取り且屢々相携へて吉原に遊び留連數日に涉りし事もありき、後ち翁は再び淺草諏訪町へ移轉せり

慶應三年「細撰記」と題して江戸市中の商業者飲食店等を吉原細見記の体裁に綴りて出版せし爲め翁は版元と共に獄屋へ下

されし事あり其頃かゝる出版物は書物問屋中に行事といふ者ありて出版の書籍へは都て行事より検印を附するの慣例なりしに彼の細撰は無改めにて出版せしに付行事より告發せられ遂に其罪に座したるものなり素より輕罪なれば問もなく出獄せしに當時銀座役人に辻傳右衛門といふ人あり淺草橋場の別荘に於て與畫合せの開卷を催し是日の來會者は旅人の裝ひすべき旨の通知ありて皆思ひくゝの服裝を爲したる中に翁は出獄間も無ければとて胡蝶の蠅に扮立ちたる事あり然るに四五日経て後ち大傳馬町に俳名を春廬屋某勝田といふ豪商ありて翁を川崎在平間村の厄神へ代參に赴かしめたる事あり是れは厄神の社宇修繕の事ありて春廬屋氏は其寄附の大旦那たりしかば修繕落成を告げしとて同社より招待を得たれば翁を代參に立たしめたるなり其日厄神の宮は江戸より參詣の者も多く畫工の國周山々亭有人なども俱に誘はれて同社へ參詣し其夜は祠内へ參籠する者多かりき、然るに參籠の信者中に「は」組の消防夫にて外道の吉といふ者あり性正直にしてつまり愚直といふ方なるが時しも秋の央にして夜長の頃なれば雜談の種も稍や盡きたる折ふし翁は紙入より一個の骨子を取り出して外道吉に向ひ頭領ビシ釋がしても仕ませうかと戯れに言ひたるが愚直なる吉は其骨子を手に取り見るに俗にいかさまと稱ふる不正の具なれば吉は其骨子を翁の膝へ投返し物をも言はず其座を立ち別當に向ひてあれは何處の者ぞと問ひたるに彼こそ傳馬町様の代參にて假名垣といふ有名の先生なりと答へけり、吉は翌日江戸へ歸りて直ちに春廬屋を問ひ旦那は假名垣といふ奴さ如何いふ御關係かと問ひたるに春廬屋の曰くどうも云ふ事もないが罪のない面白い男だ先達て辻の別荘で胡蝶の蠅になつたが正眞の胡蝶の蠅の様だつたよ「さうでせう胡蝶の蠅ぐらゐは仕兼ねへ奴だ「夫れに無頓着な男だから細撰を書いて少しばかり牢へ這入つた事もある「賽錢を盗んで牢へ往きやしたか何でもそんな刑状のある奴でせう俺に向つていかさま骨子などを出しやアがつてご頼りに立腹の体なりしも春廬屋は大家の旦那にしていかさま骨子の何たるを知らざれば此應答は雙話にして雙方一向に通ぜずかゝる處へ有人子尋ね來りて此談話を聞き抱腹して雙方を辨明せしかば春廬屋も外道吉も果は大笑ひさなりしとぞ

翁の寐釋迦堂に寓せし頃は前にも言へる如く新吉原に遊ぶこと概ね虚日なく殆ど妓棲を以て我家

と爲せし有様なりしも去りて翁は色に耽るに非ず酒に溺るゝにも非ず數日間留連する時の如きは晝は必ず机に倚りて戯文を草し又花街の事情にして他日戯作の材料ともなるべき事柄は悉く之を手帳に筆記し置たりと云ふ福地源一の如きも亦妓棲に在りて幕府の爲めに福地源一は蓋し此時より胚胎せしなるべし

慶應三年三月二十四日翁は先師花笠魯介退福の爲め淺草御厩河岸昇月樓に於て書畫の大集會を催せしに來會者一千餘名にして頗る盛會なりしと(是年後妻のぶ淺草諏訪町に病歿す)又明治二年九月翁は山々亭有人子と謀り淺草寺境内人丸堂の傍らに埋もれありし故山東京傳の古机の碑を再興せんとて兩國柳橋萬八樓上に書畫の筵を開きしに此會は收入意外に少くして建碑の資を得るに至らざりしかば二年を経たる後ち其碑を掘起して周圍に柵を設け僅かに素志を果すを得たりと、翌三年翁は『娼妓評判記』の著あり然れども此書は僅かに二百部を限りて印刷し其餘は故ありて絶版となりたれば世に傳はる者太だ罕なり、同書初編に翁が福棹魯吉と變名し當時大に行はれたる福澤諭吉氏の「世界國盡」に倣ひて作りたる「苦界文盡」は其文頗る面白ければ左に掲ぐ

苦界ふみ盡し

魂膽

契應妓熟 福棹魯吉著

苦界は憂し間夫客は多しさいへご大凡そ、五ツに分けし町目は。揚屋角京新町と。西と東の江戸町に。境がきりて阿茶屋洲。大金盛は別にまた。皆呼出しの名稱なり。歌妓の風俗新造も。禿かざれば氣が變る。その華麗を知らざれば。意氣な

人たる甲斐もなし。迷ひて得べき麻なれば。紋目に遊ぶ壯夫へ。茶屋の案内の裏馴染。先づお手こりて穴端を記すころ

阿茶屋洲

二六時中の通ひ路は。客の先にも客ありて。登樓れば歸る廓の道。田町の果の際限なき。大音寺前土堤の下。お茶屋衆のせはしなき。唯一縷を始めとして妓樓の方へ送り出す。其筋々を尋ねるに。華奢は阿茶屋の一大客。人品もよく諸事溢く。服装も吟下着たは羅紗。茶屋しゆの沙汰はおいらん買ひ。人をおだて、滅法徳。常住無心の長巻書より。茶羅の日増しの定使ひ。文賃わづかに三百文。女郎さんの文なれば。商家も暇を費やして。抜けて通ふも間々にあり。無闇にあがる呑公は居残り料の割がれ品。暇にお茶挽くその中に。傍輩繁昌土地賑ひ。さうく一夜の身揚りなり。そも吉原の物語り。むかし庄司の時代より。年を経る。こゝ二百歳。仁義五常を疎んじて。人情うすき風なれど。其名も高尾の君さまが。文面書いた廓公。通客次第に衰へて夜具をこさへず妓を身受けず。我より外に情人なし。せけん知らずの高胡床。遊君はれの意にまかせ。女郎を泣かせし悪林の。權幕のがる所なく。纏纏は勘當十二月。梵天國と身を落し。唯一縷も貯へず。諸事願へど負債は。正金一千二百兩。五町の茶屋を借盡し。猶も借りたる無理の我意。曲げてまた借りまた曲げて。今の姿さなりゆきし。其有様ぞあはれなる(以下略す)

同六年の冬翁は横濱元辨天に移轉す(當時野崎文藏の名を廢し假名垣魯文を以て通稱とす)時の神奈川縣令大江卓氏は民情を視察するには能く下情に通じたる者をして縣下を巡回せしむるに如かずとし翁を擧げて神奈川縣の雇とす是に於てか昨日まで一ト口に戯作者と呼ばれし魯文翁も羽織袴に威嚴を粧ひ先づ教育の普及を計らん爲め縣下各部を巡回し時には村民を集めて遊説する事もありしが戸長等は翁の名刺を見るに及びて皆眉を顰めざるは無かりしと蓋し其名の奇異なるが

爲めなり、一日巡回の途次或る驛の旅店に投宿し翁は湯殿にて汗を流し居たる時同じ浴槽中に在りし客は他の同伴者に向ひ「ナント今日巡回して来たお役人は珍らしい名ではないか」「アレが戯作者で有名な魯文といふ男よアレで教育の説諭も可笑しい大事な息子を皆放蕩者に仕上げらうト言畢つてフト魯文と顔見合せ忽ち顔を赤らめ周章ふためきて逃去りしかば魯文も流石に極り悪しく且其言のものを評し得て盡せるに感じ官吏となりて碌々日を送るは決して風流の志ざしにあらざとて幾ばくもなくして職を辭し又元の戯作者に立戻りて専ら『西洋膝栗毛』及び『安愚樂鍋』等の著述に従事せり就中『西洋膝栗毛』は前記の『富士詣』のごとく魯文翁の實驗談には非ずと雖も専ら福澤諭吉氏の『西洋事情』を骨子とし且當時歐米より歸朝したる富田砂筵子に就て外國の實況を問合せ其の地理人情等は岡丈紀子<sup>三世紙蓋</sup>の翻譯に係るものを參酌し之に自己の意匠を加へ例の才筆を揮ひし事なれば滑稽百出看る者其意想の天外より來れるもの多きを歎び今に至るまで之を愛讀する者絶えず魯文翁の名是が爲め益々世間に廣まり終に明治の一九三馬を以て翁を稱するに至れり或は云ふ翁が神奈川縣廳の吏員となりしは『西洋膝栗毛』著述の後の事なり

明治六七年の頃魯文翁は横濱に興りたる『横濱毎日新聞』社に聘せられて雜報記者となり或は云ふ此時まで神奈川縣廳に勤務し午後より新聞社に出動せり又居を同港櫻木町に轉せり、明治八年十一月翁は毎日新聞社を去り新たに『假名讀新聞』なるものを起し當時東京にて發行せし『讀賣新聞』<sup>主筆鈴木田止雄</sup>『平假名繪入新聞』<sup>主筆高島盛泉</sup>と鼎立して其賣れ高を競へり『讀賣』は眞面目にして親切『繪入』は華麗にして愛嬌あり而して

『假名讀』は洒落にして輕妙、各々其特色を異にせしを以て讀者も亦其好む處に就て之を愛讀し三社とも漸次盛大となりぬ、翌年魯文翁は横濱野毛山に屈蟻蟻と稱する一茶亭を開き後妻あためと共に同所に轉居し茶を煮て客に侑め又自由に新聞紙を縱覽せしめ居りしが翌々十年假名讀の本社を東京々橋彌左衛門町に移すに及びて翁も亦家族と共に同社の奥座敷に寓居せり

或夜翁は新橋の一酒樓にて宴會のありし際席上初めて金春の老妓若松屋鈴八と言葉を交へ翌日直ちに鈴八の家を訪ひし時翁は春ぬきにある體櫃形の下駄箱を見附け強て之を鈴八より請ひ受け繩にてからげ背負ひて我家へ歸りしが五六日過ぎて魯文翁は鈴八に文通して見すべきものあり一寸我家へ來りたまへと言ひ送りしに鈴八は直ちに翁の家へ赴き何心なく床の間の脇を見れば眞に我方より持歸りし下駄箱は立派に塗替へられて佛壇となり居りしにぞ下駄箱變つて佛壇となりしを見しは今が初めてなりとて鈴八も手を拍ちて笑ひしとぞ

左文曰く是も當時の事なり余一日魯文翁に誘はれて淺草近傍を遊歩せし時翁は二王門内腹實の陸にて榮螺の壺焼を賣り居る老爺ありしを見付け此句ひが鼻に這入つては我慢が出来ぬ足下も附合ひ給へとて其前に蹲まりて頻りに壺焼を味ひしが翁は黒の紋付を着し余は洋服をまきひたればまさか立食を爲すべき人柄にはあらず殊に是日は日曜の事とて綺羅を飾りし令嬢貴婦人などの來往織るが如く中には二人を指さし一笑して過るもあり其頃余は年猶ほ若く此附合には殆ど面目を失ひし事あり、翁の物に頓着せざる概れ此の如し

幾ばくもなくして『假名讀新聞』は本社を出雲町の大通りに移し紙上へ「猫々奇聞」の一欄を設け翁は持前の才筆を揮ひて専ら藝妓のアラを穿ちしより學者書生も其文の輕妙にして自在なるを賞し先を争ふて之を愛讀し終に翁の別號を猫々道人と呼ぶに至れり或は云ふ猫々道人の號は成又は島柳北翁の命名する所なり又同社の

出雲町へ移轉せし日には料理屋或は商家などの店開きの如く入口に蒸籠、炭俵、酒樽等の積物を爲し之に數千枚のヒラを張出して大に景氣を添へたり今日より考ふれば新聞社にして積物を爲すが如きはあるまじき話しなれども當時は一人の之を批難する者なきのみならず却て其趣向の奇なるを賞せし程なり左に『假名讀』の投書家中阪まどき子の筆になれる「假名讀新聞轉社の景況」と云へる一文を掲げ以て其一斑を知らしむ

詩曰。善戲謔兮不爲虐。太史公書有滑稽列傳。皆取于益於世者也。とは柳子厚が毛穎傳を讀むの文ならずや假名讀の魯文翁に於ける魯文翁の猫に於ける亦然り其文を見れば滑稽戲謔其說を見れば奇々猫々茶々羅萬八、鬼も爲めに腹の皮を捻り神も亦お賤でお煮花而して其寓意に至ては蓋取于益於世もの太史公も必ず水盤大の判を捺して保證せんと必せり、されば天地間の動物中横目豎鼻の人間社會亞細亞東部の日本人種たる者誰か假名讀を讀んで一たびは其滑稽戲謔に頭を掛かれ外し一たびは其寓意に感して反正せざる者あらんや是に於てお得意は刻一刻より殖え日一日より増す、初め横濱に二葉を生し直ちに東京へ移し植ふしより未だ一週年に滿たざるに忽ち枝を垂れ葉を重れ終に堂々(オット)柳北先生既に言はれたり)于茲明治十一年二月一日を以て天の時地地の望に乗し出雲町四番地の大棟瓦室へ整々然として轉社せり其景況の如き豈鈍筆の盡し得る所ならんや即ち左にひツかく所は九猫の一毛にも足らざるなり「本舞臺三間の間(オット)表間口五間」總て元祿中に正氣を發したる忠臣藏の景況を摸し得て山道だんだら筋の提燈數百張、鬼灯提燈も亦凡そ一萬許り團十郎、菊五郎、勘彌、河竹謹子の睡れるいろは炭四十七俵は竹田出雲町假名で本社御中記したる趣向最も奇絶といふべきか眼晴を丸くして再び一轉眼すれば猫節數百樽累々として雲を凌ぎ宛も人扇東京有名の節問屋の開店か、怪しまる、許り積重れたるは知らずニヤン人の贈物ぞ、且見れば金春の猫十三名緋縮緬一反をわがれてのし形を爲したるは他日魯翁が老を養ふの下衣を爲すの說あり豪も亦豪ならずや、又見る聲弄(蒸籠)百荷重々として半天に響ゆるを是れ亦其名も著るき日本橋の大工町に錦花猫ありと知られた

る金毛九尾の叶屋歌吉なり此他横濱猫連が猫の見立の扇面合せ數十繰て本社の前頭に陳列したる眼眩し晴惑ふ、道路の説に京橋松田の開店以來此の如き宏大なる見世開きを見ず、然して同業社中の贈物は日報の猫節一連鈴付の猫の首輪にさしたる趣向を始めとして奇を競はし妙を競ひ智を以て智を争ひ豪を以て豪に對す其效枚舉に遑あらず朝野、日就、報知、近事、風雅、續文社、七寶社其他何々山の如く岳の如く陵の如し(以下略す)

同年魯文翁「假名譜新聞」編輯の傍ら別に「魯文珍報」と題する雑誌を編みて毎月一回發行す又同年七月の中村樓に於て珍猫百覽會なるものを催せり是は翁が猫(藝妓の假稱)を筆誅すると屢々なれば其罪滅しの爲め猫塚なるものを淺草奥山に建設せんとの企てあり既に碑文成嶋柳北翁撰さへ出來せしかば其費用を募らん爲め自家秘藏の猫に縁ある古器物書畫を陳列し知己友人にも亦夫々出品を請ひ來會者をして之を縦覽せしめ會費の剩餘を以て建碑の費に充てんとするの企てなりしなり去れば其目的は通常の書畫會に異ならざれども趣向の意表に出でたると魯文翁の交際廣きとの爲め來會者二千餘人の多きに及びさしもの中村樓も立錫の地なかりし程の盛況なりき左に久保田彦作氏の「珍猫百覽會の記」を掲ぐ

本日(七月廿一日)會場中村樓の門口には紙招牌かみせんばへ珍猫百覽會云々筆太に記載して縦覽の目標とし右の方芝山に在來の樹木をたどり彼の猫塚の石猫を据付けたるは後日淺草公園花屋敷植六の庭中に建つるを本日の開筵を併せたるの用途にして正面の芝關軒先の額面は新小判を以て造りたる珍猫百覽會の五大字額楹は緋鹿子の首玉に眞鍮の鈴を裝飾す、打邊への旗は白地へ赤色にて會主が猫面の遊印を染出し數十の紅燈を掲げ樓上には會主縦覽の賓客を迎へ廣間の上座は清樂合奏者の一席を占す此前面卓を置き大花瓶に秋草を挿み香爐の香は馥郁として席中に薰す、百覽會陳列場の一區は南の方廊下を隔てたる座

敷敷室にして入口より數間の間左右に排列す猫塚の碑銘は假に表裝して同廣間の床に掲げ會場縦覽の前後は此碑銘を第一部分とし順序に東の方の壁を隔てたる一席を第二部分とし爰には本日開筵の爲めに當日有名の諸文人より寄贈せられたる書畫の幅を掲ぐ是より第三部分の入口に沿ひ右の方を書畫幅とし左の方を器物の陳列場とし第四第五に分ち而して出口の歸路に就かしむ、列品殆ど六百餘種出口の上に花簪の圓額を掲げ之を縦覽の婦女女子に呈して餘興とす、午前八時三十分場中の陳列全く整ひ同九時より開場し午後八時閉場と定む一本會の周旋補助は新聞各社を初め萩原乙彦、大蘇芳年、立齋廣重、武田谷齋今の紅葉山人の父松林伯圓、三遊亭圓朝、竹藏屋猫七の諸氏にして清樂の合奏者は鶴原堂島屋氏の周旋にて音律整々たる合奏に衆客の心耳を澄まさせしむ詩文人の揮毫するや衆客舉つて唐紙扇面に其筆跡を乞ふ又清樂の洋々たる間彼の開化講談松林伯圓席の中央に進み恭しく祝詞を朗讀す之について演說家の隊長堀龍太先生進んで猫々論を演說せり喝采の聲は拍手と共に滿場に響き渡れり會主の舊知己たる梅素玄魚、河竹其水、瀬川如阜の三翁は共に會主の後見となりて此會の隆盛を補はれ六二連には砂筵、高筵、染谷、笠仙の諸氏勝川春亭、五姓田芳松、寫眞家は二見朝隈、北庭筑波、橋芳野、瀨町の和田氏等二十八名且新聞投書家には爲永春江、菅菜貞爾、野崎左文、八木梅桂、結城光昭、風也坊、花酒舍由縁、松崎徳造、花川戸岩床、藤小僧、鐵の屋一農、賞楠堂鶴甫、伊藤文二郎、西村賢八郎、中阪まさき、道墮賤生、芙蓉堂の諸先生にして孰れも祝文の玉章を贈られたり新富座の俳優連には尾上菊五郎、市川小團次其外門弟二三名を引連れ當日打出し後より縦覽に來りたり此日最も遺憾なりしは午後九時頃大傳馬船に數人の樂人孰れも烏帽子素袍にて軸先に「猫塚供養」と記したる紅燈を掲げ棧橋に漕寄するまき三絃鼓の調を正して供養塚といふ新曲を奏す此催し主は新富座狂言作者竹柴進三氏にして彼の樂人は同座の嘶子方の連中なりしが時已に閉場後にして會員の外開く者無かりしは惜むべし

又猫塚の碑銘(成嶋柳北撰、伊東桂洲書)は左の如し

猫塚碑銘

生々於兩間之動物何限焉。其靈而神者麟鳳龜龍。聖人猶崇之。其美而妍者錦鷄白兔。金魚。人皆畜而愛之。今古一也。余友假名垣魯文翁。獨以愛貓稱。世人之相語。事者及貓則曰。告諸魯翁。有書畫器玩形于貓者則曰。贈諸魯翁。翁遂自號曰貓道人。然翁實非愛貓者。其所刊新聞紙。日錄貓之說話者何也。蓋貓獸之至柔媚者也。而世之清聲便體。鼓脂皮而侍客者。其柔媚或有甚焉者。翁不拂他人之譽。以磨煤鼠尾糊口。其情之不亦宜乎。今茲戊寅七月。翁語余曰。吾每叱貓鞭貓。而貓未嘗反噬。佛氏曰。狗子有佛性。貓亦或然乎。吾欲爲築一塚于淺草公園。以吊而祭焉。敢問祭貓禮乎。余對曰。禮也。郊特牲云。古之君子使之必報之迎貓爲其食田鼠也迎而祭之也。唐禮儀志亦云。祭五方之山林川澤。又祭五方之猫於菟及龍麟朱鳥白虎玄武。各用少牢一。然則猫之可祭也與四靈何擇。翁欣然。乃請余銘于其碑。銘曰。

宣尼泣麟 心豈在麟 猫兮猫兮 祭諸如神 魯翁有心 付度無人

柳北成島弘撰

明治十一年戊寅七月

同年十一月魯文翁は故ありて假名讀新聞社を去り新たに兩國廣小路に『いろは新聞』を創立し翁は之が主筆たり社員には白石千別、渡邊文京、雜賀柳香の諸氏あり又此年新富町七丁目新富座の横町へ佛骨庵なる草庵を新築し業務の餘暇佛像佛器其他の骨董類を購ひて之を愛玩し自ら玩佛居士と稱するに至れり

魯文翁の新聞社にありて原稿を草するや筆を下すと頗る速かにして少しも思考を費さざるが如し傍らに人ありて翁と對話するも翁は之を厭ふ氣色もなく其應答を爲しながら猶ほ眼は原稿紙の上に注ぎ筆を走らすと少しも異なる事なし其出社中微醉を帯び又は睡覺に襲はるゝ時は起稿なげに右手に筆を握りながら翁は昏々として眠り時としては高肝をかくとあり傍人印刷の遅延するを恐れて翁をゆり起せば忽ち目を覺まし已に書終りたる前の文句をも復讀せずして直ちに其後を書續け之を植字方に付す印刷成りて後其文を見るに首尾聯串。毫も居眠りの跡を留めず人之を稱して翁の一伎倆といふ此年より以後翁は其文を草するに當りて専ら漢語を用ふるとを好み机を並べて座する者に向ひて屢々熟語を問ひ又は圓機活

明治十四年七月魯文翁は本所なる五百羅漢寺の爲めに遊戯菩提の法會を營みぬ是は翁が加ゝる靈刹の類廢に歸せん事を悲しみ世の善男善女に告げて淨財の喜捨を乞ひ以て同寺の保存を計らんとせしものにして當日施主魯文は五分刈の散髮に白帷子を着し黒絹の腰衣を纏ひて來賓に接し本堂なる會場には種々の古器物を陳列して客の縦覽に供へ又茶飯館掛豆腐を饗應し餘興として遊食會の催しあり遊食會といふものは此時より始まり是日炎暑燬くがごとくなりしも來會者數百名にして頗る盛會なりしと云ふ十四年の冬翁はいろは新聞社を退き翌十五年二月えん場の俠客子安米本之助と共に大阪を経て京都奈良に遊びしが大阪笠屋町なる俳優市川右團次方に逗留中過ちて同家より出火し丸焼となりたれば翁は着のみ着のまゝにて同家を遁がれ去り四五日在阪の後ち伊勢名古屋等を経て翌月下旬歸京せりと又翁が京都奈良漫遊中は例の古物癖にて骨董店の前をよぎる毎に古器物をあさりて購ひ求め或日の如きは大きな阿彌陀の古佛像を香中に負ひたる儘繁華なる京都市街を徘徊せしかば道ゆく人は皆ふり返りて翁を指ざし笑はぬは無かりしとぞ

十七年六七月の頃小西義敬氏『今日新聞』なるものを京橋區彌左衛門町に與すに當り翁は入りて

其主筆となり専らつゝき物の筆を取り社員には野崎左文、清水米、藤緑雨、正直、子も亦入社して其編輯を助けぬ（此新聞は後ち改題して今の『都新聞』となりしなり）同十九年翁は同社を去りて東京『繪入新聞』後ち東西新聞と改題すに入社せしが此時翁は年已に五十八、殊に當年ひとり息子の熊太郎を失ひし爲め落膽する一方ならず日に新聞社の劇務に従ふは自ら堪ふる所に非ずとて潔よく同社を退きし後は新富町の寓居に閉籠りて静かに老を養ひぬ、斯くて同廿三年三月翁は斷然文壇を退きたいの親父となりて氣樂に浮世を送らんとて兩國中村樓に於て名納會なるものを催し年來貯へし古書畫書籍又は名家の書翰短冊等を抽籤を以て來會者に頒ちぬ又此會に就て友人太槻如電子は廣條のちらしへ翁に代りて左の如く記されり

名納會口上

假名垣魯文の賤名は過る嘉永二年に「名聞顔赤本」と題せる小冊子を出版のなり用ひたりしを其の始めとすかくてより四十餘年戯作者となり新聞記者となり紙田筆耕の名を以て糊口の業を營みしが本卦還りも去年と過ぎ多雅さが也奇さか好き文字えらば面白からんも其實は驚馬に及ばぬ老動物せんさまおかばり俗に謂ゆる新陳代謝こいらが此名のをさめ時こしは文明の花咲くてふ國會ひらくと聞くおいはれもまけく魂ひには黒界に爲隱の身ならまほしきも如何にせん死んですら地獄の沙汰況んやまだ息のあるをや因て年ごろ好事に集め置し古器古書畫神佛混淆玉石瓦礫十把一からげ一山八文其點數を一千號に分ち抽籤法を以て賤名をわけて耳し給へる諸君におなり申さん心なりこれぞこれ生き遺物こそ申すべけれされば年俸八百圓の影をだに生き香冥のお手向あらんことを百拜稽首してれぎまなす假名垣の翁にかはりて筆さる者は

記阿彌如電

是より先翁は渡邊義方子をして先師花笠文京の號を嗣しめしかば此名納會と共に翁は渡邊氏と共に故文京翁の紀念碑繁額市川國十郎書、碑銘大槻如電子撰を向島木母寺境内に建設し是にて師弟の義務をも果したりと飄然去つて京都大阪に遊び（大阪にては共樂會の催しあり）七月上旬歸京せし後は僅かに筆を執りて一二雜誌に投書し又は請はるゝまゝに情歌を選みなどして老後の樂みと爲し居りしが廿五年頃より腦充血症稍や重きを加へ翌廿六年古河黙阿彌子の死去せし時の如きは舊友の訃音に接しては捨て置き難しとて病ひを推して會葬せし爲め途中に於て卒倒し漸く友人の助けを得て我家へ連れ歸られし程なりと云ふ、此年より病ひ漸く重りて臥床にあるの日多かりしも猶ほ全く筆とること廢せず氣分よき日には「筆録」「蚯蚓遺跡」など云へる日記やうのものを記して樂しみ居りしに是すら後には手先ふるへて文字さだかならず殊に本年八九月の頃よりはどつと床に就きて枕も上らず藥石も亦其効を奏せずして終に十月八日午前九時六十六歳を一期として果敢なく黃泉の客となりぬ

翁の遺骸は同月十日其菩提所なる谷中三崎町の永久寺に葬りしが會葬者は凡そ五百餘名の多きに及び近來稀に見る盛況なりき又翁が死亡せし當日其法號は何とせんなど親戚一同額を集めて相談中孫の文三はツト立ちて一枚の唐紙へ何やらん書きたる物を持出し是が祖父さんが地獄へ遊びに行く時の名だと言つて私に話した事あがると一同の前に差出しければ手に取上げて之を見るに曾て朝鮮の愛國家金玉均氏が翁の爲めに書きたる佛骨庵獨魯草文の七字なり去らば之に居士の二



字を加へて其戒名とすべしとて相談どみに一決せしが葬式の當日一同柩を送りて永久寺の墓地に到りし時圖らずも一個の石碑を見出し其碑面を見るに表に「佛骨庵獨魯草文」の七字、裏に「遺言一切空、財産無一物」の十字を勒し碑中に觀音の小像を刻み込みたるものなりき素より未亡人すら此事ありしを知らざりし程なれば施主は近傍の石工に就て其誂へ主を問合せしに是ぞ一二年前魯文翁自ら來りて注文せしものなりと答へしかば偕は翁も其頃より長く生くべからざるを覺悟し家族にも知らせずして豫め此墓碑を作り置きしものならんとて一同其手廻しよきに驚きしと云ふ、嗚呼翁は是れ一世の奇才子、元と商家より出で、四十年來文筆に従事し戯作者として又新聞記者として名を兒童走卒にまで知られ一時は學者文人と併べ稱せらるゝに至れり而して其遠逝するや時の名士大家にして翁の柩を送る者亦數百人、生前の幸福死後の榮譽焉より大なるは無し、翁も亦必ず地下に瞑するなるべし

遺稿

魯文翁の遺稿として世に傳ふべきもの無し唯翁が病蓐にありし時何くれとなく書あつめたる「蚯蚓遺跡」又は「耄錄」と題せる日記やうの備忘録あるなれど其記事は多く一家の秘密に涉れるものなれば茲に掲ぐるを得ず、又「耄錄」中廿七年九月即ち翁の物故せし一ヶ月前の筆記に偶感と題して左の一節あり是れ翁の絶筆にして其心情の眞に憫むべきものあるに似たり、嗚呼人の將に死なんとするや其言ふと善しと、翁の數言亦以て世間浮薄人種の頂門の一針となすに足るべし

親戚同胞朋友も頼むべからず一身の外味方なし夫さへ故人の證歌に「幾たびかおもひ定めてかはらん頼むまじきは心なりけり」甲者は昔し蕙みを掛けし縁あり乙者は兄弟にひまじき交りありて庇護を加へしよしみあり斯かる時には逸散に馳せ來るべしなご心頼みは多く畫餅に屬するなり人情日に薄く金がある處には人心あつまり錢なき家には來者おのづから疎し澆季中間の人情皆かくのごとし密かに此事を記して世態の真相を示す

○狂歌

安政年間妻戀下にありし頃狐の姿を貰ひ之を袖なし羽織に仕立て、机に向ひしとき詠める

白たへを肌にしつれの皮衣雪やこんくつまごひの里  
題まらす

大海をまらぬ蛙も井のうちに居ながら詠める名所の歌

安政の末吉原塙屋町の出あひ茶屋阿波万治まいへるに宿りて  
茶屋女と枕を並べしに其女夜ふけておのれの財布衣類までも

盗みて逃去りければ裸體の儘枕元の行燈へかきつけいる  
思ひきや枕搜しに出合茶屋かゝる憂目にあは萬次まは

横濱風蝶蟻晩景

誰彼と咎めん人も夏草のまげみを分けて風ぞこひぬる

蘆舟の達磨の軸を壁に懸けて  
一物のおあしもなくてわたり舟本來空やくほす貧樂  
けふはさて思ひ暮けりあすも亦今日きは思ひ入相の鐘

谷中園子阪葵園にて  
蟹澤さし入る水の路わけて空飛ぶ星もかげ見ゆるばり

天地大戯場 乾坤悉皆劇  
去年こまし廻り舞臺の早替り入替り升土間のこみあひ

大晦日の夜に  
掛取の鬼のこゝろや和らげん今日が三十一文字の夜半

六十一になりし年の初めに  
見返れば危き雲の通ひ路や夢のうき橋わたり來し身は

偶感  
點られしやいさの跡に思ひ出しいよ／＼あつき父母の恩

六十四の年をむかへて  
門松の曲りなりにも年越えて七九の竹もけふひさ夜切

明治二十四改まりて年の初めおのれはインフルエンザに  
も罹らす夜毎に鍛冶橋外なるもいんぢい屋に猪鹿の肉を味

ひて  
流行の風さへひかて新しき世をふり出しの藥食ひしつ

五十三になりける年初めて東海道を下りて  
五十路あまり三の宿りの下り阪杖つき乃の字老の初旅

辭世  
快よく寐たら其儘おき巨燧いけし炭團の灰さなるまで

○俳句  
簑笠の人にかゝるや雪の梅  
梅ヶ香や屏を覗いた鼻の曇

根岸の里にて  
世にすれた住家や花に後向  
草臥て紙投出すや花のかけ

谷越ゆる蛙の舟や手斧くづ  
丑年元旦  
割箸の角やひらけて牛雜煮

明治廿四年元旦  
若水に轂のぼしけり車井戸  
馬に灸すみて夫から桃の花

猫の齧かきたる扇に  
長閑さや唐戸に響く鈴の音  
蝴蝶團夫婦に枕二つ贈りて

花びらに羽も重ぬるや蝶二ツ  
運堤觀櫻  
壯士去つて又見直すや夕櫻

衆議院選舉  
えらまるゝ程の響れや年男  
十五歳の時盥を被りて眼上に  
紙を負ひし事を思ひ出して

川狩や盥をかぶるあく太郎  
父家類焼して芝浦に移轉す  
浪風や苦屋在みよき月明り  
土佐日記を讀みて

貫之も浪に出て見よ松魚釣  
十五歳の時初めて戯文を作る  
砂原に蚯蚓のたぐる暑さ哉

泥龜の釣針ひくや蓮のはな  
 出来星の大面目立つ涼み哉  
 松風に浪もはこぶや夏座敷  
 葎切ややつさ出て来た渡守  
 本箱虫干  
 訪るゝ蠶魚の住家や八重葎  
 洋服を見るも暑氣や江戸祭  
 江戸三百年祭の日に  
 新聞を賣るも祭の時勢かな  
 京都三條に泊りて  
 加茂川に風はなすや夏泊り  
 香以居士の肖像を其角堂示  
 匠より贈られしを見て  
 出し殻も匂ふや江戸の花籠  
 京阪漫遊  
 老猫のうかれ歩行きや更衣  
 伊勢内宮  
 洗ふ手に小魚の寄るや若葉時  
 奈 夏

長き日や鼻つき合す佛たち  
 京都大佛  
 耳塚のうへに來て啼け郭公  
 東 山  
 長閑さや みのばす東山  
 北 野  
 爰かさよ浪花のうめの在所  
 東大寺  
 羽織立つ穴や仁王の尻こぶた  
 箱根湯本  
 水の音に覺て湯壺を思ひ見  
 琵琶湖  
 唐崎の松より濡れて春の雨  
 鹽原温泉道  
 雲に酔ふ山路は遠し五月晴  
 左 靴  
 昔きけ此掛はしのうつぼ草  
 鹽 釜  
 藻の花の外に汐あり荷ひ桶

畑下戸  
 猪湯や蛇さへ衣を脱ものを  
 鹽の湯

山ひめも巖のしほに梅積ん  
 瀧の湯  
 文覽も青葉がくれや瀧の音

○著 書

魯文翁の著はせし書籍頗る多く就中一代記物と稱する糊付本は百餘部の多きに達せしも皆其の表題を詳かにせず茲には翁の著書中最も能く世にもて囃されしものゝみを掲ぐ

『安政見聞誌』	三冊	『操松月景清』	三冊	『金鈴善惡譚』	三冊
『薄緑娘白浪』	五冊	『朧月猫眼鬘』	未詳數	『春色巽八景』	未詳數
『東紫哇文庫』	六冊	『玉菊物語語』	未詳數	『かなよみ八大傳』	廿八編以下
『黃標製戯作根元』	未詳數	『漢土手本唐人藏』	三冊	『壺中天地貧錢論』	一冊
『猿馬鹿三番相』	二冊	『浮世見物左衛門』	三冊	『太平氣樂舌卷物』	三冊
『狼狽舞足豆蔲』	三冊	『弓張月春廼夕榮』	十七編より廿五編まで	『雲龍九郎偷盜繪』	七編より十五編まで
『駄晒落早指南』	一冊	『滑稽富士詣』	十冊	『西洋膝栗毛』	十五冊
『安愚樂鍋』	一冊	『胡瓜圖解』	一冊	『細選記』	一冊
『浮世目鏡』	一冊	『世界都路』	三冊	『近世支那事情』	七冊
『子寶習字帖』	一冊	『西洋料理案内』	一冊	『佐賀電信錄』	四冊
『西南鎮靜錄』	四冊	『高橋夜叉譚』	八冊	『娼妓評判記』	九冊

『藝者之心得』 一冊 『百猫書譜』 一冊 『遊戯菩提記』 一冊  
『魯文珍報』 卅五卷

以上は其重なる者を擧ぐるのみ又翁は引札ちらしのみ文を草するに巧みにして料理屋の開業、商家の賣出し等多く翁の筆を煩はし一時は魯文の名にあらざれば引札の價值なきが如き有様なりき編者好んで翁の引札文を集め今家に藏するもの既に一千餘枚の多きに及べりされば翁が戯作者となりしより以來本年まで草せし所の引札は殆ど一萬に達せしならん亦盛んなりと謂ふべし(完)

### 假名垣魯文の三長

戯作者の殿として、文學史上に特筆せらるべき故假名垣魯文氏が、専ら頓才的著作に名を得たりしは野崎氏が詳傳中にもほの見えたり、其の頓才の價值は果たして幾何なるか、其の著作の文學としての位置は果たして如何、これらは遠からず本誌に掲ぐべき、齋藤綠雨氏の評、又は抱月子が月旦に詳なるべければ、今敢てこれをいはず、只世間の假名垣びいきが曾て口にする所を聞くに、彼の人が特長三つありとぞ、曰はくどい、曰はくあはだら經、曰はく厄はらひ、いづれも頓作を以て聞こえ、當意即妙、當時よくならぶものなかりきといふ。今此の三長の證例たるべき恰好の作を得ずと雖も、幸ひに嘗て某君より借り得たる「大地震厄拂」の文一篇あり、恐らくこ

は彼の人が作の尤も平庸なるものならん、以て其の一長を表するに足らざらんが、全くなからんにはまさるべしとて、故人が加ふる稿を募る緒に左に掲げつ。世聞若し彼の人が此の三長の好標本たるべき奇文を藏するの人あらば、願はくは本誌に投じたまへ。

#### 大地震厄はらひ

ヤアラ激しやなく、今度稀成大地震東海道で拂ひましと箱根の宿を初めとし兩本陣大つぶれ三島に火事さ成るもあり下田の方を詠れば帆をおろしやのひまもなくひきかぶせたる大津波大船小船は山のみれ松の木末にひきかゝり皆なんぞうを駿河路やたま／＼命のたすかりしも沼津くわすで原がへりもう吉原と思ひの外又もや五日の大地震淵は瀬なる岩淵やかん原んくま逃げだし興津こるびつ大さわざかわ由井にくいの譯もなく江尻まり餅搗くもあり府中か夢中でかけ廻り皆人々はこ丸子やうついで越ゆるうつの山こゝろは萬の細道やたのみさするは誰おかべゆかり求むる藤枝や島田のあれさんばあさんも金谷ちりん／＼なり行きて靈もなくかよ夜鳴石日坂さまのたをれ家をみてはかけ出す懸川やまり亂したる金銀も袋井入る、隙もなく高みを見附てかけ上る濱松風の音にさへ目も舞坂の荒磯や荒井津波にお關所もあさしら浪の白須賀やかゝるそうごぶ有中にさすか尾張の熱田さて少しもゆるがぬ宮ばしらかゝる目出度御ん國へいかなる悪魔が來たるさも此神々がひつさらへ異國方へさらり／＼。チャコライマシヨ

因にいふ、魯文の號は華笠文京が門に入りて得たる戲號なる由は、已に野崎氏の詳傳中にも見えて、誰れ人も知る所なれど、嘗て某君に聞く所によれば、華笠の華を花と書するは文壇の一佳話を没了したる沙汰にて、いとくちをしきこととぞ。蓋し華笠文京の號は、彼れが蜀山の門に入りし時、其の師蜀山が「人は表裏なきを第一とすべし、其の心掛を失はざらんために、名に用ふる

文字もことごとく表裏なきをこそ」とて、此の四字を擇びてとらせし也とぞ、即ち四字共に眞直なるを見るべし。思ふに彼の通人の爛眼、早くも文京が爲人を看破して然りしにや、後幾ほどもなくて、文京は師が妾に通し、破門絶交の身となりきと、か、某君の話なり。

三百七十四

近世列傳小史 下巻終

明治三十年五月十一日印刷  
同 年五月十四日發行

列傳小史

實價金七拾五錢

版權所有



著者 坪内逍遙  
著者 水谷不倒

發行者 和田篤太郎

印刷者 佐久間衡治

發行所 春陽堂

印刷所 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地  
電話五拾壹番  
株式會社 秀英舎第一工場  
(電話本局十九番)

# 特別割引箋

## 稟告

一 江湖御花主様方の御取立により日に倍し盛大に相成奉  
深謝候向世運風潮に先だち文學社會に錚々たる大家方  
の手に成る新規新案の原稿相違ひ挿畫製本に注意し返  
次出版致候間愛顧諸君方務倍御愛覽の榮を給はらん事  
を希望仕候

一 此實價書日の外百般の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候  
間書名著者出版人等御記載御注文願上候尤も直段は無  
油断他店より一層廉價に御働さ候間自然高價にも差上  
候時は御申越次第直引可申候

一 送金方は内國通運便早送又は銀行或は江戸橋郵便本局  
宛等のかはせにて何れも前金に御願申上候

一 御注文書着三日以内に必ず出荷可仕候

一 此切取紙へ品物御書入御注文の御方へは該實價書日の  
内特別一割引にて御送り申上候

一 郵券代用は一割増にて願上候

一 宿所姓名は可成御明瞭に楷書文字にて列然御認願上候

一 御親友御同僚中小説雜書御愛讀の御方の  
宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書  
目御送り可申候

一 前件申述候通り下段及裏面に書入場所有  
之候間御注意願上候

東京日本橋  
通四丁目角

春陽堂

和田篤太郎

電話五十一番

名氏所住の君諸へらせ求購を類籍書

名氏所住主文注御

切取線



藝文書目録

要摘書文	箋文注						書目冊數
	金	金	金	金	金	金	
真書	小計ノ金						書目冊數
真書	俳諧名家選						書目冊數
							運賃 郵税

切取線

紅葉山人著述目録

伽羅枕

紅葉子数年の著作六十餘種に及ぶ。雖も、長篇本書の如きは未有らず、蓋し金剛石の徑一寸なるもの乎。

戀之病

夫婦喧嘩より一轉して戀病者を治する醫者出でぬ行文已に滑脱趣考甚だ奇警一讀笑ひ死せざるものなし。

冷熱

寒夜痴男を氷雪の中に苦めし美人は、夏日痴男の爲に炎熱の中に煩悶せしめらるゝの奇談にして活殺自在底筆鋒は讀者をして生死の岐に彷徨せしむ。

青葡萄

著者身上の厄難を一種獨創の記録に綴れるものなり人其妙を稱すれば恍として身其境を踐むが如し。

紅鹿子

此書夏夏關東五郎の二篇より成る横間枕本にして手枕の友としてよし。

俳諧名家選

今や俳諧復興して氣運天を衝くの特本書出づ實に斯道の指南車として先進後進の欠く可らざる良書なり。

なにがし

本書は豫備兵義血俠血の二篇を取めたり、若夫巻を翻せば想に鬼氣ありて毛髪に逼り、女に異彩を放ちて顔色を照らさん。

心之闇

本篇は紅葉山人が其平生草を打ち蛇を驚かすの棒を投じ、利刃一揮直に深潭に投じ去りて、須臾波上に凝紅を浮ぶ底観あり、附録逝水又頗る情致あり。

笛吹川

一偉男兒の性行と幼女の衷情を説くの間頑牢石の如き没情漢を點綴したり筆端輕々描きさき描き來りて圓轉たるもの題して笛吹川といふ。

隣之女

隣の女は實に隣の女を解剖したるなり口書の美人は篇中の文字と相映じて綺麗悽愴な首に寧齋氏の題詠三首を載せれば一層の彩を添えたり。